

BUDDHA MAITRYA - ABHITABHA  
HAS APPEARED



JAMSHED FOZDAR

# 弥勒・阿弥陀如来は出現した

ジャムシェド・K・フォズダー

初版 1976 年©Jam shed. K. Fozdar

第 2 版 1995 年©Jamshed. K. Fozdar

Library of Congress Catalog Card Number:75-6131

ISBN:81-85091-83-8

## 表紙について

表紙絵が象徴することについては、本書 388-90 頁において完全に説明しているが、

読者には、その趣旨を十分に理解していただくために、

最初から順を追って読み進めていただくよう、願います。

.....

弥勒・阿弥陀如来へ

しかし、誰のためにこの本は書かれたのでしょうか

そして人類へ

まことに、あなたがたに言う。

世尊は死を教えるためではなく、生を教えるために来たのである。

あなたがたは生と死の本質を見極めていない

その年には、あなたや私のような小人たちの誕生と死がたくさん見られる。

彼のような者が存在したことはまだ一度もなく、

未来の時代に彼のような者が存在することはない。

ある詩人によるサンスクリット語の詩

## 目次

	頁
序章	
第一部	1
章	
1. 人間状況	7
2. 絶対者	20
3. 仏陀——化身	49
4. 仏陀釈尊	51
5. カルマと輪廻転生の誤謬	74
6. 仏・法	118
7. 僧伽（サンガ）	159
第二部	
8. 弥勒・阿弥陀如来は出現した	163
9. いつ	172
10. どこで	229
11. 阿弥陀如来	233
12. 観自在菩薩	242
13. 弥勒・阿弥陀如来の住居	244
14. バブとバハオラ——奇跡の双子	259
15. アブドル・バハ：勢至菩薩	315
16. バハオラのメッセージ——真のダルマ	332

17.	バハイ——新しい真の仏教徒	391
18.	バハイの行政秩序——新たな僧伽（サンガ）	416
	終章	428
	参考文献	432
	語彙	432
	写真の出典	
	経典訳の出典	

注：かなりの分量になりながらも、各頁末の脚注方式にしているのは、二つの理由がある。まず、巻末注にすると、意味や用語の確認に、都度、巻末に向かうようになるため、読者の思考の流れが妨げられ続けることになる。その防止のためである。次に、同じ用語でも、背景が変われば、意味が異なる。それを示すために、経典から多くを引用しているが、脚注であれば、事例ごとの具体的な意味がより把握しやすくなる。読者には、本書を読む前に、巻末の用語集に目を通していただくことを提案する。そうしていただければ、本文で用語に遭遇した時、どんなに漠然としていようとその意味が思い起され、脚注を読むことで、たいていの場合、はっきりした印象で頭に入ることになる。また、各頁に引用を十分に載せたのも、思考の流れに乗り続けていただくためである。

## 序文

二部で構成される本書は、回帰性を有する比類なき現象、仏陀・化身（アヴァターラ）の際立った特徴を取り扱うものである。しかし、本質的には、雲間から急に陽光を差し放つように出現した二つの霊的な太陽とも言うべき、二人の仏陀<sup>1</sup>についての物語である。一方の太陽の出現は昔日のことであったが、もう一つの太陽はその光線を地平線上にのぞかせたばかりにすぎない。にもかかわらず、霊的な夜闇を霧散し、昏睡している人類を覚醒させ、啓発している。

本書は、霊的な目覚めが再び起こるために、今日、是非とも必要とされるものについてを、特に仏教への造詣が深い方々に考えていただくことに主眼を置いている。人間は霊的な存在である。霊的に必要とされるものは現実の中に存在し、人間が真に必要とするものは常に存在する。

「まことに、あなたがたに言う。あなたがたの理性は霊的なものであり、霊性のない感覚的なものではない。菩提は永遠であり、真理を探究する存在すべてを導く善なる法則として、すべての実存を支配している。菩提は獣性を理性に変える。存在するもので、真理の器に変えられないものはない<sup>2</sup>」

本書では、この目標を達成するために、問いかけをし、条件を列挙するだけでなく、回答も提示する。そのためには、現在、世界にみられるような人間状況という問題をまず概観する必要がある。

---

1. 本書は二人の仏陀——釈尊と弥勒——についての書である。また、仏陀とは特定個人を指すのではなく、完全に悟りを開いた者すべてに当てはまる用語であるため、成道後のゴータマ・シッダールタを、「如来」「仏陀」の代わりに釈尊で呼称をほぼ統一している。

2. 『ミリンダ王の問い』

そして、この脈絡の中で、25世紀以上前にこの地上に生きたゴータマ・シッダールタ<sup>1</sup>という仏陀、釈尊が意味することと彼のメッセージを調査し、彼の人生と彼の法のどの側面が人間状況に現在立

ちはだかる新たな現実に沿うものとなり得るかを確かめる必要がある。そのうえでより重要なこととして、人類が確かな足取りと喜び溢れる心でえも言われぬ涅槃の境地に達する道を今一度見出せるよう、永遠なるダルマ(法)の古来の道の浄化に不可欠な、仏陀出現という現象の法則が確実に作用することを、釈迦牟尼仏が真理として保証していることを確かめなければならない。そのために必要な智慧と分別という機能の発達を真摯な探求者に可能たらしめるガイダンスと方向性を、釈尊のメッセージの中から発見する必要がある。

本書が現在理解されているような釈尊と彼の説法を主題にしたものでないことは題名から明らかだが、釈尊の実体を探求するには、彼の発言から分かるその際立った特徴を、仏典と仏教の親たるヒンズーの教典を通して精査しなければならない。すなわち、釈尊が絶対者の存在を肯定していたこと、自らは神意を受けた全知で比類なき存在であると明言していたこと、永遠なるダルマの本質的な諸相、原初は純粋だったサンガ、さらには、カルマについて釈尊が抱いていた概念と、輪廻転生に関する彼の発言が該当する。だが遺憾にも、釈尊を宗教史における例外とみなしている人はいまだに多い。釈尊は無神論を支持し、魂を否定し、その教え(ダルマ)を単なる一式の倫理であると宣言したと、彼らは信じている。私たちはこの三点に同意はできない。なぜなら、仏典自体が真実とは違うこれらの点を反証しているからである。経典中の言葉、「諸仏は法身」が、釈尊を体現する。本書を読むなかで、私たちの関心はこの言葉に向かうようになるだろう。そして、私たちが探求の中で何を見つけるべきか、発見されるものを発見した時点でどう認識できるかを理解できるようになる前にはまず、諸仏と法身の実体を、20世紀以上もの間、その上に積層されてきた人間の空想という外被の下から、まず掘り起こさなければならない。

---

1. 釈尊の成道前の呼称、シッダールタは「成就した」、あるいは願望すべてが成就した者、すなわち、情熱や欲望から解放された完全無欠な人間を意味する。「シッディ(成就)」は「祝福されんことを」「万歳」を意味し、椰子の葉に記録された文章の最初に、たいてい用いられている。シッダールタは Sarvarthasiddha(「すべてにおいて公正」を意味する)とも呼ばれていた。

P3

読者は、釈尊を一個人ではなく、物理的な日の出のように回帰性を有する聖なる原則であると認識することで、本物の釈尊に出会うことになるだろう。諸仏の中の一人の仏陀として、さらに、クリシュナから、ラーマ、そしてヒンズー教の『マヌ法典』を啓示によってもたらしたと伝承されるマヌへと遡る、各自の間に長期間の隔たりがあるものの、永遠回帰する一連の神の顕示者、化身(アヴァターラ)の中の一人の化身であることを知るようになるだろう。伝説と伝承を通し、釈尊は彼ら全員と親密な霊的關係にある。

混乱し相反する信念でできた下生えを一掃するための道具となる各種聖典に、人間は様々な形で心底からの忠誠を誓っている。したがって、本書の少なくとも半分が、時代を経て現代に伝えられた聖典からの引用と考察で占められている。そして、どの経典が信憑性や権威をより備えているか

をめぐる論争に関しては、学派絡みの主情主義は考慮に入れず、歴史的見地から検証可能な地盤に落着させるように努めた。

本書では聖なる教師たち全員に称賛と敬意を払うことが繰り返し強調されている。古来の道を裏付けられるものすべてを用い、彼らのアイデンティティの発見に多大な探求がなされた。そして、ヒンズー教、ゾロアスター教、仏教という現存するアーリア人宗教の聖典すべてにおいて「鍵」となる概念、教説、伝承を相互参照することで、探求は果たされた。

*God of Buddha* で初めて採用した技法、聖典の相互参照は、一本の鎖のように連なる累進的啓示を提示するために、本書においてはさらに大きく拡張的に採用されている。そして釈尊の実体である「仏陀」という現象と、釈尊が教示したダルマが意味し目的とするものを誤りなく視野に収めるために、歴史的な時間の物差しをこの一本の鎖にあてがい、釈尊が説法をした時代に当たるその中間部を起点にして時を遡ることで、釈尊が言及し、彼以前に出現したクリシュナ、ラーマ、マヌを始めとする過去仏たちの相関性を調査した。

聖典の相互参照は、聖典内容の正しい意味を確かなものにするためにも最良の方法であることが証明されている。聖典からの引用は、本書での探求の性質上、簡約するよりも正確さを期すことを優先した。同じ部分の引用の繰り返しに読者はうんざりするかもしれない。だが倦厭するなら、多くのことを見失うようになるだろう。人間の中に深奥の真理を吹き込むために、古来から採用されてきたのがこの方法だからである。

P4

しかも、一度目には把握できずに看過していた概念も、二度目に読めば、意味を理解しやすくなる。仏教に必要不可欠でありながら、長い年月の間に曖昧化していた課題を初めて明確にすることが、本書で意図されている。引用・参考文献中で言及されている人物・事物と、本書を査読し、発刊してくれた方々に深謝の念を伝えたい。

釈尊の実体を仏教に造詣が深い方々が真に理解するうえで本書がわずかでも役立つならば、その役割を大きく果たしたことになる。しかし、釈尊の実体の理解は重要不可欠な最初の一步でも、本書の主たる目的ではない。人類にとって最も重大な出来事を呈示する舞台の背景幕であるにすぎない。雲間から急に差し出す陽光のように仏陀が出現するという、明示的にも黙示的にも釈尊の予言が差し向けられた、希少ながら回帰性を有する現象であり、人類が救済に向かって前進し、えも言われぬ祝福を経験することを再び可能ならしめる永遠なるダルマの再発見の先駆けになると釈尊が約束した出来事——弥勒如来の到来が本書の主題である。

読者が釈尊を真に敬慕するならば、自らの霊的運命の成就是永遠なるダルマというこの一本の鎖の次の結び目と分かちがたく結びついていることを認め損なうはずはない。本書の第2部で呈示される難題の調査に駆り立てられ、探求の目標であってかつ、反駁不可能な結果に必然的に導かれる

だろう。すでに出現した弥勒<sup>1</sup>・阿弥陀<sup>2</sup>如来の到来こそが、釈尊の約束と予言すべての焦点であり、かの如来が果たすことは、自らの功績を超えていると釈尊自らが称揚している。その第2部に記載されている如来に関する釈尊の予言の膨大さに、探求者は驚くに違いない。宗教を創設したどの聖なる教師も、約束された救世主の発見に真の探求者を導くための記述としるしを残してきたが、釈尊ほどに豊富に提供した教師はいなかった。

釈尊の在世時から現代までには大きな時間的隔たりがあるにもかかわらず、予言は尋常ならざる精度で的中している。25世紀というその期間を半減することで、予言の的中度を低めようとする試みが仮にあったとしよう。そんなことをするなら、釈尊の教えの多くを否定しなければならないだろう。しかし、そうしたとしてもなお、仏典の予言の数々は驚くばかりであり、不信感で固まった人たちですらも平静ではおられない。

---

1. 弥勒 (Maitrya-サンスクリット)は、「慈愛という名の御方」を意味する。

2. 阿弥陀 (Amitabha)は、「無限」「無量」を意味する「amit」と、「栄光」「光輝」を意味する「abha」の組み合わせであり、「無量の栄光」を意味する。偶然の一致にしる、圧縮形であるにしる、「abha」と「bha」、もしくは「baha」だけが、インド・アーリヤ言語のサンスクリットと、セム語のアラビックの両方に見出される。語源が異なる言語の名詞であるにもかかわらず、「栄光」「光輝」という同一の意味を有している。

P5

人間に想像し得る最大現象の検証に本書で乗り出すのは、真の認知能力が人間に宿されているという仮定を前提にしている。主たる読者層に想定している仏教に造詣が深い方々だけでなく人類全体が、本書の中で共に探求に乗り出すことで、真の自由と平和に達していただきたいと、筆者は願っている。そして、この境地に達していただくことが、如来<sup>1</sup>たちが出現する目的である。

---

1. 如来：「正覚を来成した者；修行完成者；悟りを開き、真理に達した者」。仏陀の一つの名称。

# 1

## 人間状況

「汝ら、この無常の世界のすべてを、このように考えよ。夜明けの星、小川の泡沫、

(夏雲の中の稲妻)、揺らめく灯火、幻、夢である<sup>1</sup>。

このように世界を観ずる者は、死王<sup>2</sup>も見ることはない<sup>3</sup>」

時の作用の下に、諸国は栄枯盛衰し、国境は変化する。かつては、他国の命運を握るほどに威光を放っていた国々も、今では、それらの後塵を拝している。帝国も王朝も跡形もなく消し去られ、王たちも征服者たちも踏み付けられて塵埃に化し、忘却されている。人間の権力で永続できるものはない。衰退はすべての構成要素に内在し、真実のみが永遠に残る<sup>4</sup>。

人類の生活と国家の諸事においてと同様に、全世界で現代において初めて、絶望という悪魔が解き放たれ、人間社会全体に虚無感という神経症を蔓延らせている。あらゆる領域、階級、階層がこの影響を受け、理念、機構、展望としていたものへの信頼を失くしている。

私たちは無限に近い力を所有していても、意味あるものに欠如していると感じ、信頼を置いていた機構と価値がぐらつき崩れかけていることを危惧している。

- 
1. 『ヴァジュラサットヴァ』XXXII(外観の迷妄). 『バガヴァッドギータ』II.51 も参照.
  2. 仏教では「マーラ」と呼ばれている。特に、人間を俗世的で滅亡するものに鎖のように繋げる人間心理の否定的な資質を人格化したもの。
  3. 『ダンマパダ』v.170. 『ダンマパダ』v.151 も参照.
  4. 『パーラージカ・スッタ・ヴィバンガ』I.1.4.(DN,Part 2 も参照)

P8

科学技術が周囲の物理的世界を変える力を私たちの掌中に預けていても、その力が私たちの心に浸透することも、人間の中に内在する靈性を活性化させることもできない事実、私たちはすでに気づいている。科学分野で数々の功績が果たされたにもかかわらず、不安感と希望の喪失感が一般に広がっている。この事実は、絶えず進歩しながらすべての人々の安全を保障する繁栄した文明からほんの数歩、足を踏み外しただけで、人間は科学という馬に跨って疾走してしまうことを、わずか約 50 年前に起こったあの史上最大の殺戮戦争から記憶鮮やかに思い起こせば、より一層に示唆に富む。科学は、物質的豊かさの面では、世界中にあらゆるものを提供するように思われていた。人類の最も突拍子もない夢を超え驚嘆を提供し、年々、年を追うごとに、より力強く、その能力を証明した。だが、ほんの昨日までは手に届く範囲にあって、何もしなくても現実になるのは時間の問題にすぎないと思われていた今日の安全と平和は、「目前に迫る」どころか、「可能性が非常に薄い」領域へと今や退いてしまっている。人類はようやく気づいたが、科学と科学による発見は、人間のしかも少数の人間の意識から生じた産物にすぎない。発見したことをどう用いるかは、それを使う当人の「人生の目的」という概念に唯一左右される。

つまり、これらの発見も、発見によって現在収穫したことも、これから稔る果実も、人類の要求を満たすことはおろか、欲求に節度を加えることもできないのである。それゆえに、人類全体を益することに尽力するよう、人間の意識を結集させることは叶わない。科学は、自然界の秘密を掘り起こし、その知識を人類の利益のためにどう応用できるかをおそらく示せても、善のために役立つことを保証することができない。これは、人間の中にある獣性を変えるにはどうすべきか、その答えを提供できないことに起因する。意識に幕が下りた後に到来するものが分からない苛立ちから生じる、貪欲、利己主義、権力への野心を、科学は食い止めることも、根絶することもできない。人生の目的について納得できる説明はおろか、人間はその意識を死後も保ち続けることの妥当性に賛同もしていないからである。それどころか、そうした課題に解答はないと主張することに成功している。科学は、死で意識は途絶えると断言する。人間はそう断言されることで、どんな手段を使おうと、同胞を犠牲にしようと、「意識」があるうちに、あるものすべてを手に入れたいと欲する。

死後にも意識が続くことの保証を受けないまま、応報を顧みることなく生育したことがその背景にある。一方、人類の真のアイデンティティが意味するものへの渴望が癒されることはなく、「なぜ」「何のために」人間は存在するかについての解答もいまだに得られていない。

地球全体を巻き包み、最も隔絶された原始的文化にさえ影響を及ぼした、西洋とその自慢の物質文明が今やみるみるうちに衰退し、虚飾の輝きは鈍り、その影響は誕生の地ですらも減退していることが、過去 50 年間であまりにも明確になっている。

P9

その城砦が建つ礎石は、不安定で滑落しやすい土壌の上に据えられたかのように永続できず、本質的価値がないものに、私たちの目に映っている。私たちの文明は、一時的な物事を追求するなかで、永遠なるものから切り離されてしまっている。万華鏡のように目まぐるしく展開する現在に絶えず直面し続け、目移りが激しくなったことで、新しい形をして到来する物事の実体を扱うのに必要な洞察を、私たちは見出すことができない。このいわゆる文明において人間が達成した業績が全域で問われている。永続する目標が奪われて空洞化した欠乏状態にいることは判明している。

文明の価値と目標が大多数の人類を引きつけ、喜ばすことはもはやない。そして、文明自体の存続をより危うくしているのが、若者たちの間で野火のように広がっている幻滅と、父祖が大切にしてきた価値体系からの離反である。洋の東西を問わず、自暴自棄になった世界中の若者たちによる父世代の多くの価値観への反逆はすでに勝利を収め、「寛容社会」の出現をすでにもたらしている。眉をひそめられながらも漠然とした概念だったが、懸念が寄せられ始めてから 10 年も経たないうちに、大多数が支援する社会像としてすでに受け入れられている。経済面では、幻惑的な「素晴らしい生活」もまた崩壊している。この生活を得るためには、いとも簡単に、最高に価値あるものを手放し、最も崇高な原則を譲歩することで、息子や娘である若者たちが私たちに幻滅し、顔を背けている。受け入れる勇気はないが、非常に多くの家庭で家庭内断絶が起きている。インフレ、景気後退、不況という三つの脅威を払い除けるための努力が死に物狂いでなされていても、冷静に観察すれば、腐敗してぐらついている秩序の最後の必死の喘ぎにすぎないことが分かる。秩序は、それ自体が作り出し、もはや完全崩壊が予定されている下方スパイラルから脱出することができない。この全世界的な渦潮から私たちを救い上げる精神的なライフラインはすでに失われ、恐れ、不吉なことへの予感、絶望に、私たちはひどく苛まれている。不条理、退廃、混沌が物事の平常状態になってしまった感がある。

人類を分隊化する無情な慣習と儀式に人間が無益にも取り組んでいることに世界中の人々が気づかないなら、絶え間なく勃発している国家間、東西間、宗教間、教派間の抗争をどう解決できるのだろう。その起因である、各自の人種的、地政学的、政治的見解からなる特定の「教義」で人々の意識を満たすのではなく、視野を広げて一つの世界観を受けとめるよう、人類は教育されなければならないだろう。

その上で初めて、この最大の危機の時代に、錯乱状態にいる人類が抛り所と安息を見出すことができる新たな殿堂を建立するための実質的な進歩が果たせられるようになる。人類の連邦という世界的なこの殿堂の基礎づくりには、靈性に照らした精神的行為がもちろん伴われなければならない。さもなければ、外部から影響を及ぼすことが期待されるもの<sup>1</sup>に着手しても、うまくいくことは望めない。しかし、人間の靈性を再生する力が、死を免れぬ運命にある人間やその指導者たちの領域に存在することは決してなかった。これは、私たちの時代の問題である。人類のいわゆる指導者たちは、人類を脅かす靈的側面の真空が実際にどれほどの規模で広がり、重力を抱えているかの計算を惨めなほどに間違えていた。自由と独立を野放しにすれば、最終的に人間を野獣化し、人間社会が存続するには精神的かつ倫理的行為が必要不可欠であることも、いまだに認識できていない。腐敗は内側から開始し、短時間で広がっている。何でもありな社会は、その行き先をもはや見分けることができない。正義と倫理の基準、節度ある表現や振る舞いという重要問題への合意が今やすっかり決裂した結果、いかなる理性的な方向もその構造の中にはもはや残っていない。そのような社会は、無責任な快樂主義の中にますます絡め取られ、最終的な破滅へとまっしぐらに向かう。経済的搾取、軍事的蛮行、階級的抑圧、環境汚染、背徳という「祝福」を伴うものと判明した「文明」が、効力を失う直前にいることは歴然としている。歴史の表舞台を後にする日は今や差し迫っている。しかし、過去の文明の終焉とは違い、今日の世界の成長はあまりに小さく、結びつきはあまりにも緊密に絡み合っている。それゆえ、西洋文明が過去のものになることも、それが吹き込んだ価値観と、低下する一方でも行使し続けているその影響力を受けずに済んでいる場所が、大洋の最深部から大気圏の最高限度までのどこかに残っていることも、どの識者も想像することができない。軍事的優勢と経済力の神々は、競争相手の強さが互角であることから、しばらくの間、鎖に繋がれているように見えるかもしれない。だが、歴史を振り返れば、常に移り変わる均衡状態の中で安心感を得ることは不可能に近い。また、充満した偽善と欺瞞の上にこの均衡が成立している状況では、意図的にせよ偶然にせよ、この不安定な膠着状態を転覆するための介入がされることはなく、敷かれている制度とその信者を拭い払うのによってつけの激変をもたらす力が解き放たれることはない、とは信じがたい。

---

1. 困難な状況を変えるために着手する可能性があるプログラムやプロジェクトを意味する。

人間がその頭で考えた、社会的政治的イデオロギーと、共産主義、社会主義、国粹主義、もしくは（民主主義の仮面をつけた）捕食的な資本主義のプログラムによって、和平と進歩への取組みが近年なされたが、各自の盟主の地位を巡る争いの中で発症した怨恨と分裂という病に抵抗する力は

いささかも発揮されていない。そして唯物論は、その効能が本当かどうかは別として、立ち行かないでいることはあまりに明白である。それどころか、社会的政治的イデオロギーの起源は近年であるにもかかわらず、イデオロギー自体の中でも、それらを設立の思想基盤にした諸々の機構の中でも、分裂病が猛毒を放って進行している。しかも、熱狂的崇拜者たちで競合的な閉鎖的集団をつくるにしても、野獣の群れのごとき人間集団にするか、飽くことを知らない獣のような個人主義者の寄せ集めにするか、どちらかを知的に選ぶための選択肢を、イデオロギーは提供することができない。幸いなことに、これらは時という激流の水面に泡立つ泡沫にすぎない。一時現れては消える運命にある。

加速度的な変化を常に促す激流が、いつの間にかに人類をその一体性という大海に抵抗不可能な勢いで押し流している。この激流に押し流されている人類を欺くことを考えている現代のイデオロギー信奉者は、人間の状況を悪化させている霊性の病に直面し、自らの無能さを自覚している。にもかかわらず、持ち合わせていると主張する偽の治療策を広め続け、自前のこの策に合わせるために患者を切り刻んでは、救済策を信頼できないものになっている。

人類がその胸に抱く、霊性の豊かさへの切望を満たす本物の膏薬を、公論の先導者も人類の統治者も持ち合わせていない。彼ら自身が霊性を忘却し、次から次へと娯楽を増やし続け、物質的なものをより多く所有できるようにすることをひっきりなしに約束しては、避けられない現実との直面から、大衆の意識を逸らし続けている。道徳、精神的方向性を失っている、彼ら、いわゆる指導者たちは、政治権力の追求と経済財の蓄積が人間の文化と進歩を左右するテーマになった例しは一度もなかったことを示す歴史的観点に注意を払うことはない。帝政をかつて敷いていたエジプト、ローマ、ペルシャ、オーストリア、フランス、イギリス、他の数多くの国家が陥ったのと同じの割れ目に再び陥り、政治交渉と経済政策による平和と福利安寧の確保に忙殺されている。そして、人間はその理性が霊的な影響に支配されていなければ、その貪欲さにも、霊性が破綻している自分自身にも打ち勝つことはなかったという過去の教訓すべてを忘れ、人類をその霊的な遺産とその構成要素の中に内在するものから切り離してから、扱いやすい大きさに切り倒そうとする。

P12

胃袋には食べ物を、心には自国（または、自分が属する人種か階級）への愛を約束し、最終的には「理性」できちんと包装した万能薬を、指導者たちは人民の脳に受け入れさせようとしている。遅すぎたとしても、彼ら指導者は、人間性の中にある霊性を分離し度外視したことで、人間をより扱いやすくするどころか、フランケンシュタインと同じくらいに手に負えないものにしてしまったことにより気づき始めている。フランケンシュタイン博士が自分で造り上げた怪物に対してできなかったように、理性では自己生存本能を導くことができないことを、遅まきながらも、私たちは理解している。理性は多面的である。各人の要求に応じて役立つだけでなく、貪欲な欲望に従って目先の利益を得るにも役立つ。理性は、偏見、憎悪の火に新たな油を注ぎ、せめぎ合う情熱を高める。太古の時代から人間心理の構成要素であった情熱を、霊的価値だけを基盤にできる善なるものになるよう制御するのが理性だ。だが、その制御をもはや受けなくなった情熱は、下等な本能がそ

の影響分野を拡大し、全世界をその網で捕らえるよう、理性を利用する。

理性は、魂を病んだ人類に、近視眼的で甚だしい野心を秘かに押し付けようとしている圧政者や悪党たちの決まり文句になっている。その神盾の下に、ナショナリズム、人種主義、狂信という飽くなき食欲を抱える病原菌がばらまかれ、兄弟同士が互いに消滅し合うようけしかけられている。この致死性の菌に餌を与えて肥え太らせてきた諸国政府と、資本主義者、共産主義者、王政主義者のいずれであろうと指導者たち全員が、気づけば今、その猛襲の前に揃いも揃って力を失っている。

全世界を瞬く間に覆い包んだこの暗闇の中にあるはずの光線を求め、導きの源泉たる東洋の伝統のどれを調査しても、人類はそれを見極めることはできない。世界の名だたる宗教の本質的なメッセージを、正統派なる教義と迷信という堆積物が覆い尽くしている。これら大宗教の現在の構造と社会への影響をより深く調査すると、今日の世界が直面する喫緊の問題にこれらが解決策を主張し提供することは不可能であることがより一層に露見する。和合という人類が最も必要とする課題を前にし、完全に無力であり、それどころか、教義と機構のまさに中核の中で分裂が加速しているという痛ましい様相を呈している。これが、私たちの今日の立ち位置である。理性的な人間が魂の健康を回復しない限り、そして何らかの巨大な壊滅的現象によって一緒に巻き上げられて忘却されないのであれば、地球上の存在を描いたキャンバスは真紅に塗りたくられた凄まじき様相を呈していくことは避けられない。世界は、一つの霊的精神を共有する単一国家にならなければならない。さもなければ、一つの共同墓地になるだろう。人類は病んでいる。その主たる原因は霊性に関わる。経済の不均衡、人種間抗争、政治的弾圧、飢饉、疫病、病、疾病、そして戦争ですら、人間の魂の病という真因の副作用であるにすぎない。

P13

全滅に向かう潜在的可能性を急速に高めているこの世界共通の危機に握りつかまれた人類は、その掌中に、今後、どれほどの期間、閉じ込められたままにいるのだろう。予測するのに破格の魔法は必要とされない。かつて、地球から生命すべてが消し去られる運命にあったと思われた氷河期だけが、今日、私たちが直面する状況に類似していると言える。人間の心の冷たさと、人間の精神を今、握りつかみ、同胞から私たちを孤立、疎遠にさせている寒気が、致命的な熱さと凄まじい熱を放散する核爆発の姿をした対抗勢力の到来を最終的に早めることで、この世界共通の病の束縛を解き、均衡を必ずや回復させるだろう。そして、病よりもひどい荒治療になると、慄きながら指摘していた人たちは、どの病もそれ自体の治癒を早めることを理解していなかっただけとなる。

人類は絶滅に直面している。生存していくには、新たな実存に現状から転向するしかない。適切な基準の急速な消失、自由に使える殺傷兵器の想像できないほどの増加に対し、人類の連帯、人類の一体化に代わる妥当な解決策は残されていない。人間の状況は、根本的かつ普遍的な変化を叫び求めている。消滅しかけている機構や、そのうまく行き損ねた価値の復活でなく、人類全体の相互関係、相互依存という新しい現実を積極的に遵守し、個人、地方、国、地域の排他性、既得権益、

権力ブロックの痕跡のことごとくを過去の遺物のゴミ山に決然と廃棄することで、その切望は満たされるだろう。人間関係の新しい秩序は東西いずれのものでもなく、世界共通でなければならない。外から塗布した軟膏が問題の中核まで浸透することは望むべくもない。今日の問題は、私たち人間自身だからである。それゆえ、変革は私たちの内部で起きる必要がある。改善は、私たち一人一人から始まらなければならない。

人間同士の長年の紛争の原因は単一だった。単一の道徳基準から生じた、一つに統合された人間行動の基準、一つに統合された良心の不在が原因だった。一つの倫理的な信教が不可欠になっている。その推力で、私たちの中に内在する霊性を再び目覚めさせなければならない。私たちの心は浄化される必要がある。霊性から離れた人類に未来はない。宗教だけが、霊性と信仰を扱う。時間軸に沿って長い曲線を上昇していく人類の進歩の年譜から分かるのは、いずれかの大宗教の教えに由来する何らかの道徳規定の力によって支えられている文明だけが、文明という名に値し、記録に残る意義ある歴史を刻んでいたことである。

P14

不正手段で得た利益を積み重ね、弱国を虐げる帝国たちが結集した力に現される腕力と欺瞞といういとも容易に手に入る武器を使い、生き残るための術策を弄することが、「常識」とされてきた。人間は、その常識にひっきりなしに促されながら、自分の中に深く内在する強欲と無知から生まれるささいな野望を支えてきたにもかかわらず、こうした帝国のどれ一つとして、人間という規模壮大な実存に勝利したことがない。これは自明の史実である。この地球上の人間の歴史の物語では、その反対のことが事実として起きている。実際に地を受け継ぐのは、人々の間で交わされる柔和さである。自ら抱える致命的病の犠牲者であり、武力行使で弱国を征服してきた好戦的な強国たちが、圧勝と敗北を互いに重ねながら、忘却の中にもともに沈んでいった。4世紀を超えて存続した帝国はない。時の舞台上で演じる者たちは、その数々の業績も舞台にとどまる力も、宗教に照らして眺めれば、実に大したことはない。しかしながら、神々として崇拜してきた科学と唯物主義の中で幻滅を味合わされ、数多くの宗派と信条があっても、救済の力がない実態に直面している惑星に、重要な問いが投げかけられている。「どの宗教?」「なぜそれ?」というものだ。

答えを差し出す前に、今一度、認識しよう。もし、過去から現在も常に存在する「問題」——人間——に適用される解決案について歴史が何でも教えてくれるなら、すでに示されていることがある。過去において諸々の社会の健康を回復させるための治療が入れられ、栓を開けられた瓶すべての中でも、この地球の様々な場所で人類を墮落から栄光へと引き上げ、迷信から智慧と理性、死から生へと救い上げることに成功してきたのは、宗教という仙薬より他にない。何度も繰り返し、宗教はそれを実証してきた。信仰という不可思議で抗し難い力を唯一もたらず宗教がなければ、他すべての資源は無きに等しく、破壊の手と闇が個人と諸国を覆い包もうとする動きを押し止めることはできなかった。人間の進歩の様相を掘り下げながら、過去から現在の流れを俯瞰すると、歴史は宗教の物語にすぎないことがわかる。事実、宗教的な物の見方と粘り強いその拡大の歴史は私たちが楽

観的になれる一つの根拠をもたらしている。宗教から離れた人生は、たくさんの苦痛と惨めさを時折の楽しみが閃光のように瞬間的に照らす束の間の経験にすぎない。宗教を、段階的に展開していく歴史的なキャンパスであると正しく理解するなら、様々な人種に倫理的な啓示をもたらしながらも、社会から隔絶した現象ではなく、それどころか、最終目標である世界の和合へ、最も完璧な意味では、人類の一体性へと徐々に人類を近づけていきながら、社会を靈的側面で向上させる全世界的なプロセスとして捉えることができる。また、そう捉えなければならない。そう主張できるのは、人類は本来が神性を備えた存在だからである。不滅への探究を宗教だけが果たさせる。それゆえに、無常の俗世への欲望を人間は克服することができる。

P15

身体部位の合計よりも、自分をはるかに大きな存在であることを確約することで、自らの実体への果てしなき信頼感を人間心理に染み込ませることに成功しているのは、宗教より他にない。そして、破壊できない自己の本質への信頼から、長続きする人間関係すべてが基盤にすべき双子たる重要成分——信頼と慈愛——が心の中で生まれる。信頼は紛争をなくし、慈愛は、同胞のための自己犠牲の同義語となっている。

信仰心をもたずに、人類の進歩という真の奇跡を果たした人はいない。病人を癒し、高齢者と精神を病む人たちをいたわり、身体が不自由な人々の機能回復を助け、子供たちを教育し、弱者を強くする。こうした奇跡が、文明人と野蛮人の真の差別化をもたらし、真の人間と獣を区別する。

人間の営みすべてをもっても、差し迫った破局を食い止めることはできない。破綻した指導者たちは建設的な方向性も希望も示すことができない。そのため、人類が今準備ができていない最先端の進歩をするための新しい局面は、過去において常にそうであったように、靈的側面であることを、私たちは受け入れるより他にない。だが、伝統的な宗教も倫理も、黄金の機会として現れるだろうものを活用する力を失っている。最先端科学と理性が、古来の信仰とそれぞれの伝統的体系を深く切り刻んで断片化し、それぞれの機構にかつては大衆から捧げられていた忠誠心を断ち切ってしまったことに起因する。理性的な対処を命じる意識と、本能的に求める信仰への願望が、私たちの頭の中でせめぎ合い、古来の宗教は対応が要求される新たな問いに直面している。人類の大半は宗教の教えに従った生き方がもはやできず、教えに沿った行動をやめている。その効力に対する疑念は、比較的少数の人たちの間にもはや限定されていない。不品行、無法状態が勢いを次第に強めていくなかで、疑わしい宗教など信じられないと、ある世代全体が大声で訴えながら、他すべての人々の発言をかき消している。古来の宗教の点滅する残り火も、現代科学の短命なランプも、魂の闇夜の中で取り乱している人類に、何らの希望ももたらすことはできない。古来の宗教への確信が腐食し、祖先から伝わる秩序が科学によって溶解されている状況で、答えられていない問いに、私たちすべてが直面している。「私たちの経験を一つにし、情熱を注ぎ込める重要なものをどこで何のために発見すべきだろう？」

一つの宗教だけが、理性と伝統、科学技術の業績と霊性面の要求を調和させる相互作用を生み出すことで、人類全体を結びつけることができる。

P16

相反する立場を和解させ、人間状況が直面する他すべての課題を克服していく「神に起源し、すべてを包含する」一つの躍動的な宗教が、人類という沈みかけている船に今一度、最も重要な支柱を最後の手段として提供することができる。人類はその支えを得ることで、現在の全世界的な悪夢を泳ぎ切り、確信と喜びに満ちて太陽に照らされた新たな安息地に到着することができる。

人間の霊的精神が和合の基盤にできる宗教は、他宗教で現されていた古来の真理を刷新し、それらの真理を単一の源から放散する一つの真実が大切にされて価値が与えられたものとして受けとめるものでなければならない。人類の大宗教すべてを先入観を排して比較するなら、それぞれが、出現した当時の特定の状況下ではどれも同じように成功を収めていたことが証されるだろう。そして神の真理の啓示という常に展開するプロセスとして眺めれば、宗教現象とは、家族から部族、国家へ、そして今、世界全体へと向かう、絶えず規模を拡大していく流れの中でのそれぞれの段階において人類が和合に向かって進歩を続けていく、唯一の理性的プロセスであることが分かる。だが、それにもかかわらず、人間性の中に内在し、人間自身の無知から生まれた事実がある。これは「私たちや私たちの指導者」と、その背中合わせにある「彼らと彼らの指導者」という最古の誤った確信でもある。二本の鎖がごとき無知と自己から生まれ、人間の精神と意識が真の完成を果たすことを妨害するという真実をその誤りの中に内包する。無知は、真理は普遍的であり、拘束されることも閉じ込められることもできないことを知らないでいる状態に私たちを縛りつける。自己は私たちを拘束し、力強い大海から分離されると簡単に消し飛ぶ一滴の水のように私たちを弱体化する。

私たちは人間状況、すなわち私たち自身を確認した。あまりに長い期間、精神的なせん妄に絡め取られていたことで、大半の人々が治癒策について知りたいとは願わないし、強く異議を申し立てられない限り、聖なる医師がもたらす処方箋すべてにひどく憤慨するだろう。私たちはあまりに長い期間、罪を犯し、意固地な駆け引きを展開し、魂の闇の中を目隠しして進んできたため、コウモリなどの夜行性生物のように日光が目にも痛く、陽が射してくれば逃げ出すだろう。だが、地球の深部にも、星間空間の闇の中にも、私たちの意識の内奥にある深淵にも逃避する場所はない。その窪みには、今のように、過去何回も、漆黒の闇が湛えられたことがあった。神の顕示者とも呼ばれる化身たちの光輝と栄光に匹敵する光はない。それゆえ、光の不在にすぎない闇は、最高に眩い光である宗教の光がかつては照り輝いた場所に、その存在を最大限まで広げるのである。

P17

地球規模の影響力を及ぼす指導者は、神の顕示者より他にいない。彼らの力と教えは死すべき運命にあるにすぎない私たち人間を超越し、地球規模に広がるその業績は、人間による業績すべてを

大きく凌駕し、光彩を失わせている。彼らはアジアだけから出現した。それゆえ、国民と文明として最も輝かしい時期がアジアに存在した。仏陀と同様に、クリシュナ、キリスト、モーゼ、ムハンマド、ゾロアスターもが皆、アジアから出現した。そして、最も深い闇夜もアジアは知っている。今日でさえも、その圧倒的な人口数により、アジアの痛みは最大であり、飢えと苦しみの叫びは、災禍に襲われている人類の苦悩の叫びの中でも最も鋭く、執拗である。アジアの人々の問題は世界中の人類の問題に今や化している。どんなに特権的で富裕な集団でも、どんなに強力で手ぬかりがない国でも、様相からすると、その制度や大切にしている価値観を守り抜くことは叶わない。規模の大小、貧富の別なく、すべての集団、国家が、地球規模の脅威的な比率に迫り上がっては最終的な忘却の中へと引き込む、差し迫った破滅の渦潮の中に投げ込まれ、なす術もないままに溺れている。そして、人類が直面する世界的な危機の暗雲の下で、辛苦のさなかにあって恐れおののき、平伏しているアジアは、過去の時代と同様に、新たな霊性の強い日差しを再び放ち始めている。打ち萎れた人類の生命を蘇らせるその光線は、夜明けの地平線上から放たれ始めたばかりの段階にあるにすぎない。しかし、その救済のメッセージをもって、地球規模に織り成されて人間の魂をすっかり覆い包んでいた暗幕を、この今でさえも、ずたずたに引き裂いている。

過去の時代の霊性の日輪である仏陀ことシッダルタ・ゴータマを始めとする神から遣わされた教師たちが示したしるしと約束を果たすために、弥勒・阿弥陀如来が真に新しい世界秩序のビジョンを携えて出現した。混沌としたジレンマから、新しい次元の精神的成長へと、より壮大な次元にある自覚と行動へと、人類全体を駆り立てるのに必要な彼が持ち合わせた手段は、人類の潜在的可能性を發揮させることを目標に、愛、平等、平和、友情という世界共通の価値観をあらゆる状況で適用することに基礎を置く。だが、一切をあがなう、無比の法(宗教)が人類の前に今一度露わにされるには、増長する人間の無知と貪欲を今も速やかに消滅させている全能の实在、弥勒如来について知り得る前に、釈尊の時代の様相が語られ、釈尊の真実が構築され直さなければならない。

P18

釈尊もまた、「最初においても、中間においても、終わりにおいても素晴らしいダルマ(法)」を再発見した後、「文字通りに純潔な精神をもって完全に果たしたブラフマチャリヤ<sup>1)</sup>」<sup>2)</sup>を当時の人類に教えた。私たちは自分たちの意識の中に、釈尊が直面した挑戦的課題であったヒンズーの遺産を構築し直し、今日もなお入手できる出典から、釈尊の実体が人類に及ぼした力と影響について何らかの概念を得るための証拠を写し取らなければならない。

弥勒如来を認識するには、仏陀、釈尊の真の姿を知らなければならない。人々が本人の周囲に織り巡らした魔法のオーラが取り払われても、仏陀の本質は容易には理解できない。説明することは叶わない<sup>3)</sup>。釈尊は外見は人間の姿をしていたが、自らが人間であることをきっぱりと否定した<sup>4)</sup>。神でも悪魔でもない<sup>5)</sup>ことも、はっきりと否定した。また、人々の好奇心をかき立てようとして、当時のペテン師と張り合うことは決してしなかった。それどころか、彼らが実践していたことを忌み嫌った<sup>6)</sup>。神秘的なこと<sup>7)</sup>も魔術<sup>8)</sup>も、力づくで遠ざけた。釈尊が繰り返した唯一の主張が、悟り

の境地に達するべきということであった。彼は如来<sup>9</sup>だったのである。世界の救済のために真理の王としてこの世に生まれた<sup>10</sup>仏陀であり、征服されない勝者、絶対的な先見者であった。暗闇に覆い包まれた世界にいる人々に不死への扉を開くことが、当時の課題であり、それを果たせるのは釈尊より他にいなかった<sup>11</sup>。仏陀が真に意味するものとその奇跡は、その教え（無比の法<sup>12</sup>）の中にしか存在しない。

---

1. ブラフマンに至る道

2. 『サンユッタ・ニカーヤ』IV.314-16. 『バガヴァッドギータ』IX.17も参照。「私は……知るべき対象である。浄化具である。……讃歌、歌詠、祭詞である」

3. Ibid.,III.118.

4. 『アングッタラ・ニカーヤ』II.37-39. 『スッタニパータ』vv.455-56も参照.

5. Ibid., 『バガヴァッドギータ』X.14も参照. アルジュナが断言する「クリシュナよ、……神々や悪魔もあなたの権限を知らない」.

6. 『ディーガ・ニカーヤ』Part1. 『ケーヴァッタ・スッタ』.

7. 『ディーガ・ニカーヤ』II.100. 『アングッタラ・ニカーヤ』I,3,134. p.286 (Bombay Univ.Ed.)

8. 『ディーガ・ニカーヤ』Part1. 『ブラフマジャーラ・スッタ』.

9. 『ディーガ・ニカーヤ』III.135. 『マハーヴァッガ』I.6.如来の正確な定義はなされていないが、「完全なる(涅槃の境地に)到達した御方」,すなわち,実体が把握し切れず、「かくのごとき」としか言いようがない完全なる御方であることに仏教学派すべてが同意している.

10. Ibid.,I.46. 『ケーナ・ウパニシャッド』I.9.も参照.«生命によって息づくものではなく、生命に息吹を与えるもの。それがブラフマンであり、(人間が)ここで憧憬するものではないことを知るがよい」.

11. 『マッジマ・ニカーヤ』V.26. (アリヤパリイエーサナ・スッタ).

12. 『サンユッタ・ニカーヤ』III.13,22-87. 『パーラージカ・スッタ・ヴィバング』Iと *Dhammadgata-Ashtasahasrika*, XXXI.512-13も参照.

P19

それゆえ、釈尊の在世時にその実体を認められたのは真摯に謙虚で純粋な魂だけであったことを、歴史が示している<sup>1</sup>。

釈尊の途方もない業績も、最高の教えをもって人類を従わせたことも、今日、誰も否定することはできない。神の他の顕示者である化身たちだけが、釈尊に比肩する。彼らと同様に「その力が、完全なる超越者<sup>2</sup>からもたらされたのは、絶対者が聖なる人物たちを高めるからである<sup>3</sup>」と釈尊も明言した。仏陀であり、化身である「聖なる人物たち」の教えだけが、この世界を改善したのであ

る。

人間の心理をつかみ取るこの死の闇から私たち自身を救出する道を探求するには、神、絶対者の方向に、神と彼の顕示者たちに向かって、私たちは歩みを進める必要がある。

---

1. 『ディーガ・ニカーヤ』 III.84.

2. 『ヴァジュラサットヴァ』 XVII.

3. 『ヴァジュラッチェディカー・ストトラ』 176,11a. 『マッジマ・ニカーヤ』 I.71-72 も参照.

P20

## 2

### 絶対者

「諸の現象の消滅を知って、作られざるものを知る者であれ<sup>1)</sup>」

自分をどんなに高尚だと考えていても、知って理解する自分の能力がどんなに素晴らしいと思っ  
ていても、人間は結局のところ、ごく限定された存在にすぎない。科学的業績を自負していても、  
いまだに物事の表面の周りを取り巻き、姿と形という外見的なことの知識を集めている。しかし、  
象牙の塔の頂を目指しても、物事の本質に達する道はない。だが「本質が分からないもの」は現実  
に存在する。その臨在を、無限に移り変わる、着想できないほどに美しく完璧なその影響を通し、  
どんなに不十分でも認識するのが、真正の科学と純然たる宗教である。これらは、真の戒律をあら  
ゆる場所で探し求め、永遠の力で全世界を一つに束ねる無限の大いなる精神を数多くの様相を通し  
て追求する。

悲しいかな、科学の擁護者と宗教信仰者はそのような幅広い視野からいまだに遠く離れている。人類という一羽の鳥の二つの翼——科学と宗教——の動きを調和させるために、この視野は絶対に欠かすことができない。この両翼が揃って羽ばたくまでは、人類は唯物主義か迷信のいずれかに進路が振れ続けていく。人間は一つの新しい視点を必要としている。一つの新しい科学と一つの新しい宗教、あるいは宗教の刷新である。本書は後者について筆を進めている。それゆえ、本書では、現代科学とその成果を、新しい人類のニーズとどのように調和させることができるかという課題を取り上げる。

現代の科学者たちの業績は私たちが最大の賞賛を贈る対象である。しかし、科学は立ち止まっている。探究の矢は的まで届いていない。

---

1. 『ダンマパダ』 v.383. 『バガヴァッドギーター』 VII.7 も参照「私よりも(高い)ものは他に何も無い……」.

P21

禁忌として自らに課した心理的障壁により、ある地点に達すると、推論を常にブロックしているようであり、実に簡単だが重要な二つの言葉にアレルギー症状を起こしているようにも思える。「どこから」「どこへ」がその言葉だ。最初の言葉は起源を問い、二つ目は最終目標を確かにしようとする。どんな現象についてだろうと、この二つの言葉に示唆される問いに答えれば、当該の現象についての目的も与えられることになる。こうした問いに、科学的なデータすべてを持ち合わせ、最高の分析的な頭脳を所有している科学者以上に、論理的で先入観を排した正直な回答を誰が与えてくれるというのだろうか。だが、形而上学にも不可思議なものにも関心はない、と科学は言う。ならば、宇宙についての科学的な説明をかいつまんでみよう。宇宙の開始時、宇宙空間すべてに、すべての化学元素の分子が均一に混合した原始の高温宇宙ガスが充満していたと言われている。さて、これが開始時の状態ではまったくないことは理解できる。そのガスはどこから来たのか、そして様々な元素は何が原因で形成されたのだろうか。何によって混合状態の温度は上昇したのだろうか。こうした問いに、科学は論理的な回答は持ち合わせていないように思える。ともかくも続けると、このガスは内部が不安定であるために、小球状のガス雲に分解し始めていった。ガス雲は、重力により収縮し始め、収縮しながら回転運動を得ると、温度上昇し、高温発光を起こした。これが夜空に瞬く星たちが誕生する経緯である。だが、混合状態が均一なのに、なぜ不安定になるのだろうか。

科学でも特に物理学において回答を見出すことを可能にする問いは、唯一でないとしても「どうやって」の言葉で始まるものが多い。物事の「なぜ」に取り組む地点まで、物理学はまだ進歩していないことに所以する。たとえば、二つの物体はどうやって互いを引き寄せ合うのか、という問いは、重力の法則においてよく知られている。だが、これまでのところ、二つの物体が「なぜ」互いを引き寄せ合うかについて、科学は説明していない。なぜ、重力によるのだろうか。推測しかそこにはない。

次に、科学によれば、内部がそのように不安定である結果、諸々の星は、島宇宙と呼ばれるいくつかの星群へと結集していった。その島宇宙の一つが、私たちの銀河系であり、それぞれが回転運動から生じる遠心力で崩壊を免れ、やがて、すべてが一つの共通する中心部から離れ始めていった。島宇宙は今日でも互いに遠ざかり続けている。移動速度が速まるほど、移動距離はさらに遠大に伸びていく。かくして、宇宙は膨張する。

P22

この不可思議な不安定さを仮に認めるにせよ、化学的元素が計らずも形成した爆発性ある混合状態が炸裂して全方向に飛散した、と仮に言うにせよ、この点は少し信じがたい。しかも、何らかの力が常に加わることでしか生じることができない継続した加速現象について何らの説明もなされていない。さらに言えば、島宇宙や不活性物質は、宇宙船が持つような自己推進力を持ち合わせていない。この尋常ならざる動きへの論理的な理由を、科学は提示していない。

だがなるほど、天体物理学は、宇宙がどのように生じ、なぜいくつかの星雲すべてが共通する一つの中心部から遠く離れている過程にあるかについての新しい理論が現在ではもたらされている、と言う。約100億年から150億年前の「始まり」の時、一粒の原初の原子が壮大な爆発、ビッグバンをもって炸裂し、その構成要素を四方八方に飛散させたというものである。そして互いに遠ざかる過程で、「無」（その原初の原子以外のものがどう存在し得たのだろうか）を変換させ、壮大な星雲、星々、惑星その他へと進化させたのだ、と。だが、その単一の原子を「誰が」そこに置いたのか、その原子がどこからやって来たのかは誰にもわからない。何かが「無」（起動するための『特異性』）からどうして生じることができるのかという問いに当惑することもなく、天体物理学は言葉が続け、ビッグバンからわずか30万年後に宇宙は年代順の発展を遂げたことを現在では確信している、と私たちに告げる。しかも、ビッグバンからわずか数秒後に宇宙に起きたことを知っていると平然と主張する学識者すらいる。だが、放射性崩壊や残余マイクロ波放射や他のいかなるパラメーターもないまま、わずか数秒だろうと千年であろうと、100億年から150億年前の時間をどうやって計算できるのかという厄介な問いも無視されている。ビッグバン「以前」に何がその場にいたかについてを知る手がかりを、科学は持ち合わせていない。すなわち、何がその現象を引き起こしたかだ。神の御業だったのか？

「ティック・タック・トゥー、もし失敗したら、これを使おう」と、藁にもすがる思いの技術を使って編み出した宇宙年代記は、こうした「回答不可能な」こと以外にも、宇宙は最古の星たちよりも数十億年後に生まれたとか、巨大な球状星団やグレートウォールという宇宙の大規模構造が既知の宇宙の年齢計算の限界を超えているとかいう説明不可能な逆説にも直面している。一般相対性理論をその限界まで調整しても、この矛盾を天体物理学識者たちが解決する助けにはならない。このため、私たちが居住する宇宙という類いのものについての基本観念の再評価が余儀なくされている。

では、改めて提起しよう。私たちの太陽系とその中の惑星たちについてはどう説明されるのだろうか。太陽ともう一つ別の太陽の偶発的な衝突危険により、太陽の表面上に潮汐破壊が起きた結果、その実体の一部が宇宙空間の中に投げ出されたことにより、惑星は形成された、と科学は言葉を続ける。

P23

これらは2乗3乗の法則にしたがって軌道の中に落ち着き、太陽系を形成したと言う。残念ながら、2乗3乗の法則では、惑星軌道の数学的位置づけの説明はできない。それでも、科学は言葉を続ける。宇宙が過剰拡張をする以前、星間の衝突危険の確率はより大きかった分、生命に適した条件の範囲は狭まり、その生息を支えることができる惑星はごく少数にならざるを得ない。おそらく、そうした惑星は百万個のうち一個にすぎない、と。科学によれば、感覚力を持つ生命体の出現は実に希少である。

科学者は、壮大な宇宙の中での人類の輝かしい孤高を大層悲しんでいても、それは世間向けの隠れ蓑であり、地球外知性体との接触がないことに、私たちの大半と同様に、内心では安堵している。彼ら知性体は私たちの調査のために星が瞬く虚空を飛び越そうと、私たちのように試みているかもしれない。いや、成功したばかりでいるかもしれない。私たちは花嫁のように夫になる相手に姿を見てもらいたいと思っても、最終的な結末を危惧している。「あちら」からやって来る地球外知性体との遭遇の結果への私たちの気持ちは心の奥底でははっきりしていない。敢えて言うなら「恐れおののく」と表現した方がよいだろう。さらに言えば、そのような遭遇が起きれば、選ばれて寄せ集められたいいくつかの国の国民といくつかの人種が抱く「特権的立場への愛着」という閉塞的な概念にどんな大混乱をもたらすのだろうか。壊滅するのは確実だろう。だが驚くことに、大宗教はそれで揺さぶられることはない。感動さえするだろう。現在は空想の領域にあっても、いずれ起こり得ることを、基本的な教えで否定していないからである。それどころか、そうした遭遇を言外にほめかすだけでなく、機が熟せば、彼ら知性体との遭遇は避けられないと注意を喚起している。こうした教えは、「無限の光輝と無限の時間」という、創造についての普遍的なビジョンであり、「無」からそれを生じせしめた力が設定して運命づけた進路を確実に打ち出している。神の顕示者たる化身たちによれば、宇宙は生命に満ち溢れている。理性を持つ生命が、その同士たちと、そして、大いなる「知性」と出会う時に向かって宇宙は進んでいる。科学者たちも、不安に慄いてしようと、同じ到着地点へと容赦なく、今、導かれようとしている。宇宙空間は、シアン化水素 (HCN)、シアノアセチレン (H-C≡C-C≡N)、ホルムアルデヒド (HCHO) という分子で構成され、火星と木星には水 (H<sub>2</sub>O) が存在するという近年の発見により、想像されている以上に、生命体の形態は多様であるという高い可能性に今、私たちは直面している。ここから導かれるのは、私たちが彼らを目にしても、知的生命体であると認識できない可能性である。もっとも、私たちのほうこそ、知的生命体であるとは認識してもらえない可能性がある。

同様に、地球の表面は宇宙全体のごく一部にすぎないように、時空間の枠内にすべて納められている私たちの物理的宇宙は、実体的な全体像のほんのささやかな一面にすぎないかもしれない。その可能性を認める心構えも、私たちはしておかなければならない。

今日の科学において、大いに賛美されている合理的な事実検証のための原則は、まぎれもない誤りでないとしても、真に偉大な発見を目指した探究においては、水なき砂漠であることが判明されようとしている。論理というよく鍛え抜かれた道ではなく、直感の雲から現れては面くらわせる印象さえ与える。

現代科学の合理的な考えは、一見したところ非合理的に見えるものも包含するほどの懐の深さがない限り、地球上の科学自体の領域内ですら、新たな分野を開拓したと主張し続けることは叶わない。一見したところ非合理的に見えるものが、近年、分子物理学と天体物理学の聖域から発見されたからである。宇宙の論理的な速度限界である光速を超える速度で移動すると仮定されているタキオン、渦巻き状で、一つの宇宙から別の宇宙へと、いや、もっと素敵な表現をすれば、一つの次元から別の次元へのワープを導くブラックホール、質量も電荷も無きに近く地球全体をやすやすと高速で貫通できる幽精神のような素粒子ニュートリノといった発見が、科学の密な世界観をその核心部分まで揺るがした。最後になるが、超感覚的知覚に言及しよう。科学の後光を放つ研究機構の中でなされた制御実験を通して科学的にすでに実証されている、人間自身の物法則に従わない側面であり、科学によって否定されてきた現象を復権させている。体温や心拍の生体自己制御能力であるバイオフィードバック、意思の力で離れた場所にある物体を動かすサイコキネシス、科学的には未知で不可解な手段で意思伝達するテレパシー、出来事の発生を予見する予知能力を含む、不可解で「科学的見地からは非合理的な」多くの現象が、近視眼的な構えの上に少し前までは傲然と建立されていた科学の城塞の砦を今や爆破している。その後光を放つ城壁の内側にこもっているようでは、道徳も、不可思議なものも、宗教も、解明することは叶わない。かくなる上は、最高の発見になる可能性があるものを解明しようと突進しても、行き止まりにぶつかるだろう。

科学は、人間の实体や、気づけば、それ自体が中に存在していた宇宙についての「どうやって、なぜ、どこに、どこへ」は、今後も決して分かることはないことを認めざるを得ない方向に進んでいる。

私たちは、その飽くなき好奇心で、果てしなく続く謎の解明にこれまで成功してきた。小宇宙の探査、素粒子の追求から大宇宙の調査までの科学的な探究のあらゆる情景において、有限の限界に触れてきたことが、私たちのこれまでの経験だった。現代科学は、あらゆる現象の正確な姿を得ることを目標にする。物理科学や生物科学だろうと、社会科学だろうと、絶対的知識の獲得が目指されている。しかし、他方では、現代科学は完全に想定違いの業績を達成している。絶対的知識を獲

得しようとする試みがまったくなされていなかったかのような地点に到達している。あらゆることについてのあらゆる問いに関して絶対的や正確な知識を得ることは不可能であることをようやく発見したのだ。これは、持ち合わせる手段や技術の不全ではなく、絶対的な限界があることに起因する。人間自身が本質的に絶対的な制限を受けているのだ。人間は、その組成からして、あらゆることについて正確な知識を得ることを基本的に制限されている。そのような取り組みが無益であることを認めて自分の内面を凝視し、人間の真の実体である真の自己を発見し、そのうえで、区分化された今日の科学の構造と、その偏狭なルールである「証明できるか、できないか」を歴史の深淵に送り込むよう運命づけられた真のパラダイムが出現するのを、真の自己の視界から目の当たりにする人たちが賢い。

だが、科学的な人間の概念とモデルを別のものと取り替えることが運命づけられて出現しているこのパラダイムは、実際には新しいものではない。科学による発見が湧き起こした興奮と喝采と、自然環境の征服の中で失われていたものである。科学とその擁護者は、その教義で装備することで、どんな反駁もはね返し、自ら編み出した機械論的な因果関係に代替するものを拒絶した。宇宙はすべらかに機能する単なる機械であり、人間が手段とする科学的手法で基本的な構成要素まで系統的に単純化されるなら、人間の五感を使った探究から隠れおおせたまま、発見に抵抗できる謎はない、という誤った確信がその根拠だった。こうしたことすべてが現在ではすっかり覆されていることは言うまでもない。見せかけの背後に控えている本物が、実験と証拠という城壁の中で自衛している科学者たちと対峙しようと、今、姿を現している。そして、その出現が意味するものを理解できないまま、慣れ親しんできた宇宙像が修復不可能なほどに砕け散ったことに、彼らは気づくのである。過去の時代のように、またもや、こういう声が聞こえる。

「科学という明るいサーチライトの向こう側の、感覚の窓から見えない場所で、

古い謎かけが、『なぜ』『どこから』の古い質問が、今でも私たちに挑戦をしかけている」

P26

現在、現れつつあるパラダイムは、すべての神の化身が過去から現在までの折々の時代に人類にもたらしてきた、理性的魂としての古来の模範的人間像である。実体のすべてが高い靈性で満たされたその模範像は、科学的な解析プロセスによる実解析の対象になることはなく、自らが立ち交じる単なる物理的環境の影響に染まることのない、本質的に卓越した存在としてのみ、その完璧さを理解することができる。手遅れになる前に、人間心理に及ぼすその古来の影響力が改めて明言されなければならない。

現段階で問うべきは、自分は真理の探究者であると公然と即答する科学者たちが、実験による検証パラメータに収められない（真理の）本質的側面を提示されると、なぜ冷笑を浮かべた反対者になるかについてである。人間的情緒を彼らは育てる必要があると言う人もいるかもしれない。探求の本質を知る必要があるとしか、私たちは言うことができない。特定の専門分野に制縛されている

科学者のほとんどが、時空内の万物の根底にある普遍的な調和との接触を失っている。厳格な境界線を専門分野に張り巡らせることで、知識の探求自体に限界も設けている。

知識が有限であることを踏まえると、人類を益するために自然界とその秘密を役立たせる探究においての専門化は、実に重要なステップである。だが、専門性を極めていく過程では、大いなる「知性」と「意志」を所有する一つの実在に基礎を置き、存在のすべてを規制する知的な法則という、根底を駆け抜ける糸を決して見失ってはならない。さもなければ、電子顕微鏡を使った研究への実直な取り組みと変わらなくなる。脳と一片のチーズを原初の原子まで単純化することに成功しても、後ろに退ってこの二つの物体それぞれの拡大されたアイデンティティを目に収めない限り、脳にしる、チーズにしる、その本質と目的についての手がかりを得ることはできない。人間は、宇宙の中に内在する実在と接触するにはまだほど遠い。実在は、最小の粒子から壮大な星雲に至る被造物全域の中でその臨在を実証し、魂を持った生命体の存在と、その存在次元でのそれらの業績を確実に覆い包んでいる。魂を持った生命体が存在し、進歩できるのは、一見したところ敵意に満ちた宇宙においての創造の中央舞台にたどり着く条件が完璧に揃ったからなのである。

P27

私たちの知識は、結局のところ、思考プロセスや言語のように象徴的である。私たちが経験するものが、物質的な宇宙が及ぼす影響だろうと、自分個人と仲間個人の感情の結果だろうと、象徴を通してしか、説明することも知識として吸収することも叶わない。物質的世界に内在する実体とそのエネルギー連続体は私たちには理解不可能であり、機械的なモデルによる象徴的な表象と、やはり象徴的な記号論理学に基づいた数学を通してしか理解することは叶わない。悪循環だ。

このことをテストするには、エネルギーの意味を誰かに説明してもらおうとよい。私たち自身を定義しようとするなら、さらに難しい命題になるだろう。そう、人間についてだ。私たちは自分たちのことは確かに分らない。自分の中にある実体の定義はできない。腱を輪ゴムで、骨を木棒で、歯のエナメル質を真珠で、両眼をカメラのレンズというように、私たちが知っている物理的事物で身体部位を象徴できても、こうした事物の中に、私たちの中の実体を象徴できるものはないからだ。それゆえ、自分たちのことは本当に分らない。論理は、扱いやすい象徴になるまで単純化されるなら、一つの現象に直面するしかない。いかなる現象についても、完璧であることを含むその実体を知るために論理が重ねられても、知ることはできないという現象である。ならば、論理では実体を知ることができないことが受け入れられなければならない。理性ある人間が、頭の中で築いた論理という松明をかざしながら、どんな領域だろうと、その中を敢然と前進しても、物事の単なる仕組みの根底にある大いなる現実を知って理解する力は自分にはなかったことに気づくのである。先に述べたように、性急な論理でなく、慎ましやかな直感が、大いなる真理を知るための階段になるように思われる。直感は私たちを組成するものの外側からもたらされる一方、論理は私たち自身の経験を分析した産物でしかない。それでも、長年の努力とそれに付随する敗北から、ある程度の英知が私たちに授けられている。自分たちには実体を明らかにする能力があるという主張を、以前よ

り控えるようになったのだ。驚くべき被造物をより多く発見すればするほど、自分たちの知識はいかにささやかであるかをより強く認識できる者が最も賢い。私たちは薄明かりにいる被造物である。事物についての知識は部分的であり、影響から知識を収集しているだけであり、象徴の中で理解しているにすぎない。

たとえば、人間に影響を間違いなく与える最も強い力の一つである愛といった感情は、科学的証拠や分析などものもしない。また、希望がなければ、母親は子供を育てられないだろうし、農夫は土地を耕せないだろう。その希望をどうやって分析するというのか。同様に、審美眼に欠けている者やコンピューターが、現象や音楽を、美しいとか壮麗であると証明することはできない。しかも、誰が美の存在を否定できるのだろうか。

P28

さらに、恐るべき破壊力を備えた人間という種は感情のはけ口がなくても生存できた可能性がある」と主張している学識者もまだ一部いるが、彼らは人類の中に含まれていても、人間の本質を分かっていない。性的衝動とそれに結びついた感情、特に愛という感情がなければ、人間社会はどれほど長く存続できるだろう。乳幼児が愛されていると、死亡率が最も低く、成人へと健やかに成長できる事実をどう説明できよう。正か誤の内なる感覚についてもだ。この良心がなければ、法がどれほど論理性を完全に期していても、人間の営みの中では機能せず、社会の崩壊を早めてしまう。かつて存在したことが今日判明している文明の中で、すべてに賢き「力」である、大いなる普遍的「知性」によって、愛、正義、慈しみという感情が人間の心の中に築かれることがないまま、興隆できた文明は一つもない。理性がないために地球規模の破壊を引き起こす潜在性がまったくない動物とは違い、人類には機械のように冷徹に計算する理性があるが、感情や、単なる論理以上で格別のものである直感的認識がなければ、生き残れたはずはない。コンピューターは、論理的規則にしたがって数学的議論の価値を決定するかもしれないが、どんなに完璧だろうと、規則を撤廃したりする力も、新たな数学的概念を生み出す力もない。コンピューターをまずまずの腕前のチェス・プレイヤーとして設計できても、それ自体が対戦相手の機嫌を取ったり、しでかした失敗をくすくす笑うことはできない。人間しか、そうしたことはできない。そこに、その恐ろしい破壊潜在性の逃し弁があり、人類の救いがある。

ここで私たち自身にいくつか質問をしよう。動く物体が動かない物体よりすぐれているか。イモ虫は石よりすぐれているか。そして、犬はイモ虫より、人間は犬よりすぐれているか。少なくとも地球上にいる存在の全容を眺めると、知能ある存在が、それとは姿形が違う、動いているか、動いていないかのいずれかである他の存在を、その知能をすべてに及ぼし、支配していることがさらに立証されてこないだろうか。

知能という属性は、人間を、創造全体の背後に控えている大いなる「知性」の力の認識に結びつける一方、知能を持たず、人間とは姿形が違う他すべての存在とはまったく違う一つの現象にして

いる。

「猿よ、足も手も顔も人の形に似ているのに、嵐から身を隠せる住処をなぜ建てなかった？」

「主よ、足と手と顔は、人間に近い存在でありながら、人間に授けられた知恵という大きな恩恵は、私には与えられていないのです<sup>1)</sup>」

そう、知恵である。検査し、認識し、評価し——真実を把握し、最後までそれを信奉する——恐るべき知恵を、良くも悪くも、私たち人間だけが所有している。それゆえ、ヒヒ、狼といった動物に固有の社会や、ミツバチの巣、アリ塚のような昆虫の住居、サイホウドリの巣、もしくは彼らの中に存在する社会や生活様式を、人間社会と比較するための事例として知的に提案することはできない。

動物の社会すべてが太古の昔から変化せずにいる固有の本能パターンに囚われている。このパターンは、彼ら生き物の中にいわば打ち立てられ、調査可能な範囲にある時間をどんなに遡っても変化のしるしはなかったことが実証されている。人間はいかなる本能パターンにも当てはまらない。刻一刻と時間が進むなかであらゆる方向で加速し、人間を本能的な生き物に分類しようとするすべての試みを明らかに無効にする発展を段階的に遂げていったことが、人間には確認されている。知恵という資質と、創造的思考という能力で、人間だけに周囲の環境の支配と抜本的变化を可能にさせた理性が、この地球上の人間以外の生物すべてに欠けている。何かを創造し、組織立った秩序、法則を見つけることに知恵と創造的思考をうまく活用できていること自体が、私たちの理性を折り紙付きで証明し、理性の存在に疑いの余地を残さない。ならば、ある特定の現象の中に歴然と現れている法則と組織立った秩序がより包括的であるほど、それをもたらすに必要な知能はより高く、その背後に控える知性はより大きいはずである。このことが、論理的に理解されなければならない。

にもかかわらず、宇宙意識や至高の存在という概念は、数多くのいわゆる科学者からは、懐疑をもって迎えられている。だが、何らかの現象をその発生過程をはっきり理解していないにもかかわらず、「自然界の」と呼び、はばかりことなく語る人たちが科学の分野では多い。そうした現象を自然界の現象と呼んでも、その呼称を繰り返しているにすぎず、当該の現象を説明してはいないことは歴然としている。科学は、まだ証明されていない法則や原則で大部分が構成されているが、証拠がなくても、こうした法則の様々な状況への適用を禁じていない。ならば、どんな論拠をもって、超自然的<sup>2)</sup>な領域で証拠を差し出せと要求するのだろうか。

---

1. *Kutidusaka-Jataka*, 321.

2. 超人が非人間を示唆するわけでも、超本質的が本質的でないことを意味するわけではないのと同様に、「超自然的」が不自然、非自然を示唆するものではないことに留意。

自然現象だろうと、超自然現象だろうと、特定の現象をある時点で受け入れることは、信仰に純粹に関わることなのかもしれない。人間の心理は、自覚しないまま、いつの間にかに、ほぼ世界共通の度合いにまで、統合失調症になっていた。感受性も知性もない実体がそれ自体とこの宇宙全体を偶発的に創造したと信じられる人は、論理的な人たちの中にひょっとしたらいるだろうか。

科学的な経験をよりどころにすると、こうした問いができるかもしれない。超音波探知機という用途がごく限定された自動化装置が発明されて組み立てられたのは、意図的か偶発的だったのか。壊れないよう注意する必要も修復する必要もなく、際限なく再生可能で効力あるミニチュア版の超音波探知機をコウモリが生来的に備えているのは、意図的か偶発的だったのか。さらに言えば、ミツバチ、鳥、魚についてはどうだろう。こうした生き物すべてのように、人間は大空と大海をより完璧に航空し航行したいと欲するようになった。これら生き物は、無限の理解力を持つ大いなる意識が、創造のベビーベッドに置いた被造物である。その子供たちが学んで進歩し、最終的には、この時空のベビーベッドより大きく成長し、他ならぬ大いなる意識が存在する、進むように運命づけられた大いなる精神・意識の領土に入れるよう、援助するために置かれたものである。それゆえ、私たちが自分たちの知能をわずかでも使うなら、それは当然である。赤々とした燃えさし、燃える岩、冷たく生命を持たない石が、意識が目的とする「知能の台頭」に役立たないのなら、至高の知能はこれらを他の何に役立たせるというのか。「ゆえに、汝は意識的に生きる人生を求めよ<sup>1</sup>」。なぜなら、「地上のみならず、天においても、意識がすべてを所有する<sup>2</sup>」。もし、創造物に「知能の台頭」が起り得ないのなら、至高の存在である創造主をどうして全知全能であると言えるのだろうか。他方、「知能の台頭」が起きたゆえに、意識——私たちが存在する。ならば、至高者が存在しないとどうして言えるのだろうか。

---

1. 『ミリンダ王の問い』（世尊とクータダタ婆羅門との対話）

2. *Buddhist Catena*.

P31

そして究極的に、偶然とはそれ自体、何だろう。私たちが性質や属性を知らないある原因が存在することを表現するために作った用語にすぎないのではないだろうか。ならば、偶然とは、私たちが無知であることの自白にすぎず、現実に存在するはずはない。科学者の経験は、意識的に設計されてかつ、因果関係を明らかにする経験である。それゆえ論理的には、科学者こそが、全知全能の偏在する存在である、一つの大きい理性について仮説を立てる最初の者となり、創造の全容とその無限小の部分すべてに絶えざる関心を抱く者でなければならない。

したがって、宇宙の中の秩序を見極めるなら、「因果の法則がすべてに行き渡る<sup>1</sup>」と釈尊が述べているように、秩序が存在することに疑いの余地はない。ならば、宇宙の法則は、宇宙意識に由来し、その存在を指し示すものでなければならない。釈尊は「意識がすべてである」ことも認めてい

る。そして「宇宙は意識で満ち溢れている」と明言し、「須菩提よ、言葉では宇宙の本当の姿を説明することはできない。煩惱に縛られた凡夫だけが、この恣意的な方法を使うのだ<sup>2</sup>」と言葉が続けた。釈尊が明言するように、その影響や属性を通してしか、至高者の臨在を感じ取ることはできない。「表現できない真実をどうすれば教えられ、聞かせられるというのだ。それは、教えられて聞かされるその属性を通すことで認識されるのだ<sup>3</sup>」と釈尊が述べた言葉の通り、その属性を通さない限り、私たちの切れ味の悪い能力の産物にすぎず、限界ある経験と知識に基礎を置く論理では、条件からして論理的説明の枠外にあり、「無」と同じくらいに、物理的かつ形而上学的観念とは異なる、至高的存在の实在を認識することなどまずできない。だが「無」にしろ、「何か」にしろ、そのような頼りない観念に、至高的存在の实在が左右されることはない。私たちの有限の知性で考案したものでは、無限の知性の定義も分析もすることはできない。こうした考案物は、創造者たる私たちの知性ですら、どういうものを形容できないのだから、ましてや、私たち自身の意識との接触点でしかその存在を感知できない宇宙意識の表現などできるはずがない。だがその接触点で、私たちを含む、物質的、形而上学的な被造物全域に広がるその影響は伺い知れるのである。

---

1. 『サンユッタ・ニカーヤ』12, 20, 30. ヒンズー教徒の間で当時一般化していた擬人化された絶対者の概念に遺憾ながら誤り導かれていた初期仏教徒には、すべてに行き渡るカルマの法則とその作用についての釈迦の教えと、以下に引用するクリシュナの教えが、概念上、同一であることが分からなかった。「主君(個我)は、世人(身体)の行為者たる状態も、行為も、行為の結果との結合も作り出さない。ただ、本性のみが働く」『バガヴァッドギータ』V.14. 至高者を気まぐれとは非難できない。

2. 『ヴァジュラ・サットヴァ』xxx(統合原則).

3. 『マディヤマカ・ヴィッティ』264 頁参照. 『ケーナ・ウパニシャッド』I.3 も参照「そこには目も行かず、言葉も行かず、心も行かない。われわれは知らないし、理解もできない。これをどうやって教えられるというのだ」

P32

途方もなく驚異に満ちた被造物の研究者たちは、次の行動が予測できない類人猿の偶然の産物として私たちが創造されたと認める覚悟が同等にできていない限り、最上級の知能は被造物すべての背後に控える大いなる原因に帰すると必ず考えている。そして、技術工芸の実践のように、物理的領域で私たちの取るに足りない頭を働かせるには、意志の行使が必要とされる。意志が心理を個性を示している。宇宙意識と私たちの意識の接触点の数が多ければ多いほど、極小微粒子から壮大な星雲に至る、私たちの周囲に見出される宇宙意識の影響を研究すればするほど、至高の知性と、抗しがたい命令意志を備えた一つの実在に、創造のすべてが基礎を置いていることを受け入れる方向に、私たちは一層に導かれていく。もちろん、このことは、雷と嵐を何らかの神が機嫌を損ねているしるしだとみなした原始時代の人たちのように、何でも至高者に結びつけ、私たちが当惑するものすべてをその何か特別な介入によるものとみなすべきということではない。あらゆる被造物が明確な目的意識の下に秩序をもって設計され、生命体の成長がその秩序と設計を実証していることに気づ

くべきことが示唆されているにすぎない。設計された秩序が法則である。法則は「立法者」の臨在を指し示すことに役立つべきなのである。

だが、至高的存在は無慈悲な全能者ではない。その法則は恩恵で和らげられ、自然界に無比の法則をもたらすことと同じくらいに、喜びと善意をもたらすことに関心が払われている事実を証している。実際、厳格合理的な法則に従わない例外と逸脱があること自体が、至高的存在がその領土の運営において行使する主権と束縛されない意志への最大の賛辞である。そうした例外のうち、地球上の生命にとっておそらく最も大事な要素である水を一つの事例として取り上げ、考察したい。式量 18 の水に対して式量 17 のアンモニアは摂氏マイナス 33 度まで、水と近縁関係にある硫化水素は摂氏マイナス 59 度まで温度を下げて、水は気体状を保つ一方、常温では液体として存在する。驚き的事实だが、低温では膨大量の酸素を吸収する力にも驚かされる。最大密度になる摂氏 4 度で、大洋、河川、湖沼は液状を保ち、凍結していく過程で、大量の熱を放散する。氷にも固有の重要な特質がある。水より密度が低く、大洋、河川、湖沼の表面にとどまるため、水中の生命すべてが長い冬を通して保護される。

P33

乾いた土地は何の例外も示さないが、それでもやはり、宇宙意識の驚くべき側面の数々を示している。大半の地上の生き物に安定した基盤環境を提供しているのは別にし、土はミネラルを供給する。ミネラルは植物に吸収された後にさらに動物の体内に入ること、その生命を維持する成分に変換する。文明は地表近くに金属があることで建設が可能になる。大気も驚きである。人間が見通して宇宙を調査できるほど希薄でも、秒速 30 マイルの勢いで大気圏内に突入する流星による日々の砲撃を阻止し、地表の生き物すべてを全滅から守れるだけの密度を有する。これらの事柄について「どのように」が学ばれて理解されていても、「なぜ」かはまだ探求の途上にある。

解き明かすことができない大なる神秘についてを知りたい、と常に願う人がいるかもしれない。その願いのすべてである無限の英知と無比の光輝の顕現は、その最も簡略な姿でしか、私たちの鈍い能力では理解できなくても、圧倒的な知能を有し、全知全能である一つの存在が臨在することを明示する。その存在とは、釈尊が「存在の根拠」としか言葉を思い付くことができなかった——絶対者である。当時の人々が救済を求め仰いだ人造の多数の神々と迷信的な儀式に囲まれた中で、始まりも終わりもなく、生じず、起源を持たず、創造されず、形成されていない、原因なき原因から放散する、一つの完璧で永久的な法に従って展開する無限の創造のビジョンを人々に示すことが、釈尊だけに課せられた務めであった。

「本質の理解は難しく、真理は簡単には悟れない。すべてのものは無であることを知る者が欲望を制し、正しく見る者にはすべてのものは無になる。比丘たちよ、生じたものでなく、起源がなく、創造されず、形成されないものがある。比丘たちよ、この生じたものでなく、起源がなく、創造されず、形成されないもの<sup>1</sup>がなかったら、生まれ、起源を持ち、創造され、形成さ

れるものの世界から逃れることはできないだろう。比丘たちよ、この生じたものでなく、起源を持たず、創造されず、形成されないものがあるゆえに、生じ、起源を持ち、創造され、形成されたものからの出離が覚知されるのだ。

依存する者には、動揺がある。依存なき者には、動揺は存在しない。動揺が存在していないとき、安息がある。安息が存在しているとき、誘導は有りえない。誘導が存在していないとき、帰る所と赴く所は有りえない。

---

1. 『バガヴァッドギータ』XII.3.参照。「……不滅で、説明され得ず、非顕現で、至る所にあり、不可思議で、揺るぎなく、不動であり、……」。Ibid.,X.12; Ibid., IV.6.

P34

帰る所と赴く所が存在していないとき、死滅と再生は有りえない。死滅と再生が存在していないとき、まさしく、この世になく（此岸はなく）、あの世になく（彼岸はなく）、両者の中間において何もかも存在しない。これこそは、苦しみの終極である<sup>1)</sup>

したがって、釈尊が上の引用文ではっきりと表現しているように、「[原因なき]であるために)依存せず、揺動を超越する絶対者は、時空の連続体である有限の宇宙のどこにも存在しない。いついかなる時も、他の原因に依存しないものは宇宙には存在せず、依存するということは変化(揺動)を受ける運命にあるということである。ところで、上の引用文を涅槃を言い表したものとみなしてはならない一方で、涅槃は「彼岸<sup>2)</sup>」と言及されることがある。

「婆羅門あり。もし、止と観との二つの法において彼岸に達しなば、この智者にすべての繫縛は解けん<sup>3)</sup>

しかし上の句のどこにも、彼岸が「存在の根拠」であると釈尊が認めているしるしはない。さらに言えば、涅槃とは、生死という迷いの世界を意味するサンサーラ<sup>4)</sup>の対極にある境地にすぎない。たゆまぬ精進の結果、到達する境地であるため、因果関係（カルマの法則）の作用に完全に左右される。

不確かで偶発的なものと、永遠なるものは、直接的にも間接的にも、結びつきはないことを意味する「此岸はなく、彼岸はなく、両者の中間において何もかも存在しない」という表現が、絶対者を示していることは明白である。もしくは、釈尊が別の場所で述べたように(47頁参照)、「絶対的なものが、一切の既知のものとの関係から外れたものでなければならぬのならば、その存在は既知のいかなる推論によっても立証することはできない」。そして、釈尊が述べていたとおり、その影響によってしかその存在を示すことはできない。

ヒンズーの教典でも、絶対者に関する同じ推論が述べられている。絶対者には、いかなる思考をもっても、どの世代になっても近づくことはできない<sup>5</sup>。釈尊はさらに、他すべての化身と同様に、最大限にはっきりした言葉で、取るに足りない頭の私たちは絶対者に近づけないことと、絶対者は存在しないという誤った確信を同一視すべきではないと警告している。それゆえ、永遠の实在である絶対者を常に念頭に置きながら、世界は本質的に実体がないと教え、その束縛から解放されるよう、私たちに忠告している。

- 
1. 『ウダーナ』 v.81. 『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』 III.9, 10 も参照。「この方より高いものはなく、この方より小さいものもなく、この方より大きいものもなく、この方によって天に打ち立てられた一本の樹木のように、その者はたたずみ、この宇宙全体が満たされている。この世を超えたものには、形も苦しみもない。そのことを知る者たちは不死となるが、それ以外の者たちは苦しみに向かうだけである」
  2. 『ダンマパダ』 v.348.
  3. 『ダンマパダ』 v.384.
  4. 条件付けされたものごと、存在それ自体。『ランカーヴァターラ・スートラ』 2.XVIII も参照。
  5. 『リグ・ヴェーダ』 X.129。「至高者には特質も属性もなく、存在(Sat)も非存在(Asat)もしない」

P35

「容易く信じるのがなく、創造されざるものを知り、あらゆるしがらみを断ち切り、あらゆる機会に終止符を打ち、あらゆる欲望を捨てた者こそ、実に最上の人間である<sup>1</sup>」

次の思慮深い言葉の中に、釈尊が唯一の息子の羅睺羅（ラーフラ）に繰り返し説き勧めている姿が見える。

「とても甘くて愛おしい悦楽の五つの紐<sup>2</sup>を捨てよ。信仰に導かれ、すべての病を終わらせるために、家を出よ。友にするに値する友を選び、遠き場所に宿を求め、閑にして、食を慎むべし。見かけによらずして見る目を育てよ。驕り高ぶることなかれ、驕るとは何かを理解せよ、されば、そなたは平穩無事な道を行くであろう<sup>3</sup>」

釈尊は、永遠なるものに向かう道に踏み出すために、不確かな物事すべての幻想を破壊するように、と私たちに強く促している。諸行は無常であり、苦しみのうちに終わるだけかもしれない。いつまでも平安で、慎み深い平穩な至福の住居として想像されている永遠なるものと、常に変化し、不確かさに覆い包まれた俗世を比較するうちに、私たちは無常の物事すべてへの忌避感で満杯になる。どれ一つとして、不安を払うことも、自己に確証をもたらすこともできない。そしてついに、本質的に無常なこの現象界への厭忌が私たちの真我を最終的に開け放ち、条件づけを受けない絶対者の認識へと向かわせる。幻想の自己は消え、絶対者だけが私たちの心の視界に入る。

知られることがなく、近づくことができない絶対者に、釈尊が舞い上がらばかりの喜びを振り向けている。

「わたくしは幾多の生涯にわたって生死の流れを無益にめぐって来た、——家屋の作者をさがしもとめて——。あの生涯、この生涯とくりかえすのは苦しいことである<sup>4]</sup>

「幾多の生涯」とは、現実だと信じてきたものは現実のふりをしばしばする幻想だったことと、その事実を認めることで味わう痛みを「知る」ために、新たな認識への切り替え（生まれること）を繰り返してきたということである。

---

1. 『ダンマパダ』v.97. 『ダンマパダ』v.374 も参照. 『ケーナ・ウパニシャッド』i.6 も参照. 「意識では考えられないものだが、それによって意識が考えることができるもの。それは大霊ブラフマンしかいない。(人間が)ここで憧憬するものではないことを知るがよい]

2. 断ち切るべきこれら五つの要素は、貪、瞋、痴、慢、疑が相当。衆生を色界・無色界に結び付ける、除去すべき五つの煩悩は、色貪、無色貪、掉挙、慢、無明の五上分結が相当する。

3. 『スッタニパータ』vv.337, 338, 342.

4. 『ダンマパダ』v.153.

P36

幻想を斬り裂き、その実体は「無」であることを暴露した釈尊の探究心には、一切智が絶対者<sup>1]</sup>から授けられていた。深遠で計り知れない顕示者の法則——仏陀の出現——に従っての作用だ。そして釈尊は、絶対者（家の作者）の存在に気付く喜びを表現し、この気づき自体が涅槃という境地への到達であると認識した。

「家屋の作者よ！ 汝の正体は見られてしまった。汝はもはや家屋を作ることはないであろう。汝の梁はすべて折れ、家の屋根は壊れてしまった。心は形成作用を離れて、妄執を滅ぼし尽くした<sup>2]</sup>

自己についての幻想は消え、永遠なる者が存在することに気付く。しかし、涅槃と絶対者を同一視すべきではない。涅槃はそれ自体が、業を形成するサンサーラ<sup>3]</sup>と実体的に分離不可能であり、なおかつ、絶対者から条件づけをされていることに起因する。

「マハマーティ、さらに言えば、生死の区別から生じる苦しみを恐れて涅槃を求める者は、生死と涅槃は互いに切り離せないことを知らず、区別されるものすべてに実体はないと見るため、涅槃は感覚と感覚領域（五感）が将来消滅するところにあると想像している<sup>4]</sup>

——涅槃とサンサーラは<sup>5]</sup>単一の実存の異なる側面にすぎず、涅槃もこの現世で経験できる。

「家で着座するのも、森に行くのもやめなさい。

どこにいても意識を認識しなさい。

完全で完璧な悟りに意識がとどまるとき

サンサーラはどこにあり、涅槃はどこにあるのか<sup>6)</sup>

- 
1. 『ヴァジュラッチェーディカー』 176,11a.(絶対者は聖なる人々を高めるゆえ)
  2. 『ダンマパダ』 v.154. 『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』 v.6 も参照「ウパニシャッドとヴェーダの神秘の中に隠された精神があり、創造神であるブラフマンは自らの創造主として自らを所有する。神の精神を目にするのは、神々と古えの時代の先見者たちであり、彼らは神とともにいると不滅となる」。
  3. サンサーラ——カルマの形成要因、条件付けされたものごと、衝動、素因 (サンスカーラ)。
  4. 『ランカーヴァターラ・スートラ』 2.XVIII.
  5. *Saraha-dohakosa*. v.103.
  6. "na samsarasya Nirvana kimcid asti visheshanam"(実際のところ、サンサーラもニルヴァーナ、涅槃、も存在しない。両者の間に違いはない)。『ダンマパダ』 v.89, 『バガヴァッドギータ』 V.23 も参照「まさにこの世で、身体から解放される前に、欲望と怒りから生ずる激情に耐え得る者は、専心した幸福な人である」

P37

涅槃は、私たちの中の実体が、貪欲、幻想、奢りのすべてから浄化されることで、不滅の實在が入る容器になるときに到達できる理想的境地である。失ったり変化したり破壊されるかもしれないものを手放すことで、失うことを危惧したり、怖れることはなくなり、永遠の平和を経験する。

「この人生において、その者は和らぎ、冷静になり、ブラフマンとなった自己との至福の体験の中に留まる<sup>1)</sup>

釈尊が不滅への扉を私たちのために開くと声高らかに宣言する時に言及するのが、この意識上の境地である。化身すべての約束であり、宗教の中心テーマであり、人間が活動を開始して以来、その探究心で求めてきた最も重要な境地だ。この約束より他に、人類を動かす方法は見出されていない。この約束が法(ダルマ)の中で確約され、それによる安息が保証されていることを見極められない人たちは、本物と、幻影である無常の世の区別ができていない。

一部の人々が釈尊の法は「無神論」であると申し立てているのは、バラモンたちが擬人化して承認したヒンズー教の神々への崇拝に対する釈尊の手厳しい非難にこだわっているからに思われる。当時のインドでは、バラモンたちが、自分はあるとあらゆる親交を至高者と結んでいると主張し、その本質、姿、命令について詳細に知っているというあり得ないことを断言し、言い広めていた。

その様相に常に直面していた釈尊は、言葉と模範をもって、神の擬人化に断固として立ち向かった。人間が頭の中で考えた至高者であり、擬人化されて当時のバラモンと大衆の中に広まっていた絶対者やブラフマンの概念に対する釈尊の説話が、空虚な想像の産物である偶像たちの粉碎にすべて向けられたことは明白だった。半人化された神々を凌ぐ自らの先天的な卓越性を示すためでもあった。

この点に関し、釈尊がバラモンたちと対峙した時の模様を伝えるエピソード<sup>2</sup>の一つを以下に紹介する。釈尊が神の擬人化を批判していたことを明確にしてかつ、ウパニシャッドの非顕現のブラフマンを絶対者であると明言しながら、宇宙の営みの真因であるカルマの法則を信頼するの必要を同時に強調したことに、私たちの理解が強まるのに役立つだろう。

---

1. 『マッジマ・ニカーヤ』 I,344.Ibid.,11.159. 『アングッタラ・ニカーヤ』 ii.211 も参照。

2. 『ディーガ・ニカーヤ』 I,235(テーヴィツジャ・スッタ)。

P38

「あなた方は、すべての道が正しいと思いますか」と、世尊が二人のバラモンに質問を投げかけた。二人は声を揃えて答えた。「はい、尊者ゴータマよ、私たちはそう思います」

「しからは、教えてください。ヴェーダに精通したバラモンの誰かが、ブラフマンと対面したことがあるでしょうか」

「それは否です」

「しからは、ヴェーダに精通したバラモンの教師のうち誰かが、ブラフマンと対面したことがあるでしょうか」と世尊が改めて問うと、二人のバラモンはまたしても否と答え、「死すべき者が不死なる者を理解することはできないのですから、ブラフマンを目にしたり、理解することがどうしてできるでしょう」と声を張り上げた。そこで、世尊は、一つの例を持ち出された。

「それは、ある男が四つ辻で高楼へ上るためのはしごを作っているようなものです。人々は彼に問います。『良き友よ、君は、その高楼へ上るためのはしごを作っているが、その高楼はどこにあるのかい。東にか、南にか、西にか、北かい。高いのか、低いのか、あるいは中くらいなのか知っているのかい』と。当人は質問に『知りません』と答えます。すると、人々はこう言うでしょう。『しからは、良き友よ、君は、自分では知らないし、見てもいない高楼へ上るためのはしごを作っているんだね』。当人は『その通りです。はい、知りようもないことであることは、自分で分かっているのです』と答えます」。この男をどう思いますか。筋が通らない話しをしていると言えませんか」。二人のバラモンは「尊者ゴータマよ、実に筋が通らない話です」と答えた。世尊は続けた。「しからは、バラモンたちは、『私たちは、私たちの知らない、見たことのないものとの融合への道をあなた方に示しています』と言うべきです。これが、バラモンが伝承してきたことの本質です。そのような仕事は無益ではないですか」。バラ

ドヴァージャが「そういうことになります」と答えた。

世尊がこう仰せになった。「このように、バラモンが三つのヴェーダに精通してしようと、知ることも見たこともないものと一体化する道を示すことは不可能です。一列にならんだ盲人がくっつき合っているようなものです。一番前にいる者も、真ん中にいる者も、最後尾にいる者も見えない。私は、三つのヴェーダに精通したバラモンが話すことは、盲人が話すようなものだと思うのです。滑稽でいて、単なる言葉しかなく、無益で空虚です」

---

1. 『バガヴァッドギータ』 XV.15.「……私はまた、全てのヴェーダにより知らるべき対象である。私はヴェーダの終極の作者であり、まさにヴェーダを知る者である……」。

P39

「さて」と世尊が言葉を加えた。「ある男が川の土手に来ました。対岸側で用事がいくつかあったので、渡りたく思っていると仮定します。そこで、対岸がこちら側まで来るように呪文祈禱して召喚することにしたら、その効果で対岸がやって来ると思いませんか」

「そんなことはあり得ません、尊者ゴータマよ」という返答に、世尊は仰せになった。

「しかし、これがバラモンの方法です。人間を資質から、本当にバラモンにする実践を省き、『われらはインドラを招請する、われらはソーマを招請する、われらはヴァルナを招請する、われらはブラフマンを招請する』と唱えます。こうしたバラモンたちが、召喚、祈禱、賞賛によって、死後にブラフマンと融合するなど、まず不可能です」

世尊は言葉を続けた。「さて、バラモンがブラフマンのことをどう言っているか、教えてください。彼の心は欲望に満ちていますか」。二人が否定すると、「ブラフマンの心は悪意、怠惰、慢心に満ちていますか」と世尊が尋ねた。「それは否です、彼はこのすべての反対です」という答えに、「しからは、バラモンにはこれらの悪徳がないのですか」と世尊が続けて問われた。「それは否です」とヴァセッタが否定すると、世尊は仰せになった。「バラモンは、五妙欲なる五つの感覚的誘惑に屈し、五つの妨げである、欲望、悪意、怠惰、慢心、疑惑に絡めとられています。自分たちの性質と最も異なるものに、どうして融合できるのでしょうか。ゆえに、バラモンの三つの知恵とは、水なき砂漠、道なき密林、絶望的な荒地なのです」。

ここに長々と引用した会話から明らかなように、釈尊は非顕現のブラフマンの信用も、絶対者の信用も失墜させていない。バラモンたちが自分たちには大衆を凌ぐ優越性があると断言するために描けると主張して作り上げたブラフマンの諸々の姿と属性を価値なきものにしたにすぎない。釈尊は他方で、自らはブラフマンに至る道を知っていると臆せず述べる。これは、バラモンには不可能であるという宣言に等しい。

世尊がこのように仰ると、「尊者ゴータマよ、釈迦牟尼はブラフマンとの融合に至る道を知っていると聞かされています」と二人の内、一方が語った。そこで、世尊はこう仰った。「バラモンたちよ、マナサーカタで生まれ育ったある男についてどう思われますか。その男はこの場所からマナサーカタまでまっすぐな道があることを疑っているでしょうか」「尊者ゴータマよ、それは否です」。その答えに対し、世尊は述べられた。「ゆえに、如来はブラフマンとの融合に至るまっすぐな道を知っているのです。如来はブラフマンの世界に入った者としてその道を知っています。如来の言葉に疑いの余地はありません」。

上記した会話から、三つのことがはっきりしてくる。まず、非顕現のブラフマンは存在しない、とは一言も明言されていない点である。だが、バラモンたちはブラフマンを想像することができない。自分たちの所業によって、自分たちが描けると主張するブラフマンとは、まったく似ても似つかぬ有り様になっていることを、自ら証明していたからである。

P40

次に、自らの行為によってと、如来になったことで、ブラフマンとの融合に至るまっすぐな道を示すことができるのは、釈尊であった。如来とは、神の世界であるブラフマンの世界の居住者だからである。最後に、釈尊が知っていると述べるブラフマンとは、釈尊が明言した言葉によれば、バラモンたちには知るべくもなかった非顕現のブラフマンである。もし、非顕現のブラフマンが存在していなかったり、釈尊がそれに至る道知らなかったなら、この会話も、釈尊による明言も、核心を欠いたものになっていただろう。釈尊もバラモンたちも、どちらの言い分も間違っており、あるいは正しかただろう。どちらもが自らの想像にまたがって自論を主張し、終わりなき無益な会話の中で全速力で疾走できたからである。それゆえ、釈尊がバラモンがつくりあげたブラフマンの概念を批判した時、絶対者である非顕現のブラフマンには言及していなかったことを理解する必要がある。一方で釈尊は、バラモンたちにこうしたことを教えながらも、絶対者の実在を理解することを概念的な会話の主題にすることはできなかった。これは、人生を生きていく中での直の経験を通じて、各人が知るべきことである。しかも、実在としての絶対者の認識に達するために、人生というこの道を正しく踏破する方法を彼らに示す<sup>1</sup>力があつたのは、釈尊の経験だけだった。

非顕現のブラフマン、創造されていないもの、至高者、神、もしくは絶対者と呼ばれていようと、この永遠なる実在が、神の顕現者（仏陀）という自ら創造した法則に従い、自らを仏陀たちに明らかにすると、今度は、仏陀たちが自らの存在全体の中に真理（ダルマ、法）を完璧な鏡のように反映させる。

---

1. 『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』 III.21 参照。「無限の大霊があらゆるものの中にいることを私は知っている。常に時を超えるのは誰か。生命の誕生と再生を超えた永遠なる者とブラフマンを愛する者たちが呼んでい

る大霊を私は知っている」

P41

「そして、万物が一つの真髄<sup>1</sup>から生じるように、それらは一つの法則に従って発展し、一つの目的、すなわち涅槃に向かうように運命づけられている。カッサパよ、万物が一つの真髄に由来し、一つの法しかないことを、あなたが完全に理解し、その理解に従って生きるとき、涅槃があなたに訪れるのだ。したがって、真理が一つしかなく、二つも三つもないように、涅槃も一つしかない。如来はすべての存在に同じでありながら、すべての存在が異なるのに合わせて、態度が異なるだけである。しかし、カッサパよ、如来は、救済を本質にし、平安な涅槃への到達が目的である法を知っている。如来はすべての存在に同じであるにかかわらず、一人ひとりが必要としていることを知っている。すべての存在に同じように自分を現すことはない。一切智で知り得たことすべてを一度に余すことなく伝えるのではなく、様々な存在の気質に気を配っているのだ」

ここには、釈尊がすべての大宗教の四つの基本的側面を簡潔に認めていることが記されている。すなわち、万物は一つの真髄から放散し、ダルマ、カルマ、宗教、どんな名称で呼ばれようと、一つの法の支配を受けている。この一つの法の教えに厳格に従うことで、言葉にならない至福の境地、涅槃に私たちは到達することができる。万物に浸透する光と喜びのオーラを放つ涅槃は特定の階級や人間だけが到達できるものではなく、神の法に従って生きてきた人すべてに開かれている。その法を伝え教える如来、すなわち仏陀という完璧な教師は、意味を把握する能力が一人ひとり違うことを知っており、各人の理解能力に完全に合わせて法を明らかにする。ここには、明確な四つの概念が含まれていることがわかる。①万物の真髄は一つである。②この真髄から、「一つの法」が放たれ、被造物すべてを覆い包む。③このことを知り、知り得たことに基づいて要件に従った行いをするので、無知から生じる苦しみのすべてを終わらすことができる。④そのためには、必要要件が述べられた法を説く教師（仏陀）を認めるしかない。仏陀は、この法を受け取り、法に従った行いをする個々人の能力に合わせて、法を伝える。

さて、絶対者ブラフマンから釈尊が独立していることを苦心して強調し、釈尊が自らの使命を明言する場面でよく使う言葉「ブラフマチャリヤ」が、ブラフマンから釈尊に授けられた霊的指針や指示を示唆するものであることを否定する人たちがいる。しかし彼らは、自分たちの学派が掲げる概念が釈尊自身の発言に矛盾していることを反証できないでいることを、伝えておく必要がある。

---

1.これだけでなく別の経典(MN,I,137-140)でも、真髄を否定するものすべてに、釈尊がはっきりと反論している。真髄(Asti)は『ウパニシャッド』(カタ,IV,13,マイトリー,IV,4他)でも同じように言及されている。『リグ・ヴェーダ』X.81.3.も参照。「存在するものすべては一つであり、そこから全世界が生み出される」。『ヤジュル・ヴェーダ』XXXI.19。「本質

的に顕現不可能なものが中で動き回り、生成の主が鮮やかに繰り返し自らを顕現させ、堅固不拔の者が四方から原初の原因の住処に視線を送り、その住処に宇宙の諸々の世界が存在する」

P42

世尊はこのように語られた。「ヴァーセッタよ、如来に対する信仰が定まり、根が生え、確立され、確固としている者は、つまり沙門にも、バラモンにも、デーヴァにも、マールにも、ブラフマンによっても、あるいはこの世の誰によっても揺り動かされない信の持ち主は、『私は世尊の嗣子であり、世尊の口から生まれ、法から生まれ、法によって形成され、法の継承者である』と言うかもしれない。それはなぜか、ヴァーセッタよ。法身も、そしてまたブラフマンの身体も、そしてまた法なる存在も、そしてまたブラフマンなる存在も、如来の同義語ゆえである<sup>1)</sup>。

上の引用文だけでも、彼らとその矛盾にどう直面しているかを知る手がかりが与えられているはずである。ここには、ブラフマンに関してはっきり区別される二つの概念が含まれている。一つが、インドラやアグニのようなヒンズー教で祀り上げられている神々の一人<sup>2)</sup>として、ブラフマンが言及されている。ヒンズー教徒によって徹底的に擬人化されたため、仏陀、釈尊が、自らの指示を必要とするまで降格させ、真の弟子なら彼らと同じ地位に達するだけでなく凌駕さえできる、と述べた存在が、これらの神々だった。実体があったとしても、仏陀、釈尊によって、天使を始めとする靈的存在と同格にされている。二つ目は、法(ダルマ)と如来と同一視されている(ブラフマンの身体、ブラフマンなる存在は、如来、法身、法なる存在、と同義語)部分である。そこでは、言葉で表現できない絶対者、非顕現のブラフマン、であると言及されている。

彼らは、一般に通用している擬人化された神々の一人として概念化されているブラフマンと、バラモンを含む誰もがまったく想像できず、その存在を釈尊が肯定し、如来だけが知っている非顕現のブラフマンを混同している。両者の区別ができないまま、擬人化されたブラフマンから釈尊が指示されるはずはないという自分たちの理解に基づき、釈尊が自らの使命とダルマを説明する際に頻繁に使っていたブラフマチャリヤ<sup>3)</sup>には、その言葉からして明快なその意味(ブラフマンに従う)はない、と断言し、その見解に固執している。彼らは、非顕現のブラフマンを釈尊がはっきり肯定していることと、釈尊が悟りを開いて如来になったのは、本質的に「絶対者から高められたこと」によるものであり、自己努力の段階的プロセスによるものでも、人間や神々の誰かに師事するからでもないことを理解していない。それどころか、大きく誤解しているため、降格とは矛盾する、ブラフマンと親しくし、一体化していると明言する釈尊の発言の真意を説明することができない。

---

1. 『ディーガ・ニカーヤ』 III.84.

2. デーヴァ. 光り輝く存在, 天使, 神々の中の一人も意味する.

3. その行為者がブラフマチャーリー. 人生の最初のアーシュラマ, すなわち学生期にいる青少年のバラモン. または、

禁欲の意志を固めた仏教者。

P43

神の真の化身が到来したのは破壊のためでない。神の法を成就することだけが目的だった。「私は、過去の諸仏がたどった古道、古径を発見した。それが私が従う道だ<sup>1</sup>」と釈尊は宣言する。しかも、ブラフマンへと導く古えの道を思い起こさせた過去の時代のバラモンたちへの釈尊の賞賛<sup>2</sup>の言葉が経典の至るところで見出されることから、釈尊の時代よりはるか昔に編まれた初期のウパニシャッドの中で解脱者について言及している「遠くまで及ぶ古えの細道をたどることで、ブラフマンの求道者は昇り、解き放たれる」<sup>3</sup>という言葉、釈尊が意識していたことは疑いようがない。それゆえ、法(ダルマ)=ブラフマン=仏陀=アートマン「真我」というように、これらが等式で結ばれ得ることを、釈尊は示唆している。

仏陀はブラフマンの化身である<sup>4</sup>。太陽を完璧に映し出す完璧な鏡に喩えられる。

「如来は、欲界・色界・無色界の三界の本当の相を見通すことができる。出生も死亡もなく、この世での存在も滅度もない。実在でもなく虚無でもなく、不変でもなく多様でもない。このように如来は、三界に住む人間の見方を超えており、ものごとの本当の相を明らかに見きわめて見誤ることがない<sup>5</sup>」

仏陀、すなわち如来は、非顕現のブラフマンの世界（無色界）の住人であり、世界の福利のために働くために、彼岸から此岸に越境する。

---

1. 『サンユッタ・ニカーヤ』 II.106. 『バガヴァッドギータ』 IV.2 も参照。「このように、王仙たちはこの伝承されたヨーガ(ダルマ、法)を知っていた。しかしそのヨーガは、久しい時を経て失われた。おおアルジュナよ。私は今、まさにこの古えのヨーガをあなたに説く。"Sarovpanishado gavo dogha Gopalanandana; Partho vatsasudhirbhokta dugdhem Gitamritam mahat."]. この教え(ダルマ)はヴェーダの古い古い教えであり、新しいものではない。

2. 『サンユッタ・ニカーヤ』 IV.117. 『イティヴッタカ』 (28,29)も参照。「諸物が教えたこの(古"いにしえ")の道に従う者たちはマハトマと呼ばれる」

3. 『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』 IV.4.8.33.

4. 『ディーガ・ニカーヤ』 III.84.(Bhagavato chi …… dhammajo …… Dhammakayo iti pi brahmakayo iti pi, dhammabhuto iti pi). Ibid.,II,27,8; 『サンユッタ・ニカーヤ』 III.83 (Brahmbuta……buddha). Ibid.,II,221;III,120 and 『アングッタラ・ニカーヤ』 v.4.10,115.

5. *Lotus-Sutra*, Ch.XV.ここでいう三界の概念はヒンズー教に由来する。『バガヴァッドギータ』 III.22 を参照。「アルジュナよ、私にとって、三界においてなすべきことは何もない……」。『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』 I.II. 「人が神を知るとき、その人は自由になる。苦しみは終わり、生も死もはや経験することがない。内なる結びつきの中で肉体的世界を超えたとき、第三の世界、霊の世界が見出される。この世界ですべての力は……」。『バガヴァッドギータ』 IX.19 も参照。「私は有であり非有である」。

「ブラフマチャリヤ<sup>1</sup>がなされるのは、涅槃の境地に入るため、彼岸の涅槃に向かうため、涅槃で極みに達するためである<sup>2</sup>」

さらに、釈尊自身、前世ではサッカ(インドラ)であったとしばしば主張していたことが、『ジャータカ』から分かる。インドラがアグニのために行動するように、サッカはニカーヤ<sup>3</sup>において、釈尊の守護者としての行動を取っている。別の箇所と以下の句中では、釈尊はインドラとして取り上げられている感がある。言うなれば、釈尊がしばしば言及していたように、非顕現のブラフマンは、ヒンズー教の様々な神々とは完全に別格な存在ということである。この枢要点を誤って理解し、その神々と――

インドラは、用心深さによって、神々の支配者になった。警戒心は称賛され、軽率な行動は常に非難される<sup>5</sup>。いずれかの神もガンダルヴァもマーラも、ブラフマンとともに挑んでも、このような者(自らに打ち勝った者)の勝利を敗北に変えることはできないだろう<sup>6</sup>。ジャンブ川の金貨のようなこの者を、誰が責めるに値するだろうか。神々でさえ彼を賞賛し、ブラフマンでさえも彼を賞賛する<sup>7</sup>。

――非顕現のブラフマン、すなわち「素晴らしい御方」である絶対者が、どうして区別し損ねられていたかが理解しがたい。その実体を知ることは、釈尊自身の仕事、救済、に不可欠であった。

「これ自体がブラフマチャリヤのすべてである。すなわち、素晴らしい御方との友情、交際、一体感である。私が素晴らしい御方と友情を結んでいるゆえに、誕生を免れない存在は誕生から解放され、老いと腐敗、死を免れない存在はそれらから解放される。ゆえに、そなたたちは修行しなければならない。私は素晴らしい御方の友となり、交際し、一体化する者となる<sup>8</sup>」

釈尊が絶対者(非顕現のブラフマン)の存在を断言していることと、ヒンズー教で祀られている神々(ブラフマン、インドラ、ヴァルナ)を認めていることの区別がつかないまま、こうした誤解が仏教界全体の中で広く蔓延っている現状を考慮すると、様々な学派の間で繰り広げられている議論は決着できそうもない。

---

1. ブラフマンに従うこと(――神とともに歩むこと)

2. 『サンユッタ・ニカーヤ』 III.189.

3. 『ヴェサンタラ・ジャータカ』

4. 『マジマ・ニカーヤ』 I.386.

5. 『ダンマパダ』 v.30.

6. Ibid., v.105.

7. Ibid., v.230.

8.『サンユッタ・ニカーヤ』I.88-89. See “*Buddhism: The Wisdom of Buddha, Hinduism and Buddhism, and Buddhist Texts Through the Ages*”.『バガバッドギター』IX.18も参照.

P45

しかも、根幹に関わるこの重大事について様々に違っている見解は、釈尊自身の神性、魂意識について釈尊が取る立場、その存在、転生という、釈尊の教えの他の根本的な側面にも広がっている。涅槃、ダルマ、カルマについて釈尊が編み出した概念も、その影響から免れない。それゆえ、様々な学派が史実上の年代を根拠にして自分たちの学説の優勢を主張しても、宗教の躍動的本質である生命力の決定づけ要因にはならない。こうした状況においてのそれは、住居跡の調査でいつの時代かが判明した古代文化の価値観と構造を決定しようとする試みに似ている。考古学は無生物を扱い、遺跡から知り得たことを知識として体系化するが、どの文化においても生じる価値観と構造は信仰に由来する。信仰とは人間の心の中で拍動する生きたものであり、解釈を前提にする。上記した根本的な事柄において、パーリ仏典から引用した意味明確な文章において、この經典の擁護者がいとも簡単に道に迷うなら、同等の重要性を持ち、仏教の殿堂を支える他の根本的な文章について、どう言えばよいのだろうか。釈尊の教えの解釈を独占する学派はない。そして、混乱と分裂という難問が、今日のダルマとサンガを悩ましている。

法という教えの解釈とサンガの分裂を停止させ、混乱を収束し、様々な学派の間に秩序と和合をわずかでも回復させようとしても不可能だろう。悲しき真実だが、本書が執筆されている今でも、分裂は容赦無く広がっている。いかに善意からだろうと、対処指示がいかに機敏に出されようと、人間の努力では、緩和はおろか、釈尊の信奉者を苦しめている討論と分派の阻止は望むべくもない。そのため、この悩ましき症状は仏教界に遍在するが、同じ症状が他の古来の宗教すべての構造の中にも例外なく見出されている。宗教団体の病というべき分裂の物語は今に始まったことではない。慢心と野心から生じる、この病を追い払うための明確な防衛策や予防策が、創設者によって創設した時点で取られていない場合に発生する。五感、演繹、伝統、直感という持ち合わせる道具のどれを使おうと、物理的でも、形而上学的でも、あらゆる現象に共通する真実を、仲間との真の協調によって解明できるようになることが願わしい。

P46

神はある意味、パウリの排他原理の電子に似ている。二つの存在が同じ場所を同時に占めることは厳密にできない原理に基づき、一つしか存在し得ない。人類の理性と心を時々溶解させて真理を受け入れさせ、共有することを可能にしたのも、その献身的エネルギーを大文明と文化の創生に注ぎ込ませることを可能にしたのも、高次の力——神——より他にない。この力が宗教という領域に

存在する。

というのも、人間は自分よりも遥かに大きく理解し得ない大いなる実在である究極の実在に向き合っていることも、この実在は絶対的な意味において全知であるゆえに人類が恋い焦がれる絶対善でもあることも、宗教は常に肯定してきたからである。

「大地の唯一の支配者となるよりも、天に至るよりも、全世界の主権者となるよりも、預流果に達するほうがすぐれている。天上の快樂にさえもこころ楽しまない。正しく覚った弟子は一切の煩惱の消滅を楽しむ<sup>1</sup>。阿難、これが実在であり、これが秀逸である。すなわち、一切の衝動を鎮め、一切の煩惱を捨てることであり、渴望の滅尽であり、情熱の鎮静であり、止滅であり、涅槃である<sup>2</sup>」

このように釈尊が語っている以上、宇宙の形成を支配して生じせしめた永遠なる真理には、感覚を生じせしめ、知覚を進化させることで、切なる思い、激しい情熱、抑制不可能な活力に満ちた生命である魂を存在の新たな段階に進ませる力はない、という考えは受け入れられない。また、「善良」「信頼」「愛」「正義」と表現されるものを認識して定義することをまさに可能にする重要な属性、知覚、を永遠なる真理から剥奪する一方で、「善良」「信頼」「愛」「正義」と表現されるものがこの真理から放散する属性であると思いつくことはできない。私たちは、さまざまな感覚を通して世界を認識するだけでなく、思慮分別をもって知ることを可能にする知覚を備えている。他にどんな合理的前提をすれば、かろうじて創造したものを否定された「大いなる原因」が、創造の全容の中で人間を最高の被造物として際立たせるこの知覚を創造したと想定できるだろう。

大いなる理性と意志を備えた原因なき原因を受け入れるのも、拒絶するのも、個人の自由である。また、私たちが何のために意識を持つのか、死後も意識は存続するのか、に答えが与えられても、どう受け止めるかは一律ではない。それゆえ、政治的な構想に適用すべく、天使に匹敵するほどの高潔な行動に動機付けられることが確約されることはない。「大いなる原因」を拒み、野獣を恥じ入らせるほどの下劣な行動に駆り立てられていく者たちもいる。

---

1. 『ダンマパダ』 w.178,187.

2. 『アングッタラ・ニカーヤ』 v.322.

さて、究極の実在である至高者についての概念を、すべての宗教においてより深く調査すると、根本的に対立していないことが分かる。誤って無神論として分類されてきた宗教<sup>1</sup>ですら、人間が考えた概念を当てはめてはいても、至高の存在を否定してはいない。一方、有神論の宗教は至高の存在を肯定していても、人間による表現を認めない。至高の存在である絶対者について質問を受けたときの釈尊の返答とて例外ではない。

「絶対的なものが、一切の既知のものとの関係から外れたものを意味するならば、その存在は既知のいかなる推論によっても立証することはできない。他の関係と無関係のものをどうやって知れるというのだろうか？」

釈尊のこの発言には、絶対者という超越的な実在を扱う上での英知の真髓が含まれている。絶対者に関する限り、絶対者について何かを語ることは一切できず、何かを為すこともできないからだ。条件づけられていない大いなる存在に本質的に備わる側面を理解するためにいかなる努力をしても、無益であり、空回りに終わる。絶対者についてどんな観念を引き出そうとも、その行為自体からして、誤っている。しかしながら、絶対者についての観念でも何らかのものは、そもそも真実ではないにせよ、私たちの経験を測るための一つの標準、または基本形式として、すべての宗教において重要である。上座部仏教は、聖仙ヤージュニャヴァルキヤがウパニシャッドの中で元来解説した否定神学に沿った解釈をすることで、絶対者については知りようがないことを、自明のこととして断定している<sup>3</sup>。それゆえ、絶対者の超越性が、私たちが自分の中や身の回りで経験したり経験でき得るものとは完全に違うものであることが、経典のいたるところで強調されている。大乘仏教では、被造物の中に絶対者が内在することがより強調されている。

「虚空の子宮たる御方に栄えあれ。あらゆる虚栄を排し、膨大な知識を有し、知識の権化たる一切智の御方に栄えあれ！」

「世俗の知識を終わらせる純真真理の教師、虚空から生じた金剛薩埵に栄えあらんことを」

---

1.(ヒンズー教のように後世に多神教へと発展していったが)古代中国においても、絶対者の概念は天帝(上帝)という名称の存在を通じて支持されていた。

2.『テーヴィッジャ・スッタ』1.i.『ケーナ・ウパニシャッド』1.4.「確かに、それは知られているものとは別であり、かつ、知られていないもの以上である。それを私たちに説明した古代の者たちからは、このように聞かされている」

3.『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』III.4.2.

P48

「主よ、御方たるあなたから、大いなる完成を果たす資質を十分に有する諸仏と諸菩薩が生まれ出ずる。悟りの想念たる御方に栄えあれ！」<sup>1)</sup>

だが、超越にしる内在にしる、そのような概念を、絶対者のアイデンティティであるとみなすことがないよう、私たちは警告されている。絶対者とは想像も理解も不可能なのだ。

「かの原理(大いなる原因)には時間上での始まりがない。原理はすべてのダルマ(法)の共通基盤である。原理が存在するゆえに、再生の場すべてが存在し、涅槃への完全な到達が果たさ

れる<sup>2)</sup>」

イシュタル、ヤハウエ、アラー、神、アフラ・マズダーというようにどんな名称が付けられようと、どんな名称も与えることができない真髄として想像されようと、もしくは、存在と生成、(明示的かつ黙示的であり、音響を放ってかつ沈黙し、明かされてかつ隠され、内在しながら超越的な)完全なる者、光の中の光と表現されようと、もしくは男性的、女性的、中性的な名称が他に与えられようと、「絶対者」の本質的なアイデンティティを知っていると主張した聖なる教師は一人もいなかった。

それゆえ、釈尊には、人間が創造する「神」は、究極の实在を想像することが非現実的であるのと同じくらい、絶対者<sup>3</sup>から遠くかけ離れたものであった。しかも、絶対者を敢えて形容したり定義をした化身、すなわち、聖なる教師はいなかった。釈尊は唯一、このように表現した。

「どの如来<sup>4</sup>も沈黙している」

---

1. *Prajnopaya-viniscaya-siddhi*, III.9-11, G.O.S.Vol.44.1929.「すべての光の中の光。それはマヤの間を超越していると言われる。それは知識そのものであり、知識の対象でもあり、知識によって到達する価値もある。それは特に、すべての人々の心に座している」, 『バガヴァッドギータ』 X.2.8 も参照。

「私はあらゆる点で、神々と大仙たちの本初であるから……私は一切の本源である」。

2. 『ラトナゴトラヴィバーガ』(アビダルマ・マハーヤーナスートラ). 『イーシャ・ウパニシャッド』 I.14 も参照. 「天と地の(存在する)前に、形はなくとも完全なものが存在していた。音もなく、実体もなく、何ものにも依存せず、不変であり、尽きることなく、すべてに浸透するものである」。

3. 絶対者に関する仏教者のロジックの詳細については、" *The God of Buddha*" Ch.IV を参照. Jamshed.Fozdar (Casa Editrice Bahá'í Srl. Italy.1995)

4. 『ランカーヴァターラ・スートラ』「かくのごとき」を含意する如来(本書 18 頁脚注 9 も参照)という用語は古えのヒンズー教に由来する。「タット・トヴァム・アシ」(あなたはかのものである)は究極の实在である絶対者を推し量る用語である。少し熟考すれば、ヒンズーと仏教の用語に矛盾はないことが分かる。人間が近寄れても、一部しか理解も定義もできず、霊的にも倫理的にも無上に完璧な存在でありかつ、完璧な鏡である如来が反射する絶対者については、定義も、理解も、近寄ることもできない。

## 仏陀＝化身（アヴァターラ）

「誘なうために網のようにからみつき執著をなす妄執は、彼にはどこにも存在しない。ブッダの境地は広くて涯しがない。足跡をもたない彼を、いかなる道によって誘い得るであろうか。

どんな欲望も、その罨や毒も、彼を迷わせることはできない。目覚めた者、全知全能の者、道なき道を行く者を、あなたはどんな方法で導くことができるのか<sup>1)</sup>

非顕現の絶対者が不確かな領域の中に降臨したのが化身だ。この無比の神秘的な現象、化身を説明するには、私たちとこの世界に燦々と降り注ぐ陽光を比喻にするより他にすべはない。陽光は、その光源である太陽から離れている限り、光線であることが私たちの身体感覚で明確になるが、それでもなお、私たちの世界からすると、太陽であることに変わりはない。そして夕刻になり、あたかも陽光がその光源に回帰し、太陽軌道に再び融合したかのように私たちの目に映ったなら、太陽と陽光をもはや区別することはできない。同様に、化身は肉体ある姿で私たちの中に立ち交じることで、個体としての姿が私たちの視界に明確に映る。それゆえ、ヒンズー教典では「差異なき区別できる者<sup>2)</sup>」であると表現されている。さらに明確に言うと、絶対者によって高められるという神秘的プロセス、摂理によって、神の啓示の受取人、すなわち「乗り物」となるべく運命づけられた個人は、本人自身の人格をもちろん保持している。だが、その人物を天上の光を受け取る器に変換する作用は、長い時間的間隔を置きながら必ず繰り返される一つの普遍的原則である。

---

1. 『ダンマパダ』 v.180.

2. サンスクリット語では"bhedabheda". 仏陀も自らを、「ここでも現在も」ananuvedya(不可知)であると描写している。『サンユッタ・ニカーヤ』 I.23. 『マッジマ・ニカーヤ』 1.140.141 も参照。『マハーパーラタ』も参照。「太陽のように、私は光線で全世界を覆う。私は万物の維持者でもあり、それゆえにヴァスデーヴァと呼ばれている」

太陽光線が他に知る由もない太陽の実体の情報を私たちに運んでくれるように、化身<sup>1</sup>——神の顕示者——が、時空間宇宙を超えた実体について教えてくれる。霊的次元という新たな次元に私たちが健全な精神で入れるよう、その準備をさせるためである。神の顕示者は「光の中の光」であり、顕示者自身の中にもう一つの光は存在しない。相対的存在（人類）からするとあらゆる点で絶対的でも、その光源である絶対者からすると相対的存在であるのが、顕示者である。

---

1.化身とは「降臨」を意味する。また、「彼岸」からの神の「到来」すなわち「顕現」を意味する「来臨」から、精神的な勝利者の如来、つまり仏陀を意味する「克服」まで、幅広い意味を持つ。「降臨」はまた、"avakram" "avastha"(イラン語：アヴェスタ), "prati" and "avaruh"という動詞でもしばしば表現される。ヴィシュヌの化身に関する最古の記述は『タ イッティリーヤ・サンヒター』（ヤジュル・ヴェーダ）I.7.6.12……"punar iman tokani-pratyavaroha"に見出される。仏陀も化身であるという見解の裏付けとして、『アングッタラ・ニカーヤ』（I.3.134）では如来たちの出現に言及し、『ダンマパダ』（179, 180, 182）では、諸仏は彼岸から「来臨」し、世界の救済を行う足跡を残さない旅人であると述べている。『ジャータカ』I.50でも、仏陀＝化身が閻浮提(インド)に誕生するために、兜率天からマハマーヤ（母）の胎内に降臨したことを肯定している。釈尊降臨を描いたパルフトのレリーフには、懐妊と刻まれている。サンクラシヤの兜率天から降臨する模様を記した『ダンマパダアッタカター』III.226も参考にされたい。

P51

## 4

### 釈迦牟尼如来、仏陀

「信じない者だけが、私をゴータマと呼ぶが、あなた方は私を、  
仏陀、祝福された者、先生と呼ぶ。これが正しい<sup>1</sup>」

人間の視界に入り、私たちが知っているものすべての中で、化身（神の顕示者）、仏陀とも呼ばれる如来という現象を物語るために象徴化できるのは、おそらく一つ、太陽<sup>2</sup>より他にない。象徴が小さいほど、より大きなものを完全に定義することも、心底理解することもできなくなってい

く。私たちの取るに足りない頭で如来を推し量ろうとしても、無益かつ危険である。

「彼について語るべき言葉はない。すべての思考はここで終わり、したがって、言葉の通る道もすべて閉ざされている<sup>3)</sup>」

まず、如来という現象が意味することを、有限の知性では完全に把握できないことを理解することから始めよう。空に輝く太陽について述べると、その廻りを周回するこのささやかな惑星上で営まれる私たちの生活のあらゆる側面に及ぼす影響ゆえに大きな意義を持っていても、私たちは部分的にしか理解し得ない。同じように、如来たち——諸仏についても部分的にしか理解することはできない。その霊的な太陽と物理的な太陽が重要な側面を共有していることは自明である。

---

1. 『ディーガ・ニカーヤ』 I.46.(『バガヴァッドギータ』 VII.10 も参照。「私は知性ある者たちの知性であり、栄光ある者たちの中の栄光である」), Ibid.,X.36.

2. 『バガヴァッドギータ』 X.21.«私は発光体の中では、太陽である」

3. 『スッタニパータ』 5:1:6(『バガヴァッドギータ』 も参照。「意識も感覚も及ばない至霊である、私」).

P52

第1の共通点は、それぞれの実体には回帰性があり、比類するものが他にない点である。第2に最も歴然としたしるしは、生命をもたらす能力である。第3として、没してもまた現れることと、その新たな日の出がいつになるかの予告を、人類に確約していることである。闇の中で道に迷い、いつ日昇するか予想と、日昇したことの認識を可能にする様々な手段を調査する人たちのように、苦しみばかりのこの時代の闇の中で迷い、陽光に照らされたダルマ(法)の道に恋い焦がれている人類もまた、新たな日の出のように、仏陀が再び出現することを期待している。

では、出現した仏陀をどう認識できるのだろうか。太陽を認識するには太陽による他ない。太陽は毎日出現するため、私たちの記憶に刻まれるそのしるしと影響から容易に認識ができる。他方、次の霊的な太陽が昇るのは、相当な長期間<sup>1</sup>——

「おお比丘たちよ、この世に如来はめったに現れない。如来の出現が稀有であることを理解するほど、世の人々は、その出現を驚き、その入滅を悲しみ、如来が目当たりできないときは、その姿を見たいと切望するようになる<sup>2)</sup>」

——千年という非常に長きにわたる歳月を経た後になる。それゆえ、現在、生きている人間で、雲間から急に陽光が差すような二つの霊的太陽の出現という二つの事象を覚えていると主張できる者はいない。それゆえ、どんなに断片的な伝承であっても、昔日にあった仏陀の出現がいつであったかとその当時の状況についてを歴史から推測するしかない。そして、説き聞かせたその教えを通じて信者たちの生活に直に与えた影響から、霊的な太陽である仏陀、釈迦牟尼<sup>3)</sup>の元来の偉大さと

威力と壮大さを感じ取ることができる。

「仏陀の征服は覆されることはない。この世の誰もその征服に踏み入れることはできない。  
無限の知覚に目覚めた足跡をもたない彼を、いかなる道によって誘い得るであろうか<sup>4)</sup>」

釈尊が激しい言葉を使う場面に経典の中で時折遭遇しても、それは、本人のために子を叱る父親のように、人間を助けるための配慮である。

- 
1. 『サダルマ・ブンダリカ・ストトラ』 XV,vv,268-72.
  2. 『スッタニパータ』 560, 『ヴィナヤ・ピタカ』 ii.155. 仏との出会いが希有なのは、盲目の海亀が乗って海に浮かぶための丸太を、または、片目の陸亀が覗き穴が貫通している丸太を見つけるのが困難である様にも似ている。同じ概念が、ヒンズー教典にも埋め込まれている。『バガヴァッドギータ』 VII.3 を参照。「幾千の人間のうち、たまたま一人が成就(シッディ)を目指して努力する。努力して成就した人々のうち、稀に一人が私を如実に知るのである」
  3. 釈尊は紀元前 563 年に誕生し、80 歳だった紀元前 483 年逝去した。
  4. 『ダンマパダ』 v.179.

P53

「あなた方はわが子、私はあなた方の父である。私によってあなた方は苦難から解放された。私自身は彼岸に到達したゆえに、他の人たちが流れを渡るのを助けよう。私自身は救いを得たゆえに、他の人たちの救世主となり、慰撫されたゆえに、他の人たちを慰撫して避難所に導こう。私は、四肢を痛めるすべての生き物を喜びで満たし、苦痛で死にそうな人々に幸福を与え、救いと救いの手を差し伸べよう。私は、世界の救済のために、真理の王としてこの世に生まれた。私は真理について瞑想している。私は真理の実践に専念している。私は真理を会話の話題にしている。私の思考は常に真理の中にある。なぜなら、見よ！ 私自身が真理となったのだから。真理を理解する者は誰でも、祝福された者を目にするようになるだろう。真理は祝福された者が説いてきたゆえである<sup>1)</sup>」

それゆえに、私たちに実体的な影響を及ぼし続けているしと証拠を通し、仏陀、釈尊について物語れることは何でも語らなければならない。弥勒如来の探究と発見を可能にするために最低限なすべきことである。弥勒如来だけが、付着した汚れと澱みを一掃してダルマを浄化し、純粋な状態で人類に再び明らかにすることができる。日の後に日が続き、毎夜の後には太陽が昇って生きとし生けるものすべてに生命力を与えるように、諸仏もまた、すべての人々の幸福のために立ち上がる。

「今までの仏たち、これからの仏たちの中に私がおりに、彼らがしたことを私は行う<sup>2)</sup>」

昨日の太陽は今日の太陽と何らの違いはない。同じ太陽が輝き続けている。太陽には、昨日も、今日も、明日もないからだ。太陽の組成が常に変化しているとしても、同じ太陽であることに本質的に変わりはない。同様に、

「身体の美しさ、道徳的習慣、集中力、知恵、囚われからの解放、自由の認識と洞察、如来の四つの確信と10の力、仏の六つの特別な認識と14の認識、18の仏法、そして仏の法すべての言葉一つにおいて、どの仏にも違いはない。仏法に関してすべての仏が伝えんとすることは全く同じだからである<sup>3)</sup>」

偉大なる霊的な太陽、諸仏は、昨日の太陽と明日の太陽に違いがないように、互いに違いがない。

---

1. 『ディーガ・ニカーヤ』 I.46. 『バガヴァッドギータ』 XI.43 も参照. 「あなたは父である」. Ibid., IX.17. 『ラーマヤーナ』 にも見出される. 「たとえ一度でも私の庇護を求め、助けを請う者に言おう. 『私はあなたのものです。すべての存在からの恐怖を取り去ろう』」

2. 『マハーパリニッバーナ・スuttanta』

3. 『マハーヴァストゥ』 I.160. 『ミリンダ王の問い』. 『バガヴァッドギータ』 IV.1. も参照. 「私はこの不滅のヨーガをヴィヴアスヴァット(太陽神)に説いた。ヴィヴアスヴァットはそれをマヌ(人類の祖)に告げ、マヌはそれをイクシュヴァークに告げた」。釈尊は自らをイクシュヴァーク(甘蔗王)の末裔と主張した. 『ディーガ・ニカーヤ』 I.

P54

さらに言えば、昨日、今日、明日の太陽は、私たちの感覚からすると回帰現象だが、それでもなお、光と威力の源を同じくする唯一の太陽であることは変わらない。それが恒星に分類される太陽だ。私たちの世界でも、太陽系の中でさえも、太陽と同列視できるものはない。太陽は太陽系の生き物すべての生命力の源である。同様に、霊的な太陽である諸仏は、人類のより大きな生活である霊的な生活に欠かせない。

それゆえ釈尊は、過去の諸仏と自ら以降に到来する諸仏と霊的な親族関係にあることを肯定する一方で、自分ではないものについて率直に語っている。

「私はバラモンではないし、王族の者でもない。私は商人でも、また他の何ものでもない。私はこの世で賢者として生き、何一つ持たず、家はなく、自己も完全に消え去っている。バラモンよ。あなたが私に姓をたずねるのは適当でない<sup>1)</sup>」

「如来は語るがごとく行い、行うがごとく語る。行うがごとく語り、語るがごとく行う。それゆえ、彼は如来と呼ばれる。

それはすべて、その通りになるのであって、他のようにはなりません。それゆえ『如来』と

いわれるのです」

「如来は、神々、マラー、ブラフマンがいる世界でも、沙門と婆羅門、王と民を含む人々にあっても、勝者、征服されざる者、全見者、自在力ある者であり、それゆえ『如来』といわれるのです<sup>2)</sup>

「如来は、見るべきものを見る者であるが、見るもの、見ていないもの、見えるもの、見る者を気にかけない。聞くもの、感じるもの、認識されるものについても同様であり、すなわち、これらの態様のいずれをも考えない。したがって、目に入るもの、聞いたもの、感じたもの、認識されたものの中で、彼はまさに「そのような」存在である。さらに、「そのような者」である彼よりも、さらに卓越した「そのような者」は他に存在しない<sup>3)</sup>

- 
1. 『スッタニパータ』 vv.455-56(凝縮版)。
  2. 『ディーガ・ニカーヤ』 III.135. 『リグ・ヴェーダ』 1 も参照。「……われらは讚美歌を幾度も汝に歌う。決して征服されることのない征服者よ」
  3. 『アングッタラ・ニカーヤ』 II.25. ヤジュル・ヴェーダ XIII.36 も参照されたい。「幾世代もの主であり、他の誰にも生まれぬ偉大な者であり、顕示者（化身）の衣装をまとった者が現れ、この世の住処に住み、最も豊かな至福を受けた。彼は三重の輝きを放つ者である」
  4. その目的は、自由選択の力を行使させることで、人間（理性的魂）を導くことにある。純粹な心の持ち主は、奢りや世俗的な地位に邪魔されることなく、如来のメッセージに内在する素晴らしさを理解し、受け入れ、信じることで、良き報いを得る。しかし、権力と自己に酔いしれる者は、それを拒否して道に迷う。一方、如来がしゃべるロバの姿をしたり、その他の現象を使って現れたなら、自由選択の特権とそれに見合った責任は取り消され、すべての人が、選択努力のいかにかわらず、そのような「奇跡的」手段を使って現れた仏陀を認めざるを得なくなるだろう。後世の信者や彼の教えの記録者たちは、無邪気にも様々な奇跡を仏陀に帰したが、仏陀は明らかに、そのような不思議な作用や奇跡的行為の一切を遠ざけ、実演せず、どの信者に対しても実践を容認しなかった。

P55

化身である仏陀は、人間の姿<sup>4)</sup>の中に「神自身」の一面を顕現する。物理的存在の人間を支配する法則に従いながらも、本質的に、見分ける方法すべてを超越<sup>1)</sup>している (ananuvedya)。仏陀は仏陀であり仏陀ではない。両方であり、かつ両方ではなく、どちらでもない。この言葉が真に当てはまる。仏陀の悟りは、完全な異次元からもたらされる。仏陀の行為は意志や功利主義に由来しない。選択肢をふんだんに与えながら、因果関係を不作用にする一切智に基づいている。

霊的な太陽の御前では、せいぜいが、揺らめくロウソクのごとき存在が私たちだ。この歴然とした真理にかかわらず、太陽も揺らめくロウソクも、火、光、熱という特性を共有するため、強烈な光を放たせながら油を燃やし尽くせば、ロウソクもまた炎そのものになり、太陽が放つ炎と変わらなくなると、信じている人たちもまだいる。油もロウソクの芯も、ロウソク自体が存在できるには

不可欠であっても、太陽の実体からすると、その効果は及ぶべくもないことを、短絡的な思考をする彼らはほとんど分かっていない。強烈な光の中ではかき消されるロウソクの光と炎も何百万本も集まれば太陽と同格になるなど、まずあり得ない。火はロウソクでも何でも燃やし尽くすが、太陽は火はおろか、一切合切を燃やし尽くす。

同様に、釈尊が果たした悟りは、人間が通常用いる、ありきたりな試行錯誤のプロセスの結果だと主張する人もいる。釈尊は当初、二人のバラモンの教師、アーラーラとウドラカに新米弟子として師事し、必須科目として教えられた瞑想と苦行をすべて行っても求めるものは得られず、価値はないと最終的には拒絶することになったが、自己否定、自発的な苦行に身を投じた結果にすぎないと彼らは言う。それゆえ、似たようなことを実践すれば、誰もが仏陀になれると言外に伝えているが、それはあり得ない。

これまでに釈尊の発言とされるものからたくさん言葉を引用してきたが、釈尊もまた、人間の教師と当時の一般的な方法によって悟りを開いた一人であった、と推測する人たちを非現実的な誤解から解放するために、今しばらくの紙面と時間をここで使うことにする。そのように誤解している人たちは、次の質問が突き付ける歴史的な事実<sup>1</sup>に自論を戦わせてみることに時間を使う方がいいかもしれない。すなわち、神意によるプロセス（絶対者が聖なる人物を高めること）によらずして、人間の教師に師事し常套的な方法に従うことが悟りを開く道筋だと言うなら、ある聖者が宮殿の庭園にいたシッダルタの面前に幻影として現れ、彼が悟りを開き、仏陀になる予言をした<sup>2</sup>ことを、どう説明すればよいのだろう。これは『ジャータカ』で語られ、仏教の学派すべてから公認されている史実である。

---

1. 『スッタニパータ』 1076. 『マッジマ・ニカーヤ』 I.140, 『ヴァジュラッチェーディカー・スートラ』も参照。

2. 馬鳴の『ブッダチャリタ』 w.16-21. 『スッタニパータ』も参照。

P56

聖者が神々しい姿で悟りを開くことを確約したことで、シッダルタの心を捕らえ、動機付けたこの出来事は、彼が森の中での探究に入るよりずいぶん前のことであった。人間を最も感化するのは模範であり、言葉ではない。その上で、与えられた教訓が、最も深く心に浸透する。

「多く説くからとて、それゆえにかれが道を実践している人なのではない。たとい教を聞くことが少なくても、身をもって真理を見る人、怠って道からはずれることの無い人——かれこそ道を実践している人である<sup>1</sup>」

さて、最高の教師は模範の威力を、高みを目指す方向にも、価値なきものを見せる方向にも示すことができる。当時のヒンズー教では、悟りを開くという名目で、形式と外観だけ、バラモンの教師や洞窟や森の中にいる苦行者に師事することが慣習として一般化<sup>2</sup>され、内在的な聖なるものに

つながることへの心からの願望は重視されていなかった。その事実を照らせば、シッダルタが、当時の学識者も苦行者も見当違いな考えとやり方をしていたことにすでに気付いていても、言葉と批判だけでは、それを大衆に納得させることはできないと分かっていたことを理解できないはずがない。王家の者であっても、出離して一介の修行者になっていたため、旧来のやり方に対して批判を強めても、賛同を得るのは疑わしいことにすでに気付いていたのだろう。そこで採用したのが、最終的には弟子たちに廃止しなければならなかったものだが、その時点では、考え得る限り最善の方法であった。すなわち、「天蓋に吊るされた大きな鐘の音のように<sup>3</sup>」名声が地域全体に広がり、学識者<sup>4</sup>と聖者、バラモンと苦行者すべてから賞賛と羨望を集めるほどに、ヨギの中のヨギ、苦行者の中の苦行者となることであった。その圧倒的勝者になった後に、苦行には意味がなく、本質的に価値がないと宣言しても、無知由来の発言だと反論できる者はいなかった。バラモンの教師たちの教えは十分でなく、禁欲は無比の涅槃の境地に至る方法としては正しくないと公言する前に、彼らに若輩者として師事し、肉体的な苦行を実践したのは、自らのダルマ(法)は、人為作用によるものでも、試行錯誤によって考案した体系でもないことを世間に示すためであった。

---

1. 『ダンマパダ』 v.259.

2. ヒンズー教徒の少年たちが年少時に最低でも12年間、厳しい修養生活を教師の下で送った後に生家に戻り、家督を引き受けるのが、一般的な慣しだった。成人男性(家督相続者)でも、森に入り、さらに長期間、苦行、瞑想の生活に入る者もいた。俗世との決別の象徴として、実際の葬式を事前に執り行った。

3. Bigandet, p.49(初版)参照. 『ジャータカ』と比較されたい。

4. 釈尊の名声の高まりに、六師外道と呼ばれた、プーラナカッサパ、マッカリゴーサーラ、サンジャヤベラッテ、イプッタ、アジタケーサカンバラ、パクダカッチャーヤナ、ニガンタナータプッタの間で嫉妬心が湧き上がった、と伝えられている。

P57

ラーマ、クリシュナ、釈尊が、数百年の感覚を置いて出現した稀有で無比の存在であったにもかかわらず、ヨガの実践、特定の方式、あるいは学問上の修練により、もしくは窮乏に陥ったゆえに、彼らも悟りを開けたと考えたり、主張する人たちは少なくない。このような短絡的な考えに起因する誤解が解かれ、また、私たち人間と、無比の聖なる預言者である神の使者は、計り知れないほどに格が違うだけでなく、種からして違うことが明確に実証されるのに役立つことを願い、関連する記述を以下に引用する。彼ら聖なる預言者である神の使徒は、種が違う被造物、運命づけられた事象、霊的な日の出<sup>1</sup>であった。

「須菩提よ、そなたはどう思う。如来が燃燈仏<sup>2</sup>と一緒にいた時、無比の悟りを完成させるためのダルマ(方式<sup>3</sup>)があっただろうか」「いいえ、世尊よ、私が仏陀の意味を理解する限り、如来が無比の悟りを完成させるための方式はありませんでした」「その通りだ、須菩

提。まことに、如来が無比の悟りを完成させるための方式はなかったのだ。須菩提、もしそのような方式があれば、燃燈仏は『未来に、そなたは釈迦牟尼と呼ばれる仏になる』と、私についての予言はしなかつたらう。しかし、燃燈仏が私についてそのように予言したのは、無比の悟りを完成させるための方式が実際に存在しないからなのだ。如来とはすべての方式を意味するからである。誰かが、如来が無比の悟りを完成したと言う場合に備え、まことにそなたに伝えておこう。須菩提、仏陀が悟りを完成させるための方式はない。須菩提、如来が無比の悟りの境地に達する根拠は、完全に超越したものだ。

- 
1. ラーマ、クリシュナ、釈尊全員が、自らの氏族は太陽——光、知識、生命を象徴する霊的な意味を含蓄——の末裔であると主張した。これは当時の人々に向けられた言葉であるが、今日の私たちに対する言葉でもある。
  2. 釈尊より24代前に出現した仏陀『ダンマパダ』を含む多くの出典を参照すると、釈尊もまた、燃燈仏と呼ばれていたことが分かる。それゆえ名前ではなく「自らを燈明になした御方」を意味する名称である。すなわち悟りを開いた御方、仏陀である。別々の個人に同じ一つの実在が承継的に出現したことが、ここでも含意されている。
  3. ダルマは方式も意味する。本引用文中で言及されるダルマは『方式』で統一。

P58

それは有(sat)でも、無(asat)でもない<sup>1]</sup>

燃燈仏が未来の仏陀について予言したことに言及しながら、この現象（仏陀の出現）は実在でも非実在でもなく、普通でも平均でもなく、対極性や相関性という二元論的な範疇から完全に外れた、完全に超越した存在からの恩寵ある振る舞いであることを、釈尊は言外に含ませている。大悟徹底の境地である真正覚に達するや、仏陀(『マッジマ・ニカーヤ』による)は、一人の仏陀、一人の化身、一人の預言者という、比類なき偉大な神意による現象が起きたことを断言した。そして、法を説く<sup>2]</sup>のは自分しかいない、と別の場面で述べる一方、次の詩の中では、自らは一切智であり、絶対的に清浄であると明言している。

「一切を鎮めて、一切を知る今、一切に執着せず、一切を捨て、一切の渴望を滅ぼして、ついに、私は解放された。自分自身でそれを知っているのだから、他の誰を信用すればいいのだろう。私に教師はおらず、また私のような者もない。人と神々の世界で私に匹敵する者はいない。まことに光栄にも、私以上に卓越した教師はいないという意味の称号を与えられている。私ただ一人が、静穏な無上の仏陀である。正しい王国を築くために、闇に覆い包まれた世界に不滅の太鼓を打ち鳴らしながら、カーシーの都に向かうのだ<sup>3]</sup>

このことは、完全なる悟りを開いた者を意味する「正等覚者」という、パーリ仏典すべての冒頭に記された古来の通り名で立証されている。釈尊が清浄なのは、一切智である以上、当然である。

1. 『ヴァジュラッチェーディカー・ストラ』(超越した智慧に達する者はいない). 『ニダーナカター』も参照. クリシュナが、一切のダルマを自らが超越していることをアルジュナに語った言葉にも同じ意味が示されている。「一切のダルマ(義務)を放棄して、ただ私だけに庇護を求めよ。私はあなたを、すべての罪悪から解放するであろう。嘆くことはない」『バガヴァッドギータ』 XVIII.66
2. 『ダンマパダ』 v.275(……棘を抜いて癒す方法を知って、わたくしは汝らにこの道を説いたのだ). 『ダンマパダ』 v.276(汝らは自ら努めよ。もろもろの如来は、ただ、教えを説くだけである). 『バガヴァッドギータ』 VII.24.「(われは)真理、知識、至福……の体現者」
3. 『アリアパリエーサナ・スッタ』(『マッジマ・ニカーヤ』). Saruajnanwahanse「全知の尊師」とも知られている。『リグ・ヴェーダ』 25.1 も参照。「海を渡る船の進路も、空高く舞い上がる鷺の飛翔も、吹くすべての風の経路も、過去と未来のこともすべて、彼は知っている」。『バガヴァッドギータ』 IX.17 も参照。「私はこの宇宙の維持者であり主であり、その父であり、母であり、祖父であり……」。

---

P59

釈尊が既婚者であり、一男の父であり、父の許しを得ずに、孝行というインドの伝統に背いて禁欲生活に入ってから、行き過ぎた苦行という誤った方法にまず従い、すなわち、バラモンの教師のアーラーラ・カーラーマとウドラカ・ラーマプトラの下で教えを受けた後に、正しいダルマを発見した、という事実を伝承された通りに教典の中に記載しても、釈尊の比類なき地位をいささかも貶めることはない。靈性について誤解しているために、釈尊の人生のこうしたエピソードを神聖な人物がすることではないと難癖を付け、釈尊の地位を下げようとしている人たちがいる。彼らのために、ラーマもクリシュナも、他のヒンズー教の化身たちも結婚し、モーゼ、ムハンマドたちも同じように、子をもうけていた事実を指摘しておこう。全員に家族がいた。キリストも、公の活動を始めてから数年しか経過していない、まだ若い頃に殺されていなければ、家庭を持っていただろう。神の化身、顕示者、は、孝行という義務に束縛されない。人類を救済に導くという遥かに大きな義務が優先されるからだ。その孝行については、シッダルタが誕生したばかりの頃の話の後に触れよう。父、シュッドーダナは、お祝いの席に招待した聖人たちの中でも英知に最もすぐれた最年長のアシタ仙人から、息子の真の運命とその地位について聞かされた。素晴らしい予知能力という天賦の才に恵まれていたアシタ仙人は、生まれたばかりの赤子のところまで進むと、挨拶してから、シュッドーダナに伝えた。

「この王子は最高の悟りに達するでしょう。この人は最上の清浄を見、多くの人々のためをはかり、憐むが故に、法輪を回すでしょう。この方の浄らかな行いはひろく広まるでしょう。」

ところが、この世におけるわたくしの余命はいくばくもありません。この方が悟りを開かれる前に、わたくしは死んでしまうでしょう。比類なき人の教えを聞けないでしょう。だか

ら、悩み、悲嘆し、苦しんでいるのです<sup>1)</sup>」

そして、シュッドーナは、釈尊ことシッダルタが万人の幸福のために悟りを開く運命を追求していったことに、後年、感謝の意を表した。

「あなたは、賢く、実り豊かな行いで、私を大きな苦しみから解放してくれた。悲しみしかもたらさない地上の贈り物を喜ぶ代わりに、これからは多くの実りを結ぶ息子を授かったことを喜ぶことにしよう。あなたが、繁栄していた家を捨てて出て行ったのは正しいことであった。そのような大きな労苦を払われてきたのは、正しいことであった。そして今、あなたを心から愛し、あなたが去っていった私たち親族を憐れんでくれるのも、正しいことだ。あなたは苦しみ喘ぐ世界のために、神々や諸王であった昔の先覚者たちでさえ見出すことのできなかった至高の現実への道を踏みしめた。

---

1. 『スッタニパータ』 vv.693-94. 生誕後に同じように予言を受けるエピソードが、神の顕示者すべてにおいて傳承されている。同じパターンが弥勒如来の誕生でも繰り返されている。

P60

もしあなたが世界の王になることを選んでいたなら、その奇跡的な力とその神聖なダルマを見て私が今感じている以上の喜びを、私に与えることはできなかつたろう。もしこの世のものごとにと縛られたままであることを選んでいたとしても、世界の君主として人類を守ることができただろう。しかし、その代わりに、輪廻の世界の大きな悪を征し、すべての人の益になるよう、ダルマを宣言する聖人となった。その奇跡的な力、成熟した知能、無数の危険に満ち溢れた輪廻の世界から決定的な脱出をしたことで、王族の記章がなくても、世界の君主になった。この世のものごとの中にとどまっていたら果たせるはずもなかつたことだ。王として栄華をいかに誇っていたとしても、まことに無力であったことだろう」

釈尊は、悟りを開くと、隠された宝(ダルマ)を見出したことを父に知らせ、その貴重な宝石を最初に父に贈呈することが自らの務めであると肯定していたことが、上のくだりから理解される。そして、この機に顕した言葉が、ダンマパダに収録されている二つの詩だ。

「奮起てよ。怠けてはならぬ。善い行いのことわりを實行せよ。ことわりに従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す」

「善い行ないのことわりを實行せよ。悪い行ないのことわりを實行するな。ことわりに従って行なう人は、この世でも、あの世でも、安楽に臥す<sup>1)</sup>」

釈尊は自らを、現世という泥水から、すっきりと真っ直ぐに伸びて泥に染まらない美しい蓮の花にしばしば擬えた。

「青蓮、紅蓮、白蓮が、泥水の中で生まれ、泥水の中で育ったにもかかわらず、水面に出たときは、泥水に汚されずにその場に凜と佇んでいる。バラモンよ、そんな蓮のように、私もこの世に生まれ、この世で育ったにもかかわらず、この世を克服して、この世に汚されずにとどまっている。私は仏陀である。受け入れるがよい、バラモンよ<sup>2)</sup>」

これは、神の顕示者を象徴するためにヒンズーの教典でしばしば使われる表現をもじった、この上なく痛烈な批判だ。しかも、仏陀についてを適切に描写している。如来は、絶対者という太陽の光に応え、墮落しつつある人類がうごめく腐敗した泥土のような環境から、凜として蓮の花のように立ち上がり、周囲の影響に決して染まらずに、俗世から離脱する完全な模範を示す。

---

1. 『ダンマパダ』 w.168,169.

2. 『アングッタラ・ニカーヤ』 11.37-39. 『ダンマパダ』 vv.58,59,336,401 も参照. 『バガヴァッドギータ』 V.10 も参照. 「諸行為をブラフマンに委ね、執着を捨てて行為する人は、罪悪により汚されない。蓮の花が水に汚されないように」

P61

これは、すべての被造物は移り変わるといふ歴然とした事実により人類を目覚めさせ、妄想を捨て去り、朽ち果てることなき永遠なるものを手にするように、と呼びかけるためである。

「骨で城がつくられ、それに肉と血とが塗ってあり、老いと死と高ぶりとごまかしとがおさめられている。いとも美しい国王の車も朽ちてしまう。身体もまた老いに近づく。しかし善い立派な人々の徳は老いることがない。善い立派な人々は互いにことわりを説き聞かせる<sup>1)</sup>」

私たち凡夫がどんなに高く上昇できたとしても、太陽に触れることはできない。近づけば、焼き尽くされ、私たちのアイデンティティは完全に失われる。悟りを開いて仏陀になることは、凡夫には果たすことも、完全に理解することもできない地位に就くことである。

「わたしは、出離の楽しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけによっても、また博学によっても、また瞑想を体現しても、またひとり離れて臥すことによっても、得られないものである。修行僧よ。汚れが消え失せない限りは、油断するな<sup>2)</sup>」

仏陀が神意を受けてなるものであることは、『マハーパダーナ・スッタ』の中で断言されている。同じテーマを、ラーマ、クリシュナを含む神の顕示者が繰り返している。釈尊は、自らが説くダルマが自分で考え出したものであるという見解を、非常に不快な異端的な考えとみなし、自らを、試行錯誤を通して考案した救済の道を説く単に新たな賢者に分類しないよう、舎利弗を始めとする弟子たちに警告している。

「舎利弗よ、私についてそうであると知り、そうであることを目にする誰もが、こう話すに違いない。『隠者ゴータマには、超人的なところも、アーリヤ人にふさわしい優れた認識も洞察もな

い。隠者ゴータマは、推論によって打ち出し、調査に基づいて自分で考案した体系に基づいてダルマを教えている』と。舍利弗よ、もしその者がその言葉を撤回しないなら、もしその考えを撤回しないなら、もしその見解を捨てないなら、まことに、自分の不毛さによって奈落に送られるのだ。舍利弗よ、そうした発言をする者が、道徳的習慣が身についた、集中力と知恵に恵まれている比丘であり、今ここで悟りに到達するはずであったとしても、こういう結果を迎えると、私は言おう。もしその者がその言葉や考えを撤回しないなら、もしその見解を捨てないなら、その不毛さによって奈落にまことに送られるのだ<sup>3</sup>」

---

1. 『ダンマパダ』 vv.150, 151.

2. 『ダンマパダ』 vv.271, 272.

3. 『マッジマ・ニカーヤ』 I.68, 71-72. 『バガヴァッドギータ』 IX.11,12 も参照。「迷える人々は、人間の体をとる私を軽んずる。私の万物の偉大な主としての最高の状態を知らないで……。彼らは空しい願望を抱き、空しい行為をし、空しい知識を得、分別を失い、人を迷わせる、羅刹的、阿修羅的な本性に依存する」。

P62

ある弟子が霊性や知識でどれほどの高みに達しようと、悟りを開いて仏陀（神の化身=アヴァターラ）<sup>1</sup>になるという現象のこの実に重要な側面を誤って判断するなら、まことに奈落へと送られてしまう。釈尊は、自らの地位が人間を超えている超人であるだけでなく、ダルマ自体が人間のロジックや調査から編み出された体系とは一切無縁であることをここで主張し、絶対者から高められたことによって、顕示者=神の化身=仏陀とそのメッセージ(ダルマ)という無比の現象が、完全に超越した領域からもたらされたものであることを、改めて確かなものになっている。

釈尊自らの言葉によれば、法を伝えた仏陀を正しい視点から眺めるなら、完全なる悟りを開いた者であり、人類を導いて救済するために継続的に姿を顕している全知の教師の一人として見ることができるだろう。

「如来を名前で呼ぶことも、友と呼んでもならない。如来とは仏陀、すなわち聖なる御方である。仏陀は慈悲の心ですべての存在を平等に見つめるゆえに、父と呼ばれる。父を軽んじることは誤りであり、見下すことは悪である<sup>2</sup>」

私たちは、如来を何らかの客観的実体と関連づけたくなくてもその罫に嵌らないよう、警告されている。より小さなものはより大きなものを、真に定義することも理解することも決してできない。人間が考えつく次元や属性で仏陀、如来、について考えても無駄である。如来を把握することはできない。たどれる足跡を、如来は残さない<sup>3</sup>。私たちがかろうじて言えるのは、「如来は」という言葉だけだ。如来の实在を追求し、時空間を表現する言葉で定義しても意味がない。

「如来は、実際に存在していても理解できない。それゆえ、如来を至高の人、超越した人、

超越の達成者と呼んでも、死後にいる、いない、いやその両方だ、いやその両方でもない、  
と言っても意味がない<sup>4</sup>」

- 
1. アヴァターラについての私たちの認識、そして完璧に禁欲できないことの自覚は、ヒンズー教でも最高善と認められている。だからこそ、涅槃へと私たちを導く誤りなき案内役が授けられていることが確信できる。『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』(3,8,10)にはこのように記されている。「仙人のヤジナヴァルカは言う。「ガルギよ、まことに、この不滅の方を知らない者は、この世で施しを行い、千年もの間、苦行をしたとしても、それによって得られるものはわずかである」
  2. 『マハー・ヴァッガ』 1.6. 『バガヴァッドギータ』 XI.41.42 も参照「私は友人だと思い、あなたの偉大さを知らないで、不注意から、また親愛の情から言ったことを、あなたにお詫びする。不滅の方よ」
  3. 『マッジマ・ニカーヤ』 I.140,141.
  4. 『サンユッタ・ニカーヤ』 111.118.

P63

このことは、『アングッタラ・ニカーヤ』<sup>1</sup>においてさらに詳しく説明されてされている。

ある時、世尊がウッカタとセタバヤの間の街道を歩み進まれていた。バラモンのドナも同じ街道を歩いていた。ドナは世尊に近づくとこう問いかけた。「世尊よ、あなたはディーヴァですか?」「いいえ、バラモンよ、私はディーヴァでは決してありません」「ではガンダルヴァですか?」「いいえ、バラモンよ、私は決してガンダルヴァではありません」「では夜叉ですか?」「いいえ、バラモンよ、私は決して夜叉ではありません」「世尊よ、ならば、あなたは人間ですか?」「いいえ、バラモンよ、私は決して人間ではありません」「あなたは私の質問すべてに違うとお答えになる。世尊よ、ならば、あなたは誰ですか?」「バラモンよ、そのような存在として姿を現していたなら、そうなる原因が私の中で消滅していなかったこととなります。ならば、私は、ディーヴァでも、ガンダルヴァでも、夜叉でもあったかもしれません。しかし、根因は私の中で切り倒され、すでに消滅しています。椰子の木の根株を切り倒し、再び芽を出すことができないようにするのと同じく、今後、このような存在として生まれないようにするためです。青蓮、紅蓮、白蓮は、泥水の中で生まれ、泥水の中で育ったにもかかわらず、水面に出たときは、泥水に汚されずにその場に凜と佇んでいます。バラモンよ、そんな蓮のように、私もこの世に生まれ、この世で育ったにもかかわらず、この世を克服して、この世に汚されずにとどまっています。私は仏陀です。受け入れるがよい、バラモンよ」

「たとえばバラモンよ、雌鶏に卵が八個、あるいは十個、あるいは十二個あるとしましょう。それらが、雌鶏によって正しく上に乗られ、正しく孵され、正しく温められたとしま

す。一体、それらのひよこたちのうちで、最初に足の爪先、あるいは嘴で卵の殻を砕いて、無事に殻を破ったようなもの。それは何と言われるべきでしょうか。『年長』でしょうか、あるいは『年少』でしょうか。「尊者ゴータマよ、『年長』と言われるべきでしょう。なぜなら尊者ゴータマよ、それは、彼らのうちの最年長者なのですから」「まさにそのように、バラモンよ、私は無明に陥り、卵の内に入り、覆われた人々のうちで<sup>2</sup>、無明と言う卵の殻を砕いて、ただ一人、世において、一切の法を知り尽くす完全で、この上ない悟りを得たのです。バラモンよ、私は世間のうちで年長、最勝の者なのです<sup>3</sup>」

仏の悟りは努力をとまわずに自発的に出現したもので、学び得るものではない。

---

1. 『アングッタラ・ニカーヤ』 II.37-39. 『ダンマパダ』 vv.58,59 も参照.

2. 「卵の中に生まれる存在を卵生と呼ぶように、無知という卵の殻の中に生まれる人間すべてが卵生と呼ばれる」(Anagatavamsa, iv.84). 興味深いことに、雌鳥も、卵が生じる「原因」もこの比喩に含まれていない.

3. 『ヴィナヤ・ピタカ』 III.3-6.

P64

常人を超越したその悟りは、自らに本質的に内在する一つの側面であるため、仏陀は、スワヤンブー（自己顕現した者）と呼ばれている。仏教の教義では、仏陀とは、迷妄の闇を完全に消滅したことで、人類をサンサーラの泥沼から解放し、確信と至福に満ちた次元に私たちを上昇させる阿羅漢であると明言されている。仏陀、釈尊の属性は多岐にわたり、世尊、如来、阿羅漢、三藐三仏陀（正遍知）、鞞修遮羅耶三般那（智行完成者）、修伽陀（善逝）、路迦鞞（世間解）、阿耨多羅（無上士）、富楼沙曇藐婆羅提（人化調御師）、舎多羅提婆摩菟舍喃（神々と人間の教師）、仏陀（目覚めた人）と表現されている。

パーリ仏典同様に、大乘仏教の教典でも、仏陀の様々な属性が不断に列挙されている。仏陀の一切智は三界の万物全体に及んでいる。

このように、多くのこと、すなわち、従来の世界観と究極の实在が認識されるべきなのである。そして、世尊は、空という観点から、これをよく見て、よく知り、よく理解されていた。世尊はそれゆえに、一切智者と呼ばれ、世界の観察範囲として従来の視点を見てきたのである。しかし、究極の实在については、表現できない、理解できない、見分けられない、示せない、明らかにできないものであり、動いていないものであり、利得でも無益でもない、楽でも苦でもない、有名でも無名でもない、形あるものでも形無きものでもない、と言

われたのである<sup>1</sup>。

仏陀の一切智についての概念について、微細な区別が仏教の学派の中であっても、菩提（悟り）に達した必然の結果であるとする点では、皆、同意している。

それゆえ、前出(41頁)他の部分で紹介したように「一切智で知り得たことすべてを一度に余すことなく伝えるのではなく、様々な存在の気質に気を配っている<sup>2</sup>」という釈尊自身の言葉が、仏陀の一切智に関する特定の宗派の異論と誤解を無効にする。異論が唱えられたのは、(ア)僧伽の規律を一度に確立せずに、代わりに、段階的に少しずつ僧たちに伝えていったこと、(イ)従兄弟の提婆達多が後に教団を分裂させるようになることを一切智によって知っていながら、入信を許可したことに対してであった。

---

1. *The Lotus-Sutra*, Ch. XV. *Siksha-Samuccaya* 256, 257 (Pitrupturasamagama).

2. *Sanskrit Dhammapada*, V. 同じテーマを、アルジュナに一度にすべてを明らかにしなかったクリシュナも是認している。最終的にその光輝すべてを見せるまで、少しずつ段階を踏んで行った。

P65

(ア)について説明すると、如来は、生まれたばかりの赤子に対する母親のように、僧たちが消化吸収できる能力に合わせて知識という糧を与えるということである<sup>1</sup>。(イ)については、弟子入りが許可された人間の本質に内在する両側面を実証するためであった。従弟で、常離れずそばにいた阿難がその人格のうちに示していた信仰心と謙虚さに満ちた明るい側面と、やはり釈尊の従弟であった提婆達多が示していた利己主義、奢りという暗い側面だ。人間の良心に対して原則的に相互作用するこの両側面は、すべての大宗教の創設者の伝記に記録されている。そして、宗教がまさに意味するものと、私たち一人ひとりの内なる声、良心、との宗教の関係を、創設者の人生に登場した人物を通して本質的に伝えている。仏陀とも呼ばれる神の顕示者は、夜明けを告げ、魂の闇夜で眠っていた人類を目覚めさせる、声高らかな呼びかけを体現する。あとは、私たち一人ひとりの自由意志にかかっている。努力して自我と貪欲さをなくすのも、信仰の両翼を羽ばたかせ、霊的な太陽たる仏陀から放散する光と生命に向かって魂の空高く舞い上がるのも、その選択は私たちに委ねられている。

「ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によって作り出される。もしも浄らかな心で話したり行ったりするならば、福楽はその人につき従う。影がそのからだから離れないように<sup>2</sup>」

その反対に、自我に負け、仏陀の栄光への嫉妬心に駆り立てられ、彼から放散される命の光を私たちの暗黒の世界から駆逐することを試み、実行することもできる。

「ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも汚れた心で話したり行ったりするならば、苦しみはその人につき従う。車をひく牛の足跡に車輪がついて行くように<sup>3)</sup>」

釈迦如来とそのダルマ(法)の名声がますます高まっていくほどに、バラモンの指導者と呼ばれていた多くの者たちと当時の改革者たちの嫉妬心はもはや抑えられないものになっていった。だが、嫉妬に駆られた行為で釈尊を最も傷つけたのは、近親だった。高弟の中に数えられていた従兄弟の提婆達多である。

- 
1. 『ミリンダ王の問い』
  2. 『ダンマパダ』 v.2. 『バガヴァッドギータ』 III.18,19, Ibid.,V.1,2.
  3. 『ダンマパダ』 v.1. 『バガヴァッドギータ』 XVIII.35.

P66

釈尊が悟りを開いてから 37 年目に提婆達多がめぐるした陰謀は、ダルマの解釈に実体的な亀裂を初めて入れるものであった。前述したように、この類の反逆は、神の化身すべてが直面する一つの定形化した試練であり、これに相似するエピソードが弥勒如来の人生にも登場するため、提婆達多のエピソードは紹介する価値がある。その提婆達多は、釈尊の弟子であるとまだ公言していた一方で、自分自身を指導者に据えた、釈尊が採用したものよりもはるかに厳格な規則で運営する新たな教団を設立する許可を釈尊に求めた。しかし拒否されたことで、釈尊と袂を分かち、自分で考案した法を整え、宣布しようとした。厳格化し、釈尊に同意を求めた規則は、僧たちの生活についてであった。托鉢僧は人里離れた場所に野宿し、糞掃衣を纏い、一軒一軒廻って乞食し（招待を受けたり、精舎<sup>1)</sup>に送り届けられた食べ物を決して受け取ってはならない）、肉食はならないというものであった。釈尊は、自らの教えはどこにしようと守ることができる、厳格化した規則に従いたいと欲する弟子の気持ちには反対しないが、厳格化は必要がなく、若者や虚弱体質者は遵守できない、と答えた。食事に関しては、食欲に任せて大食しない限り、国々で慣習になっていた食事を食べて構わないことにしていた。樹の根元だろうと、家の中だろうと、糞掃衣を纏っていようと、在家信者から布施された衣を着ようと、肉食を控えようと、肉を使った料理を食しようと、聖者になることはできた。規則を画一化させると、涅槃を求める者たちの妨げになるだろう。釈尊にとっては、涅槃への道を示すことが唯一の目的であった。

規則厳格化の提案を釈尊に拒まれると、提婆達多は自分自身の精舎に戻り、新たな教団を設立し

た。提婆達多にそそのかされて、王舎城の君主で父の頻婆娑羅王を殺し、王座に昇った阿闍世王も入団した。その後、提婆達多は阿闍世王と結託して釈尊の暗殺を3回試みた。最初は毒殺、その次に、靈鷲山の山頂から岩を落とした。だが岩は、説法をしていた釈尊の頭上に落下する前に破碎した。業を煮やした提婆達多は、王所有の像を一頭、刺激し、釈尊を襲うように仕向けたが、猛り狂っていた像は釈尊の面前まで突進するとおとなしくなった。それでも、提婆達多は策謀をめぐるしていた。しかし、いつまでも続かなかった。自分で設立した教団への入団者が次第に増えていても、一連の事件の顛末を記録した者が語るように、王たち、市民、バラモンたち、聖人たちから忌み嫌われながら、最期を迎えた。忘我するほどにひどく興奮することは幾度もあったが、その最中のことだった。

---

1.僧が住する修道施設、寺院、僧院。

P67

太陽はとどまることを知らない。太陽を自分たちの人生から抹消しようと努めても、自分たちを傷つける結果にしかならない。太陽に怖気付く者たちは夜闇の中をこそこそ逃げ回る生物へと段々と化し、最終的には、視力を完全に失った状態で、自分たち自身でつくった破滅の中へと沈んでいく。だが、宇宙が回転軸とするカルマの法則（因果応報）により、暗黒に沈んだ魂さえも、太陽の光に顔を向け、闇から姿を現すことができる。犯した罪により地獄で懲罰を受けて浄化された提婆達多がそうだった。仏陀釈尊は、提婆達多は地獄から脱すると、アッティッサラと名づけられる独覚になるだろう、と予言した<sup>1</sup>。

釈尊は、如来が存在する目的は、無価値な人間の性質を黄金に輝く魂に転ずることである、と述べている。

「こころはふるい立ち、思いつつましく、行いは清く、気をつけて行動し、みずから制し、法にしたがって生き、つとめはげむ人は、名声が高まる<sup>2</sup>」

もし釈尊が、自助努力と独自の経験分析というプロセスでこの偉大なる智慧を身につけた「非常に賢明な者」にすぎないのなら、クリシュナ、モーゼ、ゾロアスター、キリスト、ムハンマドという神の化身たちが示した事例を除き、釈尊が歴史のパノラマに打ち立てた高くそびえる業績をどう説明すればよいのだろう。また彼ら、神の太陽以外に、非常に長期間、釈尊に匹敵できるほどに人類の心を従わせ、歴史の舞台にあればほどに巨大な足跡を残した者はいただろうか。そして最後になるが、世界で一人の人間が、自助努力、いや超人的でさえある努力で、500年か千年置きに悟りを開いて仏陀になれるとしても、釈尊はなぜ、臨終が差し迫った、またはそれ以外の時でも、入滅後は誰に師事したらよいのかという弟子たちからの執拗な要望に応じて、特定の者を弟子の中から指名する代わりに、霊的な教導を直ちに必要とする事柄に関しては、自らが説いた教え(ダルマ)に従うようにと命令したのはなぜだったのだろう。

「見よ、比丘たちよ。そなたたちに告げよう、『分解はすべての構成要素に内在する。怠ることなく修行を完成させなさい<sup>3</sup>」

---

1. 『ミリンダ王の問い』

2. 『ダンマパダ』 v.24.

3. 如来の最後の言葉だった("Vayadhamma samkhora, appamadena sampadetha" 構成要素すべてが本来、滅しや  
すい。怠らずに努力せよ), 『パーラージカ・スッタ・ヴィバンガ』 I.1.4.(『ディーガ・ニカーヤ』 2部), 『マハーパリ  
ニッバーナ・スッタ』. 『バガヴァッドギータ』 II.27 も参照「生まれた者に死は必定であり、死んだ者に生は必定で  
あるから。それ故、不可避のことがらについて、あなたは嘆くべきではない」

P68

そして、数千年後の未来に、弥勒如来が到来することを予言した。悟りを開く<sup>1</sup>ことは天地ほどに世界がかけ離れた出来事であり、運命づけられた出来事であることを、釈尊は分かりすぎるくらいに分かっていた。どんなに激しい苦行に身を投じようとその成果ではない。したがって、悟りを開くという現象が意味することの結論の根拠を正統な經典にしっかりと置くなら、釈尊は神意を授けられていた事実がごく初期の複数の仏教徒によって記されていたことが判明しており、疑問が残される余地はない。すでに確認したように、釈尊もまた、過去の時代の神の顕示者と自らは同定できることを認めている。それゆえ、彼らのように、神意によって<sup>2</sup>仏陀という地位に引き上げられたことを、繰り返し明言している。釈尊が述べるように、仏陀になることは「凡夫」では果たし得ない。ごく初期の教義においてさえ、内在的な永遠なる実在<sup>3</sup>の物理的相対物にすぎず、入滅後は分解を免れぬ肉体としての姿と、法身(ダルマ)が区別されていることが分かる。

すべての宗教においてと同様に、仏教においても、時の経過とともに、釈尊の卓越性を伝える物語が数多く生まれた。しかも、考えつく限りに奇跡的な出来事が釈尊の伝説に最終的に含まれるようになった。そのいくつかを紹介するが、そのような超自然的な現象が重要であるかどうかの判断は読者に委ねなければならない。驚嘆させても、現場に立ち会った人々を除けば、誰もが超人的な卓越性を確信できたわけではない。できたとしても限られた時間の中での効果にすぎなかった。このことを誰よりもよく知っていた釈迦如来は、奇術に頼ることを拒み、超自然的な振る舞いを嫌悪していたことに疑いの余地を残さなかった。一般的に、奇跡的とみなされている現象に示される釈尊とその振る舞いの力が意味するものは、信仰という特異な現象を生み出したことが唯一の奇跡であると認識されるなら、正しく理解することができる。釈尊を始めとする神の化身たちが及ぼすことができる神秘的な力、信仰は、人間心理を構成する他すべての要素よりもはるかに抗しがたい力でもあり、世界を変革する能力を何よりも一貫して劇的に実証してきた。

---

1. 成道、悟りを開くことは、凡夫、一般人からはかけ離れた現象であることが、正統学派の研究から、際立った事

実として浮上している。しかも、合理的見解で最も傑出した仏教徒でさえも、仏陀の超自然的特質に疑問を抱いたことはないことが、パーリ仏典からうかがい知れる。

2. 仏陀は「偉大な人物」「最高の男」(Mahapurusa nrtama)と呼ばれるが、仏陀が「一人の男」ということではない。これらは最古のパラモン教典において最高位の神々の形容語句である。

3. 『ディーガ・ニカーヤ』 III.84. 『サンユッタ・ニカーヤ』 III.120.(Yo kho dhammam passati mam passati.)

P69

この奇跡を実演できたのは、神の化身こと諸仏だけであった。山のように重ね積もった人間の絶望と強欲を打ち滅ぼし、人類を真の意味で教化することで大文明の確立を可能にした。抵抗できない力を内在させた完璧な模範を示すことで確信できるに十分な理由を教えに授け、その教えを人間心理の中核まで浸透させることで永遠なる価値を稔らせることができたのは、諸仏の外にいない。人類史上で、科学、発見、文化という他の分野における業績すべてが、神の化身こと仏陀、すなわち神の顕示者によって人間の心に種が撒かれた、信仰という無比の力の副産物であり従属物にすぎない。釈尊の真の弟子と自称する人は、釈尊が忠告していた言葉を念頭から離してはならない。

「……太陽や月や星は、昇ったり沈んだり、暗くなったり晴れたりする……隠者ゴータマはそのような低次の芸術から超然としている<sup>1)</sup>」

釈尊は、他すべての人々以上に、そして同輩である神の化身たちのように、奇術師の奇術も物理的現象の操作も、結局のところ、自らの使命の真の目的たる、人類の救済と、人間の心の中に信仰と美德を復活させることには、何の永続的な効果をもたらすことができないことをあまりにもよく理解していた。その目的は、愛、真理、正義を行使し、精一杯生きることによってのみ、果たせるからである。如来たちによる人間の性質の変革が人類史上最大の奇跡であることに疑いの余地はない。大文明が開花する真因であるゆえであり、大文明の開花の前では、地球から月への飛翔、ガン治療、心臓移植やその他も、色褪せてしまう。しかも開花しなければ、これらのうちどれ一つとして、陽の目を見ることはできなかった。一方、三種の神通力を有することを釈尊が述べていたとしても、それほど不思議ではない。意のままに移動する力、人の心を読む力、教化の力が該当し、最後の教化の力は、最重要、かつ最も生産的である。

「いかにも、三つの力(神通力)を私は持っている。意のままに移動する力、読心の力、教誡の力である。しかし、最初の二つの奇跡は、三つ目の奇跡である、効果が遥かに遠大、かつ生産的な教誡の力とは比べるべくもない<sup>2)</sup>」

そこで、以下の言葉に示される、釈尊の嫌悪感を胸に刻みながら、

---

1. 『ディーガ・ニカーヤ』 1部, 『ブラフマジャーラ・スッタ』, 『テーヴィツジャ・スッタ』 v.4も参照.

2. 『アングッタラ・ニカーヤ』 I.171,172.

「ケーヴァッタよ、私が神通の不思議を嫌悪し、忌み嫌い、恥じるのは、それを行うことの危険性を見抜いているからである<sup>1)</sup>」

奇跡のオーラが、信仰という、如来（化身、アヴァターラ）が起こす説明のつかない現象を取り囲むようにしていかに最終的に織り成されていくかの確認を進めよう。理解できない現象でも、互いに説明し合おうと努めれば当惑が減ると考え、そのために、受けた心理的影響の甚大さを多数の人々に広めるのは、人間特有の欠陥である。顕著ではなくても、ある種の群居本能と言える。

凡庸な指導者のささやかな業績でさえ、本人の姿が追従者たちの視界から遠のいていくほどに、大きく誇張されていく。ならば、世界を啓発する一人の仏陀が及ぼす影響はどれほど拡大されるのだろう。あらゆることが途方もない規模で誇張されていく。それゆえ、釈尊の父親で、貴族的共和国<sup>2)</sup>のおそらく首長にすぎなかったゴータマ・シュッドーナは強大な王になる。シッダルタと呼ばれていた釈尊は、幼少の頃には32人の乳母に世話をされ、青年期には王女のように華やかな8万4千人の踊り子から歓待を受けていたと伝えられている。こうした表現が、息子と妻を、そして海水<sup>3)</sup>のように飽くことを知らない物質的渴望と快楽とに満ちた家を手放したことがいかに大きなことであったかを強調するための潤色にすぎないことは容易に推測できる。釈尊の伝説とされる超人的な出来事をもう一つ紹介しよう。母親が釈尊を懐妊した時、一万世界が光で満ち溢れ、盲者が視力を、聾者が聴力を、啞者が言語機能を取り戻し、背の曲がった者は真っ直ぐな姿勢になり、足の不自由な者は歩けるように、投獄者は解放された、などなどが起き、

---

1. 『ディーガ・ニカーヤ』 Part1, 『ケーヴァッタ・スッタ』.

2. インダス・デルタが発祥地とされる釈迦族は、ネパールの丘陵地帯の斜面から南方の平原に広がる数千平方マイルの地域を領有していた。王都はカピラヴァストゥ。釈尊の時代、一族は隣接するコーサラ国の支配下にあった。後年、仏教徒たちは、バラモンより立場を優位にするために、マハーサンマタを始祖とし、イクシュヴァークに至る、5人の王からなる成劫の素晴らしい系譜を編み出した。ポタラが統治の地だった。最後のイクシュヴァークを釈迦族は始祖とし、彼の4人の息子がカピラヴァストゥを治めた。釈迦牟尼はイクシュヴァークから数えて、7世代目の一人だった。後年、カピラヴァストゥが毘瑠璃王によって破壊されてから、釈迦族の生存者4名それぞれが、王国、Udyanna, Bamyan, Himatala, Sambi を築いた。その後、Murdhaja を筆頭とする5人の転輪聖王が登場した後に、チャイティヤから始まってマハーデーヴァを最後とする19人の王が登場し、5千、7千、8千、9千、1万、1万5千人の王が治める王朝が王国を継承した。その後、ゴータマ王が1,100人の王からなる系譜を開いたというものである。『バガヴァッド・プラナ』によれば、クリシュナは、100億人のゴビー（牛飼女）を恋人にしていたとされている。もっとも、このような莫大な数が意味をなすのは、世界総人口として受け取られる場合に限られる。

3. この比喻から、こうした考えが浮かぶかもしれない。すなわち、大海は海水で確かに満ちているが、塩だけであらう。喉の渇きを癒すことはできない。そしてこれこそが、比喻で言わんとするものである。というのも、シッダール

タが渴望していたものを癒すものは、サンサーラの大海にはなかった。「世の幸せのために働く」ことに彼は渴望していた。そのために、不死の仙薬を彼は求めていたのである。

P71

自然界のすべての花が咲き、天地の存在すべてが喜びに満たされ、地獄の火ですら鎮火し、地獄に落ちた者への拷問が和らいだこと<sup>1</sup>他、想像できる限りのあらゆる吉祥が生じた、と伝えられている。さらに言えば、聖なる遺物を中に安置した容器はそれより神聖さが劣るものの保護にはもはや使えないように、母親は釈尊を身ごもった以降は懐妊することができなかった。それゆえ、出産して7日目に死去する。釈尊は誕生すると、7歩歩み、獅子が咆哮するように、「私は世界で最高の者である。これが最後の生まれであり、もはや二度と生まれることはない」と言い放つと、32の歡喜のしるしが天地に再び現れたとされている。

ここにあげたことすべてが、釈尊の比類なき偉大さを示すものであり、人間の真の解放と幸福は釈尊の出現に左右されることを示唆している。このような伝承すべてに接する鍵は、解明し、回帰性があることを認めることにある。上記した身体症状と自然現象は、そのすべてに靈的かつ心理的な相対物があるゆえに、象徴的寓意にすぎない。しかも、このような空想に回帰性があることは、クリシュナ、ラーマを含む、神の顕示者の人生を取り囲む伝説を調査すれば、容易に検証することができる。

釈尊の業績と属性はこれらにとどまらない。どれも同様に驚かせられる。先達である昔日の諸仏にまつわる寓話からの借り物もあるが、釈尊のみに当てはまってかつ寓意を含んだものは合理的解釈をしなければならない。釈尊の業績と属性の記録者は、釈尊が悟りを開いた瞬間、酔っぱらって平衡感覚を失い、ひっくり返った女のように、全地球が揺れ動いたと伝えている。これが、新たに見出されたダルマが古い世界とその価値観を揺さぶり、転覆させたことを意味していることは、容易に理解できる。続けて、空が光輝き、何人ものシッタ<sup>2</sup>があらゆる方向にいる群衆の中に現れると、太鼓を打ち鳴らすかのような轟音を立て、雷鳴が空全体に轟き渡ったと記されている。心地良いそよ風が柔らかに吹き、雲ひとつない空から雨が降り、季節外れの花々と果物が樹々から落下したとも書かれている。どれもが釈尊への崇敬の念を示そうとしているかのようだ。曼陀羅華の花と蓮の花が咲き、金と緑柱石でできた睡蓮が上空から降ってくると、

---

1. 『ジャータカ』 51,52.

2. 真っ直ぐな(正しい)者たち。「完成した者(成し遂げた者)」「人生を純粋になした者」も意味する。同じ比喩が当時より数千年前のヒンズーの教典でも用いられている。『バガヴァッドギータ』 XI.36 を参照。アルジュナは言った。「クリシュナよ、あなたへの称賛により、世界が歡喜し熱中するのも、もっともなことである。羅刹どもは恐れて諸方に逃げ、すべてのシッタの群れは敬礼する」。

釈迦牟尼がいる近くの地面に落ち、神々の世界の一角のような佇まいになした。この時、怒る者も、具合を悪くしている者も、悲しんでいる者も、どこにもいなかった。悪い行いをする者も、奢る者もいなかった。完全完璧な境地に達したかのように、世界は深閑と静まっていった。歓喜が、あらゆる階層で救済を切望していた神々の間に広がり、その世界の下の領域に住む者たちの中にも広がった。あらゆる場で、有徳な行為が強められ、ダルマの影響が高まり、世界は汚れた熱情と無明の闇から立ち上がった。かつては人間の守護者であり、先見力ある王族であった日種の先見者たちは、釈迦牟尼の功業に驚き、喜び溢れながら、天界のそれぞれの邸宅の中で立ち上がり、敬意を表した。彼ら王族の先見者たちが目に見えない無数の存在の中に立ち交じり、釈尊の名声を広める声が聞こえた。生きとし生けるものが物事が滞りなく進んでいることを察して喜んだ<sup>1</sup>。この出来事すべてが靈性の春が到来し、人間の中にくすぶる不満という冬を追い払い、絶望に掴み取られて凍えていた心を解きほぐし、希望ある新たな夜明け、救済の新たな時代へと人類を案内していることを意味している。

別の語り手は、釈尊の超人的な強靱さと 32 の美のしるし<sup>2</sup>について物語る。釈尊の身体が金色を帯びているのは、その清浄さと、彼の氏族(系族)が古代の日種の祖イクシュヴァーク<sup>3</sup>の末裔であることの両方をももちろん象徴する。『マハープラジュニャーパーラミター・スートラ<sup>4</sup>』と『ラトノルカ・ダラニ<sup>5</sup>』では、六色の光線からなる後光が釈尊の身体から放たれていると記されている。こうした現象は常に別の解釈がなされているが、釈尊自身が地球の四隅と対極地点で必要とされている様々なことに応えて説法している姿を象徴していることは、容易に想起される。一千輻輪相を施した釈尊の足跡のことが記されている<sup>6</sup>ことにも、特別な意義がある。束縛する無数の絡み合いが、真に解放された者、如来の足により常に踏みつけられて破碎されていることを意味するのは明らかである。

---

1. クリシュナの生誕にも同様なことが述べられている。「四方が輝き出した。大空は新しい星々で輝いた。町や村は吉祥の品々で豊かになった。濁った川が清流となった。蓮の花が咲いた。森は花々の間を飛び交う鳥のさえずりで活気づいた」『バガヴァッド・プラナ』

2. これらの属性を、ラーマやクリシュナのような他の化身も身につけている。

3. 『ディーガ・ニカーヤ』Part1. 釈尊が、ヒンズー教の化身、ラーマの末裔であることの詳細については、pp.16-18, Jamshed Fozdar, *The God of Buddha* (Casa Editrice Bahá'í Srl, Italy, 1995)も参照。

4. 『マハープラジュニャーパーラミター・スートラ』1. pp.437-452. esp.p.446.

5. Shantideya, *Shiksha-Samuccaya*, p.334.

6. 足跡がある聖地については(Pali, pada-catiyas) 『マハープラジュニャーパーラミター・スートラ』1. p.272.

『マハーヴァストゥ<sup>1</sup>』には、釈尊は五眼を有していることが記されている。肉眼、天眼、慧眼、法眼と、仏陀が所有するこれらの四眼をすべてそなえた仏眼を指す。

すべてとは言わないまでも、仏教で釈尊に帰属させる諸々の力と特質は、ヒンズー教の初期教典で絶対者の化身や神々が所有するものと認められているものと重なる点が非常に多い。さらに言えば、地上に降誕する時と場所を自由に選べた天上世界にいた時代から母親の脇から生まれて誕生直後に7歩あゆむまで、出奔してから菩提樹の根元で大いなる悟りを開くまでの、仏教神話で描かれている釈尊の人生で際立った様相すべてが、当時より時代をはるかに遡るヴェーダ<sup>2</sup>の神話に登場する、火の神で司祭のアグニと、王インドラにそのまま当てはまることを、熱心な探求者なら気づくことだろう。ヴェーダでは「アラハト(阿羅漢)」の称号がアグニとインドラという二人の神々にしばしばあてがわれている。アグニは仏陀のように、夜明けとともに目覚める太陽の象徴であり、インドラは知性の目覚め<sup>3</sup>を象徴する。仏陀のように、アグニもまた、世界の眼<sup>4</sup>として語られている。

初期の仏教徒全員が、ヒンズー教徒であったため、伝承が同一視できることに完全に気づいていた。しかも、彼ら自身、周囲にいたヒンズー教徒の中であまねく広まっていたカルマの概念と、転生の神話にすっかり感化されていたため、ヒンズー教徒と仏教徒が信じるものが酷似していると説明することは、実に理に適っていた。釈尊とその功業、奇跡が、輪廻転生するカルマのプロセスに従った功德の現れとして説明できたのは、釈尊自身が、過去生では、ヒンズーの神々や英雄たちと交遊していたとしばしば語っていたことに由来する部分が大い。

---

1. 『マハーヴァストゥ』 I, p.158.

2. 『知識の諸本』. ヒンズー系アーリヤ人の最古の教典。四大ヴェーダ聖典は『リグ・ヴェーダ』 『サーマ・ヴェーダ』 『ヤジュル・ヴェーダ』 『アタルヴァ・ヴェーダ』。各々が讃歌と儀式上の訓えの2部で構成される。

3. 『リグ・ヴェーダ』 V.75.5.

4. *Taittiriya-Samhita*, II.9.3., II.5.8.2.

## カルマと輪廻転生についての誤謬

「まことであるものを、まことであると知り、まことでないものを、まことでないと思えず人は、

正しい思いにしたがって、ついにまこと、真実に達する<sup>1)</sup>」

奇跡的なものごとをこよなく好み、しかも、苦難に満ちた日常から目を背けるために超自然的なものへの逃避を強く欲する人々が、人類の大半を占めている。20世紀に生きる私たちとて例外ではない。ならば、はるかな昔の祖先たちの現実逃避願望はどれほど強かったことか。神の化身すべての初期信者たちがその崇拜対象の周りに奇跡を伝える神話を速やかに織り成していったことは、宗教史に常に共通する一つの重要な事実であり、釈尊の信者たちとて例外ではなかった。

ごく初期の弟子から最大の尊敬と崇敬を捧げられていた釈尊の虚飾なき実体を、後世の信者が、如来という現象の真意からかけ離れた自分たちの想像による超自然的な行為と奇跡の数々でたちまちに覆い包んだのは、至極当然だった。当初、釈尊の人生の多くの出来事は、大きな関心をまだ払われていなかったが、世代を経るに従い、重要性を帯びていく運命にあった。だが、実際の詳細が欠如していたために、伝記の記録者は敬意を込めながら空想で段々と飾らざるを得なくなり、古来のヒンズー教の伝説から借りたり、自分たち自身で考案した。しかし、釈尊の並外れた偉大さを絶えず強調し続けていたのは、ごく初期の弟子たちも同じだった。

---

1. 『ダンマパダ』v.12.

パーリ仏典には、釈尊は自らのいくつもの前世を完全に記憶していたと記されている<sup>1)</sup>。そこから輪廻転生肯定説が断言され、私たちが個々の人格の再現を果てしなく思えるほどに繰り返していくという巷間で人気がある概念としばしば一緒くたにされている。だが、輪廻転生によって肉体の再生が可能となるという言葉はおろか、意味することの信憑性ある説明すら、釈尊の発言のどこにも見出されない。他方、生成変化の流れの中で往っては来るという輪廻転生のサイクルが単なる肉体的な生まれ変わりとして解釈されるなら、凡夫は過去生の記憶も善悪いずれにせよ為した行いの記憶もないゆえに、そのサイクルにもう一度押し込まれるというのは筋が通らない。まったくの偶然からなる子供じみた意地悪いゲームのように思える。そうした解釈は、釈尊の比類のない意識からも

たらされたものではなく、教説として忠実に受け入れる価値はない。それにもかかわらず、輪廻転生についての誤謬の狡猾な影響が釈尊の法に広く浸透し、ラーマとクリシュナという神の他の化身が説いた福音は言うにも及ばず、釈迦如来が説くダルマの真の意図と意味を大きく曲解させている。それゆえ、簡素な美を備えて完璧な、過去の仏陀全員だけでなく今や出現した弥勒如来が説いた無双のダルマ(法)に忠実に従う意向が私たちにあるなら、転生に関するこの誤謬を最初に形成し、誤謬がその色褪せていくアイデンティティを維持するために飼料を与え続けてきた短絡思想的な概念を完全かつ決定的に明るみにさらすより他に選択肢はない。

輪廻転生こと、別の肉体への生まれ変わりという概念を最初に提唱したのは、ヴェーダの思想家たちであった。この概念が涅槃(救済)の境地に達するために不可欠な仕組みであるとしたのは、理性的魂である人間が一度の人生で罪と不完全さから解放され得ることを彼らが受け入れられなかったことに起因する。そこで古代のヒンズー教徒でもあった彼らは、魂が一切の不完全さを振り捨てて救済されるために、誕生と死を何度も繰り返す、生まれ変わる、という理論を策定した。だがもちろん、彼ら哲学識者もこの誤謬の後世の多数の主唱者も、過去生での失敗や功績の記憶がないまま、最終的に救済されるには、現在の行いを過去生の行いの上はどう積み上げていけばよいのかという問いに答えたことは決してなかった。

---

1. 『ジャータカ』のいくつかのバージョンでは、釈尊が、389億7100万年前に遡る過去生で自らは何者であったかを知っていると記している。同様なことがヒンズーの経典にも見出される。『バガヴァッドギータ』X.33を参照。「私はまさに不滅の時間である」。『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』VI.1.2。「彼、時間の創造主は純粹なる意識そのものである。すべてに力強く、全知なる御方よ」。『リグ・ヴェーダ』25.1も参照。

P76

これから確認していくとおり、この問題は、ヒンズー教徒たちの神意を受けた古代の教師たちが提唱した、人間状況において作用する因果関係(カルマの法則)の真意が誤解されていたことに端を発する。不注意か他の何かがかきかけだったとしても、この誤解は、非常に収斂されてかつ、圧倒的なほどに物質的で擬人化された宇宙についての概念と、初期ヒンズー教の哲学識者たちが所有していた概念上の支配力とに、その起源を遡ることができる。これらの影響力は、釈尊の時代においてすら強力だった。カルマの法則のすべてに行き渡る作用を説明するために釈尊が用いた簡略な寓話を誤解するほどに、また、カルマの法則と、輪廻転生の誤った概念との区別がつかなくなるほどに、初期仏教徒の理念を強く形成していたのである。個人的人格を備えた各人の魂が、その行為(カルマ)の蓄積か、個々の結果により、後退か前進のいずれかをするために、死後例外なく、この地上で肉体を伴った再生をするというのが、輪廻転生の原始的「仕組み」だった。換言すれば、昆虫や動物などの下等生物としてか、前世の時よりも低い階級か高い地位の人間として地球に戻るという仕組みだ。そして実に稀有だが、無数の前世の経験次第では、ついに人格を完成させ、涅槃(永遠の至福)に向かって羽ばたくことができるとされた。

さて、最初に簡単な質問をしてみよう。「カルマの法則がなぜ存在する必要があるのだろう」。普遍的正義によって、善悪いずれにせよ、行為は適切な賞罰を受けることが要求される。これが答えだ。

「悪いことをなす者は、この世で悔いに悩み、来世でも悔いに悩み、ふたつのところで悔いに悩む。『わたしは悪いことをしました』といって悔いに悩み、苦悩の奈落<sup>1</sup>におもむいて、罪のむくいを受けてさらに悩む」

「善いことをなす者は、この世で歓喜し、来世でも歓喜し、ふたつのところで共に歓喜する。『わたしは善いことをしました』といって歓喜し、幸ある天界<sup>2</sup>におもむいて、さらに喜ぶ」

---

1.地獄. 地獄も天国も最終的には精神状態と分析されるが、肉体で体験する状態と一般的に混同されている. このことについての詳細は、Jamshed Fozdar, *The God of Buddha* (Casa Editrice Bahá'í Srl, Italy, 1995), pp.77-79,122 を参照.

2.天国. 『ダンマパダ』 v.17,18. 『バガヴァッドギータ』 XVIII.57,58 も参照.「心によりすべての行為を私のうちに委ね、私に専念して、知性のヨーガに依存し、常に私に心を向ける者であれ。されば、私の恩寵により、すべての苦難を越えるであろう。もし我執により、私の教えを聞かないならば、あなたは滅亡するであろう」

P77

カルマの法則について簡潔に述べたこの言葉を理解するうえでどんな予期せぬ考えが派生的に伴われようと、行為には賞罰が与えられるという信念が人間心理に深く染み込み、人間が取る行動すべての基本的特性を形成することは、確かである。それゆえ「善」は望ましく報奨を受けるものである一方、「悪」は回避されるべきであることが私たちの良心に常に働きかけてきたことは、歴然としている。したがって、カルマの法則に人類に提供すべき教訓があるなら、善行によってのみ、自己が高められ、完璧さに達することが可能になる、ということになる。上記した前提は理性的魂である人間自身に当てはまり、「まいた種は刈らねばならない」として、神の教師すべてがこれまでに何度も繰り返し説いてきている。ならば、カルマの法則のあくまでも正当で合理的なこの基本的概念を、何が曲解させ、適用と運用が共通していても、おかしな誤った輪廻転生信仰を注入したのだろう。詳しくは後述するが、ここでは、『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド<sup>1</sup>』に記された言葉を調査しよう。

彫刻家が彫像から材料を取り、そこから別の新しい、より美しい姿を彫るように、この魂もまた、肉体を離れ、無知から脱した後は、父祖、ガンダルヴァ、神々、プラジャパティ、ブラフマンか、その他の存在の姿をした、別の新しい、より美しい姿を自らのために創造する。

ここには、魂は無知を取り除いた、または啓発された後は、別の新しい、より美しい姿を創り出すための意志を行使できることが示されている。地上で人生を送る間に、善行をする選択をして遂行することで、悪しか生まない無知を滅し、死後は倫理的にすぐれた乗り物に乗って旅することが示唆されているなら、釈尊自身の教えと完璧に調和する。

「善いことをした人は、この世で喜び、来世でも喜び、ふたつのところで共に喜ぶ。かれは、自分の行為が淨らかなのを見て、喜び、楽しむ<sup>2)</sup>」

肉体を携えて物理的世界に戻るとは、上の句のどこにも言及も示唆すらもされていない。ウパニシャッドで「より美しい姿」と表現されているものすべてが、靈的存在を意味していることは明白である。さらに、ウパニシャッドの言葉とおりに、当の魂が「無知」をすでに滅していたなら、魂は過去生の行いを完全に自覚している、ということに当然ならなければならない。

---

1. 『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』 IV.4.4.

2. 『ダンマパダ』 v.16. 『ダンマパダ』 v.86,177 も参照.

P78

だが、この地上で現世を生きる人で、自分の過去生を知っている人はいない。それゆえ、ウパニシャッドで語られているだけでなく、釈尊自身の 76 頁の発言によってもはっきりと確証されている、すでに「無知を取り除いた」ことで完全な知識を持ち、「わたくしは悪いことをしました……善いことをしました」と述べている存在が、この惑星上の存在であるはずはない。過去生の経験も当時の意識もほぼ覚えていない私たちが生きるこの地上生活に、彼らが肉体を携えて再生していないことは疑いようがない。このウパニシャッドの別の箇所では、肉体を持って生活していたこの地上から出立する魂の旅が以下のように描かれている。

身をくねらせて草の葉先まで到達した青虫が新しい草の葉に身を移すように、肉体を離れた人間も新しい存在に身を移す。魂が肉体から外に出ると、生命もそれに続いて動き出し、生命が動くと、さまざまな重要な要素が微風となって生命を追う。(当人の後に) 当人の知識、行為、以前の「識」が追従する<sup>1)</sup>。

ここでも、「識<sup>2)</sup>」が理性的魂を構成するための不可欠な要素であることが改めて示されている。このように明言されていることを踏まえると、上記した引用句中の「新たな存在」を、肉体を伴ってこの地上に戻った存在を意味するとみなすことはできない。しかし、上記の比喩がきわめて単純化

されているため、肉体を持った存在に必ず戻るという想像がよりたやすい概念を、短絡思考をする人はあっさり受け入れかねない。それゆえ「以前の『識』」という鍵的な言葉がウパニシャッドで意図的に強調されているように思われる。これがなければ、すべての記憶が失われ、無意味になるからである。すると、地上に戻るプロセスの目的全体が効力を失い、肉体を伴う再生、すなわち輪廻転生も無効になる。私たちのうち誰一人として「以前の『識』」を持っていることを証明できないからだ。理性的魂が自らを絶えず浄化し続けるには、認知と記憶という「以前の『識』」を持ち合わせていなければならない。この重要条件が、私たちの真我（魂）の生まれ変わりプロセスは確かに生じるが、物理的存在の外側にある形而上学的、すなわち霊的次元で起きることを明示している。

---

1. 『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』IV.4.3. クリシュナも宣べた。「この世においても、来世においても、そのような人は決して滅びはしない。善をなす者は誰も悪趣に赴かないから」『バガヴァッドギータ』VI.40.——この言葉は人間すべてに通じること、読者は同意するだろう。自己の救済という主題を嫌忌する人はいないからである。それゆえ、この物理的次元での人生を出発した後の魂の状態についての様々な記述と、経験するプロセス（VI.41-45）は、霊的な境地を物理的状态に擬えて表現したものであるにすぎない。ちなみに43句にはこう記されている。「アルジュナよ、そこで彼は前世の『識』を所有している」——（識を除き、過去生からのものを、誰もがこの現世では何も持ち合わせていない）。

2. ※訳者注：阿頼耶識を含む「識」が由来するサンスクリット語の 'vijñāna' ヴィジュニャーナは、英語では、'consciousness' と一般的に訳出されている。これに従い、本書の原文で使用され、'vijñāna'に相当すると判断される'consciousness'は「識」で統一する。

P79

別のウパニシャッド<sup>1</sup>から、詩を一篇、引用しよう。字面からは、本論の命題とは相容れない印象を、読者は受けるだろう。生まれ変わりとは、どの事例でも魂の再生だけを意味し、魂の再生とは、過去を完全に認知して記憶しながら霊的次元に生まれかわり、地球という物理的次元には戻らないことを意味する。これが本論の命題である。

具現化のために胎内に入る魂がいれば、その行いに応じて、その考えに応じて、静止した物体に入る魂もいる。欲望に次ぐ欲望を形づくりながら眠っている者の中で、目を覚ましている者こそが純粹である。その者こそが、不死と呼ばれるブラフマンである。その中にすべての世界があり、それを「超える」者は誰もいない。まことに、それはその者である。

「胎」は胎芽が宿る家、「具現化」は物理的な「具体化」、「静止物体」は樹木、岩石他の様々な固体とするなら、この詩を理解する最も単純な捉え方となるだろう。古代の純朴な大多数の人々がほぼ例外なくこうした考え方に馴染んでいたように、このような捉え方を常にしている人は今日でも多

い。森羅万象について彼らが抱く概念が限定されていることに、主に起因する。それゆえ、こうした過度に単純化した説明によって錯誤していたのは古代の人々だけではない。私たちもそのような説明を受け入れるなら同様に錯誤を犯すことになる。物理的現象に関わる意味すべてを単純化するこうした概念に合理性があるように見れるのは、その適用範囲に認知と知性を備えた理性的魂を含めず、動物、植物、鉱物のような物理的な生命体や現象に制限する場合に限定される。すでに説明したとおり(28-29 頁)、それらすべてに完全に理性が欠如しているからである。したがって、こうした理性なき生命体の中に以前と同一の属性と特性が回帰するという複製現象については、それら生命体が自分自身を知らない以上、証明も反証もすることができない。この転生論を人間(理性的魂)に当てはめるなら、こうした厄介は生じない。人間は自分自身を知っているからである。ウパニシャッドでは、このことを証言するために、人間は地上にいる間になした行いをその後の人生で認知していると明言されている。それゆえ、私たちが過去生を認知できず、善悪いずれにせよ、為した行いの記憶がないなら、どうやって転生を証明するのだろうか。そもそも、釈尊も、奥義書ウパニシャッドも、苦しみのプロセス全体が、俗世界のものすべてから私たち自身を解放することを学ぶための教育にすぎないと述べているのだから、肉体の中に生まれ変わる必要がなぜあるのだろうか。

---

1. 『カタ・ウパニシャッド』II.2.7,8.

P80

釈尊とウパニシャッドは、私たちは意識以外の何ものでもなく<sup>1</sup>、意識の目に映るもの以外に現実はない、とも明言している。必要とされることが、意識の浄化、すなわち、この世の物事からの意識の解放なら、この肉体の中にまた生まれることにどんな目的があるのだろうか。意識「真我」は、地上から離れた形而上学的な霊的次元である次の世では、地上での諸々の束縛から少なくとも解放され得るという考えが思い浮かばないだろうか。地獄、天国、涅槃は、意識だけが経験する境地ではないだろうか。ならば、肉体の生まれ変わりを主張するためにあらゆるおかしいな比喻を考えつくことに、なぜ常に没頭しているのだろうか。何が生まれ変わるのか。私たちの認知していることや、記憶でないことは間違いない。意識ではない。ならば、何が輪廻転生するのか。もちろん、何もなし。なぜなら、何も転生しないからだ。それとも、ブラフマンの天はあまりに狭小ゆえ、ごく少数の者しかその中に入れず、無数のその他大勢はこの地上に降りて、まったくの偶然で展開するゲームに延々と参加しなければならないのだろうか。そのような悲劇を許しているブラフマンに罪はあるのか。「目のある者は、胸が悪くなるこの光景を見ることができる。なぜ、ブラフマンはその被造物を正さぬのか」と、ブラフマンを非難した初期仏教徒が正当だったのか。

この三つの問いへの答えはもちろん「いいえ」である。ブラフマンに咎はない。この錯誤の理由はどこか別の場所にあり、初期のヒンズー教徒と仏教徒が保持していた宇宙に関する収斂された物理的概念に関係する。すでに示したとおり(37-40 頁)、彼らの心理に映るブラフマンは実に擬人化

されていた結果、ブラフマローカ（ブラフマンの世界）もまた、非常に物質的になっていた。この物質的見地から、不滅への切なる願望をなだめると同時に、カルマの法則に関する自分たちの概念の万全を期すために考案されたのが、説明を伴って運用される精巧な構造だった。こうして、輪廻転生の誤謬が形成された。

20世紀後半に入るまで、人類の圧倒的大多数は、地球とは、大小の眩い光（太陽、月、星）がぶら下がる屋根（空）を支える森羅万象、それがすべてであると考えていた<sup>2</sup>。そうした「固体」の証拠を眼前にし、それらとは違うもの一切を想像できなかった。

---

1. 『ディーガ・ニカーヤ』II.157.

2. ヴェーダの詩人が、地球を「一つの車輪のような形状で拡張され、広範で境界がない」ものとして想像していたことが、ヴェーダ文献においての説明から分かる。取り囲む大海についての言及は一切なされていない。彼らにとっての宇宙とは、大地と空からなる最も古代的な姿をしていた。

P81

彼らの意識はこうした原始的で閉塞的な宇宙論に囚われていたため、純粋に物理的なものを超越する「物事の構造」を想像することができなかった。この物理的な世界においては、地球が神羅万象を体現していたように、人間の進歩と後退は、昆虫、爬虫類、動物、人間という千差万別の姿で来ては往く、無限のサイクルとして説明されるのが必然だった。古代の人たちは、魂意識は本質的に人間だけが所有するものであることを知らなかったため、人間の特質と動物のそれが完全に交換可能だと想像することは間違いであることに気づいていなかったのである。

適切な形而上学的概念に欠如していたために、この「メリーゴーランド」から究極的に解放され、永遠の至福の境地である涅槃への到達という最終的な完成を果たすことすら、説明がつかない無意識の状態、もっと簡単に言えば、死という完全なる消滅どころか、これら以上のものであることを、大多数の人々は理解していなかった。

古代の人たちは、理性的魂という人間の本質を知らず、人間はその他の生き物すべてとは程度はおろか種からして違うことに気付いていなかった。そこで、自分たちの存在と、周囲環境についての「なぜ」と「何のために」への解答を限界ある想像力で理解できる宇宙論を構築したことで、前世における行為に従い、動物にも、高い地位の人間にも個人の人格が転生することを、物事の当然の秩序として、容易に受け入れることが可能になった。病気の原因も胎芽に及ぼすその影響も想像できないため、新生児が身体障害を背負っていたり盲目で生まれてきた際に起こる大混乱を、カルマの法則を自分が正しく理解していることのさらなる立証とみなした。簡潔に言えば、限界ある視点が、限界ある意識を満足するために、限界ある世界観を構築したのである。

だがやがて、知識の容赦ない行進が始まり、古代の人たちのささやかで緻密な世界観に壊滅的な

ヒビを入れ始めた。天文学の知識が膨大かつ突然に拡大し、地球中心だった人類の宇宙観を永劫に打ち砕き、果てしない宇宙の中では、自分たちが居住するささやかな惑星は、海岸の砂粒一つと変わらないちっぽけな存在にすぎないことを受け入れるよう、人間の意識を開いたのだ。医学、生物学、化学の分野での諸々の発見は、新生児を襲った悲劇は前世の所業によるのではなく、全く違う原因が引き起こした結果であったことと、こうした痛ましい障害も治癒が可能であり、病気の制圧と根絶への努力により撲滅さえできることも実証したのである。

それゆえ、『カタ・ウパニシャド』から引用した先の詩に、認知と記憶である「識」という重要因子を内包させると、詩中で取り上げられているものすべてが形而上学的な概念を示すものとなるため、意味が明白になり、整合性が備わる。

P82

「子宮<sup>1</sup>」は、理性的魂である私たちが新たな霊的次元に出現するために通過する入り口とみなすことができる。その新しい次元には、私たちの過去の行いによって、天国か地獄を経験する心理的境地も含まれる。「具現化」は身体を所有するようになることを単に意味する。肉体である必要はなく、霊体と考えた方が筋が通る。「静止した物体」は動く物体が持つ自由を欠如した物体であり、地面に根付いている。人間以外の姿である、動物になった自分や、樹木や岩石のような「静止した物体」になった自分を心に思い描くのに多くの想像力は要らない。無知の行為で霊性が重く低下し、浅はかな欲望という根を地下に伸ばして動かぬ樹木のように静止している一部の人の姿がそこに示されている。そしてウパニシャッドに記されているように、純粹さの極みに最終的に達した人はその功德で、最高の世界、ブラフマンの世界に存在することになる。さてここで、魂の死後の進歩について、79頁のこのウパニシャッドの教えと、以下に引用する釈尊自身の教えが、表現も意味も驚くほどに同一視できることが確認できる。

「ある者は胎内に入り、悪人は地獄へ、善人は天国へ、煩悩のない者は涅槃に至る<sup>2</sup>」

私たちがまた、字面からの比喩解釈への誘惑に屈し、以前の「識」を持たず、どんな悪行を犯したかを知らないまま、地上で別の肉体に転生をする、と句中の言葉を解釈することもできる。だがそうした場合、私たちは自分が犯した悪行を自覚している、私たちは自分たちがしたことを分かっていると、釈尊が以下に明言していることにどう答えたらよいのだろう。

「悪いことをした人は、この世で憂え、来世でも憂え、ふたつのところで共に憂える。かれは、自分の行為が汚れているのを見て、憂え、悩む<sup>3</sup>」

そして最終的に、上の句で言及されている「この世」も、同じ句中の「来世」も、同じ物理的次元の世界だろうか。それとも釈尊が混同していただいただけなのだろうか。釈尊が正しく、「来世」が肉体でな

く霊体で生きる世界を指しているのが確かなら、すべての観念を物質的な物事と同一視しようとするのをやめなければならない。「幻を破壊せよ。されば、物事と触れても、思い違いを生むことはなくなるだろう<sup>4)</sup>」との釈尊の忠言に従い、私たちは幻を破壊しなければならない。

---

1. 子供が体格を発達させるように、誰もが現世にいる間に、霊的潜在性(精神的強靱さ、実体を見抜く視力、精神的資質他)を発達させることが想定されている。その必要性に無知なまま肉体の死を迎えても、霊性のさらなる発達にふさわしい次元へと赴くことになる。それまでの待機空間が「子宮」という言葉で表現されている。

2. 『ダンマパダ』 v.126.

3. 『ダンマパダ』 v.15.

4. 『マハーヴァツガ』 1.6.(19-28)

P83

さもなければ、釈尊が述べるとおり、「まことでないものを、まことであると見なし、まことであるものを、まことではないと見なす人々は、あやまった思いにとらわれて、ついにまこと、真実に達しない<sup>1)</sup>」。

動物における本能的行動パターンの科学的研究により、創造的かつ合理的思考は人間だけが特権的に有する特質であることが証明されたことで、人間の人格が動物の中に転生したり、その逆が起こるといった概念は完全に筋道の立たないものになっている。意識の特定の側面と、それらが物体に及ぼす影響が発見されただけでなく、天文学的距離に離れた先の物理的現象を決定し制御するための抽象的な数学概念の利用が進み、非物理的現実を受け入れるよう、私たちの精神の地平がさらに広げられたことで、私たちの本質的自己の大部分は物質的どころか、精神的なものである可能性は合理的であると受けとめられている。

私たちの研究対象であるあらゆる物理的現象に秩序と目的が反映されていること、森羅万象は作用完璧な永遠なる法則によって繊細な匙加減で均衡を保たれている一つの壮大な機械であることを、私たちは認識し始めている。その法則を、意識の力を通じ、私たち（と他の諸々の世界にいる別の理性的存在）だけが発見し、理解し、活用することができる。この法則をより理解しようとする人間の探求心を喩えるなら、父親が行なっていることとその目的を理解するためにゆっくりと成長していく子供の知能に似ている。絆は明らかになる。知能は周囲の物事を理解しようと努め、理性の本質とは、創造というこの広大な業を理解するためだけでなく、畏敬の念を引き起こすその作用を予測し、人間を益するためにその力を活用するのに必要な道具を考案するための最善の手段でもあることを見出す。

無限大の知性はその手作業で創造したものに出会い、実体なき神秘的な資質である知性がこの惑星に居住する存在の中では人間だけに与えられているのは偶発的なことではない。このことを、人

間はその知能でゆっくりと理解し始めている。それどころか、至高の知性とは、宇宙全体を創造する力、すなわち原因であり、私たちの無上の鋭敏な感覚や最先端の手段で対処できる範囲外に永遠にありながら、私たちとその有限の知能も含まれている途方もない創造の中で、万華鏡のように果てしなく千変万化する効果を通じて、その存在を示している。そして私たちは、創造についての理解が進むほど、かの至高の知性がその法則を通じてそれ自体をより鮮明に示すようになることに気がつくようとしている。

---

1. 『ダンマバダ』 v.11.

P84

その法則とは、あらゆる状態を統べ、自然界と同じほどに太古の時代から存在し、宿命と同じく固定された法則である。

さて、私たちは、自分たちの意識から創り出した椅子やテーブルなどの被造物が、自動車や航空機のようなより高度な被造物の一部に組み込ませている、可動性、動力、速度他の属性を内包するようになることなど期待していない。それと同じように、無限に高度で理性的な知能が無意味なゲームに興じるなど、期待するどころか、馬鹿げているにも程があるだろう。その最高の被造物である人間の合理的思考、知覚、記憶（一言でいえば「識」）を破壊してから、「人間」の残骸らしきものを圧搾し、知覚と合理的思考が完全に欠如した昆虫、爬虫類、動物などの下等生物の中に投入するなどあり得ない。私たちが過去生の過ちを忘れているのも、来世で順を追って取るべき正しい行いを論理的に考え出すことができないのも、そのせいとでも言うのだろうか。私たちを動物レベルに降格するといった合理性と正当性に欠いた行為は、飛行機に癩癩を起こした設計者が、その翼を切り取り、プロペラと車輪を壊し、エンジンを外した後の空洞状の残骸をテーブルや棚に紐で固定し、テーブルや棚のような静物にすることで、もはやその創造主を苛立たせることがないようにするのと実質的に等しい。そんなことをするなど不条理も甚だしく、設計者が自分の被造物に惜しみなく注ぎ込んだ時間と愛をすべて無駄にすることになるだろう、と誰もが意見を一致する。飛行機を改良するには、その欠点を直し、創造した目的を果たさせるしかないだろう<sup>1</sup>。同様にある教師が、一人の生徒の誤りと欠点到癩癩を起こして頭を殴るなら、生徒は記憶喪失になったり、失明したり、耳が聴こえなくなるかもしれない。または、その不運な生徒に四つん這いで歩行させ、犬のような鳴き声をあげさせるかもしれない。もしそんなことが起きたら、実に不条理だろう。生徒の知能向上を唯一の目的とする教師がそのような体罰を課したなら、目標にしていたことを完全に見失うことになっただろう。

だが、この同じ教師は、自分自身の息子にはそのような意味がない過酷な仕打ちをすることはないだろう。父としての愛情で息子と強く結ばれ、愛を注ぐ対象にさらなる高みに向かって進歩してもらいたいと欲しているからだ。そして必要であれば、自分自身の富や人生を犠牲にしても、息子

にはひたすら忍耐強くあるよう自身を律するだろう。

---

1.ウパニシャッドの思想家すべてがこのことに同意している。『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』Ⅲ.14.1 とⅢ.1.10を参照。『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』Ⅲ.2.13も参照。

P85

さて、ここで質問をしたい。私たち自身である理性的自己を誕生させただけでなく、私たちが星々に手を伸ばし、共に戯れようとしつつある現時点に至るまで、数百万年もの歳月を生き抜ける途方もない力を授けてくれた無限に完璧な知能が、私たちを下等動物に降格することで、知性、記憶、思考という精神的感覚を消滅させ、知能を育むというその大きな目的を無価値にし続けている、と考えることが理に適っていると言えるだろうか。この時点で、動物は合理的思考も知覚も完全に欠如していると本論で主張していても、それは、私たちが動物の言語で彼らと意思疎通できないからにすぎず、人間の人格や意識が動物の中に転生するのを不可能とする証拠にはならない、と言う人もいるかもしれない。そのような人たちには、転生の御伽話を別の見方から考えれば、この不確かさの中でもがく必要はもはやなくなることを喜んでお知らせしよう。(ア)動物から人間、(イ)前世での地位が高い人間から現世での低い人間、(ウ)(イ)の逆という、三つの様相すべての最終製品は、考え、話すことが完全にできる人間だ。しかも、人間らしくあることが可能なら、過去のことを思い出すこともできる。では、どのタイプの間にも声をかけ、過去生について何でもよいから覚えているかどうか、どんな善行を悪行をしたかを聞いてみるといい。すると、必ずと言っていいほど、「いいえ」と答えが返ってくるだろう。

私たち自身の法廷でも、犯罪者が犯した罪を判事が知らせたり、思い起こさせないまま、投獄や拷問にかけたり、処刑するなら、実に不条理で不当だろう。そのような状況下で、犯罪者本人がどんな罪を自分が犯し、どう償うかを、今後、同じ過ちを繰り返さないようにするにはどうしたらよいかを、どうやって知り得るといえるのか。本人が自分がどんな罪を犯したかをまったく分かっていないのに罰するなら、正義のためという目的が意味を成さなくなるだろう。理由不在だからだ。同様に、何らかの立派な行いを報奨することも、その理由が明らかにされなければ、無意味になるだろう。至高の知能は、忍耐と愛情を惜しみなく注いだその被造物を向上させ、矯正し、その進歩を確かなものにしたと望んでいるに違いない。過去の意識がないままの私たちを、気紛れや忍耐の緒を切らして畜生道に無意味に落とすことで、救いなき私たちに過去に過ちを犯したことを知らしめ、創造主の狂気に対する声なき証言として希望がないまま果てしなくよろめき歩ませ、未来に過ちを犯さないようにさせるはずはない。もちろん、そんなことはなされていない。

P86

私たちの遠い昔の祖先は人間の本質も人間と動物の真の違いも分からなかった。それゆえ、カルマ

の法則の原始的な理解を裏付けるために、人間の人格が動物の中に転生し、その逆も然りという仮説形成をしたのは、已むを得なかったかもしれない。一方、幅広い視野を持つまでに進歩した私たちは、カルマの法則の元来の前提が不可侵であるだけでなく、今やその現実の作用が、人間の人格と意識という連続体が形而上学上の靈的領域に拡大されたとき、完全に意義あるものになることを容易に理解することができる。

そこでもう少し考えてみれば、無実の新生児が伝染病に罹患したのは、親の無思慮な行為の痛ましい結果ではないことが明らかになるだろう。つまり、親の行為の埋め合わせのために完璧な創造主の不変の法則が働いたためではないということだ。理性的な存在である私たちすべての生得権である「不滅の存在」という真実の視点から、この状況を眺めるなら、自分の過失のせいでないのに、地球上で存在するために必要な手段をいくつか誕生時に剥奪された人々がその埋め合わせを靈的次元で受けるための完璧な仕組みを、無限の叡知の中にある至高の知能がすでに考案したに違いないことが分かる。

さらにこの地上でも、私たちが同胞と協力して開発するつもりなら、出産前の胎芽だけでなく生まれ出た人すべてのためにすべての病気を探し出して撲滅し<sup>1</sup>、あらゆる不運を取り除く力を、大いなる知能が私たちの意識の中に植えつけたことは明らかである。

私たちは今、カルマの法則は完璧であり、すべてに行き渡る<sup>2</sup>ことを理解できる。さもなければ、カルマの法則の恒久性を確固として断言した、ラーマ、クリシュナ、釈尊、ゾロアスター他の神意を受けた識者である途方もない存在が、完璧に公正で合理的な法則に欠いたものをどうして擁護できるのか。彼らだけがこの法則の唯一正しい概念を明確に述べた。

---

1.DNA コードに基づいた遺伝子操作で胎児の諸種の先天性欠陥を治療することが、今日、可能となっている。将来的な疾病を起こす傾向すべての発現の防止により、完全に健康な状態で子供は生まれるだろう。「誤謬たる輪廻転生」の観点から眺めるなら、今日の外科医による医療行為は、神の如き「カルマの抑制的な」力が彼らに代入されたか、子供たち全員が健康そのもので生まれたのは過去生の善行の果報であるとされるだろう。しかし後者なら、天国にとどまっていればよいのではないか。なぜわざわざ(記憶もないのに)戻るのだろう。

2.『サンユッタ・ニカーヤ』12,20,30.「カルマの法則(因果)は誰にも等しく及び、例外はない」

それは、認知と記憶である「識」を完全に備えたまま、個人の人格が継続するという概念と明らかな親和性があり、メリーゴーランドのように来ては往くことを無意味に繰り返すという概念とは接点がない。それどころか、どこまでも希薄化していく魂の真の住居において、潜在能力すべてを徐々に開花させながら、より大きな度合いの自由へと、より高次の「識」の境地へと、果てしなく前進するための道を指し示す。彼ら仏陀たちはこれを果たすために、畏たる物質世界の暮らしを進んですべて犠牲にした。私たちは、この靈的意識の次元においての完成に向かって、素早くか、ゆっくり

と、痛みを伴いながら進むために必要な属性を自分の人格たる魂意識に与えるか、それとも奪い取るかの結果となる行いを地上生を送る間に為していたことに、この霊的次元で気づくようになる。釈尊もまた、こうした霊の世界が存在することを繰り返し述べ、皮肉にとらえないよう、弟子たちに警告した。

「唯一なることわりを逸脱し、偽りを語り、彼岸の世界を無視している人は、どんな悪でもなさないものは無い<sup>1)</sup>」

前述した輪廻転生の誤謬についての考察から、すべてに行き渡るカルマの法則<sup>2)</sup>の正しい作用の真の理解を可能にすることが2点生じたことが、読者は現時点で分かる。本論から導き出された第1点は、ラーマ、クリシュナを含む神意を受けた教師たちが、魂意識が進歩をさらに続けて不滅の境地に入るといふ、より高次の意味を伝えるために用いた比喻が、浅慮な人々によって速やかに変容されていった経緯に、新たな理解をもたらした点である。その限定的な宇宙論のなかでより具体的な出来事を示すことで自分たちが心理的に納得できるよう、彼らが創造したのが、原因と結果が「説明可能な」概念だった。整理されていたが、完全なる誤謬だった。第2点は、カースト制度を維持するうえで、その誕生の地で遺憾ながら今日でも執拗に残っているこの誤謬が、この制度の創出と固定化に大きな役割を果たしていたが、宇宙論のより包括的な概念の発達とともに、人間の知能とその潜在能力についての知識がより大きく得られていくに併せ、人間のこれら潜在的力が、経済や科学他の物理的な力と現実的に相互作用を及ぼし合うことがより広く知られ、現地社会で今、知識として浸透しつつある点である。そうした趨勢のなかでは、肉体を伴う再生、すなわち、別の物理的形狀への個人意識の転生——輪廻転生——は、他すべての誤謬と同じく、意識のゴミ捨て場に廃棄される運命にある。

---

1. 『ダンマパダ』v.176. 『バガヴァッドギータ』XVI.8.9 も参照。「世界は不真実であり、根底がなく、神々もない。相互関係によって生じないものが別にあるはずはない。だからそれは欲望を原因とする。彼らはこの見解に依存し、自己を失い、小知であり、非常に残酷な行いをし、有害であり、世界を滅ぼすために出生する」

2. Jamshed Fozdar, *The God of Buddha* (Casa Editrice Bahá'í Srl, Italy, 1995), pp.117-118.

P88

さて、この誤謬が古代インドのヒンズーの宇宙論という子宮の中に宿ったものであったことを突き止め、その行き止まりまで追い詰めたが、さらに、これを効果的に破壊し、仏法の文脈の中で埋葬しなければならない。

この課題に対する釈尊の発言を包括的に調査すると、可能な限りの最低水準、つまり最も簡略な運用形態で、何らかの観念を具体化したいという強迫的観念じみた欲求が、初期の信者の間にも同じく存在していたことが分かる。初期仏教徒の場合、煩雑化の一途をたどっていたヒンズー教概念の中に新たな価値観を発芽させながら、極端に簡略化する傾向が現れた。すなわち、涅槃に達する

までの魂の旅の様態と段階に関して釈尊自身が与えた引喩と意味を速やかに削り落とし、ヒンズー教徒が推進していたものと同一の凝塊した観念にまで矮小化させたのである。その最たる例が、輪廻転生という欺瞞に満ちた誤謬だった。初期仏教徒は輪廻転生の教義とカルマの法則を採用し、これらの道徳的な説明もしたが、ヒンズー哲学で支持されていた見解とは違い、浄土に到達できるのは、生贄にした動物を供物として捧げたり、苦行によってではもはやなく、慈善、誠実さ、敵を許すことを含めた、釈尊が強調した美德<sup>1</sup>の実践によるものと説いた。輪廻転生の概念は『アヴァダーナ・シャタカ<sup>2</sup>』で大きな位置を占めていても、釈尊の教えの本質ではない。菩提、すなわち悟りに至る智慧を得ることが、教えの主たる目標だ。これは私たちが目指すものでもあるに違いない。そこで、釈尊が自らのメッセージの意味を伝えるために用いた様々な比喩が文字通りに受け取られたことで、その真意が理解されず、誤って解釈されたまま採用されることになった輪廻転生の誤謬性について洞察を得るために、先に進むことにしよう。

---

1. もちろん、ヒンズーの教典においても、ダルマラージャ(パандаヴァ兄弟の長兄)がしばしば発言していた美德は支持されている。Maatruvat paradaaraanscha, Paradravyami loshtevat, Aatmavatsarva-bhootam.

Yahpasyati Sapasyati. (「他者の妻を自分の母とみなし、他者の金銭を大地の玉石とみなし、他すべての存在を自分に対するように扱う者は、確かに、真の先見者である。その者はブラフマンを知るようになるだろう」『マハーバーラタ』)。だが、こうした高潔な情感も、釈尊の時代までには、供儀を伴う儀式に大きく置き換えられるようになっていた。そのため、自らの教えによって、これらの美德を復興させることが、釈尊の目標だった。

2. 後世の仏教徒による著作。多様な人々の現世と過去生と、起こした行動の結果を記した何百もの物語の集大成。どれもが同じ道徳で一貫している。「白い行いは白い果実を結び、黒い行いは黒い果実を結ぶ」。

P89

これから、輪廻転生について釈尊が説いたものを経典からいくつか引用する。私たちのコメントの是非については、読者の最善の判断に委ねたい。

さて、現世の苦楽の大半は過去生の行いに起因すると言う人たちが今でもいるが、苦楽は行為の結果でしかない、という発言の信憑性は、前世でどんな行為をしたかを当人が覚えている以外に確かめようがない。釈尊があるとき、マハーヴィーラ<sup>1</sup>の弟子たちに「ご自分が過去に実際に存在していたことや、善行も悪行も過去生でしたことをはっきり覚えておられますか」と質問した。覚えておりません、という返答に、覚えていないのに、個人の禍福は、現世でも過去生でも自分自身が行ったことに唯一左右されるという考えをなぜ主張できるのでしょう、と釈尊は質問した<sup>2</sup>。ジャイナ教の理論に対する釈尊の明快な反駁であった。釈尊はマハーヴィーラは極端な個人主義者であるとみなしていたと思われる。運や偶然を信じる人々は個人の禍福は外的要因にすべて依存すると考えるが、マハーヴィーラの信条はその対極に向かった。私たちの苦楽は自分自身が唯一決定するというものであった。ジャイナ教の経典の『キルタンガ・ストラ』に、マハーヴィーラの見解が以下のように記されている。

「私が苦しみ、悲しみ、悔い改め、弱くなり、悩み、痛みを経験するのは、私が原因である……。喜楽が、私を助けたり、救うことはできない。それらは、私とは別物であり、私の本当の存在とは異質である。それらと私は別物であり、私の真の存在とは無関係である。私との関係がより親密な友人や関係者でさえ、私が現実を受けている苦痛を経験できず、ましてや自分たちの身に引き受けることはできない。つまり、人は個人として生まれ、個人として死に、再び個人として、ある存在状態を辞めて別の存在に生まれ変わる。ある個人の情熱、識、知能、知覚、気持ちは当人だけに所属する<sup>3)</sup>」

- 
1. ニガンタ・ナータプッタは、ジャイナ教の尊師でかつ、釈尊と同時代に生きたマハーヴィーラと同一人物であると現在、信じられている。仏教徒による著作から、マハーヴィーラは釈尊が入滅する、おそらく5年前に死去したようである。「ニガンタ」は「束縛からの解放」を意味する。マハーヴィーラの信者は、仏教徒の間では、ニガンタと呼ばれていた。
  2. 『デーヴァダハ・スッタ』, 『マッジマ・ニカーヤ』
  3. ここでも、肉体的な生まれ変わりだけを示すものは記されていない。

P90

別の機会では、ティンバルカと呼ばれるジャイナ教の尊者が釈尊に近づき、「苦楽は、自分でつくったものですか、そうではないのですか。それとも、他人がつくったものですか、そうではないのですか。はたまた、自分でつくったものでも、他人がつくったものでもないのですか」と質問した。釈尊は両方の問いに否定的な返答をしたことで、苦楽は私たち次第のものもあるが、私たちに左右されないものもあることを示したと伝えられている。釈尊はそのことをさらに明確にしている。「苦しみには、痰や風、四体液の結合、季節の変わり目、不運な出来事による圧迫感、外からの攻撃に起因するものもありますが、私たちのカルマ<sup>1)</sup>に由来する苦しみもあります」

釈尊はそのうえで、この発言が、私たち各人が所有し、その行使を決して放棄できない自由意志の原則違反を意味していると誤解されないよう、次のように明言した。「みずから悪をなすならば、みずから汚れ、みずから悪をなさないならば、みずから浄まる。浄いのも浄くないのも、各自のことがらである。人は他人を浄めることができない<sup>2)</sup>」

そして、数人のバラモンの若者との会話<sup>3)</sup>からは、別の肉体への転生のような信念を嫌っていたことを、その質問だけで十分に証していることを理解できる。

釈尊 「子宮への降下があることをご存知ですか？」

バラモン 「尊者よ、存じています。両親の交わりがあること、母親が受胎期にいること、ガンダルヴァがその場に必ず存在すること。この三つが同時に重なれば、子宮への降下があります」

釈尊 「そのガンダルヴァが高貴な戦士か、バラモンか、商人か、身分が低い労働者か、あなたがたはご存知ですか？」

バラモン 「尊者よ、存じません」

魂精神（識）が存在して発達するには肉体が不可欠であるという考えは、すでに説明したとおり、古代の人々が宇宙について思い描いていた非常に限定された概念に基づいているにすぎない。

- 
1. 『サンユッタ・ニカーヤ』 Vol.IV.Ch.36. Pali Text Society.p.155. Caused by our volition on our character.
  2. 『ダンマパダ』 v.165. 『バガヴァッドギータ』 XVIII.16.「このようであるが、単なる純粹の自己(アートマン)を行為の主體と見る人は、その知性が不完全であるから、おろかにも正しく見ないのである」
  3. 『マッジマ・ニカーヤ』 II.156-157.

P91

魂精神は肉体を必要としない。目は光の存在を知り、耳は音を捉えるために必要とされていても、魂精神という原初から存在する実体がこの地上で経験を積むための手段にすぎない。魂精神はそのような手段からは独立して存在し、出現することができる。

さて、仏教の經典では、四向四果という階位が述べられており、預流、一來、不還、阿羅漢が相当する。預流は、聖者の流れに入った者を指し、最大でも7回往來するだけで、彼岸、涅槃の境地に達する。一來は現世に一度だけ戻ってくる者、不還は現世に戻らない者、阿羅漢はすべての煩惱を完全に断ち切って涅槃に入り、もはや生死を繰り返すことがなくなった者を意味する。釈尊は一方で、四向四果を四段階の瞑想としばしば同列視している。「アーリヤの道」に似て、全知、完全なる目覚め、そして悟りである涅槃に達する手段であり、神通力を得る道（リッディ・パダ）<sup>1</sup>でもある。ウパニシャッドでもこの四段階を、欲望（カーマ）、意志（クラツー）、行動（カヌヤ）、そして、個人の人格の中に形成され、おおそ永続する変化（カルマン）<sup>2</sup>にそれぞれ相応するものとして受け入れている。とりわけ重要なのが意志の段階である。行動という次段階に進んでも、何らかの予期せぬ障害のために遂行されないこともある。その場合でも、人格に及んだ意志の影響は残る。ごく初期のウパニシャッド<sup>3</sup>に記されている「人は善い行いをすれば善くなり、悪い行いをすれば悪くなる」という言葉は、意志が人格に及ぼす影響を示唆している。

それゆえ「来ては往くこと」にまつわるこれらの段階や階位も、結局のところは、完成に向けた

修行の最終段階の涅槃のように、私たちの魂意識の境地であるにすぎない。意識がこれら様々な段階を経る前提として実際の肉体を持つことは、どの段階にも要求されていない。また、ついでに言うなら、これらの段階を経験するための物理的な場所も規定されていない。なぜなら、地獄、天国、そして涅槃でさえ、この「現世」でも、靈的意識の次の次元でも、私たち自身の倫理的発達に従って経験できるからである。

---

1. 『サンユッタ・ニカーヤ』 II.212.f. 『アングウッタラ・ニカーヤ』 I,170,I,254F 他も参照。

2. 『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』 IV.5,5.

3. 『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』 III.2,13. 『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』 III.14.1 他。

P92

村でも、林にせよ、深い水中にせよ、乾いた土地にせよ、聖者の住む土地は喜びあふれている。涅槃——ニルヴァーナ<sup>1</sup>がそうであるように。

「宗教的生活（ダルマ）は涅槃に埋め込まれ、その目標も、その完成したものが涅槃である。今世の苦痛を終わらせることができる<sup>2</sup>」

「極めて恐ろしい激流が到来したときに一面の水浸しのうちにある人々、老衰と死とに圧倒されている人々の洲（避難所）を、わたしは、そなたに説くであろう。いかなる所有もなく、執著して取ることがないこと、——これが洲（避難所）にほかならない。それをニルヴァーナと呼ぶ。それは老衰と死との消滅である<sup>3</sup>」

「思いをこらし、堪え忍ぶことつよく、つねに健く奮励する、思慮ある人々は、安らぎに達する。これは無上の幸せである<sup>4</sup>」

「この世において愛欲を離れ、智慧ある修行者は、不死・平安・不滅なるニルヴァーナの境地に達した<sup>5</sup>」

「覚りのよすがに心を正しくおさめ、執著なく貪りをすてるのを喜び、煩惱を滅ぼし尽くして輝く人は、現世において全く束縛から解きほごされている<sup>6</sup>」

涅槃の実証的検証はできない。真の自己意識だけが存在する<sup>7</sup>自己認識の領域だ。

先に進む前に、釈尊が側近中の側近だった弟子の阿難と交わした有名な対話<sup>8</sup>の主旨を明確にしよう。正しく理解しておかないと、「識」(魂)の本質と、肉体との関係に、誤解が生じかねない。

「識」が正確に意味するのは、釈尊が様々な機会に「魂」「魂意識」「真我」と名付けたものである。

釈 「『識』が肉体的有機体の存在を左右するというこの真理は、阿難、このように理解  
尊 されるべきだ。仮に『識』が母胎に降りてこないとしたら、この有機体は母胎の中で  
肉として形を成すだろうか」

- 
1. 涅槃の詳しい概念については、Jamshed Fozdar, *The God of Buddha* (Casa Editrice Bahá'í Srl, Italy, 1995)を参照。
  2. 『マッジマ・ニカーヤ』I.304.
  3. 『スッタニパータ』vv.1093-94.
  4. 『ダンマパダ』v.23.
  5. 『スッタニパータ』v.204.
  6. 『ダンマパダ』v.89.
  7. 『ディーガ・ニカーヤ』11.157.
  8. 『サンユッタ・ニカーヤ』II.13-16.

P93

阿難 「世尊よ、まことにそのようなことはありません」

——人間は、動物の受胎とは違い、肉体的有機体（物理的かつ化学的要素と細胞）への理性的魂（魂意識）の付着を伴う受胎現象という結合がなければ、細胞が合体し、生物物理学上の胎芽を形成することはない。それゆえ当然ながら、人間として発育可能な存在が生じる可能性はない。

釈 「阿難よ、仮に、母胎に降りた『識』が、再び往った<sup>1</sup>としても……肉体的有機体はこ  
尊 の世に生を受けるだろうか」

阿 「世尊よ、まことにそのようなことはありません」  
難

——理性的魂が人間の受胎行為に合流してもその後、事故か何らかの原因で生物物理学上の胎芽から切り離された場合、当の胎芽は死亡し、生きた発育可能な有機体として母胎から出現することはなくなることを明確に意味している。

釈尊 「阿難よ、仮に、男児でも女児でも、子どもから『識』が切り離されたとしても、肉体的有機体は成長と増大、発達を遂げるだろうか」

阿難 「世尊よ、まことにそのようなことはありません」

——胎芽が出生し、子宮外でこの世の人生を味わった点を除けば、一つ前の例とまさに同じである。生物学的な乗り物である身体がその生存に欠かせない機能を奪われる出来事に見舞われたために、理性的魂が肉体から切り離されるなら、身体はもはや成長も発達もしない。死体になったからである。ただし、理性的魂は単に肉体から切り離されて離脱したにすぎず、死を迎えたとは示唆されていないことに注目されたい。

---

1. この事例は、妻が10回受胎してもすべて死産となった、バラモンのソーマダッタとクリシュナとの会話でも、物語られている。自分のカルマのせいであると誤解していたソーマダッタは、「自分たちのカルマのせいで、なぜ罪なき赤ん坊が苦しまなければならないのでしょうか」とクリシュナに質問した。「赤ん坊たちが苦しんでいると、どうしてあなたに分かるのですか。お子さんたちは苦しんでいませんよ」とクリシュナは答えた。そして、「苦しんでいるのはあなた自身なのに、お子さんたちが苦しんでいると思ひ込んでいます。いばらが生えているのは、あなたの足元なのに、至る所に生えていると思ひ込んで、それを大地のせいにするようなものです」と言った後で、子宮の中で死んだ赤ん坊たちがはるかに壮大な世界に移されたビジョンを、ソーマダッタに見せた。赤ん坊たちは、その世界で、どこまでも進歩していくため、地上生に戻りたいなど思わない。ここでも、地上生に戻ることを前提とする輪廻転生については言及されていない。

P94

釈尊 「したがって、阿難よ、『識』の中に、契機、起源、依存という、肉体的有機体が（発生し存続する）原因を見出すことができる。私は『識』が肉体的有機体の存在を左右すると言った。この真理は、そのように理解されなければならない。阿難よ、仮に『識』がこの肉体的有機体に足場を築かなかったとしても……将来、誕生し、老い、死に、そして哀れな宿主の中に誕生することがあるだろうか」

阿難 「世尊よ、まことにそのようなことはありません」

——言い換えれば、理性的魂という要因が、受胎現象に関わる何らかの生物学上の失敗によって、胎芽になる寸前の有機体に付着できなければ、胎芽も、子宮から生まれ出でて誕生する子供も当然存在しないため、老いと死に向かって発達していくプロセスも、人生全体の行いを原因とする輪廻転生も発生しない。釈尊によるこれまでの説明は、すべて単刀直入、かつ実に合理的である。魂が、成長可能な生物学的現象であって胎芽になる寸前の有機体に、何らかの神秘的な仕組みを通して受胎の瞬間<sup>1</sup>に付着できなければ、当の胎芽がさらに発育することは望めない。そして実際に、受胎は現実化しないため、有機体が胎芽に発育することはできない。それゆえ、理性的魂「識」は、肉体的有機体（胎芽）を支配し指示を与える役割を引き受けることはもはや叶わず、受胎、胎児へ

の胎芽の発達、誕生し、成人へと成長する一般的進路が取られるプロセスを進んでいたなら、息をして考える存在の姿をしていただろう肉体的存在の中にその実体を現すことは事実上叶わない。このように考察することによってのみ、阿難との会話を締めくくる、以下の重要な釈尊の言葉を、会話全体の視野の中で理解することができる。

釈尊「阿難よ、したがって、肉体的有機体の中に『識』が降下する理由とそのための手段、発現し、現象を展開していく様相が分かるのだ」

---

1. 識(意識, 理性的魂, 個人的人格)が受胎の瞬間に発動する点で、仏教も他の大宗教と見解が変わらず興味深い。

P95

言うなれば、理性的魂は、神秘的な仕組みの発動によって発現し、肉体の領域に入ってから、無限の不滅の境地に進んでいく旅に出立する。その旅に向かうために用意された第一歩が、肉体という有機体である。大海に乗り出す第一歩となる船と役割が近似した肉体に宿って彼岸に到着すると、理性的魂は船を後に残し、さらなる進歩にふさわしい別の様態を身につける。だが、それはもつと後のことである。

ここで、不滅の魂のようなものを釈尊は確信していたか否か、疑問が生じるかもしれない。岐路となるこの重大な問いへの答えは「そのとおり」と断言しよう。パーリ仏典を含む様々な教典を参照しさえすれば、不滅の魂の人生は豊かであることを教えるために自らは到来した、と釈尊が明言していることを理解することができる。

「シーハよ、克己の教義は、魂の破壊のためではなく、保護のために教えられる。罰が魂を浄化することを理解するや否や、人はもはや自分の運命を嘆くことなく、喜ぶことだろう<sup>1)</sup>」

釈尊は魂の代わりに「意識(あるいは知性)」という用語をしばしば使っていたが、「魂」という言葉も、サンスクリット語を正しく訳すと「魂」を意味する「Buddhi(智慧)」(『Buddha(仏陀)』はその派生語)も、定期的に使っていた。すると魂とは、知ることだけでなく、経験を通して本質を見極めようと知性を働かす意志を持つことを、私たち宿主に可能ならしめる事実が強調されてくる。意識を支配してかつ、認知や意識、知性以上のものが魂である。しかし遺憾なことに、魂が「永遠であるか否か」を主題にした阿難、カッサパを始めとする者たちとの対話は、魂は不滅でないことを示す対話であると誤解されてきた。

「阿難よ、自己を肯定する者はその永遠性への極端な信念に陥り、自己を否定する者はその最終的消滅への極端な信念に陥る<sup>2)</sup>」と釈尊は述べ、「涅槃は単なる消滅の中にはない<sup>3)</sup>」と結論づける。

永遠性とは、開始も終焉も意味しない。魂は、これを主題にした釈尊の阿難との先の会話からす

でに認識されたように——受胎時——に存在が開始する。それゆえ、明らかに永遠でない。つまり、受胎の瞬間に発生する前は存在しない。

---

1. 『マハーヴァッガ』 VI.31;Ibid(アリヤパリエーサナ・スッタ). 「不滅の太鼓を打ち鳴らしながら、カーシーの都(ヴァーラーナシー, 現代のベナレス)に向かうのだ」.

2. *Vatsagotra-Sutra*.

3. 『ランカーバターラ・スートラ』 XVIII.2.

P96

これは、受胎する瞬間の前から個人の魂が存在することを事実上否定する。しかも、個人の「識」は前世には存在しない、と釈尊は次のように明言している。釈尊は苦しみに言及していることに留意されたい。

「『ある行いを為す者は、(その結果)を経験する者である』と言う者は誰でも、『苦しみを最初から当人がこしらえた』と言っているのである。これが『永遠性』の見解へとなる<sup>1)</sup>

上の発言を裏返して言えば、苦しみに、痰や風、四体液の結合、季節の変わり目、不運な出来事による圧迫感などの外部要因に由来するものもあるため(90 頁)、自分に起因するものでは必ずしもないということである。このことは、病気や、老齢による虚弱他を通して私たちに影響を及ぼす生物学的、その他の外的要因が幅広く存在し、そのすべてが、発育中の胎芽の段階にいる私たち、子供や大人に成長した私たちに、苦痛と苦悩を引き起こすことを理解しさえすれば、事実上、説明がつくことである。それゆえ、「永遠性」を自己(理性的魂)の特性にしてはならない。釈尊が定義したように、魂は受胎時に存在を開始するからである。だが、魂に終わりはない。このことは同じ対話の後半部で明確にされており、自己、魂、真我は不滅である。「自己を否定する者は、自己の最終的な消滅への極端な信念に陥る」という言葉の意味を、釈尊はカッサパに対し、さらに明確にしている。

「『ある者がある行為をし、別の者が(その結果を)経験する』と言う者は誰であろうと、ある者からもたらされた苦しみに、別の者が打ちのめされていると言っているのである。これが消滅の見解になる<sup>2)</sup>

本当の私である真我は不滅であり、消滅することはない。私たちの行いの結果が微生物のように他の誰かに取り憑き、その誰かを苦しませることもない。苦しみを刈り取るのは自分しかいない。自分がその種を撒いたからに他ならない。

さらに言えば、釈尊がアジタ・ケーサカンバリンの教義を激しく批判し、その信望者を「断滅論者」と呼んでいたことが知られている。すべての物質は違う比率の四大元素の組み合わせから生起

し、魂は身体から離れては存在しないと論じるのが、唯物論的な断滅論だった。

---

1. 『サンユッタ・ニカーヤ』 II.19,20.

2. 『サンユッタ・ニカーヤ』 II.21. Jamshed Fozdar, *The God of Buddha* (Casa Editrice Bahá'í Srl, Italy, 1995), 99.63-73 も参照.

P97

ケーサカンバリンは、それ（魂）は肉体とともに生まれ、肉体の死とともに死ぬと主張した。釈尊は、その理論は非合理的なだけでなく外道とみなした。人間を応報を忘れた完全に無責任な存在にしてしまうからである。

「まことに、あなたがたに言う。大空の中にも、大海の中にも、山の中の奥深いところに入っても、およそ世界のどこにも、悪業から脱れることのできる場所はない。久しく旅に出ていた人が遠方から無事に帰って来たならば、親戚・友人・親友たちはかれが帰って来たのを祝う。そのように善いことをしてこの世からあの世に行った人を善業が迎え受ける。親族が愛する人が帰って来たのを迎え受けるように。それゆえ、正しき道を歩んできた者が現世から来世に移るときは、その善行の成果がその者を歓迎するのである<sup>1)</sup>

釈尊はここで、本当の「私」である「識」は、現世に存在していた間に為した自分の行いを完全に自覚していることをさらに明示している。善行か悪行だったかを死後に記憶しているゆえ、その結果から逃げられる道はない。それゆえ、善悪いずれにしろ過去の行為の自覚も記憶もないというなら、次のいずれかになるかはさほど考えなくても分かるはずだ。私たちは結果から逃げおおせ、釈尊が言ったことは誤っていた。それとも、釈尊の発言は明白に真実であり、釈尊は全知ゆえに誤るはずはない。私たちに過去生を生きた自覚がないのは、そもそも過去生自体がなかったからにすぎない。さらに言えば、過去の行為に応じて賞罰が与えられるのは、私たちの意識は賞罰という現象を完全に自覚することでより浄化され、完成の境地、涅槃に最終的に達することが目的である。それゆえ、輪廻転生という再生の仕組み全体がおそらく捏造された目的である涅槃への到達がなされるべき実体（意識）がないまま、物理的次元で生まれ変わり——現世に戻り——暗中模索しながらよろめき歩き続けることに何の意義があるのだろうか。釈尊が述べるように、現世の行いを死後も完全に自覚している私たちの意識が形而上学上の霊的領域において歩み進んで行くことは確かだ。萎縮したか完成した霊的存在として、すなわち、キャベツか昆虫、動物の姿か、あるいは神々しい姿をもって、苦しみか喜びを味わう。結局のところ、意識が幸か不幸を決める。

---

1. 『ダンマパダ』 vv.127, 219, 220. 『バガヴァッドギータ』 II.13 も参照。「主体(個我)はこの身体において、少年期、青年期、老年期を経る。そしてまた、他の身体を得る。賢者はここにおいて迷うこともない」。Ibid., XVI.23.

それゆえ、この地上においてすら、倫理的基準たる価値体系次第で、野獣もどきにも、聖人の如くにも振る舞うよう、意識が私たちを駆り立てる。

釈尊は、真我であるこの「私」を認識し知ることが、この物理的次元に私たちが存在するうえで最も重要な、そしておそらく唯一の目的であるとはっきりと肯定している。ある時、一人の女性を探している多数のバラモンの若者が釈尊のところまで来て、彼らから逃げ出したその女性を偶然でも目にしたかどうか尋ねたことがあった。「若者たちよ、その女性と、君たちの『私』を探すと、どちらが重要ですか<sup>1)</sup>」と釈尊は返答した。だが「私」に関する釈尊の調査方法は、ヒンズー教の古代の哲学識者の方法とは少し違っていた。一般的な現象的存在に関連づけられるはずがない、絶対者を始めとする実体の場合においてのように、真我でないもの、つまり「私」ではないものを削除することで、真我である「私」の実体を、釈尊は導き出していた。

「比丘たちよ。自分のものでないものを取り除きなさい。捨てなさい。もし誰かがこのジェータ林の枝葉を持ち去ろうとしていたら、その者は私たちを持ち去ったり、燃やしたり、必要とするこのために私たちを使おうとしていると、あなたがたは考えるだろうか？」

「世尊よ、もちろん、そんなことはありません」

「では、なぜそんなことはないのだろう」

「世尊よ、それは私たち自身でも、私たちに属するものでもないからです」

「同じように、比丘たちよ。五蘊、私でないもの、非我を取り除くのです」<sup>2)</sup>。

以下に紹介する、僧のヤマカと、釈尊の十大弟子の一人、舎利弗の間で交わされた対話から、本当の「私」である真我に対する釈尊の姿勢を、ヤマカが完全に誤解していたことが分かる。

ヤマカは、涅槃の境地に達した漏尽の僧はその肉体が減んだ後は完全に消滅する、と釈尊が述べていたと信じ込むようになっていた。邪見であると釈尊がはっきり非難していた誤った見解だったが、遺憾ながら、その誤解は今日でも仏教界に根強く残っている。

1. 『マハーヴァツガ』 I.14. 『ヴィスツディ・マツガ』 Ch.I も参照。「この道を通ったのは女だろうか、男だろうか。私には判別ができない。だが、一体の骸骨がこの道を移動していることは分かっている」。

2. 『マツジマ・ニカーヤ』 22. 『バガヴァッドギータ』 II.14,15. 「クンティーの子(アルジュナ)よ、物質との接触は、寒暑、苦楽をもたらし、来たりては去り、無常である。それゆえ、アルジュナ、それらの接触に苦しめられない人、苦

楽を平等(同一)のものと見る賢者は、不死となることができる」。

P99

他の僧たちはヤマカの目を覚まさせることができなかつたため、尊者舍利弗に「治療」を要請した。黙諾した舍利弗はヤマカの房に赴き、質問した。「尊者ヤマカよ、邪見があなたの心に生じ、『漏尽の比丘は身体の破壊により断滅し、滅亡し、死後に存在しないと、世尊が教示したと理解している』という報告を受けましたが、本当ですか？」

「そのように世尊が教示されたと私は理解しています」とヤマカは答えた。それから長い対話が続き、最終的に、身体が滅んだ後に束縛から解放された者の魂は完全に消滅すると信じ込んでいたことが誤りであったことを、ヤマカは認めた。

釈尊の講話のどこにも、真我の否定を示唆する言葉は見出されない。釈尊は様々な感覚で構成される一過性で偽りの自己から真我をしばしば区別する一方、真我について頻繁に言及し、魂である真我の不滅性を固守した。本物でないものを否定することで本物の存在を確言するウパニシャッド流の公式化された古来の言い回しである「あれは自己ではない」以上に、真我の存在を明確にする方法はない。釈尊がこのやり方で、不滅で不死の内在的な実体に関心を注ぐよう、弟子たちに強く勧めたことが分かる。

「みずから自分を励ませ。みずから自分を反省せよ。修行僧よ。自己を護り、正しい念いをたもてば、汝は安楽に住するであろう。実に自己は自分の主である。自己は自分の帰趨である。故に自分をととのえよ。商人が良い馬を調教するように<sup>1)</sup>」

この言葉は、あらゆる時代に現れた聖なる教師全員が与えてきた勧告「汝自身を知れ」の主旨に等しい。理性的魂が存在する目的の真髓であってかつ、完成という目標を目指した旅の終着を示す言葉だ。だが、我執を取り除いた後に残るこの真我は、気軽な分析を寄せつけない。「まことに見難きは、真我なり<sup>2)</sup>」と釈尊は述べ、「煩惱と死の悪魔のマーラは、ゴーディカ、ヴァッカリの死後、どこを探しても、彼ら比丘たちの『識』を見つけることができなかつた。

---

1. 『ダンマパダ』 w.379, 380. 『バガヴァッドギータ』 III.17 も参照「他方、自己(アートマン)において喜び、自己において充足し、自己において満ち足りた人、彼にはもはやなすべきことがない」。

2. 『ウダーナ』 VIII.3. 釈尊は『ディーガ・ニカーヤ』 IV においても、ヴィジュニャーナ(識)、すなわち魂を、不可視で境界がなく、すべてに浸透する実体であり、ルーパ(色=物質)、ヴェーダナー(受=感受)、サンジュニャー(想=知覚・表象)、サンスカーラ(行=意志)が働く基盤であると定義している。『ディーガ・ニカーヤ』 II.63.2 も参照。

なぜなら、彼らは涅槃に入ったからだ<sup>1)</sup>とさえ述べている。だが、真我は不滅なのだから、不変であると想定すべきではない<sup>2)</sup>。もちろん、不変ではない。真我がまさに目的とするのは、度合いがより大きく大きな完成、涅槃に向かって、永遠に前進し続けることだからである。そしてもちろん、前進とは変化を意味する。

「意識は地上だけでなく天上にあるものすべてを手に入れる。不滅はこれ以上になく安全な宝の山である<sup>3)</sup>」と釈尊が述べるように、魂意識(識)たる私、「真我」は不滅で終わりが無い。一方、始まりがあるゆえに、定義からして、(開始も終焉もない)永遠とみなすことはできない。そして可能な分野で完成を果たすまで変化し成長するゆえに、不変ではない。釈尊が明言するように「諸行無常」である——絶対者を除いては<sup>4)</sup>。

魂意識(識)の本質と進歩という課題に関し、私たちがこれまでに提示してきたものすべてから、輪廻転生が弁護できないほどに完全なる誤謬であることが判明した今、過去の行いの記憶を完全に身につけているゆえに、完全なる解放(涅槃)の境地に向かう旅で自らを贖うためにたどらなければならない道を認知している私たちの魂意識(識)(内在的な真の私)が別次元で漸進的に進化していくという概念のほうが、カルマの法則が現世でもその後でも私たちの真我に対して作用することを述べた釈尊の言葉と、はるかに高い整合性を保っていることを、地道に研究をされている方々が認めるよう願うものである。

「いつわりを語る人、あるいは自分でしておきながら『私はしませんでした』と言う人、この両者は死後にはひとしくなる。来世では行ないの下劣な業をもった人々なのであるから<sup>5)</sup>」

「もしも手に傷が無いならば、その人は手で毒をとり去ることもできるであろう。傷の無い人に、毒は及ばない。悪をなさない人には、悪の及ぶことがない<sup>6)</sup>」

---

1. 『サンユッタ・ニカーヤ』 I.122.10.

2. 『ダンマパダ』 v.277.「一切の形成されたものは無常である」.

3. Buddhist Catena (アナータピンディカ・ジェータワナ).

4. 『ウダーナ』 v.81.「死滅と再生が存在していないところでは」

5. 『ダンマパダ』 v.306. 『バガヴァッドギータ』 V.22., XVIII.38 も参照.

6. 『ダンマパダ』 v.124. 『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』 (Visnu Smirti, XX.50) も参照. 「人がこの世で、以前着ていた服を捨て、新しい服を着るように、当人の魂も以前の人生においての行いに合致した新しい体(注: 肉体とは記されていない)を身につける」. 『バガヴァッドギータ』 II.22 も参照.

釈尊が、一人の女性を探し求めているバラモンたちに、代わりに、自分たちの中にある内在的実体である「私」を探したらどうか、と忠告したように(98頁)、破壊できない、私たちの真我である魂意識は、「何度も来ては往くこと」すなわち「いくつもの生と死」を霊的次元において経験し、段階から段階へ前進することだけを指示されている。「ああ、この身はまもなく地上によこたわるであろう。意識を失い、無用の木片のように、投げ棄てられて<sup>1)</sup>」というように、肉体は腐りやすく、第一義たるものではない。

涅槃に向かう不滅の道を踏破していく案内役となるべきが「美德」と「悟り」だ。釈尊の教えを理解し、教えにしたがって行動する弟子たちは涅槃という救済の境地に達するために、美德を養い、悟りを活用する。

「だれがこの大地を征服するであろうか？ だれが閻魔<sup>2)</sup>の世界と神々とともなるこの世界とを征服するであろうか。わざいに巧みな人が花を摘むように。善く説かれた真理のこぼれを摘み集めるのはだれであろうか。学びにつとめる人こそ、この大地を征服し、閻魔の世界と神々とともなるこの世界とを征服するであろう。わざいに巧みな人が花を摘むように、学びにつとめる人々こそ善く説かれた真理のこぼれを摘み集めるであろう<sup>3)</sup>」

燃え尽きて用済みになった薪束をもう一度、燃え盛る焚火にしたり、水の蜃気楼では渴きを鎮めることができないように、過去の「識」がないまま、肉体の転生を何度も繰り返しても、釈尊が目的とした私たちの本当の「私（魂意識）」の救済には役立たない。釈尊が言及した「何度も来ては往くこと」や「いくつもの生と死」のような言葉は、私たちの真我である魂意識だけに関係し、用済みの薪束、蜃気楼が象徴する私たちの肉体であったものとは何の関係もない。「不放逸は不死の境地に至り、放逸は死の境涯に到る。不放逸の者は死せず、放逸の者は死せるに同じ<sup>4)</sup>」に、釈尊が言わんとしたことが明確にされている。

---

1. 『ダンマパダ』 v.41.

2. 冥府の伝説の神(ヤマ)。マラと同じく、私たちの無知と誤った煩惱を人格化したもの。

3. 『ダンマパダ』 w.44,45,46.

4. 『ダンマパダ』 v.21. 『カタ・ウパニシャッド』 2.6.も参照「人生の向こうにあるものが輝くのは、幼稚な者、不注意な者、富に幻惑されている者たちに対してではない。『この世だけが唯一の世界、これ以外に世界はない』と彼らは言う。それゆえ彼らは死から死へと向かう」

釈尊のどの言葉でも、肉体の再生が、地上生の後の魂の実存条件として必須であるとは主張されていない。しかも、ウパニシャッドを先入観を排して読むなら、輪廻転生を支持しているとは解釈できない。この概念が誤謬であることは、ロジックと根拠をもって十分証明したとおりであり、す

でに無効化されている。

さらに、私たち自身である理性的魂に自由意志があることがカルマの法則が働く前提なら、過去の記憶をもたずに暗中模索しながら存在することが、カルマの原則である、知覚と記憶の両方を備えた自由意志に基づく進歩と、どう等しいと言えるのだろうか。自分を拘束している檻格子を自分でかつて造りあげたことを忘れていた籠の中の鳥と実質的に変わらない。自分の運命をつくることも、脱出困難な現在の状況がどこからもたらされ、どうやって起きたかを知ることができないまま、急変して迷信と恐怖の餌食に簡単になってしまう世界で方向を完全に見失うことになるだろう。

輪廻転生という誤謬の不毛な砂漠を後にした今、物事の仕組みに、そして何よりも自己について意味を見出したいと永遠に切望し続ける私たちの意識に、何が残っているのかを調べてみよう。不死を欲し、諸々の現象の説明を欲し、輪廻転生という幻の周りに古代の人々が有限の想像を織り成して付着させた諸々の要素を剥がし落としたり、「無」であったことに気づいたように、私たちも自分自身に自己を説明するには、擬人化した物理的観念から同じように脱却しなければならない。神の化身たる諸仏全員が教示した「自分自身を知る」には、自己浄化の中で継続的進歩を遂げていくという真の運命を果たすことだけを目指ししなければならない。最終的に、自分の唯一の実体を余すことなく知った私たちは、完全に解放された境地でたたずみ、涅槃を経験する。

釈尊は、自ら確証した、言葉では表現できないあの至福の境地に達する人すべてを喜んで手招きしている。「われわれは一物をも所有していない。大いに楽しく生きて行こう。光り輝く神々のように、喜びを食む者となろう<sup>1)</sup>」

同様に、自己を束縛していた忌々しい囚われを焼き払い、純金のごとき姿で現れる人についてが、ウパニシャッドに記されている。「受胎から火葬されるまでの精神修行で浄化された、この自己犠牲から、光の色をした人が出現する<sup>2)</sup>」。

---

1. 『ダンマパダ』 v.200. 『ダンマパダ』 v.304 も参照. この超意識は、既知の世界に適用される分析を一切、寄せ付けないが、実在する喜び溢れるものである. 正常な意識が欠けた状態である無意識と混同してはならない.

2. 『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』 VI.2.14. ここでも、火葬されて受胎するなどの悪循環は言及されていないことに留意していただきたい. 物理的次元には一度だけ存在することが示唆されている.

P103

釈尊とウパニシャッドは、涅槃の境地に達した私たちの自己は神々しい光を放つ存在である、と上に引用した以外でもしばしば表現しているが、これは比喩にすぎず、現実について意義ある概念を伝えるには、到底十分でない。そうした現実の一例が、自分が現れるのを待っていて信じている子宮外の世界がどんなものかを少しでも知るために、片割れとの意思疎通にたどたどしい努力をしている双子の胎児が置かれている状況である。そもそも、双子がそのような努力をしたと

しても、一切が徒勞であることを私たちは知っている。胎児は、視覚、嗅覚、聴覚、味覚器官と、欠如していたら外の世界で生存自体ができなくなる呼吸器官を持ち合わせていても、子宮という完全に異質な環境の中にいる以上、これら器官を持つ目的を探りようはない。まだ誕生していない胎児は、私たちがいる世界の生命体に比べれば、死んでいるも同然ゆえ、これらの感覚が存在することも、これらを行使するようになることにも全く気づいていない。しかも、以前の「生まれ変わり」を知らない（輪廻転生は誤謬の概念ゆえに当然）のだから、外の世界の素晴らしさに全く気づかず、考えたこともない。それゆえ、胎児として存在していた温かく小さな世界から突然駆逐されると、驚愕して死を迎え、恐れ慄きながら大きな産声を上げてこの世に誕生する。にもかかわらず、地上でのこの壮大で素晴らしい生活を一度味わったなら、今世の運命がどんなものであろうと、子宮内に居続けるか、地上での生活を送るかのどちらかを選べる選択肢が与えられても、一瞬ためらった後に子宮内に戻る選択をする子供はいない。盲目で歩行困難な物乞いでさえ、子宮内に居続ける選択肢を提供されるなら、たとえその子宮がどこかの女王のものであっても、躊躇なく拒むだろう。ここでは少なくとも、花の香りを嗅ぎ、音楽を聞き、経験を味わい、愛を知ることができる。それがすべての核心だ。生きることは知ること。それゆえこの外の世界と比較すると、子宮は暗澹極まりない死の世界と実質的に違わない。

同様に、現世という物理的な母体たる子宮の中で生きている私たちも、死を経て、まったく想像できない未知の次元の中に進んでいくことを恐れている。その次元にかつていた経験がなく、大半が本当の知識を持たない私たちは、ある意味、胎児に等しい。肉体的存在を超越した次の世界で自分の魂を維持するには、自分の中に潜在する霊的感性を発達させなければならないことに気づいていない。だが、自由意志を奪われ、通常に成長して子宮内以上に充実した人生に出現するまでの期間に受けた損傷に対しては、人知を超えた全能の神の完璧な法則<sup>1</sup>による完全な補償を受ける以外に、どうすることもできない胎児とは違い、

---

1.生物物理学的な領域で作用するこれらの完璧な法則は、理性的魂の領域の法則——如来の教え(ダルマ)によって完成度が倍増する。『ダンマパダ』v.354.「教えを説いて与えることはすべての贈与にまさり、教えの妙味はすべての味にまさり、教えを受ける楽しみはすべての楽しみにまさる。妄執をほろぼすことはすべての苦しみにうち勝つ」。ここから、カルマの法則はすべてに行き渡ること、すなわち、物理的領域でも形而上学的領域においても作用することが容易に理解できる。

P104

私たちは知能と意志という贈り物を同じ摂理によって与えられている。その私たちが、怠惰、無知、貪欲、無関心から解放され、より充実した魂の人生を送れるよう、至高の補償者におねだりするなど、正義にもとり、許されることではない。

神の慈悲により理性的魂である私たちに授けられたのが、知能と意志という計り知れない贈り物である。この贈り物に見合う者に私たちがなれるようにするために、如来という化身が到来する。

現世以降の世での人生と成長のために私たちの魂が霊的感性を発達させる完璧な手段（法）をもたらす伝言（これこそ道である。真理を見るはたらきを清めるためには、この他に道は無い<sup>1)</sup>）を、如来は神から託されている。それは「迷妄から真理へ、闇から光へ、死から不死へと導かれる<sup>2)</sup>」ことを願う人すべてが踏破できる基本的な道である。聖なる教師すべてが絶えず刷新をしてきた古来の道であり、永遠なる者から不死へと導かれた人間への愛情を込めた呼びかけである。

「個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを正しく理解するに従って、その不死のことわりを知り得た人々にとって喜びと悦楽なるものを、かれは体得する。これは、この世において明らかな智慧のある修行僧の初めのつとめである。——感官に気をくばり、満足し、戒律をつつしみ行ない、怠らないで、淨らかに生きる善い友とつき合え。その行ないが親切であれ。何ものでもわかち合え。善いことを実行せよ。そうすれば、喜びにみち、苦悩を減するであろう。修行僧らよ。ジャスミンの花が萎れた花びらを捨て落とすように、貪りと怒りとを捨て去れよ。修行僧は、身も静か、語も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享楽物を吐きすてたならば、やすらぎに帰した人と呼ばれる。喜びにみちて仏の教えを喜ぶ修行僧は、動く形成作用の静まった、幸いな、やすらぎの境地に達するであろう<sup>3)</sup>」

この道は不滅の豊穡な人生を保証する。数十年間の苦しみと悲しみとて、約束された不滅の人生と比べれば、束の間の死と変わらない。「まことに、あなたがたに言う。世尊は死を教えるためではなく、生を教えるために来たのである。

---

1. 『ダンマパダ』 v.274.

2. 『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』 I.3.28.

(asato ma sad gamaya, Tamaso majyotir gamaya, mriyora ma amartam gamaya)

3. 『ダンマパダ』 v.374, 375, 376, 377, 378, 381. 『バガヴァッドギータ』 II.29 も参照.

P105

あなたがたは生と死の本質を見極めていない<sup>1)</sup>

私たちは、永劫に未知なるものと、その中に組み込まれている私たちの宿命の本質に絶えず思いを巡らしていても、胎内環境に慣れ親しみ、胎外で展開される壮大な人生を理解できずに恐れ慄いている胎児のように、肉体を携えて進んでいるこの道の先で私たちすべてを必ずや待ち構えているものを恐れている。

というも、その向こうにある世界で到来する人生に対して得られるかもしれなかった安らぎの保証を、大半の私たちが不信感と無関心で壊してしまったからである。そして自分たちの不滅の魂を、この世界の不徳でやがては滅びる存在に思慮なく不行状によって深く絡ませた結果、選択肢を与えられても、未知の領域での不確かな運命への恐れから駆り立てられるようにして、この世をまだ見ぬ胎児のように物理的世界という子宮に戻ることを選択し、慣れ親しんだ地上での成り行きに任せている。だが私たちは、胎児と同じ心理であるにかかわらず、全知全能の神がその驚くべき御業で創った完璧な被造物であることに変わりはない。その神が、肉体の再生である輪廻転生という無意味なものに同意するはずはなく、魂意識という最高の実体を持つ私たちすべての成長のために想像を超える壮大な計画を立てないはずがないことに、私たちはすでに気づいていたはずである。だが、この「確証された天界」を目の当たりにし、確実な足取りでそこに向かって進んでいくには、霊的な視力を開発しなければならない。釈尊はこう述べている。「この世の中は暗黒である。ここではっきりと理りを見分ける人は少ない。網から脱れた鳥のように、天に至る人は少ない<sup>2)</sup>」。

「老衰と死に焦燥している<sup>3)</sup>」私たち「凡夫」に、釈尊は天界を目指すようにと永遠に呼びかけている。しかも、天界の意識は美と壮大さに満ち溢れていることも、私たちの行為すべてが最終的に向かうよう方向づけられているその目標に私たちが心の奥底では本質的に到達したいと欲していることも、一切智の釈迦如来の他に誰が知っているのだろうか。万人の父<sup>4)</sup>たる釈尊の言葉は、老いも若きも、子供たちすべてに対する喜びに満ちた呼びかけだ。だがその呼びかけは、老衰期が近づいて身体機能が自然に衰える結果、身体の喜びも減退したことで、しなびた姿を最高の存在に捧げるための準備を敬虔に進める人々だけに向けられたものと誤解されてはならない。彼らは、苦行と聖典の暗唱が、怠慢によってカルマの法則の均衡を崩した人生を帳消しにしてくれると浅はかにも信じている。

---

1. 『ミリンダ王の問い』。釈尊が王舎城に滞在していた期間に、サーヴァッティ(コーサラ国の王都)のアナータピンディカにかけられた言葉。『バガヴァッドギータ』II.24, 25も参照。「彼は永遠である。彼は顕現せず、不可思議で、不変異である……それ故、彼をこのように知って、あなたは嘆くべきではない」

2. 『ダンマパダ』v.174. 『カタ・ウパニシャッド』2.5.も参照。「無知の只中に留まり、自らを賢く学識があると思う愚か者は、盲人に導かれた盲人のように、高尚だとする高みへあてもなく進んでいく」

3. 『スッタニパータ』v.1093.

4. 『ディーガ・ニカーヤ』I.46.

若者たちに向けた釈尊の呼びかけははるかに痛切だ。立ち上がって不死の輝きをつかみ取り、不滅の若さを味わうように、と急ぎ立てている。ヒンズー教の古代の詩人は「彼は真の聖者であり、若さの聖者である。湧き上がる情熱がいつ衰えるのだろうか」と謳った。そして釈尊が述べるように、

「たとい年の若い修行僧でも、仏の道にいそしむならば、雲を離れた月のように、この世を照らす<sup>1)</sup>

真の若者は不滅の魂だ。化身たち諸仏も神意を受けて立ち上がった若者である。全員が虚飾を捨て、地上の快樂の罨を避け、私たちへの不変の愛のしるしとして苦しみと悲しみのすべてを甘受した。子宮への回帰も輪廻転生もなく引き返す選択肢がないこの道の真の案内役は彼らの他にいない。私たちは彼らの道案内を受け、さらに高次の自由へと前進し、最終的に永遠の喜び——涅槃に到達する。ただし、努力し、成功（天界）か失敗（地獄）かは、私たちだけが責任として負わなければならない。「汝らは自らつとめよ。もろもろの如来はただ教えを説くだけである<sup>2)</sup>

さて、現世からより壮大な次元に向かう旅の実体を長期間にわたって曇らせてきた誤解と間違いという幻を眠りに就かせたところで、一見したところ、さらに大きな幻として現れていたものを破壊するために、私たちは前進しなければならない。如来たちが明言していた過去の経験だ。数千年も昔の過去の経験をどうやって鮮明に説明できるというのだろうか。如来たちが伝えていたのは真理ではなかったのか。それとも、想像にすぎないのだろうか。否、それはあり得ない。

答えは一言で済む。「一切智」ゆえである。「私はすべてを知っている<sup>3)</sup>」。

---

1. 『ダンマパダ』 v.382.

2. 『ダンマパダ』 v.276.

3. 『マジマ・ニカーヤ』(アリヤパリエーサナ・スッタ).クリシュナも明言していたことである。『バガヴァッドギータ』 VII.26 を参照。「私は過去、現在、未来の万物を知っている。アルジュナよ、しかし何者も私を知らない」。

P107

約 2,500 年前、人間の姿をしたシッダルタ・ゴータマが大地を踏み進め、北東インドのどこかで教えを広めていたが、その実体が引き起こす説明しがたい現象がなければ、無上のその業績と人類の英雄物語に残した消しようがない痕跡は記録されることはなかっただろう。なぜなら彼は、仏陀<sup>1)</sup>であった。悟りを完全に開いた一切智であって、神の原則の体現であり、様々な時期に異なる個人の人格を備えて人間の領域に姿を現す、ある種の原型ゆえである。そして、一切智とは絶対的真理に他ならない。絶対的真理は如来に不可欠な側面である一切智であるゆえに、如来は、究極の実在、すなわち絶対者の顕現と同定されている。

仏陀は、神の化身としてのその様々な側面から、死すべき運命にある私たちとは違い、その一切智によって過去も未来も知ることができる。

「過去の期間に関する認識と視野は妨げられることなく自由に進み、未来の期間に関する認識と視野は妨げられることなく自由に進み、現在の期間に関する認識と視野は妨げられるこ

となく自由に進む<sup>2)</sup>]

過去も未来もとは、かつて人間の運命を形成し、これからも形成し続ける大きな出来事と、人類にささやかな教訓を提供する出来事についてである。後者は、超自然的存在である仏陀の模範的人生から得られ、口承されてきた教訓から少しづつ集められて逸話となったものである。さて、大小の出来事のうち、釈尊本人が物語ったものであると仏教史家が断言し、釈尊の過去生を伝える『ジャータカ<sup>3)</sup>』に収められているささやかな逸話、寓話からまず考察する。

---

1. 仏教の学派すべてが、人類の歴史上での仏陀の顕現は、仏陀の性質が承継的に顕現する一連の全体的な流れの一つの局面にすぎないことを承認している(訳者注：過去仏を想起していただきたい)。そうした仏陀の性質は本質的に絶対者のそれであり、それゆえ神意を受けた聖なる存在として考えなければならない。同じことをクリシュナが明言している。『バガヴァッドギータ』IV.8。「善人を救うため、悪人を滅ぼすため、美德(正法、ダルマ、美德)を確立するために、私は世期(ユガ)ごとに出現する」。

2. *Satasahasrika*, IX, 1449-50 (ある仏陀の18の特別な法)

3. 本生譚とも呼ばれる『ジャータカ』では、釈尊が過去生で功德を積む基となる諸々の行いが語られている。『ジャータカ』はパーリ仏典三蔵の内で収蔵量が2番目に大きい経蔵の中の『クッダカ・ニカーヤ』に収められている。

P108

「本生譚」と呼ばれ、釈尊の過去生を物語る寓話をいくつか紹介していくが、以下の点を常に念頭に置きながら読み進んでいただかねばならない。釈尊は自らの弟子に培ってもらいたいと願っていた特定の資質と属性を伝えるつもりであったこと、そして、釈尊を敬愛していた弟子たちは、その期待に応えるために、願われていた資質を身につけようと努力していた点である。しかも、これまでの神の化身である(ラーマ、クリシュナを含む)過去の諸仏をすでに取り巻いていた伝説を知っていたことから、超自然的な優れた能力が語られることを期待し、自分たちの神意を受けた教師、釈尊も同じように才ある素晴らしい存在であることを最終的に期待するようになっていた。そして時の経過に伴い、それぞれの化身を信奉する集団が自分たちの指導者の周りに織り成していた最上級のオーラをさらに装飾するために、別の伝説を考案し付け加えていったという点である。それゆえ私たちは、寓話を語る際には、明らかな教訓として見出されるものを、装飾的な伝説とは明確に区別して伝えるよう努めなければならない。以上を踏まえ、釈尊が自らを動物を主とする実体になぜ喩えたのか、その目的を検証する旅に出発しよう。

『ジャータカ』では、まだ菩薩<sup>1)</sup>であった釈尊が、鹿の群れの王として生まれた過去生で、ガンジス河で溺れている若い商人を救った本生譚が語られている。だがこの商人は、群れの居場所を誰にも知らせないという約束を裏切り、ヴァーラーナシーの王にその場所を知らせた。王はその情報に従い、狩りのために鹿の群れがいるその森にやって来た。そしていよいよという時、鹿は勇敢にも王の前に姿を見せ、説法をした。この話から、説法が最も完璧な道であることを、弟子たちは学

ぶことができる。説法によって死の危険が遠ざけられたからである。勇気を出して王の前に姿を見せてもそれだけでは、王はその手で鹿を殺すことを自制できなかったかもしれない。説法こそが、危険を遠ざけた真因であった。

ヴェッサンタラ太子本生経には、菩薩が仏陀になる二つ前の転生で太子として生きた本生譚が語られている。菩薩は太子として完璧な布施を実践し、所有していたものすべてを一つ一つ手放していったが、行き過ぎだとして、父から勘当された。追放の期間にも、妻と子供らをも手放した（が、インドラの取りなしで取り戻すことができた）。この話の教訓は、真の慈善とは計算のない犠牲である。

---

1. 悟りを求める者. 将来仏になる者.

P109

信じる理念を信じ抜けたかを測る真の尺度が犠牲であり、徹底的にやり抜く決心を行動に移した本人の動機が純粹ならば、必ず良い結果がもたらされる。言い換えれば、どんな危険が待ち構えているように、進路を直進しなければならない。そうすれば、勝利を最終的に必ず手にすることができる。

釈尊がまだ菩薩であったある前世ではガンジス河の岸辺に暮らす猿の王であった本生譚<sup>1</sup>も含まれている。岸辺近くに一本のマンゴーの木が生え、猿たちはその美味しい実をいつも食べていた。ヴァーラーナシーの王はこれを知ると、実が食べられないように家来たちを差し遣わし、猿たちもろとも木を包囲した。囚われた仲間の命を救うために、猿王の菩薩は竹で作った橋を用意したが、向こう岸に達するには長さが少し足りないことが判明した。そこで、自分の身体を橋に結びつけることで、猿たちを安全に逃すことができた。この偉大な猿の自己犠牲の精神にたく感動した王は、敬意を払い、こう尋ねた。「みずからを踏ませてまでも、河を渡らせ、皆を安全に渡らせた。あなたは彼らの何なのですか。彼らはあなたの何なのですか。偉大な猿よ」<sup>2</sup>。

この本生譚でも、惜しみない勇気と、仏陀という真の親の徹底した犠牲が象徴されている。功德によって将来は仏陀になるにせよ、動物が模範を示したことで、教訓がより心に強く印象づけられる。かくなる美しい属性を動物が示せるなら、人間ははるかに大きく示さなければならないのではないだろうか。この小話は、一切智に達した如来が自らの使命と折に触れては言及していた「衆生救済<sup>3</sup>」の象徴でもある。さらに、偉大な猿神のハヌマーンは、神の化身のラーマが悪の権化の「ラーヴァナ」との戦いで勝利を収められるよう、無私の精神で援助したことで、未来の時代に化身（仏陀）になることが確約されていることを、ヒンズーの叙事詩ラーマヤーナに造詣が深い人なら誰でも知っているだろう。それゆえ、上に紹介した物語は、伝承と、ヒンズー教でも仏教でも予期されているものは、密接に関連しあっていることを示している。既述したとおり、釈尊はラーマ<sup>4</sup>の親族であると明言していた。

---

1. 『マハカピ・ジャータカ』

2. 『ジャータカ』 III.

3. 『ジャータカ』 I.

4. 『ダサラタ・ジャータカ』と『ディーガ・ニカーヤ』 Part Iからは、自らはラーマの末裔であることを仏が明確に是認していることがわかる。ラーマ、クリシュナ、仏(釈尊)は、至高者ビシュヌの7、8、9番目の顕示者とヒンズー教徒からはみなされており、10番目の顕示者、カルキ・アヴァターラの到来が今、待望されている。『バガヴァッドギータ』 X.21,22 も参照。「私はヴィシュヌである……」「神々におけるインドラである……」。『バガヴァッドギータ』 X.31 も参照。「私は……ラーマである」。

P110

ラーマの後で、釈尊より前に出現したクリシュナ<sup>1</sup>も同じように明言していた。アーリヤ人の間に継承された彼ら神の化身の大いなる系譜には、イラン・アーリヤ人の中に現れたゾロアスターも含めなければならない。

釈尊がある大王の宰相でバラモンのゴーヴィンダ<sup>2</sup>であった時の本生譚も『ジャータカ』に収められている。ゴーヴィンダは王の死後、跡継ぎとなる王子たちの間で王国を均等に分割した。信頼する相手に忠誠を示すことが教訓であることを別にして、仏陀がクリシュナと自らの関連をこの本性譚で確言している点が重大だ。ゴーヴィンダはクリシュナ<sup>3</sup>の別名である。この小話は、クリシュナと、叙事詩マハーバーラタで語られているパンドウ王の5人の息子パンドヴァと彼らの王国の、ヒンズー教徒とこの叙事詩の読者誰もが知っている物語に由来する。

菩薩が2頭の妻を持つ象の王として生まれた本生譚も『ジャータカ<sup>4</sup>』に収められている。ある日、象王が木を一本揺らしていると、花びらが第一夫人の頭上に、枯れた葉が第2夫人の頭上に偶然に落ちた。このことで、菩薩を恨んだ第2夫人は、死後、ヴァーラーナシーの王妃に生まれ変わり、病にかかった振りをして、象王の六本の牙を手に入れる以外に病を治せない、と王に訴えた。

---

(前頁4の続き)ビシュヌの化身は数多いが、10番目が最重要である。マツシャ(魚), クールマ(亀), ヴァラーハ(猪), ナラシンハ(人獅子), ヴァーマナ(矮人), パラシュラーマ(賢者), ラーマ(王子), クリシュナ, ブッダ(釈尊), そしてカルキ。最初の5人の化身は異世界で出現したとされているが、その次の4人のビシュヌはこの地上で人間として人生を送った。カルキ(劫の終焉者。"Kal","Kala"は時間、「劫」を意味する)がこの劫の最後に出現する。

1. クリシュナの人生の全容が、*Ghata-jataka*,454 の *The Ten Slave Brethren*(奴隷として育てられた10人兄弟)の物語の中で語られている。賢人 Kanhadipayana についてを述べた『ジャータカ』444, *Krishna Kanaya*(*Sanskrit*)も参照。『パーニニ・スートラ』(パタンジャリの『マハーバーシャ』)で「Sankarsana(アルジュナ)からの支援を受けたクリシュナの力が増強しますように」と述べられているように、クリシュナの神性を初期仏教徒は認めていた。『パーニニ』IV.3,98も参照(「これが彼の崇敬の対象である」という意味で、バスターバ(クリシュナ)とアルジュナという言葉

葉の後に接辞"Vun"が来ている).(『パーニニ』は西暦紀元前400年に作成された).

2. クリシュナはクシャトリヤ・カーストを出自とするが、釈尊にとって「バラモン」が意味するのは、道徳的象徴にすぎず、何らの特別なカーストを意味するものではなかったことに留意.『ダンマパダ』vv.393, 396, 407, 408, 410, 419 他を参照.

3.「クリシュナよ、私は勝利を望まない。王国や幸福をも望まない。ゴーヴィンダ(クリシュナ)よ、私にとって王国が何になる。享楽や生命が何になる」『バガヴァッドギータ』1.32 から.「ゴーヴィンダ」も「ゴーパーラ」もクリシュナの名前であり、家畜の群れの神として元来、崇められていたことを示すが、人類という種の羊飼いを靈的に含意することは明白である.

4. *Chaddanta Jataka*, 514.

P111

王は、象王を殺して牙を確保するために、猟師を遣わせた。菩薩は猟師の足元におとなしくうづくまり、自ら牙を与えた。牙が王妃の元に届けられると、王妃は象王がかつての夫であったことを思い出し、胸が張り裂けんばかりの悲しみで絶命した。悪は悪のままであることをこの本生譚は教えているが、世の悪に直面しても、離脱と慈善の規定に従って行動すれば、危害を受けずに済み、害を及ぼそうとする者は撒いた種を死をもって刈り取ることになることを、洞察力の鋭い弟子に示している。

「阿難が王であった時、私自身は金色の孔雀であった<sup>1)</sup>」という本生譚では、釈尊の弟子の阿難が過去生で釈尊とともに存在し、仏弟子となったことが語られている。だが、伝承されているように、阿難自身はそうした過去生があったことを全く知らない。どんな人生を送ったのであろうと、阿難に当時を知る「識」はない。理由は簡単、阿難に過去生はないからである。それゆえ、阿難の過去生にふれる釈迦如来の発言は阿難自身の「識」や人格が肉体か精神を伴って転生した意味ではないと、理解するのはそう難しくはないはずである。この寓話は、時代を経て繰り返される神の顕示者の出現という原則に言及しているにすぎない。そして、出現したことで、釈尊の場合は、阿難（ヒンズー教のクリシュナの場合はアルジュナ<sup>2)</sup>）が示した「忠誠」や、反対に、前述した提婆達多が体現した「裏切り」という人間の特性に光が当てられるということである。一切智である神の顕示者、釈迦如来は、こうしたテーマが繰り返されることを知っている。だが、弟子たちは知らない。仏陀は過去の時代を自在に知る智慧を有することを、釈尊は次のように明言している。

「舍利弗よ、繰り返すが、如来は以前の種々の宿住を随念している……このように、彼は以前の種々の宿住を随念を具体的かつ詳細に随念している<sup>3)</sup>」

完全な悟りの境地に常にいた一切智の教師、如来が語った様々な寓話の真意と目的を本論で明言する根拠は、

---

1. 『ジャータカ』II.

2. 『バガヴァッドギータ』 IV.5.「私は多くの生を経て来た。アルジュナよ。私はそれらをすべて知っている。だがあなたは知らない」

3. 『マッジマ・ニカーヤ』 I.69-71.

P112

過ぎ去った時代<sup>1</sup>に、自らは無数の従地涌出の菩薩に教えを説いたと釈尊が述べたことを踏まえれば、さらに強化される。菩薩たちに教えを説く教師になれるのは仏陀、如来より他にない。釈迦如来が過去生で悟りを求めて熱心に修行に励む菩薩であったとしよう。ならば、靈的地位が同格の他の菩薩たちの教師にどうしてなれたのだろうか。そしてもし、当時でさえ（過去生で）、完全な悟りを開いた仏陀であり、如来であったとするなら、自らは約25世紀前の最後の生においてだけ、悟りを開いて仏陀になれたと明言したのはどういうわけなのか。そう語る釈尊が、輪廻転生という肉体を伴ういくたびもの誕生と死を現実を経験することはあり得ようか。だが、矛盾した釈尊の発言は次の条件を前提とすることでのみ理解することができる。これまでに述べたとおり、神の個々の顕示者は独自の個人的人格を別に持ちながら、一切智というその資質によって、過去に存在した自らと同様の神の顕示者と難なく寸分も違わずに自己同一視できる場合である。そして、より重要なこととして、神の未来の顕示者がいつ出現するかとその時の状況を正確に予言できる場合である。後者については、次章以降で確認する。

過去生についての本生譚は他にもある。全面的な愛、親切、布施の模範を示す、飢えた虎との遭遇を記した小話もそうだが、ヒンズー教の英雄譚の一つマハーバーラタのある登場人物の徳高い行為に言及した伝承と同一視されている寓話を紹介しよう。これをもって、本性譚について本論で述べてきたことを締め括ることにし、結論としてどう受け取るかは、読者に委ねる。

これは、憐憫で名を知られ、自分自身の肉を差し出すことで一羽の鳩を救ったシビ王として菩薩が転生した本生譚<sup>2</sup>である。ではマハーバーラタから、ヒンズーの英雄王<sup>3</sup>について記された部分を読んでみよう。

「クンティの息子よ、徳高き王は、自分の肉の一部を切り落とし、それを反対側に鳩が載せられた天秤に乗せた。しかし、鳩が自分の肉を上回る重さであることがわかると、また自分の肉の一部を切り落とし、前の肉に加えた。しかし、何度も何度も肉を加えても、重さが鳩に釣り合うことはなかった。ついには肉が身体に残っていない姿で自ら秤に乗ったのである」

---

1. 『サダルマ・ブンダリカ・スートラ』 XV.1. 『バガヴァッドギータ』 X.6 も参照「古の七名の大神とまたそれ以前の四大聖者、そして四名のマヌ(人類の祖) は私と同じ性質を有し、私の意から生じた。彼らから世の生類が生じた」.

2. 『シビ・ジャータカ』 499.

3. 『マハーバーラタ』 Aranyakaparva, Ch.131, vv.25-27. 『ジャータカ』を形成するこれら多くの本生譚は仏教が出現する以前の話であり、ヒンズーの物語の翻案にすぎないことがはっきりと証明できる。『ジャータカ』の大半は西暦紀元前4世紀頃、すなわちアショカ王が統治していた時代の1世紀前に整えられたが、翻案元のヒンズーの物語ははるかに古い時代を起源とする。

P113

鷹から救った鳩を救うために、『ジャータカ』に記されているのと全く同じことをマハーバーラタでもシヴィ王が行ったことを知り、読者は興味深く思うかもしれない。鷹は、シヴィ王の誠実さを試す意図をもって鷹に化けた(神々<sup>1</sup>の中の一人の)インドラであり、シヴィ王が鳩と同じ重さの肉を自分の身体から切り取って与えるなら、鳩を逃すことに同意していた。シヴィ王は承諾し、物語の内容は等しい。ここから、仏教がヒンズー教から説話を借りたか、ヒンズー教徒も、仏教徒も、さらに古い時代の出典から借りたかのどちらかであるかがうかがえる。

以下に引用する『サダルマ・プンダリカ・スートラ<sup>2</sup>』からの一節が、本生譚について言及したこと、過去の諸仏を理解することに役立つと思われる。また、過去から現代に下る時の流れの中で人間の目の前に周期的に姿を現しながら、本質的に久遠の時間にいる如来の実体と目的が明らかになるだろう。先述したとおり、如来とは、物理的世界の太陽のように再来を繰り返し続ける霊的現象であり、永遠の原則である。

世尊は告げられた。

「一切の世間の天人・人間・及び阿修羅は、皆今の釈尊族の聖者の如来は、釈尊族の宮殿を出て、伽耶城から離れること遠くない道場に坐って、一切の真理をあまねく知った最上の智慧を得たと思っている。

しかしながら、善男子よ、私は実に仏となってから今まで、無量百千俱胝那由他多劫の長い時が過ぎている。……私が仏になって以来経過した時間は、またさらに過ぎること百千俱胝那由他多劫阿僧祇劫である。それ以来私は、常にこの娑婆<sup>3</sup>世界にあって、教えを説き教え導いている。また、他の百千俱胝那由他多阿僧祇の国においても、衆生を導き利益している。

---

1. 「神」という言葉から、「お試し」は人物や困難を装った姿で到来し、「ゴブリン」や「輪廻転生」した亡霊ではないことを理解する必要がある。

2. 『サダルマ・プンダリカ・スートラ』 XV.1., 『バガヴァッドギータ』 IX.6 も参照「私は不生であり、その本性は不変、万物の主であるが、自己のプラクリティ(根本原質)に依存して、自己の幻力により出現する」。Ibid., IV.4 も参照

3. 無常の娑婆世界で衆生を教え導くよう説き勧めるために、釈尊の成道の際に現れたブラフマンは、大君主として宇宙に君臨していたと伝えられるサハンプティ・ブラフマンだった。この同じブラフマンが、迦葉仏の成道の際にも現れていたときには、Sahaka と呼ばれる僧侶として登場した(『サンユッタ・ニカーヤ』48, 57)。一方、ウパニシャッドによれば、ブラフマンとは、不確かな世界で支配権を行使する中立原則が大君主として人格化したものであると説明され、幾劫も続く時間の中で定期的に脈動する性質を有するものと認識されている。これが理解として正しい。脈動しながら伝搬する電磁波に喩えるなら、分かりやすくなるだろう。太陽から放散され、引力、斥力、熱などの様々な属性によって、到達範囲内に存在するものの局面すべてに支配的な影響を及ぼす太陽光線がその一例である。そのような光線を放つ太陽は、至高者になぞらえることができる。ウパニシャッドが、近づくことができない、知ることができないと言いつつ至高者である。クリシュナもその概念を認めている。「あなたは不満がない。そこであなたに、ニルグナ・ブラフマの知識をサカラ・ブラフマの知識とともにこれから授けよう。これを知れば、この世の存在の悪から解放されるだろう」『バガヴァッドギータ』IX, 1, 2。

P114

私は燃燈仏を始めとする他の如来について説いた。またその仏たちが、煩惱の火を消して智慧の完成した悟りの境地に入ると述べた。このようなことはすべて、人を真実の教えに導くための方便として、そう説いたのである。

如来はさらに、後に続く世代の様々な能力と活力を観察する。それぞれの世代に、自らの名を告げ、自らはすでに涅槃に到達していることを明言し、相手に応じた教え方によって、衆生の心を安らかにさせた。衆生がまだ徳が薄く心の垢が多いために低い教えだけで満足しようとしているのを見たときは、「若くして出家した後に仏の無上の悟りを得た」と説いた。私が如来となって以来長く久しいことは、このとおりだが、相手に応じた説き方をしたのは、最近である。衆生を教え導き、迷妄から脱出させて救済せんがためである。

自らの姿でこの世に現われることもあれば、他の(如来の)姿で現われることもある。自らの権限を用いた発言することもあれば、別の(如来の)権限の下で発言をすることもある。その言葉はすべて真実であって虚妄ではない。なぜならば、如来はありのままに、欲界・色界・無色界の三つの世界のそのものの内面などを表す姿・形・ありさまを目の当たりにしてきたからである。出生も死亡もなく、病も生まれ変わりもなく、転生も涅槃もない。実在でもなく虚無でもなく、有でも非有でもない。このようだとも、このようではないということもない。偽でも偽でないものでもない。三界に住む凡夫の見方で、如来は三界を見ることはない。諸法の実相に向き合うゆえに、見誤ることがない。これらに関して如来がどんな言葉を発しようと、偽りでなく真実であり、真実に他ならない。

P115

だが、生活様式が違い、区別と知覚の間で迷っている衆生の中に、善根を生じさせる

ために、如来は様々な教えを説いている。それが如来の勤めであるからである。私が如来になって以来、非常に長い時間が過ぎた。寿命は数えられないほど長く阿僧祇劫であり、常に存在し続けて消滅することはない。さて、如来は入滅したことはないが、もうじきこの世を去る振りをする。衆生の教化のためだ。しかも、今日もなお、私の菩薩としての古の修行道は未完成であり、私の寿命はまだ終わっていない。私の寿命が尽きるまで、今日からさらに、百千俱胝那由他多劫劫の二倍の時間が経過しなければならない。さて今、涅槃に入る（入滅）するのではないが、あえてもうじきこの世を去るであろうと宣言しよう。如来はこういう方便を使って、衆生を教化するのだ。私が長い間この世に居続け、衆生がいつでも大抵見れるなら、徳の薄い人は、善い心根を育てることを怠るからである。そして、心が貧しく賤しくなり、五官を満たす快樂の追求に目が眩み、間違った考えの網に囚われる。また、もし如来が常に存在し入滅することがないと知れば、人生は単なる戯れであると考え、怠け心を起こして、如来は遭い難い存在であると思わなくなるだろう。如来はすぐ近くにいと確信するゆえに、衆生は三界から逃れるという目的を果たすために精一杯努力しようとはしない。そして、如来を目にすることは難しいと考えることもない。

それゆえに、如来は方便をもって教えを説く。諸々の仏が世に出られることに縁によって巡り合うことは難しいと。なぜならば、無量百千俱胝那由他多劫を過ぎて、ようやく如来に巡り合う人がいれば、それでもまだめぐりあえない人すらいるからである。この事実ゆえに、「比丘たちよ、如来が世に現れるのは稀有であり、その姿を目にすることは難しい」と私は言うのだ。衆生は、この言葉を聞けば、如来の出現が稀有であることを理解するはずだ。そして（如来の出現に）驚き、（如来が姿を見せなくなることを）悲しみ、如来の姿が見えなくなると、その目に収めたいと切望するようになるだろう。そして、菩薩に心を向けることから善い心根が育ち、長期にわたる幸福と福利に役立つようになるだろう。この理由により、如来は、実際には滅することはなくても、衆生のために入滅すると宣言する。それが如来自身の説法である。如来の発言のすべてが真実であり嘘や偽りではない」

P116

過去の寓話を物語ることで、これらの小さな出来事や事件に私たちの注意を向けさせ、私たちが靈性面で教育する如来の能力は、ある昔日の空模様はどうであったか、曇りか、雨か、晴れていたか、暖かかったか、寒かったか、風が吹いていたか、屈んでいたかを教える能力に似ている<sup>1</sup>。そうした様々に移り変わる状況の下でも、如来の賢明な弟子ならば、ダルマの道をあくまでも踏み進めることに精進するだろう。

そして大きな出来事だが、それらは何なのか、何を伝えるものなのか。靈的な太陽自体について、それらの出来事は物語る。いつ、どのようにして昇るのか、見た者はいるのか、暗黒の時代に

及ぼすその威力と効力はいかほどか、本質的にどんなメッセージを携えたのか、どう沈んだのか。そして、私たちの時代に最も重要なことがある。再び、出現するのか。出現するなら、それはいつ、どこでなのか。

今日の太陽は、昨日も、過去も、その陽光を私たちの世界に繰り返し降り注いできたことを自ら物語る。同じように過去から繰り返されてきた日昇たる仏陀の系譜を、釈尊は自らが受け継いでいると肯定してかつ、自らの後継者の到来を的確に予告し、仏陀という霊的な太陽が必ず昇ることを確約している。過去においても未来においても、彼ら諸仏は、私たちの真の進歩と幸福のために、何世紀もの間隔を置いて現れるよう運命づけられている神の顕示者である。

---

1.過去生がない以上、善悪どちらにしろどんな過去生を送ったかを知らない人間が、現世で別の肉体に転生し、カルマの法則の下に応報を受けることは不可能である。一方、仏陀=化身(神の顕示者)に別の肉体への転生は完全に余剰であり、まったく必要はないというのは、本来的に一切智ゆえ、過去でも未来でもいかなる出来事を思いのままに即座に知り、物語ることができるからである。

P117

「この吉祥なる劫の時代に3人の指導者がいた。

カクサンダ（拘楼孫仏）

クナゴムニ（拘那含牟尼仏）

そして、かの指導者、ケッサパ（迦葉仏）である。

私は今、完全なる仏陀であるが、

この同じ劫が最後まで駆け抜ける前に、マイトレーヤ（弥勒仏）が現れるだろう<sup>1]</sup>」

釈尊は自らの以前にすでに出現した3人の仏陀の名前を口にし、この同じ劫の時代(周期)<sup>2]</sup>が終わる前に、もう一人の仏陀、弥勒仏が登場することをはっきりと予告している。本書では、釈尊の発言において予言されている、弥勒仏が投げかける曙光を探求する。だが、至高の如来、弥勒を認め、神が彼に託したこの地球のためのメッセージの意味とその栄光ある目標を受け入れるには、弥勒の実体と、彼が人類の間に出現する真の意義とを、すでに釈尊の例でなしたように、人間の想像力がその産物である幻を囲んでしばしば織り成す表層的な象徴から切り離し、地道な探求をしなければならない。そして、迷信と真実を、盲目的信仰と啓発された信仰を、人造スローガンと永遠の法に基づいた宗教を、区別して初めて、探求の目標は果たされる。

---

1. *Manorathaparanī*, 87-90(スッタ・ピタカ). *Anagatavamsa*, p.34 も参照.(パーリ語では、*Krakacchanda*, *Kanakamuni*, *Kessava*, *Maitrya*). *Kessapa* (*Kasyapa*, もしくは *kesava*—*Krishna*(ヒンズー教のクリシュナ))は仏暦 2300 年(西暦紀元前 2850 年)に出現。"I hold as true, all this thou sayest to me, O Kesava"と『バガバッドギター』 X.14 に記されている。クナゴンムニ *Konagamana* (*Kanakamuni*—マヌ)は仏暦紀元前 8500 年に、カクサンダ *Kaksandha* (*Krakacchanda*—ラーマ)は仏暦紀元前 5900 年に出現したと考えられる。

2. 「劫 = *Kappa*」(サンスクリット語 "*Kalpa*" もしくは "*Mahayug*" のパーリ語)。ヒンズー教徒と仏教徒によれば、「劫 = イーオン、*Kappa*, *Kalpa*」は四期間に分割される。詳細については次章で取り上げる。

P118

## 6

### 仏・法

「目に塵がなくとも、法を聞かずに朽ち果てていく者がいる。

しかし、法を学ぶ者であれば、成長するだろう<sup>1)</sup>」

人類の歴史は、60 世紀か 70 世紀前に始まった最近の出来事ではない。永遠の沈黙の中へと源が遡る非常に古い大河であり、多くの種族と文化が航行し、その痕跡を残してきた。理性的魂（意識）が存在の次元に出現したこの壮大なプロセスをいかなる程度だろうと調査し、時のとばりを開いてどれほど古代に遡ろうと、シュメールやインドの、ペルシャや中国の、アラビアやユダヤの、西洋や東洋の古代の文化と民族が存在したことを立証するなら、根底にある実体がこれらすべての中を駆け抜けてきた事実が発見されることに、私たちは直面する。この壮大な人間の叙事詩すべてを一つずつ載せて実存の河に押し出された船は、偉大な教師であり化身でもある諸仏が作成した設計図に基づいて、大宗教いずれもが構築した倫理的枠組みから建造されたものである。この壮大な

いくつもの叙事詩に働きかけ、生命満ち溢れるこの航路に全霊を捧げて乗り出すよう推進させた力は、宗教という宝物<sup>2</sup>の中にだけ見出される言葉にならない信仰の力であった。導きの星は永遠なるもの、すなわち不死への願望であった。

---

1. 『ヴィナヤ・ピタカ』 I.21. 『タイッティリーヤ・ウパニシャド』 I.1.も参照。「私は真理の言葉を語ることにしよう。聖なる法(ダルマ)の言葉が私の唇からこぼれ出るだろう」

2. 『スッタニパータ』 v.1146.「信仰により、そなたは自由になり、死の領域の向こうに赴くだろう」。Ibid., vv.182, 184.「信仰が人間の最上の富である。信仰によって激流を渡る」。『サンユッタニカーヤ』(『ミリンダ王の問い』)も参照。

P119

「輪廻の流れを断ち切り、生成変化を生み出す三要素<sup>1</sup>を絶ち、法の船に乗り、私は神々と共に世界を救うだろう<sup>2</sup>」

釈尊が説いた法、ダルマは、創造それ自体の揺るぎない永遠なる法則であり、宇宙のあらゆる側面に内在する。釈尊が創り出したものではない。ましてや、思いついたり、命じたものでもない。

「如来が出現したかどうかにかかわらず、この基本的な法則(原理)、この法の確定性、この法の決定性は確かである<sup>3</sup>」

釈尊が説いたダルマだけでなく、神の化身すべての基本的な教えを概ね調査すれば、一つの宗教しか実際には存在しないこと——「真実是一个であって、第二のものは存在しない<sup>4</sup>」——と、聖なる教師(仏陀)全員がこの真実を伝えていたことが分かるだろう。それゆえ、新しい宗教をもたらすよりもむしろ、宗教の刷新が自らの使命である、と仏陀全員が主張しているとみなすことができる。化身全員が強調する目標は、絶えず規模拡大をし続ける社会に適合するよう黄金律を刷新することにある。聖なる教師各人がこの目標を強調し、変化を遂げていく人類が必要とすることに完全に即した言葉で、永遠の真理の正しい意味と基準を伝えている。釈尊もこのことを肯定している。

「存在の条件付き素因はすべて苦にさらされ、すべての法(条件付きの行蘊)と条件の無い法(すなわち涅槃)には『自己がない』(永続的な実体がない、無我)。これを如来は知覚して知り、知覚して認識した後にそれを教え、示し、明らかにし、公開し、説明し、説き、意見を述べ、宣言するのである<sup>5</sup>」

釈尊は当時の状況に即した目標を掲げた。純然たるダルマを汚染していた空虚な想像と滑稽な儀式という不純物を取り除き、完全に純化されて生命を与える万能薬(ダルマ)を人々の渇いた魂に改めて提供し、至福に満ちた涅槃の探求を彼らが完全に果たせるようにすることが目標であった。

- 
1. 『バガヴァッドギータ』 XIV.20 も参照..「これらの三要素、苦老死」
  2. 『ジャータカ』 I.12-14(圧縮版)
  3. 『アングッタラ・ニカーヤ』 1.3.ヒンズー教徒も同じ信条を掲げていた。すなわち、ダルマには著者がおらず、「四面のブラフマンがそれを記憶している」というものである。マヌが各劫の期間に法を繰り返しもたらずとも信じている。マヌの法典はクリタ・ユガの権威ある法典だった(Kritetu Manava Dharma,……)。『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』 i.4.13.も参照。「ダルマほど高いものはない」。
  4. 『スッタニパータ』 884.(『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』 1.4.14 も参照。「この法を、この真理を超えるものはない」)。
  5. 『アングッタラ・ニカーヤ』 I.134.

P120

「煩悩を現実に捨てることで、煩悩がない不死の要素（原因）に自らの中で達した無漏の完全無欠の仏は、無憂無漏の境地を説く<sup>1)</sup>」

そして、法に内在する抗しがたい力の真髄から、あの説明しがたい信仰が再び人の心の中に生じるのは、一過性のものとの引き換えに、不死という永続的なものが約束されるからである。

「つまらぬ快樂を捨てることによって、広大な楽しみを見ることができるようなら、心ある人は広大な楽しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ<sup>2)</sup>」

——すべての宗教に共通する簡素だが永遠の原則への遵守を通じて。

「老いた日に至るまで戒しめをたもつことは楽しい。信仰が確立していることは楽しい。明らかな知慧を体得することは楽しい。もろもろの悪事をなさないことは楽しい<sup>3)</sup>」

——永遠に有効なこの法を違反した者たちに、釈尊は次のように警告している。

「人よ。このように知れ、慎みがないのは悪いことである。貪りと不正とのゆえに汝がながく苦しみを受けることのないように<sup>4)</sup>」

化身とも仏陀とも呼ばれる神の顕示者すべての教えにおいて、一つの重要な求心的テーマが、衆生の救済<sup>5)</sup>である。宗教(ダルマ)はこれを目的とし、その前提とするのが、如来たちがしばしば繰り返し明言した「人類は一つ」という概念である。それゆえ、如来という偉大な存在すべてが、生命を与えて救済に導く教えたるダルマをできる限り多くの人々に宣べ広めるよう、それぞれの弟子たちを急ぎ立てた。

- 
1. 『イティヴッタカ』. 『カタ・ウパニシャッド』 2.6.も参照「彼(絶対者)のことを耳にする者は多くなく、その中で彼に到達する者は多くない。彼について教えられる者は素晴らしく、教えを受けられる者は賢い。教えを受けながら彼のことが分かる者は素晴らしい」.
  2. 『ダンマパダ』 v.290. 『カタ・ウパニシャッド』 1.29 も参照「この地上の死すべき者が、自らの不滅を実感したとき、長い享楽の人生を、見せかけの美を欲するだろうか?」.
  3. 『ダンマパダ』 v.333.
  4. 『ダンマパダ』 v.248. 『バガヴァッドギータ』 XVI.23 も参照「教典の教令を無視し、欲望のままに生活する者は、成就(シッディ)に達しない。幸福にも、最高の帰趨にも達しない」.
  5. 「私は今、優れた法輪を転じたいと欲している。このために、ベナレスの市に行き、盲闇に包まれている者たちに光を与え、不死の門を人々に開けよう」 『マッジマ・ニカーヤ』 v.26.

P121

「比丘たちよ、私は、神々の畏からも、人間の畏からも、すべての畏から解放されている。比丘たちよ、多くの人々の祝福のために、多くの人々の幸せのために、世界への慈悲から、神々と人間の福利、祝福、幸せのために、歩いて旅に出なさい。二人で同じ道を進まないようにしなさい。比丘たちよ、最初においても、中間においても、終わりにおいても素晴らしいダルマ(法)を教えなさい。梵行を文字通りに完全に果たした純潔な精神をもって、法のすばらしさを説明しなさい。目に塵がなくても、法を聞かずに朽ち果てていく者がいる。しかし、法を学ぶ者であれば、成長するだろう。そして比丘たちよ、私は法を教えるためにブッダガヤに赴くつもりだ<sup>1)</sup>

彼ら顕示者は、人類は一つの単体として最終的に救済されるか破滅することと、人類の運命から乖離した個人の業績に価値はなく、世の幸せと調和していなければ、風の前の塵のごとく儚く消え去ることを教えている。ある詩人<sup>2)</sup>は次のように呟いた。

「私は神を求めたが、神は私から逃がれた。私は自分の魂を求めたが、魂を見つけることはできなかった。私が兄弟を求めると、三者すべてが見つかった」

神の顕示者たちが教えるとおりに、私たち自身が必ず救済されるには、人類全体が救済される以外に方法はない。釈尊はまた、自らが持つすべての力の中で最も重要かつ、生産的なものが、教え<sup>3)</sup>(ダルマ)の力であると断言した。さもなければ、当時の苦行者たちが救済を得るために慣習にしていた隠遁が無益であることを劇的に示すことも、その成果を軽視することもなかっただろう。

「人々は恐怖にかられて、山々、林、園、樹木、霊樹など多くのものにたよろうとする」

「しかしこれは安らかなよりどころではない。これは最上のよりどころではない。それらのよりどころによってはあらゆる苦悩から免れることはできない」

---

1. 『ヴィナヤ・ピタカ』 I.20-21. 『バガヴァッドギータ』 XVIII.68,69 も参照。「私に最高の親愛を捧げ、私の信者たちの間にこの最高の秘密を解く人は、疑いなくまさに私に至であろう。人のうちで、彼ほど私に好ましいことをする者はいない。またこの地上に、私にとって彼ほど愛しい者はいないであろう」

2. イギリスの詩人、ウィリアム・ブレイク.

3. 『アングッタラ・ニカーヤ』 I.171, 172.(幾たびもの誕生を記憶している力、他者の考えを読み取る力、そして教えという三種の力のうち、教えがもっとも考慮に値し、生産性がある[abhikkankataram ca panitataram ca]).

P122

「仏法僧に帰依する人は、正しい知慧をもって、四つの尊い真理を見る。すなわち、苦しみと、苦しみの成り立ちと、苦しみの超克と、苦しみの終滅におもむく八聖道とを見る」

「これは安らかなよりどころである。これは最上のよりどころである。このよりどころにたよってあらゆる苦悩から免れる」<sup>1</sup>。

ダルマ(法)は分かち合うべきものである。仏教の学派すべてがアジア全域に福音を伝えた熱意と、伝道を可能にした資質は、釈尊の十大弟子の一人だった富楼那の物語によく例示されている。富楼那はスロナパランタと呼ばれていた蛮国に布教に行く許可を釈尊に願い出た。その願いが真摯であることを試験するために、釈尊は富楼那と以下の会話を交わした。

釈尊 「スロナパランタの人々は、獯猛、暴力的で残酷だ。他人を罵り誹謗し困らせることに病み付きになっている。もし、罵られ、誹謗され、悪意ある刺々しい偽りの言葉を投げつけられるとしたら、そなたはどう思う？」

富楼那 「そうなったとしても、スロナパランタの人々は善良で優しい人たちだと思うでしょう。手や石を使って殴りかかることはないのですから」

釈尊 「しかしもし、手や石を使って殴りかかってくるなら、どう思う？」

富楼那 「そうなったとしても、スロナパランタの人々は善良で優しい人たちだと思うでしょう。棍棒や武具を手にして殴りかかることはないのですから」

釈尊 「しかしもし、棍棒や武具を手にして殴りかかってくるなら、どう思う」

富楼那 「そうになったとしても、スロナパランタの人々は善良で優しい人たちだと思うでしょう。私の命を奪うことはないのですから」

釈尊 「富楼那よ、しかしもし、そなたの命を奪うなら、どう思う？」

富楼那 「その場合でも、この腐敗した肉体から難なく解放してくれるのですから、やはり善良で優しい人たちだと思うでしょう。私は、肉体を恥じて悩み、嫌悪し、刀剣で自害したり、毒を飲んだり、縄で首を吊ったり、絶壁から身を投げる比丘がいることを知っています」

釈尊 「富楼那よ、そなたには最大の優しさと寛容さが備わっている。そなたはスロナパランタの国に住み、滞在できます。そなた自身が囚われから解放されているように、彼らに自由になる方法を教えに行きなさい」

---

1. 『ダンマパダ』 v.188,189,190,192. 『バガヴァッドギータ』 XVIII.71 も参照。「信仰を抱き、妬み(不満)なく、それを聞くだけの人も、罪悪から解放されて、善行の人々の清浄な世界に達するであろう」

P123

釈尊はまた、自らが説くダルマは、救済を得るために当時すでに存在していた多くの道の中に加わるもう一つの道ではないことを、弟子たちにも、弟子以外の人々にも警告した。この他に道はない。

「これこそ道である。真理を見るはたらきを清めるためには、この他に道はない。汝らはこの道を実践せよ。これこそ悪魔を迷わして打ちひしぐものである。汝らがこの道を行くならば、苦しみをなくすことができるであろう。(肉に刺さった)棘を抜いて癒す方法を知って、わたくしは汝らにこの道を説いたのだ<sup>1)</sup>

「空には道もなく、外には世捨て人もない。人間は世俗を楽しむ。諸仏は世俗から解放されている<sup>2)</sup>

しかし、救済への道を歩む旅人がこの無比の道(ダルマ)を見出すには、案内人である仏陀、すなわち如来を旅人本人がその前提として認識できていなければならない。如来が実在する意味と、人類の中に出現する目的を理解している必要がある。

「私は、手足が不自由なすべての生き物を喜びで満たし、救援と救助の手を彼らに差し伸べよう。私は世界の救済のために、真理の王としてこの世に生を受けた」

化身こと如来全員が、救済が最も必要とされている時代に私たちの間に出現する主な目的を明確

にかつ繰り返し強調し、「人類の救済」という最大の仕事に参加するよう、私たち一人一人全員を招待した。これまでに理解されたように、釈尊も例に洩れない。ダルマ(法)伝えることが救済への唯一の道であり、釈尊の弟子と自称する者すべての最も重要な務めである、と果敢に宣べた。

「須菩提よ、三千の星雲世界にあるだろう須弥山<sup>4</sup>に匹敵する量の七宝を施捨する者がいるとしよう。その者とは別に、この超越的な智慧を完成させる説話からわずか四行でも選び、それを受け取って自分のものとし、他者に明確に説く者がいるとしよう。

- 
1. 『ダンマパダ』 vv.274,275. 『バガヴァッドギータ』 III.32 も参照。「しかし、不満を抱き、私の教説に従わない人々、彼らを全ての知識に迷う、破滅した愚者であると知れ」。
  2. 『ダンマパダ』 v254(暫定訳). 『ダンマパダ』 vv.248, 255 も参照。
  3. 『ディーガ・ニカーヤ』 I.46. 『アタルヴァ・ヴェーダ』 IV.30-5 も参照。「私は人々のためにあらゆる幸福を創造し、顕示者(化身)の装束をまとして天と地を支配する」
  4. メルー「ヒンズー教神話のオリンポス」。現在、ヒマラヤと呼ばれる山脈。「崇高」という意味もある。

P124

後者の功德は前者とは比較にならないほどに大きなものになるだろう<sup>1)</sup>

本物の信仰を他者に伝えることによってのみ、私たちは自分自身の信仰を強め、蓄積も増やせることを理解できるようになることを、釈尊は知っていた。何度も繰り返し襲い来る苦の波濤に脅かされる者は、隣人が信仰を強められるよう援助することでしか、信仰という自らの拠り所を強めることはできない。苦しみの海の高波が絶えず打ち付けてきても、私たちすべてが土壌を同じくする信仰で結びついているからこそ支え合うことができる。

釈尊の真の業績は、教えを若返らせ、当時のインドで人口の大多数を占めていたヒンズー教徒を絡み取り、宗教と概ね同一視させられていた偶像崇拜と動物の屠殺という底無し沼のごとき状況から、人間社会を浄化し解放させることに、その効果を発揮させたことにある。

「あなたは慈悲に満ちた心で、ヴェーダの中で動物の屠殺を命ずる生贄に言及する部分を非難したのです。仏陀の身体を持つケーシャヴァ<sup>2</sup>よ、世界の主であるハリよ、あなたに勝利あらんことを」

だが他の大宗教の教えのように、釈尊のダルマ(法)が結実させた霊的救済という果実もまた、永遠ではない。それでも、釈尊入滅後の数世紀間、その力強い樹の下に幸運にも避難できた者たちに人生を生きるという実践を授けた。

永遠のダルマの力に釈尊が授けた普遍的意味が、あらゆる人間関係を生み出して維持する要素すべての中で最大の「愛」にも、痛切極まりない言葉で授けられている。釈尊が25世紀前に初めて

明確に述べた時以来、その意味するところの美しさと及ぶ範囲でこれに勝るものはない。

「あたかも、母が己が独り子を命を賭けて護るように、そのように一切の生きとし生れるものどもに対しても、無量の慈しみの意を起すべし。また全世界に対して無量の慈しみの意を起すべし。上に、下に、また横に、障害なく怨みなく敵意なき慈しみを行うべし<sup>3)</sup>」

- 
1. 『ヴァジュラ・サットヴァ』 XXIV(この教えの比類なき功德).
  2. 『ギータ・ゴーヴィンダ』 1.9:これはクリシュナ(ケーシャヴァ)について言及している。ヒンズー教徒は、宗教(ダルマ)を再び浄化するために、クリシュナは仏陀として転生したと信じている。
  3. 『スッタニパータ』 w.149-150. 『プラシュナ・ウパニシャッド』 2.13 も参照「母親がわが子を守るように、おお生命よ、われらを守りたまえ、われらに栄光を、英知を与えたまえ」。『アタルヴァ・ヴェーダ』 3.27 も参照。

P125

救済と愛の釈尊の教えにより、一時的にせよ、行政機関を運営し、壮麗な芸術を开花させた力強くも人道的な文明が、まず釈尊の生誕国の中に、次いで、アジアの国々の大半に設立された。そして、未開の地には倫理意識を、国家段階に達していた国々にはより幅広い見地の人道意識を授けたことは驚くに値しない。そして最終的には、人類の5分の1に影響をもたらした。

幸いなことに、釈尊生誕国における仏法の功績の説明が、様々な中国人僧侶とギリシャの名士たちの物語の中に残されている。釈尊の福音を支持していたインドの大王たちの数名の宮廷まで彼らは旅をしていた。その記録が簡潔であっても、当時の純粋な「道」がいかに素晴らしく活気に満ちていたかの理解に役立つだろう。しかも今では不明瞭となり、歩く者はめったになくなって失われた道が、以前の栄光を取り戻すために、仏陀の出現が待たれていることも分かるはずだ。

では、釈尊の教えを信奉した王の中でも、インドの縦横全体だけでなく、スリランカ、ギリシャ、エジプト、ペルシャ、ローマなどの外国にも教えを広めた王として真っ先に挙げられるアショカ王<sup>1)</sup>から紹介しよう。全土統一への渴望から、10万人を戦いで虐殺したアショカと同一人物である。如来への信仰を自認してからは改悛者になった。伝道の成功と倫理水準でアショカに匹敵する者は、王の中にも平民の中にもいないことは歴史が示している。しかも、2千年以上前の史実であったことを忘れてはならない。アショカ王が伝道で行使した影響力は、世界の歴史において文明化をもたらす最大要因の一つだった。伝道本部を住民の大半が野蛮で迷信に縛られた土地に設立し、住民の霊性を目覚めさせた。王が仏法の訓示を臣民に公布するために岩に刻んだ法勅からは、偉大な征服者の心と意識を、釈尊の教えがどれほど激しく揺り動かしたかを測ることができる。

---

(前頁脚注2の続き)「憎しみから解放されなさい。調和と意見の一致をあなた方全員にもたらそう。雌牛が生まれたばかりの仔牛を愛するように互いに愛しあいなさい」。『リグ・ヴェーダ』 VIII.7 も参照「和合のうちに分け前にあづか

っていた過去の悟りを開いた人たちのように、あなたがたもたがいに調和のうちに暮らし、すべての者と愛ある甘美さの中で協力し合い、想念においても知識においても一つになりなさい。あなた方の意識が守られるよう、神の命令を全員に等しく行き渡らせよう……一つの聖なる命令の下に皆が等しくなるよう、私はあなた方全員に命じる……あなた方の心の一つの心となし、全員の意識を一つの意識となしなさい。そうすれば、諸事は協力のうちにうまく整えられるだろう」。

1.在位紀元前 274 年～紀元前 232 年.

P126

デヴァナンプリヤ<sup>1</sup>は、傷つけず、行いを慎み、自己に対してと同等に他者を柔らかく扱うよう、すべての存在に望んでいる。それゆえこの征服は、神々の最愛の人による最重要なもの、すなわち、道徳による征服とみなされている。そして道徳によるこの征服をこの国土と国境外のすべての土地で神々の最愛の人が繰り返して果たしてきた…。この征服が至るところで繰り返し成し遂げられたことで、満足感をもたらしている<sup>2</sup>。

仏教に改宗する以前は、ペルシア帝国の都スーサの栄光も、アレクサンドロス大王が東方遠征で占領したメディア王国の都、エクバタナの壮麗さも及ばない豪華な暮らしを手にし、改宗後は、飢饉も貧困もほとんどなかったとギリシャ人年代史家が記録するほどに、破壊から建設へ、死から生へと、統治の態様を劇的に変更したのも、同じアショカ王だった。灌漑には格別な注意が払われた。国土の大部分が灌漑され、二毛作が行われた。人造湖とダムが可能な場所であればどこでも建設され、交易が盛んに行われ、アフリカ、ギリシャ、アジアの様々な場所からやって来た国際色豊かな商人たちがひしめく姿がアショカ王の帝国の都、パータリプトラのバザールで見かけることができた。南インド、マレー半島、中国、メソポタミア、そして小アジアのギリシャ統治下の都市から運ばれた品々が露店で並べられ、この地だけでなく帝国内のどの地でも、販売価格が厳正に統制された。絹、モスリン、細密な布帛、食卓用金物、甲冑、金襴、刺繍細工、敷物、香水、薬品、象牙、象牙細工、宝石、金が帝国内で商われた。

富み栄える様相が、帝国を訪れたペルシャ人旅行者たちによって語られた。商手引の『アルタ・シャーストラ』には出荷時の諸規制が細かく規定されていることから、インドの商船がチグリスの河口やアデン湾に向けてインド洋を横断する沿岸貿易が盛んに行われたことが分かる。交易契約でも社交でも、アショカ王の臣民は卓越していた。信用が当時のインドの国民性を概ね特徴付けていたことは、「嘘をついたインド人はいなかった」というギリシャ人旅行者の言葉により確認されている。契約締結の際に証人と封緘は余計とみなされ、守衛が警護する家はなかった。女性は良い待遇を受け、新婦が持参した結納金は本人の個人財産になった。

---

1. 神々の喜び(アショカ王の称号の一つ)

2. アショカの碑文(No.XIII),シャバズガルヒとギルナールに所在.

P127

夫が妻に酷い仕打ちをすれば罰の対象になり得た。女性への暴力は厳しく処罰された。奴隷制があった事実は証明されていない。

アショカ王はマトウラーに住んでいたウパグプタの説法に触発されて仏教に改宗してからは、戦闘をこれ以上しないと誓い、釈尊が定めた信仰の法、ダルマという、唯一の法に照らした統治を行った。「戦いの太鼓の残響は、法の太鼓の残響となった」「真の勝利は、信仰の法に感化されることである」と明言し、自分の息子たちと孫息子たちには、帝国支配の欲に駆られることになっても、軍事力による征服は無価値であることを心に留め置くように、と厳命し、「法による征服だけが喜び満ち溢れる征服」であると確約した——「勝利からは怨みが起る。敗れた人は苦しんで臥す。勝敗をすてて、やすらぎに帰した人は、安らかに臥す」。

時が経るにしたがい、アショカ王の宗教心はいよいよ強まっていった。教団の中に一般信徒として入った後に修行僧となると、自らが統治する帝国全土に仏法を広めるために、祖父が発足させた行政制度を活用する決心をした。

「私の領内のあらゆる場所で、私(の官人)は、他の業務と同様に、以下の道徳が根付くよう指導のために巡回しなければならない。父母への服従は功德である。友人、知人、親戚、ブラフマン、沙門に対する寛大さは功德である。生き物の殺生を避けることは功德である。浪費せず、蓄え込まないことは功德である」

アショカ王は、国民が自分たちに何が期待されているかをはっきりと理解できるように、岩や、通行の際にまず目に入る場所に建てた石柱に法勅を刻んだ。石柱碑は、ペシャワール、カーティヤーワール、ネパール国境地帯、オリッサ、マイソールという、はるかな遠方の地にも建立された。「いつまでも残るように、どこに存在するものだろうと、石柱や石台に、法を記さなければならない」。王が命じたとおり、国民が理解できる実用的な内容の法が刻まれ、形而上学的で抽象的な事柄には何一つ言及されていない。憐み深く寛大で、信頼に足る、純潔な、温和な、高德な人格で人生を送るための言葉が記されている。「年長者に耳を傾け、老人を敬い、バラモンや修行者に対してだけでなく、貧しく不幸な人々、さらには召使いも、丁重に遇すること」。アショカ王の格言に含まれるこれらの美德が「この世でも、次の世でも」唯一の真の幸福をもたらすだろう。

---

1. スードラ(下級カースト)階級に生まれたが、17歳のときに僧院での暮らしに入った。アショカの時代までに5人の長老が輩出し師から弟子へと法を相承していたが、その5番目の長老として名を馳せ、崇敬を受けていた。

2. 『ダンパバダ』v.201.「勝利からは怨みが起る。敗れた人は苦しんで臥す。勝敗をすてて、やすらぎに帰した人は、安らかに臥す」。

### 3. アショカの碑文(No.III),ギルナール.

P128

アショカ王の念頭に最初に上ったのが、臣民の安寧と福利であった。主要な道路には木陰を作る樹々を植え、井戸を掘り、人間と動物のために病院を建設した。教育は、大半の仏教国においてがそうであるように、僧院が広く普及させた。でなければ、法勅を刻んでもほとんど役に立たなかつただろう。アショカが皇位に昇った戴冠式の日が毎年めぐり来ると、牢獄が開放された。死刑判決を受けていた囚人は執行猶予が与えられて不服申し立てが許されたり、その魂の準備<sup>1</sup>を整える敬虔な人々による訪問を受けた。知事には恩赦を認める広い裁量が与えられた。王が手がけた主な改革の一つが、生きとし生けるものの不殺生を釈尊が定めた法、アヒンサの実践であった。王は自ら模範を示すことで、徐々に屠殺を停止した。王族による狩猟を廃止し、王族の食事にするための動物の殺害を減らし、生贄を禁じ、多種の鳥獣の禁猟期を導入した。

アショカ帝が大きく心を砕いたことの一つが、他宗教に完全に寛容になることであった。自らの帝国で宗教間戦争はあってはならなかった。他宗教を貶める一方で自分たちの見解を称揚する慣習を蔑視した。堅忍不拔な信仰を持つ一人の仏教徒に感化され、バラモン教、ジャイナ教を始めとする他宗教に属する人々にも完全に差別なく後援の手を差し伸べた。その代表例が、マハーヴィーラと敵対していたゴースーラが創設した裸形托鉢教団アージーヴィカのために、多額の費用を投じてバラールに岩窟を造ったことだった。

法の本質は、様々な方法で成長可能である。しかし、その根源は言葉を慎むことにある。つまり、不適切な場面で自分の宗派を誉めながら、他の宗派を貶めたりせず、適切な場合でも、あらゆる場面で穏当であるべきである。それどころか、他宗派はあらゆる場面であらゆる作法で正當に尊重されるべきである。このように行動する者は、自らの宗派を促進するだけでなく、他の宗派を利することになる。さもなければ、自らの宗派を傷つけるだけでなく、他の宗派に害を及ぼす。もし、単に自らの宗派への単なる愛着から、自らの宗派を賛美し、他の宗派を貶めるなら、その行動によって、自らの宗派を非常にひどく傷つけることになる。したがって、言葉を慎むことは賞賛に値する<sup>2</sup>。

---

1. 魂が不滅であることが認められていなければ、ほとんど意味をなさないだろう。

2. アショカの碑文(No.XII),ギルナール.

P129

古代の聖人君主が啓発された自分を表現していたことに、異議を申し立てる人はいない。いわゆる啓蒙された現代でさえ、こうした理念を私たち自身の人生で実践することが広く一般的に求められていることを、否認する人はいない。

アショカ王は、愛を自らの統治の礎石にし、臣民に進んで従うことを切望した。国民の父とみなされたいと願った。「我が子を熟練した乳母に預けた父は、『熟練した乳母なら我が子の幸せのために熱心に世話をしてくれる』と信頼感から胸の内をつぶやくように、私が知事たちを任命したのは、我が国の福利と幸せを願ってである」。王の慈愛は、ヒンズーの共同体の域外の密林で暮らす貧者に向けて特に注がれた。彼らの信頼を勝ち得るために、彼らが迫害されないようにするために、あらゆる努力が払われた。「すべての根本にあるのは粘り強さと忍耐である」。

アショカ帝は高い水準を官人に課し、自分で説いたことを自ら実践した。休日を取らずに働き続けた。「食事の最中でも、妾宅、個室、馬屋、馬車の中や遊戯場にいるときでも、国民に関わることを知らせるために私との面会を予約した者は、私がどこにしようと、知らせを手控えてはならない……私自ら努力しようと、代理を派遣しようと、こなし業務に私は決して満足することはない。国民すべての福利のために私は働かなければならない」。王が手がけた多くの活動の中には、仏教聖地への巡礼と、釈尊生誕地、釈尊が初めて説法した地、悟りを開いた地、般涅槃の地に石柱碑を建立したことも含まれている。

他者を尊重し、神々の最愛の王が聖別された王になった即位 20 年を記念し、王自身が（この地、仏陀釈迦牟尼の生誕地に）赴き、礼拝をした。そして、この地で祝福された方が生まれた（ことを示すために、）馬の姿を石に彫り刻ませ、石柱を立てさせた。また、ルンビニの村を免税し、8分の1の納税でよいことにした<sup>1</sup>。

アショカ王は仏教を広めるために、上記以外にも多くのことを行った。法勅の一つに經典の中から好みの節を簡条書きにし、学習に特に適したものとして参考にするよう、国民に奨励した。自らが後援し、ウパグプタを座長に据えた第三結集が紀元前 240 年にパタリプトラで開催された。9 カ月間に及んだこの結集で、教団を分裂させていた部派間論争は決着し、

---

1. ルンビニ柱碑文

経・律・論の三蔵、トリピタカがまとめられた<sup>1</sup>。王は晩年に隠遁し、40 年間(紀元前 272 年から 232 年)統治した帝国を息子に委ねた。彼こそが、自らの帝国の公式信条としてダルマ(法)を広めた王であった。寛容と慈善の原則を果敢にも公布し、その厳守を貫き通した君主は、アショカ王の

以前にも以降にも現れなかった。

「陛下は誰かに傷つけられても、耐えうる限り、忍耐強く耐えなければならないと考えておられる」。

この言葉は釈尊の教え<sup>2</sup>と違わない。しかも、史上初めて宣べられてから2,500年が経過した現在も、対人状況における最も卓越した振る舞い原則であることに変わりはない。大なり小なりの「哲人王」は他にもいたが、釈尊の教えの変革の力を通して変貌したアショカ王以上に、この呼び名を真正に体現した王はいなかった。

それから7世紀後、アショカ王が治めたマウリヤ朝の王都パータリプトラ<sup>3</sup>と広大な宮廷跡を訪れた中国からの偉大な巡礼者、法頭は「死すべき人間の手による技ではない」と宣言した。あの威风堂々とした城壁と門を築き上げ、石を積み上げ、精巧な彫刻と複雑な象眼細工を施した彫像で装飾するのは人間技でできることではない、と法頭は確信した。アショカ王の石柱碑に匹敵する碑はない。アショカ王は自ら望んだ場所に、王室専属の職人の手による石柱碑が建立されたことを大いに喜んだ。先端に向かって徐々に細身になるよう加工されている巨大な石柱は、高さ15メートル、重さは少なくとも50トンの巨大な硬質の砂岩からできた一枚岩である。チュナールの採石場から各目的地まで運ばれた巨大な石柱碑の内の2本がデリーまで運ばれ、その地で建立するために超人的な努力が払われたことを資料から読むと、アショカ王の工人たちの技術水準をいくばくか想像することができる。何千人もの作業員が雇われ、精巧な運び台、ボート、昇降機が建造されなければならなかった。石柱碑は限りなくガラス状に近くなるまで表面が磨かれ、後世の旅行者が金属製と勘違いするほどの高い技術水準で造られた。

---

1. 正経書はこの第三結集のときに最終的にまとめられたが、上座部のパーリ仏典として記述されたのは、釈尊の入滅後、4世紀以上を経た後の西暦紀元前29年、セイロン島のヴァッタガミニ王の治世の時代においてだった。

2. 『ダンマパダ』v.5.「この世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である」

3. 現代のパटना。

P131

石柱碑の上に載せられる柱頭に彫り刻まれる意匠は、王権を象徴する獅子であることが多い。最も印象深いのが、サールナートで発見された、4頭の威厳ある獅子がダルマチャクラ（法輪）の上に乗る柱頭だ。釈迦如来がこの地で初めて説法をしたことに由来する。施されたその彫刻は他のどの地のものより卓越している。だが、ダルマに感化されて導かれたアショカ王の偉さと天才ぶりに賛辞を贈り、その芸術的功績と記念碑がいかに壮大であるかを認めても、現時点で公正を期すには、それらはインドに起源を発するものではないと述べなければならない。

マウリヤ朝を始めとするインドの諸王朝が模範を求めたのは、イランに地盤を築いていたその血族と隣人たちの威光を放つ文明であった。アショカ王石柱碑の柱頭に残されているペルシャの影響<sup>1</sup>は痕跡著しい。アショカ王の祖父でマウリヤ朝の初代王であったチャンドラグプタはペルシャの総督管轄領の首都タキシラを訪問した後に、ペルシャ様式を宮廷に採り入れた。もしアショカ王に、確実に意識的に模倣した原型があったなら、それは、イランの帝国、アケメネス朝を開いたキュロス大王の子孫、ダレイオス大王<sup>2</sup>であった。アショカ王の3世紀前のダレイオス王は、ゾロアスター教に改宗し敬虔な信者になっていた。釈尊のほぼ1世紀前にイランに出現したゾロアスター<sup>3</sup>は、遊牧国家だった当時のイラン・アーリヤ人社会に求められていることに即したダルマ(法)を啓示した。アショカ王が石柱に刻んだ説教はペルシャに由来し、その語調は、アショカ王の時代より数世紀を遡るナクシュ・イ・ルスラム遺跡の岩壁に刻まれたゾロアスター教の最高神アフラ・マズダーに捧げたイラン王ダリウスの祈願と尊崇の言葉と酷似している。また、柱頭を載せたアショカ王の石柱碑はペルシャに由来することを如実に示している<sup>4</sup>。山腹を切り開いて僧院を造営するという発想は、岩を削って造られたイランのアケメネス朝の王墓からもたらされた。

それは当然である。インド・アーリヤ語派の言語を用いる人々の総称であるインド・アーリヤ人は、言語<sup>5</sup>、神々の神話と伝説、信条の源で密接な関係を持つ一つの民族であった。

- 
1. ペルシャもイランも国民は同じ。マウリヤ朝に及ぼしたペルシャの影響については、デビッド・ブレイナード・スプーナーによる *The Zoroastrian Period of Indian History*, J.R.A.S.,1915 を参照。
  2. 釈尊と同時代の人物。ダレイオス1世のペルシャの統治期間は西暦紀元前522-486年。大王として知られている。
  3. ゾロアスター。仏暦紀元前101-24年。アケメネス朝帝国の時代からササン朝終焉時までペルシャの国教だった宗教の開祖。用語集を参照。
  4. ペルセポリスを建設したアケメネス朝の諸王が用いたものと近似する意匠。
  5. 古代、アーリヤ系民族の交流は非常に盛んだった。信仰していた神々と伝承が類似していたためだった。次頁に示す表から、サンスクリット語と古代イラン語、ゾロアスター教典言語アヴェスターの相似性が理解されるだろう。

P132

アケメネスの (Achaemenian) という言葉自体が、キュロスの父祖であるハカーマニシュ<sup>1</sup>、Hakhamanush (古代ペルシャ語。サンスクリット:Sakamanushya) がギリシャ語に転訛した形にすぎない。Sakamanushya は「シャーキヤの男(シャカ族)」を意味し、このシャカ族にシッダールタが帰属していた。シャカ族も、ハカーマニシュ朝も、ピシュダディアン (サンスクリット: Paradata) 王朝の初代王でイランを30年間統治したガユーマルスを始祖とみなしている。ガユーマルスの後、フーシャング, Hushang, (サンスクリット: Hovoshyada) が王朝を継承し、さらに、ヴィヴァスヴァン, Vivahvant (サンスクリット: Vivasvan)<sup>2</sup> が継承した。ヴィヴァスヴァンがマヌをもうけ、その子孫としてイクシュヴァークが誕生した。イクシュヴァークは、パーリ語で言うオ

ッカーカ(太陽王朝、古えの日種王朝の統治者)のサンスクリット語名である。シッダールタは、自らは日種族の末裔であると主張した。

昔、オッカーカ王<sup>3</sup>は、寵妃<sup>4</sup>の息子を後継者にするために、年長の息子<sup>5</sup>たちを追放した。  
.....

---

古代イラン語

サンスクリット	アヴェスター	古代ペルシャ語	現代ペルシャ語
Sindhu (インダス)	Hindu	Hindu	Hind
buddhi (perception-知覚)	Baodhas		
Asura Mehdas	Ahura Mazdah	Ahuramazdah	Hurmazd
karma (volition_意欲)	kamer		
bhoomi (earth_大地)	boomi	boomi	boom
manas (mind_意識)	manas		
kratu (insight_洞察)	xratu		xirad
hasta (手)	zasta	daska	dast
asva (馬)	aspa	aspa	asp
deva (神々_god)	daiva		

釈尊も現地語であったマガダ語で説法をしたが、サンスクリット語での会話にも完全に熟達していた。だが、パーリ語を話していなかったのはほぼ間違いない。布教していた多数の僧が説法に用いていた多数様々な方言から、釈尊の時代から1世紀後に案出された言語がパーリ語だった。

1. "Hakh"は公正という意味での「強さ」を, "manush"は「男」を, サンスクリット語の"Saka"も「男」を, 「勇敢な」もしくは「豪胆な」も意味する. "manushya"も「男」を意味する.
2. 『バガヴァッドギータ』IV.1を参照。「私はこの不滅のヨーガをヴィヴァスヴァン(太陽神)に説いた。ヴィヴァスヴァッドはそれをマヌ(人類の祖)に告げ、マヌはそれをイクシュヴァークに告げた」。ここに言及されるマヌは、私たちに関わる劫(宇宙時代、神の時代)に出現した Satyavrata と呼ばれる7代目マヌである。伝承によれば、初代マヌは Swayambhuva, 2代目からは, Swarochisha, Uttami, Tomasa, Raivata,そして6代目が Chakshusha と呼ばれた。
3. ダシャラタ(ラーマヤーナで、ラーマ、その兄弟のラクシュマナ、バラタ、シャトルグナの父王であると述べられている)。
4. カイケイ。バラタの母。

5. ラーマとラクシュマナ、ラーマと共に妻のシータも赴いた。

P133

……追放された彼らは、ヒマラヤ山脈の斜面に植林された檜の樹々が立派に育った湖のほとりに住居を構えた。オッカーカ王は感嘆の声を上げた。「勇敢（檜の木の心：シャーキヤ）とは、あの若者たちのことだ。そうだ、自分たちの力を発揮したのだ！」。彼らが「釈迦族」と呼ばれるのはこのことに由来する。まことに、王こそが「釈迦族」の祖先であった。

それゆえ、アショカ王が世襲し全盛期を迎えたマウリヤ朝が当時のギリシャ人（アレクサンドロス大王<sup>2</sup>がペルシャ、インド、アジアの小国征服後に統治を委任した総督や将軍たち）領土と、国境を介して隣接していたにもかかわらず、その文化芸術にギリシャの影響は見出されない。ギリシャは結局のところ、信仰も、民族、言語上の起源も共通点がない異文化だった。マウリヤ朝と結びつきがあったのは、イランを始めとするアーリヤの土地だけだった。しかも、釈尊が明瞭に予見したとおり、彼のダルマ(法)はイランとはさらに別の結びつきがあった。

アショカ王の時代の3世紀前に、アーリヤの諸民族と、仏教を国教と定めた最初で最大の君主が統治する帝国の都になる運命にあったパータリプトラ<sup>3</sup>の偉大な未来とが結びついていることを、釈尊はだてに強調したわけではない。

「阿難よ、アーリヤ人が大勢で足繁く訪れるかぎり、商いの通路としてあるかぎり、ここは第一の都パータリプトラとして、財貨の集散地となるだろう。しかし、パータリプトラには、火、水、仲違いという、三種の危険がつきまとうようになるだろう<sup>4</sup>」

パータリプトラの運命は、二つの霊的太陽の出現をつなげる唯一現存する物理的リンクとして役立つことだった<sup>5</sup>。ある意味、仏教国家最初にして最大かつ、最も洗練した都となったパータリプトラは、その創設者たちがイランの様式から閃きを受けたことをその建築を通して実証するとともに、かつての時代のダルマが果たした最大の物質的栄光を目の当たりにするためにやって来た人々には、最西端にあるこの同じイラン(対極の最東端が釈尊が説法したこの都)に顔を向けさせる精緻な羅針盤として役立つだろう。

---

1. 『ディーガ・ニカーヤ』 Part 1.

2. 西暦紀元前 356 年誕生-323 年死去。紀元前 330 年にペルシャ帝国を征服し、北西インドの小国をいくつか征服した(紀元前 327-325 年)。

3. 『スッタニパータ』 977. 釈尊はこれ以外にも六つの大都市 (Sayatthi, サケタ, カウシャンピ, カーシー(現代のヴァーラーナシー), 王舎城, チャンパ)を挙げたが、予言の対象とし、非常に高い重要性を与えたのはパータリプトラをおいて他にない。

4. 『マハーバリニツバーナ・スッタ』 I.16.

5. 仏教国の首都で、役割がパータリプトラに準ずるものも、建築様式がイランから影響を受けたものはない。パータリプトラだけが釈尊の予言通りに唯一無二のその役割を果たした。

P134

そのイランを、一民族、一国家として、釈尊の時代と変わらずに今日も、アーリヤ人がたびたび、インドから訪問している。それは、弥勒如来の到来によって、ダルマの栄光を復活させ、釈尊が打ち立てた霊的体系を完全に結実させるためである。

アショカ王の後にも王たちが仏法を保護したが、特筆されるのが、カニシカ王であった。ほぼ3世紀前に生きた偉大な先人、アショカ王に倣い、王の時代以降にサンガで起きた難事を取り除くために結集を開催した。4回目を迎え、最大かつ最終となった結集は6カ月間にわたって開かれ、僧侶500人が参加した。世友<sup>1</sup>を座長に据えた僧侶の中には、馬鳴、龍樹という名だたる学識研究者も含まれ、審議に参加した。入念な経典注釈が作成され、仏教百科事典 *Mahavibhasa* が編纂された。「カニシカ王はこの論議を赤銅製の板に刻むよう命じた。そして、石の容器に収めて封印した後、その上に仏塔を立て、その中央に経典を置いた」と中国から旅して来た玄奘が伝えている。

ヨーロッパとアジアとの交易で豊かになっていたカニシカ王の帝国は、前例がないほどに富み栄え繁栄した。王は芸術を惜しみなく後援した。ペシャワールの王都には装飾を施した壮麗な建造物が多く建立され、殊に、釈尊の遺骨の一部を収めた木製の塔は高さ120メートルを超えていたと伝えられている。14層建の頂上には数多くの金銅製の傘蓋を載せた鉄製の小尖塔が建てられていた。大塔の側面は夥しい数の仏像で飾られ、何度も修復された。6世紀においても大塔は存在し、外国人訪問者からは世界の不思議の一つであるとみなされた。遺跡は1908年に発掘され、銅箔で覆われた舍利容器が小部屋から見つかった。高さは20cmに満たず、ギリシャのヘレニズム様式の意匠が施されている。容器の蓋には、釈迦如来と脇侍の菩薩二体の姿が左右に取り付けられ、弥勒菩薩と観自在菩薩<sup>2</sup>とも言われている。

---

1. ヴァースミトラ、北方インドの出身、ミシャカ(弥勒迦)による教化を受けると放縦な生活から足を洗い仏教に帰依した。説一切有部に属して7代目の長老となり、『アビダルマ・プラカラナ・パダ・シャストラ』を著述した。

2. 初期の時代から様々な場所で、二人の菩薩——弥勒と観自在菩薩が共に述べられていることの意義に留意していただきたい。二人は重大な意義を備えて共に再び登場する。

P135

チャンドラグプタ2世と、カナウジを自ら興したヴァルダナ朝の都に定めたハルシャ王など、紀元5世紀から7世紀の君主はダルマ(法)を賛美し、彼らが果たした功績は、インドに401年から

滞在していた中国僧法顕や、629年に長安を発ち、645年に帰還するまでインドに滞在した学識高い玄奘によって記され、今日に伝えられている。法顕は次のように記している。

「貴族や家屋所有者は市中に病院を設立し、あらゆる国の貧者、困窮者、不具者、病人が赴いて治療を受ける便宜が計られている。あらゆる必要な援助が無償で受けられる。医師は診察し、症例に応じて、食べ物や飲み物、薬や煎じ薬など、症状の緩和に役立つものすべてを与える。治癒すれば、都合のよい時に退院できる」

法顕は、政府が公正であり、恩赦を施し、運営が効率的であることを讃えた。住民は繁栄して満ち足りた暮らしを送り、死刑はなく、酩酊している者はいなかったと云う。

「精舎に房を与えられた僧すべてが、寝床、敷物、飲食物を与えられ、慈悲の行為や経典の読誦に時間を費やす。居住が正当に認められると、家屋所有者やバラモンから様々な袈裟や必需品を贈られ、僧たちも互いに贈り物をし合う。世尊がこの世を去って以来、僧侶の行動規範は絶えることなくこのように受け継がれてきた」

200年後のハルシャ王の時代についての玄奘の記述も感銘深い。

「庶民は生来的には軽佻だが、高潔で尊敬に値する…来世での応報を恐れ、現世の物事には執着しない……政府が定めた規則は驚くほどに厳正である一方、政府の振る舞いは非常に穏やかで親切である。行政が良心的な原則に立脚しているため、行政府は質素であり……国民が強制労働に服することはない。王室御料地は4分されている。第1は国事遂行のため、第2は王室の大臣や官人への給与のため、第3は天才的人物への報奨のため、第4は宗教共同体への布施のため……」

P136

「租税は軽く、国民に求められる労役も適度に収められている。皆が安心して財を持ち、土を耕して生活している。公共事業で必要とされる場合、労働が要求されるが、その対価は支払われる。支払額は行われた仕事に厳密に比例する」

ハルシャ王は、仏教を保護した先達のように、公正で有能な統治者であった。慈善事業に気前良く喜捨した。玄奘は次のように語る。

「インド中の町や村のすべての街道に、宿泊所を建て、食べ物や飲み物を提供し、医師を常駐させ、旅人や周囲の貧者のために、出し惜しみなく薬を与える」

玄奘は、インドでは学びが尊重されていることに賞賛の言葉を放っている。裕福で地位ある多くの人々が、私欲を持たずに、宮廷からの招きも、名誉も、あらゆる種の報奨も拒んで研究に生涯を捧げていたのだ。だが最も興味を惹かれたのが、王舎城北12kmに所在する有名なナーランダ大学(ビハール州の僧院)だった。東方のあらゆる場所から訪れた学生が群れ集まるこの大学で、玄

奘は5年間を過ごした。門弟となる学生は到着するとまず客人の待遇を受け、審査の後、僧院の日課の役割を割り振られる。卓越した資質を証明すれば、雑務を免除される。門弟は仏典の規則に厳格に従い、違反するなら厳罰に処された。文法、力学、医学、論理学、形而上学が通例の履修課程だった。大乘仏教徒と上座部仏教徒の間でしのぎが削られた。

ブッダガヤが初等教育なら、ナーランダは高等教育を提供する仏教の知的中枢部だった。かつては、1万人の僧侶と学生が広大で複合化した僧院で生活し、教師数名は東方世界にその名が知れ渡っていた。中国と韓国から訪れ、ここで暮らした教師と学生は数多い。ナーランダの学僧の鳩摩羅什は仏典の漢訳に生涯を費やした。ナーランダを始めとする学習の拠点では、宗教だけでなく非宗教分野の研究が隆盛し、医学は広範に研究された。サンスクリット語の医学論文は、後に勃興し、中世のヨーロッパへと伝えられたアラビア学問の大半が築かれる礎石となった。

P137

解剖が実践され、学生は「ランセット(外科手術で用いる両刀のメス)を手にして切開し、印をつけ、貫通させ、刺さった吹き矢を摘出し、創傷部を清め、乾かし、膏薬を塗布し、吐剤、下剤、油質の浣腸剤を投与」する訓練を受けた。ヒンズーの天文学識者は天体は球形であり、光を反射して輝くことを発見していた。また、地球はその軸を中心に転回していることに気づいており、直径を計算していた。ブラフマグプタは、「万物は自然の法則によって大地に落ちる。大地はその性質として、物を引き寄せて保持することができるからである」と西暦628年に宣言し、ニュートンが後世に万有引力の法則を導き出す基礎をもたらした。物理学のヴァイシェーシカ学派は原子理論を提唱した。数学では、ピタゴラスの定理が理解され、円周率「 $\pi$ 」の値が正確に見出された。

当時の世界最高学府が、おそらくナーランダ大学だった。ダルマの影響を受けて創られたもう一つの輝かしき宝石だった。しかし数十年後、北方から襲来した軍勢により砦と勘違いされて攻撃され、貴重な文献もろとも大学は焼け落ちた。インドの天才的芸術も、大学が隆盛を誇っていた時期に高い水準に達した。

当時のインドの女性の立場については興味深い事実がある。寡婦になって宮廷に戻って来たハルシャ王の妹ラジャシュリーが、玉座に座る兄王の横に座り、議論を主導したという。玄奘によるダルマの解説の聴講のためにハルシャ王が招集した大規模集会の一つでは、1万の僧侶各人が金貨百枚、真珠1粒、綿の法衣1枚、飲食物、香料を受け取った。ある月末に、それまでの5年間の蓄えがなくなったことがあった。王室の宝庫は空となり、「国内の秩序を維持し、王室領を守るために必要な馬、象、軍装備を除き、何一つ残らなかった」。王は『ジャータカ物語』の布施王子の逸話に刺激され、所有していた宝石、装飾品はおろか衣服までも喜捨し、妹のラジャシュリーに着古しの服を請わねばならなかった。そしてお下がりの服を身につけると、十界の仏に礼拝をした。玄奘がついに中国への帰国を決めると、玄奘に贈り物を与えようとしたが、経典657部と多くの仏舎利を携えていた玄奘は断った。ハルシャ王はまことに、仏教徒が開眼させた真の宝石であった。

事実上、千年以上前に誕生の地で、仏教は大宗教としての存在を停止したが、ヒンズー哲学の思想と活動に及ぼしたその影響は計り知れない。ヒンズー教が釈尊の簡素な法によって铸造し直された事実は覆せない。

---

1. 本生譚の一つ。釈尊がヴィシュヴァンタラ王子であった時の物語。

P138

釈尊の福音に夕闇が忍び寄っていた頃、偉大な改革者たちが瞬く星のごとくヒンズー教<sup>1</sup>に登場した。彼らの卓越さは、本人たちが認めようと認めまいが、仏教という沈みゆく太陽の賜物であった。彼らが改革したヒンズーの教えは、当時すでに内部分裂<sup>2</sup>をしても、いかに不十分で制限されていても、キリストとムハンマドという他の霊的太陽の福音<sup>3</sup>を甘受できなかった圧倒的多数のヒンズー教徒に救済への願いと導きをもたらす運命にあった。国民はその一方で、もう一人の化身（カルキ）、もう一人の仏陀——弥勒如来——の出現を待ち望んでいた。

しかしながら、ある地で沈んでも別の地で現れる太陽のように、ダルマ(仏法)の輝かしい光明もまた、国境を超えた別の土地、別の民族にすでに届き、その優れた効果を釈尊の福音を受け取った人々すべてに広げ及ぼしていた。前記したとおり、伝道団を釈尊の生誕地周辺国に派遣した最初の王がアショカ王であった。彼は、我が子のマヒンダ王子とサンガミッター王女をセイロンに送った。二人は聖なる菩提樹から切り取った枝を持参し、島の中心地のアヌラーダプラの地に植えた。枝は根付いて樹となり、22世紀以上経った現在でも、成長し続けている。マヒンダと共にインドからセイロンに渡った多くの職人は、石彫りと灌漑の技術を紹介する責任を託されていた。シンハラ王ティッサは、宮廷にいた者もともに改宗し、仏教はセイロンの国教になった。パーリ仏典がようやく記されたのは、このセイロンのシンハラ王ヴァッタガミニ・アバヤが統治していた西暦29年、釈尊の入滅後ほぼ450年後のことだった<sup>4</sup>。伝えられて早々に仏法を受け入れた国という意味で、セイロンは例外だった。それから7世紀後、インドからセイロンに渡った偉大な学識者ブッダゴーサは、パーリ仏典のパーリ語による注釈を書いたり、シンハラ語で解説したことで、釈尊の福音がビルマにも広まる素地を整えた。

---

1. シャンカラチャーリヤ、ラーマーヌジャ、グル・ナーナク他。

2. 釈尊はキリストやムハンマドの到来については述べなかった。二人が開いた偉大な宗教に仏教徒がふれる時代が来る以前に内部分裂を起こし、提供すべきものはないことを完全に認知していたからである。それゆえ仏教徒のように、開祖が約束していた人物の到来をそれぞれの信者は必要とした。

3. イスラム教とキリスト教。

4. 『マハーヴァムサ』XXXIII.パーリ仏典を含む仏典は、様々な時代に多くの人々により編纂された資料。

その後、3世紀をさらに経てから、仏法は国境を超えてタイとカンボジアに伝えられ、現地の国民の霊的覚醒に影響を及ぼした。この国々より北方に位置する中国への伝播にふれると、伝道団が5世紀前後にすでに到着していた。カシミールの王子だったという出色の存在だったグナヴァルマン（求那跋摩）は、セイロンから中国に渡り、尼僧の初めての僧団を西暦424年に現地で設立した。中国に向かって旅立つ前には、インドネシアで説法し、王を筆頭とするジャワ宮廷の人々すべてを仏教に改宗したと伝えられている。

ジャワ王の一人は、世界最大級の仏教遺跡となったボロブドゥール寺院を建造した。緑の稲田、竹林、椰子の木が繁り、かなたに控える火山に囲まれた壮大なケドゥ盆地を見渡す牧歌的な情景の中に、寺院は佇んでいる。丘に盛り土をして四方の底辺から段々式に建造された頂点には大ストゥーパ（仏塔）が置かれ、その周りを小型で多数の仏塔が取り囲んでいる。丘の側面は複数層の石造段台で覆われ、頂上に至るまで階段が続いている。段台の壁面は『ジャータカ』に記されている釈尊の生涯にまつわるさまざまな逸話や、『ラリタヴィスタラ』を含む経典で語られる伝承を図解する精巧なレリーフで装飾され、静謐ながら威厳ある風貌でレリーフを見つめる仏像がその上の仏龕の中に鎮座している。

仏教は中国<sup>1</sup>から朝鮮、そして日本へと伝わった。達磨(西暦520年)が修行の末に会得した禅を携えて中国に渡り、禅を広めた。意識集中を意味するサンスクリット語のDhyanに由来する禅は、日本にも伝来した。

すでに古代文明を築いていた中国は別として、アジアの他国で正史として編纂される歴史が現れたのは、国民がダルマ(仏法)を受け入れ、その暮らしに文明化が影響を及ぼすようになってからだった。国土は、その指導者や統治者が民の福利のために適切に管理する新しい国土になった。かつては野蛮でも、連なった真珠を貫く糸のように、人道意識を育む公正で共通の価値体系であるダルマが指導者と民の心を駆け抜けることで、国々は開発され、交易と学問の大きな拠点となった。

---

1.中国では祖霊祭祀(詳細はJamshed Fozdar, *The Fallacy of Ancestor Worship*を参照。(Bombay, 1965, Lib. of U.S.Congress, Cat. Card No. SA [66-7067]))に何千頭もの動物が生贄として捧げられていたが、殺生を禁じる仏教の教えが大きな変革をもたらした。国民の只中に仏教徒の数が大きく増えることで、生贄は差し控えられ、真言を記した紙片を燃やす護摩焚きと、爆竹を爆ぜる慣習に変化した。

この偉大な文化すべてが千年以上前に開花した。今日、軍事征服、自然災害、イデオロギーの影響により、これらの地域は途方もない変化に見舞われていても、生粋のダルマの力によって到達した文明化の高みと、果たされた人間性の進歩は、民衆の間で体系化されている素晴らしい社会構造に

よって今もって歴然と示されている。だが、そのすべてをかつては動機づけていた精神は逃げ去った。純然たるダルマはすでにない。クリシュナ、モーゼ、ゾロアスター、キリスト、ムハンマドのダルマも然りであり、どの教えの信徒も、仏教徒が熱望しているように、それぞれの宗教で約束された者の再来を待ち望んでいる。

けれども、永遠の法たるダルマがどうした経緯で失われたのだろうか。真理が周期的に開示される必要があるのはなぜなのか。この厄介で恐ろしい時代に宗教はどこに存在するのか。古の時代に発揮されたその効力はどうなったのか。化身たちも釈尊も告げるとおり、「長い時間を経ると有名無実化する」。これが答えだ。生命力を失った言語で説法し、過去の知見では対処できないほどにどこまでも複雑化した問題と状況への対処を主張しようと、とうに形骸化している以上、古代の教説が現代人からの帰依を得ることはもはや難しい。ダルマは現代の世界で求められていることに対応可能なものにならない。人類全体を配慮するものに、そのメッセージが更新される必要があることは明白である。

---

1. インドのヒンズー教徒と仏教徒だけでなく、同じアーリヤ人のゾロアスター教徒は、神々の時間(宇宙サイクル)を想定し、周期的に巡り来る出来事を予測することで、未来の救世主の到来を主張できるようになった。ヒンズー教では「ラージャ・スーリヤヴァンシー・マル」(カルキ・アヴァターラ)と「チャンドラヴァンシー・デーヴァピ」, 仏教では弥勒と観自在菩薩, ゾロアスター教ではシャー・バラム・ヴァルジャヴァンドとホシダー・ブーミットがそれぞれ相当する。ユダヤ教, キリスト教, イスラム教の教義にも、単一の世界プロセスを前提とする同様の信条が存在し、アーリヤ人の宗教と同様に、同時期に出現する二人の劫の終焉者(世界の救世主)の出現を予期している。その約束された者二人を、ユダヤ教はモーゼとアロンであると予想する一方、キリスト教はキリストとエリヤの再来を、イスラム教はイーサーとガエム(イマーム・マフディ)の再来を待ち望んでいる。それぞれの聖典の記述からすると、釈尊, クリシュナ, ラーマ, マヌ, ひいてはゾロアスター, モーゼ, イエス, ムハンマドは、時代から時代に永遠に誕生を繰り返す、同一の「降臨した者」(化身)の名であると言わざるをえない。従って、すべての大宗教で時を同じくして到来が予期されている双子の救済者のさまざまな名は、釈尊が預言した「奇跡の双子」(197頁)の多様な側面を示しているという結論に導かれる。

2. 『スッタニパータ』284. 『バガヴァッドギータ』IV.2も参照。「……しかしこのヨーガ(→ダルマ)は、久しい時を経て失われた」

P141

過去のどの時代よりも危険をはらんだ今日の社会では、蔓延する現実問題を克服する方向性と模範的取組みが求められている。その社会に生きる人類は、ダルマの高潔な原則を再び唱えるだけでなく、はるかに強い緊急性をもってその取組みに精力的に参加する必要がある。喜びに満ちた新たな時代の夜明けを迎えてもらうために、深い絶望と苦悩から人類を引き上げることだけが、ダルマによって気概喚起された仕事と呼ぶに値する。その気概でこの困難な課題に取り組み、冷笑的で自暴自棄になっている人類の胸で消えかけている残り火を燃え盛る炎へと煽ることに成功できるなら、冷淡な超然的態度と敵意を霧散させ、無敵の軍勢のごとき信念へと信仰心を鍛造し、この地上を天

界へと変えることができるだろう。

しかし、人類に生命力を与える効能を備えた以前の蓮華台にダルマを確立し直すには、釈尊を始めとする神の化身すべてが明言した救済プロセスへの人類の信頼をまず回復させなければならない。そのプロセスとは累進的啓示という必ず周期的に生じる法則である。

「過去に存在した仏たち、そしてこれから存在する仏たち、これらの仏たちの中に私はおり、彼らが行ったことを私は行う<sup>1)</sup>」

「すべての仏陀は仏法に関し、全く同じことを教える<sup>2)</sup>」

宗教が継続することは上の釈尊の言葉で明言されている。周期的に昇る靈的太陽が本質的には同一であることも釈尊は保証している。だが、ダルマは実在する領域では本質的に永遠でも、その出現と運用はこの現象界では無常という不変の法則に従っている——「造り出された現象が常住であることは有り得ない<sup>3)</sup>」。ダルマの栄光ですら、私たちが貪欲と悪行によって遠くさまよひ離れていくほどに、ぼんやりと霞んでいく。そして人類の目から最終的に見えなくなってしまったダルマは、もう一人の如来——弥勒如来——の出現を待っている。弥勒如来によって掘り起こされ、人間の空想と策謀を今一度一掃してから、古来の栄光に満ちた原初の純粋な状態に戻してもらうことで、嵐に翻弄されている人類の船が安全な避難場所をもう一度見出せる灯台として光を放つことを望んでいる——「これは安らかなよりどころである。これは最上のよりどころである。このよりどころにたよってあらゆる苦悩から免れる<sup>4)</sup>」。

---

1. 『ディーガ・ニカーヤ』 I.

2. 『マハーヴァツ』 I.160.

3. 『ダンマパダ』 v.255.

4. 『ダンマパダ』 v.192.

宗教は衰微していく。それゆえ、刷新されなければならない。別の新たな宗教が時代を追って順次出現し、累進的な一つの連綿とした流れをつくり、継承していくことが、不変の靈的法則である。真摯で偏見がない釈尊の信徒であれば、壮大な寺院も土や貴石で造られた仏像も、仏陀という真の教師の代用にはならないことをもはや否定することはできない。また様々な時代遅れの儀式や内実を失った言い回しを集め揃えていても、ダルマの古来の真髓を有効化し、末法の世の猛攻に勝

利することはできない。釈尊は、末法の世の時代が到来し、闇夜が人類を覆い尽くすことを舍利弗に明確に予言していたが、双子の靈的太陽が夜明けのように立ち上がり、夜闇を消散させることも予告した。「正法が忘れ去られようとしている時代に、あらゆる場所から集まった舍利は、……奇跡の双子<sup>1</sup>のような『奇跡』を起こして、法を教えるだろう<sup>2</sup>」

過去の人類の大部分を浄化した八正道は、残念なことに今、法たるダルマの真の目的を知らないがゆえに産出された荆棘のごとき形式的な儀式、偏狭な信仰に明らかに覆われている。永遠のダルマを刷新することで不純物を完全に一掃し、救済への確かな道として人類に今一度差し出すことができるのは、如来の他にいない。如来だけが、古来の効能を改めて吹き込むことで、肌の色、階級、信条に関係なく誰もが希望と意欲をもてる**安息の地となるよう**、その効能が及ぶ範囲を拡大させることができる。

「密教も顕教も区別することなく、私が法を教えてきた。如来は、教師のように拳を握り、精神状態に関する知識を出し惜しみしないからである<sup>3</sup>」

---

1. 観自在菩薩と弥勒。

2. *Anagatavamsa*, 『アングッタラ・ニカーヤ』 (*Manorathapurani*) の注釈書, I.90. ヒンズー教徒も、白馬に乗った「双子の聖なる医師(二人のアシュウィンズ)」として想像されることもある『双子の奇跡』を期待している。『バガヴァッドギータ』 XI.6 を参照。サンスクリットも古代イラン語も共通した一つのアーリヤの言語的文化的遺産を共有している。"ASHA"は真理、すなわち神の法(ダルマ)、もしくは公正さを意味する。Ashawan(古代イラン語), Ashwin(サンスクリット)は真理、またはダルマの信奉者を意味する(サンスクリットで馬は"asva", 古代イラン語では"aspa"と表記される)。

3. 『ディーガ・ニカーヤ』 11.100. 『バガヴァッドギータ』 VII.2 も参照。「私はあなたに、この理論知と実践知を残らず語るであろう。それを知れば、この世には、他に知るべきことは何も残っていない」。『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』 IV.4.9 も参照。「家系の証明はできないが、真実を語るがゆえにバラモンと呼ばれる男、サティヤカーマに語られたことは、何一つ省略されていない」。『シャタパタ・ブラーフmana』 XII.6.1.41 にはこう記されている。「これ以上、秘密にしておくことはない。さて、理解を得た者は誰でも、バラモンと正式に呼ばれることができる」。

P143

比類のないダルマは人類の生活にはもはや存在せず、形骸しか残されていない。だが「永遠への扉<sup>1</sup>」として、周期的に刷新され、如来によって再び強調され、再び適用されなければならない。そんなダルマとは、結局、何なのか。答えを提示する前に、そのような問いを受けた時に釈尊が対処したように、長い時間の経過によって、本来ならありえないのに、ダルマがなくなってしまったものが何であったかを調査しよう。

釈尊がほぼ 2,500 年前に入滅した時、北東インドには信者の共同体がすでに多数存在していたが、釈尊は後継者を指名しなかった。釈尊自身が、当時のヒンズー教とジャイナ教の指導者の在り

方に賛同していなかったことに起因する。法(ダルマ)だけが僧と在家信者双方の導きの手として定められたことが、仏典に記されている。だが、僧たちの記憶の中にしか存在していなかったため、いずれかの共同体が特定のある文章を必要とするなら、図書館から書籍を借りるように、暗記している学僧の記憶を拝借していたと伝えられている。バラモンのように仏僧たちも、經典にまとめる過程で俗的な要素によって汚染されることと、在家信者に及ぼす自分たちの影響力を失うことを恐れ、文字化に強く反対していたことがその背景にある。それでも3世紀が経つ前に、反対はようやく和らいだ。アショカ王が仏教に改宗して後援し、帝国全土に布教を組織的に展開する必要が影響したためだった。そして経蔵を始めとする經典が最終的な校合を受けることになった。

釈尊の人生で実際に起きた出来事と彼の教えの詳細を知れないことは別にして、文字にして記録することが忌避されたことで、実に多様な伝説と伝承が釈尊の人生と活動に関連する史実の中に持ち込まれた。しかし、影響はそれだけにとどまらない。様々な言語や地域の価値観と様式の感化を受けて多様な解釈が生じ、特に、釈尊の教えが彼の生誕地のごく近隣を超えて周辺地域に届き始めた頃には、実に衝撃的なことに、法自体の基本概念を変えていた。文字にされなかったことで様々な解釈が法に侵入し、釈尊入滅後のわずか100日後に500人の阿羅漢<sup>2</sup>が集まって阿難が覚えている釈尊の言葉を皆で復唱した第一結集が開かれた時でさえ、討論にこそ発展しなかったが、

---

1. 『ヴィナヤ・ピタカ』 i.5.

2. Arahāt : 完璧な弟子. 迷いの人生の輪廻(hata)の輻(ara)を破壊した者.

P144

優波離<sup>1</sup>が、阿難の記憶は自分が覚えている釈尊の言葉とは全く違うと申し立てた。

經典編纂に対する阿難の正確な立ち位置は明白ではない。だが十大弟子の一人として、異論に耳を傾けて検討する重要な立場にいたはずだ。にもかかわらず、釈尊個人とは区別される仏陀の実体に関して他弟子が抱いていた概念に妥協することはできなかった。しかも既知の事実として、世尊を人間として敬愛していた<sup>2</sup>。釈尊は地上に降臨する前にいたブラフマンの天(兜率天)に昇っていたとするのが阿難の見解だった。釈尊自身が非顕現のブラフマンを知っていたと主張していた<sup>3</sup>ことを踏まえると、阿難のこの見解が異端で不正確であったとの立証はできない。しかも、釈尊は次のように弟子たちに命じていた。

「自らを自らの灯火とし、自らを唯一の拠り所とし、法を自らの灯火とし、唯一の拠り所とするような者であること<sup>4</sup>」

「自ら」が「真我」を意味することを考慮せずに読むと、釈尊の帰天を信じ、魂意識の存在を肯定していた阿難の立場とは相容れない印象を一見受けるかもしれない。しかし、肉体が滅んでも、不滅である釈尊の魂意識は消滅しない<sup>5</sup>という阿難の見解を破棄するよう、私たちに強

制する文言は、釈尊の教えの中には見出されない。魂意識の不滅性についての見解は、釈尊がたびたび明言した発言に由来する。

1. ウパーリ。スードラ階級の床屋。釈迦牟尼に弟子入りし、第一回結集ではヴィナーヤ編纂の中心人物の一人となった。戒律に最も精通していたことから持律第一と称された。
2. 『マッジマ・ニカーヤ』 I.22 などの經典の言葉のように、この道にまだ入っていない者たちでさえも「私を愛し、私への信仰を持つならば、極楽は間違いない」と釈迦牟尼が述べたことに気づいてもおかしくはない。クリシュナがアルジュナにかけた言葉もこれと同一である。「一切の義務(ダルマ)を放棄して、ただ私のみを庇護を求めよ。私はあなたを、全ての罪悪から解放するであろう。嘆くことはない」『バガヴァッドギータ』 XVIII.66.
3. 『ディーガ・ニカーヤ』 III.84.
4. Ibid., II.101. "atta-dipa viharatha atta-sarana……dhamma-dipa dhammasarana.". 『スッタニパータ』 501 も参照。"Ye atta-dipa vicaranti loke akimcana sabbadhi vippamutta". 『ダンマパダ』 vv.146,232 も参照。
5. 『アングッタラ・ニカーヤ』 IV.36 には「仏はいかなる束縛も受けない救済された魂」と記されている。

P145

「自らを光とする者のようになりなさい。自らを抛り所とする者のようになりなさい。

他を抛り所としてはならない。真理（法）を抛り所として堅持しなさい<sup>1)</sup>

上に引用した二つの句を比較照合すれば、真我、魂意識を、真理の同義語として釈尊が用いていたことが分かる。しかも、付着している積り重なった俗世の迷妄を断ち切った後に残るこの真我は永遠である。「自らを抛り所とするように<sup>2)</sup>」と釈尊が命じるのは、「自らを抛り所とすること<sup>3)</sup>」を自ら実践していたことに由来する。そして、「しかし、真理はすべての自己の憧れや願望を受け入れるだけの大きさがあり、自己が泡沫のように壊れても、その中身は保存され、真理において永遠の人生を送るようになる……<sup>4)</sup>」という言葉では、私たちの無明（無知）と渴望の泡沫が弾けると、真我は現実の視野へと浮上し、永遠の人生の分け前に預かるという趣旨がやはり述べられている。

この様々な命令が、私たちの真我が不滅であることを明言しながら、真我だけを抛り所にするよう諭していることは歴然としている。自己の浄化は、迷妄した当時の大衆が信仰を置いて救いを求めていた1万の神々や小鬼を抛り所にするのでなく、自己の中から果たすべきであることを、釈尊は私たちに告げている。『ラリタヴィスタラ』に記されているように、明白である。

「私はジャンブドヴィーパ（閻浮提）<sup>5)</sup>で知的な救済を得る見込みのない人々の中で生まれた。この地にひしめく外道も真理の啓示者も、諸々の能力をワニのごとき官能に捕食され、

もがいている時でさえ、様々な煩惱が脳裏に渦巻いている。

- 
1. 『マハーパリニッバーナ・スッタ』 vv.33,35. 『バガヴァッドギータ』 VI.5.6 も参照. 「自ら自己を高めるべきである。自己を沈めてはならぬ。実に自己こそ自己の友である。自己こそ自己の敵である。自ら自己を克服した人に、自己は自己の友である。しかし自己を制していない人に、自己はまさに敵のように敵対する」。
  2. 『サンユッタ・ニカーヤ』 III.143."Kareyya saranattano".
  3. 『ディーガ・ニカーヤ』 II.120.
  4. 『マハーヴァツガ』 (消滅に関するシーハの問い). 『ダンマパダ』 vv.160,161,379,380 も参照.
  5. 世界の中心に所在する三角形をした神話上の大陸(おそらくインド)の古来の名称『マハーバーラタ』(アシュヴァメーダ,III.24)を参照.「ジャンブドヴィーパの国々は、最大でも最小でもそれを共有している」. 『サンユッタ・ニカーヤ』 i.168 を参照.

P146

この愚かな者たちは、様々な禁欲<sup>1</sup>と懺悔によって自分を清めようとし、他の者たちにも同じことを説いている。ある者はマントラを正しく唱えることができず、ある者は手を舐めながら唱え、ある者はマントラを全く持たず、ある者は川や泉に向かってさまよい、ある者は牛、鹿、馬、豚、猿、象を崇拜している。ある者は、一か所に正座姿勢で座ると口を嚙み、偉大な存在になろうとする。煙や火を吸い込んだり、太陽を凝視し続けたり、片足だけで座り姿勢を維持したり、上げた片腕をいつまでも下ろさずにいたり、膝をついて動き回ることによって懺悔する者もいる。ブラフマン、インドラ、ルドラ、ヴィシュヌ、デヴィ、クマール他に敬礼することを誇りとする者もいる」

釈尊は、本質的に無益な形而上学的な議論や冗長で無意味な論議で、上記した「真理の啓示者」と関わることに関心がなかった。人々の心にダルマ(法)を浸透させることだけに関心を寄せていた。ダルマだけが、同胞への思いやりと一体感を人々の心に植え付けることができる。これは神の化身すべてが教えていたことであるため、すべての宗教の真髄でもある。

初期仏教徒は、時の経過で、釈尊の説法を聞いていた者たちがその内容を忘れたり、記憶が曖昧になる前に、忠実に保存する必要に迫られていることをいたく認識していた。だが、言うは易く行うは難し。結果的に、1世紀後の西暦376年に第二結集がバイシャリで開かれる事態となるだけでなく、さらに深刻な決裂が起きた。異端的な僧の団が、教団秩序を守るための規則の大幅な簡略化を求めて摩擦を起こし、一定の緩和と寛容を要求したのだ。「彼らは古い経典を壊して新しい校訂本を作り、あたかも仏が語ったかのように新しい言葉に新しい意味を付け、書体の陰影にこだわることで精神のほとんどを破壊した……」と当時の様相が物語られている。しかも、釈尊の十大弟子が存在し、その権威により、あらゆる深刻な不和や分裂に耐える結束がもたらされた第一結集とは違い、第二結集にはそのような保護機能はなかったため、決裂は修復されなかった。人間には記

憶の曖昧化という明らかな欠陥があり、弟子たちの学識と背景は一様ではない。こうした影響要因から教えを護るための文字化がなされていなければ、教師が伝えたかった元来の観念の正確な概念を消化吸収して説明するには不利となることは容易に理解できる。

---

1. 『ダンマパダ』 v.141.「裸の行も、髻に結うのも、身が泥にまみれるのも、断食も、露地に臥すのも、塵や泥を身に塗るのも、うずくまって動かないのも、疑いを離れていない人を浄めることはできない」

P147

だが、文字に記された言葉ですら、法の正しい解釈や概念的眞実を時の手による変化から護れる保証はない。保持できなかった事実がどれほど多く確認されることだろう。ましてや人間の単なる記憶など実に頼りない。時は人間の記憶をいとも簡単に消し去ってしまう。釈尊の法が意味するものは、彼の入滅後のしばらく後には、無意識のうちであろうと意図的であろうと、進化し続ける社会が突きつける難題への対処を試みるために変更された。

仏陀とも呼ばれる、化身、神から遣わされた聖なる教師全員の元来の教えは、彼ら自身によって記録が残された場合ですら、人間による解釈という破壊行為に屈してきた。元来の教えの解釈の無謬性に関し、創設者本人が設立し、信者が無謬であると受け入れた制度か仕組みが不在であれば、意見の分裂と相違は避けられない。これまでに見てきたとおり、釈尊の法もまた、そうした状況の中で長期間無傷のままではいられなかった。入滅後しばらくして教団が分裂し、最初の1世紀が幕を閉じるまでに、釈尊が教えた法の意味と目的について考えを相違する14の学派が生まれていた。

それゆえ、釈尊の教説が実際にどのようなものであったかを決定したいと欲する探求者は、釈尊の権威を主張し合い、どこまでも相反し合う多様な教えと概念を網羅した何百もの書籍にいつの間にかに目を通すようになる。既知の方法で、釈尊が実際に語ったことを確実に確認できるものはない。現存する経典の中で最古のものにも、不確定な推論と推測が及んでいる可能性は否定できない。釈尊の元来のメッセージを再築しようとする近年の様々な試みで唯一共通認識が得られたのは、釈尊の教説は、今日、考えられているものではないという認識だった。各学派が、釈尊の教え解釈に関して他とは違う視点を支持し、自派の視点だけが本物で完全無欠であると断言している。釈尊は個人としての自らを崇拝することが救済への道であると提唱したと主張する学派があれば、釈尊が教えた法は不可知論であるとし、超自然的な要素すべてをなくして合理的理論に単純化する学派もある。かと思えば、輪廻転生信仰とは完全に無縁だとする学派もある。釈尊が地上を歩いて教えていた当時からあまりに長い年月が経過した後には、釈尊の正確なメッセージと諸派の代表者によるその意味の解釈の眞正性を追い求め、検証しようとしても、何世紀もの間、僧(比丘)たちと托鉢僧たちによる口伝だけで伝えられてきた以上、探求は果たせずに終わるしかない。

多種の経典がいつ編纂されたかに関しても、釈尊の時代から遠くかけ離れているため、実におぼろげな推論しか引き出すことができない。しかも、そうした推測ですら、言語と地勢上の関係を理念的根拠として前提にしている。かくなる状況では、釈尊の教えの元来の意味を恣意的に解釈した概念が参考にされ、経典の編纂時期が誤算されることが少なくない。しかも、方法としても万全ではない。最も重要な経典の作成に、数世紀にも及ぶ長い年月が費やされたことが判明しているからである。『マハーヴァストゥ』『ラリタヴィスタラ』などの経典には、8世紀の間(紀元前200年から西暦600年)にわたって集められた説話が収録されている。同様に、“*Lotus of the Good Law*”こと、“*The Perfection of Wisdom in 8,000 Lines*”<sup>1</sup>における最後の数章は、第1章が記されてから5世紀後に作成された<sup>1</sup>。それゆえ、権威と真正性の度合いが様々な教典から、一次資料を引き出す際の主たる問題の一つとなっている。

では、シンハラ人の多くが信仰する上座部仏教のヴィナヤとスッタ・ピタカに収められているパーリ仏典や他の経典を代表的な最古の仏典として受け入れられるか否かについての粘り強く議論されている問いに取り組もう。これは、より正確でより幅広い釈尊像と彼のメッセージを、他のより古い学派だけでなく大乘仏教の教典からも集める必要があるか否かという問いでもある。仏典にすでに起きたことを踏まえると、この問いに客観的に答えることはもはや不可能としか言えない。パーリ仏典は上座部仏教という一つの宗派が編纂した教典であり、当時、これ以外にも多数の上座部仏教の部派が存在していた。それゆえ、伝える内容や思想の独自性の真正性ではなく、基礎的要素を通読できることにその価値があることに、公平な目を持った学識者は認めている。事実、上座部仏教の体系化された現存文献の中では唯一欠損がない。それゆえ、完全整備されていることだけを根拠に、パーリ仏典は多種多様な仏教宗派による教典の中で卓越していると認めることには慎重にならなければならない。

---

1. 経典の漢語訳は有用性が高い。いつ訳したかが細心の注意を払って記録され、その時期以前に原典がインドでいつ作成されたかの推察が可能になる。だが、パーリ語やサンスクリット語の原典はこのように完成までに何世紀もかかったものもあり、作成時の確定は難しい。この問題は漢語訳を参照しても緩和できない。

見事に体系化された外観の前では、真理はおぼろに霞んで歪められてしまう。だが探求のプロセスにおいては、細かく断片化し、一見したところ支離滅裂化した事実の間に、真理が姿を現す兆しがしばしば見出される。

人類の心の中で法たるダルマとのつながりが衰退し消失することは不可避でも、人間には果たしえないその功績から、私たちすべてにすでに明らかにされているべきことがある。すなわちダルマとは、どれほど洞察力が鋭く学識深い者であろうと、試行錯誤を通じた一連の努力により、その理

性で発掘した既存規則を単に法典化したものではない。永遠なる法である<sup>1</sup>。釈尊は、ダルマの起源は諸仏から独立<sup>2</sup>していることを明言している。諸仏はダルマを人類に啓示することを使命としているにすぎない。しかも、この普遍的な法が諸仏を介して人類に啓示される仕組みは、至高的存在から高められるという摂理によるものと、釈尊は断言している。

「如来が完全に知り、明示したこの法は、把握することも、口で説明することもできない。また『法』でもなく『法でないもの』でもない。なぜなら、絶対者が聖なる者たちを高めるからである<sup>3</sup>」

月が太陽光線で照らされ、闇夜の中でも地球の住民がものを見えるようにするように、ダルマが靈的な闇夜の中の見えない道を照らすのは、絶対者という条件付されていない存在の恩恵である。だが、絶対者が教えることを無謬で完全無欠な意思によるものと認められるかどうかは、最終的には、私たちにとって釈尊が何者であるかにかかっている。単なるもう一人の賢い凡夫か、それとも、如来という聖なる教師、仏陀なのだろうか。

それゆえ、仏教を創設した現実の釈尊の中に、俗世のもつれを後にし、無常のものへの執着に伴う苦しみから逃避する方法を開拓した単なるもう一人の賢者を見続けるなら、結局のところ、私たちが目にするのは仏陀であるどころか、無数の苦行者や沙門ということになる。釈尊は開拓者にすぎなかったと信じるなら、釈尊を彼らと区別する方法は絶対にはないからである。しかも、釈尊を人間と思ひ、教えを人間が作成したものだと考える者は靈性と知能がいかに高くても奈落に送られる、と釈尊が舍利弗<sup>4</sup>に注意を与えたことをどう説明したらよいのだろう。

---

1. 『サンユッタ・ニカーヤ』では、ダルマは因果(カルマ)の不変の法則であり、その認識は、知識という最も貴重な宝であると読める。

2. 『アングッタラ・ニカーヤ』 3.134.l.

3. 『ヴァジュラッチェーディカー』 176.11a.

4. 『マッジマ・ニカーヤ』 l.71-72.

P150

また、これまで見てきたとおり、自らの中で最高の涅槃を体現していたゆえ、釈尊が目指していたのは涅槃ではない。仏教のどの学派の経典がそれぞれの支持者からこれまでの捉え方で今もって解釈され続けていたとしても、不滅の安息地に導く古来の永遠なる街道を示す地図のごとき役割に変わりはない。だが地図は残念ながら、それが何を真に意味し目的としているかを分かっていない樹上と洞窟の中の住人の手中に落ちたことで、栄光に輝く道を示しているにもかかわらず、樹頂が洞窟の奥に最短距離で達するだけのための道が記されていると思われる。

一方、この道路地図を読み解き、それが実際に何であるかを理解し、ラーマ、クリシュナを含む化身たちと、如来たち（迦葉仏、釈尊、まだ到来せぬ弥勒如来）を、永遠なる法の道を周期的に照らす偉大で比類なき霊的な太陽とみなせる人々がいる。未来は彼らのものだ。いつの時代でも人類がその時点で必要とする救済に、彼らの関心の照準は合わされている。諸仏は、この救済こそを、自らが立ち上がる唯一の目標とする。仏が、釈尊、迦葉仏、弥勒如来、阿弥陀如来、観自在菩薩というように様々な名で呼ばれようと、仏法の真の意味と目的に関係するこの事実の重要性を損なうことはあり得ない。これからの数章においては、諸仏の様々な名を明確にすることで、文字通りでも、寓話化されたものでも、称号の意味を完全に説明しなければならない。頂を目指して登るのは辛く、陽光に照らされた空に向かうほどに空気は薄くなるというそれだけの理由で登頂を止め、代わりにもう一度、洞窟や樹上にある安全地帯に降りていくことを選ばないよう、筆者は読者に望んでいる。釈尊が警告していたとおり、そのような場合は「安らかな拠り所<sup>1)</sup>」ではないからである。

これまでに、真摯な探求者が仏教の様々な思想学派の教典だけでなく概念についても、有効性と有用性を正確に計ることができる基準についてを記してきたが、どの派の経典が最古であるかを今日も果てしなく討議し続けている古来の学派間論争に分け入り、詳細に記すことは、本書の目的ではない。

「頭髪が白くなったから長老なのではない。ただ年をとっただけならば「空しく老いぼれた人」と言われる。誠あり、徳あり、慈しみがあって、傷わず、つつしみあり、みずからととのえ、汚れを除き、気をつけている人こそ、長老と呼ばれる<sup>2)</sup>」

---

1. 『ダンマパダ』 v.188.

2. 『ダンマパダ』 w.260, 261.

P151

それどころか、道案内をする者をもう一度見出すことが本書の目的である。かつては、力強く脈動して救済へと導いた、純粋で安全な街道だったものの残骸を一掃し、その真髄を回復できるのはこの道案内者より他にいない。

前記したことを踏まえると、上座部仏教、大乘仏教、大衆部を始めとするどの学派も、仏陀、そして法たるダルマという現象の解釈に関し、真正な概念も権能も独占していると主張できないことが分かる。それゆえに、パーリ仏典も、サンスクリット語と漢語で一部が保存されているその他の上座部仏教系の経典も、さらには他のサンスクリット語経典、年代記、大乘仏教系の経典もすべてが、釈迦如来という仏陀の言葉から逸脱していない程度には、概念の純粋さを維持していることは認められなければならない。仏教の思想学派すべてが、釈尊は霊性でも倫理性でも無上に完全無欠な存在であることに同意している。それゆえ短絡思考をする人々により、釈尊がその実体に神性<sup>1)</sup>

を宿している真実が尋常でない出生譚を含む数々の不可思議な寓話と一緒にたにされてきたにかかわらず、仏陀と呼ばれる階級にいる仏の中でも、釈尊が比類なき<sup>2</sup>存在であることに疑いの余地は残らない。

パーリ仏典の唱導者の一部が、経典から推定される釈尊像はジャイナ教の祖師であり救済者を意味するティールタンカラ像と概ね一致していると提議している。だがこのような提議は両刃の剣になりかねない。仏教開祖のメッセージの特定の基本的側面をジャイナ教教義により近似するよう変更することでジャイナ教の教えと信者を取り込もうとする、かつての仏教僧団の残党による試みと解釈される恐れがある。釈尊とティールタンカラを同列視する提議の妥当性を大まかにでも調べるなら、両者の根本的な違いを踏まえると、擁護できないものになるだろう。すなわち、ジャイナ教徒は自分たちをヒンズー教の改革派とみなしているが、釈尊自らが明言した仏教の法は誰にでも門戸が開かれた普遍的な教え、顕教である。それゆえ、哲学的見地での近似性は低い。また、ジャイナ教の信者はインド国内にのみ存在し、その数はインドの現人口(訳者注：本書の初版発行1975年当時)の0.5パーセント前後の330万人(1951年度の国勢調査からの外挿)にとどまる一方、仏教はインドの総人口にほぼ匹敵する数億人の信徒が世界中に広がる。アジアが大きく占めるユーラシア大陸の人種すべてだけでなく、それ以外の四大陸に住む複数の人種がその中に含まれている。

---

1. 『マハーパダーナ・スッタ』においては、釈尊に神性が宿されていることが断言されている。『ミリンダ王の問い』には、「仏の徳は非常に大きい。世界はそのような存在を複数支え、生み出すことは一度にできない。……二人の仏が同時に現れるなら、混乱を招くだろう」。

2. 『アビダルマ・コーシャ』、『ミリンダ王の問い』、『ブラフマジャーラ・スッタ』、馬鳴の『ブッダチャリタ』、*Sutta of 42 Sections*。

P152

それでも唱導者たちは、自分たちが描く釈尊像は、ティールタンカラと概ね一致していると主張する。では、どんな像なのか。物質的なものでないことは間違いない。「私を見る者は法を見る<sup>1</sup>」と釈尊が述べていたとおり、釈尊は仏法そのものであり、それ以外の見方で理解することはできなかつた。しかも次のようにも述べている。

「色や形によって私を見る者、あるいは、諸世界の中に私がいると考えている者たちがいる。そうした考え方は間違っており、彼らは私を全く見ていない。慈悲深い者たちは、法(ダルマ)の中にその姿が見えるはずであり、彼らの体は法身である。仏とは法の一つの本質であるとして正しく理解しなければならない。それ以外の方法で仏を理解することはできない<sup>2</sup>」

釈尊自身がティールタンカラ(真理の啓示者——外道)を受け入れていなかったこと(146頁)は

明らかであった。また、カルマの法則についてはどちらの教義においても最も根本的な原則であったが、ニガンタ・ナータプッタ（当時のジャイナ教のティールタンカラ）が概念として教えた法則は、釈尊自らが概念を教示した同法則とは完全に相容れなかった(89頁)ことも歴然としている。この両方の点に、仏教とジャイナ教の類似性を主張する説の擁護者たちはどう応えるかを教えていただきたい。しかもニガンタは、自分の主たる弟子たちの一人であったシーハ<sup>3</sup>将軍が仏法を聴講するために釈尊の元に赴くにあたり、反感から思いとどまらせようとした。

その時、多くの名士が町内の集会所に集まって座り、仏法僧を讃えて様々な話をしていたが、その中にニガンタ派の弟子であるシーハ将軍が座っていた。「まことに、この祝福された方は聖なる仏に違いない。彼を訪ねに行こう」。シーハはそう考えると、ニガンタ派の長であるナタプッタのいる場所に行き、「主よ、沙門のゴータマ殿をお訪ねしたいのですが」と願い出た。ナタプッタが返答した。「シーハよ、行為の結果はその道徳的な功德によると信じているあなたが、行為の結果を否定する沙門のゴータマ殿を、なぜ訪ねなければならないのだろう。おおシーハよ、沙門のゴータマは行為の結果を否定し、非行為を教義として教えている。そしてこの教義の中で、弟子を鍛錬している」。すると、シーハの中に生じていた、祝福された方を訪ねたいという願いは弱まった。しかし、仏法僧を賛美する声を再び聞くことができなくなり、ニガンタ派の長、ナタプッタに再度願い出たが、行かないよう説得された。

---

1. 『マッジマ・ニカーヤ』・『イティヴッタカ』も参照。

2. 『ヴァジュラッチェーディカー・ストトラ』

3. 『マハーヴァッガ』VI.3.

P153

そして三度目に、何人かの名士が仏法僧の功德を讃える声を聞いて考えた。「まことに、この祝福された方は聖なる仏に違いない。承諾されようとされまいと、私にとってニガンタ派が何だというのだ。訪問許可を願い出ずとも、聖なる仏である祝福された方のもとに行かなければならない」。

年代記に記されているとおり、シーハは仏教に改宗した。それゆえ、仏教とジャイナ教はそれぞれの創設者から互いに相違しているとみなされていたことが分かる。ジャイナ教が明らかに無神論であることは判明しているが、仏教が無神論であると示唆する言葉は釈尊の発言から見出すことはできない。それどころか、逆のことが証明されている。それゆえ、仏教に不可知論というラベルを貼り付けようとする人々は、絶対者に関する神の顕示者全員の発言を知らないでいるか、絶対者を

擬人化していることを晒しているかのどちらかに当てはまる。釈尊の発言は他顕示者の発言といささかも変わらないからである。

一方、釈尊は、カピラ聖仙を開祖とするサーンキヤ学派が優勢を誇り、その名にちなむ地、カピラ城<sup>1</sup>で幼少期から青年期を過ごしたため、この思想学派の学徒であったと主張する人々もいる。サーンキヤ学派は厳密な二元論を前提とする。すなわち、精神(プルシャ)と物質原理(プラクリティ)という永遠なる実体を想定し、精神の多元性についてを語る。物質原理(プラクリティ)は本性、根本原質ともみなされ、純質(サツバ)、激質(ラジャス)、翳質(タマス)という三つの構成要素から成る。さて、人間がこしらえ、仏陀が立ち上がる時代に存在する様々な哲学や教義には、すべて間違っているものも、すべて正しいものもない。しかし、釈尊自ら舍利弗に忠告したとおり(61-62頁)、釈尊が啓示した完全無欠のダルマ(法)を「推論で打ち出し、調査に基づいて、自ら考案した」何らかの体系であるゆえ、当時という時代と周囲環境の産物と思いつくのは、無論、間違っている。

---

1. 以下の A. Fuhrer による *Antiquities of the Buddha's Birth Place in the Nepalese Tarai*, Vol.VI, 1896 の引用からもわかるように、考古学でも権威筋の見解が異なる。「『赤い川』と呼ばれる Rohani (現代の Jamna) に位置するカピラ城の名称が『褐色の町』を意味することは明らかである。現在は廃墟に化しているこの古代都市を取り囲む土壌の表面全体が赤みがかったあざやかな黄色をしているのは、上層土に炭酸鉄が分厚く積層していることに起因する。それゆえ、カピラ城の語源は、サーンキヤ学派の名高い開祖、聖仙カピラの街であることを由来にすることはできない。ガンジズ川沿いの現代のハリドワール、古代には Kapilasthana と呼ばれた街の名にも由来する可能性がある」。付け加えると、釈尊の正確な生誕地は、カピラ城からいくらか遠く離れたルンビニーである。

P154

また、釈尊の法を、当時、まだ存在していたヴェーダーンタ学派、ウパニシャッド哲学、サーンキヤ学派、ヨーガ哲学という教義と全く無縁な哲学と考えるべきではない。すでに示したとおり、こうした教義もまた、真理を前提にしている。今でこそ、区別が曖昧となり混同されていても、かつては満ち溢れる栄光の中で輝き、釈尊に遜色ない、昔日に沈んだ偉大な靈的太陽たちが啓示した完全無欠の教えであった。古代の聖仙カピラが教えた教義が正確にはどんなものであったかを、今では知る由もないが、釈尊が人格形成期を過ごした揺り籠とされているカピラ城は、聖仙カピラにその名が由来する。だが、サーンキヤ学派の教義をカピラが著したことを証明する術はない。同学派は、カピラの時代から遠く下った後世に編まれた哲学であるだけでなく、その推進者たちがカピラの威光を借りて自分たちの哲学を権威づけるために、教義を彼に帰属させた可能性が強いからである。『マハーバーラタ<sup>1</sup>』の著者たちが、当時を遡る千年前に存在していたクリシュナの伝説を導入することで、この大叙事詩を当時のインドの様々な種族の伝承を寄せ集めた結集点にしようとしたことは立証されているが、これに近似する。

だが、クリシュナ自身が語った言葉の中の一節が、時の容赦ない行進で織り成された過去千年の

闇を閃光のように切り裂き、クリシュナ以前に神の顕示者が出現していたことを示している。「私はシッダにおける、聖者カピラである<sup>2)</sup>」。この一節は、カピラは、釈尊の時代を悠に2,300年以上を遡る、途方もない古の時代の聖仙であった手掛かりを与え、釈尊の時代のサーンキヤ学派が提唱した際立った二元論は、カピラの哲学であったものを後世の主唱者が誤解釈しただけでなく、意図的に権威を借りたことから生じて出現した可能性が濃厚であることを示唆している。はるかな古代に生きたカピラもまた、クリシュナによれば、神の閃光を宿す正しき者たち(シッダ：成し遂げた者)の一人であった。それゆえ、カピラの教義に、クリシュナ自身による以下の発言に相容れない要素が含まれようはない。

- 
1. 叙事詩『マハーバーラタ』では、応報原則に主に導かれる社会が描かれ、暴力の無益さが唱えられている。マハーバーラタの戦いでヒンズー社会は統制を失い、人心は乱れた。しかしその結果、人生の不変の価値への探求に人々は導かれた。その不変の価値は『ウパニシャッド』で探索され、釈尊が簡明にした。
  2. 『バガヴァッドギータ』X.26を参照(71頁脚注2も参照)。「正しき者」を意味する釈尊自身の名"Siddharta"も"Siddha"「シッダ」に由来する。

P155

「地、水、火、風、虚空、意(思考器官)、思惟機能、自我意識。以上、私の本性(プラクリティ：物質的原理)は八種に分かれている。これは低次のものである。だが私にはそれとは別の、生命(霊我)である高次の本性(プラクリティ：精神的原理)があることを知れ。それにより世界は維持されている。万物はこの二つのプラクリティに由来すると理解せよ。私は全世界の本源であり終末である<sup>1)</sup>」

「私よりも高いものは他に何も無い。アルジュナよ<sup>2)</sup>」と明言するクリシュナの言葉を根本的に否定する要素はここにはない。しかもこの発言は、「比丘たちよ、『生じたもの』でなく『成ったもの』でなく『作り為されたもの』でなく『形成されたもの』でないものは存在する(33頁)」「万物が一つの真髄から生じるように、それらは一つの法則に従って発展する(41頁)」と引用したように、釈尊自身に原因なき原因である絶対者をはっきりと認識させた源とみなすことができる。透視と一切智の力を用いて時を遡り、自らが、さらに遠く離れた古の時代のオッカーカ王(イクシュヴァーク。132頁)の末裔であることを突き止めた釈尊が、クリシュナと、自らの生誕地の名が由来するカピラと、霊的ルーツの源を同じくすることに気づかなかつたなどあり得ない。新しい知識を探し、人間がこしらえた教義の母体に仏陀をはめ込もうとする学識者の試みは、大宗教すべてとそれぞれの創設者に対して一般的に及ぼされる定めだが、仏教と釈尊に対して最も頻発している。だがそうした方向性で、これまでだけでなくこれからも試みようとしても、自らに神意が降り、無比の法が神により啓示されたことを明言した釈尊自らの言葉に直面すれば、打ち碎かれる運命にあ

る。

だが残念なことに、仏法の実体は私たちの暮らしに関わることをとうに止め、泥土、石、金銀で人間がこしらえた仏像を前にした無意味な慣行が代わりに実践されている。ほとんどが、釈尊が強い語調で禁じた商いを目的にしている。

「儀式には何の効力もなく、祈りは無駄に繰り返され、呪文は何の救いの力もない。しかし、貪欲を捨て、邪な情熱から解放され、すべての憎しみと悪意を放棄すること、それこそが正しい犠牲であり、真の礼拝である<sup>3)</sup>」

---

1. 『バガヴァッドギータ』 VII,4,5,6.

2. Ibid.,VII.2.

3. 『ミリンダ王の問い』・『ダンマパダ』 w.19,20.

P156

釈尊が示した道は生きるための道であり、外見を整えて内実がない話をするための道ではなかった。俗世の影響に侵食され、知らぬ間に道徳的に頹廃していたことがないよう、私たちの精神を強化することが視野に入れられている。

釈尊の教えについて様々な学派が支持する概念は多様だが、仏教徒すべてが名目上賛同する点がある。まず、清浄な生活の基本は、四諦<sup>1)</sup>を理解し、八正道<sup>2)</sup>を実践することにあるというのが最初の点である。「四諦」とは、四つの真理である「苦諦（現実が苦しみであること）」「集諦（それには原因があること）」「滅諦（苦しみの止滅）」「道諦（その止滅へいたる道）」のことをいう。八正道は、苦しみを止滅させ、涅槃の境地に達する方法についての釈尊の教説の要約である。最初の二つの段階では、正しい見解(正見)・正しい意志(正思)を、次の三つの境地では、正しいことば(正語)・正しい行い(正業)・正しい生活(正命)を、最後の三つでは、正しい努力(正精進)・正しい意識(正念)・正しい精神統一(正定)を実践する。

釈尊の法の基礎的な訓戒はこのように実に簡素であるにかかわらず、毎日実践するよりも、神々を崇拜する方が概してやさしいと思っている人が多い。釈尊は、ダルマ(法)の遵守は人生を生きる行為であり、同胞に対する義務の実践であり、祈祷の言葉を単に唱えることではないことを、絶えず信者に思い起こさせていた。そして、信者たちが信仰と義務事項という、釈尊が体系化した保護の手からさまよひ離れないようにするための方策として、気を引き締めて仏法僧の三宝を常忘れずに意識するよう、釈尊は信者に依頼したと伝えられている。

抛り所を求め、自ら仏に帰依したてまつる。

抛り所を求め、自ら法に帰依したてまつる。

抛り所を求め、自ら僧に帰依したてまつる<sup>3</sup>。

- 
1. ヒンズーの『マハーバーラタ』によれば、聖なる真理は四つあると想定され、次のように定義されている。「真理を母とし、知識を父とし、優しさを妻とし、慈悲を子孫とする」。
  2. ヒンズー教徒はこれらの真理を神々しい八つの特徴で現されるとし、「八つのヴァス神群」として『バガヴァッドギータ』XI.6の中で象徴化している。
  3. Buddham saranam gachami!, Dharman saranam gachami!, Samgham saranam gachami!.

P157

形式を若干変更させながら、すべての大宗教がこの三宝を信条にしている。ここに紹介した三帰依文には、宗教で普遍的に受け入れられている一つの現象が描写されている。神の顕示者である仏陀がダルマを今一度見出して永遠なる法であると宣言し、自らが出現した時代の人類の安全な抛り所にするために、その養育と世話を僧伽に託す。

しかしながら、黄色い法衣を纏っての経文詠唱が名残惜しげにいつまでも続いていても、ダルマに喚起されて、私たちの心が律動し、意識が振動することはもはやない。私たちの大半が仏の教えに全く従わなくなってしまった。この目に余る不従順さを棚に上げ、悟りを得るなど、どうして期待できるのだろうか。純粹で比類のないダルマ(法)は同胞に対する私たちの行為の中にはもはや生きておらず、生命がない本の中に記されたなんらかの公式としてか、冷厳な石造りの寺院の中に經典としてしか存在していない。釈尊の訓戒に意識を向け、私たちのために目的としていたことを知ろうと注意を払う者は数少ない。

大宗教という名に値する宗教すべてが、夜空を明るく染め上げていく曙光のような啓示の炸裂で開始する。輝かしき功績を日中に挙げた後、黄昏を、そして夜を迎え、新たな目覚めと新たな希望をもたらすために立ち上がる別の化身、新たな仏陀の出現を待つ。元来の直のふれあいと生きた信仰は、大いなる源から遠くかけ離れた仲介者を通じた間接的な接触にやがて取って代われ、失われていく。この現象はどの宗教においても例外はない。躍動感溢れる探究から発する生きた信仰の生命力は衰え、自己満足と制度化された既得権益が代わりに勢いを得る。信者は聖なる川での沐浴や、名ある寺院への布施、齒や樹への礼拝という儀礼的慣行の実践で自己満足し、救済を保証してもらう。旅行者は敬虔な巡礼者がかつてたどった道を旅し、聖地は迷信深い隙ある者たちを餌食にするいかさま師たちの市場になる。安楽な人生を諦めきれない大衆は、呪文や祈祷を看板にする、自称、人間の魂の庇護者の術中にはまる。権力と金への野心を募らす彼ら庇護者たちは、人間心理を囚え、その中に内在する靈性を窒息させては、不運な犠牲者たちを餌にして肥え太っていく。だが、いつまでもというわけではない。神意を受けた太陽が改めて出現することで、靈的な闇夜とその中に生息する生き物たちは消し散らされ、人間の魂が再び心おきなく呼吸できるようになる。

P158

ここに記したのは、人間と顕示者で織りなす宗教の物語である。一方が欠けていれば、もう片方も存在しない。そしてこの物語は、いずれの宗教を信仰しようとして、その中で私たち自身の状況を見渡す際には、なおさらに今、私たちすべてに当てはまる。

同胞に対する行いを通し、考えつく限りのやり方でダルマ(法)の訓戒を冒瀆し切ってきた私たちは、安物の宝石を定期的に捧げることで、如来とマーラ<sup>1</sup>の機嫌を取ろうとしている。だが、涅槃に達するための真の犠牲は、つまらぬ物の奉納でも、決められた季節にだけ何らかの儀式を執り行うことでもないことを、私たちは片時も忘れてはいない。呼吸器官を使って息をする一つ一つの瞬間が浄らかな祭壇となるような人生を絶えず営むことに、真の犠牲があることを分かっている。脱出困難な現在の状況がどれほど規模大きなものかを認識するには、自分自身にこう質問するだけでいい。三つの拠り所(三宝)で、今も残っているものがあるならそれは何だろう。仏か、法か、僧(僧伽、サンガ)だろうか。サンガ？

---

1. 私たちが無知であることと、その結果を擬人化したもの。

P159

## 7

### 僧伽 (サンガ)

「修行僧よ。瞑想せよ。なおざりになるな。汝の心を欲情の対象に向けるな。なおざりのゆえに鉄丸を呑むな。灼熱した鉄丸で焼かれるときに、これは苦しいと泣き叫ぶな<sup>1</sup>」

サンガについてはどうだろう。サンガは今日、どうなったのか。仏教の歴史の開闢以来数世紀の間、出家者の共同体、サンガが、マガダ国の諸氏族の生活と実に緊密に交流していたことは確かに

驚きに値する。サンガは、その並外れた信心、犠牲、勤勉実直さによって、在家信者でつくる共同体から兄のように敬慕される素朴で自然な模範像として、釈尊が当時のインドに創り出したものであった。サンガの使命は、僧たちの霊性向上と、在家信者の福利のために、涅槃に達するためにダルマ(法)で規定されている集中力の向上と行為の清廉さを強く示すことにあった。

1. 不殺生戒（殺生をしない）
2. 偷盜戒（盗みをしない）
3. 邪淫戒（淫らな異性交遊をしない）
4. 妄語戒（嘘をつかない）
5. 不飲酒戒（酒を飲まない。ともすれば、意識を曇らすため）

上に示した五戒<sup>2</sup>は、その本質的意味が釈尊により一点の曇りもなく万人に明らかにされ、そのメッセージの原初の純粹さが最初の数世紀は護られ保たれていた。しかし、アショカ王の後援を受けるようになってからは、その純粹さが少しずつ薄れ続けていったのである。

---

1. 『ダンマパダ』 v.371.

2. *Sthananga-Sutra* (ジャイナ教典). 『バガヴァッドギータ』 XVII も参照.

P160

寺院を始めとする数々の礼拝の場の維持費と僧たちの扶養費用の負担を王家の宝庫が引き受けたことで、村々の在家信者たちがサンガと結んでいた親密なふれあいは、完全に断ち切られるとまではいなくても、痛ましいほどに希薄化した。王家の後援は、かつては、無上に勤勉で献身的であったサンガの性質と規模を永遠に変え、今では職を持たない何千人もの者たちが混在する場となっている。これは、王家が歳入を投じた施しがあるからに他ならない。贅沢とまではいなくてもかなり安楽な暮らしを、彼らは享受している。初期の修行僧の暮らしにあった原初の簡素さと浄らかさのほとんどが消え去った。僧たちは着古した法衣に満足することはもはやなく、王家の宝庫から贈り物として法衣が惜しみなく振る舞われることを権利として期待するようになった。アショカ王の時代からハルシャ王が統治した時代までのほぼ千年間、時々途切れながらも、王族による後援をサンガが同意して受け入れ、今日でも様々な仏教国で実践されている。王家に倣い、毎回の食事が僧院で用意されたため、日々家々を廻って食を乞う托鉢を止めた僧は数多い。外部からの支援に頼り、物質的傾向を強めた僧の数は短期間のうちに増大した。清浄さと超脱という大事な資質は関心から外され、世俗的要素が積み重ねられていく中で次第に封じ込められていった。サンガが内包していた求道へと駆り立てる真の精神はとうに逃げ去っている。それでも形式は残り、国家が後援している国々においてだけは、形ばかりの儀式や読経が今日も盛んに行われている。

当初の情熱も、在家信者からの親愛を込めた献身も、もはや引き出すことは叶わない。しかも、安楽を求める者たちが多勢を占める僧たちが重荷となっていることを痛感していた折に、王家の保護と後援が打ち切られ、ヒンズー教を奉じて仏法に反感を抱く王族たちが王位を継承していったことで、サンガは揺さぶられた。その結果、涅槃到達に向けた個人的努力の領域から、漠然としか理解されていないカルマの作用に前提を置き、外来の影響と僧侶による解釈を受けた生まれ変わり説と運命予定説という誤った教義へと、推力を移すことになった。その立ち位置からは、靈験や奇跡という無意味な実体まで一步の距離しかない。釈尊が明言した警告は忘れ去られた。

P161

「比丘たちよ、呪文や祈祷を用いることを禁止する。カルマの法則が万物を支配しているのだから無駄である。奇跡を起こそうとする者は如来の教説を理解していない<sup>1)</sup>」

サンガは、信仰心篤い人々の真の信仰にはさほどの関心を払わないまま、靈験祈祷を導入したことで加入者の裾野を広げた。しかも、祈祷を看板にした拡大は、安楽な人生を享受するために修行僧になることを誓約していた多くの僧たちですでに逼迫していたサンガを支えるために重要だった。しかしもし、これが成功であったなら、成功は致命的な対価を自ら払わなければならない。その後しばらくして、仏法の名の下にサンガに蔓延っていた迷信と靈験祈祷と闘うための改革運動がヒンズー教内部で湧き起こり、インド仏教徒の中から多くをヒンズー教に改宗させるという奪還的勝利をもたらした。皮肉にも、ヒンズー教内部で起きたこの改革運動には、釈尊が示した模範とその教え、仏教の初期数世紀のサンガの献身的姿勢と高潔さを想起させる部分が多く、仏教徒は感化された。痛ましくも、当初の力を喪失していたサンガは、蝕みと攻撃から仏法をもはや守れなくなっていた。仏教がその誕生の地から光彩を失ったのは、その後まもなくのことであった。

今日のサンガが靈的な窮地にある現実を疑う人がまだいるなら、仏教の社会への有用性についてバラモンのバーラドヴァージャからなされた質問に対する釈尊の返答を口ずさんでもらおう。

「信仰は私が蒔く種であり、献身は雨であり、謙虚さは鋤柄であり、心は頸木の結び目であり、正念は私の鋤の刃であり、突き棒である。すべての人は私の仲間であり、牛であり、安全へと導き、悲しみのない場所へと後退することなく進んでいく」

この基準に照らし、現状を振り返っていただきたい。

時と状況は土地柄、文化、信仰によって異なり、さらなる破壊作用をもたらす。サンガは、釈尊が示した模範からも、その模範を目指す意欲を喚起する仏法の真髄からも、大きく乖離した結果、

威信も高潔さも甚だしく凋落した。そのため、分裂し論争し合う諸派は、単独であろうと、形だけでも奇跡的に果たしたかつての栄光である一団の行動によってであろうと、当初の姿には戻れないことを客観的に認めざるを得ない。

---

1. 『マハーパリニッバーナ・スッタ』. 奇跡はヒンズー教典でも軽視されている。「ヨギよ、なぜ炎を冷やし、流れに乗るのか。汝はなぜ空を駆け上るのか。雄牛からなぜ乳を搾るのか。魔法の夢をなぜ見るのか。曲芸師の卑しい技がなぜ試されるのか」。『バガヴァッドギータ』VI.47 も参照。

P162

諸派は、未来への展望も、導きも、建設的な力ももはや示すことができないまま、靈性がとうに背離し崩壊の速度を上げている社会を蓮華台にした、すでに萎縮した階層制度の中でのささやかな立ち位置の維持に専念している。彼らは、現代という時代が投げかけている問いが新しい用語で装われていることの見極めができない。それゆえ、ダルマが社会の基本的疾患を和らげられる場合に限り、迷妄の中に埋没している人類の心と意識をもう一度引きつけることが望めることを理解できないでいる。

すべてではなくても多くの仏教国においてのサンガは、国境を越えて人類の福利に視野を広げるところか、国家目標と国家指導者の偏狭な野心追求への貢献を優先している。しかも、歴史を精査することで明らかにされたのは、他の古来の宗教の聖職者の行為にも見られたように、帝国の進出と紛争への発展に加担したことだった。釈尊の教えの原則すべてに完全に反している。民衆からの信仰だけでなく、支配者からの敬意もほとんど失い、節操に欠けた意志薄弱な日和見的存在として見られるようになったのは当然の結果だった。

窮地にある他の古来の宗教と同じく、初期の弟子たちの心の中で燃え盛っていた熱情も、暑熱も過日のものとなった。分断と無気力感がその線維すべての中に侵食し、一刻も早い対処が求められている現代の課題——世界をどう和合させるか、という問いに回答することができない。何世紀にもわたって蓄積されきた泥土のような付着物をダルマ(法)から一掃できるのは、弥勒如来の出現より他にない。弥勒如来だけが、不純物が混じらないサンガの概念をダルマを通じて作り直し、人類のための安全な拠り所へと装いを改めさせることができる。

※八正道を忠実に実践しようとする僧侶はもちろん数多い。彼ら個人の真摯さと純粹さは賞賛に値する。ここで言及しているのは、他すべての古来の宗教の機構のように停滞し、有用な目的に役立つことも、ましてや元来の目標を果たすことができなくなっている制度・機構についてである。

P163

## 弥勒一阿弥陀如来は出現した

「おお祝福されし者よ、今こそ汝の悟りの時が来た。

おお祝福されし者よ、今こそその時が到来した<sup>1)</sup>」

人間の歴史には、進歩が停止した結果、渦巻く混沌期に突入する時期がいくつかあった。過去数百年間がまさにそうした期間に相当する。死を迎えた時代と、みなぎる緊張感をもって誕生しようとする時代の狭間で、全世界的発展とそれに伴って発生した要求事項の攻勢を前に為す術もなく破綻した政治家や国家指導者たちが右往左往した。そのような歴史的交差点において人類の識覚を新たな次元へと引き上げるために、神の化身、アヴァターラが出現する。

諸々の条件が整って初めて、個人や事象が生じると言う人々がいる。人間とその業績の場合は、前提条件があるからこそ、確かに存在し、確かに果たされたと主張できるかもしれない。だが、本書で探求の対象とするのは人間という単なる現象ではない。太陽系圏内で諸々の状況にまったく左右されずに万物を生成する太陽のように、化身は原因である。人間が主権を行使し進歩したことで、生み出されたものではない。

時の宗教指導者と政府から抑圧と迫害を受けても、化身は誰からの助けも借りずに独力で、世界に対し、勝利を最終的に収める。化身が歴史にその痕跡を残すプロセスは、業績を残した証拠が明白であっても不可解であるのと同様に、神秘的で説明しがたい。

---

1. 『ニダーナ・カタール』、『アングッタラ・ニカーヤ』 ii.39, 『スッタニパータ』 559, 『ヴィナヤ・ピタカ』 i.6, 『マッジマ・ニカーヤ』 i.169 も参照。

人類の来る時代のために約束された救世主の長らく待望されている出現以上に、人類史で多くの予言がなされてきた事象はない。すべての宗教の教典には、劫の終焉者が出現し、その曙光を投げかけるのは「いつ」「どこで」についてが予言されている。だが、比喻で語られているとはいえ、弥勒阿弥陀如来の住まい、信者、出現した時代に残す業績を詳細に伝えているものは、釈尊の言葉を収めた仏典において他にない。

来る新しい世界の様々な様相を釈尊が詳細に述べたのは、弥勒阿弥陀如来をこの地上で発見するという本書の目標に到達するための正確な道標として役立たせるためであった。さもなければ、精巧なその構造全体は目的を失い、わざわざ時間をかけて釈尊は述べる必要はなかつたろう。聞く私たちにも時間の無駄になるだろう。だが確実にそれはあり得ない。釈迦如来を案内役に探求の旅に乗り出し、偏見のない広い純粋な心で求めるなら、弥勒如来は必ずや見出される。

釈尊を見たことがない何百年後の人々が想像で描いた絵姿が偽りであるように、弥勒如来は私たちが目にする絵姿で認識されることはない。このことはもちろんすでに理解されている。釈尊がこの地上を歩いた日々まで時を遡り、その面前に佇んだとしても、肉眼で見つめるだけでは、釈尊の実体を理解することにはならない。かと言って、盲人が、釈尊が如来であると判別できるわけでもない。肉眼で目にした多くの人たちの中ではごくわずかな人しか釈尊が如来であると確信できなかった一方、多くの盲者が釈尊を如来と認識したことが判明していても、条件にはなり得ない。耳も然り。偏見を持つのなら、聴覚器官の働きが健常であろうとなかろうと、この探求には役立たない。何千もの人々が説法を聞いても、釈尊の教えが純然たるダルマであることを聞き分けられなかった。多くの人々が釈尊が伝える救済の言葉を聞いたが、意味することを認識した人々はごくわずかしかなかった。ましてや、涅槃の境地に達するために踏み進めるべき道として、釈尊が入滅するまでにそれを受け入れた人々はさらに少なかった<sup>1</sup>。

釈尊の実体である、如来、仏陀は、物理的現象ではない。

---

1. 釈尊の時代のバラモンたちも、ヴェーダ、ウパニシャド、ギータを吟じていたことは間違いない。昼夜の別なく途切れることなく吟じた。しかし、詩の意味の本質は分かっていなかった。彼らがもし、これら古代の聖典の真の目的を正しく理解していたなら、釈尊が説いたダルマの信奉者になっていただろう。

P165

「見よ、粉飾された形体を！（それは）傷だらけの身体であって、いろいろのものが集まっただけである。病いに悩み、意欲ばかり多くて、堅固でなく、安住していない<sup>1</sup>」

如来は、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚で認識することはできない。でなければ、身体が不自由な人々も、虚弱な人々も、如来の教えを手にする機会はないだろう。如来を例えるなら太陽にほぼ等しい。その出現を、盲者、聾者、身体が不自由な人、亜者もが、放散する光と生命力を受け取る自然界のあらゆる兆しを感じ取って認識する。如来の出現は稀有であり、霊的重大さで比類するも

のではない。釈尊が述べるように、私たち一人一人に内在する靈的感覚によってしか、如来を認識することはできない。

「形や音によって如来に執着し、その結果、如来の行来を想像する者も、同様に愚かである。如来はその姿体から見ることはできない。如来とは法身である<sup>2)</sup>」

「ヴァッカリー、この下劣な体を見て何があるのだ。ダルマを見る者は誰でも私を見る。私を見る者は誰でもダルマを見る。ヴァッカリーよ、ダルマを見る者は私を見る。私を見る者はダルマを見るのである<sup>3)</sup>」

それゆえ、時を遡るといって絶対に不可能なことを可能にし、生身の釈尊の面前に達し、肉眼でその物理的姿を目にしたとしても、如来という比類なき現象を評価し理解する資格を得たことにはならない。それゆえ、私たちの前に常在するこの事実と、案内役である釈尊の実体を常に念頭に置きながら、悲嘆に暮れるクシナガラのマッラ族と、十大弟子の阿難とバラモンの哲学識者だったスバドラのような、師から最後の命令を聞くために臨終の床に集まった者たちと別れようとしていた素晴らしき靈的太陽の入滅の局面に視点を置こう。腐敗が不可避なものを嘆き悲しまないように、とマッラ族を慰めながら、釈尊は次のように語った。

---

1. 『ダンマパダ』 v.147.

2. *Dhammadgata-Ashtasahasrika*,XXXI.512-13. 『パラジカ・スッタ・ヴィバング』 I. (初期の図像では、釈尊が人間の姿でなく、「法輪」のような象徴で現されている。他のアヴァターラのように法を転じることで、当時の社会を改革する力を内在させた者、所以である).

3. 『サンユッタ・ニカーヤ』 22,87,13,III. 『マハーバーラタ』も参照。「クリシュナがいるところに勝利がある。ダルマがあるところにクリシュナがいる。ダルマがあるところに勝利がある」.

P166

「私を見ただけでは救われないというのは、まことに事実である。救われるには大いに努力し、ダルマを実践しなければならない。しかしもし、私が説いたこのダルマ(法)を完全に理解した者がいるならば、たとえ私を見なくても、苦しみの網から解き放たれる。治癒されるには薬を飲まなければならない。医者を見ただけでは十分ではない。同様に、私を見ただけでは、誰も苦しみに打ち勝つことはできない。私が伝えた智慧について、自分で瞑想する必要がある。自制心がある者なら、できる限り私から離れて暮らせるが、私が説いたダルマを理解さえするなら、私のことも確かに理解することになる。だがもし、より高次のもののために集中して冷静に努力することを怠るならば、私の近くで生活していても、私から遠く離れているのである。だから、精力的に、粘り強く事にあたり、意識制御に努めなさい。善い行いをし、目の前のことに集中するよう努めなさい。風によって灯火が揺れるように、人生はさまざまな苦しみにによって絶えず揺れ動くものなのだ<sup>1)</sup>」

マツラ族は、ダルマの実践に努めるならば、釈尊はいつでも側にいると諭されても、自分たちの只中にある最愛の御方の出発が差し迫っていることに打ちひしがれ、悲しみを抑えることができなかった。その夜、涙に暮れたマツラ族が去った後、クシナガラバラモンの哲学識者のスバドラが来訪し、釈尊にいくつかの質問をした。阿難は、病んだ師が耐えられないほどに話が長引く可能性を危惧して入室を許さなかった。だが、室外での話し声と議論が念頭に置かれた質問を聞いていた釈尊は、スバドラを入室させるように、と阿難に指示した。スバドラは当時名が知れた修行集団の教祖6名の名<sup>2</sup>を挙げ、誰がどの程度悟っているのだろうかと質問した。「今はそのような話をする時ではありません。法を説くから聴くように」と釈尊は答え、救済は徳ある生活を度外視した教説に見出すことはできない、といつものように説き、清浄で始まり、愛で終わる八正道を説いた。スバドラは釈尊との会話でダルマを受け入れた。釈尊はそれから弟子たちの方に向き直り、全員に対して次のように述べた。

「たとえ久遠に続くものであっても、終わりは来る。例外はない。別れの時は必ず最後に到来する。さて、私は自分のため、人のために、できることをやり遂げた。ここに留まっても、これから先、何の目的もないことだ……」

- 
1. 馬鳴の『ブツダチャリタ』XXV.
  2. 六師外道：プーラナ・カッサパ、バクダ・カッチャーヤナ、アジタ・ケーサカンバリン、マッカリ・ゴーサーラ、サンジャヤ・ベーラッティプッタ、マハーヴィーラ.
  3. 『ダンマパダ』w.273,274.

P167

比丘たちよ、この私のダルマは、今後、生きとし生けるもの間に何世代にもわたって存続していくだろう<sup>1</sup>。だから、生き物の世界の本質を認識し、不安になってはいけない。別離はどうやっても避けられない」

その後、自分の元まで来るように、と阿難に伝え、次のように語りかけた。

「阿難よ、そなたはもしかしたら、世界はもう終わった、師はもういない、と思い始めるかもしれない、しかし、そう思っただけではいけない。私が死んだ後、私が教えた法と秩序規則があなた方の教師となるようにしよう……すぐれた法身が年月に耐えて存続していくというのに、なぜ私がこの肉体を保持すべきなのだろう。目的を果たし、私に課せられた務めをこなした後は、休息をしようと決心しているのだ<sup>2</sup>」

僧房の入口まで退いていた阿難は、側柱に背をもたせかけながら、差し迫る釈尊との別れを思っ

で泣いていた。自分はまだ一介の学習者であり、救済の境地に到達するにはまだ修行しなければならない。その自分を誰が教え導いてくれるのだろうか。そう考えていたところ、側に来るようにと釈尊から再度呼び出された。阿難は入室すると、最愛の世尊が身を横たえている長椅子の脇に恭しく膝まずいた。その耳に釈尊の言葉が入ってきた。

「阿難よ、悩まされてはならない、泣いてはいけない。私たちは最も大切にしたいものすべてと別れなければならない、と私はお前に言わなかつたらどうか。生じ、寄せ合わされた存在がなんであろうと、その中に内在する消滅に打ち勝つことはできない。消滅しないなどということが、どうしてありえようか。阿難よ、そなたは長い間、親切な振る舞いと言葉づかい、思いやりと、決して変わらない計り知れないほどの愛ある振る舞いで私の側にいてくれた。常によくやってくれた。耐え忍びなさい。そうすれば、そなたもこの生命の渇き、この無明の鎖から完全に解放されるだろう<sup>3)</sup>」

釈尊は、弟子たちの考えを完全に分かっており、自らの別離が破壊的な衝撃を彼らに及ぼすことを十分に承知していたため、最後にもう一度、永遠に繰り返される仏陀出現の法則が確か間違いのないことを彼らの心に刻み付けた。そして「世尊がいなくなれたら誰が教えてくれるのですか」という、阿難から何度も繰り返された問いに答えた。

---

1. 「ダルマは永遠なるものへの扉である」.(『ヴィナヤ・ピタカ』 i.5).

2. 『ディーガ・ニカーヤ』 II.124-126. 『ダンマパダ』 v.273 も参照。「もろもろの道のうちでは八正道が最もすぐれている。もろもろの真理のうちでは四諦がもっともすぐれている。もろもろの徳のうちでは執着から解放されることが最もすぐれている。人々のうちでは、洞察力を持つ人が最もすぐれている」.

3. 馬鳴の『ブッダチャリタ』 XXV.33-4,54-60. 『ディーガ・ニカーヤ』 『マハー・パリニッバーナ・スッタタ』 も参照.

P168

「比丘たちよ、弥勒という高貴な者がいずれこの世に現れるだろう。完全に目覚め、智慧に満ちた阿羅漢であり、完全無欠の導き手となり、自らも道を最後まで踏み進め、諸々の世界に関する知識を持ち、教育者、神々と人の教師として比類のない崇高な仏だ。まさに現在の私のような存在になるだろう。私が自分自身の理解と洞察から行うように、弥勒も自らの理解と洞察から、この宇宙とその神々、ブラフマンの諸世界にいるマラーと神々、神々と人間（についての本質）を宣べるだろう。そして、その起源においても、その進歩においても、その完成においても素晴らしい、意義をそなえて字句をそなえた法を説き広めるだろう。私が今なしているように、高次の生き方を完全かつ純粋な姿で知らしめるだろう。まさに今の時代、私が何百人もの比丘からなる教団の長であるように、弥勒は何千人もの比丘からなる教団の長になるであろう」

その言葉に、「どうやったらその方を知れるでしょう」と阿難が質問した。

「弥勒と呼ばれるだろう。『慈愛』を意味する名だ<sup>1)</sup>」と釈尊は答えると、他の弟子たちの方に顔を向け、阿難の洞察力と親切を誉めたたえ、最後の言葉を述べた。「比丘たちよ、今こそ、そなたたちに告げよう。諸行は滅びゆく。怠ることなく努めよ<sup>2)</sup>」

以上が人間の意識で理解できる、約 2,500 年前に人類を照らした霊的太陽の言葉であった。

私たち自身の教育体系で考案された手法でも、新米教師は先輩教師によるお墨付きを必要とする。先輩格から立場を継承したことを自他ともに公式に受諾する現象は、宗教（神から遣わされた聖なる教師たちと各人の啓示）においては非常に意義が大きい。何世紀かを経た後に新たに登場する化身／仏陀が、自らの出現は過去の預言の成就であることを、先輩格の化身たちの信者の面前で証明することは殊更に重要であり、釈尊も例に洩れない。後継者予言に関わる規則に忠実に従ったことは明白だった。すでに確認したとおり(109-110 頁)、釈尊は過去生で、自分はラーマと同じ立場にあり、クリシュナに続く者であることを是認した。

- 
1. 『ディーガ・ニカーヤ』IV.26.25(マハー・パリニッバーナ・スッタタ). (パーリ) Metteya = Maitrya (サンスクリット).
  2. 馬鳴の『ブッダチャリタ』XXV,62-4,67-81 も参照.ヒンズー教でも同一の表現が使われている。「万物は初めは顕現せず、中間が顕現し、終わりは顕現しない。ここにおいて何の嘆きがあろうか」『バガヴァッドギータ』II.28 より、『カタ・ウパニシャッド』III.9 も参照.

P169

クリシュナには、たとえば、ブラック・カンハ（クリシュナカンハ）<sup>1)</sup>、ヴァスデーヴァ、ケッサヴァという名や呼び名があるが、クリシュナが治めたとされる都市ドワールカーヤ、彼の兄のバララーマの名にも言及した他のクリシュナ伝説の一部も含めた釈尊の本生譚であり、10 人の奴隷兄弟を扱った『ジャータカ』(454. Ghata Jātaka)にすべて記されている。一方、奇妙にも、釈尊以前に登場したどの三仏（クナゴムニ、カクサンダ、ケッサバ）との関連について、釈尊は明言していない。しかしやはり奇妙なことに、ラーマとの関連を述べている『ダサラタ王前生物語』では、ラーマの両親、妻のシータ、弟のバラタの名も含め、その他の詳細が実に正確に述べられている。そのため、クリシュナとラーマは実在の人物であり、本物の仏陀（顕示者）であると釈尊が認めていたと一般に信じられている。しかも、ラーマをカクサンダ（拘楼孫仏）、ケッサヴァをケッサバ（迦葉仏）、マヌをクナゴムニ（拘那含牟尼仏）というように、それぞれの称号(116-7 頁)に似た名で後に呼んでいる。

だが、神の顕示者——弥勒——の発見を最大の目標にする真の探究者は、気軽な探求では化身と

いう現象に近づけないことを、何よりも前に、はっきりと理解しなければならない。さもなければ、探求に関心がない人々が偶然見出したとしても、その重要性に気づくことはなく、人類の生活にもたらされる無上の意義に無関心なままでいることになりかねない。「おお比丘たちよ、この世に如来はめったに現れない……」と釈尊が語るとおり(52 頁)、人類史上すべての現象の中でこれほどに希有な現象はない。純粹さの極みを熱心に探し求め、それ以外のこと一切への執着を無にした希少な者たちだけが真に認識することができる。

さて、日昇という一連の現象を調べることで日が昇る場所と時間の特定の精度が高まるように、多くの過去の靈的太陽を調べることで、弥勒という靈的太陽が、いつ、どこで昇るかについての理解を深めることができる。

---

1. クリシュナという名は黒色、暗色を暗示する。また、釈尊が入滅してから 240 年後にアショカ王の後援の下に王都バータリプトラで開かれた第 3 結集で記録に含められた過去 24 仏の名称を読むと、仏教の伝承と、はるかに昔のヒンズーの同様の物語がほぼ完全に相関していることが一層に明確になる。その内の第 5 の仏の名称、Raivata は、ヒンズーで認めている第 5 のマヌの名前(132 頁脚注 2)と同一である。『クツダカ・ニカーヤ』の最後に収録されている、過去仏についての記録『ブッダヴァムサ』に記される 24 仏は、ヒンズーの化身の模倣であることは歴然としている。バラモンたちが大切にする化身たちの名前が、諸仏の名称に含まれている。

P170

靈的太陽のすべてが、夜明けの太陽のごとく出現する目的を通し、神の啓示の無限の鎖の中で完全に連結しているからである。だが、釈迦如来という現象の実体をここまで調査してきても、順次出現してきた靈的太陽の壮大な全景の中で釈尊だけが隔絶した現象であることを誰も理解していないかもしれない。釈尊の独自さは、自らは化身／仏陀という階級にいと述べた「今までの仏たち、これからの仏たちの中に私はいる」、そして「彼らが行ったことを、私は行う<sup>1)</sup>」の言葉にある。ともかくも、探求の第一歩として、以下に記すことが確実に、釈尊が予言した弥勒の到来を約束する時であるかどうかを見極めよう。

古代のヒンズーの哲学識者は、神の(または宇宙の)時間が周期的に到来する現象を思い描き、人類の出来事の中に及ぼすその作用について知るための数秘学を構築した先駆者だった。その中で最重要な出来事が化身(アヴァターラ、神の顕示者)自身の周期的な到来であり、自らの番になった釈尊は、ヒンズーの伝承の靈的な内容と預言としての重大さの両方を十分心得ていた。それゆえ、伝承を自らの教えの中で承認し、この劫の時間(マハーユガ、カルパ)に至高のヴィシュヌの 9 番目の化身としてヒンズー教徒の中に自らが到来したことを裏付けるための引証にしていたことは、すでに確認してきたとおりである。昔日にはマヌ、ラーマ、そしてクリシュナとして到来したヴィシュヌは、今度は、約束された公正なる千年紀を先導する予言の成就のためにカルキ・アヴァターラとして再来する。そして釈尊は、ヒンズー教の化身たちと自らは同一視できることを『ジャータカ』の本生譚<sup>2)</sup>で明言し、この「吉祥なる劫<sup>3)</sup>」の周期の「劫の終焉者」となる弥勒如来の到来を弟子

たちのために予言している。

- 
1. 本書 53 頁参照.
  2. 『ダサラタ王前生物語 472』(『ディーガ・ニカーヤ』Part I, Bombay Univ.)も参照. Ghata Jataka(454), Govinda-Jataka(530)も参照. 本書 109-110 も参照.
  3. 仏教ではこの劫を「賢劫」"Bhadra kalpa"と呼ぶ。「アーリヤのイーオン」"aryan aeon"を意味する.

P171

より高い精度で弥勒如来がいつ到来するかを決定するために、ヒンズー教の化身たち（マヌ、ラーマ、クリシュナ、釈尊、そしてまだ到来せぬカルキ・アヴァターラ）と、釈尊が述べた3人の過去仏の、クナゴムニ（拘那含牟尼仏）、カクサンダ（拘楼孫仏）、ケッサパ（迦葉仏）と釈尊自身、そして弥勒如来の間には驚くべき相関性があることを調査するには、できるだけ広角の眺望から、これらの化身／仏陀が再来する様相を調べなければならない、というこれまでの提案に加え、前段落で挙げた点も念頭に置き、仏陀が出現する明確なパターンを調査から特定しなければならない。そのようなパターンは、ヒンズー教と仏教という大宗教をもたらした神の顕示者に関してすでに提示された情報を表面的に眺めるだけの人々に対してすらも、歴史的文化的背景と信仰が絡み合うイメージを伝える歴史的データの中で、確実に見極めることができる。これだけが、目標に向かって探求を進める妥当性ある方法となる。そして、すでに非常に重要な一点が、現在の「吉祥なる劫」を構成する5仏と、この同じ現在のカルパ(劫)に関係することがヒンズー教徒から承認されている化身5人のリストから浮上し始めている。言うなれば、ヒンズー教でその到来が待たれているカルキ・アヴァターラ（劫の終焉者）は、釈尊自身がその到来を約束したマイトレーヤ——弥勒如来——に他ならない可能性である。これは特にわかりやすい。ヒンズー教と仏教両方の教典に記されている予言で共通して言及され、両者に承認されている可能性がある時間単位は、現在の私たちが生きている劫以外にない。それゆえ歴史的に正確を期すには、時代がより古く、釈尊自身の出現が分かち難く深く織り込まれたヒンズー教に、私たちは注意を向けねばならない。このようにして、これらの霊的太陽が周期的に昇った全容を見通し、ヒンズー教徒にも仏教徒にも承認されている神々の時間というヒンズーの枠組みの中で計算することで、カルキ・アヴァターラと弥勒如来の関係を検証し、この二者の出現が実際には単一の出来事であることと、この二つの名が両宗教で到来が予期されている一人の偉大な教師のことを指していることが確認されるだろう。

それでは、いつ、どこで、誰という、本書における探求に不可欠な側面の調査を開始することしよう。

## 9

## いつ

ヒンズーの哲学では宇宙論上の時代周期の算定に高い精度が与えられ、神々の時間はユガと呼ばれる周期的に区分された時代で構成されているとみなされている。地球が自転するのに4等分された時間区分を通過するように、マハーユガ<sup>1</sup>と呼ばれる周期的な神々の時間は四つのユガから成る。地球が自転する中での、光から闇へ、闇から光へと移行する時間区分と、等比例していなくても関連は著しい。

仏教ではヒンズー教で発展した上記概念に別の名称を好んで与えている。ユガもその一つであり、数え切れない数を意味する「無量（パーリ語：アサンケイヤ（阿僧祇）」とも呼ばれている。四つの阿僧祇<sup>2</sup>で、一つの劫(カルパ)を構成する。さらに、ヒンズー教<sup>3</sup>のように仏教においても、ユガ（阿僧祇）は、さらなる分割を意味する12本の輻<sup>4</sup>から成る車輪によって表象され、地球が太陽の周りを公転するのにかかる12カ月が四季に分割されることを象徴する。数字の4は、ヒンズー教徒、仏教徒が発展させた、言葉や音声を数字に置き換えて組み合わせることで未来を予測する数秘術においては大きな意義を持つ。

- 
1. カルパ(サンスクリット), 周期, 劫, イーオンとも知られている. 仏教徒も1日の4分割を採用した(馬鳴の『ブッダチャリタ』XIV,1-9,47-52,83-108).
  2. 上座仏典の原典では四つの阿僧祇が概して語られている(Jataka,I.2)一方、大乘経典では少ないものでは3件、多いものでは33件に及んで言及している(『アビダルマ・コーシャ』IIIと『マハー・プラジュニャーパーラミター・シヤーストラ』).
  3. 『リグ・ヴェーダ』I.164.115 他、『アタルヴァ・ヴェーダ』X.8.4.
  4. クリシュナの時代より昔のヒンズー教徒はアーディティヤ(太陽)の12人の息子が象徴する12の月で一年が構成されていると信じていた、『バガヴァッドギータ』XI.6.と同書X.35を参照。「私は(12の)暦月のうちのマールガシールシャ月である(11/15-12/15)。季節のうちの花の盛りの候である」

また、地球の自転周期と公転周期の4分割と、釈尊と弟子たちがほぼ確実に含まれるインド・アーリヤ人すべてが霊的柱として是認する4種のヴェーダ<sup>1</sup>を根拠にしていると思われる。数字の4は、釈尊が折にふれて四聖諦(チャトゥル・アーリヤ・サティヤ<sup>2</sup>)と呼んだ四諦の数でもある。

ヒンズーと仏教両方の数秘術で歴史上の時間の観点から計算された期間の中で、現在のマハーユガ(劫、カルバ)だけが、1万2千年<sup>3</sup>と確定されている。サンスクリット語では、デーヴァナム・チャトゥルーガム<sup>4</sup>(神の啓蒙の時代、気付きの黄金時代)と呼ばれ、サティヤ・ユガ、トレーター・ユガ、ドヴァーパラ・ユガ、そしてカリ・ユガと呼ばれる四つの時代(四つの阿僧祇)で構成されている。最後のカリ・ユガが、現在の時代であるとされている。

インド人と同じくアーリヤ人であるイラン人の伝承でも、ヒンズーの経典に記されている予言的ビジョンが支持されている。そしてヒンズー教徒のように、古代のイラン人<sup>5</sup>も、一つのマハーユガを構成する四つの宇宙時間、4ユガを認識し、当時の社会で既知であった、金、銀、鉄、「鉄合金」という金属名<sup>6</sup>で各時代を呼んでいた。一つの宇宙周期<sup>7</sup>の長さを1万2千年と受け入れていた点も共通する。また、イラン・アーリヤ人と、やはりアーリヤの神の化身であるゾロアスター<sup>8</sup>の弟子たちが述べた神々の時間を象徴する樹<sup>9</sup>の7本の枝には、

- 
1. 本書73頁脚注2を参照。インド・アーリヤ人の最古の聖典、釈尊はヴェーダやヴェーダンタ学派について熟知していたと言われている。『サンユッタ・ニカーヤ』i.168と『スッタニパータ』463を参照。またこのように語った。「バラモンには四つの真理がある。これらを私は自らの高次の知識で理解し、知らせたのである」『アングッタラ・ニカーヤ』IV.185と『サンユッタ・ニカーヤ』XXII.90を参照。
  2. *Aryasaccani* : 苦(Dukkha)には、因(Samudaya)があるが、因の抑制(Nirodha)は可能である。しかもこれ(Marga)を果たす「道=Path」がある。
  3. 『マヌ法典』I.69. 『カルキ・プラーナ』3.5.12も参照。"Dwadshabd Sahshren Devanam Chaturyugam"とは、1万2千年は4分割される神々の時代という意味。
  4. 『マハーバーラタ』III.12.826.
  5. *Sudkar-nask*(Denkart.IX.8).
  6. これらと同じ金属が *Bahman-Yast* I.3.でも言及されている。
  7. *Bundahism*, Ch.I., Ibid.; XXX.18.
  8. Zoroaster は古代イラン語では Zarthostra と発音する。不滅の星、永遠なる光("Zar"は永遠に生きる, "Ostra"または"astra"は星もしくは光を意味する). 仏の称号の一つである燃燈仏(Dipankara.57-58頁参照)に近似する。
  9. *Bahman-Yast* II.14.

金、銀、青銅、銅、錫、鉄、「鉄合金<sup>1</sup>」の金属名が与えられ、それぞれにヒンズー教と仏教の両方で述べられている7つの叡知<sup>2</sup>の概念が充当されている。古代イラン人とゾロアスター教の伝承によれば、1万2千年にわたる劫は、3千年で4分割される。最初の3千年は創世期、第2の3千年は神の法で統治される時代、第3の3千年は無知と子孫の悪行に象徴される人間の意志が神の意志と相克する時代、最後の3千年は、神の意志に応じる英知に立ち戻ろうと奮闘する時代を体現する。このように、インド・アーリヤ人とその同胞のイラン人の間に親密な相関性が認識できるのは、同じく期間1万2千年とする劫が4分割されているからだけではない。神の顕示者の出現に関連づけられるか出現を示唆した場合のみ、4分割された時代区分が重要性をもち意義を帯びることになることにも起因する。

インド・アーリヤ人の宗教として姉妹的位置付けにあるヒンズー教と仏教においてのように、ゾロアスター教においても、現在の劫の最後の時代に当たる3千年の間に3人の霊的救世主（サオシュヤント<sup>3</sup>）が「いつ」「どこに」出現するかが予言されている。一人目が、ゾロアスターの約千年後に現れるとされた。残る二人は、ホシダー・ボミット<sup>4</sup>とシャー・バーラム・ヴァルジャヴァンド<sup>5</sup>という。

---

1. 四つの時代の最後を象徴する金属としても、宇宙の樹の7本の枝のうち最後の枝を象徴する金属としても、最後に挙げられた金属であり、イラン系アーリヤ人の聖典に言及されている「鉄合金(スチール)」には特別な意味が込められている。成分混合されたこの金属は和合を象徴する。

2. ゾロアスター教には、7つの Keshvars という概念がある。全世界が東西南北の方角に4分割されて生じる四つの区域、二つの対蹠地、一つを中心地となる7つの区域であり、7つの不死として *Fravardin Yast*, XXII.82-3 に言及されている。この数字の7は、たとえば「7つの天国」というように、全ての宗教で象徴的意義を有する。また、自然界の結晶に光を通すと基本の七色から全色スペクトルを生み出すように、7は物理的領域でも象徴的意義がある。その光の全色を調和のうちに重ね合わせると、もっとも明るい白色光が生じる。

3. サオシュヤントは共同体の「開祖」「後援者」を意味する。

4. ホシダー=Hoshidar. "Hosh"は気づき、悟り、公正さ、または知識を意味する。"dar"は入り口もしくは門を意味し、「所有者」も含意する。それゆえホシダーは知識の門、公正さを有する者、啓発する者、悟りを得た者、すなわち仏陀を意味する。古代イラン語の Boom はサンスクリットでは Bhoom と表記され、土地(大地、地域)を意味する。これに"of"を意味する接尾辞"it"か"i"("ee"と発音)を加えると、"Boomit(=ボミット)"となり、「この土地の」を意味する。本例ではイランになる。すると、この救世主、ホシダー・ボミット、公正さの門、イランを啓発する者はイランに姿を現す運命にあるということになる。

5. シャーは主を意味する。古代イランでは最高神に用いられ、サンスクリットの"Asha"に由来する派生語でもある。"Bah"は光輝、栄光を意味する(サンスクリット:"Bha", アラビア語:"Baha")し、"Ram"はインド・アーリヤ語では例外なく、至高の聖見者のための用語である。

仏教徒からは「奇跡の双子」として、ヒンズー教徒からは二人のアシュウィンとして待望されているように、二人は同時期に出現するとされている。

この待望感は、ヒンズー教と仏教の予言と併せて後に取り扱う。アーリヤ人の中での伝承とロゴ言語<sup>1</sup>が酷似していることは、読者にはすでに明らかなはずである。そしてこの驚くべき相関性が、弥勒如来が出現する背景、いつどこで出現するのかを、時を大きく隔てた現代に生きる私たちが、教典に記された予言から正確に特定するための最良の手段として確実に役立つだろう。

しかしながら、人類の現在の歴史に唯一妥当性があるこのカルパ(劫)を調査する前に、これからの作業を明確にするためには少し本題から逸れるが、妥当性に欠いているにかかわらず、仏典に述べられ、弥勒如来出現の予言が成就する状況と兆候として誤解されている時期と期間、神話上の人物についての言及を、このカルパの文脈から取り除くことにしよう。そこで、巷間に最も普及した例に視点を置き、現在のカルパとは時間規模が全く比較照合できないことを確認する。

91 劫前に出現した最初の仏陀、ヴィパッシン仏の時代には、人間の寿命は8万歳、第2の仏陀、シキン仏の時代(31 劫前)には7万歳、そして第7の仏陀のシッタールタ・ゴータマの出現時までには人間の寿命はわずかに百歳に短縮されていた<sup>2</sup>。

---

(前頁脚注5の続き)「ヴァルジャ, Varja」(サンスクリット: Varsh)は系譜や国家、人種の源、発祥を意味する。それゆえ「すべてを覆い包む」、普遍的も意味する。Varja の変形であるサンスクリットの Vajra は貫通できないもの、ダイヤモンドを意味する。またダイヤモンドの特質である「抵抗できない」ほどの切れ味を象徴する用語でもある。「ヴァンド, Vand」もしくは「Avand」(サンスクリット: Wan or Van)は持参する者、所有者を運ぶ者を意味する。よって、シャー・バーラム・ヴァルジャヴァンドとは、全能者の至高の輝き、または「神の栄光」を意味する。

1. *The Gathas, Yasts* (アヴェスター語の詩句、サンスクリット語の Gita は「歌」を意味する)は伝統的な形式と韻律で作曲され、ヒンズーのヴェーダとの近似性が大きい。しかも、「rta」(法則)の支配者であるヴァルナのように、アフラム「ash」(法則)の支配者である。ヴァルナがミトラとの関係が密接であるように、太陽神ミトラとアフラムの結び付きも深い。他多くの点(131-2 頁)に加えてこれらも、当時、インド・アーリヤ人とイラン人は一体化しており、共通の宗教を奉じていたことを指し示している。

2. 『ディーガ・ニカーヤ』 II.2-7.

上記した引用文は、時という無限の現象に関するヒンズー・仏教の概念を改めて明言する一方、いつ誰が何をしたという歴史上の出来事に理路整然とした合理的な視点を与えられないことは、少し考えれば、理解にかたくない。8万歳と7万歳も、91劫も31劫も、生じた出来事と現象を、

現在の劫(カルパ)の完全なる範囲外にしている。91 劫と 31 劫前に起きたと述べている。現在の計算と、当時の状況にも時間の測定基準他にも考えがまず及ばない、想像もつかないほどのはるかな過去の架空の時間的尺度の同一視を試みるなら、宇宙船を牛車と、原子時計を百万年前の人間の時間感覚と同列視しなければならなくなるだろう。はるか昔の祖先が何を時間単位として想定していたかは知る由もない。初期人類が地球の自転に従って計算していたかどうか、あるいは、10 を超える単位を 10 進法が知られていない時代にどう計測していたかも知りようがない。もし私たちが慈悲深く、はるか昔の祖先にとっての 1 日は 1 年であり、それゆえ、8 万年とは 8 万日であり、365 で割って概ね 220 年を意味していた可能性があると言うにせよ、やはり想定しがたい。技術の進歩により、マイクロフィルム、タイムカプセル他で正確な記録保存ができる現代においても想像もつかない莫大な数の概念に、私たちは圧倒される。それでも、大昔の人々は衰えぬ活力で時間管理をし続けていたと言えるのだろうか。それゆえ、周期的時間の原則と、何千世紀も前にいくつもの大文明が興隆しては崩壊し、時の中で忘却されてきた非常に長い歴史を理性的魂であるホモ・サピエンスがこの惑星上で展開してきたことへの確固とした信念とに然るべき敬意を払いながらも、敢えて申しあげよう。ディーガ・ニカーヤを引用元とする数字からは、各カルパで春夏秋冬からなる一つの期間が比喻されていることを除き、意義ある関連性を引き出すことはできない。たとえば、ヴィパッシン仏は出現した 91 劫前のカルパの第 1 の阿僧祇(ユガ)に、シキン仏はヴィパッシン仏の時代から 60 劫後で現代より 31 劫前の全く違うカルパの第 2 の阿僧祇に出現したことが示唆されているかもしれない。だが、どうあっても、相関性は見出せない。

P177

『ディーガ・ニカーヤ』では、ヴィパッシン仏を最初の仏陀に、シキン仏を第 2 の仏陀、釈迦牟尼ことゴータマ仏を第 7 の仏陀として記載していても、この仏たちは同じカルパの中で前後関係をもって順次出現したのではなく、何万年も相互に離れ、連続性がなく全く関連がないカルパに各人が出現したとみなすべきことは明白である。ヴィパッシン仏やシキン仏がそれぞれ属するカルパに何人の仏陀が実際にいたかはまず分からない<sup>1</sup>。頻繁に引用されていても誤解されている文は、本書の目的とする弥勒如来出現時の特定には全く役立たないことだけは理解できる。さもないならば「どのカルパにゴータマ仏陀は属していたか」という問いはいつまでも答えられないままとなる。

その問いに、釈迦牟尼ゴータマ仏陀は明確に回答している (117 頁)<sup>2</sup>。私たちが生きるカルパ(劫)に属していると発言している。

現在の「吉祥なる劫(カルパ、マハーユガ)」に出現できるのは 5 人の仏陀しかいない。しかも、各人の名は明確に挙げられている。このことが、はるかな過去の劫にいたと言われている様々な仏陀<sup>3</sup>について述べても意味はない、と前述した発言の裏付けとなることを、読者はそのうち容易に分かっていただけるだろう。引用した「吉祥なる劫」の文には、ヴィパッシン仏も、シキン仏も言及されていない。釈尊も第 7 でなく、現在のカルパの第 4 の仏陀として挙げられ、第 5 の最後の仏陀の「劫の終焉者」が弥勒如来と記されている。

すでに注記したように(117頁)、最古の経典<sup>4</sup>によれば、この現在の「吉祥なる劫」にはカクサンダ(拘楼孫仏)、クナゴムニ(拘那含牟尼仏)、ケッサパ(迦葉仏)という3人の仏陀<sup>5</sup>が釈尊以前に出現したと釈尊は述べている。

- 
1. 現在の劫に、想像不可能で完全に無関係な時代を付け加えようとしても無益であることを理解するには、釈尊が389億7,100万年前に遡る91劫に及んだ自らの過去生を知っている(『マッジマ・ニカーヤ』[ジャータカ483])と主張したことを思い出すだけで十分である。この389億7,100万年を91劫で割ると、劫は平均で4億2,800万年になり、インド・アーリヤ人が数に数を重ねる能力を示すことを除けば、まったく無意味な数字である。
  2. 『バガヴァッドギータ』IX.7も参照。「劫末において、万物は私のプラクリティ(根本原質)に赴く。劫の始めにおいて、私は再びそれらを出現させる」。劫が開始するごとに創造が周期的に繰り返されることが本質的に意味している。
  3. 『ディーガ・ニカーヤ』II.2-7からの引用に関しては175頁を参照。
  4. 『スッタ・ピタカ』(*Manorathaparani*, 87-90)、『ディーガ・ニカーヤ』14.4.IIと『サンユッタ・ニカーヤ』12.2.IIを参照。
  5. 116-117頁を参照(117頁脚注1も)。

P178

一方、他の経典<sup>1</sup>では、他多くの仏陀が言及されているが、何百もの仏陀の中でも、名が与えられているのは一部であり、それ以外は暗号としてしか説明されていない。しかもすでに説明したとおり、私たち自身のカルパである現在の劫を超える時代については意義ある計算はできないため、現在のカルパ以前の時間枠に出現したとされている何百もの仏陀に関しては、名が付けられていない、なかろうと、考えが及びようはない。したがって、この現在の劫(カルパ)の調査に、遠くかけ離れた昔の真偽のほどが確かでない数多くの劫や、歳月の中で永遠に失われたその起源と状況を持ち込んでも、無益かつ混乱をきたすだけになるだろう。可能かつ、必然的に取り組むべき対象は、釈尊が言及したデーヴァナム・チャトゥルーガム(神の啓蒙の時代、気付きの黄金時代)より他にない。だが、このカルパで釈尊に先行して現れたと釈尊が述べた3仏のカクサンダ(拘楼孫仏)、クナゴムニ(拘那含牟尼仏)、ケッサパ(迦葉仏)についてすら歴史的証拠はなく、釈尊の一つ前に現れた迦葉仏の教えや信者についての記録も今日に伝わっていない。さらにその前の拘楼孫仏、拘那含牟尼仏に至っては、確かめようにも空白しかない。その私たちに、三つの選択肢が残されている。

- ① この3仏は無限に遠い過去に存在した(現在の1万2千年の同じカルパの中にいたとして挙げられているため、その可能性はない)。
- ② 彼らの教えの記録すべてが跡形もなく消されている(特に迦葉仏に関し、その可能性はない。同じくらいに古くても重要性がはるかに低い他の記録が保存され、現在入手できるため)。

- ③ この3仏は違う名で仏教徒も知っているヒンズー教の化身3人である。彼らに加えた釈尊と未来仏の弥勒(ヒンズー教のカルキ)の5人で、ヒンズー教徒も肯定し認めている劫を構成する。

条件すべてを踏まえると、妥当な選択肢は③より他にない。マヌ、ラーマ、クリシュナという、ヒンズーの化身3人が歴史上の人物であった証拠があり、それぞれの教えは現存し、今も信者がいる。様々なヒンズーの教典で、彼ら3人が出現する時期が伝承とロゴ言語を通して明言され、釈尊の出現についての予言も釈尊が登場するはるか以前に記されている。③が唯一の検証可能な選択肢であることは、いつ、どこで、どんな人物かが、ヒンズーの経典に順次、適切に提示され、

---

1. *Anagatavamsa*, 『ラリタヴィスタラ』, 『マハーヴァツ』, 『アビダルマ・コーシャ』

P179

釈尊が、マヌ、ラーマ、クリシュナという化身が属するこの劫の第4の化身として記されて是認されていることによっても、はっきりと裏付けられている。だが、釈尊が自らの先行者であるとした拘那含牟尼仏(クナゴムニ)<sup>1</sup>、拘楼孫仏(カクサンダ)<sup>2</sup>、迦葉仏(ケッサバ)<sup>3</sup>という名の仏陀が実際に誰であったかを確認できるものはない。それゆえ、彼らが仏陀たる使命を順次継承する関係にあったかも分からない。

さらに言えば、彼ら、釈尊の先行者3人のすべてが釈尊と同じことを教えていたと仏教伝説では主張されているが、釈尊以前に仏教者と称した人物も、この3人の先行者いずれかの名称に語源上で関連する名を持つ人物もいなかったことは判明している。すると、この3人は歴史上の人物ではないため、釈尊が説法する際に彼らの名に言及しなかったか、前述したように、この3人は遙かな古の時代のヒンズー教の3人の化身であり、その教えは当初は純粹だったが、釈尊の出現までには頽廃して認識不可能になっていたかのいずれかであるという結論になる。また、この仏陀3人の名は「仏陀」や「ディーパンカラ」のような歴史上の人物の称号で、本名が今では分からなくなっている可能性もある。あるいは、パーリ語とはわずかに発音が異なるサンスクリットに由来する正式名かもしれない。だが、何を意味するかが不明なため、歴史上の誰であったかを知る術はない。

しかし、ここで改めて、釈尊以前に登場したヒンズーの一連の化身たちが誰であったかの根拠が、過去仏3人の最後にあたる迦葉仏(ケッサバ: Kessapa)という名と、釈尊の一つ前に登場したヒンズーの化身で『バガバッド・ギター』の主要登場人物のクリシュナの一つの称号 Kessava<sup>4</sup>との相似性に見出すことができる。

---

1. 「黄金のごとく輝く者」を意味する。ある学識者たち、たとえば、A.Fuhrer は、*Archaeological Survey of Northern*

*India, Vol. XXVI. 1896*において、拘那含牟尼(クナゴンムニ)、拘楼孫(カクサンダ)、迦葉(ケッサバ)のストゥーパすべてを、釈尊生誕地のカピラ城の周辺で発掘したと主張したが、完全なる推測であり、他の識者たち、たとえば、P.C.Mukherji から、*A report on a Tour of Exploration of the antiquities in the Tarai, Nepal, The Region of Kapliavastu, 1906*において決定的な反論を受けている。これら伝説上の諸仏が途方もない古代に存在したことに照らせば、西暦紀元 630 年(釈尊の時代から約 1,200 年後)に中国からインドを訪れた玄奘が、釈迦以前のこれら 3 仏のストゥーパの残骸をそれぞれの生誕地と聞かされた場所で目にしたと紀行文に記したが、信憑性は薄いと云わざるを得ない。

2. 「すべての疑いをたやすく晴らす者」を意味する。バラモンのアグニダッタの息子として名高く、Kshemavati を生誕地とする。
3. 「火を呑み込む者」を意味する。クリシュナの称号の一つでもある。
4. 『バガヴァッドギータ』 III.1. 「クリシュナよ、もし行為より知性が優れていると考えられるなら、なぜあなたは、私を恐ろしい行為に駆り立てるのか。おお、ケッサヴァ(Kessava)よ」。『バガヴァッドギータ』 X.14 も参照。

P180

過去生で自らは、王国を王子 5 人の間で分けるようにという信託を故王の遺言とおりに執行したゴヴィンダ(クリシュナの別称。牛飼いを意味する)であったと明言する釈尊の言葉を踏まえると、王子 5 人がヒンズーの叙事詩マハーバーラタの主役の 5 人兄弟「パーンダヴァ」であることは歴然としており、迦葉は Kessava (クリシュナ) と同一人物であった可能性が高い。しかも、迦葉に帰属する伝説的偉業の一つとされている、巨大な洪水から民を救うためにカシミール渓谷から排水したことは、クリシュナ伝説<sup>2</sup>の奇跡の一つでもある。しかも、パーリ語の Kessapa は「火を呑み込む者」を意味し、サンスクリット語で Kessava と発音する。後者も「火を呑み込む者」を意味し、火の神アグニとの決闘で勝利したクリシュナに贈られた称号である。『バーガヴァタ・プラーナ』に含まれるこの武勇伝説で、クリシュナはアグニが発生させ得る火のすべてを呑み込み、消耗し切ったアグニは火を出せなくなったという。

マヌの父のヴィヴァスヴァン<sup>4</sup>、ラーマの父のダシャラタ王の心境に共感した、輝かしき息子の孤独な放浪の旅立ちへの、釈尊の父、シュッドーダナ王の嘆き<sup>3</sup>も、相似性を示す好例である。

---

1. 『ラリタ・ヴィスタラ』には、クリシュナはパーンダヴァに似ていると記されている。

2. Keresaspa (サンスクリット語の "Kessava", もしくはパーリ語の "Kessapa" の派生語) という名もまた、古代イランの伝説で顕著に登場する。魔法の棍棒を携帯し、もみあげを巻き毛にした (クリシュナもヒンズーの伝承で同様に言及されている) 英雄的若者の名である。イランの神話によれば、彼は神々の一人ではないが、抑圧された人々の救世主であり、世界の終末の時に再び現れ、人類の 3 分の 1 をすでに殺していた怪物ダハーカを退治するために、創造主によって復活させられるとされている。この伝説をクリシュナと強く関連づけることができる。カシミール渓谷地域で打ち立てた数々の功績が真実なら、イラン・アーリヤ人領土に隣接した土地を難なく訪問し、今日も伝承されるほどの強い印象を現地民に残していたかもしれない。古代アーリヤ人は、隣接地域の従兄弟の英雄たちを自然に受け入れ、英雄たちが残した功績を自分たちの伝説に遠慮なく取り入れた。クリシュナ(Kessava, ケッサヴァ)の信奉

者たち、Kessapas (Kessavas, Kessavaites)派の影響を受けて他派に広まったもみあげの巻き毛でさえも、漆黒の巻き髪で縁取られたクリシュナの容貌の美しさを物語る伝説に擬えたものだった。ヒンズー教の解説書のミーマーンサーには聖仙4派に髪型規定が設けられている。「もみあげの髪に関し、ヴァシシュタ派は右側の1房のみを、ケッサヴァ派は左右それぞれの1房を、アングィラス派は5房を巻き毛にし、ブリグ派はすべて剃ること。慣習に合わせた規定にすぎず、優劣は無関係である」。

3. 馬鳴著『ブッダチャリタ』VIII.75-81.

4. 「幅広い輝き」を意味するヴィヴァスヴァンは、イラン人の『アヴェスタ』, ヒンズー教徒の『リグ・ヴェーダ』で太陽、明るい天空として表象されている。

P181

釈尊の家族が偉大で輝かしき先祖たちと同じ経験をしたことと、その試練と勝利を完全に知っていたことを明証している。過去生の一つでラーマであったとか、ラーマの末裔であると釈尊自らが主張していたことで、マヌ、ラーマ、クリシュナというヒンズー教の化身たちの継承的出現は3仏のそれと同じであり、それが起きたのは、ヒンズーと仏教双方が共通承認する唯一のカルパ（デーヴァナム・チャトゥルーガム、この吉祥なる劫）であることを明らかにしている。さらに言えば、『ジャータカ』を始めとする、釈尊の諸々の行いを伝える初期の仏典に見出される逸話の大半と同じ展開が、ラムとクリシュナの偉業伝説を収めたヒンズーのごく初期の経典でも、ブラフマン、インドラ、アグニ、プラジャーパティ他のヒンズーの神々についての物語でも繰り広げられている。だが、ヒンズー教典ですら、化身がいつ、どこで出現し活躍したかに関する歴史的データは、マヌ、ラーマ、クリシュナのみに限定されている（訳者注：化身は10人おり、釈尊も含まれている）。クリシュナは3人の中では最後に登場したゆえに、そのデータ量は当然ながら他二人より大きい。

以上を踏まえると、弥勒如来が到来する時の計算をより高い精度で開始するには、ヒンズーで開発された宇宙時間の算術を参考にしなければならない。釈尊自身の出現を継承関係の歴史的流れの中にほぼ確実に含んでいる、化身の到来という永遠の回帰現象がいつ再び起こるかが、この算術において大胆に公式化されている。ヴェーダの時代にまで遠く遡るヒンズーの数秘術では、周期的な宇宙時間を司るリズムが増幅されて統合されている。劫やその構成要素のユガの周期的性質についての一般的な考えに対処するだけでなく、前後するユガの間であって、太陽軌道を周回する地球の自転に従った日昇と日没の時間帯である夜明けと黄昏のように、一つの時代（阿僧祇=ユガ）から次の時代への移行期の役割を果たす「接合期」をかなり詳細な時期まで、数秘術は算出する。そして、この接合期に仏陀が出現する。

---

1. 『アタルヴァ・ヴェーダ』X.8.39-40. プラーナ文献と『バガヴァッドギータ』も参照。

この移行期は、最大の不確実さ、すなわち胸騒ぎと期待を当然ながら孕んでいる。夜明け直前であっても最も闇深きこの期間に生きる人生が自分の運命と信じる人々は、最も長く強い苦悩を味わうのが自分の宿命だと感じている。だが、最初の困難を乗り越えれば、勝利を得ることは少なくない。しかも、人類が自分で作って絡め取られていた無気力さから自らを解き放ち、弥勒如来の新たな夜明けを探して山の頂上まで登るなら、人類を今、悩ませている漆黒の闇は速やかに消散し、人間精神をつかんで離さない世界中の痛ましい状況は普遍的勝利に変わるだろう。その変革は人類が和合し、すべての化身が予告していた約束された千年紀が到来することでもたらされる。サティヤ・ユガ<sup>1</sup>、黄金時代の夜明けである。

インド人の心理に、四つのユガやカルパの概念は、宇宙の働きに内在する因果法則に対する漠然とした関心をはるかに超えている。その推力はより緊迫性を持ち、その呼びかけははるかに強い親密感を帯びている。人類の生活と諸々の状況を悩ませている歴史的な事象と破局的な大事件だけでなく、束縛から解放への、栄光なる頂きへの、大きな跳躍を説明するからである。光と闇が1日を作るように、光と闇のような両側面が一つのサイクルを構成する。4分割された時間全体に及ぶ光と闇の配分は、この世界での毎日のように、地球の自転に従ってほぼ均等にされている。それゆえ、古代の人々は、このサイクル自体が宇宙の1日<sup>2</sup>（カルパ、劫）であると考え、カルパの開始時は、闇とは正反対にすべては良好で公正（サティヤ）であり、日昇からの午前の時間帯のように光が広がり増すと信じた。それゆえ、五つの発光体が輝く「この吉祥なる劫」こと、デーヴァナム・チャトゥルーガムは、ヒンズー教徒に神の法をもたらしたマヌ<sup>4</sup>が1万2千太陽年前に到来したことで、サティヤと呼ばれる黄金（クレタ<sup>3</sup>）期で開始した。

---

1. 「公正な時代」「黄金時代」。

2. 「昼 "day"」という言葉自体がサンスクリットで陽光を意味する"dwai"に由来する。それゆえ「神」(ヒンズー教と仏教寺院で祀られている「神々」の内の一人)を意味する「デーヴァ」と混同してはならない。

3. 『ヴィシュヌ・プラーナ』6.17. プラーナ文献もヴェーダ文献と同時期の古代のヒンズー教聖典だが、天人たちの活動が主に語られている。プラーナ文献18冊は6冊づつで3分化され、それぞれのグループに代表的な3人の神、ブラフマン(創造)、ヴィシュヌ(維持)、シヴァ(審判)が結びつけられている。『ヴィシュヌ・プラーナ』が文献すべての中でもっとも包括的であり、現在の劫を構成する四つの時代の名称が「サティヤ(公正)もしくは「クレタ(金)」、「トレター(銀)」、「ドヴァーパラ(銅)」、「カリ(黒か暗色)として」言及されている。

4. 『マヌ法典』1.7.88-91.「マヌ」という言葉はサンスクリットの「男」もしくは「良心」に由来し、「良心を持つ」を意味する。換言すれば、「人間」自身を意味する。アヴァターラを差し示すために聖典で頻出する「人」の類義語でもある。ヒンズーの聖典によれば、現在の劫が開始したほぼ1万2千年前に出現したとされるマヌは"Satyavrata"(正しい法)を司るマヌだとされている。

その後、トレーター、ドヴァーパラ、カリと名称を付される三つのユガが続く。

だが、宇宙時間の算定に言及している古代ヒンズーの教典は、誤って解釈されると意味をなさず、自己矛盾している印象を与えかねない。ここに、カルパ(劫)とそれを構成するユガの、古代の聖典<sup>1</sup>に見出される通念を、以下に紹介しよう。

DWADSHABD		SAHSREN		DEVANAM		CHATURYUGAM
12		千		神々の(劫)		四つの時代
CHATWARI	TRINI	DWAI	CHEKAM	SAHSRA	GANITAM	MATAM
4	3	2	1	千	算術(に よれば)	母または [元来]の

要するに、古代の算術では、一つの神の時代である「劫」という宇宙時間は、1万2千(太陽)年で構成され、4千年、3千年、2千年、千年という時代(ユガ)に4分割されているということである。だがその合計は、1万年であり、1万2千年ではない。それゆえ、同じ教典でその次に記された詩句<sup>2</sup>には、先述した「夜明け」と「黄昏」からなる接合時間が言及されている。

Taochhatani Chatwari Trini Dwai Chekmev Hi

Sandhyakramen Techhantu Sandhyanshop Tathaviddhi.

「各時代の両側には、同じ長さの接合期<sup>3</sup>があり、その長さは、千年(単位)の各時代(の頭)と同じ数を、百年(単位)にしたものとして計算される」。以下の図表(1)を見れば、意味がより明確になる。

1. 『カルキ・プラーナ』 3.5.12.

2. 『カルキ・プラーナ』 3.5.13.

3. 「夜明け」と「夕闇」もしくは「黄昏」の代わりに、「接合期」を用語とする。一つの時代の「夕闇」は後続する時代の「夜明け」に合併吸収されるため、これらを用語として使うと、時間的境界が消失する印象を与えるゆえである。

時代名	接合期 (夜明け)	期間	接合期 (黄昏)	全期間
サティヤ・ユガ (黄金期)	400	4,000	400	4,800
トレーター・ユガ (銀の時代)	300	3,000	300	3,600
ドヴァーパラ・ユガ (銅の時代)	200	2,000	200	2,400
カリ・ユガ (黒または鉄の時代)	100	1,000	100	1,200

「この吉祥なる劫」の期間はこのように確かに1万2千年である。だが、この劫とこれを構成する四つのユガは、一部の学識研究者により、サンスクリット語の"dwai(光)"と"deva(神々)"と同一視されたことで、太陽(dwai)年で測られる世間一般的な時間の長さが、神々の歳月や時代に関連づけられた天文学的に莫大な数字に変換されるようになった。

この重要点の誤解により、神々の1日が太陽年1年と同等にされたことで、神々の1年は太陽年360年<sup>1</sup>となり、太陽年432万年という膨大な数字にされた（古代のヒンズー哲学識者は太陽年の正確な長さをまだ特定しておらず、現代では公知の365+1/4日の代わりに360日としていたが、太陽月と太陰月の期間には気づいていたため、太陰暦を用いていた）。つまり、太陽(dwai)年の代わりに、神々(deva)の歳月に誤解釈され、期間1万2千年が432万年(1万2千×360)に変換されたことで、カルキ・アヴァターラがいつ出現するかに関わる予言成就の条件たる、劫とこれを構成する四つの時代の長さが特定されるどころか、不条理にも大きく、無意味な時の長さにされたのである。

さて、天文学的に巨大な時間の長さを遡及し、何百万年前の昔に起きたやもしれないエピソードすべてをごく僅かでも思い出したり、何百万年後の未来に起きると予期されていることを予告できるようになることを、理性的で悟りを開いた化身も仏陀も、私たちに毛頭も期待していない。

1. ヒンズー教の古代の哲学識者は太陽年の正確な長さをまだ決定していなかったため、現在、判明している365+1/4日の代わりに360日を採用した。しかしながら、太陽月と太陰月、両方の期間の長さを承知しており、太陰太陽暦を採用していた。

それはさておき、こうした莫大な長さの時間の中に起きる出来事すべての検証はまず不可能であり、不可能なほどの長さ自体が、新たな化身／仏陀の出現を予期し、発見して受け入れるよう、人類に注意を喚起し、準備させることを唯一の目的として、神の顕示者たちが段階的、承継的に行ってきた予言を完全に無意味にしてしまう。ヒンズー教典を正確に読むと、このような天文学的に大きな時間の長さを好んで採用したという解釈に行き着くことはない。教典の著者たちが主たる目的とする累進的啓示という理性的概念を引き出す上で、そのような空想じみた数字は役立たない。同様に、劫(カルパ)についての釈尊の発言には、後世の仏教徒の筆により、空想の領域に明らかに入られているものもある。釈尊が本当にそのように語ったかどうかの確認に、ここに一例を示そう。

高さ 16 里、幅 16 里、長さ 16 里の固い岩があったとし、それが百年に一度、上質の布でひと撫でされたとする。岩がすり減る時間は、劫を成す時間に比べれば、取るに足りない。

上記した比喩が無限の時を描写したものであり、永遠であることを感覚的に伝えるために用いられている数字の 16 (16×16×16 と百) が、ヒンズー教典の他の比喩でも使われていることを、関連分野の研究者であれば容易に認めることができる。古代のヒンズー教徒も仏教徒も、最上であることを感覚的に伝えるために、16 という数字を好んで用いた<sup>1</sup>。空想上の数字は、初めて悟りを開いたのは百千俱胝<sup>2</sup>前であったと釈尊が語る、『サダルマ・プンダリカ・スートラ』での発言(113 頁)にも見出される。

---

(前頁脚注 1 の続き)「拜火壇もまた一年であり、夜はその壇を囲む石である。石の数が 360 であるのは一年には 360 の夜があるからである。昼はその壇を守る煉瓦である。煉瓦の数が 360 であるのは一年には 360 の昼があるからである」『シャタパタ・ブラーフマナ』X.5.4.10 から。『リグ・ヴェーダ』I.16.3.10 にも、360 日が太陽年一年を成すと記されている。Ibid.,16.4.46, "Surya-Sidhan"13.1, 『アイタレーヤ・ブラーフマナ』VII.7.2, 『シャタパタ・ブラーフマナ』X.4.3.1 も参照。

1. 『マハーバーラタ』(シャンティパルヴァン 6503)。「地上にいかなる満悦があろうとも、天にいかなる大いなる喜悅があろうとも、欲望の破壊(涅槃, モクシャ, Jivanmukhti)から生じる喜びの 16 分の 1 の価値もない」。同様な主旨を釈尊がバラモンのクータダンタに語った。「いずれの善行も心を解放する愛の 16 分の 1 の価値もない。心を解放する愛こそ価値がある」。

2. コティ(俱胝)で定義される数はなく、10 万から 1 億までの間ならどの整数もとりに得ると説明されている。

だが、空想上の時間を、空想の域にあってもはるかに現実的な他の数字(175-76 頁)と同列に扱うことはできない。ヴィパッシン仏が出現したのは、ほんの 389 億 7100 万年前にすぎなかったなどあり得ようか。それゆえ、言葉そのものが聖なる秩序のまさに真髄であった釈尊が、偶然にせよ、意味と目的を一切欠如した空想に自ら関与した可能性があったとは信じがたい。

古代のヒンズー教徒と初期仏教徒双方が時空の観念を空想上で混合したため、超自然的なものや宇宙の時間枠についての彼らの概念の説明を試みると、私たちだけでなく彼らも頭が混乱していたことが分かる。完全に不条理な測定単位に基礎を置いていたためであり、たとえば、他のやはり不条理な尺度が距離や長さの測定基準にしているクローシャは、牡牛の鳴き声や、太鼓を叩いた音が聞こえる距離と定められている。距離の変要素なら、いくらでも簡単に挙げられる。空気温、低木が間のどこかで生えている、大地導電率、牡牛の喉の調子、牡牛の感情状態（怒っている、発情している、恐怖、満腹感、空腹感がある）、太鼓の皮の状態、聞き手の聴覚他にも数々ある。これらすべてがクローシャの距離を抜本的に変える。しかも、他の単位を作るために何回も引き延ばされるなら、測定標準の意味を失う。コティ(俱胝)(185 頁)が、10 万から 1 億までの間のどの単位を意味しても驚くに値しない。91 劫前の人々の寿命が 8 万歳(175 頁)であるとか、弥勒如来が出現するのは人間の寿命が 10 歳以上で 8 万歳以下の時代であると述べる言葉が同じ出典から見出される。後者では、平均寿命が 60 歳<sup>1</sup>の現代も含め、あらゆる時代が該当する。こうした不条理を、釈尊の検証可能で理性的な発言に関連づけることはできない。

これからの数頁では、釈尊の発言から、合理的で妥当性が高い特定の年月日と年数を確認する。

---

1. ヒンズー教典では的を絞った合理的数値が示されている。『ヴィシュヌ・プラーナ』4.24 には、カリ・ユガでは人間の平均寿命は 75 歳であると記されている。

P187

それゆえ、意義あるものの発見への熱情がまだ冷めていないなら、空想の世界での飛行を止め、働かせ過ぎた想像力の翼を折り畳み、私たち自身の「吉祥なる劫」に関係する有意義なものと同面するために地上に降りなければならない。そして現実的な観点から、この劫という時代が「その最後まで駆け抜ける」前に必ず起きると釈尊が約束した、弥勒如来出現の秘密を解き明かす。

それゆえ、現在の時間である「吉祥なる劫」、デーヴァナム・チャトゥルーガムに戻り、構成要素たる四つの時代であるサティヤ、トレーター、ドヴァーパラ、カリの各ユガの時間構造とその他の詳細を探索することにしよう。この探求においても、他すべてにおいてのように、二つの立場がある。四つの時代各々の実際の年数を並べる方向に関して見解が相違する「直解主義派」と「解釈主義派」という二つの学派が該当する。前者は古代ヒンズーの教典で列挙されている順序そのままに、4 千年、3 千年、2 千年、1 千年は、サティヤ・ユガ、トレーター・ユガ、ドヴァーパラ・ユガ、カリ・ユガに順次(184 頁)該当するという立場を取る一方、後者は、教典に降順で列挙されている

のは真理の探求者すべてに鋭意な調査の機会を与える意図によるものであり、マヌ、ラーマ、クリシュナ、釈尊という化身について歴史上すでに判明していることに照らして相関性と意義を付与すべきなら、1千年、2千年、3千年、4千年という昇順に確実に戻す必要があると主張する。

両者に公平を期すために、まず「直解主義派」の主張を取り上げ、判明しているものに照らし、それぞれの立場に妥当性があるかどうかを確認しよう。「直解主義派」は接合期を考慮に入れ、サティヤ・ユガ、トレーター・ユガ、ドヴァーパラ・ユガに、4,800年、3,600年、2,400年をそれぞれ適用する。すると、カリ・ユガは1,200年にしかならない。「直解主義派」の主旨が理解しやすくなるように、以下で図表にする。

図2

時代名	前後の接合期を含めた期間
サティヤ（またはクレタ）・ユガ	4,800年
トレーター・ユガ	3,600年
ドヴァーパラ・ユガ	2,400年
カリ・ユガ	1,200年
現在の劫の期間の合計	12,000年

P188

では、過去の神の顕示者たちがいつ出現したかについて教典に記され、歴史上判明していることを調査することにしよう。

マヌ法典 (1.7.fn.4) によれば、マヌ (Satyavrata) はサティヤ・ユガに出現したとされている。さらに、大半のサンスクリット語の教典<sup>1</sup>には、クリシュナ<sup>2</sup>はドヴァーパラ・ユガを締め括る接合期に地上に出現し、死去するなり、ドヴァーパラ・ユガが終焉し、カリ・ユガが開始したと述べられている。やはりヒンズー教典<sup>3</sup>では、カリ・ユガの中期にマガダ国から釈尊が出現することも予言されている。さて、史実として判明していることに照らすと、「直解主義派」が主張する、接合期を併せたカリ・ユガ全体の1,200年間に、歴史で証明されている釈尊の出現時と生涯時間を含めることはできない。釈尊は約2,500年前(紀元前563-483年)にこの地上で暮らしていたことが分かっている。「直解主義派」の見解に従い、カリ・ユガの全期間が1,200年にすぎないなら、また現代の私たちがまだカリ・ユガに在るとし、釈尊の出現がカリ・ユガの開始時であって、教典で予言されていた中期でないと仮定しても、現代の1995年から1,200年を単純に引き算するなら、カリ・ユガは西暦795年に開始しなければならない。釈尊はかなり後世に出現しなければならなかった。史実とは相容れない。

クリシュナの出現時についても「直解主義派」の見解は正しいとは言えない。教典のとおり、彼が死去するなり、カリ・ユガが開始したと言うなら、「直解主義派」の計算では西暦 700 年前後にこの地上に出現していなければならず、歴史との整合性が取れない。クリシュナについては、関連出来事を相互参照するだけで歴史上の存命期間の推測が可能であるとともに、相当古い時代に生きていたことは疑いない。マトゥラー近郊をおそらく本拠としていたヤドゥ族の分家の古代サートヴァタ族、別名ヴリシュニ族の出身であった。マトゥラーの歴史と伝承には、クリシュナの名が結びついている。

---

1. 『カルキ・プラーナ』, 『シュリマド・バガヴァッド』, 『マールカンデーヤ・プラーナ』

2. クリシュナは「削り落とす」を意味する"krs"に由来する。換言すれば、彼は信者から罪業のすべてと疾病を削り落とすということである。

3. *Iskand-Purana*.

P189

クリシュナは最古のヴェーダ教典<sup>1</sup>にも言及されており、同一人物だと思われる。クリシュナと呼ばれる阿修羅が兵 1 万の軍隊と共にアムスマティ川の堤でインドラとの決戦に備えて待機していた。これは古代の出来事を象徴的に描写したものと捉えられるだろう。クリシュナはヴェーダの宗教ことバラモン教の司祭制に反対していたため、ヴェーダの執筆者からは、ヴェーダの神々の統率神の一人であるインドラの敵「阿修羅<sup>2</sup>」とみなされていた。儀式に染まり切っていたバラモン教をクリシュナが良しとしていなかったことは、インドラとの戦いを物語るくだりに実に多く示されている。征服されたインドラはクリシュナの前に恭順を示し、「あなたは神々の中のインドラが持つ、牛たちを支配する力を手に入れました。ゴーヴィンダ（牛飼）であるあなたを、民は永遠に賞賛するでしょう」と述べたことが、ハリヴァムサ(4004ff)で物語られている。また、カウシータキ・ウパニシャッド(XXX.9)の中でクリシュナ・アーンギラサと呼ばれていたことから、リグ・ヴェーダの執筆者が、司祭制に反対するクリシュナの教えに反感を持ちながらも、彼の教えの一部を取り入れた可能性は大きい。さらに、リグ・ヴェーダの第 8 マンダラの第 74 讃歌はクリシュナが著した<sup>3</sup>とされている。ヤームナーチャーリヤは著作、アーガマ・プラーマーニヤにおいて、クリシュナの教えは純粋な精神による神への礼拝であると記した。それゆえ、彼に従う者たちは、バガヴァッド（神の崇拝者）とか、サトヴァーダ（真の崇拝者）と呼ばれていた。チャーンドーギヤ・ウパニシャッド(III.17.18.6)でも、クリシュナばかりか、母親のデーヴァキーと子供時代の師匠であったゴーラ・アーンギラサも言及されている<sup>4</sup>。しかし、クリシュナはヴェーダとウパニシャッドの両方で言及されていても、どちらの教典にもマハーバーラタ等の叙事詩のことは記されていない。それゆえ、ヒンズーの叙事詩、マハーバーラタ第 6 巻のバガヴァッド・ギータを編纂した聖仙ヴィヤーサがクリシュナの教えと彼がヴェーダとヴェーダの神々を認知していたことをギータの中に含めたとされているのは、対立し合っていた当時の様々な民族を一つにするためにクリシュナ

の伝説と教えを結集点として活用するという、明らかにはるか後世の試みであったと推測せざるを得ない。しかしながら、至高者への信仰と、クリシュナがアルジュナとの対話で明確に述べた、正しい行いによりその信仰を実証することが、バガヴァッド・ギータの本質的な教説であり、他の出典との照合で確かめられているとおり、クリシュナの教えの紛れもない痕跡であることに疑いの余地はない。

1. 『リグヴェーダ』 vii.96.13-15.
2. ヴァルナを始めとする古代インドの神々はヴェーダ時代のアーリヤ人によりその高い神格を奪われ、魔族(「暗黒の者たち」を意味する阿修羅)の地位に降格させられた。
3. 『リグヴェーダ』 viii.74.
4. 『リグヴェーダ』 iii.17. 『カウシータキ・ブラフマナ・ウパニシャッド』 XXX.9. Painini. IV.1.96.も参照.

P190

初期ヴェーダの時代からウパニシャッドの時代まで、クリシュナは、ヴェーダの思想家とみなされていた。また、クリシュナという言葉は、暗色や黒を意味する形容詞と一般的に認識されているため、アーリヤ人の到来前から現地で牧畜を営んでいた肌が浅黒い先住民族を出自としていたことが『ジャータカ』でも示唆されている。それゆえ、はるかな古代の人物であったことが、プラーナ文献によっても確認されている。以上の検証から、正しいのは、四つの時代を降順で並べた「直解主義派」の見解ではなく、昇順であることが判明する。以下に正しい並び方を示す。

図3

時代名	前後の接合期を含めた期間
サティヤ (またはクレタ) ・ユガ	1,200 年
トレーター ・ユガ	2,400 年
ドヴァーパラ ・ユガ	3,600 年
カリ ・ユガ	4,800 年
現在の劫の期間の合計	12,000 年

四つの時代各々の長さを昇順に正しく並べ替えると、クリシュナが生きた時代は全く違ってくる。彼は約 4,820 年前にこの地上で暮らしていた。ドヴァーパラ ・ユガのまさに最期であったと複

数の教典に記されており、約 2,500 年前に釈尊が入滅した史実と矛盾しない。二つの重要な事実がこの結論を裏付ける。釈尊の時代よりはるかな昔になされたヒンズーの予言では、ヴィシュヌの 9 番目（このカルパでは 4 番目）の化身が釈尊であり、この「吉祥なる劫(カルパ)」に出現する 5 人<sup>1</sup>の化身についても叙述されている。

---

1.ヴィシュヌの 5 人の化身の名はこの「吉祥なる劫(カルパ)」に出現する未来の化身に帰せられると古代の人々が考えていた属性の反映。釈尊が修行を開始したのは弥勒如来と同時だったが、自らは九劫前に成道したと述べた。これにより釈尊を含む、ヒンズー教徒が認識していた化身の出現順序が正しいことに妥当性が備わる（訳者注：九劫前の成道については、成道に本来なら百劫かかるはずだったが功德で九劫が省かれたことが『マハープラジュニャーパラーミター・スートラ』や『アヴァダーナ・シャタカ』に記載されている）。

P191

「私はマヌ、私はスーリヤ<sup>1</sup>、私は学識ある聖人カクシヴァン<sup>2</sup>である。私はアンジュニの子の賢者クツァ<sup>3</sup>を飾った。私は賢者ウサナ<sup>4</sup>、私を見よ」<sup>5</sup>。そしてさらに重要なこととして、経典に記されているように、釈尊は現代も含まれているカリ・ユガの真ん中で出現することになる。このことから分かる通り、釈尊がこの「吉祥なる劫」に属するとして列挙した 5 仏のように、このカルパに属するヴィシュヌの化身も 5 人しかいない（他 4 人はこの劫以前に異世界で出現したと思われる）。それゆえ名は違っていても、5 人の化身と 5 人の仏陀は同一の劫に出現した同一人物であるという本書の前提の妥当性にさらなる確証を与える。ヒンズー教典（*Iskand-Puran*）に記された釈尊に関する次の予言も考慮していただきたい。「マガダ国のアンジュニの家から、ヴィシュヌが仏陀として現れ、ダルマを広めるだろう」

以上から、カリ・ユガが四つの時代すべての中で最長期間であり、この劫全期間の 40% を完全に占めることが分かる。これは当然と言うより他にない。古代のヒンズー教徒は、宇宙の 1 日（劫）の概念の基礎を地球の自転に置いていたからである。自転する 1 日の中での光と闇の時間の長さに、宇宙の 1 日のモデルがほぼ完璧に似せられている。闇の時間は光の時間と長さがほぼ等しい。同じように、カリ・ユガと、劫の内の残りのユガは、期間の長さは同じに近い。四つの各時代の長さについて本書で提示する考えが妥当であることの証明はこれ以上必要はない。だが、1 年に四季があり、1 日が 4 分割され、「この吉祥なる劫」ことカルパを四つのユガで構成するなら、なぜ、ヒンズーでは 5 人の化身が語られ、釈尊も弥勒如来を含めて 5 人の仏陀がこの「吉祥なる劫」に出現するとして各人の名を挙げているのだろう、という質問が胸の内に湧く人もいるかもしれない。その答えは、ヒンズー教典によれば、カリ・ユガのほぼ 5 千年という期間の長さにある。それゆえ釈迦牟尼仏が、クリシュナの時代から、カルキ・アヴァターラ到来までの中点で出現し、失われたダルマ(法)を改めて見出し、その時代の人類の精神を再び活性化させるために今一度、説き広める運命にあった。

1. ラーマ. その子孫は日種王朝の初代王イクシュヴァークの血統を引く.
2. クリシュナ. (ヤーダヴァ族の賢人とも呼ばれている)
3. 釈尊. (釈迦牟尼は釈迦族の賢人を意味する)
4. ウサナ.「ウサ」は「夜明け」の意味. 夜明けの開拓者の象徴. カルキ、劫の終焉者、弥勒如来の別称.
5. 『リグ・ヴェーダ』IV.26.

P192

これから確認するように、釈尊もまた、カリ・ユガの期間は5千年であることと、その期間を二分する時期に自らが出現したことを明言している。その釈尊による数々の予言と、それらが意味する、予言がいつどこで成就するかを知ることが、弥勒如来である人物を発見するという本書の目標を達成するための第一条件となる。それゆえ今、古代のヒンズー教徒と仏教徒が保持し、釈尊も同意していた、時間、時代、劫についての概念の背景を念頭におきながら、未来についての釈尊の予言を伝える最も名高い経を全体的に研究する。この経文では、弥勒如来の出現が述べられるが、弥勒如来による精神再活性化の力が必要となる前に釈尊自身の教えが経験していく各段階と、そうした変化が起きる諸々の状況、条件、期間も言及されている。その経文が記されている上座部仏教の *Anagatavamsa* から、釈尊と舎利弗の会話<sup>1</sup>を以下に紹介する。すでに引用した句がいくつかここで繰り返されていても、ご辛抱願う。この有名な韻文は、舎利弗の問いで始まる。

あなたに続く英雄たる仏陀はいかなる人物でしょう。

その人物についてすべて聞きたいのです。

その方の幻影に、語らせましょう。

舎利弗の言葉に、釈尊が答える。

舎利弗よ、そなたに告げよう。

私の話しを聴きなさい。

この吉祥なる劫の時代に3人の指導者がいた。

カクサンダ（拘楼孫仏）

クナゴムニ（拘那含牟尼仏）

そして、かの指導者、ケッサパ（迦葉仏）である。

私は今、完全なる仏陀であるが、

この同じ劫が最後まで駆け抜ける前に、マイトレーヤ（弥勒仏）が現れるだろう。

マイトレーヤという名の彼こそが人の上に立つ完全なる仏陀だ。

釈尊は続けて、弥勒如来が過去生で成し遂げた伝説的な偉業の数々を詳説してから、出現の時期と条件について舎利弗がさらに寄せた質問に応じる。

---

1.カピラ城近くのロハニ川の堤の上に築かれたバンヤン僧院において。

P193

舎利弗「どのようにして出現されるのですか？」

釈尊 「私がこの世を去った後、五つの消滅<sup>1</sup>がまず必ず起きる」

舎利弗「五つの何でしょう？」

釈尊 「(宗教における)証得の消滅<sup>2</sup>、正しい実践の消滅<sup>3</sup>、学問の消滅<sup>4</sup>、外見の姿の消滅、舎利の消滅だ。この五つの消滅が起きる」

「ここに言う『到達』とは、世尊が完全なる涅槃の境地に到達した後の千年間は、比丘たちは分析的洞察を実践できるようになることを意味する。時の経過に伴い、わが弟子は預流、一來、不還の段階に達する。これらの証得が消滅することはないだろう。だが、預流の最後の一人の生涯が終わるとともに、証得は消滅する。舎利弗よ、これが証得の消滅だ。正しい実践の消滅とは、ジュニャーナ（智）、洞察、八正道の実践とその成果を得られないことであり、完全に浄らかな四つの道徳習慣<sup>5</sup>がもはや遵守されなくなる。

---

1. 『アングッタラ・ニカーヤ』にも記されている。この対話の大半が基づくヒンズー教典でも、この頽廢のプロセスの中でも特に、今の劫を構成する四つの時代の最後に当たるカリ・ユガが言及されている。『バガヴァッドギータ』の編者であるリシのヴィヤーサが『シュリマッド・バガヴァッド・ギーター』でこう記している。「カリ・ユガでは、人々はヴェーダに逆らい、ブラフマンでさえも常に礼拝している神への崇拜を忘れるだろう」「来たる数年のうちに、抗争の時代であるカリ・ユガの威力は強くなり、宗教、真理、貞潔、慈悲、憐愍、寿命、力、面影のすべてを日々、減少させていこう」。『マヌ』も参照されたい。「救済を得るために、クレタ・ユガでは苦行が、トレーター・ユガでは知識が、ドヴァーパラ・ユガでは寄進と犠牲が、カリ・ユガでは贈り物だけが復活させられた」。(Tapa: param Kritayug, Tretayam jnamamuchyate, Dwapara yajnamevahurdanamekam Kalau Yuge)

2. 『ミリンダ王の問い』。証得は、四悉檀、四向四果、四つの分析的洞察、三明、六神通を対象にする。*Manorathapurani*も参照。

3. *Sammahavinodam*, 43-432 では三つの「消滅」が挙げられている。(1)トリピタカ、(2)真理の洞察、(3)実践。

*Papancasudam*, IV.115 と『ミリンダ王の問い』も参照。

4. *Sammahavinodam*, 432 によれば、学習が存続している間は、宗教は堅牢でいる。
5. この四つの浄らかさは、(1)比丘、比丘尼の行動に関わる抑制や制御規則、(2)感覚器官の抑制や制御、(3)清浄な暮らし、(4)四つの要件(衣食住薬)に関わる道義、で構成する道徳に言及するもの。

P194

時の経過に伴い、追放を免れない四種の罪<sup>1</sup>を犯さないよう警戒するだけとなる」

釈尊入滅後の千年間はダルマが大いに広まり、学究も盛んに行われる。この期間中に、ダルマが経典化され、基本的な戒律についての論文や注釈書が数多く作成された。この期間が過ぎると、釈尊が予言したとおりに衰退が始まり、サンガはヒンズー教の改革者の声に耳を塞いだ現状維持と、過去の利得の保守に満足した。

世は諸行無常であることに絶えず思いを廻らせていた釈尊が、自らの教えの中で衰退が広がることは不可避と認識していたのは至極当然であった。釈尊が示唆したとおり、純然たるダルマも人間の生活の中では衰退と劣化は免れない。その真髓が最終的に失われた果てに、弥勒如来が出現し、完全に有効にした状態で再び啓示する。釈尊が述べた、法が効力を発揮する期間と「五つの消滅」が広まる期間がどれほどかについての見解は、識者の間で一致していない。しかし、舍利弗の問いに答えて述べた「五つの消滅」についての釈尊の発言全体を確認した上で、違いを調和させるなら、矛盾はないことが分かる。如来はものごとを混同させない。では続けて読んでみよう。

釈尊「追放を免れない四種の罪を心に留め、犯さないように警戒している比丘が何千何百人もいる間は、正しい行いは消滅しないだろう。そのような比丘の最後の一人が倫理的習慣を断ち切ったとき、あるいはその命が絶えたとき、正しい行いは消滅する<sup>2</sup>。舍利弗よ、これが正しい行いの消滅だ。学問の消滅とは、トリピタカに仏の世界に関する注釈付きの経文がしっかりと存在する限り、学問は消滅しないという意味である。

---

1. 波羅夷罪。比丘は淫・盗・殺・妄の四つの罪(四波羅夷)、比丘尼には更に四つを加えた八つの罪(八波羅夷)から成る、僧団からの永久追放に値する最重罪の総称。

2. 「比丘」の代わりに「人々」にすると、ヒンズー教典の『シュリーマッド・バガヴァッド』に相似することがよく分かる。「人々は金銭をめぐり、大切な近親者に対してすら危害を加えようとするだろう。財産を享受するためには、物質的欲望のためには、自らの親も子供たちでさえも見捨てるようになるだろう。商人は商いでごまかしをするようになるだろう。暮らしで困ったことがないにかかわらず、不正直な手段で生計を得るのが好まれるようになるだろう。カリ・ユガでは、金銭だけが、人の生まれ、振る舞い、良き資質を試す試金石になるだろう。金銭は正義を試す

試金石になる。正義は売買の対象になるためである」

P195

時の経過に伴い、嫡出でなく、ダルマに沿った生き方をしない王が現れ、その大臣などもダルマに沿った生き方をしない結果、王国の住人などもダルマに沿った生き方をしないようになる。彼らがダルマに沿った生き方をしないため、雨は適切に降らない。そのため、作物は豊かに実らず、比丘たちの共同体に必要なものを布施する者は、必要なものを与えられない結果となる。必要なものを与えられないことで、比丘たちは弟子を受け入れることができない。時の経過に伴い、学問は衰退していく。この衰退の中で、『パッターナ』の学究が最初に衰退するだろう。

『ヤマカ』『カターヴァットゥ』『プッガラ・パンニャッティ』『ダートウカター』『ヴィバンガ』『ダンマサンガニ』も、その例に洩れない。『アビダルマ・ピタカ』の学究が衰退すると、『スッタ・ピタカ』についても衰退するだろう。経の学究が衰退すると、『アングッタラ・ニカーヤ』の学究がまず衰退するだろう。『サンユッタ・ニカーヤ』の学究が衰退すると、『マッジマ・ニカーヤ』『ディーガ・ニカーヤ』『クッダカ・ニカーヤ』についても衰退するだろう。

『ジャータカ』と『ヴィナヤ・ピタカ』と併せて記憶しているだけになるだろう。だが『ヴィナヤ・ピタカ』を記憶しているのは誠心ある（比丘）だけになるだろう。時がますます経過するとともに、『ジャータカ』すらも記憶できなくなり、『ヴェサンタラ・ジャータカ』が記憶から最初に薄れるだろう。それと共に、『アバンナカ・ジャータカ』も記憶から薄れるだろう。『ジャータカ』が記憶から薄れると、憶えているのは『ヴィナヤ・ピタカ』だけになるだろう。時がますます経過するとともに、『ヴィナヤ・ピタカ』への学究が衰退するだろう。詩句の一節が人々の間に存続している間は、学問が消滅することはないだろう。信仰心を持つある王が、(硬貨)千枚が入った財布を象の背に乗せた金の棺に入れ、太鼓を都の中で二、三度鳴らすと、こう布告する。『仏が述べた詩句の一節を知る者は誰であれ、この(硬貨)千枚を我が象と共に受け取るがいい』。しかし、一節を知る者がいないことが分かり、(硬貨)千枚を入れた財布を再び宮殿に戻さなければならない。この時から、学問は消滅する。舍利弗よ、これが学問の消滅だ」

P196

しかしながら、上記の中で挙げられている様々な名の経典は、釈尊がこの地上にいた時代には存在していないことが判明している。弥勒如来到来の条件(状況)と時期を物語る釈尊の言葉は、ごく初期の時代から徐々に編纂され、数世紀後に最終的な姿に体系化されたと認識した方がよい。とは言え、ここに引用した言葉の要点は簡単である。如来の教えの遵守と実践はやがては衰退して減退し、すでに今日、大幅に起きていなかったとしても、最終的に消滅する。以下の文がサンガの今日の状況を鋭く描写している。釈尊は25世紀前に見抜いていたのだ。

「時の経過に伴い、最後の比丘たちは、ジャイナ教の世捨て人のように衣と鉢と爪楊枝を携え、瓢箪を托鉢用の鉢になし、前腕や手で抱えるか、紐にぶら下げて歩き回るようになる。時の経過に伴い、『この黄色の衣は何の役に立つのだろう』と考える。そして、一部を切り取って、鼻や耳や髪に貼り付け、農業や交易などで妻子を養いながらさまよう。そして、悪い道徳的習慣がある者たちのために、南方の共同体に贈り物をし、数え切れないほどの果実を得るようになる。さらなる時の経過に伴い、『こんなことをして何の役に立つのか』と考え、黄衣の切れ端を投げ捨て、森で鳥獣を狩り立てる。この時にはすでに外見の姿は消滅している。舍利弗よ、これを外見の姿の消滅と呼ぶ」

- 
1. カリ・ユガでは、生物学上、社会、知性、霊性上での頽廃が人間実存のあらゆる局面で進むことが、ヒンズー教典でしばしば強調されている。『シュリーマッド・バガヴァッド』の次の予言に、上記した仏教の予言が酷似する。「下層の人々は行者のなりをして布施を受け取るだろう。宗教心のない識者が高位から説教するようになるだろう」。『ヴィシュヌ・プラーナ』VI.3.にはこう記されている。「クレタ(サティヤ)・ユガは誠実、親切、献身、慈善の4本柱で支えられている。トレーター・ユガは誠実が抜けた3本柱で支えられている。2本柱のドヴァーパラ・ユガには献身と慈善しかない。そしてカリ・ユガにはもはや、誠実も、親切も、献身もない」。『ヴァーユ・プラーナ』I.8.も参照。

P197

釈尊は消滅の理由と、消滅せずに済む方法も説明している。

「世間に偽のダルマが出現するまで、真のダルマは消滅しない。ひとたび、偽のダルマが出現すると、真のダルマは消滅する。愚かな者たちがここに出現したときに、この真のダルマは消滅させられる。だが、五つのことがダルマの維持と、その清澄さの保持、消滅の防止に役立つ。それは、比丘と比丘尼、優婆塞と優婆夷が、師、ダルマ、教団、修行、禅定に対し、崇敬と恭順の念を捧げながら暮らすことである<sup>1)</sup>

だが、すべてがもはやなされず、今となってはどうにもできない。時期は過ぎた。もはや、外見の姿すらない。釈尊の時代に僧籍に身を置く誓いを立てた人々は、生涯を通してそれを天職としたが、今日、その大半には象徴的な振る舞いにすぎない。市の当局とよしみを結んだり、親を喜ばせるために、3、6、9カ月間のいずれかを僧院で過ごした後に世帯主としての暮らしに戻る。黄色の衣を身に纏い続ける者たちの大半もまた、世俗的な喜びと、釈尊が禁じた果実の味を堪能しようとしている。その応報を、釈尊は警告したが、気にする様子もない。「黄色の袈裟を纏っていて、性質が悪く、つつしみのない者が多い。かれら悪人は、悪行によって、奈落に行く<sup>2)</sup>

釈尊はその上で、教示したダルマの終着の姿とその時期も教えている。

「この完全なる仏陀の時代が5千年であるとき、崇敬と榮譽を受けない舍利は、それらを受けられる場所に向かうだろう。しかし時の経過に伴い、どの場所でも崇敬も榮譽も受けられ

なくなる。そしてこの時代が（忘却）の中に陥る時、すべての舍利があらゆる場所から、すなわち、蛇の住処から、デーヴァの世界から、そしてブラフマンの世界から、菩提樹の大樹の周りに集まり、仏の像を一つ作ると、奇跡の双子のような奇跡を起こして、ダルマを説く。

---

1. 『サンユッタ・ニカーヤ』 II.224. 『シュリーマッド・バガヴァッド』にはこれに類似した部分がある。「盗人の数はこの国で大幅に増加するだろう。ヴェーダでさえも、似非の物質と混合させる邪な者たちによって汚染されるだろう。バラモンたちは、私腹を肥やすことと情欲を満たすことに忙しくなるだろう」

2. 『ダンマパダ』 v.307.

P198

その場に人間は一人もいないだろう。一万界のデーヴァすべてが集まってダルマを聞き、その中の何千もがダルマに帰依するようになるだろう。そして、『見よ、デーヴァたちよ、今日から一週間後、われらが十力の一人は完全な涅槃に達するだろう』と大声で叫ぶ。だが、『その先、われらは闇を迎えるだろう』と泣き嘆く。すると、舍利が熱を発し、跡形も残さず、仏の姿を焼き尽くす。舍利弗よ、これが舍利の消滅と呼ばれる<sup>1)</sup>

さて、すぐ上の引用文の第1文でなぜこの期間であるかと、ダルマが復活する先触れである「奇跡の双子」が何であるかに答える前に、この深遠難解な節で言及されている「舍利」の意味を簡単に説明しよう。当時のヒンズー教徒が、そして現在では遺憾ながら、自らの信者が影響を及ぼしている呪物崇拝を、釈尊が嫌悪していたと信じるなら、舍利とは、迷信深い人たち向けに、今日、様々な寺院の中で多様な品揃えで売られている何らかの小型の手頃な装身具や小物ではなく、経典を意味すると認識しなければならない。以下にその旨が明言され、確証されている。

「そしてまた、舍利弗よ、世界の中でも、この経典が広宣されるその地域は、全世界の神々と人間、邪霊から尊ばれ、崇拝されなければならない。そして、カיתיヤ(聖なる舍利や墓所)のようになるだろう<sup>2)</sup>

釈尊が舍利(カיתיヤ)という言葉を使ったのは、自らの教え(ダルマ)を収めた経典を指すためであったという解釈だけが、この一節の正しい理解をもたらす。さもなければ、釈尊は間違っただけか、おかしなことを言っていたと言われるようになるだろう。彼が教えた法を知って実践することが信者の暮らしから確実に消滅した一方、呪物、護符、そして仏像が、信者の間で間違いなく激増してい

る。そして釈尊がはっきりと予見したとおり、真のダルマへの信仰は消え、偽のダルマが代わりに信仰されている。今日、どこに目を向けても、見られる様相である。『カターヴァットゥ』や『トリピタカ』『スッタ・ピタカ』に息づいていた真のダルマの精神を見ることはもはや叶わない。

---

1. *Anagatavamsa*.

2. 『ヴァジュラッチェーディカー・ストトラ』VIII.15.

P199

そこで釈尊の予言通り、真の舍利たる釈尊の教えが靈性の力強い影響力をその生誕の地、インドの人々の暮らしに及ぼすことを止めた時、舍利(教え)は、セイロン、ビルマ、中国、韓国、チベット、タイ、カンボジア、ラオス、ベトナムなどの他国に向かい、現地の人々の福利のために働き、人の行いの真の基準として彼らから崇敬と栄誉を受けられるようになった。だが、浄らかで穢れなき行いによる<sup>1</sup>、釈尊のダルマにふさわしい真の崇敬も栄誉も、もはや「どの場所」でも払われなくなるだろう、という釈尊の予言が完全に成就したことを、今では真っ向から否定できる人はいない。一方、釈尊はもちろん言及していなかったが、口先だけの偽善や、外見の姿の消滅が、仏教だけでなく、ヒンズー教、ゾロアスター教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という大宗教すべてにおいて、今日、明らかに遍在している。かつては栄光ある比類のないダルマであったものに目を向けると、衰退し混乱し切った様相は一律であり、痛ましい。かつての輝きはすでにない。5千年は続くはずではなかったのか。否、まさにその半分の期間で正しい。ダルマの有効期間はその二分期間であることを、釈尊は明確に予見していた。では、さらに読み進め、釈迦如来が自らの宗教制の期間について阿難に伝える必要があった予言を確認してみよう。

「阿難よ、如来が告知した教説と規律の下に、もし女たちが家庭生活から離れず、家なき者(出家者)にならなかったならば、正法は長く耐え、千年間、存続するだろう。しかし、女たちは今、如来が告知した教説と規律の下に、家庭生活を離れて家なき者になったため、正法は長くは続かず、その存続は500年になるだろう<sup>2</sup>」

---

1. 世親は1500年以上前にダルマ衰退の兆候をすでに記していた。「かの聖賢のダルマは今際の際にあり、この時代は悪徳が猛威を振るう時代である。救済を欲する者は怠ることなく努めなければならない」。興味深いことに、弥勒如来がすぐにも到来することへの期待はこの一節に示唆されていない。引用元である『アビダルマ・コーシャ』の後半に記した自らによる計算から、到来は当時でなく、はるかな未来であることを、世親は知っていた。それは5番目の500年間に終焉を迎えている今である。

2. 『ヴィナヤ・ピタカ』II.253ff.

留意すべき点がある。自らのダルマの当初の純粹さは500年間しか続かないと述べている上の引用節でも、分析的洞察の純粹な証得期間は千年であることを述べる *Anagatavamsa* からの引用節(193頁)でも、この劫が終る前に出現すると釈尊が同じ節の中で言及する弥勒如来は、釈尊入滅後の500年間か千年間のいずれかの終焉時に到来するとは、釈尊は述べていない。女たちは如来が告げた教説と規律の下に出家が認められたゆえ、「五つの消滅」各期間の長さが半減し、このプロセス全体が終了する2,500年(5×500)後に、弥勒如来が出現することが明確に示唆されている。これまでに確認してきたとおり、それは今である。また、漠然とした途方もない時間感覚をもたらすために時に使われ、後世の経典執筆者が不正確に繰り返してきた天文学的に大きな数字のいずれもが、この二つの引用節(両方とも古代のパーリ語の文献だが、後者はパーリ仏典の一部)に記載されていないことも、留意されるだろう。500年から5千年までの、歴史的観点から妥当性ある時間だけが言及されている。ダルマ(宗教)とは歴史的プロセスである。人間というコンテクストにおいての唯一の歴史上の現実である。それゆえ、潮のようなその満ち引き、夜明けと日没は、それが人間にとって意味あるものにとどまる限り、歴史的背景の中に収まるものでなければならない。そして、釈尊がこれらの節の中で告げているとおり、現実的長さに収まっている。

190-191頁で確認したとおり、ヒンズー教徒は、背景とする聖典を基に、ほぼ5千(正確には4,800)<sup>1</sup>年に及ぶ暗黒の時代であるカリ・ユガ(第4の最後の時代)は神の導きを剥奪された期間とはいえ、人類にはあまりに長すぎると主張していたため、カリ・ユガのまさに中点で出現した釈迦牟尼仏をヴィシュヌの第9の化身として受け入れた。釈尊は、ヒンズー教典に含まれるその概念を熟知していた。それゆえ、女性たちが家庭を離れて出家者になり、サンガに入団することを許可した(拒否しようと思えば簡単に拒否できた。また、誰も釈尊の智慧に疑問を持たなかつたろう)上で、この許可をもって、自らの宗教制の期間は半減されたと告知したことで、自らの時代は、インド・アーリヤ人の間で継承されてきた同じ一つの劫の期間内に登場したヒンズーの一連の神の化身たちの宗教制の枠組みの中の重要部分であると明言したのである。

---

1. これも、四つの時代それぞれの期間は190頁の図表3に示す長さで正しいことを確認している。

そうすることで、化身すべてが、そして釈尊自身があくまでも強く説き広めて擁護した累進的な神の啓示の原則の有意義な作用を実証できる、唯一妥当性がある歴史的プロセスの中に、釈尊自らのと、その宗教制の立ち位置を調和させたのである。

それゆえ、*Anagatavamsa* よりも古い『ヴィナヤ・ピタカ』から引用したこの発言(199頁)で、釈尊はカリ・ユガの期間を5千年であるとは述べていない。4千年、3千年、2千年にも言及していない。釈尊は、ダルマは千年の間、存続する予定であったが、サンガへの入団を女性に許可した

ために、500年しか存続しない<sup>1</sup>とだけ述べている。期間の半減だ。5千年も、2,500年に半減した。しかし、この時間は到来し去っていった。ダルマに影響を及ぼす運命にあった状況が、弥勒如来の所在の判明を除いて、すべて生じた。弥勒如来はどこにいるのか。

もちろん、まず最初に、いつ、弥勒如来が出現するかが問われなければならない。どんな状況(条件)が揃ったうえで「いつ」になるかという2部に分けて答えよう。では、第1部として、どんな状況であるかに触れよう。

*Anagatavamsa*に記された節の中でも、ダルマがたどる行程、その夜明けと黄昏、信者と自認する人々の生活の中でその真の意義が最終的に没していく状況と条件を、確実に釈尊自身が予言したとみなすことができる最も完全な発言を、私たちは調査した。今日の世界の状況を調べれば、経典に描写されている「五つの消滅」がすでに起きていることは疑いようがない。概ね世親の時代か、少し後になる今から1500年以上前の時代に、証得の、正しい行いの、そして学問の消滅は起きていたかもしれない。それゆえ、世親は外見の姿の消滅が、その後に舎利の消滅が生じることを危惧していたが、実際には起こらなかった。際立ったある種の規律が僧団(サンガ)の中に存続していたためであった。

---

1. この二つの節でも、殊に、千年間を500年間に二分する『ヴィナヤ・ピタカ』からの引用句に基づき、後世の仏教徒の年代記編者の筆頭格だった世親はその著書『アビダルマ・コーシャ』において、以下の一般方針(『アビダルマ・コーシャ』4.12c.III)に沿って弥勒如来が到来する時を計算した。「比丘と預流(信者)は、世尊入滅後の500年間は正法との結合が強くなる。第2の500年間で瞑想に強くなり、第3の500年間では学識に強くなる。第4の500年間には、贈り物の贈呈だけに忙しくなる」(196頁脚注1から)。この贈り物の贈呈の段階は、ヒンズー経典(マヌ法典)で想像されているような衰退の時代の第4段階とも呼ばれている。「最後になる第5期の500年間は比丘と信者の間に闘争と糾弾しか見られなくなり、純然たるダルマは見えなくなる(消滅する)だろう」。

P202

また、信者の誠意と熱意は別とし、トリピタカに定期的に目を通すことと、形式だけでも従うことは、経文の暗唱と儀式を通じて仏教王国と国家すべてにおいて継続していたことによる。だがこうした古来の仏教国の文化は19世紀前半の西洋列強の猛攻によって完全に破壊された。インドのシッキム州、チベット、ブータン、ビルマ、セイロン、タイ、カンボジア、ラオス、ベトナムはおろか、中国、日本、韓国も例に洩れない。伝統的な生活様式と習律は消滅し、伝統文化と宗教の継承がかかっている若者はこれらを顧みず、西洋からもたらされる新しい知識を習得しようとしている。統合に速やかに向かうこの惑星で生き残るには、市民権と技術についての新しい知識を積極的に身につけることを、彼らは不可欠とみなしている。それゆえ、ダルマの真の高潔さ、その形式と「舎利(経典)経典」は、釈尊が述べた段階が進行するに従って光彩を失い、今では関心の外に置かれている。各段階の長さが『アビダルマ・コーシャ』で500年とされているのは、*Anagatavamsa*と『ヴィナヤ・ピタカ』においての釈尊の発言に合理的な相関性が見出され得ることが根拠にされ

ている。ダルマの実体は見えなくなった。

しかしながら、ダルマに影響を与えたものは人類をも大きく変化させた。このことも、釈尊は正確に見越し、予言していた。『ジャータカ』(J77)で物語られているコーサラ国の王パセーナディと釈尊の対話から、それを伺うことができる。一晩の間に16の別々の夢を見た王は、宮廷に仕えるバラモンたちの夢解釈に失望したが、女王から相談を受けた釈尊に解釈してもらったことでようやく納得した。

- 
1. インドではほぼ千年前に、ダルマは消滅している。仏教自体の衰退、ヒンズー教改革、イスラム教の猛撃が組み合わさったことによる。
  2. 『アピダルマ・コーシャ』4.12c.III.
  3. 'Maha'は偉大さを意味し、"Supina"とは夢である。『ジャータカ』の「大いなる夢」と通称されている。*Mahasupina Jataka* で夢すべてを読むのを勧めたい。
  4. *Rajovada-Jataka, 151*, (女王マリカの夫君) も参照。
  5. 数字の16が繰り返し用いられていることにすでに気付いておられるかもしれない。一つのものの他を凌ぐ優位性を象徴したり、ある側面の偉大さを示唆する。

P203

この二人の対話は古い經典に由来する談話であり、パセーナディ王が見た夢の意味の概念に余剰な要素が付着しておらず、真正性が高い。このジャータカは特に、釈尊の発言であると確実視できる夢の解釈を完全不可欠に紹介した最古の小話であり、その夢のどれもが、釈尊の正法がその自然な経過をたどった末日に起こるべく定められた出来事についての予言である。それゆえ、16の夢の中でも最も説得力がある夢をいくつか紹介すれば、末法期の様相の理解に役立つだろう。

王 「人と神々の世界で最高の人物である世尊よ、過去と現在、そして未来の物事に関するあらゆる可能な知識がその掌中にある御方よ、私の夢は何を伝えているのかを教えてください」

釈尊 「陛下、左様でございます。陛下の夢が何を意味し、何が起こるのかを知ることができるのは、私以外にございません。お教えしましょう。まず、陛下の夢をお聞かせください」

王 「世尊よ、私が次のような夢を見たのはどうしてなのでしょう。4頭の黒い雄牛が闘志を漲らせながら、四方から宮廷の中庭にやって来たように思います。闘いを見ようと人々が群がり集まるうちに、大群衆となりました。しかし雄牛たちは、怒気を含んだ唸

り声をあげて闘志を見せるだけで、最終的にまったく闘わずに去っていきました。これが私の最初の夢です。どうなるのでしょうか」

积尊 「陛下、その夢により、陛下の時代にも私の時代にも問題が起こることはありません。しかし今後、王たちが出し惜しみをして私利を貪り、民衆が不正を働き、世界が変質して善が衰え、悪が勢いを増し、世界が後退する時代には、天から雨は降らず、嵐の足はもたつき、作物は枯れ、土地には飢饉が起こるでしょう。その時、天の四方から雨が降るかのように雲が集まり、女たちが収穫物が濡れるのを恐れて日干しに広げていた稲や作物を急いで屋内に運ぶと、次に男たちが鋤と籠を手にして土手を築くために出て行きます。雷鳴が轟き、稲妻が雲から光り輝きますが、夢の中の雄牛が闘わなかったように、雲は雨を降らせることなく去っていきます。これが夢の結果です。しかし、陛下に害がもたらされることはありません。見られたこの夢は、未来に関するゆえです。バラモンたちが言ったことは、自分たちの生活の糧のためにすぎません。

P204

自然災害の頻度があらゆる国土で絶えず高まり続けていることを認めながら、現代こそが、この夢で語られている状況が当てはまる時代であることを疑問にする人はいない。百年前には到達不可能だった現代の技術は、この惑星の平衡を崩し、その有限の資源の乱獲の主因を成す一方で、微妙な匙加減で均衡を保たれていたこの惑星の生態系と、莫大な人口増加(過去 60 年間でそれ以前の 3 倍に増加)を完全に度外視している。にもかかわらず、急増する自然災害の真因ではない。真因は、唯一の主体である人間を悩ませている霊的な病に他ならない。人間は、大惨事を引き起こせるほどの能力をもってあらゆる手段で思いのままにこの惑星を痛めつけてきたが、とりわけ、枯葉剤を始めとする化学兵器の使用に至っては誹りを逃れない。

尽きせぬ霊的な源泉から切り離され、努力に値するあらゆる永続的な目的に対し完全に冷笑的な見方をするようになった人間は今、社会的環境とも自然環境とも完全に調和を失い、旺盛な貪欲を満たすことだけに没頭している。過去と未来への負債を完全に無視し、この惑星で運命を共有する他の生物の脅威になっているが、同胞と自らの存在をまず危ういものにしてている。

积尊の時代から 20 世紀の始めまでに記録された旱魃、飢饉、気象異常、大量餓死や大規模環境破壊で、この惑星の全地表上で私たちが現在経験していることに比較できうるものがあつたとは示唆されていない。従来から穀倉地帯としてみなされてきた国土ですら、今では枯渇している。

王でも平民でも、利己的で邪な行いを程度さまざまでもしでかしている者たちすべてが、その所業により、积尊が自らの正法が衰えるときに広く行き渡る運命にあると言い表した状況に覆い包まれている。

P205

それゆえ、釈尊の予言を過去の事象に当てはめようと、いかに熱心に探究しても、いつの時代であったかは割り出せない。現在、私たちを悩ませている諸々の問題に匹敵する問題は過去の時代には起きていなかった。しかも、脅威として迫り来る可能性はいよいよ募っている。周囲に見て取れる大惨事をもたらす手段と動向、そして破壊的なその影響をこの惑星全体に及ぼし得る技術は、現代以前には存在していなかった。これら要因は20世紀に入ってから初めて存在するようになった。この現代こそが、諸々の状況が発生するだろうと、釈尊だけでなくアーリヤ系の化身である神の顕示者全員が予言した時代である。

釈尊は第1の夢の意味を解釈してから、第2の夢を語るよう王に依頼した。

王 「世尊よ、2番目の夢はこのようなものでした。幼樹と灌木の芽が大地を破って2尺ほど伸びただけで花が咲き、実を結びました。これが私の2番目の夢でした。どうなるのでしょうか」

釈尊 「この夢は、世が頹廃し、人の寿命が短くなる時代に成就します。来るべき時代には情熱が強まり、若い娘たちが男たちと一緒に暮らすようになり、女たちのように妊娠し、子供を産むようになります。花は娘たちの奔放さを、果実はその子孫を象徴しています。しかし、陛下、恐れることは何もありません。偉大な王よ、3番目の夢を教えてください」

第2の夢で予知された状況が惑星規模で、殊に現代以前の釈尊の生誕国で成就する可能性はまずあり得なかったことを指摘することはここでも重要である。こうした奔放な生き方をいとも簡単に可能にする手段は、20世紀前には存在していなかった。

あらゆる制約を忘れ、あらゆる道德律を全面的に放棄し、経口避妊薬、避妊具、20世紀始めには科学で判明していなかった性感染症の治療薬といった新たな発明の助けを借りた自由社会の現況が今、釈尊が予見した状況を誤りなき正確さをもって惑星規模で完全に成就している。

P206

王 「牝牛がその日に産んだ子牛の乳を飲んでいるのを見たように思います。これが3番目の夢でした。どうなるのでしょうか」

釈尊 「この夢もまた、年長者に敬意が払われなくなる、来るべき日に初めて成就します。未来の男たちは義父母に敬意を示すことなく、自分たちで家督を管理し、老人に食事と衣服を与えますが、与えることに喜びを感じないなら、差し控えるでしょう。そうなれ

ば、貧窮し自立できない老人の暮らしは、自分の子供たちの好意に左右され、生後一日の子牛の乳を飲む大きな牛のような存在になります。しかし、陛下、恐れることは何もありません。4番目の夢を教えてください」

西洋での高齢者の家庭は、年長者への敬意と親への感謝という伝統を強く吹き込まれていない文明化社会の病気を体現してきたが、過去数百年間の長きにわたって年長者への敬意と親への感謝という伝統を擁護してきた東洋も、今ではその轍を踏んでいる。西洋の技術と習俗だけでなく、西洋の大国の大半に浸透し、その構造の中に人類の過半数を包み込んできた国家覇権と国家社会主義という新たに考案された理論の侵食を受け、遺憾にもその伝統的価値を放棄し、曾祖父の時代には想像すらつかなかった、若者が父世代を凌駕し支配するという様相が現在示されている。産業革命の生みの親となった過去百年間の科学技術上の発見と、産業革命に内在する革命的な政治哲学がその支配を可能にした。このような状況が起きたのは19世紀以降だった。それゆえ、予言が成就したのはそれ以前の過去の時代ではない。

王 「世尊よ、男たちが一団を組ませた頑強な輓牛から輓を外し、幼牛たちに荷車を引かせる夢を見たように思います。幼牛たちは、課せられた役を果たせるだけに成長していないことを立証するかのごとく、引くのを拒んでじっと立っているだけでした。荷車は道で立ち往生しています。これが4番目の夢でした。どうなるのでしょうか」

釈尊 「この夢もまた、未来の不正な王の時代になるまで成就しません。来たるべき日に、私利を貪り、出し惜しみする王たちは、先例に詳しくて方便に富み、執務をやりこなせる賢明な領主に尊意を表さず、賢明で法律に詳しい年配の議員を法廷判事に任命しません。

P207

いいえ、非常に若く愚かな者を尊び、法廷の裁判長に任命するでしょう。政治的手腕にも実用的な知識にも欠けている愚かな若輩どもは、その栄誉に見合う重荷を背負うことも統治することもできません。そしてその無能さゆえに、公職の輓を投げ捨てるでしょう。そこで王たちは、年老いた賢明な領主たちに援助を請います。領主たちは、あらゆる難題に正しく対処することができても、自分たちが候補から外されたことを覚えています。『私たちには関係がないことです。私たちは部外者です。内輪にいるあの若者たちに対処してもらってください』と言い渡すと、援助の手を差し伸べるのを断り、関与しません。その結果、あらゆる土地で王たちを破滅が襲うでしょう。重荷を背負えるのは一団を組んだ頑強な雄牛たちだけであるにかかわらず、その雄牛でなく、力量不足の幼牛に輓をかけた様相と変わりません。とはいえ、何も恐れることはありません。5番

目の夢を教えてください」

この予言は、賢明で手腕を幾たびも試されてきた顧問を脇に押し除け、代わりに、英知と経験不足を媚びへつらいで補って自らのエゴを強めてくれるおべっか使いに信頼を置く道義心の低い王や指導者が所在する場所ではどこでも成就していると言われかねない。だが、手腕を試されてきた真の顧問の地位とその賢明な忠告の源の強奪者と積尊が表現する、ひっきりなしに媚びへつらう典型的人物に信頼を置く強大な力を持つ者たちにその愚かさを気づかせる機会が世界中どこでも見られるようになったのは近代になってからである。

王 「世尊よ、左右に口がある馬を見ました。両側から飼料が与えられ、両側の口で食べていました。これが5番目の夢でした。どうなるのでしょうか」

積尊 「この夢も、不義で愚かな未来の王たちの時代に初めて成就します。王たちは、不正を働く貪欲な者たちを判事に任命します。卑しく愚かで善を軽んじるこの者たちは、裁きの座に就くときも、原告、被告の両側から賄賂を受け取り、二つの口で飼料を一度に食べる馬のように、二重の贈賄で満たされるでしょう。とはいえ、何も恐れることはありません。……番目の夢を教えてください」

P208

この予言は、普遍的になった近年の現象を実に写實的に描いている。政府や、民間の事業、産業のあらゆる職業に就く人々誰もが倫理や警戒心はどこ吹く風やら「左右の口」から食べることに臆面もなく勤んでいる。つまり、賃金他の定期受給する給与に加え、贈賄やリベート、残業時間の狡猾な操作や、実際には存在しない兵士や作業者の名を連ねた偽リストの作成による賃金の不正受給、乗用車や事務所他の未認可使用に耽溺している。

王 「世尊よ、ある男がなんている縄を、自分の足元に投げ下ろしました。座っている縁台の下には空腹の雌ジャッカルが寝そべり、男がなんでいく縄を食べ続けています。これが私が見た光景です。7番目の夢です。どうなるのでしょうか」

積尊 「この夢もまた、未来まで成就することはありません。来たるべき日に、女たちは男に欲情し、強い酒と華美な装飾品を欲しがり、海外を漫遊し、この世の喜びを追い求めるようになるでしょう。女たちは奸計を巡らし、浪費し、愛人たちと強い酒を飲み、花輪や香水や香油を身にまとい、直ちに取り掛かるべき家事さえも顧みず、愛人を守るために、外壁の高い位置にある裂け目すらも見張り続けるでしょう。また、元気づけるため

に、明日蒔くべきとうもろこしの種を打ち砕いて与えるでしょう。このようにして、畑や牛小屋で夫たちが懸命な労働で勝ち得た蓄えを略奪し、気の毒な夫たちの資産を貪ります。言ってみれば、縁台の下にいる空腹のジャッカルが、なわれていくロープを食べ尽くしてしまうようなものです。とはいえ、何も恐れることはありません。8番目の夢を教えてください」

現代社会に重要不可欠な原則である「両性の機会平等」を無節操に行使した様相が実に写實的に描写されている。靈的な意味を把握していないがために、この原則を両性の絶対的平等という荒唐無稽な概念と同列視し、不可能であるにもかかわらず、一体視が可能であることを証明しようと戦闘的なまでに躍起となっている諸団体によって完全に乱用されている。その結果、性的関係、婚姻関係を、そして何よりも社会的関係性を確実に歪ませることで、成熟した文明づくりの最も重要な担い手である当人の子供たちに影響を及ぼしている。

P209

この一節に大まかに目を通すと、記されたその様相は、王が見た第2の夢で表された状況とは違い、多くの時代の多くの社会に当てはまるが、「海外を漫遊し」「愛人たちと強い酒を飲み」「直ちに取り掛かるべき家事さえも顧みず」「夫たちが懸命な労働で勝ち得た蓄えを略奪し」などへの批判をより綿密に調査すると、過去のどの社会にも当てはまらないことが分かる。かと言って、売春宿の状況に転嫁させることはできない。売春婦たちは稼ぎを念頭に置いた被雇用者であり、平気で浪費したり、「(夫がいると仮定するなら)夫たちが懸命な労働で勝ち得た蓄えを略奪」するために宿に身を置くわけではないからである。しかも「直ちに取り掛かるべき家事さえも顧みず」という表現が、売春婦や独身女性ではなく、ほんの近年まで模範的美徳である貞操の象徴として社会からみなされていた、主婦であり、妻である、母という立場にいる女性を意味していることに疑いの余地はない。だがもはや過去の話である。この夢もまた、放蕩的で無節操な時代である現代においてほとんど世界共通して見られる症候群を実に的確に描写している。

それでは、ここで、パセーナディ王が見た第8と第9の夢を同時に取り上げよう。この二つの夢は補完し合うことで、人類を現在悩ましているもう一つの悪を描き切っている。

P210

王 「宮廷の門の一つで、縁まで満杯の大きな水差しが多くの空の水差しの中に置かれているのを目にしたように思います。そして、四方八方から、四つのすべてのカーストの人々が絶えずやって来ては、片手桶で水を汲んで運び、満杯の水差しに注いでいました。そのため水は溢れて流れ去っていきました。しかしそれでも、誰も空の水差しには

一瞥もせず、水が溢れ出る水差しに構わずに注ぎ続けます。これが8番目の夢でした。どうなるのでしょうか」

釈尊 「この夢もまた、未来まで成就することはありません。来るべき日に、世界は衰え、王国は弱体化し、王たちは貧しくなり、吝嗇になります。何よりもまず、国庫には10万枚の貨幣しか残らなくなります。この困窮ゆえに、王たちはそれぞれの国民すべてを働かせるようになります。重労働を課せられた国民は王のために自らの仕事を放置し、穀類と豆類の種を撒き、目を配り続け、刈り取り、脱穀し、貯蔵しなければなりません。王のために、砂糖きびを植え、製糖機を造って運転し、糖蜜を煮詰めなければなりません。王のために、土地を花園や果樹園にし、果実を集めなければなりません。そして、種類さまざまな農産物を集めると、自分たちの家の空の納屋にはほとんど目もくれず、王家の庭師たちに溢れんばかりに差し出します。空の水差しには目もくれず、満杯の水差しにさらに水を注ぐようなものです。とはいえ、何も恐れることはありません。9番目の夢を教えてください」

王 「世尊よ、5種類の蓮が生い茂る、緩い勾配の堤に囲まれた深いため池を目にしたように思います。四方から二本足や四本足の生き物が水を飲みに池に集まってきました。深い中心部は濁っていましたが、さまざまな生き物が降りていく縁部の水は澄み、きらめいていました。これが9番目の夢です。どうなるのでしょうか」

釈尊 「この夢もまた、未来まで成就することはありません。来るべき日に、王たちは道義を守らなくなり、自分の意のままに快楽を求めて支配し、法に則った正しい裁きを行わなくなります。王たちは、富を飢え求め、賄賂で肥え太り、民には慈悲も愛も憐れみも示さず、獐猛で残酷になり、臣民を製粉所の砂糖きびのように圧搾し、手元にわずかしか残らないほどの重税を課して富を蓄えます。税を払えない国民は村や町などから国境地帯に逃避します。国土の中心は荒れ果てる一方、国境地帯は民衆で満ち溢れます。水は池の中心では濁っていても、ほとりでは澄んでいる夢の情景と一致します。とはいえ、何も恐れることはありません。……番目の夢を教えてください」

P211

上記した二つの夢は、富者はさらに富み栄え、貧者はさらに貧困に喘ぐ、という言葉をもさに言い表している。多くの国民が尋常ならぬ率で課税されている。パワーブロック、既得権益、買収されたロビイスト、そして政府や国民の利権の管理者の仮面を被った紛れもない強盗が、社会の中で最も善良な地の塩のような民から生計手段すべてと自尊心のほとんど剥ぎ取ることで、正義と導きの源泉たる伝統から追いやり、居住不向きなさらなる遠隔地に駆逐した。民はそうした場所で日々を辛うじてやりくりしている（釈尊による9番目の夢の解釈は都市の荒廃を適切に言い当てている）。不正手段で肥え太る狼たちの不正は止まることを知らない。しかも、異人の侵入と脅威への

恐怖を吹き込んで、より強靱な防壁を築き続け、気の毒な犠牲者たる国民への支配を強化し、費用がさらに嵩む新たな軍備と、より大きな犠牲があくまでも必要であるという主張を正当化する。すべては安全保障を名目にした、政府や宗教、ビジネスや階級、いずれの分野であろうと、節操を失くした指導者たちの保全とその飽くことなき貪欲の維持のためである。かくなる指導者たちが障壁の高さ低減や、一部の特定の犠牲者を他人類から切り離す物理的・心理的防壁を撤廃しようと努めることはない。ましてやそのために働くことはない。それゆえ、長年、犠牲にされてきた人類の鬱積した怒りが頂点に達し、その一体性を長期間妨げてきた障壁を打ち砕くのも時間の問題である。そうなれば、聖職者も政治家も、富者も強者も、誰も彼もが、気づけば、自分たち自身で造り上げている共同墓地にいつの間にかに埋葬されていることだろう。彼らを見限り、古来の恐れと偏見の足かせから解き放たれた多数の人類は最終的に、純粋で人類の教導に完全に即する再発見されたダルマの道をしっかりと踏みしめることで、国粋主義、人種差別、階級主義、派閥主義、そして最後に大事なこととして物質主義から解放され、普遍的な喜びと幸福の新たな時代へと向かう。では、魅惑的なもう一つの夢に進もう。

王 「世尊よ、酸っぱいバターミルクが、硬貨 10 万枚の価値がある貴重な白檀と物々交換されているのを目にしました。これが 11 回目の夢でした。どうなるのでしょうか」

釈尊 「この夢もまた、未来まで成就することはありません。私の教説が衰えていく来たるべき日には、貪欲で恥知らずな信徒が多数現れ、糧を得るために、貪欲を戒めた私の言葉をそのまま説くでしょう。糧のために戒めを破り、異端の教義を支持する側に立つ以上、説教をしても涅槃に至らせることはできないでしょう。

P212

いや、彼らが説教をするときに考えるのは、立派な言葉と甘い声で、高価な衣服などを贈らせるように仕向け、布施する気にさせることだけでしょう。また、街道や街角、王宮の門前などに座る者たちは、金銭のため、いや、単なる硬貨のカルシャパナや半カルシャパナ、パダやマスカのために、背をこごめて説教するのです。こうして、酸っぱいバターミルクのために硬貨 10 万枚の価値のある貴重な白檀を売り渡す者のように、糧や衣服のため、あるいはカルシャパナや半カルシャパナを得るために、涅槃に至る価値がある私の教説を売り渡すようになるでしょう。とはいえ、何も恐れることはありません。……教えてください」

様々な経典とマントラの体裁だけの詠唱が行われる傍らで、聖句を暗唱しながら、大量破壊兵器に聖水をかけるという、上記した夢が描き出す状況をはるかに凌駕する現実が起きていることを述

べる以外、コメントは必要ない。経典の言葉が由来する神の顕示者たちが伝えようとしていた生命と愛はここには微塵もない。

これらの夢を特に全体的に捉えると、大変な時代である現代を悩ませている症候群をつぶさに描き出していることが分かる。大切にされてきた原則と制度のことごとくが、知識とその成果のすべての様相が、作用と取組みのすべてが今、土台から蝕まれて正道を外れ、予備段階の小競り合いから発展した致死の闘争の手段にされている。生命を取り戻す仙薬たる純然たるダルマを欠如し、病んだ人間精神から生まれる最終闘争は、どんなに大量の流血を伴おうと、世界中に広まったこの病の痕跡のことごとくを消し、人類の実り豊かな存続を唯一可能にする倫理のバランスを必ずや回復させる運命にある。

さて、想像力を引き伸ばして歴史を調査研究すれば、上記した予知夢のうちいくつかは、別の時代の人々の経験であったとする解釈は可能である。しかし、パセーナディ王が一晩の間に連続して見たことに照らし、全体として一つのものとして捉えると、16の夢すべてが対象とするのは現代という私たちの時代しかないという結論に行き着かざるを得ない。

P213

過去 150 年の間に、それ以前に判明していなかったものが、科学によって数々発見されるようになったことで、パセーナディ王の夢のことごとくが完全に成就した。しかし一方では、頽廃化しているこの時代がさらに進めば、夢の様相がさらに色濃く現れてくる、それゆえ、夢についての釈尊の予言が正確に成就するのは漠然とした未来である、と声を大にして主張する人もいない。だが、それはできない。そのような主張が誤謬となるのは理由が二つある。まず、不確かな未来についての推測を主張の根拠にはできないことに起因する。未来は現在と様相が異なることは確実でも、必ずしも悪化するとは限らない。第二に、予言は基本的にダルマの消滅、人間社会の道徳的靈的価値観の死を示唆する。それら肯定的価値観とは対照的な衰退と頽廃という否定的な力の浮上が16の夢に如実に描かれている。夢は生から死、昼から夜への変化を予知している。それゆえ夢の成就が起きるのは変化する時点以外に考えられない。その時点を過ぎて起こるとは考えられず、また意味がない。死者がより死者らしくなったとか、夜の闇が深まったと言っても無意味であるのと等しい。死後に腐敗し朽ち果てても、別段に死の新しい様相ではない。死が新たな状況や基本的変化を帯びるのは、生と比較したときに限定される。死には生が、夜には光がないように、死も夜も、明るい側面の欠如に起因する。

それゆえ、パセーナディ王の夢に暗示されている予言が明白に成就し、ダルマの衰退に影響を及ぼす、釈尊が予知した「五つの消滅」という状況が、現代という懐疑的な時代に今、存在していることに疑念の余地はない。ダルマだけでなく人類のこうした状況の成就是過去いかなる時代でも不可能だった。なぜなら、社会的病という現代の脅威の除去と、それにまつわる汚名の返上が現状でも不可能であるように、全く手に負えない不品行と頽廃を惑星規模で行き渡らせる科学技術手段は

前世紀には入手不可能だった。道徳が衰退し、終末に今、近づいているこの現代に居場所を見出している私たちは、この歴史的プロセスで格別な意義を目の当たりにするに違いない。このプロセスは私たち一人ひとりに二つの道を開いている。一つがその作用からの撤退、もう一つは再生のプロセスに従事する道である。世界の再生を早めるために躍動的に働けるよう私たち自身を変革することで、このプロセスは必然的に追従する。

P214

本書において、純然たるダルマの最終的な消滅を「五つの消滅」の概要説明において釈尊が予言していたということと、パセーナディ王がみた16の夢に引喩され、釈尊が解釈した状況すべてが収束し完全な成就に向かう時代は過去百年間にわたる私たちが生きるこの現代であると主張してきたが、この二つの主張に相関性があることに、読者は留意していただきたい。この相関性は拡張され、アーリヤ系のもう一人の化身であり、釈尊の時代より百年前にイランに現れたゾロアスターの予言にも及び、『ジャーマースピ』に記録されている。劫が最終的に消滅する時代、闇に光が最終的な勝利を収めるために、約束された御方が再来するのはいつになるかを尋ねる義理の息子のジャーマースプの質問に、ゾロアスターはこのように答えた。「ジャーマースプよ、ロウソクなしで壁に触れるだけでランプが灯り、馬なしで馬車が走り、鳥のように人が飛ぶとき、ジャーマースプよ、その時が来たことを知れ」。そこで、もう一つの独立した出典から、1万2千年間の「吉祥なる劫」最後の時代であるカリ・ユガにおいて、化身の顕現、すなわち仏陀の出現の時を特定しよう。有人飛行を含む上記した三つの条件すべてが、ゾロアスターが予言して以来ほぼ2,700年という長い期間の中で初めて劇的に満たされたのは、19世紀後半だった。

---

1. 『ジャーマースピ』(ゾロアスターが視た幻影)。ゾロアスター教最古の黙示録的教典の一つだが、最終的な形によりやく整えられたのは、ササン朝ペルシャが崩落して間もない1300年以上前の頃だった。

2. 壁スイッチで点灯させる現代の電気照明以上に適切に描写があろうか。

3. 弥勒如来の到来に関する舍利弗の釈尊への問いに形式が近似している。これらの予言は偶然の一致ではない。セムの系譜による神の啓示には、同一視できるしるしが見出せるからである。そのごく一部を紹介する。

- ✓ ヘリコプター：「見よ、彼は雲のように上ってくる。その戦車はつむじ風のように」『エレミヤ書』4:13.
- ✓ 飛行機：「人々にわれらの頭の上を乗り越えさせられた」詩篇66:12, 「あなたはわたしを揚げて風の上に乗せ」『ヨブ記』30:22.
- ✓ 打穀機、または蒸気シャベル：「見よ、わたしはあなたを鋭い歯のある新しい打穀機とする。あなたは山を打って、これを粉々にし、丘をもみがらのようにする」『イザヤ書』41:15.
- ✓ 電信：「あなたはいなずまをつかわして行かせ、『われわれはここにいる』と、あなたに言わせることができるか」『ヨブ記』38:35.

- ✓ 潜水艦：「あなたは人を海の魚のようにする」『ハバクク書』 1:14.
- ✓ 自動車走行と高速道路：「戦車はちまたに狂い走り、大路に飛びかける。彼らはたいまつのように輝き、いなずまのように飛びかける」『ナホム書』 2:4.

P215

さて、ダルマが消滅する時代の状況に関わる釈尊の予言と、予言に関連する歴史上の年代の計算の調査を通じ、古の時代から約束され、長く待望された弥勒如来の到来は確実に生じたと結論づけることができる。しかも、実に近代のことであった。だが仏教に対して公正を期すには、いつ到来したかの正確な情報に関し、釈尊の発言と確実にみなせる重要な言葉が経典に記されていると述べなければならない。しかしながら、釈尊自ら主張したヒンズー教の化身の一人という観点から、釈尊を仰がないのであれば、弥勒如来が実際にいつ到来したかをより高い精度の正確さで計算する必要はなく、計算したとしても望む結果はおそらくもたらされないだろう。これは明らかである。釈尊を、インド・アーリア人の中から順次出現した化身である、マヌ、ラーマ、クリシュナの系譜を継ぐ神の偉大な教師の一人として観念して受け入れることができず、代わりに、彼らとは違う特異の存在とみなすなら、弥勒如来の正確な出現時を知らされても困惑するだけだろう。ヒンズーの教典ですでに示されている化身たちの出現時を比較し相関づける根拠に留意しないなら、出現時に関する予言の解釈を試みても途方に暮れるのは不可避であり、本書ですでに提示した空想域にある不条理なまでの莫大な数に向かって計算していただくしかない。そして本書では、約束された者、カルキの登場で最高潮を迎える現在の劫に触れたヒンズー教の算出方法に戻る。すでに確認したとおり、カルキは弥勒如来に他ならない。

クリシュナはドヴァーパラ・ユガを締め括る接合期に生き、死去した直後に暗黒時代であるカリ・ユガが開始した。カリ・ユガは前後の二つの接合期を合わせてほぼ4,800年間続くと定められ、釈尊はその中間点で出現することが教典で明言されている点に戻ろう。カリ・ユガがすでに終結しているなら、その正確な開始時と終焉時はいつであったかという問題を今、解決させなければならない。プラーナ文献には、天文学によれば、月、太陽、そして木星がかに座(ヒンズー教では「Kirk 座」と呼ばれる)で一直線に並んで出現する時に、カリ・ユガは終焉し、新たな劫であるサティヤ(クレタ)・ユガが開始すると記されている。

P216

Yada Chanrashch Surayashch Tatha Tishayovrahaaspati (月、太陽、そして木星が再び) Ek Rashayo Sameshayante Tada Bhawati Tat Kretam (一直線に並ぶとき、吉祥なるクレタが始まる)<sup>1</sup>.

この三つの天体が一直線になったのは、ヴィクラマ<sup>2</sup>暦2千年のシュラワン月の Amawashya (新月)の正確な 17 Ghares 53 Pals 時であったことが、ヒンズーの学術研究者たちからほぼ総意を得

ている。接合期を合わせてカリ・ユガが完了したこの日を仏暦に置き換えると仏暦 2486 年に、西暦に置き換えれば 1943 年 8 月 1 日正午に当たる。それゆえ、クリシュナが死去したのは、西暦 1943 年を、カリ・ユガの全期間 4,800 年遡った紀元前 2857 年となる。釈尊が入滅(紀元前 543 年 = 仏暦元年)した 2314 年前にあたる。カリ・ユガを締め括る接合期の開始時は、先に参照した『カルキ・プラーナ(3.5.13)』によれば、仏暦 2486 年(西暦 1943 年)の時点から 400 年間に単純に遡るだけで簡単に特定される。すると、仏暦 2086 年(西暦 1543 年)、ヴィクラマ暦 1600 年となる。そして再び、教典に記された伝承と予言に従うと、ラーマがトレーター・ユガの接合期に、クリシュナがドヴァーパラ・ユガの接合期に出現したことが判明しているように、カルキ(弥勒如来)の出現はカリ・ユガを締め括る接合期であることも、教典で予め記されている。それは今しがた確認したように、仏暦で 2086 年から 2486 年までの間、西暦で 1543 年から 1943 年までの間となる。

*Anagatavamsa* に記されているように、ダルマが衰退していく全期間を 5 千年にして(197 頁)から、『(199 頁)ヴィナヤ・ピタカ』で女性の出家を認めたことで、5 千年を半減した 2,500 年にした釈尊自身の発言に注意を向けると、カリ・ユガ終焉との完全な相関性が確認される。それゆえ、釈尊が明言した予言に従い、この「吉祥なる劫」の終わりに弥勒如来が出現する必要があった。

---

1. 『バーガヴァタ・プラーナ』

2. ヴィクラマーディティヤは、インドの伝説的な王。仏暦 487 年(西暦紀元前 56 年)に即位し、ヴィクラマ時代を公式に開始した。即位日はヒンズー教徒の間では新年が始まる日"Divali"と定められ、遵守されている。"Divali"は"Deepavali"(群れ集まる光)の訛り語である。この日は太古の時代にラーマが追放から帰還するなり即位した日であり、ヴィクラマはそれゆえに、自らの即位と時代を開始するのにふさわしいもっとも吉祥な日として選んだ可能性が高い。したがってはるかに時を遡る古代の予言と、現代が、同じ重要な日を介して相関している。

P217

ヒンズー教典でも、ヴィシュヌの 10 番目の化身であり最後の顕示者であるカルキ・アヴァターラの登場についてこのことが確認されている。

Mlechhanivahanidhane kalayasi karavalam

Dhumaketumiva kimapi karalam

Kesava dhrita Kalkisareera

Jaya Jagadeesa Hare……<sup>1</sup>

無宗教と悪徳が蔓延り、ダルマが消え去り、人々が獣のように最低の悪徳、邪悪、放蕩に沈み、躍起となって滅ぼし合うカリ・ユガの終焉時<sup>2</sup>に(釈尊自身の「五つの消滅」の記述といかに同一であるかに注目されたい)、ヴィシュヌが白馬に乗ったカルキとして燃え盛る流星

のごとく登場し、炎の剣を振り回しては、農夫が新しい作物のために雑草を容赦なく刈り取って整地するように、何百万もの邪悪な者たちを斬り倒すだろう。地位、信条、性別に関係なく、誰も免れることはできず、救いは信仰、美德、慈善、愛によってのみ決まるだろう。

この根拠たる記述と、算定された年を基に、弥勒如来がいつ到来したかを正確に特定しなければならない。上述の計算からもはや明らかになったとおり、弥勒如来は確実に出現した。『カルキ・プラーナ』には次のように記されている。クリシュナはこの世の人生を終えるなり、瞑想の中で絶対者に意識を強く集中させながら霊的な恍惚状態へと入り、「この瞑想と断食は、12年と12カ月の期間を経て初めて破られた」。

Evam Vritate Dvadshaude Dvadashyam Parnadine

Snatu Kamah Samudreham Bandhubhi Sahito Gatah.

——そして、ヴィシュヌの8番目の化身であるクリシュナは、「兄弟と一族の男たちと共に大海まで来ると、その中で水浴した」。これは、神の顕示者である化身が姿を消し、兄弟、親戚、使徒たちと共にもう一度、人類という大海の中に入るために、カルキ（弥勒如来）として再び姿を現す期間を象徴的に意味している。この格別な予言は、弥勒如来の誕生にまつわる逸話で確認するように、比喩的な意義が非常に大きい。では計算に戻り、教典に記されている12年と12カ月が、クリシュナが死去し、劫の終焉者であるカルキとして到来するまでのどれほどの期間に換算されるかを算出しよう。

---

1. 『ギーター・ゴーヴィンダ』

2. 釈尊もこの期間を *Anagatavamsa* で確認している(192頁)。「この同じ劫が最後まで駆け抜ける前に、マイトレーヤ（弥勒仏）が現れるだろう」

P218

教典では、「年（12太陽年）」の計算根拠を「月（12カ月）」の計算と区別している。この「月」は、太陽年を12分の1にした太陽月でなく、太陰月でなければならない。そうでなければ、単に13年と教典で言及していただろう。実際に教典にはそのように記されていない。理由は明白。古代のヒンズー教徒が使用していたのは太陰太陽暦だった。

クリシュナがこの世からアストラル界に移行するなり瞑想を開始し、神聖な恍惚状態の中で上記した期間を過ごした後に、ヴィシュヌの第10の化身であるカルキとして人類のさなかに登場する、という教典に記された内容は、宇宙時間の次元における神聖な出来事に関することは明白で



Kalap-Gram Ma Sadhya Vidmi Satpasi Iswhitam

Tatha-Avataram Vijyay Vyasat Satyavati Sutat

Pratixya Kalam Laxabdam Kali Prapt Stawantikam<sup>2</sup>.

絶対者についての瞑想にアストラル界で耽っている伝説上のカルキについて、ヨギのマル<sup>3</sup>が述べた言葉である。これを訳すと、以下のような意味になる。

私は、瞑想に入っていたカラプ村で、サティヤヴァティーの息子で勝者ヴィヤーサ<sup>4</sup>から、あなたの顕現についてを知った。そして、カリ・ユガの待機期間の(開始から)十万年が完了する直後にあなたに遭遇した。

カリ・ユガの待機期間とは、前後二つの接合期のことであり、先触れ期も締め括り期も同じ 400 年間であると判明している。カリ・ユガが開始する直前の、かつ、ドヴァーパラ・ユガを締め括る接合期に、クリシュナが出現したように、カルキ・アヴァターラも新たな劫のクレタ・ユガが開始する先駆けとなる期間に出現することが定められている。したがって、予言に関連するカリ・ユガの接合期とは、締め括る 400 年間、すなわち仏暦 2086 年(西暦 1543 年)から仏暦 2486 年(西暦 1943 年 8 月 1 日)の 400 年間を指している。

---

1. 216-23 頁に載せたヒンズー教典からのサンスクリット語の引用の出典：Prakash Narayan Mishra 著, *Kalki, Avatar Ki Khoj*(カルキ・アヴァターラを求めて). Jawahar Electric Press, Agra-3, India, 1972.

2. 『カルキ・プラーナ』 3.5.

3. ラム(日種のイクシュヴァーク)から 21 代目の子孫と想定されている。

4. クリシュナの教えを具体化した聖典『バガヴァッドギータ』の伝説的編纂者。

P220

さて、10 万太陽日を太陽年に変換(10 万を 365 で割る)すれば、カリ・ユガを締め括る接合期においてカルキが出現する正確な年が得られる。算出した 274 年に 2086 年(西暦 1543 年)を加えると、仏暦 2360 年(西暦 1817 年)になる。太陽年のうち日数が短い 360 日を分母にしても、仏暦 2363 年(西暦 1820 年)となり、3 年しか変わらず、留意に値する。

各期間を 500 年間とする五つの継続した段階を通じてダルマに影響を及ぼすだろうと釈尊が予言した「五つの消滅(193-98 頁)」に注意を向けると、最後の消滅の最後の部分で起きる弥勒如来(カルキ)生誕の年との相関性を見出すことができる。それゆえ、宇宙的観点からの神々の時代が

時間的推移に伴って鮮度を喪失していく局面において化身ことアヴァターラ（仏陀）が出現し、しかも、衰退していくその局面自体が後続する時代の先触れとなる役目を果たすというヒンズー教典で明確にされている見解を確かなものとしている。すでに本書で紹介したパセーナディ王の夢について言えば、人類が現在直面している困難を予示しているという主張に明確な裏付けを与え、「五つの消滅」に描かれたダルマの現在の有り様と、現在、私たちが目にしている人間の一般的状況が酷似していることを証している。

さて、釈尊自身の生涯の中での重要な年が伝説とロゴ言語を通して伝承されてきたように、弥勒如来（カルキ）に関連する他の年と状況を教典から決定するための探査をさらに進める必要がある。すでに明らかにされた仏暦 2360 年(西暦 1817 年)を補足する予言を探求するには、ヒンズー教典に再び戻らなければならない。

『カルキ・プラーナ』の中には"Shuklapaxasya Dwadashyam Madhwe Masi Madhav"と記された一文がある。訳すと、「Madhav 月の半月のうちの 12 日間が過ぎるなり、Madhav<sup>1</sup> が現れる」という意味になる。さて、各 400 年の二つの接合期を 4 千年間のカリ・ユガから分離し、一つの接合期の長さを 1 カ月を二等分した期間(15 日間)とみなすと、Madhav（ヴィシュヌのカルキ・アヴァターラ、すなわち弥勒如来）が姿を現すまでの期間として経典に記された 12 日間<sup>2</sup> は、 $400 \times 12/15$  で 320 年間に換算される。そしてこの数を、締め括りの接合期の開始年である仏暦 2086 年(西暦 1543 年)に加えると、仏暦 2406 年(西暦 1863 年)になる。

---

1. Madhav は至高者ヴィシュヌの一つの名称。

2. このような短期間が意味をもつのは宇宙的規模の神の時間だけである。さもなければ、不条理なまでに短く、神の顕示者たちが長い時間的間隔において再来すると聖典で言及されていることに矛盾し、この予言についての概念を意味あるものとして伝えることは叶わない。一方、カリ・ユガの中間期に出現したという釈尊自らの発言は、ダルマが衰退していく全期間を 5 千年に想定したことを前提にしていたが、この 5 千年に代えて、カリ・ユガを 4 千年とし、それぞれ 400 年のその二つの接合期の合計、4800 を二分した 2400 年を、仏暦元年(西暦紀元前 543)に加えるなら、重要年の一つの 1863 年に近い 1857 年になる。しかし仏暦でなく、ヴィクラマ暦をベースとするのは、カリ・ユガ終焉時の西暦 1943 年がヴィクラマ暦ではちょうど 2000 年にあたり、計算し易いからである。正確さを期するために採用するヒンズー教典の予言との適性が高い。仏典では、救済者が到来する時代の様相を驚くほどに正確に描写(214 頁)した一方で、500 年づつ増加させるという大まかな期間しか予言されていない。同様に、到来の時に關しては、ゾロアスター教でも正確には予言されていない。

P221

この年も『カルキ・プラーナ』の別の箇所記されているが、カル（時間）王からカルキ・アヴァターラに贈呈された被造物の種類と頭数、個数が謎めいた表記で列挙されている。

10,000	馬
6,000	戦車
600	召使
<hr/>	
116,600	合計

時間（カル）からの贈り物の合計数が、秒／分／時／日／年のうちどの時間単位が該当するかを検討すると、日数で数えるべきことは明白である。それゆえ、116,600 日を 365 で割って太陽年に換算する必要がある。すると、319 年と 165 日となる。これを、カリ・ユガを締め括る接合期が開始する仏暦 2086 年に改めて加える。2086 + 319.452 により、仏暦 2405 年と 5 カ月となり、前述した予言から得られた仏暦 2406 年(西暦 1863 年)と同じ年になる。

ヒンズー教典から明らかにされたこの年、仏暦 2406 年(西暦 1863 年)に先行する仏暦 2360 年(西暦 1817 年)も重要な年である。

最後に『カルキ・プラーナ』から年についてを述べた部分を二つ引用しよう。以下に紹介する句を検討していただきたい。

Sumatyam Vishnuyasha Garbh Madhat Vaishnavam

Grih Naxatra Rashyadi Sevit Shree Padambujam.

一行目を訳すと、

ヴィシュヌ（至高者）の真髓が（子宮という世界の中で）胎児として姿を現した。

P222

二行目はカルキが段階を追って象徴としての胎内で過ごす期間を日数で示す。

グリフ	ナクシャトラ	ラーシ	アディ	パダ	アンブ	ジャム
9	27	12	add	2	000	0

Ek Sahas Nansau Se Upar Eso Yog Pare

Sahas Barash Tak Satyug Bite Dharma Ki Bel Bare

Swarna Phool Prithvi Par Phool Phool Puni Jag Dasha Fireh

Surdas Yeh Hari Ki Lila Tare Nahi Tare.

92,712 + 20,000 = 112,712 日、概ね 308 年 10 カ月を意味する。仏暦 2086 年(西暦 1543 年)に加えると、仏暦 2394 年 10 カ月(西暦 1851 年 10 カ月)となり、ヒンズー文献の『カルキ・プラーナ』において見出されている他二つの年に近い。この意義を調査する必要がある。

それでは最後に、『カルキ・プラーナ』にやはり記されている盲目の聖人スールダース<sup>1</sup>による予言を検討しよう。

Ek Sahas Nansau Se Upar Eso Yog Pare

Sahas Barash Tak Satyug Bite Dharma Ki Bel Bare

Swarna Phool Prithvi Par Phool Puni Jag Dasha Fireh

Surdas Yeh Hari Ki Lila Tare Nahi Tare.

「重大な出来事がサムワト(ヴィクラマ暦)1900 年を過ぎた時に起こるだろう。千年のサティヤ・ユガ<sup>2</sup>(=クレタ・ユガ、黄金時代)を先駆ける運命にある出来事であり、抗いがたい主(ハリ<sup>3</sup>=クリシュナ)の顕現された栄光によって、神の花が世界に降り注ぐ」

さて、216 頁ですでに確認したように、ヴィクラマ暦は仏暦 487 年(紀元前 56 年)に始まる。ヴィクラマ暦で「1900 年を過ぎた時(1900 と 1901 の間)」と予言されていることから、仏暦 487 年に加算すると、仏暦 2387 年(西暦 1844 年)に行き着く。

このように、仏暦 2360 年(西暦 1817 年) / 仏暦 2387 年(西暦 1844 年) / 仏暦 2394 年(概ね西暦 1852 年) / 仏暦 2406 年(西暦 1863 年)という年が正確に算定された。一人の個人の生涯に起きた出来事を明示するかのように互いに近接し合っている。これらの年に何か起きたり誰かが出現したのである。出典とする『カルキ・プラーナ』は、その誰かとは、カルキ、すなわち、弥勒如来であると明言している。

今こそ、弥勒如来を探すべき時である。如来は確かに出現した。だがどこに出現したのだろう。そして誰なのか。

---

1. スールダースはマトゥラーに住んでいた伝説的な盲の聖人、クリシュナの敬虔な信者。

2. サティヤ・ユガに、「直解主義派」の見解である 4 千年でなく(187 頁図表 2 を参照)、このように千年が適用されている。190 頁の図表 3 で正しいことにさらに確証を与えるものである。

3. ヴィシュヌの一つの称号。

吉祥なる劫こと、賢劫(バドラ・カルパ<sup>1</sup>)の最後の時代の阿僧祇であり、仏暦元年より 2314 年前の紀元前 2857 年に始まり、仏暦 2486 年(西暦 1943 年)に終わったカリ・ユガに、釈尊によれば弥勒如来、ヒンズー教典によればカルキ、ゾロアスターの予言によればシャー・バーラム・ヴァルジャヴァンドの出現が定められていた。それゆえ、アーリヤ人のこの 3 大宗教で待ち望まれていた約束された者が確実に同一人物であるか否かを確認するために、和合へと導く躍動的な影響力<sup>2</sup>をインド・アーリヤ人とイラン・アーリヤ人に対して「吉祥なる劫」の期間に累進的に行使していった聖なる教師であることが判明している人物とその関連情報で、表を作ることにする。

1. 「バドラ」は「アーリヤン」(高貴な)を含意し、「人々」をも意味する。それゆえバドラ・カルパとは、「高貴な劫」「人々の宗教」を意味する。「幸運な時代」も意味する。

2. 宗教を扱う場では、「影響」という言葉の定義に厳密に忠実である必要がある。和合に導く累進的側面が遠い過去のものになった特定宗教が持つ別の「影響力」を隠れ蓑にして、征服者や略奪者がその望ましくない目標をひた隠しにしてきたが、その同じ宗教の元来の目的に相反するものであり、永続する善に役立つことはなかった。

138 頁と脚注を参照していただければ、釈尊が(500 年後に出現した)キリストと、(1,100 年後に出現した)ムハンマドの到来を十分認知していたにもかかわらず、両者について予言しなかったのは、衰退に傾いていたダルマの地平線上に出現したキリスト教もイスラム教も、釈尊が入滅したほぼ 1,300 年後には原初の純粋さを失い、内部分裂を起こしていたため、ダルマの改善に貢献するどころか、それら自体が生氣を取り戻す必要があったからであることを理解していただこう。とはいうものの、躍動的で蘇生力あるイスラム教が、衰勢に大きく向かっていたゾロアスター教に及ぼした衝撃は大きかった。ムハンマドが死去して 10 年も経たないうちに、その教えが原初の純粋な状態のまま、ゾロアスター教圏内に入った時は、頹廢していたペルシャ帝国とレバント全域に途方もない恩恵をもたらし、後者はまもなくその影響下に入った。千年前のゾロアスターはそれゆえ、自らの千年後にホシダー・マーが出現するだろうと弟子たちに予告した。しかも千年というこの期間の前後に各 100 年の接合期を加えると、ゾロアスターが死去してからムハンマドがイランに入国するまでの期間、1,200 年と正確に一致する。本書ではこの事実から、アーリヤ人の間に出現した神の化身の中に、ムハンマドの名を加えている。彼は、モーゼとキリストも含まれるセム系の神の顕示者の流れを引いていた。

\*ムハンマド. 西暦 570-632 年. しかし、イスラム暦はムハンマドがメッカからメディナに移住した西暦 622 年を元年とする。この移住は「聖遷」「ヒジュラ」と呼ばれている。

アーリヤ人の宗教	クレタ・ユガ	トレーター・ユガ	ドヴァーバラ・ユガ	カリ・ユガ	新クレタ・ユガ
	仏暦前 9514 ～仏暦前 8314	仏暦前 8313 ～仏暦前 5914	仏暦前 5913 ～仏暦前 2314	仏暦前 2313 ～仏暦 2486	仏暦 2485 に開始

ヒンズー教	マヌ** 仏暦前約 8500	ラーマ** 仏暦前約 5900	クリシュナ 仏暦前 2313	釈尊 仏暦 1	カルキ***
イランの一神教	モハバド*	フーシャン 仏暦前約 1500	ゾロアスター 仏暦前 100	ムハンマド 仏暦 1127	シャー・パーラム***
仏教	クナゴンムニ*	カクサンダ*	ケッサバ*	釈尊 仏暦 1	弥勒如来***

\*印が付された、釈尊に先行する3人の仏陀に関連する年は全く分からないが、各人の名前はヒンズーの化身たちの別称であると考えるのが妥当である(117頁参照).

\*\*印が付された人物に関連する年は経典の記述からは凡その見当しかつけられない。

\*\*\*カルキが出現したことは本書ですでに確かめたが、それを明らかにした仏暦(2360, 2363, 2387, 2394, 2406)年(西暦 1817, 1820, 1844, 1851, 1863 年に各自相当)をこの表に盛り込むことを現段階では差し控えておく。だが教典の比較参照から、カルキは弥勒如来、シャー・パーラム・ヴァルジャヴァンドと同一人物であり、それゆえ後者二人もすでに到来した。

P225

この三つの宗教すべてだけでなく他の大宗教でも明言されているように、到来が約束された者が闇を駆逐して光を導き、世界の和合のための揺るぎなき殿堂を建立することが予期されているならば、この劫の最後の時代であり、釈尊とムハンマドという顕示者の実在が歴史上で唯一証されているカリ・ユガの最終局面に現れることがどの宗教からも待望されている者は同一人物でなければならない。これは明白である。この人物でない、独自の教説と目標を携えた二人の別々の救済者<sup>1</sup>が、現在、大幅に縮小した私たちの世界に出現しても、大宗教すべての聖典で成就が予期されている愛、平和、そして和合の黄金時代どころか、真逆の時代を招くようになるだろう。この人物の出現によって人類の完全なる和合<sup>2</sup>はもはや達成されるしかないのである。

だが、二人の救世主が時期を同じくして到来すると大宗教すべてで確かに予言されていることは、経典に記された次の言葉に反駁しているように見えるかもしれない。

「仏の徳は非常に大きい。世界<sup>3</sup>はそのような存在を複数支え、生み出すことは一度にできない。……二人の仏が同時に現れるなら、混乱を招くだろう<sup>4</sup>」

同じ原理は他の大宗教すべての聖典でも支持されている。二人の化身、すなわち仏陀が同時に登場すれば、秩序に沿って前進する神の法を否定し、代わりに不和を生み、仏陀の到来という目的そ

のものを無効にすることは明らかゆえである。

- 
1. どんな形であろうと全生命を全滅させる手段を一般人が現在所有するこの惑星では、二つの独自の、それゆえに相克する政治、経済、倫理上のイデオロギーのいずれかを単に選択すればよいという贅沢はもはや許されない。すでに目の当たりにされている通り、そうした観念形態は滅ぼし合いに向かうのみである。
  2. 面白味のない均一性であるどころか、大勢でその全体に豊かに貢献する、多彩で躍動的に融和した人間社会を意味するととらえる必要がある。偏りのない公正な倫理原則に基礎を置き、普遍的価値観と権利を携えた人類家族の一員に誰もがなるうえで必要な個人の完全発達を妨げる障害すべての克服に専心的努力が払われる、多様性の中の和合を体現する社会。
  3. ここで言う「世界」とは、今日判明している惑星地球全体からすればごく小さな地域にすぎなかった様々な土地の住民が知る世界を意味することは明らかである。しかもほとんどがその場所から全方位数百マイル範囲の土地を意味していたにすぎない。だがこの事実によってさえも、一つの時期に一人の仏陀が登場する。すなわち、この世界のどこでも二人の仏陀が同時に生涯を送ることはできないという法は決して破られることはない。ゾロアスター（仏暦前101-24 [紀元前635-558] 用語集を参照）と釈尊（紀元前563-483）を例にすると、ゾロアスターの死去時、釈尊はわずか5歳だったため、その幼少時はゾロアスターの最晩年に重なる。それゆえ、釈尊が悟りを開いて仏陀になったのは、ゾロアスターが死去して24年後であり、世界では一つの時期に一人の仏陀だけが登場することを定めた法は遵守されていることに留意されたい。
  4. 『ミリンダ王の問い』『ブラフマジャーラスッタ』『ブッダチャリタ』参照。

P226

それにもかかわらず、同じ大宗教の聖典では、同じ場所から二人の救世主が、同時ではなく同年代に登場すると明言されている。同じ「子宮」からの「双子」の出現を象徴する。

ヒンズー教ではカルキ（ラージャ・スーリヤヴァンシー・マル）<sup>1</sup>とチャンドラヴァンシー・デーヴァピの到来が予期されている。ゾロアスター教では、やはり1万2千年期間になると計算した劫を4等分し、最後の3千年期間が終わる時に共に出現するとされるシャー・バーラム・ヴァルジャヴァンドとホシダー・ボミットの登場が待望されている。しかもゾロアスターはその最後の3千年期間に自らが、その後に3人の救世主が出現すると明言した。その予言通りに、自らの概ね千年後にホシダー・マー（ムハンマド）が確かに登場した。そして同じ最後の3千年期間の終幕でシャー・バーラム・ヴァルジャヴァンドとホシダー・ボミットが登場するとしている。ゾロアスターとムハンマドが出現した年も、接合期を構成する計300年間も、すべてが、ゾロアスターが定めた3千年の期間内に収まり、この期間の終了は、カリ・ユガが終わる仏暦2486年(西暦1943年)に一致する。

したがって、ダルマの段階的な衰退と最終的な消滅を語る最古の経典<sup>2</sup>において、劫が終わる前に弥勒如来が出現することと、一つの霊的要因であるダルマが人の生涯が閉じるように消滅したことを釈尊が述べていたことは過誤でも偶然でもない。それゆえ、奇跡の双子の発現とダルマの再興

を関連づけるのは必然である。

そしてこの時代が（忘却）の中に陥る時、すべての舍利があらゆる場所から、すなわち、蛇の住処<sup>3</sup>から、デーヴァの世界から、そしてブラフマンの世界から、菩提樹の大樹の周りに集まり、仏の像を一つ作ると、奇跡の双子のような奇跡を起こして、ダルマを説く。

- 
1. 仏教の伝承では、シャーキヤ族(釈迦族)の先祖である Suryavamsa としても知られている。ここでもまた、ヒンズーと仏教が伝説と待望するもので密接な関係があることが示されている。
  2. 198 頁参照 (Anagatavamsa)。
  3. 「蛇の住処」他の名称は当時のインド周辺地域の象徴的名称にすぎず、何らかの曖昧で神秘的なアストラル界のことではない。たとえば「蛇の住処」はビルマと国境を接するインド北東地域であることはよく知られていた。この地域は今もなお「ナーガ」(蛇)の地として知られている。この呼称の使用地域はのちにその先のカンボジアも含むようになり、住民たちは、伝説の結ばれたあるインドの王子と「ナーガ」の王女の末裔が自分たちと主張している。同様に「デーヴァの世界」はアフガニスタンと国境を接するインド北西地域に与えられた名称であり、ゾロアスターの時代より前に伝説のデーヴァ崇拝者たちが住んでいたイランにも及んでいる。「ブラフマンの世界」は北方のヒマラヤ地域(チベットとその先の中国)を意味する。

P227

意味は明白である。ダルマ(法)を教えるのは単独の奇跡(化身)でも、個別の二つの奇跡でもない。二人の個別の仏陀が同時に出現する可能性に関して靈的な法が否定するのは、個別についてであり、原理や目的は区別できず、完全に相互補完、完璧に調和した関係にある「奇跡の双子」についてではないからである。だが、双子として登場する必要がなぜあるのかと、ここで疑問が生じるかもしれない。一人の仏陀、一つの奇跡で十分でなかろうかと。すでに本書で指摘したように、「奇跡の双子」の到来を指し示したのは釈尊だけではない。二人の化身が同時代に出現し、劫の最終局面を完結させて黄金時代を先導することを、神の他の化身も教典で示していた。しかし、このジレンマをどうしたら解決できるだろう。

一つの時期の一つの世界体系に現れる仏陀は一人という原則を一見、否定するように思われるものに好奇心を湧かせ、私たちの時代の世界に対する聖なる導きの真の源を認識するための最も重要な条件が釈尊によってこの謎めいた一節に挿入された事実余すことなき関心を喚起することが、一つの解決策となる。

初期の仏教学識者の中にはこの事実を認識し、弥勒如来と観自在菩薩の間に密接な関係があることと、彼らが到来することを、礼拝を示すことで肯定した学識者もいる。

これまでに確認したように、「奇跡の双子」こと双子の顕示者が「吉祥なる劫」の最終局面で到来することが大宗教すべてにおいて予言され、これをもって予言は最高潮を迎える。大宗教それぞれが独自に発展していく中で何が起きようと、聖典の影響をどう及ぼし合おうと、各宗教の信者は、人

類の一体性を確立するために神権がその姿を現すという、共通した予言の成就を注意を怠らずに待望した。

P228

それゆえに、公正な千年紀、サティヤ・ユガが確立される人類史の新たな時代が開かれるには、最後の時代のカリ・ユガが終焉を迎える局面を誰もが経験する中で、約束された「双子の出現」は必然であると信じられてきた。

長期にわたるカリ・ユガの中間点で出現し、ダルマを刷新すべき約束された者であるという釈尊自らの主張が多数のヒンズー教徒によって否定されたのは、予言の極みたる「双子の到来」に主に起因する。同様にゾロアスター教徒も、教典で「双子の到来」が予言として示唆されているがために、釈尊と似た役割を果たすべく到来したムハンマドを拒絶することになった。同様にユダヤ教徒はキリストの、キリスト教徒はムハンマドの主張をそれぞれ拒絶した。それぞれの宗教で定められ、聖典にも記された、最後の長期の暗黒時代の中間点での神意を受けた案内人の到来を予告した予言を認めないまま、各宗教の信者すべてが双子の顕示者の出現だけを待望したのである。

最大の期待感<sup>1</sup>で待望されてきたサティヤ・ユガの到来が、劫が終ろうとする記念すべき時期に成就したことは、ヒンズー教、ゾロアスター教、仏教の予言から、すでに明らかにされている。さらに教典の記述からの計算と、それぞれの予言の著しい相関性により、関連性がある年が特定されている。仏暦 2360 年(西暦 1817 年) / 仏暦 2363 年(西暦 1820 年) / 仏暦 2387 年(西暦 1844 年) / 仏暦 2394 年(西暦 1852 年) / 仏暦 2406 年(西暦 1863 年)が今、さらなる関心を求めている。これらは非常に近接し合うため、偶発的に重なる無意味な年数として片付けることはできない。一個人の生涯でこれらの年に何かが起きた。双子の現象が起きたのである。運命づけられた「時」は 19 世紀であったことがもはや判明したからには、「どこで」起きたかの探求に移らなければならない。教典に列挙されている条件を満たしながら、すでに明るみにされた上記年に議論の余地を与えようもない意味を与え得る場所の探求である。

---

1. 経典にもこうした期待感が記されている。「2,500 年前後、ダルマは栄光に輝き、灯台のように全世界に光を投げかけるだろう。ランカ (セイロン) 自体は繁栄し喜び満ちた……」『ヴィジャヤヴァルダナ(ダルマ・ヴィジャヤ)』より。だがこの言葉の意味が誤解されてきたことは言うまでもなく、セイロンは繁栄を享受しなかった。ビルマでも、仏暦 2,500 年(西暦 1957 年)は仏教が大きく復興し、すべての人が待望する「黄金時代」の曙になるだろうと強く信じられていた。当年、タイでは新しい政党が結成され、到来を強く期待していた弥勒如来に因み、スリ・アーリヤ・メトライ党と呼ばれた。

P229

## どこで

宗教の歴史は奇妙な現象を示している。その影響は世界を覆い包むものでありながら、その起源、夜明けのごときその出現は実に局地化されている。世界には6大陸があるにもかかわらず、無上に重要な現象である仏陀の出現が生じる地域は限定されている。季節上のごくわずかな移動を除いては、日の出と日没の方向がしっかりと固定されている太陽にも似て、クリシュナ、モーゼ、ゾロアスター、釈尊、イエス、ムハンマドと呼ばれる霊的な太陽たる神の顕示者たちは例外なく、アジア、しかもそのごく限定された地域からしか出現していない。アジア大陸の地図を見つめるなら、顕示者たちが曙光を投げかけた地点は、釈尊の生誕地カピラ城を東端に、モーゼが出現したアラビアのシナイ半島を西端にした比較的短い直線状の道を形成していることが分かる。すなわち、この狭い線状地帯の中で彼らは集中的に出現した。その正確な中間地点にイランが存在する。これからご覧になるとおり、アーリヤ人の国土の西端のこの地にすべての聖典の予言が集中している。

より遠く離れた過去に予言がなされていたほど、その成就する時期、付随する詳細な事柄がより的確に予告されていたほど、私たちの知性を驚かせ、本書の目的のために予言を活用する価値はより高くなる。この尺度をもってすると、いつどんな状況で起きるかに関し、数千年前のヒンズー教徒、ゾロアスター教徒、仏教徒が記した教典に見出される予言が見事なまでに正確であることを認めずにはおられない<sup>1</sup>。

---

1.ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖典にも、約束された救世主がいつどこで登場し、誰なのかについての驚くほどの詳細が同じ程度の正確さで記されている。だが本書では、ヒンズー教、仏教、そしてこの二つほどではなくても、ゾロアスター教を背景とするインド・アーリヤ系の予言を探求対象とするため、これらと同じ程度に記すことはできない。

P230

これら宗教の予言は、これまでに確認したように、相似して並置されたしるしを通じて明らかに相互補完することで重大な出来事に私たちを導くだけでなく、虚偽の主張すべてを遠慮なく排除し撃滅する。それゆえ、到来時期についてのように、奇跡の双子、劫の終焉者、弥勒如来、そして霊的に補完的役割を果たす人物の出現場所を示す予言でなされている指示に従うつもりなら、まこと

しやかな主張すべてを最初から拒絶し、検討から除外しなければならない。教典の予言とは完全に矛盾し、由来とする場所も時もまちまちな不正直で迷妄した主張が提示するのは、神の教えの盗作にすぎない。

仏典には概ねの年だけが記載されている。それらは、高い精度で計算され、釈尊自身の生涯と使命に関連する年も含んだ初期ヒンズー教典に記されているいくつかの年と一致し、補完している。一方、釈尊のダルマこと仏教の影響力が徐々に薄らいでいくに並行し、世間で蔓延る定めにある状況が釈尊自身よって的確に説明されているのは、現在、目の当たりにされている兆候が起きる時期を実に的確に指摘したヒンズー経典との連携が目的にされていることに疑いの余地を残さない。この二つの宗教ともに、はるかに遠い過去から、現代の病を唯一癒すことができる万能薬たる弥勒如来を正確に指し示す情報を提供してきた。そのヒンズー教と仏教が残した予言は翻って、ゾロアスターの教典に記された予言からさらなる補完を受けている。

それでは、この三つの宗教で双子の顕示者が出現する場所についてどんな予言をしているかを、確認しよう。最古のヒンズー教典の予言から開始する。留意すべきは、神から遣わされた教師全員が至高者のメッセンジャー、すなわち「介在者」であり、彼らの教典はさまざまな時代と場所に生きる世界人類のために顕された主権意志の顕れであるがゆえに、それぞれの教典の解釈は完全に調和している必要があるという単純な事実である。そしてそれらは実際に調和している。

P231

ヒンズー教のプラーナ文献からは、カルキ（弥勒如来）こと、ラージャ・スーリヤヴァンシー・マルの出現場所を述べた言葉が見出される。その場所はインド国外でありながら、元来のアーリヤ民族の仏国土内に収まっている。『カルキ・プラーナ』には、カルキは Purshottam という土地から出現すると記されている。サンスクリット語の Purshottam は、pursh=男性あるいは人間、ottam=最も高い、の組み合わせであるため、最高の(もしくは最も勇敢な)人間(が住む土地)、または、勇敢な(アーリヤ人)が居住する最も高い土地を意味する。アーリヤ人の年代史家たちには、この土地が彼らアーリヤ人自身の地を意味するのは当然だった。そしてより綿密な検証によってさらなる情報が明らかにされ、アーリヤの土地の中でもより正確な場所が視界に入った——ペルシャだった。サンスクリット語の Purshottam は、古代のペルシャ語の Parshatham に由来し、Parsa(ペルシャ人)の「本拠地」を意味する。さらに、アーリヤ人の文化と文明が現在まで続いているインド・イラン・アーリヤ人の元来の領土すべての中で、最も高地にある居住可能な土地でもある(ペルシャの国土の大半は高さ 1,524 メートルを超える高地)。『カルキ・プラーナ』の別の箇所では、Bhadrapith (Bhadra はアーリヤ人を含意し、pith は幹や根を意味する)と名付けたり、プラーナ文献の伝承でイランの別名にされている Hari-Sadan と呼ぶことで、イランであることを示唆し、イランがカルキの出現地であることを指し示している。

ゾロアスターの教典では、劫の終焉者であるシャー・バーラム・ヴァルジャヴァンドと同時代に

出現することが定められている第2の救世主のホシダー・ボミットというその称号が意味するものは別として、出現地についてをより具体的に記している。ホシダー・ボミットが「自国の土地の(ボミット)」啓発者を意味するため、この場合、イランから出現する啓発者を意味することは明白である。ダマーヴァンド<sup>1</sup>山の名も具体的に記されている。この山の麓からそう遠くない場所にイランの首都テヘランが所在し、この地で善と悪の闘争が繰り広げられている時にホシダー・ボミットが登場する。

---

1. 欲望に囚われた人間を体現した神話上の怪物「ダハーカ」がこの山に鎖で縛り上げられており、救世主である英雄 Keresaspa(180 頁脚注 2)が現れてこの怪物を再び打ち負かすとされている。

P232

教典に示唆されているこうした情報を根拠に、新しい黄金時代を先導する双子の救世主が自分たちの母国から必ずもう一度出現することへの信念が、ゾロアスター教徒の中に形成されている。彼らの教典だけに救世主の到来はまさに自国であると明言されている一方、他の啓示宗教すべての教典ではそのような明言はされていない。しかも、イラン(ペルシャ)<sup>1</sup>が双子の顕示者が到来する場所であると示唆されている。

---

1. ムハンマドも自らの出身地(アラビア)でない近隣の土地を示唆した。「耳を傾けなさい。召集者が直ぐ近い所から呼ぶ日に(備えて)。その日、かれらは真実の一声を聞こう。それは(墓場から)出て行く日である」『コーラン・カーフの章』 41,42. 同様に旧約聖書にも、劫の終焉者が到来する地としてイランがはっきり名指しされている。「その幻を見たのは、エラム州の首都シュシャンにいた時であって、ウライ川のほとりにおいてであった」『ダニエル書』第8章2. 「そしてわたしの位をエラムにすえ、王とつかさたちとを滅ぼすと主は言われる」『エレミヤ書』第49章38.

P233

## 阿弥陀如来

本段階で少し時間を取り、弥勒如来と合同でも、独自でも、本書でこれから頻出する阿弥陀如来という名称とその概念を明確にする必要がある。

仏教の学派すべてが慈氏尊こと「慈愛という名の御方」を意味する弥勒を肯定し、その名称を使うのは、弥勒がパーリ仏典と上座部仏教の文献の中で言及されている唯一の菩薩<sup>1</sup>であることに由来する。一方、阿弥陀如来という名称は大乗仏教の教典にしか見出されない。しかし、弥勒如来に言及するパーリ仏典において、弥勒如来と阿弥陀如来の両者についてを語る大乗仏教の文献において、弥勒如来と阿弥陀如来の到来に関わる予言を比較調査すると、その兆候と時期が同一であることは明白である。ダルマの段階的な「五つの消滅」についての両学派の教典調査により、このことはすでに示してある(193-216頁)。しかも、彼らが顕現するために説明された実際の状況からすると、この二人の名称は大乗仏教の教典では不可分であることが見出される。

---

1. 「阿羅漢」になる、すなわち自助努力で自己のために悟りを開くことを、釈迦如来は弟子たちに教えることを目指していたと様々な弟子が考えていたが、これは非常に自己中心的であり、釈尊が目的にしていたすべての生命の救済と、他者が悟りを開くことを助ける生涯を通じた取り組みとは相反する概念だった。釈尊自身が示した模範により近いものが「菩薩」という観念だった。完成域に達していながら仏陀になることを後回しにし、地上にいる他者が救済を得るよう助けるために奮闘し続ける者を意味する。この概念は人生の真の理想として大乗仏教の信者に後に採用された。『サダルマ・プンダリカ・スートラ』において自ら叙述した釈尊の姿とも一致する。

P234

しかしながら、到来という一つの出来事を記すのに二つの名称を使う問題の解決策は、大乗仏教では判明していない。それゆえに初期文献では、阿弥陀如来は靈的次元においてのみ存在する純粹に靈的な現象にされている。大乗仏教はこのようにして、阿弥陀如来という現象から出現時期についての言及を分離可能とし、現実の肉体を持ち、その教典やパーリ仏典に記されている予言に従って地上に顕現する仏陀を弥勒如来に到着させたのである。しかしこの策は、阿弥陀如来の仏国土の物理的側面のみ詳細に言及し、どんな場所か、どんな状況かを明確つぶさに述べている、彼ら自身の文献に照らすと、阿弥陀如来を靈的次元に限定することには無理があると言わざるを得ない。

このような問題と矛盾にこれ以上の時間の無駄使いはできない。それゆえ単刀直入に述べよう。

こうした事態は阿弥陀が意味するものの根本的な誤解に起因する。阿弥陀<sup>1</sup>とは誰かの固有名ではない。一つのサンスクリット語にすぎず（Amit—永遠の、無量の、絶対的な; Abha—栄光、もしくは光輝）、「神の栄光」「無量の栄光」「永遠なる光輝」という意味の称号を示す。仏陀、如来という称号が釈尊に用いられるように、阿弥陀も、待望されているマイトレーヤ、弥勒如来の栄光が計り知れないことを示すために用いられる名称である。

釈尊は自らの次に到来する仏陀の名が「慈愛を意味する」と述べるだけでなく、この属性が他の何よりも卓越していることを称賛している。

贈物は素晴らしく、精舎の建立には功德があり、瞑想と修行は心を静め、真理の理解により涅槃に至るが、すべてに勝るのは慈愛である。月の光にすべての星の光の16倍の強さがあるように、慈愛は他すべての仏の教えによる功績を合わせたものの16倍の効力で心を解脱させる。この心の状態はこの世で最高のものである。起きている間は、立っていても、歩いていても、座っていても、横になっていても、この心の状態を堅持しているように<sup>2</sup>。

---

1. 「無限の寿命をもつもの、無量寿」を意味する Amitāyus（アマターユル）とも呼ばれている（Ayuh は寿命を意味する）。比丘の地位にいる間は、正行をする者、仏法の実践者として法蔵菩薩、"Dharmakara"と呼ばれる。

2. 『マハー・ヴァツガ』（ヴィナヤ・ピタカ）

P235

慈愛は心が属性として身につける最高の目標として卓越した地位にあるゆえに、二つの意義がある。まず、釈尊の後継者であり、「慈愛」を示唆する名を持つ弥勒如来の重要さは無比であること。次に、人類救済の仕事に私たち自身が関わる責任が強調されることである。この仕事は「慈愛」——弥勒——を介してのみ成功が可能になるため、慈愛とは手段であり目的でもある。

だが、弥勒もまた含意された名称にすぎない。劫の終焉者であり仏陀になる定めのある人物の固有名詞にはなり得ない。弥勒には、釈尊が与えている「慈愛という名の御方」以外に意味がないからである。このことから、「弥勒」＝「慈愛」ではないことを、読者は明白に認識していただく必要がある。それゆえ、如来であって仏陀である、すでに出現したことを本書で確かめた人物の固有名は「弥勒」でなく、本人の自国の言語で「慈愛」を意味する名となる。

インドのより古い時代の記録には阿弥陀という名についての言及がほぼ皆無であることから<sup>1</sup>、その名称の着想と語源は初期インド仏教の圏外にあり、イラン・アーリヤ人と彼らが奉じていたゾロアスターの教説が幅を利かせていた周縁の西方地域に由来する、と結論づける見解があった。さて、これまでに確認したように、特にインドとイランのアーリヤ人の間で民族の交雑と観念形態の混合が絶えず生じていたことで、釈尊の実体を含むあらゆる概念が変化し発展したが、阿弥陀はイ

ランを起源とする後世の概念と主張する上記した見解は、重要点を見落としている。すなわち、阿弥陀という名は実際には弥勒の称号または名称である点と、阿弥陀という名称に帰せられる資質と、阿弥陀の仏国土の説明状況を認識し損ねている点である。この名が純然たるインド・アーリヤのものであることは明白であり、この二系統のアーリヤ民族の言語のルーツは互いに近親関係にあっても、阿弥陀という名の語源を古代イラン語に見出すことは容易ではない。文字通りのサンスクリット語でなら意味が理解しやすい。

---

1. インドでは第3結集が開かれた仏暦250年前後に少なくとも遡る阿弥陀如来の描画が複数見つかっているが、阿弥陀如来の仏国土についての記述はない。だからといって、後期の仏典に記されている仏国土の説明を疑問に思う必要はない。パタリプトラの未来の卓越性を述べた釈尊の予言や、劫の終焉者が案内するはずの未来のサティヤ・ユガの状況を説明するヒンズーの初期教典に説明の出典を求めるなら、見つけ出しは容易である。『大スカーヴァティー・ヴィューハ』『小スカーヴァティー・ヴィューハ』『アマターユル・ディアーナ・ストラ』においてのいくつかは、『ディーガ・ニカーヤ』の『マハースダッサナ経』と『ジャータカ』95番の記述と一語一語変わらない。それゆえ、上座部仏教でも大乘仏教でも仏典の大半は古い時代の同じものを出典としている。

P236

阿弥陀という名称を、やはり名称である弥勒や観自在菩薩と、置換えや組み合わせをした例は多い。しかし、阿弥陀如来は西方浄土（極楽）<sup>1</sup>を統べるディヤーニー<sup>2</sup>仏であり、地上で現す姿（マヌシャ仏）<sup>3</sup>が弥勒如来であり、その弥勒如来には、観自在菩薩を「通して」（「門」もしくは「先駆け」を意味する）いつでも近づることができるという概念が、最も論理的に調和する。

伝承によれば、阿弥陀如来は幾劫も前の過去生では王であったが、漂泊の旅に出るために王座を離れ、人のまま悟りを開いた仏陀の導きを受けて菩薩としての行を尽くした。そして、生きとし生けるものの救済のために仏になるためと、聖人が幸福、智慧、浄らかさをいつまでも享受する浄土をつくるために、一連の大いなる誓願を立てたという。

しかし、この伝承に含まれる理から逸脱した数々の要素に、阿弥陀如来とその仏国土、浄土について考察する人々は直面する。この事態は「永遠の光輝」「永遠（もしくは神）の栄光」を意味する「阿弥陀」という名が、出現したはずの「弥勒」仏の称号であることを単に認めれば、すべて收拾するだろう。そうする代わりに、たとえば、「法蔵」という漠然とした概念で阿弥陀を説明しようとなされているが、用語としてパーリ仏典で既出する法蔵という概念は、絶対的真理を体現する如来を正しく象徴していても、阿弥陀という名称の意味や浄土の様相を説明していない。

---

1. 至福の地、最高の幸福の地。

2. ディヤーニーは、「意識」「精神」を意味するサンスクリット語「ディヤーナ」に由来する。悟りを開くという現象の物理的側面に相対する超越的側面。阿弥陀如来への帰依を表明する定型句が、サンスクリット語で "Om Namo

Amitabhaya Buddhaya", 中国語で"Om O-mi-to-fo", 日本語で「南無阿弥陀如来」.

3. マヌシャは「人」を意味する. 肉体を持つ仏陀の一人が釈尊であり、釈尊はマヌシャ仏だった.
4. 法蔵は悟り、覚、菩提とも同一視されている. 涅槃、空、真如とも同一視される場合もある. 静的な空、動的な局面という、人類を救済に導く上で仏陀に顕れる二つの側面を表すものとして説明されている. 法蔵は正しい行いをする者も含意する.

P237

「そして、阿難よ、法蔵菩薩は、それら仏の国の優れた良きところを選び取って完璧となし、……それらすべてを一つの仏の国に集約させ……そしてその後、五劫の間<sup>1</sup>、これら仏の国々の優れた良きところすべてを完璧にすることに集中したが、それはかつて知られなかったようなものであった」<sup>2</sup>

このように語られたとき、阿難が世尊にこう尋ねた。「世尊よ、かの法蔵菩薩は仏となつて、すでに世を去られたのでしょうか。それとも、まだ仏となつておられないのでしょうか。もしくは、現に悟つて、今、住し、とどまり、時を過ごし、そして法を説いておられるのでしょうか」。世尊は言われた。「まことに阿難よ、かの如来は、世を去つたのでもなく、未だ来られないのでもない。無上なる正等覚を悟つた後の今、住し、とどまり、時を過ごし、そして法を説いておられる。ここより西方に、百千那由他の国々を過ぎたところにある極楽と呼ばれる仏の国において、阿弥陀と呼ばれる如来・応供・正等覚者であり、無数の菩薩たちに取り囲まれ、数果てしない声聞たちから恭敬され、果てしなく完璧な仏の国をお持ちである」<sup>3</sup>

釈尊は一切智であり、過去も未来も一度に目にすることができるが、その釈尊の返答から、読者は次のことを理解していただく必要がある。「西方」が物理的な方向を示す点の一つと、もう一つが、本書で「住まい」と題する章(244-246頁)で、阿難とのこの同じ会話から引用する別の部分でこれから確認するように、釈尊の教えが時の経過とともに不明瞭になっていっても、未来の人々が阿弥陀如来とその仏国土である極楽浄土についてを書物で読んだときにその場所が分かるようにするために、仏国土、功績を含む、阿弥陀如来についての詳細な説明をすべて記録するようにと阿難は釈尊から依頼されている点である。

---

1. 賢劫の第4の仏陀である釈尊によれば、前記した「この同じ劫」(117頁)に到来するとされている第5の仏陀、弥勒如来を意味する。弥勒如来は思惟を象徴し、法蔵菩薩も五劫の思惟の末に阿弥陀如来として出現するため、弥勒如来と阿弥陀如来が同一であることが改めて明白となる。

2. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』v.6. (訳者注：梵語から英語訳の和訳)

### 3. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 v.11.

※訳者注：『無量寿経』として知られている経典。本書の考察は、F. MAX MÜLLER による梵文原典の英訳に基づいているため、引用する際には、『大スカーヴァティー・ヴィューハ』と表記する)

P238

経典を読み進めていくとともに、釈尊が阿弥陀如来の卓越性とその仏国土である極楽浄土の栄光を称賛している様子が描写されていく。だが、その言葉に内在する象徴と比喩の中に垣間見える意図されるものを見失ってはならない。

「また、かの如来の光明は無量であり、……その量や際限を知ることは容易ではない。しかし、阿難よ、要略するならば、ガンジス河の砂の数に等しい百千那由他の仏の国々が、かの阿弥陀如来の光明によって、東方において、常に照らし出されている。……ただし、前世の誓願の加護によって、一尋の光明、一・二・三・四・五・十・二十・三十・四十由旬の光明、百由旬那の光明、千由旬の光明、……をもって、この世間にいたるまで満たしている仏たちを除く」

「阿難よ、かの阿弥陀如来の光明の量を把握できるような譬喩が述べられることはないのである。それゆえ阿難よ、かの如来は阿弥陀（無量の光をもつもの、無量光）仏、無辺光（無量の光明をもつもの）仏と呼ばれるのである……」

「また、阿難よ、このようにして、如来である私が、かの阿弥陀如来の功德について、その光明から始めて、満一劫の間、語ろうとしても、その光明の功德の際限まで語ることはできない。かといって、釈迦如来の威信が損なわれることもないだろう。それはなぜか。阿難よ、これは、かの世尊、阿弥陀如来の光明の大なるすばらしさと、釈迦如来である私の無上なる知識の光明が、両方ともに無量・無数・不可思議・無際限だからである」

「阿難よ、かの阿弥陀如来の説法の座に集まった声聞の数ははかり知れない。尺度を容易に知ることはできないほどの、計り知れない、無数の、数え切れない、比較できない、想像ができないと言えるほどの実に多くの声聞がおり、期間があるとしか言えない<sup>2</sup>」

- 
1. 釈尊はここで自らについて言及している。阿弥陀如来の光明は無量であることを釈尊は完全には説明できないが、かといって、やはり無限である釈尊自身の力を損なうことはないということである。
  2. 阿弥陀如来の「声聞」の数は釈尊の声聞数をはるかに凌駕するという釈尊の発言は、弥勒如来の弟子数は自らの弟子数の少なくとも 10 倍であると述べた発言(168 頁参照)に近似する。違う用語で、この劫が終焉する前に到来すると釈尊が予言する——弥勒・阿弥陀如来——という同一人物を語るものである。

それゆえ、かの如来、阿弥陀世尊の説法の座に集まった大勢の声聞は数限りないため、「計り知れない、無量の」という名称を世尊は受け取っている<sup>1</sup>。

次の一節も興味深い。釈尊が自らの生まれついでたの宗教であり、熟知していたヒンズー教の予言で予期されていることに阿弥陀如来が関連していることを肯定している。

「阿難よ、阿弥陀如来の寿命は実に長く、容易には計り知ることにはできない。幾百劫……幾百千万億那由佉劫と言えるほどだ。したがって阿難よ、かの世尊の寿命の限界は確かに計り知れない。それゆえ、かの如来は無量寿仏と呼ばれる。それと阿難よ、劫の計算を伝える規則がこの世に存在する。かの如来、無量寿仏世尊が立ち上がり最高に完全な知識を悟ってから、今で十劫が過ぎている」

これまでに確認したように、ヒンズー教徒も劫の終焉者の到来を待望しているが、第5の仏陀、弥勒如来の到来を予期していた仏教徒とは異なり、ヴィシュヌの10番目の化身、カルキを待っている。引用したこれらの文からは、釈尊自ら、九劫前(阿弥陀が成道した一劫後)に如来になったことが示唆されており、興味深い<sup>2</sup>。阿弥陀如来は多くの仏陀や菩薩の中でも比類のない功績を挙げた無上に偉大な仏陀であることを釈尊がよく知っており、弥勒の名を除いた——その名を、釈尊はあらん限りに称賛していることを明示する。そして、釈尊が明言する仏陀の順次の到来(累進的啓示)に照らすと、自らに課せられた「務め」を果たすこと、言うなれば、人類の一体性を確立するために——奇跡の双子——の最終的な到来に人類を準備させることが、釈尊の使命の主たる目的であったことを示唆している<sup>3</sup>。このことは、これまでと、これから読むことからすると、本書で現在探求している阿弥陀如来(弥勒如来)と釈尊の関係を示しているように思われる。

---

1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 w.12-13.

2. 釈尊が自らの一つ前に出現した仏陀の名は迦葉仏(ケッサパ: Kessapa)であると度々述べ、自らは九劫前(阿弥陀如来の一劫後)に成道したと示唆するのは、靈的使命の継承を意味し、阿弥陀如来の卓越性を示す。(訳者注: 「かの阿弥陀如来の功德について、その光明から始めて、満一劫の間、語ろうとしても」にも、釈尊自身は九劫前に成道したことが示唆されている。阿弥陀仏の成道はその一劫前の十劫前。九劫前の成道については190頁脚注参照)

3. 『マハーパリニッバーナ・スッタ』。目的を果たし、課せられた務めに対処したからには、休憩すると決心しているのだ。

以下の引用文からは、弥勒—阿弥陀如来の仏国土の様相がうかがえる。

「阿難よ、阿弥陀世尊に属する極楽浄土と呼ばれる世界は繁栄し、豊かで住みやすく、肥沃で素晴らしい。そして多くの神々と人々で満ち溢れている。しかも阿難よ、その世界には地獄も畜生界も餓鬼界も、阿修羅の群れも、時期尚早の誕生もない<sup>1</sup>。また極楽浄土で知られているような宝はこの世界には現れない」

上の文を引用したのは、一つ一つの用語と現実の物理現象の同一視を試みて混乱したりせずに、象徴を通過し、現実に行き着く準備をしていただくためである。かといって、釈尊が用いる華麗極まりない言葉に極度に批判的になり、目標探求上での理解に匙を投げる必要はない。これらの引用文や、阿弥陀如来とその極楽についてを述べた経典一式を読む際には、このような両極端に走らずに中道を踏み進み、釈尊が長々と語るのには、到来の時間の中にいる私たちのための大きな目的があるからに違いないことを覚えておく必要がある。偏見のない心を失わなければ、「多くの神々と人々で満ち溢れている」という極楽についての上の引用文でも、釈尊は不合理なことを言っていないことが分かる。この部分は信仰心の程度を述べている。より強い信仰心がある人々は「神々」として、それ以外の人々は「人々」と表現されている。阿弥陀如来自身がそれを説明した言葉を釈尊が語っている。

「世尊よ、私の仏の国に生まれた衆生が、すべてもし、一つの色、すなわち金色を帯びないのであれば、私は無上なる悟りを得ません」

「世尊よ、私の仏の国において、『世俗の不完全な言い方では、この者たちは神々である、人々である』とそれぞれを数え上げながら言うのは別として、神々と人々との区別が知られるようであるならば、私は無上なる悟りを得ません」<sup>3</sup>

---

1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 v.15.

2. 「金細工職人が火で燃やすことで細工した金を試すように……」と釈尊が述べるように(ガーナヴィューハ経)、「黄金色」とは、阿弥陀如来と彼の極楽浄土を見出した者すべての信仰の純粋さを象徴するものにすぎない。

3. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 v.8.(3,4).

「瑠璃でつくられ、平面をなし、金糸で八つに仕切られた格子縞模様をなし、宝樹で飾られている」<sup>1</sup>といった、弥勒阿弥陀如来の出現地点に至る路上で遭遇する絵のように美しい描写に、私た

ちは混乱してはならない。

自分が語った西方浄土は本物には及ばないと理解していますが、いかがでしょうか、と質問をした弟子に、釈尊はこのように答えた。「そなたが説明した極楽は美しくても不十分である。浄土の栄光を正當に評価していない。凡夫は世俗的な表現でしか極楽浄土を語れない。使うのは、世俗的な比喩や世俗的な言葉だけである。しかし、純粋な者が住む浄土は、そなたが語ることも想像することもできないほど美しいのだ」

にもかかわらず、極楽浄土はこの地上に、釈尊が行んでいた場所の西方に、必ず存在する。だが、西方浄土は釈尊の時代のためのものではなかった。続く数章で引用する釈尊の言葉から分かるように、私たちが生きる現代のためのものだった。

---

1. *Ratnamegha-sūtra*. 維摩による極楽についての評言.

P242

## 12

### 観自在菩薩

前章で弥勒と阿弥陀という言葉の意味を明白にしたことで、これらは同一人物の二つの名称であることが明らかとなった。だが読者は、釈尊が予言した「双子」の現象がこの二つの名称に意味されていると結論づける必要はない。弥勒・阿弥陀如来はこの双子の現象の片割れであり、もう一つの片割れが観自在菩薩<sup>1</sup>であることをもはや認識されているかもしれない。この菩薩だけがその名称(慈悲)で、弥勒(慈愛という名の御方)・阿弥陀如来との関連を持ち、万人救済が求められている。

---

1. 「慈悲の目をもって観ずる自在者」を意味する。サンスクリットの Avalokitesvara (アヴァローキテーシュヴァラ) は、isvara(主権を備えた自在者)と、慈悲の目をもって衆生の苦悩を観ずる者 avalokita の合成語。釈尊が入滅して早

くも 400 年後に編纂された経典『カーランダ・ヴューハ・スートラ』は観自在菩薩への称賛で占められている。この経からは、釈尊のごく初期の弟子たちも、ブラフマン、ヴィシュヌ、ナラヤーナ(クリシュナ)をそれぞれの名で受け入れていたことが分かる。バラモンが釈尊をヴィシュヌの第9の化身であると肯定していたことへの返礼として、仏教徒がヴィシュヌと同一視したのが、パドゥマパーニ(蓮華を意味する)菩薩だった。アヴァローキテーシュヴァラ(観自在菩薩)と通称される、万人が救済されるまでは涅槃に達しないと決心した菩薩である。これには十分な意義がある。ビシュヌは、聖なる教師の姿で時代から時代へと自らを顕現する至高者の「生まれ変わり」原則、真髄ゆえである。この推論により、アヴァローキテーシュヴァラが釈尊が予言した御方である弥勒如来とともに到来することを、仏教徒はごく初期の時代から待望していた。また「慈悲」は女性を含意するため、女神の姿で「悩める衆生」の音声を観ずる<sup>1</sup> 観世音として、中国を始めとする北東アジアでは讃えられている。観自在菩薩は、Sadaksarilokesvara, Simhanada, Lokanatha, Khasarpana とも呼ばれている。

P243

観自在菩薩は神通力を極めている。菩薩は豊かな智慧をもって救済する方法を修めている。世界の十方に、あらゆる仏界に、彼の姿を見ることが出来る。

菩薩はあらゆる功德を完全に備え、衆生を慈悲の眼で眺める。菩薩自身が功德からなる大海を体現している。ゆえに称賛し礼拝すべきである。今、非常に慈悲深い観自在菩薩は未来の時代に仏になるだろう。悲しみと恐れと苦しみを消滅させる観自在菩薩に、慎んで頭を下げる<sup>1</sup>。

観自在菩薩の名は近代の仏教年代記に記されていない。だが、134 頁で確認したように 2 千年前には、カニシカ王も、当時の仏教学識者も、弥勒如来と観自在菩薩の間には無上に密接な関係があると考えていた。

---

1. 『サッドルマ・プンダリーカ・スートラ』第25 法華経。

P244

## 弥勒・阿弥陀如来の住まい

さて、弥勒如来とは阿弥陀如来であることが判明したことから、今後は、弥勒如来と記す代わりに弥勒・阿弥陀如来と記すことにする。

ヒンズー教典を始めとする各宗教の聖典のように仏典においても、弥勒・阿弥陀如来の出現地がはっきりと示されている。その地に達するために釈尊が予言の中で詳説した標識の完全なる理解を助ける靈的資質も同じく明示されており、無上に重要なこの地の謎の数々の解明を可能にするためにも必要であるため、まずこれに触れよう。釈尊はこれらの資質を韋提希<sup>1</sup>と阿難との会話の中で順次説明する。弥勒・阿弥陀如来の浄土をどうしたら見つけられるのでしょうか、という韋提希の質問に応え、敬虔な弟子すべてが到達を切望する浄土の発見に必要な三つの靈的資質をまず身につけるようにと釈尊は教えた。

「かの仏国に生まれるに必要な浄らかな行いをすでに完成した者たちを瞑想することに思いのすべてを傾けるがよい。私は今、その行いがどんなものかをそなたのために完全に説き、それにより、浄らかな行いを修めたいと願う未来の凡夫すべてに西方の極楽世界に生れる機会を与えよう。

---

1.阿闍世王の母。阿闍世が殺害した父、王舎城王ビンピサーラの王妃。

P245

その仏国に生れたいと願うものは、三つの善行を修める必要がある。一つには、親孝行をし、師や年長者に仕えて敬い、慈悲の心でむやみな殺生を控え、十善を修めること。二つには、仏・法・僧の三宝に帰依し、戒めのすべてを遵守し、それらの品位を落としたり祭祀を疎かにしないこと。三つには、悟りを得ることに専心し、因果の道理を深く信じ、法を研究して暗唱し、同じ求道者たちに説き、学ぶよう励ますこと。

今、挙げた三種の行いを（仏国へと導く）浄らかな行いという。韋提希よ、分かっただろうか。この三種の行いは、過去・現在・未来の仏すべてが教える浄らかな行いであり、これにより効率的に悟りが得られるのだ<sup>1]</sup>

釈尊は、弥勒・阿弥陀如来の住まいを見出すに必要な靈的な洞察力<sup>2</sup>を得るための手段を伝えるとともに、神の顕示者全員が一つであり、それぞれのダルマ（教え）すべてが根底では同じであるという原則を繰り返して述べることで、彼ら偉大な存在の背景にあり、彼らが人類のさなかに出現す

る根源的な目的に行き着く道を示している。人類の一体性というその目的を果たすために弥勒・阿弥陀如来が出現する地点を伝えようと、釈尊は韋提希と阿難と対話する。この対話が、奇跡の双子が到来する正確な場所発見への探求に乗り出すのに必要な手段と、その場所の説明に関わる相当量の情報をもたらしている。よって、場の様相をできるだけ明確に知るには、さらなる引用が必要である。

「そなたたちは、私の話をよく聞いて、熟考するがよい。如来である私は今、煩悩に苦しめられる未来の者たちすべてのために、（仏国に入るために）必要な浄らかな行いを説こう。韋提希よ、このことをよくぞ問うた。そなたがたづねたことが問いにふさわしい。阿難よ、そなたは仏である私の言葉を記憶し、多くの会衆に広く伝えるがよい。如来の私は今、韋提希と未来の者たちすべてが瞑想によって西方の極楽（浄土）の世界を心に思い描けるできるように教えよう」

---

#### 1. 『アミターユル・ディアーナ・ストラ』

2. 釈尊が列挙した、奇跡の双子が曙光を投げかける場所の認識に必要な資質に照らすと、「純然たる無私」と盲目的でない信念とは、空想じみた推測による幻影と、実際の物理的な位置を伴う現実を区別するために持つべき信仰であると認識するのはそれほど難しくはないはずである。

P246

「未来」という言葉が繰り返されている。殊に同じ段落で二度言及されている以上、その意義は大きい。釈尊が未来を強調していることに疑いの余地はない。それゆえ、現代の仏法の様相に当てはまる「五つの消滅」、パセーナディ王が見た16の夢、ヒンズーとゾロアスターの教典の予言のような、本書で調査した結果、現代の状況にすべて集約されていることが確認できた別の諸々の要因に照らして検討すると、弥勒・阿弥陀如来の浄土についての釈尊の説明が現実の物理的領域をもつ浄土の存在が現代世界にあることを示唆していることは間違いない。このことは、釈尊が説明する浄土が存在する場を指し示す様々な標識に明らかに従うものである。釈尊が述べたのは、私たちが生きる現代に蔓延する状況だろう。これからまもなく明らかになるように、「西方」についての釈尊の言及は寓話ではない。釈尊がこの対話をしていた東インドのビハール州から見た、現実の地勢上の西方を決定的に意味している。なおかつ、ヒンズー教と仏教両方の予言からすでに指摘されるように、その場所の位置に課せられた状況からも、アーリヤ人の土地の域内である必要があった。換言するなら、カピラ城の西であるとともにかつ、イランの西側国境は越えていない。

「目の前に掲げられた鏡に映し出された自分の顔かたちをはっきりと目にするように、仏の力によってのみ、その浄土を曇りなく見ることができる。そしてその国土の幸福が最も素晴らしい状態になるのを見れば、心は喜びに満ちあふれ、どんな結果が起きようとも耐え忍ぶ用意ができた諦念にただちに達するだろう。韋提希よ、そなたは凡夫にすぎず、心が弱く劣っている。天眼通をまだ得ていないゆえに、はるか遠くにあるものを見ることができない。

しかし、すべての諸仏と如来にはさまざまな方便があるゆえに、そなたにもかの仏国を見る機会を与えることができるのだ」

釈尊は物理的なものとして浄土を視界に収められると述べている。しかも「国土の幸福が最も素晴らしい状態になるのを見れば」と述べることで、完成されているのではなく、完全に完璧な「最も素晴らしい状態」になるまで進歩を遂げていく過程にあることを示している。

P247

よって、その潜在能力の全開に向けた成長と進化を必然的に特徴として備える物理的な場所であることが改めて示されている。また、弥勒・阿弥陀如来の出現場所についての釈尊の説明が、満を期して栄光に輝くまでに進化する運命にある現実の地上にある物理的住まいの描写として適していることは確かである。しかも、韋提希が釈尊の力によって西方浄土の光景を垣間見ることができ一方で、未来の人間がどう認識できるかについて釈尊に質問する時点で、浄土が大きな意義を持つのは未来だけであることに、韋提希が十分気付いていることも確かとなる。

「世尊よ、私のような者でも仏のお力によって今、その国土を見ることができます。けれど、世尊が涅槃に入られた後の世の、善い資質がないために五苦<sup>1</sup>に苦しめられる者たちは、どうすれば無量寿仏（＝弥勒・阿弥陀如来）の極楽世界を見れるのでしょうか」

そこで釈尊は韋提希に仰せになった。「そなたや他の未来の者たちは、西方<sup>2</sup>の様相を心に思い描くことだけに思いを集中させるがよい」

物理的で地勢的な観点から西方について語っていることに、釈尊は疑問の余地を残さない。来世に関心を向けよ、などの曖昧な指示もしていない。そして、運命づけられた時代である現代の彼の信者に、求めて目にすべき光景に視線を向けるようにと、阿難と韋提希との対話を通じて的確に命じている。

「では、どのように心に思い描くのだろうか。説明しよう。生れついでにの盲目でない限り、誰もが一樣に視力を持ち、沈みゆく太陽を目にすることができる。姿勢を正して座ったなら西に視線を向け、夕日への黙想に心を整えるがよい」

---

1. 生老病死苦。

2. 例えば『ヴィシュヌ・プラーナ』のようなヒンズー教典においても、ヴァルナは「西方」の都市とされ、「Mokhya：主だった者」「Sukha：幸福」「Nimlokani：日没の都市」と呼ばれている。希望、期待、救済の都市ともみなされている。他方、イエス・キリストは約束された救済者を見出すには東を見つめるように、と信者に命じた。「ちょうど、いなくとも東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう」(マタイによる福音書 24:27)。キリストの位置から見て東にあり、釈尊の位置から見て西にある唯一のアリーヤ人の土地はイラン(ペルシャ)しかない。弥勒如来が出現する場所の要件を唯一満たしている。

釈尊が重視したのは、太陽や、日没や日昇の方向だけであった（上記のように述べることで、「日が昇る」東方を優先事項から巧みに除外するとともに、カピラ城より「東」を出身地とする者が成道を主張することがないようにしたことも留意に値する）。代わりに、西に沈む太陽が象徴するものを実に鮮明に描写した。

「そして一心に意識を釘付けにさせたなら、まさに沈もうとしながら、宙に浮かぶ太鼓のようになっている夕日を心の中で凝視しなさい<sup>1)</sup>」

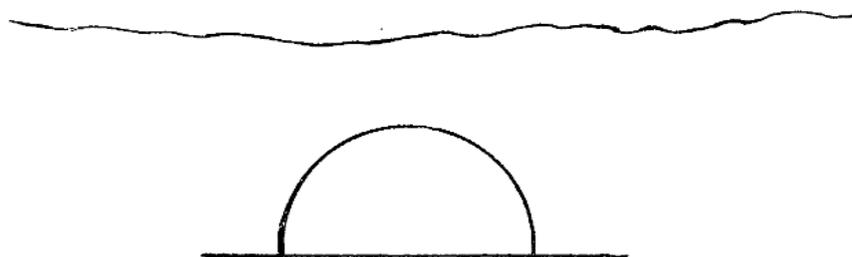


図1

だがこれは、夕日の一般的な描写ではない。細部まで実に明確であるため、気が散漫な人々を除けば、釈尊が特定の場を強く指し示していることが分かる。釈尊が私たちの意識に焼き付けている光景は「宙に浮かぶ太鼓のように」みえる、沈みながら黄金に輝く半円形をした夕日である。

「このようにして夕日を目にしたなら、目を閉じても開けてもその情景が消えないよう、心に明瞭に焼き付けなさい。これを日想といい、第一の観とする」

釈尊の指示に曖昧さはない。思い描く光景の中に他に何が引き続いて浮かんでこようと、図1に示すように、上下を逆さまにして宙に浮かぶ太鼓\*の形で沈みゆく、黄金の半円形の太陽の姿を心の目に焼き付ける必要がある。

---

1. 『アミターユル・ディアーナ・ストラ』

※訳者注：古代インドの太鼓は半球型をしていた。

「次に水を想い描くがよい。浄らかに澄んだ水を心の中で凝視し、その後でもその情景が明瞭で崩れないようにし、意識散漫になって消失しないようにしなさい

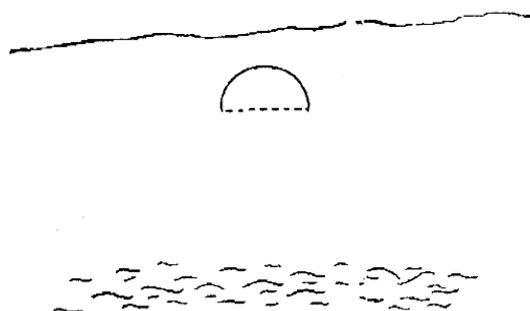


図2

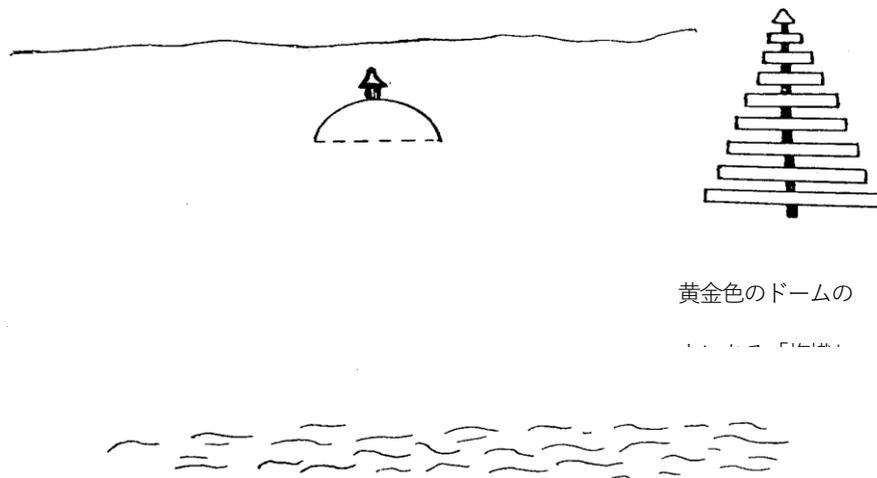
建築家と技師たちがドーム状構造を初めて建造したのは、釈尊の時代から少なくとも千年後のことだった。それゆえ、上下を逆さまにして宙に浮かぶ太鼓の形で輝きつつ沈みゆく太陽という釈尊の説明は、ドーム状構造が知られたり着想される以前のはるかな昔の時代に、黄金色をした建造物の説明を可能とする最も近いイメージだった。心象風景を埋めていくための釈尊の説明は次のように続く。

「水を心に描いたら、今度はその水が氷結した様子を思い描くがよい。そしてその氷が輝いて透き通る様を想い描きながら、瑠璃のように見えると想像するとよい。このように想像したなら、瑠璃の大地が内にも外にも透き通り輝く光景を見るだろう」

釈尊が「瑠璃のように見えると想像するとよい」と述べていても、大地が実際に瑠璃でできているという意味ではない。瑠璃（ラピスラズリ）のように青緑の地に金が散りばめられた色をしているということである。瑠璃の色自体が多彩に移り変わるように、季節によって色が変わりゆく一画の土地がここに示唆されている。

「瑠璃の大地の下方には、大地を支えながら、七宝<sup>2</sup>、金剛石を始めとする宝で飾られた黄金

の旗幟<sup>1</sup>が一つ、目に入るようになるだろう。それが羅針盤の八つの方位点に向かって延伸する結果、（大地の）八つの隅角が完全に充填される」



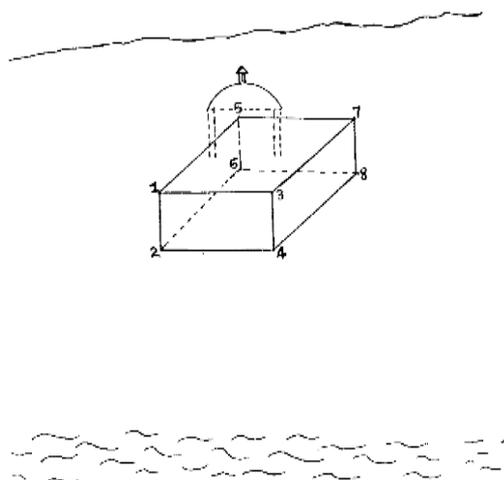
黄金色のドームの

図3

1. 本節の逐語訳。俯瞰的視点からの透視図が積尊の天眼に映ったとみなすなら、金色の旗幟の上にも下にも(瑠璃色の)大地が確かに広がっている。旗幟はもちろん最上部にあるものを象徴する。
2. 『サブタ・ラッタ』。七宝や貴物についての記述は定まっていない。金、銀、瑠璃、水晶、珊瑚、瑪瑙、碑磔が一例である。宝や七つの貴物なる樹々の茂みは「極楽浄土」の一部をなす。また、七つの「道」や七つの富(信仰、熱意、慎み、羞恥、法話を従順に聴く、煩惱の放棄、瞑想がもたらす智慧)も象徴する。

P251

羅針盤の八つの方位点と言及されていても、羅針盤に「隅角」はない。よってこの一節は「八つの隅角」に表象される立方体構造を示している。



#### 図4

その瑠璃の大地の地表には、黄金の縄が縦横に張り巡らされ、七宝で（できた紐で）区画が整然と仕切られている。

P252

そして、世尊は阿逸多菩薩にこう尋ねた。「阿逸多よ、かの仏国の整然と並んだ装飾品と良き資質が完璧であるのが見えるだろうか。魅力的な苑、魅力的な庭園、……多くの貴重な紅蓮、青蓮、黄蓮、白蓮がここかしこに花開く蓮池がある天空の上（宮殿）でも、天空の下でも、すなわち、大地から、花々で覆われ、花輪で飾られ、如来が創造されたあらゆる種類の鳥の群れが頻繁に飛来する多くの尊い柱の列の上で輝く天空に到るまで、完璧な様子が見えるだろうか」

「世尊よ、見えます」と答えた阿逸多菩薩に「もう一度見えるか、阿逸多よ。不滅の鳥の群れが仏国全体に仏の声を響かせているのだから、菩薩たちは仏について瞑想せずにはいられないのではないかな」と世尊がさらに尋ねた。「世尊よ、ごもっともです」と阿逸多菩薩は答えた<sup>1</sup>。

この地が聖地であることが写真<sup>2</sup>から自明である一方、聖堂がいくつか建立された庭園には様々な鳥の美しいレプリカが確かに置かれている。中でも、その存在感を特に放っているのが、不滅を象徴する孔雀と、統治と力を示す鷲である。これらの鳥を含む、種々様々な生きた鳥が庭園を頻繁に訪れている。

経典には「人間には登ることが困難な天空の都市、アラカナンダ」と述べた箇所もあり、この地が登る場所であることを示唆している<sup>3</sup>。上座部仏教徒の間でも、そのごく初期の時代から、弥勒如来の浄土は人気を集めるようになっていた。彼が到来するなり、地上は格段に実り豊かとなり、活気に満ちた状態になるだろう、という予言に由来する<sup>4</sup>。釈尊の時代よりも大地は広く<sup>5</sup>、肥沃な金色の砂がその地表を覆うだろう<sup>6</sup>、

---

\_\_\_\_\_

1. 『大スカーヴァティール・ヴィューハ』 40.
2. 現時点では、釈尊がここに説明している聖廟の写真を分析し検討するだけで十分である。271 頁の図 6 も参照されたい。その本質と正確な位置は次章以降で明らかにする。
3. 『マハーヴァストゥ』 32.2 から、「アラカナンダ」とは「神の喜び」を意味し、「ナンダ」は至高者の称号の一つであり、「天界で最も富貴な都市」としても知られている。また、小山に登ることが、「登ることが困難」であり、単に「入るのが困難」ではないことから、その地に入るには、実際に肉体を行使するのではなく、虚飾を排した状態に精神をまず整えることが条件付けられているようである。
4. この予言で語られているのは全世界であり、単なる一つの小地域でないことに留意することが大切である。この観点から、この予言は科学の力を備えた現代に当てはまる。緑の革命、気象制御、現代式の灌漑の他にも例は少なくない。これらは驚異的な収穫高を確かにもたらしている。
5. この予言は比喩的にも文字通りにも現在成就している。釈尊の時代の複数の小地域どころか、全世界の地勢が今や判明している。だが副次的には、海面より高く埋め立てをするための土砂の持ち出しの結果、より多くの地表面がむき出しにされ、居住不可能な土地が増えている。
6. 現代の肥料散布を適切に言い表している。



图5



人口密度は高く、田畑からの収穫は7倍となるだろう、とも予言されている。だがこうした様相はこの惑星一般についてであり、特定の場所についてではない。当該の場所は感覚に強く訴える光景で概説されている。明るくて瑠璃色で構成され、静穏でいて素晴らしく、目に美しく、金糸で仕切られた格子縞模様の中に固定された宝樹で飾られ、花々で覆われた場所であり、口論の調停に長け、聴く者に功德をもたらす話を常に講じ、嫉妬も立腹することもなく、正しい原則を常に守る者が存在する地とされている。

「その一つ一つの宝が五百色の光明を放つ様は花に似ており、また星や月のようでもある。大空高く放たれた光明は、百の宝で建立されて光明を放つ千万階の高楼の姿を形成する。高楼の両側それぞれには一億の華麗な旗幟が掲げられ、無数の楽器で飾られている。そしてその輝く光明の中から八種の涼やかな風が吹き、これらの楽器をかき鳴らすと、苦・空・無常・無我の教えが響きわたる。このように想いを描くのを、第二の観と名づける。

次に極楽世界の池の水を想い描くがよい。極楽世界には八つの池がある。それぞれの池の水は、実にやわらかな七宝から流れ出たものであるが、宝の中でも王たる、あらゆる願いを叶える宝玉を源泉にしている。それが分れて十四の支流となり、流れの一つ一つがみな七宝の色をたたえている。その水路は黄金でできており、底には色とりどりの金剛石の砂が敷かれている<sup>1</sup>。

さてこの観が形成されたなら、さらにそのようすを一つ一つ想い描いてできるだけはっきりと見えるようにし、目を閉じてても開いても目の前から消え失せないようにしなければならない。そしてただ眠っているときを除いて、常にこの情景を想い続けるがよい。このように想い描くことができれば、薄々ながら極楽浄土を見たということが出来る<sup>2</sup>」

---

1. 『アミターユル・ディアーナ・ストラ』 11.13.

2. 『アミターユル・ディアーナ・ストラ』 11.12.

こうした「華麗な」説明は、建造物とその周辺環境の美と壮麗さを称賛するのに実に適っている。「大空高く放たれた」からは、丘陵か高台に位置していることが示唆され、「高樓の両側それぞれには、……華麗な旗幟が掲げられ、……楽器で飾られている」には、高い建造物か塔が、現代の公衆向け放送装置とともに、花で飾ったいくつものアーバーに囲まれたり、至るところに興味よく配置されていることが示されている。観想を通じて脳裏に映し出されるこの光景は、湖か川、あるいは海である水域の岸边にあるものとして最終的に完成されている。

釈尊は弥勒・阿弥陀如来がおわす場所についての対話を続け、阿難と韋提希にこう語る。

「かの仏国の地想観が得られたなら、次にはその仏国の宝樹を瞑想するがよい。宝樹を瞑想するには、まず一本づつを思い描き、それらが七列に並んだ様子を想像するがよい。一本の樹の高さは八百由旬那であり、宝樹どれもが完璧な七宝からなる花や葉をつけている」

別の仏典<sup>1</sup>にも、上の引用部分で描写される光景についての釈尊と舍利弗の会話が記されている。

「そしてまた、舍利弗よ、その極楽世界は、七つのひな壇、七列の椰子の木、腕輪紐で飾られている。四方を囲まれて美しく、金、銀、緑柱石、水晶の四種の宝石で輝いている。仏の国は、仏の国特有のこのような見事なもので整然と飾られている」

---

1. 『小スカーヴァティー・ヴィューハ』と『アミターユル・ディアーナ・スートラ』が成立した正確な時期は学派によって見解は異なるが、仏暦800年より後に下る可能性はない。大教、小経とそれぞれ呼ばれる『大スカーヴァティー・ヴィューハ』と『小スカーヴァティー・ヴィューハ』、そして『アミターユル・ディアーナ・スートラ』がいつ成立したかは、各経が翻訳された時期ほどには正確に特定することはできない。インドのトリピタカ法師の僧伽跋摩は仏暦680年前後に中国を訪問して『大スカーヴァティー・ヴィューハ』を訳し、鳩摩羅什は仏暦920年に中国に到来し、滞在しながら『小スカーヴァティー・ヴィューハ』を訳した。そして疆良耶舎はインドから旅して仏暦952年に中国に到着し、『アミターユル・ディアーナ・スートラ』を訳した。ここから、これらの経文は確実に古い時期のものであり、極楽浄土に関連する予言は複数人物が著した近代の合成品でないことが明白となる。これら3種の経文の梵語写本が19世紀に発見されたことで上記漢語訳が真正でありかつ正確であることが証明されたことがその理由として特に大きい。『大スカーヴァティー・ヴィューハ』は王舎城近くの靈鷲山で、『小スカーヴァティー・ヴィューハ』は舎衛城近くの祇陀太子の園林で、釈尊が説法した内容であるとされている。

すぐ上の引用文の用語の一部は物理的特性を言い表したものであり、それが現実であることは弥勒・阿弥陀如来の住居で証明される必要があっても、「仏の国は、仏の国特有のこのような見事なもので整然と飾られている」という最後の一文から今、認識すべきことがある。現実の物体よりはむしろ精神的なものが、ひな壇、背高い椰子の樹々、宝石その他の物体や細目によって象徴的に示

唆されている。釈迦如来は物質的な富や壮麗さに感銘を受けることも強調することもなかった。霊的なものと物事に内在する霊的な意義にしか関心がなかったのである。

釈尊は、阿難、韋提希、舎利弗を始めとする話を聞いていた者たちに、観想した約束の地の光景を決して脳裏から消し去ってはならないと強く念を押した。今度は彼らが、弥勒・阿弥陀如来の到来を教え、未来の指定された時に「大勢の人々」がこの地を発見するために必要な手がかりを存続させるためであった。そしてその時が今である。

「阿難よ、そなたは私の言葉を心にとどめて、苦しみから逃れたいと思う未来の大勢の人々のために、仏国の大地を想い描くためのこの法を説き聞かせるがよい」<sup>1</sup>

釈尊はさらに、「浄土」に関連する属性と手がかりを記憶にとどめて説き聞かせるという務めを果たすことで、途方もない功德がもたらされることを彼らに保証する。

「もしこの仏国を瞑想するなら、八億劫もの間、幾たびもの生と死に縛り付けている罪が消え、（現在の）身体を捨てた後に続く次の世では必ずその浄土に生れるのである。このように瞑想することを正観と呼び、そうでないものは邪観と呼ぶ」<sup>2</sup>

阿弥陀如来の仏国土である極楽が所在する物理的な場所は、ここに挙げた多くの詳細な言及に示されている。釈尊は上記した対話をすることで、極楽の多くの様相と西方にあるその場所を思い描くように弟子たちに指示した。興味深いことに、経典の中で名称を与えられている数限りない仏陀すべての中で、釈尊が事細かに言及し、その重要性をかくるほどに詳しく弟子たちに強調したのは、事実、阿弥陀如来以外にいない。そして彼ら弟子たちを通じて、極楽の真の意義の中での最高の重要性を未来の世代に、特に「最後の 500 年間の最後の時代最後の末法の時に」救済に至る道を求め、再発見を必要とするだろう者たちに伝達したのであった。

---

1. 『アミターユル・ディアーナ・ストラ』II.12.

2. 『アミターユル・ディアーナ・ストラ』II.12.

P257

これは当然である。「苦しみから逃れたいと思う未来の大勢の人々」が「浄土」に達するのは、奇跡の双子である弥勒・阿弥陀如来と観自在菩薩を完全に認めることを意味するからである。浄らかなで純然たるダルマを再発見し、説き広め、確立し直すことが、この双子の使命であると、釈尊は述べている。

宗教上の予言についての歴史的な記録の中でも、約束の地、極楽に住むようになる人々についてだけでなく、その場所が「どこ」にあるかについての豊富で詳細な記述は、『小スカーヴァティー・ヴィューハ』と『大スカーヴァティー・ヴィューハ』、そして『アミターユル・ディアーナ・

ストラ』の三つの仏典にしか見出されない。これらの経典には大いなる阿弥陀如来の西方浄土の様相どれもがすべて完全に記されている。仮にそれらの予言をすべて引用しようというなら、本書の厚さは倍増するだろう。それゆえ、説得力が最も強い予言しか本書には載せていない。その上で、比喻である華麗な外装表現を払い除けたことで、本質的な意味と、現代という私たちの時代との驚くべき相関関係が露わにされた。そこでこの三つの経典を読み、本書に載せていない経典中の他の数多くの予言すべてにも目を通すなら、さほどの解釈をしなくても、どれもが現代と関連していることが、読者にも分かるだろう。

極楽についての予言には、「どこで」以外の状況を扱うさらなる側面がある。奇跡の双子が伝えた教え(ダルマ)に照らす以外にその意味は理解できないため、後に取り上げる。

説明した極楽の光景と場所を脳裏から消し去らないようにという釈尊の命令を心に留め置きながら、今、見出さなければならないことがある。経典に輪郭が描かれている「いつ」「どこで」のパラメータの中で、自らは神の化身であると主張する者誰もに要件として常に求められてきた以下の三つの条件を、その背景と業績から完全に満たしている人物は「誰」なのか。

1. 予言。約束された者が「いつ」「どこ」に到来し、「誰」かについて、過去の聖なる宗教の創始者たちが残した予言を成就していること。
2. 計画。独自性がある実践可能な教えが、一部の階級や人種だけを利することはなく、人類全体を高めて幸福にする完璧な手段になるよう計画されている。

P258

3. 実践。計画されたものは、人間を、その目的とするものが私たちの時代、現代に調和した存在となるよう、倫理的に進化させることができるか否かが、実践により試される。すなわち、人類全体が平等に享受できる愛と正義という二本の柱の上に掲げられてかつ、現代の要請である、人類一体性の確立に貢献することを、人間が自らの生きる目的とするために役立つか否かが試される。

P259

## 二人の人物

### バブとバハオラ

### 奇跡の双子

「……正しい教えを聞くのも難しい。もろもろのみ仏の出現したもうことも難しい<sup>1)</sup>」

釈尊の教えは、信仰と家庭を結ぶ従来の絆を断ち切り、忠誠と美德への昔からの遵守を打ち砕いた諸々の問題に直面している。しかもその創造的な勢いをもってしても、広い範囲で複雑さを強めて急速に変化している世界では、神意を受けた他の教師たちが古来からもたらしてきた福音のように、存在する意味とその目的への回答をもって人類の心に浸透することはもはや叶わない。事実、過去千年間に形式化が進んだ。

時は、弥勒如来が到来してダルマ(法)を今一度説き広め、それを通して、現代の科学技術が支配する世界で新たな秩序を打ち立てることを切実に求めている。この新たな秩序には大幅な適合が求められ、ダルマの解説には根本的な変化が必要とされている。

これまでに本書で提示してきたことすべては、「奇跡の双子」たる双子の顕示者を見出して受け入れるための確かな道に私たちを導くための前奏曲にすぎない。これまでに展開したロジックとロゴスのすべてが示す通り、二人は確かに到来した。

---

1. 『ダンマパダ』 v.182.

P260

到来した「時」は今の時代であることが、本書で結論づけられている。「場所」も、すべての大宗教で予言された通り、的確に示された。それは、インド・イランの国境の西側から始まり、西方の地中海沿岸までそのまま延伸する一連の地点から成る一本の細い線である。全地球の広大な地表面からすれば、的が絞られたこの線状地帯は、弥勒・阿弥陀如来が大地を踏み締めながら進んでいくことが予め運命づけられた進路でもある。釈尊自らが出自とし影響を及ぼす範囲より必ず「西」に位置し、釈尊の予言と完全に一致する。

本書ではすでに、「奇跡の双子」に表象される二人の人物を特定するために、最大の霊的な教師が到来した「時」と「場所」に関する十分な証拠を提供した。われこそが約束された者であると主張する者は過去にも現在もいるが、神の顕示者全員がそれぞれの教典で概説した条件を満たすの

は、彼ら靈的な双子をおいて他にはいない。「神の栄光<sup>1</sup>」を意味する「バハオラ - Bahá'u'lláh」という称号を持つ、ホセイン・アリ・ヌーリと、「門」を意味する「バブ」と称号されるアリ・ムハンマドである。双方ともがイラン(ペルシャ)に生まれた。バハオラは釈尊のように、王室の流れを汲む由緒ある家庭<sup>2</sup>に生まれ、彼の父は、ガージャール朝の国王、ムハンマド・シャーの宮廷の国務大臣であった。予言で的確に指し示された年の一つ、1817年(仏暦2360年)11月12日にホセインは生まれた。場所は、イランの首都、テヘラン<sup>3</sup>である。彼が幼少の頃、父親のミルザ・ブズルグ・ヌーリは、ホセイン(「慈愛」を含意する)と自ら名付けた長子が大海の中で泳いでいると、束に分かれた頭髪の一つ一つに魚がしがみつくとという夢を見た。釈尊の父のシュドーダナがそうであったように、彼も夢の意味に困惑し、解明のために招いた宮廷の占い師から、ホセインの運命は比類がないものであると告げられた。

- 
1. Baha は栄光、または光輝を意味し、サンスクリット語の Bha, Abha と同意である。Allah は神を意味する(234頁を参照)。
  2. ホセインの父はイスラム勢力が征服する以前にイランを統治していたササン朝の最後の君主、ヤズデギルド3世の末裔。母はヘブライ人の父祖、アブラハムの3人の妻のうち3番目の妻だったケトラの末裔。
  3. 教典の予言(230-32頁と、231-32頁の脚注)と完全に一致する。だが、ホセイン自身は、この場が生誕地となるような影響を物理的に及ぼすことはできない。
  4. 「その御方は(慈愛という名の御方)を意味する弥勒と呼ばれるだろう」という名前の意味についての釈尊の予言を成就する。ここにも、ホセインは新生児だったため、自らが名づけられる際に一切の発言力を行使できなかった事実がある。(234-5頁を参照)。巻末の用語集の"Husayn"も参照されたい。

P261

占い師は、大海を人類からなる大海、魚を導きと救済を求めてホセインにしがみつくだらう世の中の騒動と解釈した<sup>1</sup>。

ホセインは、青年期の頃に父のミルザ・ブズルグが死去し、父が務めていた国務大臣の職を継ぐように国王から提案された。だが、釈尊のように辞退した。当時の首相<sup>2</sup>は、国王から差し出される一時的な権力と金銭の受け取りと、当然の権利だった職位の継承をホセインに強要しなかったが、後年のホセイン迫害の主導者になり、母国から彼を追放した。記録にはこう記されている。「ホセインの運命は、時の経過とともにはるかに大きく展開していく運命にあった」。

釈尊の時代のインドでは、浄化の力を持つ彼のメッセージをヒンズー教がひどく必要としていたように、アーリヤ人のもう一つの土地、イランも、19世紀には同じ状態にあった。古代の栄光と、アーリヤの文化は忘れ去られ、文化の基盤であったゾロアスターの福音は完全に効力を失い、分裂状態にあった。そして仏暦13世紀(西暦8世紀)には、ムハンマドが説き広めた神からの新たな活力あるメッセージによって最終的に屈服し、その座を奪われた。ムハンマドの正義と平等の

メッセージは中東の国土すべてに新たな生命と活力を吹き込み、イランの古代王国に新たな霊的な春をもたらした。だが、数世紀が経過すると、イスラム教も荒廃を免れなかった。ホセインの時代までには、初期の純粋さと信徒の熱意に頹廃と分裂の空気が覆い被さり、その倫理構造と国民の隅々にまで、無気力さと頹廃という惨めな様相を示した。19歳という多感な年齢にあって、父の死去の直後に差し出された一時的な栄華と特権の享受を拒んだホセインは、自らの周囲の秩序が瀕死状態にあることに気付いていた。そこでこの世の煩いから逃れ、下層の貧者の援助に忙しく従事した。釈尊のようにホセインも、人類の精神を崇高さの新たな高みへと引き上げるだろう導きを求めているのである。

- 
1. ホセインの父親が見た夢で、ヴィシュヌが再臨するというヒンズー教の予言が成就した(217頁参照)。
  2. ハジ・ミルザ・アガシ、ガジャール朝の君主、ムハンマド・シャー、の悪辣で狡猾な宰相だったアガシは、シャール朝の崩御の直後に追放され、自殺した。

P262

純然たるダルマを再び確立させるために「奇跡の双子」が出現するという、イスラムの教典に記された予言が成就するまでもう少しの頃だった。ホセインは27歳になる前、自国のイランの都市、シーラーズの若い商人で、バブ（「門」の意味）という称号を引き受けることになった、アリ・ムハンマドという名のセイエド（預言者ムハンマドの直系の子孫を意味する）が、「時代の主」の到来が差し迫っていることを宣言するために立ち上がったことを耳に入れた。バブは自らを、新しい世界共通の霊的な時代の「先駆け」または「門」として宣言していた。

1,400年以上前にアラブ人の中に出現した神の顕示者ムハンマド直系の子孫、バブは、1819年（仏暦2362年）10月20日に東南イランの大都市シーラーズで誕生した。イランの古代暦によれば、バブの誕生日はムハッラムの月の初日に、バハオラの誕生日は二日目に当たる。それゆえ、初日の日没から二日目の日没までが一つの壮大な「双子の祝祭日」としてイランでは祝われ、「奇跡の双子のような一つの奇跡が劫の終焉時にダルマを教えるだろう」と予言した釈尊の言葉を実に明瞭に象徴する。二人が歴史の舞台に登場した「時」は、物理的世界に誕生した「時」でもあり、双子の誕生と実質的に違わない。二人が人間界に出現した「場所」も、釈尊を始めとする神の偉大な教師の予言に示唆された同一の国だった。「双子」の定義を満たすなら、イランという同じ子宮から「双子」は出現する必要があった。

双子の顕示者の到来について神の宗教すべての教典で千年以上前に予言されていた様相はもはや出現し、形を成していた。釈尊がその到来を予言した弥勒・阿弥陀如来はバハオラことホセイン以外に、観自在菩薩<sup>1</sup>、蓮華手菩薩は双子の片割れであるバブことアリ・ムハンマド以外に、要件を満たす人物は考えられない。

救世主が霊的な再生のメッセージを携えて到来すれば、止むことなき反対に遭うことは避けられ

ない。反対するのは、墮落して無知な搾取者たち、霊的な太陽の新たな夜明けによって権力と富が脅かされることを理解した宗教的指導者だった。

---

1. 『カーランダ・ヴューハ・ストラ』によれば、観自在菩薩は阿弥陀如来と同格である。または、これから紹介するように、バブのバハオラに対する関係そのままに、阿弥陀如来の化身に位置付けられることもある。同上の経典には、釈尊が姿を消してから、弥勒如来が到来するまでに出現すると記されており、観自在菩薩と、弥勒・阿弥陀如来の間に密接な関係が存在することを改めて予告している。

P263

生気に満ちたメッセージを携えた呼びかけに抵抗するために、彼ら、偽りの民衆の守護者たちは、どんな労苦も惜みず行政当局を集結し、聖なる教師本人を殺害するよう群衆を煽動した。それにより、儂い頹廃と錯誤にいつまでも耽溺していられると、歴史からの教訓を顧みずに期待したのである。

釈尊が当時のバラモンたちに嘲られて迫害されたように、わずか 24 歳の若者であったバブが新たな霊的な春の到来を告げるメッセージの宣言と、前時代の萎れた残骸を一掃する使命の公言のために、1844 年<sup>1</sup> (仏暦 2387 年) 5 月 23 日<sup>1</sup> に立ち上がった時には同様の展開となった。そして、激昂したイスラム教の聖職者<sup>2</sup> と行政当局と統治者により、釈尊のように直ちに攻撃された。聖職者たちは政権の指導者たちを快楽に耽溺させて操り、分別を欠いた大衆の中から狂信的な群徒を生み出すと、バブを攻撃するよう指図したのである。

バブが最初にそのメッセージを宣言したのは、18 人の者たちに対してであった。その中の一人が、クッラトゥル・アイン (目の至福) という称号を持つ女性であり、母国のイランではその比類なき聡明さと美しさで著名な詩人であった。この 18 人<sup>3</sup> 全員が、直感と祈りを介し、新たに昇った霊的な太陽、若さ溢れるバブを、互いに見知らぬまま、個々に認めるに至った。

---

1. 新たな日の夜明けの先駆けとなる重大な出来事について教典に記された予言がまさに成就した年(222 頁参照)。バブはモラ・ホセイン・ボシュルエイ(ボシュルエイはイランのホラーサーン州の町)という名の若く学識が深いイスラム教神学識者を前にして重大な宣言を行った。モラ・ホセインは、高名な師、セイエド・カゼムの死去直後からの数年間、選りすぐりの同じ門下生たちと共に、イスラム教を含めたすべての宗教の信者が到来を待望していた約束された人物を探し出す旅に出ている。バブのこの宣言によって最高潮を迎えて探求が果たされた経緯が、ナビル・アザムによる魂を揺さぶる物語『夜明けを告げる人びと』(米国イリノイ州ウィルメット、バハイ出版局、1932 年)においてすべて正確に記録され、バハイ信教の守護者、故ショーギ・エフェンディにより、ペルシャ語から英訳された。

2. 「また、享楽に貪欲な者は、在家信者に法を説き、あたかも六波羅蜜を修めているかのように尊ばれる」『サダルマ・ブンダリカ・ストラ』

3. 釈尊の生誕地に関して、アーリヤ系の二つの民族が釈尊の時代に親密な関係を享受していたことの象徴とし

て、大きな意義を持つものがある。バブが最初に弟子にした18人の一人、ラージャスターン州のイスラム公国の王子、セイド・ヒンディは、バブが投獄されている山林地帯のチェリーグに赴くと、バブの面前に通され、最初の18人の弟子の一人として数えられたが、インドに帰国して新たな夜明けがなされた吉報を広めるようにとバブから指示を受ける、という夢を見た。本書の著者が10代の頃のインドにはバビ教徒がいた。その一人がラージャスターン州ブーンディーに駐在していた著者の親の後見を受けてバハオラの信者となった場面を、著者は目にしたことがある。

P264

弟子になった彼らの中で、2名が傑出していた。バブがその使命を最初に宣言したモラ・ホセインと、「ゴッドス」の称号が贈られたハジ・モハメッド・アリ・バールフシイであった。後者は18人の中で最後に弟子になったが、内なる視覚と心の純粋さで、選ばれた仲間の中で最高の地位に達した。その後、この18人は「生ける文字」として不滅の存在となる。そしてほどなくして、一人ひとりがバブへの信仰をまさにその命によって試されていったのである。商いの道具を使った拷問にかけられ、イスラム国家イランの聖職者と支配者が命じる力づくの襲撃により、命の火を無慈悲にも消されていった。

贈賄が横行し行き詰まった社会に生気を吹き込むために、無類の不滅の存在となる最初の信者たち<sup>1</sup>「生ける文字」をバブが送り出す際に自筆で記した書簡の呼びかけは、釈尊が最初に弟子<sup>1</sup>入りした者たちに自ら与えた激励の言葉を痛切に想起させる。

「わが愛する友よ！ あなた方は今日という日に神の名をになう者である。あなた方は神の神秘の宝庫として選ばれた。あなた方の一人ひとりが神の美德をあらわし、その正義と威力と栄光のしるしを自らの行動と言葉で示さなければならない。あなた方の身体でさえ、その目的の崇高さ、生き方の高潔さ、新年の堅さ、献身の高尚さを証明するものでなければならない。

おお、わが生ける文字たちよ！ 今日という日こそ、いにしえの弟子たちの日をはるかに越える崇高なときである。いや、その違いには計り知れないものがある。あなたがたは神の約束された日の夜明けを目撃する証人であり、その啓示の神秘の杯にあずかる者である。奮起して努力せよ。世俗的な欲望から心を清め、天使のような美德で身を飾らなければならない。あなた方の行動で神の言葉の真実性を証明できるように努力せよ。それと、引き返すことがないよう注意せよ。引き返すなら、別の人々に神は交替させるだろう。あなたがたとは違う彼らは、あなたがたから神の王国を取り上げるようになるだろう。

---

1.愛する比丘たちよ、私は、巨大な網のように人を覆い包む五つの大きな煩惱から解き放たれている。あなたがたもまた、私から受け取った指示により、輝かしき同じ特権を享受している。今、私たちには大きな義務が課せられている。それは、衆人のために無駄なく働き、解放というかけがえのない祝福を彼らにもたらすことである。これから着

手するこの取り組みをより効果的に成功させるために、互いに別れてさまざまな反対方向に進み、二人として同じ道をたどらないようにしよう。さあ、出立し、最もすぐれた法を説き、あらゆる点を説き明かしなさい。(Bigandet, 122. Buddhism)

P265

安逸な崇拜で十分であった時代はもう終わった。しみ一つない清廉な行動に支えられた純粋な心だけが至高の玉座へ昇り、神に受け入れられる時がきたのである。あなたがたは、この啓示の源泉から湧き出でた最初の泉である、最初の点<sup>1</sup>から生み出された最初の文字である。地上の混乱が、世俗の愛情が、一過性のものごとへの追求が、あなたがたを流れる恩寵の純粋さを汚すことなきよう、甘美さを損なうことがないよう、あなたがたの神に嘆願せよ。わたしはあなた方を偉大なる日の到来のために準備しているのである。最大の努力をせよ。それにより、あなた方に今、指示を与えているわたしが、来る世で、あなたがたの行いと達成に、慈悲の座におわします神の御前で喜び、誇りとするようにならんことを。これから到来する偉大な日の秘密は今かくされている。その秘密は今ここで明らかにすることも、測り知ることもできない。その日に生まれた赤子は、今の世で最も賢く、最も尊敬されている人物よりもはるかにすぐれ、その日のもっとも身分が低く、もっとも学問のない者は今の世のもっとも学識ある聖職者よりもその理解においてはるかに先をいくであろう。この地の果てから果てまでくまなく散り、しっかりとした足と清められた心をもって、偉大なる方の到来のための道を準備せよ。自らの弱さと脆さを気にかけてはならない。視線をあなたがたの主である全能者の誰によっても打ち破られない力に据えよ<sup>2</sup>]

弟子一人ひとりを独自の使命へと送り出した釈尊のように、バブもまた、自らの生ける文字たち一人ひとりに、各自の出身地において果たすべき使命を与え、時代の主たる劫の終焉者に向かう門が今や開かれたことを宣言するよう促した。

バブ自身は拘束された。そして、時代の主たる劫の終焉者の目前に迫った到来の先駆けが自らであるという主張を取り調べられてから拷問され、再び投獄された。だが抗いがたいその呼びかけは、獄舎に入れられている間もイラン全土に広まっていった。そして民衆は、メッセージを受け入れたことを行動によって確かなものにするために大挙して立ち上がった。このようにして何万人ものバビ教徒が、頹廃を強めている世界から新しく立ち上がった救世主であり、不滅に至る新たに見出された「門」への信仰を捨てるよりもむしろ、殉教へと向かったのである。

---

1. バブの称号の一つ。

2. バブから「生ける文字」への呼びかけは、『バブとバハオラの物語』ジュナビ・コールドウェル著、本子コールドウェル訳、西田書店(1995年)、から大半を引用。

大勢の英雄的な魂と、主（バブ）への忠誠を誓い、その忠誠を血で封緘した二人の著名な指導者、ゴッドスとモラ・ホセインについての驚くべき預言が『サダルマ・プンダリカ・スートラ』<sup>1</sup>に含まれている。少し長くなるが関連箇所を以下に引用する。

その後、薬王菩薩と大楽説菩薩は、二万の菩薩たちと共に、仏の面前で次の言葉を述べた。

「願わくは世尊よ、憂慮なさいませんように。私たちは世尊の入滅ののちに、この経典を一切の生きとし生けるものに説くでしょう。後の悪世の生ける者たちには、善根に乏しく、高慢で、名利を好み、善意と意欲に欠け、道理から離れているために、教化するのは難しい者たちがいることは承知していますが、私たちは強い忍耐力でもって、この経を読誦し、受持し、説き、書写し、讃え、敬い、崇め、礼拝し、身命を犠牲にしても、経の意味を明らかにするでしょう」

「世尊よ、憂慮なさいませんように。世尊の完全なる入滅ののちに、生きとし生けるものがこの経典を書写し、受持し、熟考し、他ならぬ世尊の力によって、その意味を明かすことになるよう、私たちはあらゆる方角に赴きます。世尊よ、他の世界にいましても、私たちを守ってください」

そして諸々の菩薩は、次の詩句を斉唱した。

- ◇ 世尊よ、憂慮なさいませんように。あなたの完全な入滅の後の、世界の最後の恐ろしい時代に、私たちはこの崇高な経を説き広めます。
- ◇ 世尊よ、愚かな者たちの手によって、怪我、脅迫、殴打、刀杖による脅迫を、私たちは被りますが、耐え忍びます。
- ◇ 恐ろしい最後の時代の人々は悪意を持ち、性格が捻じ曲がり、邪で愚鈍、高慢で、未だ会得してもいないのに会得したと夢想するようになるでしょう。
- ◇ 世俗のことだけを気にかけている残酷な悪人が私たちが避難している人里離れた森<sup>2</sup>に入り、私たちが告発するようになるでしょう。……
- ◇ かの偉大なる聖見者たちへの崇敬の念から、これらすべてに、私たちは耐え忍ぶでしょう。
- ◇ そして、私たちが説く法に耳を貸さない愚かな者たちも（早晚）悟るようになるでしょう。ゆえに、私たちは最後まで耐え忍ぶのです。

---

1. 『サダルマ・プンダリカ・スートラ』XXIV,w.17-27も参照。「観自在菩薩への献身」

※訳者注：H. Kern による梵文英訳の和訳)

2. バビ教徒の歴史的な虐殺に言及している。現場となったタバルス山の砦では、モラ・ホセイと主たるバビの多くが殺された。ナビル著『夜明けを告げる人々』を参照。

P267

読み進めていくと、予言でもある驚くべきこの対話は、奇跡の双子（バブとバハオラ）が到来する時（最後の時代）に言及し、新しい「真の仏教徒」であるその弟子たちについてを語っていることが、必然的に明確になってくる。19世紀にも20世紀にも、あのような虐殺と殉教が仏教徒に起きた事実の記録は確認されていない。上に引用したなかでも、「かの偉大な聖見者たち（バブとバハオラ）への崇敬の念から、これらすべてに、私たちは耐え忍ぶでしょう」とする文には、奇跡の双子の信者の特徴である、神の多くの聖なる教師たち、すなわち仏陀たちへの信仰が示唆されている。彼ら仏陀たちへの崇敬に関しては、「新しい真の仏教徒」と題する本書17章で記すように、釈尊が付加的な予言を明確に残している。それゆえ経文は、19世紀のバビ教徒がバブへの信仰の証として勇壮果敢にも受け入れた艱難を説明していることがより一層に確かとなる。

- ◇ その恐ろしい、最も怖るべき大革命の時代には、悪鬼のような多くの比丘<sup>1</sup>が立ち上がり、私たちが口汚く罵り侮辱するであろう。
- ◇ 世尊<sup>2</sup>に対する尊敬の念から、いかに困難であろうとも耐え忍び、忍耐の鎧を着けて、私はこの経を説きましょう。
- ◇ 世尊よ、私たちは自分の身命を気かけずに、主に頼まれ委ねられたことを受持し、啓発のために大切に守り保ちます。
- ◇ 世尊自らご存知に違いない。この最後の時代には、靈妙な言葉を理解しない邪悪な比丘がいる。
- ◇ 彼ら比丘から、顔をしかめられたり、繰り返しての否認（あるいは隠蔽）、僧院からの追放他、多くのさまざまな虐待を受けるが、耐えなければならない。
- ◇ しかし、世尊の指示に留意し、その最後の時代には、会衆の中でこの経を臆することなく宣べ伝えます。
- ◇ 世尊よ、私たちは至る所の町や村を訪れ、あなたから託された預かり物を大事にする人々にこれを伝えます。
- ◇ 世尊よ、あなたの言葉を伝えますゆえ、願わくば心安穩に平静であれ。偉大なる聖見者よ。
- ◇ 世尊は御前に十方から仏たちが集まってこられたことをご存知である。そのすべての面前で、私たちはこのように言葉に出して誓う（ことを世尊はご存知であるに違いない）<sup>3</sup>。

- 
1. このような僧侶と聖職者を、真の信者から区別すること。
  2. 「世で最も尊い御方」. 劫の終焉者の別の称号(262 頁では「時代の主」). バブは自らは彼の先駆けと主張した。
  3. Ch.22 "*Ancient Devotion of Bhaishagyaraga*"も参照。

P268

罪なき 20 万人以上を流血の大虐殺にかけても飽き足りない当局と聖職者層は共謀し、バブ当人を処刑することで、下層の貧者たちがバブの旗印に向かって繰り広げた大規模な運動を最終的に終結させることにした。だがここでも、奇異な敗北に遭う。聖典すべての例に違わず、イスラム教のコーランにも、奇跡の双子こと、この劫の最後に到来すべき聖なる双子の顕示者の出現に関する予言が豊富に記載されているが、初めの到来者がイスラム暦 1260 年（仏暦 2387 年、西暦 1844 年<sup>1)</sup>）に登場し、イスラム教徒の手にかかって死去すると予言されていた。そのコーランで予言され、バブ自身が「存在の真髓」と言及した 2 番目の聖なる教師が、将来の「時代の主」たる劫の終焉者に他ならない。ヒンズー教のカルキ・アヴァターラ、仏教の弥勒・阿弥陀如来である。

すでに最初に登場していたバブは、新風を生み出し、宗教という仮面の下に欺瞞と道楽三昧の古い秩序でこしらえた城塞を取り崩した。この新風を目指し、大衆が絶えず数を膨らませながら集結したことで、偏狭で盲目的信仰の聖域を、その説教者、墮落した聖職者、そして悪辣な共謀者のガージャール朝もろとも一掃しかねない脅威となった。バブの新しい宗教の炎を消滅し、バブが詐欺師であることを証明できると考えた当局は、最終行為として騒乱罪を捏造し、審判にかけることなく、投獄していた北方の国境地帯の町、タブリーズで、バブを処刑する決定を下した。この陰謀の第二部には、自らは神から遣わされた教師である、というバブの主張は偽りであることを示す試みが盛り込まれていた。彼らが思いついたのが、劇的なある策略だった。ムハンマドの血統から出現する双子の顕示者の一人は、ムハンマドの民であるイスラム教徒によって殉教する、というコーランの予言は、バブによっては成就されないことを証明することだった。

- 
1. 263 頁と、222 頁の脚注 1 を参照。予言されていた到来の年。

P269

そこで、バブと、その年若い弟子のムハンマド・アリの、タブリーズの兵舎<sup>1)</sup>に駐屯していたアメリカ人キリスト教徒の連隊による処刑が決定された。

1850 年 7 月 9 日。公正で正義に溢れた新たな日をイランと全世界が迎えるよう、先駆けとしての務めに着手してから、6 年しか経過していなかった。純粹さと愛の真髓であるバブは、信者に宛

てた最後の書簡を口述筆記させていると、乱暴に作業を中断させられた。しかも、自らの使命が完了するまでは地上のいかなる力も遮ることはできないと看守に告げたにもかかわらず、兵舎前の広場に引きずり出された。その場で、年若い弟子のムハンマド・アリの顔がバブの胸部を覆うような形で壁から吊るされた。バブが縛り上げられている間、処刑を命じられたアルメニア人キリスト教徒連隊の隊長のサム・カーンがバブに近づき、自分はキリスト教徒であり、何の悪意もないことを伝え、バブの血を流さなければならない任務からの解放を懇願した。「命令どおり執行するがよい。もしあなたの願いが誠実なものであれば、全能なる神は必ず、あなたを窮地から救って下さるであろう」とバブは答えた。兵士たちが射撃態勢に入ると、タブリーズの何千人もの住民と、領事館<sup>2</sup>から赴いた少なくとも3名の関係者の前で、発砲指示がカーンにより下された。750発の銃撃から立ち上った硝煙が消えると、見物に来ていた群衆は驚くべき光景に呆然とした。若いムハンマド・アリが、自分が吊り下げられていた壁の下に佇んでいた。若者をバブの身体に結びつけていたロープはちぎれている。バブ自身はどこにも見当たらない。

タブリーズの英国領事ジャスティン・シールから、キリスト教徒で、英国の外務・英連邦・開発大臣、パーマストーン卿に送られた報告の一部をここに引用する。

「この宗派の創設者がタブリーズで処刑されました。改宗者の数を大きく増やしていたであろうその教えは、マスカット銃の一齐射撃で殺された彼の死により、輝きが今、もたらされようとしています。一齐射撃の後に立ち込めた硝煙と塵埃が消え去って視界が晴れたとき、バブの姿は見当たりませんでした。

---

1. 多数のアルメニア人キリスト教徒は仲間を虐殺してきたイスラム教徒を憎悪していたが、ガージャール政権は頽廃したその政治への反乱に常に脅かされていたため、イラン軍の治安部隊として彼らを雇用していた。

2. 英国、フランス、ロシア領事館. タブリーズは当時のロシアと接する国境地帯の町であったため、これら大国は特に聴音哨として領事館を常置していた。

P270

民衆は空に昇ったのだと声を放ち、その身体を縛っていたロープは銃弾でちぎれています<sup>1]</sup>

明言はされていないが、民衆が異常に興奮したことは間違いない。銃撃の効果の証拠として、ちぎれたロープを高々と掲げ、超自然的な出来事による衝撃を消散させようと試みる役人がいれば、狂乱の態でバブの探索に乗り出した役人もいた。最終的にバブを発見したのは、彼が少し前にさせていた口述筆記を手荒に中断させた同じ監房だった。今回は完了を待ち、終了した合図をバブ本人から受けてから、不首尾に終わった処刑の場まで謙虚な態度で同行したが、やはり完敗という事態

に直面するだけだった。それはサム・カーンが、バブの姿を目にするなり、自分とその連隊が関与していたことの重大さを認識したことに起因する。自分と配下の者たちが命令に従わないことで銃殺されるとしても、神意に逆らう悪業にこれ以上巻き添えになることは避けたかった。処刑にはもはや手を染めないと群衆に向かって宣言し、全隊を兵舎広場から退場させたのである。当局は、一方ではその唯一の軍隊の明白な背反に、もう一方では、畏怖の念に打たれ、バブとその若い弟子に魔法にかけられたように魅了された大衆に頭を抱えた。群衆感情を速やかに鎮静させなければ、今度は自分たち悪人は破滅へと押し流され、結果的に、バブの優勢でこの一幕は終わるかもしれない。地元のイスラム教連隊を広場に入場させ、処刑を命じる他に選択肢はなかった。そこで改めて、バブとその忠実な若い弟子をしっかりと吊るしてから、バブが群衆に対して最後の宣言を済ませるのを待った<sup>2</sup>。

「おお、邪な世代の者たちよ。皆がわれを信じたならば、一人残らずこの若者の模範に従い、わが道に進んで命をささげたであろう。この若者は、皆のほとんどの者より高い地位にあった。皆が、われを認める日はかならず到来するであろう。しかし、そのときわれは皆と共にはおれないのだ」

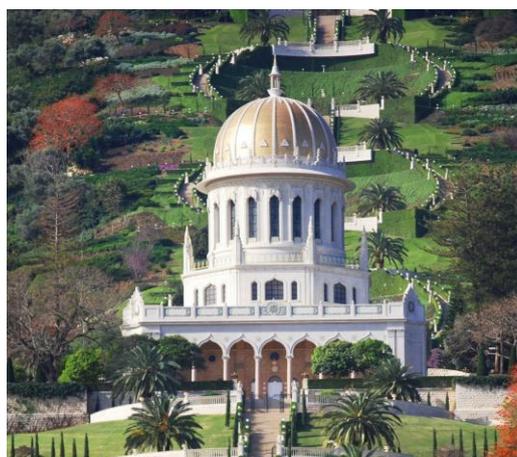
---

1. 英国外務省アーカイブ所蔵、1850年7月22日付け英国外務省文書 No.60/153/88. H.M.Balyuzi,"The Bab" (Oxford,George Ronald,1973)も参照。

2. 『夜明けを告げる人びと』

P271

2回目の一斉射撃により、「約束された神の使者はわがイスラム教徒の手で殺されるであろう」という古来の予言が成就した。引き金を引いた手指は、イスラム教徒で急いで編成された連隊のものであった。聖なる予言を成就させまいとする企みが神の運命の御手により劇的に阻止された様相を目の当たりにしても、バブの殺害者たちは諦めなかった。イスラムの教典にやはり記されている、神の化身、すなわち顕示者の肉体を猛獣は貪ることも触れることもできない、という予言の反証を今度は試みた<sup>1</sup>。区別がつかなくなったバブと若者の亡骸は、その一帯を徘徊する虎狼の餌にされるために、市の城壁を取り囲む外堀のふちに遺棄された。しかし、二人の遺体はバビ教徒によって別の場所に秘かに移された。



## 図6

### ハイファのカルメル山に建立されたバブ（観自在菩薩）の霊廟

- 
1. この不滅の出来事の詳細はナビルによる『夜明けを告げる人々』に記されている。

P272

バブと彼の若い弟子の亡骸を収めた棺は、その後40年間、人目につかぬようにして様々な場所を転々とし、最終的には、当時、トルコ政府の支配下にあったパレスチナに運ばれ、港湾都市ハイファ<sup>1</sup>のカルメル山上に造られた簡素ながら堅固な墓の中に安置された。それから50年後、ドーム構造の金色の廟が建立された。今なら分かるように、2,500年前に別個の三つの経典の中で、釈尊が弟子たちに対して実に鮮明かつ詳細に描写したものがこの廟である。釈尊の言葉は、弟子たちを通して後々の世代に伝えられ、この劫の最終的な瓦解の中に捕われている現代の弟子たちにもたらずことが意図されていた。釈尊が物理的かつ霊的側面を苦心して説明したのは、長く待望され、予告されていた救済の「避難地」、弥勒・阿弥陀如来の仏国土に導くための、揺るぎない「航路標識」とするためであった。時が熟せば、この仏国土において成就することが運命づけられた樂園のような世界秩序が速やかに展開する。

バブが殉教したのは正午であった。一斉射撃が巻き起こした暴風で砂塵が吹き上がり、屋間の太陽の日差しが遮られ、一帯は夜まで闇に包まれた。加害者とこの悪辣な犯罪に手を染めた者たちはひどく高い代償を払う運命となった。一斉射撃で銃火を放った兵士750人のうち、三分の一が2年以内に起きた地震で命を落とした。残りのほぼ500人は、その後まもなく反乱罪で告訴され、発砲部隊により処刑された。バブの処刑を謀略した指揮官と処刑を命じた者らの目の前で、運命の

歯車が逆回転し、手に握っていた権力が強奪されていった。卑劣な所業から2年も経たない内に、加担者すべてが息絶えた。

バブは靈性の新しい時代がすぐ手元まで来ていることを宣言し、19年以内に「神が顕現させるだろう御方」が教えを広め始め、「新たな時代」の基本となる法則と原則を人間にもたらすだろう、と約束した。奇跡の双子の片割れ——観自在菩薩——は、こうして自らの目的を果たした。弥勒・阿弥陀如来——バハオラ——の出現は近かった。

バブは、最大の期待を込めて、自らの使命を宣言した1844年5月23日<sup>2</sup>から9年待つよう弟子たちに的確に指示していたが、自らの殉教の後にその時が到来することを分かり過ぎるぐらいに分かっていた。一つの時期の一つの世界体系に現れる化身は一人しかいない、という神の啓示の古来の法則<sup>3</sup>に従う必要があったからである。

---

1. イスラエルに現在存在する都市。

2. 222頁を参照。聖典に記された予言がまた一つ成就した年。

3. 『ミリンダ王の問い』

P273

そのバハオラは、バブより2歳年長であり、自らがバブの献身的な信者であったにもかかわらず、不可思議な呼びかけを通じて、絶対者から聖なる使命を授けられた。それは、テヘランの悪名高い牢獄の中に幽閉されているときのことであった。凶悪犯ばかりが投獄される暗黒の地下牢シヤチャール。バハオラはかのおぞましい牢に監禁され苦しんだ経験を以下のように言い表している。

われは、比較し得ないほどの悪臭を放つ場所に4カ月間入れられていた。この虐げられた者と、同じように虐げられた者たちが閉じ込められていた地下牢は、暗くて狭い穴の方が好ましいほどであった。(上、暫定訳)(以降、ブック4・最新版から引用)到着すると、真っ暗な廊下にまず案内され、そこから急な階段を地下三階分降りたところが、われにあてがわれた監禁の場であった。牢獄は暗闇に包まれていた。日々を共にすることになる150人近くの囚人は、泥棒、殺人犯、追い剥ぎの類いであった。その混雑にもかかわらず、われが入ってきた通路以外に出口はなかった。いかなるペンもその場所について描写することはできないし、いかなる舌もその悪臭を語ることはできない。ほとんどの囚人は衣類も、寝具も持っていなかった。あの悪臭に包まれた暗い場所でわれに何が起こったかは神のみぞ知る<sup>1</sup>。

バハオラの罪状は、墮落した人々が目を覚まし、まもなく昇る靈的太陽の出現を目の当たりにす

る準備をするようにというバブの呼びかけを擁護しただけにすぎない。しかしバハオラは、このような劣悪な環境に置かれただけでなく、拷問によってさらに苦しめられた。装着を課せられた者は屈み込まざるを得ず、その体勢から再び身を起すことができなくなるほどに重い鉄製の鎖、悪名高き「黒馬」を首、手首、足首にくくり付けられた。バハオラは書簡の一つにおいて、この恐るべき鎖についてを語っている。

いつか皇帝シャーがこの地下牢を訪れることがあったなら、所長と看守長に、2本の鎖を見せよう頼むがよい。そのうち一本は Qara-Guhar(ガラ・ゴヘル：黒真珠)、もう一本は Salasil(サラセル：何本もの鎖)という名で知られている。正義の星の星にかけて誓う。われは、4カ月間、この2本の鎖のうち一本の重みに苦しめられたと<sup>2</sup>。(暫定訳)

---

1. 『*Epistle to the Son of the Wolf* 狼の息子への書簡』 Bahá'u'lláh, Bahá'í Publishing Trust, Wilmette, 1953. バハオラが著した最後の書簡。強欲さと極悪非道な所業で多くのバハイを死に至らしめた、イスファハーン市のイスラム教僧侶に宛てられた。

2. 『夜明けを告げるものたち』 *by Nabil in The Dawn-Breakers*, p. 609.

P274

バブの教えを熱心に信奉したことが罪状とされたバハオラは、他に何一つ、罪に値することに手を染めていなかった。潔白そのものであった。バハオラは、テヘランの恐るべき牢獄の中で責め苦に苛まれている只中で、比類なき神秘そのものの神の召命を受ける運命にあった。突然に差した太陽の強烈な光のように神の啓示が降り、自らの使命が明らかにされたその夜、陰惨な場の暗闇の中で、崇高な光が自らの中から輝きを放散したのを目にした。バハオラは仏陀であった。すべての宗教が待望し、バブが約束していた御方、弥勒・阿弥陀如来であった。啓示を受けたこの思い出深い事象を自ら語っている。

「テヘランの牢獄につながれていた日々、鎖の耐えがたい重みと周囲に充満する悪臭はわれに睡眠を滅んど許さなかった。それでも時折眠れることができたが、頭上から胸にかけて流れおるものを感じた。それは丁度、高い山の峰から地上に叩きつけられる力強い滝のように感じられた。その結果、わが四肢は燃え盛り、わが舌は何人も聞くに耐えない言葉を語った。テヘランの牢獄に繋がれていた日々、鎖の耐え難い重みと、充満する悪臭でわれはほとんど眠れなかった。それでも、時折のまどろみの中、頭为天辺から胸にかけて何か流れ降りてくるかのように感じた。それはあたかも、高い山の頂上から地上に叩きつけられる力強い激流のようであり、その結果、われの四肢は燃え上がり、わが舌は何人も聞くに耐えない

ことを語った……ある夜、夢の中で次のような崇高なる言葉が四方に轟いた。「まことに、われは 汝自身と汝のペンによって汝を勝利に導こう。汝に降りかかったことを嘆いてはならない。また、恐れてはならない。汝は安全であるから。神は、汝自身と汝の御名を通して汝を助けるようになる、地上の宝とも言うべき者らを早晚立ち上がらせ給う。神はそのようにして、ご自身を認めた者らの心を蘇えらせてきた<sup>1)</sup>」

バブの宣言から9年が確かに経過していたが、大衆に対して宣言するにはさらに10年を経過する必要があった。時到来れば、劫の終焉者が立ち上がる運命にあったアーリヤの国土中心地の暗澹極まりない場で全能者の手によって灯されていた聖なる火についてを、人類は知ることになる。

迫害の手は、バハオラの意志を挫くことはできなかった。バブの大業への忠誠を捨てさせることも、教主であるバブの殉教に衝撃を受けて落胆したバビ教徒の世話を止めさせることもできず、その企ては完全なる不首尾に終わった。

#### 1. 『狼の息子への書簡』(Ruhi Institute Course, Book4 から引用)

P275

そこで最終的にはオットマン帝国の権力層と共謀し、バハオラとその家族を母国から追放することにした。バハオラは当時ですら、その高潔さでテヘランの一般大衆だけでなく外国から来た名士によく知られ、不徳な権力層の目から見ても、高い尊敬を受けていた。そのため、彼ら自身と国家の評判を落とさずに、一般的な犯罪者として除去することはできなかったのである<sup>1)</sup>。イスラム教の聖職者についてを、バハオラは次のように語っている。

神の顕示者の時代に生きる聖職者達や博士達は、「栄光を遮るもの」の一つとして数えられる。何故なら、彼らは洞察力に欠け、権力を愛し、権力を欲するあまり、神の大業に服することを怠ったからである。いや、それどころか、聖なる調べに耳を傾けることさえ拒んだのである。「彼らは、両の耳に指を突込んだのである。そして一般大衆もまた完全に神を無視して、指導者達を自分達の主と考え、これらのもったいぶった偽善的な人達の支配下に無条件に身を任ねたのである。それというのも、彼らは真理と虚偽と見分ける眼も耳も心も自身には持ち合わせていなかったからである。

総ての予言者達、聖者達及び神に選ばれし人達が、神の靈感によって語った訓戒で、人々に対し、自身の眼で見、自身の耳で聞くよう申しつけているにも拘わらず、彼らはその忠告を横柄に拒否し、自分達の教えの指導者達に盲従して来たし、また今後もそうし続けるであ

ろう。学識者の装いもしていない一人の貧しい、名もない人物が、大衆に向かって「人々よ！ 神の使者達に従え」と言ったなら、彼らはこの呼びかけに大いに驚き、「何と！ これらの聖職者達や学問の解釈者達は、皆それぞれ権威や堂々たる風格を持っているにも拘わらず、誤りを冒し、真理と虚偽との見分けがつかなかったとでも言うのか。お前や、またお前と同じような人達は、彼らにも分からないことを、理解したような振りをするのか」と答えるであろう。

---

1. 家族をともなった故国からのバハオラの追放は、ラーマ、シータ、ラクスマンの追放を想起させるが、はるかに過酷だった。故国イランに帰国することはなく、追放されたまま囚人として生涯を終えたからである。

P276

だがこうした展開は、バハオラが言葉を続けるように、神の化身すべてに常に降りかかる運命であった。

神の予言者で、時の聖職者達の、容赦の無い憎悪、非難、拒否及び呪いの被害を蒙らなかったものは一人としていなかった。あの聖職者達の手がこれ迄に行った不法な行いに対して災いあれ！ 彼らが現在行っていることに対し、彼らに災いあれ！ 栄光を遮るものの中で、誤ちの権化たる彼ら以上に嘆かわしいものが他にあらうか<sup>1</sup>。

他の書物からの引用を加える。

暴政の源と起源は聖職者達だった。これらの傲慢で強情な者たちが下した宣告を通して、地上の支配者たちは、汝らが聞いたあのようなことを精巧につくりあげた……無頓着な大衆の統制は、むなしい空想と無益な想像の唱導者らの掌中であつたし、今もそうである。これらの人々は自分たちの好きなことを決める。まことに神はそれらを除去し、われもまた、最高のペンがこの栄光ある地位において語ったことをへの証言したものと同じく、それらを除去する<sup>2</sup>。

(暫定訳)

このようにして、追放を運命づけられた旅が、新たな日の夜明けを恐れた者たちの命令と指示を受けて開始した。だが太陽を恐れる夜行性生物は、靈的太陽の前進を牽制しようと試みていても、自分たち無自覚な生物を、神の導きの力がその主権意志の道具として利用していることすら気付いていなかった。

バブが、人間の諸事の地平線上にまもなく出現する新たな日の夜明けを知らしめる自らの重大な宣言の日から9年、そして19年という年月で区切られた期間が近づくことに気を緩めずにひたむきな注意を払うよう、弟子たちに警告したことで、時代の主の地位を大胆にも主張する野心的な者たちが数多く立ち上がった。だが彼らは、バブが、バハオラ（神の栄光）という称号を使った至高

の地位を示す外套をホセイン・アリの両肩にすでに掛けていたことを少しも知らなかった。バブは自らが処刑される直前に、神意を受けた地位の継承を象徴するしるしとして、自らが使用していた印環とペンを彼に急送していたのである。

われの後に来られる御方にわれが捧げるすべての賛辞の中で最高のものはこれである。すなわち、われのいかなる言葉も彼を適切に説明することはできず、わが書・『バヤン』において彼について述べたいいかなる言及も、彼の大業を正当に評価することはできないと、われは告白し、書き記したことである<sup>3</sup>。(暫定訳)

- 
1. 『確信の書』"The Kitab-i-Iqan", バハオラ著。バブの叔父から送られてきた質問に答えたもの。
  2. *The Promised Day is Come* (pp.82-3), Shoghi Effendi, Bahá'í Publishing Trust, Wilmette, USA, 1961. 同著者、同出版局による1944年発行『God Pass By\_神よぎり給う』にはバハイ信教の初期からの歴史が詳細かつ決定的に記されている。
  3. 『バヤン』はバブの啓示を収めた母なる書であり、バビ教徒が従うべき法が記されている。バブがペルシャ語で著した書。

P277

バブは別の書簡の中で、自らは当時唯一の化身であったとしても、人類にバハオラを認める準備をさせることが自らが到来した目的であることを承知しており、聖なる教師全員が劫の終焉者の到来を予期していた理由を記している。教師に対する弟子の、あるいは父に対する息子のような姿勢で、バブはバハオラに語りかけている。

「おお偉大にして全能なる師よ、あなたはまったくの無から、あなたの御力の神々しい力を通してわれを生じさせ、この啓示を宣言するためにわれを育ててくださいました。われはあなた以外の誰にも信頼を置くことはなく、あなたのご意志以外のいかなる意志にもすがりません……おお、神の面影よ！ われはあなたのためにわれ自身を完全に犠牲にしました。あなたのために呪いを受け入れ、あなたの愛の道で殉教することだけを切望しました……そして定められた時がきたとき、あなたは、聡明なる御方、神の許しのもとに、最も崇高で神秘の山の高みから、あなたの解き明かせない神秘のほのかな、微小のかすかな光を明らかにされました。それを認めた者たちは……気を失い、……かもしれません。……あなたの啓示を覆い包む真紅の強烈な光を稲妻が走るかの一瞬に垣間見るからです<sup>1</sup> (暫定訳) 」

以下に引用する釈尊の言葉から、上記した二つの節が、二人の中心的人物がどのような関係にあるかを意味していることが分かる。

そのとき無量寿仏はほほえまれ、丸く開けた口から 36 那由他の光を放ち、一千億の仏国土をお照らしになる。戻った光が無量寿仏の頭に収束した様子を見て、神々も人々も喜ぶ<sup>2</sup>。

---

1." *The Qayyumu'l Asma*", バブが著した本書からの一部を、ショージ・エフェンディが訳し、*The Dispensation of Baha'u'llah* の中で引用している。(p.5. Shoghi Effendi, 1939, Bahá'í Publishing Committee, Wilmette, ILL.,USA)

2.『大スカーヴァティー・ヴィューハ』w.11, 12.

P278

そこに無量寿仏の息子というべき、輝かしく強大な観自在菩薩が立ち上がって問う。「世尊がほほえまれたのは、どのような理由からでしょうか。分別を知り、慈悲に満ちた、多くの生けるものの救済者である世尊よ、ご説明ください。生きとし生けるものがこの素晴らしく喜び溢れる発話を聞いたなら歓喜に満ちた思いに満たされるでしょう<sup>1</sup>」

観自在菩薩が「息子の立場」にいるのは象徴としてであり、文字通りの意味ではない。この点に関しては先の機会<sup>2</sup>に釈尊が説明している。だが霊的太陽の光輝は、憎悪と嫉妬がうごめく暗く陰湿な回廊で跳梁跋扈する者たちからの絶え間な執拗な攻撃を招く。バハオラとて例に洩れない。夜行性生物の1番の標的となっていた。

痛ましいことに、そうした野心ある者たちの一人が他ならぬバハオラの異母弟だった。ソブヘ・アザル（永遠の朝）の称号を持つミルザ・ヤーヤは、弥勒・阿弥陀如来の宗教制においての大悪党であり、提婆達多と同じ立場にいた<sup>3</sup>。

父の死後、バハオラは真の父のように弟妹に愛情を注いだ。その中にはミルザ・ヤーヤも含まれていた。バハオラが、この異母弟から感謝の念を受け取るどころか、あらゆる悪行と中傷の標的に祭り上げられたのは、ヤーヤが、バブ殉教後に残された悲哀な信者たちの指導者にならんとする己の野心を満たすためだった。啓示を受けて仏陀になることは、人間が考案して創り出したものだと考えていた点でも、ミルザ・ヤーヤは提婆達多と違わない。試行錯誤によって打ち出したか、模倣で得たものと思込んでいた。ヤーヤは、バハオラとその家族が一時的に滞在していた隣国イラクの首都、バグダットに内密で到着するなり、家族と友人たちが見ている前でバハオラを貶める謀略の計画を開始した。バハオラは諍いと分裂に加担するよりはむしろ、クルディスタンに近い山脈地帯に独り、身を引く決意をした。そして釈尊がそうであったように、議論に昂じていた大衆と彼ら

が支援する自称指導者から身を遠ざけたのである。ある朝、家族が目覚めると、バハオラの姿は見当たらなかった。

---

1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 w.13.14.

2. 『ディーガ・ニカーヤ』 III.84 参照。「ヴァーセッタよ、如来に対する信が定まって根の生えた者には、これが正しい言葉となります……『私は、世尊の子であり、その口から生まれた、法より生まれた、法による化生の、法の相続者である』」

3. 弥勒如来の人生においては、提婆達多が手本として示した裏切りと反乱が起きるだろうと本書で記した(65-66頁)ことを想起されたい。ミルザ・ヤーヤのバハオラに対する裏切りでその通りとなった。

P279

バハオラが自らの家族から離れたのは、バビ教徒の霊的生命に再び活気を与え、「安全な避難所」に導くために自らが不可欠であるかどうかを決めさせるためであった。

釈尊が自らがヨギの中のヨギであることを示し、その名声が「天蓋に吊るされた大きな鐘の音のように」地域一帯に知れ渡ったように、バハオラはその深い洞察力と学識で「ダルヴィーシュ<sup>1</sup>・ムハンマド」と呼ばれるようになり、その名声はバグダットの中心地に届くほどに広まった。そして、スレイマニヤの賢人としての噂が彼自らの家族とバビ教徒たちの耳に入ると、泥沼化していた内輪揉めは収束した。その賢人は他ならぬバハオラであることがしっかりと了解されたのである。即座に代理の者が遣わされ、戻って皆を指導するよう強く促され、一つに和合した活気ある共同体への復活を強く求める彼らの声に応えなければならないことを、バハオラは理解した。そこで帰還したところ、彼の的確な指導を喪失したことで試練に陥り、今では慎ましやかになっていたバビ教徒たちに歓迎された。1856年3月19日のことであった。この深刻な危機が去ったばかりでも、ミルザ・ヤーヤによるバハオラに対する謀略は続いた。しかし、いずれも不首尾に終わり、ついには、バビ教徒から見限られ、無視されるようになった。バハオラは常軌を外した異母弟を他者からの脅迫から守り続けたが、提婆達多のように夜行性生物であるミルザ・ヤーヤは真理による啓発を受けることはできなかった。

バビたちは、バハオラの聖なる指導の下に、死去した彼らの主人の崇高な教えと命令を日常生活に取り入れた。権威当局により、バハオラとその家族に制限が課せられても、バクダットの民衆もまた、バハオラの話聞き、バブの大業を支持するために集まり始めた。バハオラを通して、バブの教えはより完全な意義を帯び、はるかに幅広い層の人々からの信仰を得た。指導者を欠いたイランのバビ教徒は、イラクでのバハオラの名声を聞きつけると、彼の教えから出現する新しく力強い秩序に入るために、急いでバクダットに向かった。探求者も学識者も、バハオラの御前に達する機会を得るという恩寵を受けた者たちすべてが、解決できずにいた問題の解決をバハオラから与えられた。釈尊の場合のように、あらゆる身分の人々の口の端に上ったことで、バハオラの名声を知れ

渡った。それゆえに再び、太陽を恐れる夜行性生物の妬みと憎しみがバハオラとその家族、そして信者に集中した。

---

## 1. 聖人

P280

バグダットのイスラム教司祭たちは、最も傑出していたシャイキ・アンサリを除いた者たちで、バハオラを市から追放する謀略を練った。そして、その中の一人を代理としてバハオラの元に遣わし、「説得力ある」証拠を要求した。策略であることに気づいたバハオラは、ひとたび立証したならそれ以降は自らの権威を認めると必ず誓うことを条件として受け入れるなら、要求される証拠を差し出しましょう、と返答した。バハオラからの提案に彼らは狼狽した。真理の発見でなく、真理の隠蔽がそもそもの目的であり、策略を使った代償が直ちに跳ね返ってきたのである。遣わされた者は、バハオラの正直率直な態度を前にし、仲間の振る舞いが狡猾であることを悟った。そして戻ると、報告を待っていた全員に向かい、聖職者たちこそが不実であると宣言した。

宗教指導者たちは、バハオラの名声によって自分たちの中に生じた混乱から、バハオラを故国から追放するのに成功したイランの聖職者たちのように謀略を巡らせた。そこで、バグダット駐在のイラン領事と共謀し、オスマン帝国の都、コンスタンチノーブルへの追放令をバハオラとその信者たちに下すよう、バグダットを統治していたオスマン・トルコ皇帝に強いた。敵が勝利に浮かれている傍らで、バハオラの支持を選んでいた者たちは差し迫った別離に慰めようがないほどの悲しみに沈んでいた。だが、両方の陣営があずかり知らぬままに、敵味方の区別なく役割が果たされたことで、運命はその成就に向かって厳然と作用していた。そして当人は、本人の意志でなく、自らの消滅を願っている者たちの囚人として運命の場所に引き寄せられようとしていた。時が到来していたのであった。

バハオラは、コンスタンチノーブルへの出立の準備をしている際に、家族と追隨者を伴い、バグダット郊外のチグリス川の堤に所在するレズワン（楽園）と自ら名付けた庭園で野営をする許可を得た<sup>1</sup>。悲嘆に暮れている追隨者たちはバハオラの周りに群れ集まり、バブ自身の資質の体現者とみなすようになった人物との別離を嘆いた。

---

1. *The Maitreyavarakarana* (弥勒如来に関する予言) 1:5-12 には、弥勒如来も Nairanjara 川の堤で悟りを開いたことを宣言するようになることと記されている。Nairanjara という名称は現実の地名というよりはむしろ、象徴的に含意された言葉である。Najibbiyih 庭園がレズワン庭園の元来の名。

P281

すべての宗教の教典で予告された瞬間が到来していた。落胆する弟子たちの只中で、完全なる静穏の内に威厳ある佇まいを醸し出していたバハオラは、テヘランの地下牢シヤチャールで啓示を受けて以来、ほぼ10年間、隠していた自らの真のアイデンティティを公表した。自らは、自らのためにバブが殉教を受け入れた約束された者であることを宣言した。劫の終焉者、シャー・バーラム・ヴァルジャヴァンド、カルキ、弥勒・阿弥陀如来自身であることを知らしめたのである。

今後いくつも続く劫のための不朽の宣言がなされたのは、4月21日の夕方であった<sup>1</sup>。その年は、教典から明らかにされていた仏暦2406年(西暦1863年)(220-21頁参照)であり、「19年以内に神が顕現させる御方が教えを広め始め、新しい時代の基本的法則と原則を人間にもたらす」というバブ自らによる予言に合致する。世界を遍く照らす太陽の強い光は夜明けたる「門」を通り、その友人、家族、追従者たちを覆い包んでいた憂いを果てしない喜びへと変えていた。力漲るこの宣言を過不足なく表現できるのは、バハオラ自身の言葉より他にない。

「おお、最も崇高なるペンよ。神聖なる春の季節は到来し、慈悲に満ち給う御方の祝祭は目の前まできている。汝、眠りから覚めよ。そして全創造物が蘇生の波に洗われ、新しく生まれ変わるほどの威力をもって森羅万象に向かって神の御名を称え、神に讃美を捧げよ。沈黙を破り、声を上げよ。神の御名の王国が天上の創造者なる汝の主の名の装飾によって飾られた今、幸福の昼の星は「至福なる者」というわが名の地平線上に輝きでたのである。この最大名の威力をもって身を固め、地上の国々に向かって立ち上がり、ためらうものであってはならない……。

おお、ペンよ。このすばらしき日、汝はわれ以外に何者を発見できようか。創造の世とその象徴は今いずこに。諸々の名と、名の王国は今いずこに。目に見えるものや見えぬものすべての創造物はどこに消えたのか。宇宙の隠された秘密やその神秘の出現はどうなったのであろうか。見よ、万物は消え去ったのである。栄光に満ち、光にあふれ、永遠に変わることはないわが顔以外には今や何も残っていない」

---

1.彼(弥勒如来)は、ヴァイサカ(4/15~5/15)の月に、体系的知識の樹(別名「鉄の樹」)の下で啓示を受けたこと(成道、悟りを開く)を公表するだろう。Maitreyavarakarana(弥勒如来に関する予言)I.3.

「このすばらしき日、主の御顔より放射される光の輝き以外には何も見えない。汝の主こそは恩寵に満ち、すべての恩恵にあふれ給う。まことに、われはすべてを征服し、抵抗し難いわが主権によりすべての魂の生命を消した。つぎに、人類へのわが恩寵のしるしとしてわれはまったく新しい生命を呼び起こした。まことに、われは恩恵にあふれる日の老いたる者な

り。

このすばらしき日、目に見えぬ世界は声たからかに宣言する。「おお、地球よ。神の踏台となり、神の強大なる玉座が据えられる場所に選ばれた汝の祝福は何と大いなるものか」。そして、栄光の仏国土からはつぎのように聞こえてくる。「わが命を汝に捧ぐ。慈悲に満ち給う神の最愛なる者は、過去に存在したあらゆるものに対しても、また未来に存在するすべてのものに対しても約束されている彼の御名の威力を通じてその主権を汝の上に確立したのである」……。

立ち上がり、この吉報を全宇宙に向けて宣言せよ。慈悲に満ち給う御方はその歩みをレズワンの園に向け、いまや花園に入場したのである。神の楽園の玉座が置かれたこの喜びの園に人々を誘導せよ……。

優しさと慈悲以外の眼差しをもって神の創造物を見てはならない。何となれば、愛に満ちたわが摂理は森羅万象に浸透し、わが恩寵は天と地のすべてを覆うからである。このすばらしき日、神の真のしもべらは生命を付与する再会の清水を飲み、彼に接近した人々は永遠の生命の川の穏やかな流れをくむことができるのである。このすばらしき日、彼の一体性を確信するものは、すべてのものの最高にして最終の目的におわす御方を知ることによって彼の御前の美酒を味わうことができるのである。そして、主権と栄光の舌は彼を通じてつぎのように宣言している。「御国はわれに属す。そして、わが権利ゆえにわれは御国の支配者なり」……。

おお、バハの人々よ。最高の喜びに満たされ恍惚の境地にあったかのすばらしき日を想起せよ。彼が自らの邸宅を離れてかの聖所に向かったその日を、日の老いたる者の舌が言葉を発したその日を、聖所に立ちて慈悲者たる彼の名の光輝を全創造物の上に注いだその日を<sup>1)</sup>

バハオラが大いなる公表をした4月21日からの12日間を、誰もが天界に昇ったような喜びの中で過ごした。天上の祝祭のごとき雰囲気であったのは、神の恩寵が発露され、バハオラと彼の使命に忠誠を誓うことを宣言した者たちを覆い包んだためであった。

---

1. 『落穂集』バハオラの書物よりの選集。(「オンライン・バハイ図書館」から)

その後、レズワンの祝祭（楽園の祝祭）と名付けられたこの4月21日から5月2日までの期間は、祝祭の王、と未来にみなされるようになるだろう。

1863年5月3日にバグダットを出立したバハオラ一行は、3カ月後にトルコのイスタンブール

に到着した。皇帝への謁見を要請し、恩赦を懇願すれば、困窮の身ゆえに便宜が図られやすくなるでしょう、と提案する宮廷出入りの胡麻磨りからの言葉には耳を傾けず、バハオラは抑圧者たちの次の一手を穏やかに待っていた。それはまもなくして到来した。カリフの地位にあり、イスラム教聖職者中樞層に届くまでに高まったバハオラの名声を恐れたオスマントルコの皇帝により、コンスタンチノーブルの西に位置し、到着に12日間を要する、さらに遠方のアドリアノーブルに追放されたのである。厳冬の天候と監禁生活をしのぐための装備もないまま、バハオラー行は現地に到着した。

強大な敵からの脅威に常にさらされながら、バハオラ自ら、神の使者としての使命を書簡において宣言し始めたのは、アドリアノーブルにおいてであった。かつてはバブを受け入れていた者たちは今、バハオラの下に結集し、掲げられる高い基準の遵守を固く誓った。この時以来、彼らはバハイと呼ばれるようになった。

新たに建立された神の恩寵の要塞であり、人類救済のために出現しようとしている避難所の打ち倒しを諸々の外部勢力が企てる一方で、「提婆達多原則」を体現するミルザ・ヤーヤが改めて陰謀を計り始めた。この異母弟は今回、その元型たる釈尊の従兄弟の提婆達多のように、自分を愛し守ってくれた唯一の者の暗殺を決心した。その最初の企ては、数千年前に提婆達多が釈尊を殺めようとしたときのように毒で決行された<sup>1</sup>が、予め決められた時より前に、地上のいかなる力も神の預言者の命を終わらせることはできない。それでも、致死性の強い毒による作用を受け、バハオラの利き手は思うように動かなくなった。健康状態も以前と同じ水準には戻らなかった。近代の提婆達多は、失敗しても諦めず、今度は、より直接的、かつ発覚の危険によりはらんだ別の手段に訴えた。公衆浴場でバハオラを殺害するよう、バビ教徒の一人をそそのかしたのである。だがそれも、未遂に終わった。

提婆達多原則を展開し、不和の種を巻き、神意を受けた太陽の威力が着実に上昇していくのを妨害する計画を、時に内密に、時に公然と、ミルザ・ヤーヤは続行した。しかし、すべてが無駄骨に終わった。そして最終的には、提婆達多のように自らの陰謀の犠牲者になった。トルコの当局が、ヤーヤとその取り巻きをバハオラから引き離し、キプロス島の主要都市ファマグスタへの追放令をヤーヤに下したのである。ヤーヤはこの島で、愛情と忍耐をもって、実に長い歳月、自分を育み保護してくれた靈的太阳を誹謗中傷しながら、余生を全うした。

---

1.本書 66 頁参照.

厄払いがなされても、ミルザ・ヤーヤのキプロスへの追放は、平等な扱いを名目にした最後の―撃を抑圧者がバハオラに加えられる口実となった。だがこの―撃自体が、栄光の王が約束の地、西方浄土、極楽に昇るための最後の手段となることが、神意によって数千年前の過去から定められてい

た。敵視する抑圧者がこれを知るはずがない。バハオラと一行にどんな未来が待ち受けているかについて一切の手がかりを予め与えることなく、聖職者、ペルシャ国王、トルコ皇帝は権力を行使し、眩すぎる輝きを発していた太陽を、パレスチナのアッカへと最終的に追放する決定を下した。だがアッカこそが、13世紀前に預言者ムハンマドが述べた言葉を思い出しさえすれば、彼ら策謀者たちが最高の賞賛を贈っていたはずの場所であった。弥勒・阿弥陀如来の仏国土、極楽について釈尊が表していたのと同じ類の賞賛を、神の別の化身であり顕示者であるムハンマドが、アッカに贈っていた。他すべての都市や場所を凌ぐアッカの卓越性を述べたムハンマドの言葉をバハオラが自著の中で引用し、コメントを加えた箇所を以下に引用する。

慈悲深く・憐れみ深き神の御名において、アッカ、その海、そして「牛の泉」の恵みに関しては、次のような記録がある。

- ☆ アブドゥッ・サラームの息子であるアブドゥル・アズィズは、預言者——神の祝福と挨拶が彼に注がれんことを——が、「アッカは、神が格別の慈悲を示されたシリアの一都市である」と述べられた、とわれに語った。
- ☆ イブン・マスード——彼が神の御心に召さんことを——は述べている：『預言者——神の祝福と挨拶が彼に注がれんことを——は、「すべての海岸の中で最高のものがアシュケロン海岸である。まことに、アッカはそのアシュケロンよりすぐれており、……。まことに、神は、アッカへの訪問を熱望し、その地に入る者の過去と未来、両方の罪をお許しになるであろう。そして、巡礼以外でアッカを出立する者について、神はその出立を祝福されないだろう。この地の泉は牛の泉と呼ばれる。この泉から一口飲む者は、神がその心を光で満たし給うであろう……』と述べられたと』。
- ☆ 「われは、その海の岸辺にある都市のことを汝らに知らせよう。その白さで、神——神は高遠なり！——のお気に召している。その都市はアッカと呼ばれている。……」

P285

- ☆ 「……アッカのひと月は他の地における一千年にも勝る。アッカを訪れた者は幸いなり、また、アッカを訪問した者を訪ねた者も幸いなり。」
- ☆ ……そしてアッカで、「神に許しをこい願う」と言う者は誰であれ、神はその者の罪過のすべてをお許しになるだろう。
- ☆ まことに神の使徒——神の祝福、称揚、神の挨拶が彼のうえに注がれんことを——は、真理を語られた<sup>1</sup>。（[暫定訳](#)）

しかしアッカは、何世紀もが経過する中で人間と自然の手によりすっかり荒廃した。バハオラの時代までには、死と腐敗を体現する一つの広大な監獄都市になっていた。バハオラは、自らがまもなく監禁されることになる場所の凋落ぶりを十分に承知しながら、最も崇高なるペンとして、その様相を諸王の書簡(*Lawh-i-Sultan*)において次のように語っている。「彼らの言葉を借りれば、そこは世界の都市の中で最も荒廃し、外見が最も醜く、天候が最も不快で、水が最も汚濁した都市である。あたかも、フクロウが巣くう大都市である(暫定訳)」<sup>2</sup>。アッカの上空を飛ぶどの鳥も息絶えて墜落するほどに大気汚染は甚だしく、流行病を蔓延させかねないほどに水質も劣悪だった。

バハオラが示す深い愛情と敬意を知っていたアドリアノーブルの知事は、アッカへの追放が帝座からの命令であるにかかわらず、さらなる苦難を言い渡す悲報の伝達を拒んだ。そのため、オットマン宮廷による判決は別の官吏から当人に伝えられた。追隨者たちはわずかばかりの持ち物を剥ぎ取られ、アッカへの旅のために寄せ集められた。愛する聖人の周りに群がった民衆が涙ながらにローブの縁に接吻をしたのは、彼らを内側から変革させたバハオラへの変わることなき敬意のしりしだった。アッカへの旅は19日間を要した。しかも出発時から必需品を奪い取られた痛ましい一行は、このような忌まわしい状況の下で海旅につきものの疾病と苦難に苛まれた。アッカ到着は、1868年8月31日だった。

---

1. 『狼の息子への書簡』 *Epistle to the Son of the Wolf*, Bahá'u'lláh, Bahá'í Publishing Trust, Wilmette, Illinois, 1941. 約束された地——極楽——アッカの至高の素晴らしさに関する釈尊とムハンマドという化身両者の発言が完全に同一視できる。「誰でもその(仏国の)国土について瞑想するなら、幾たびもの生と死に八千万劫の間、当人を縛り付けている罪は根絶するだろう」(アマターユル・ディアーナ・スートラ,11).

2. 『神よぎり給う』 ショーギ・エフェンディ著

P286

アッカには、オットマン帝国の最果ての隅々から極悪人たちが送られてきた。凶悪で社会に仇なす害獣たちが囚人としてアッカに到着し、その地で息絶えた。世界で最高の囚人として、バハオラも送られてきた。アッカはその日を楽しみにしていた。悪臭を放つその腐敗ぶりが浄らかさそのものになり、その不名誉が払拭され、神の栄光の外套をまとう日となるからだった。大半の者たちの肉眼では認識ができない王が、その王座、言うなれば、その王国に到達していた。この王座の前に腐乱した救い難い光景が提示されたとしても、浄化され、ダルマを放散する至高の栄光の高みへと高められるだろう。しかし、バハオラ自ら呼んだところの「最大なる牢獄」への監禁にともなう苦悩は、自らの繊細な性情によって何倍にも増大した。随伴を喜んで選んだ家族と追隨者たちを含めた罪なき者たち70人からなる一団が辱めを受け、苦難に遭う様子を目の当たりにすることを強いられたのだ。アッカに着いた日の最初の晩は、食物も水も与えられなかった。虚弱な身体にすぐに病が襲いかかり、絶命した。だが、主の間近にいて湧き上がる喜びと確信は微動だにしない。いかなる宝物との交換など、誰一人、思いもよらぬことだった。

敬愛する御方の居所を知り、イラン、イラク、そしてエジプトから旅して来るバハイの数は徐々に増えていたが、いざ獄舎の前まで来ると、獄壁が立ちはだかり、再会は不可能であることを思い知るだけだった。それでも幅広い堀越しに、バハオラが監房の窓から手を振る姿を目に収めるだけで、来訪者たちは十分な報いが得られた。そして、主の道においてすべてを捧げる決心を心の中で炎のように燃え上がらせながら、はるか彼方の故国の自宅へとゆっくりとした足取りで帰途についたのである。しかし、その信仰はまもなく試された。通過する町々でも故郷の町でも狂信者の手にかかって殺害された。これは、ダルマの法輪は殉教の血で塗られることでその回転を滑らかにするという不変の法の冷厳なる証明だった。バハオラとて例外ではなかった。「浄らかな枝」という称号を与えていた次男のミルザ・ミディが空気が淀んだ牢内から屋上に上り、新鮮な外気を吸いながら歩いていたところ、明かり取りから転落して致命傷を負った。獄中の人生しか知らないまま、今、瀕死の容態で身を横たえている 21 歳の息子に降りかかった悲劇に、バハオラが味わった心の痛みを表現する言葉はなかった<sup>1</sup>。

---

1. 『ガータ・ジャータカ』(No.454)に記されている息子の死に対する主クリシュナの悲嘆に重なる。「わが息子が生まれた、死なせるものか！人間も神々もかの恵みは受けられない。ならば、果たせぬことのためになせ祈るのか。神秘の魔力も、魔法の樹根も、薬草も、金を費やしても、あなた、カンハ(クリシュナ)が嘆いている幽霊)となった息子を蘇生することはできない」

P287

王の息子は王の先祖が秘めていた精髓であった。ミルザ・ミディは臨終の喘ぎの中で「愛する御方の面前に達することを妨げられた者たちのための身代金」が自分の人生であることの受け入れをバハオラに促した。最期にその念頭にあったのは、バハオラを真に愛する者たちのことであり、牢獄の壁に阻まれることなく、彼らが自分たちの主と面会できるようになることを願ったのである。息子を襲った悲劇に打ちひしがれながらも、その嘆願を神に届けることをバハオラは承知した。そして4カ月を待たずに厳格な監禁状況が緩和され、バハオラは残っていた弟子たちとともに釈放されると、アッカ城壁内のほど近い小さな家に移った。仏暦 2413 年(1870 年 10 月)のことだった。

遠近構図による以下の写真にアッカの要塞が、そしてその中心部に「最大なる牢獄」が収められている。獄舎の最右の監房の窓から、堀向こうにいる信者に、バハオラは手を振っていた。



図7

「最大なる牢獄」\_\_地中海沿岸の都市、アッカ.

P288

だが、牢獄の内外を問わず、靈的太陽に憎悪の念をたぎらせ、加害を主唱する非道な者たちは、自分たちの悪行を模倣し、顕示者の信用を傷つけて駆除する悪辣な計画に加担するよう、市井の民の中にいる無知な狂信者たちを扇動した。彼らの企てはしかし、オットマン・トルコとペルシャの皇帝のように、完全に頓挫した。釈尊が説いて実践したように、バハオラも「むしろ、善をもって悪に打ち勝つ」という、輝く黙諾の最高の模範を追随者たちに示した。中傷による名誉毀損を企てていた聖職者と役人たちは、バハオラが放つ抗しがたい善の威力、完全無欠な英知、比類がなく威厳ある作法と精神を無視し続けることがついにできなくなった。バハオラは表面的には誰の目から見ても彼らの囚われ者であったが、監視人たちはその虜となると、喜ばせようと努め、望むことに従うようになっていた。状況は逆転した。真理が勝利し、ほんの少し前までは神の栄光の痕跡を嬉々として破壊していただろう者たちの心の城塞の中で、聖王の旗印が高々と掲げられたのである。

バハオラに対して悪行を働いても、その結果はほとんど超自然的なまでに特異であり、権威がかえって示される結果になることは既に証明されていた。しかもその作用は不可思議でありながら、結果に関しては疑いの余地を残していない。あたかも、他すべての化身の人生においてのように、試験期間があったかのようなのである。顕示者はその期間の後にすべての力を導く完全なる水路となる。バハオラがそうであった。常に追随者から賞賛の的であった彼は今や、名誉毀損の企てに固執していた者たちですら、競い合って敬愛を捧げる完全無欠の英知を宿した聖人になっていた。かつては誹謗中傷に凝り固まっていたアッカのイスラム教高位聖職者は今ではバハオラへの忠誠を誓い、アッカの知事、アーマド・ベグ・タウフィクはバハオラに個人的に奉仕したいとして許しを請

うまでになっていた。その願いに応え、バハオラはタウフィクに、アッカ市民のために市の給水設備の修理を依頼した。

だが、さらにより驚くべきことが、世界最大の囚人がアッカの陰鬱な海岸に最初の一步を踏み出した時から生じていた。大気の質と降雨量の目を見張るような変化が、バハオラがこの地に到着したまさにその年から起きたのである。過去2千年間のアッカの年間平均降雨量は、地層の様相と植物の成長度合いの記録から英国の王立地理学会により検証されているように、1860年の最初の10年間までは50ミリに過ぎなかったが、バハオラがアッカに到着した1868年以降の10年間に年間平均降雨量が倍増した。1880年に再び倍増し、今日では760ミリに達している。1世紀以内で10倍以上の増加であり、バハオラの到来からまさに開始した。この増加現象がアッカの大気の質に直接の影響を及ぼしたことは言うまでもない。感染症蔓延の恐れは洗い流され、風向きは劇的に変化した。一帯の都市すべての中で、爽快な天候を享受しているのが、今日のアッカである。人口の急増によって大都市となり、イスラエル最大の健康クリニックの一つが所在している。

P289

さて、人間の王たちと統治者たちが目を覚まし、王の中の王の出現を知る時が到来した。イスラム世界の最も強大な君主たちから忘却の彼方に葬るべき標的として目を付けられた一囚人、バハオラは今、監禁されている牢獄の内側から、自らを裁きが届かない存在になし、虐げる貧者から上げられる声に決して耳を傾けてこなかった者たちにその視線を向けていた。

イランの皇帝は、神威を宿した王を拷問し追放するという罪を犯した最初の君主だった。しかも、バハオラの書簡を持参した使者、アガ・ボゾルグという名で「素晴らしき者」を意味する「バディ」の称号を与えられた若者を拷問の末に死に至らしめていた。その皇帝に今、賢人なら誰もが青ざめるだろう判決がもたらされようとしていた。だが、国務に正義と公正さを取り戻すようにと警告する神の言葉は、虚栄心が強く快樂に溺れていた君主の心には届かなかった。バハオラがナーセロディーン・シャーに宛てた書簡の全文を収めた『狼の息子への書簡』には、自らの使命を神から暗示される前後の自らの状況が詳述されている。

「おお王よ、われは他の者のように一介の人間にすぎない。しかしなんと、長椅子で眠っていた時のこと、すべてに栄光ある御方のそよ風がわれの上を漂い、これまでのすべての知識をわれに教えてくださったのだ。これはわれからのものではなく、全能にして全知の御方からのものである。そしてその御方は、天地の間でわが声を上げるようにと、われに命ぜられた。それゆえに、理解力あるすべての者の涙を流がさせることがわれに降り掛かったのである。

われは人々の間で行われている学問を学んだことはない。彼らの学校に入学したこともない。われが住んでいた市に尋ねるがいい。汝は、われが偽りを語る者たちとは違うことを確信でき

るだろう。これは汝の主、全能の御方、すべてに讃美された御方の御心の風で舞い上げられた一枚の葉に過ぎない。激しい風が吹いている時、葉は静止していられるであろうか。いや、すべての名称と属性の主なる御方にかけて！ 風に傾ぎながら、葉は運ばれていく<sup>1)</sup> (暫定訳)

---

1. 『狼の息子への書簡』 *Epistle to the Son of the Wolf*, pp.11-12, Bahá'u'lláh, Bahá'í Publishing Trust, Wilmette, Illinois, 1953.

P290

これまでに確認したように、釈尊も、自らの後継者、弥勒如来についての予言でこの側面に触れていた。

「私が私自身の理解と洞察から説くように、弥勒は彼自身の理解と洞察から、神々、マール、そしてブラフマンの世界の神々、神々と人間たちがいるこの宇宙（の性質）を説くだろう<sup>1)</sup>

パリー語の「自身の」理解を正しく訳すと、「いかなる教師からも独立した」「他の誰かの理解とはまったく理解が違ふ」理解となる。バハオラは釈尊のように、学校に通ったことも、家庭教師から教を受けたこともなかった。19世紀のイランの王族は、釈尊の時代のインドの王族と大きな差異はない。貴族の師弟はポロ競技を始めとする娯楽に忙しく、読み・書き・算術すべてを筆記者と聖職者に任せていた。

釈尊は、仏陀として人間にすぎず、広めたダルマも人間が考案したものにすぎないとみなす者には、どれほどの功績や学識を積んでいても、奈落が待っているという警告を、舍利弗に託した<sup>2)</sup>。

「舍利弗よ、私についてそうであると知り、そうであることを目にする誰もが、こう話すに違いない。『隠者ゴータマには、超人的なところ……もない。隠者ゴータマは、推論によって打ち出し、……自分で考案した体系に基づいてダルマを教えている』と。舍利弗よ、もしその者がその言葉を撤回しないなら、……まことに、自分の不毛さによって奈落に送られるのだ。……そうした発言をする者が、……比丘であり、今ここで悟りに到達するはずであったとしても、こういう結果を迎えると、私は言おう。もしその者がその言葉や考えを撤回しないなら、……奈落にまことに送られるのだ……』」

バハオラも、いかなる世俗の知識とは自らは無縁であることを明言している。「われは人々の間で行われている学問を学習したことはない。彼らの学校に入学したこともない」というその言葉は、「ただ一人、世において、一切の法を知り尽くす完全で、この上ない悟りを得た<sup>3)</sup>」と発言し、自らに内在していた属性である一切智が発露したことを明言した釈尊のように、「絶対者からの引き上げ」が自らに起きたことの証言である。

---

1. 『ディーガ・ニカーヤ』 IV.26,25.
2. 本書 61-62 頁参照.
3. 本書 63 頁参照.(ヴィナヤ・ピタカ,III.3-6)

P291

バハオラも、自らが一切智であることを証言している。「おお王よ、われは他の者のように一介の人間にすぎない。しかしなんと、長椅子で眠っていた時のこと、すべてに栄光ある御方のそよ風がわれの上を漂い、これまでのすべての知識をわれに教えてくださったのだ」。化身という「絶対者からの引き上げ」を通じた比類のない神秘的な現象に意味されるものが、釈尊自身によるバラモンのドナへの言葉の主旨となんと合致していることだろうか。「バラモンよ、そんな蓮のように、私もこの世に生まれ、この世で育ったにもかかわらず、この世を克服し、この世に汚されずにその場にとどまっているのです。それが、仏陀である私です<sup>1)</sup>」。

だが、改心を頑なに拒む人類でも、特に虚栄心が強く退廃した統治者は、聖なる試金者による明確な警告にかかわらず、「カルマの」結果である「天誅」を顧みることなく、方向が定まらない我が道を進んでいた。19世紀の人類の指導者の中でも最強の君主たちに、その運命を秤に載せた書簡が王の中の王から送り届けられた。バハオラは、警告であると同時に予言となったこの書簡の中で、自らの追放と投獄を命じたオスマン・トルコの皇帝アブデュル・アズィズに、帝国が崩壊し、民が苦悶することを予告した。

「物事の成り行きは変わり、諸々の状況は実に嘆かわしいほどになるだろう。荒れ果てた丘陵の砂がうめき声を上げ、山の木々がすすり泣き、万物から血が流れるほどに、状況は悲惨なものになるだろう。そして汝は、ひとびとが悩み苦しむ姿を目にするであろう<sup>2)</sup>」(暫定訳)

差し迫った未来を警告するバハオラの予言に耳を傾けず、収賄と浪費に耽溺し続けていた専制君主アブデュル・アズィズは、書簡を受け取って2年を経たずして、宮廷を占拠した反乱軍により退位させられた。そして、拷問を忌避し、自殺した。19世紀まで6世紀の間、欧州の強大な国の一つとして繁栄していたオスマン帝国が現在では驚くほどに規模収縮したことが、地図から見て取れる。バハオラがオスマン帝国皇帝に宛てた書簡の中で示唆していた「成り行きは変わり」の言葉がまさに当てはまる。「オスマン」の言葉はトルコの国務から今日、消滅している。書簡には他にも当時から見た未来に起こることが記されているが、そのほとんどが喜ばしいと言うにはほど遠い。

欧州の君主の中でも狡猾でうぬぼれの強い自己中心な君主であり、バハオラから送られた最初の書簡に目を通すと嘲笑し、「この者(バハオラ)が神なら、余は二つの神なるぞ」と見下すような言葉を放っただけのナポレオン3世に、

---

1. 本書 60-61 頁参照. 『アングッタラ・ニカーヤ』 11.37-3 も.

P292

その王国が剥奪されることを警告する第2の書簡を、バハオラは1869年に送った。ナポレオン3世は、この第2の書簡を受け取って1年も経たない内に、セダンの戦いでプロイセン軍に迎撃され、敗北の内に英国に亡命したが、病に侵されて1873年に現地で死去した。ナポレオン3世に宛てられたバハオラの書簡を訳したアッカのフランス領事代理は、尊大な皇帝にもたらされた運命の破滅的急転を目にすると、バハオラが神の顕示者の地位にあることを認めて信者となった<sup>1</sup>。第2の書簡では、古い宗教秩序の終焉も命じられている。その秩序とは、フランスを当然のごとく支配していたキリスト教教会のものに他ならない。

「おお、パリの王よ。もはや鐘を打ちならす必要がないことを僧侶らに告げよ。真理なる御方、神にかけて告げる。最も力ある鐘が、最も偉大なる名を持つ新しい顕示者によってもたらされ、最高の、最上の主の意志の指が、不滅の天上において、栄光に満ちあふれる神の名の中で、打ち鳴らしているのである<sup>2</sup>」

書簡が送られてから1世紀しか経過していない。何百年間もキリスト教を奉じてきたフランスでは今、人口の80パーセントがキリスト教への信仰をすでに捨て、大切にされてきたキリスト教会の教説と制度とは正反対の物質的イデオロギーに国民は夢中になっている。

新しく出現した救世主バハオラから送られた書簡すべての中でも、ローマ教皇ピウス9世に送られた書簡ほど痛切極まるものはない。教皇がもし誠実であるなら、求めていると教皇本人が公言した不滅の生命の杯を献げようと記されている。

「法王よ、ヴェールを引き裂いてすてよ。主の中の主である神が雲に深くつつまれて訪れたのである。そして、全能で誰も抑制することのできない神が天意を成就したのである。最初に天より神が降り来たとまったく同様、神は事実、再び天より降り来たのである。かつて、パリサイ人たちが何らはっきりした証拠もなしに、彼（キリスト）と争ったように、あなたが、彼（バハオラ）と争うことのないよう注意せよ。……俗世間を背後にすてされ。そして、あなたの主に向かえ。この全世界は主を通じて照らされて来たのである。あなたはあまたの宮殿に居を構えているが、神の啓示の王たる彼（バハオラ）はこの世で最も荒廃した所に住んでいる。……慈悲そのものである主の名において、この世の人々の中に立ち上がれ。そして、確信の手で生命の杯をしっかりとつかみ、それを飲みほせ。そして、次に、深き信仰を持つ人々の中でこの杯を求める者にこれを提供せよ。

---

1. *Bahá'u'lláh*, p.44, *Hand of the Cause*, H.M. Balyuzi, George Ronald, London, 1963.

2. *The Proclamation of Bahá'u'lláh*, (「オンライン・バハイ図書館」から)

聖霊と呼ばれた彼（キリスト）について考えてみよ。彼が訪れた時、当時の最高の見識者たちは彼の祖国において、彼に敵対する判決を下した。しかるに、一介の漁師（ペテロ）が彼を信じたのである。……キリストが威厳と力をもって現われた時、このキリストに反対した者たちのことをよく考えてみよ。いかに多くのパリサイ人たちが、神よりの救世主を見ることを待ち望み、神よりの救世主から隔離されることを嘆き悲しんでいたことか。それにもかかわらず彼の到来の芳香が吹き流れ、彼の美のヴェールが取りさられた時、彼らは顔をそむけ、彼と争ったのである。ほんのわずかな人々だけが、しかも、世俗の中にあっては何の力も持たぬ人々だけが、彼の顔に自らの顔を向けたのである。しかし、今日、権力を与えられ、主権を受け継いでいるすべての者が彼（キリスト）の名のもとに自らを誇っているのである。同様に、無数の修道士たちが神の名のもとに教会に引きこもって来たが、今日、いざ約束された時が到来し、我が神の美を明らかにした時、彼らは朝な夕なに神を求めていながら、我を知ろうとしなかった。

息子であるキリストが秘めていた言葉が明らかにされたのである。今日、これは人間の形で送られたのである。父なる主に祝福あれ。彼は誠に最も偉大なる尊厳をもって世界諸国民の上に訪れたのである。多くの正義をもって任ずる者たちよ。彼に顔を向けよ。いまこそ岩（ペテロ）が、「見よ！父が訪れた。神の国で約束されていたことが実現されたのだ。この世がその罪悪から浄められるよう、慈悲深き神の道において、我が肉体は十字架を熱望し、我が頭は突きささる槍を待ち望んでいるのである」と声高く叫びながら、すべてを所有し、最高の御方である主を称讃する日であると言ったその日である<sup>1)</sup>

ピウス9世は並の法王ではなかった。バハオラの書簡が届いた時、キリストの最初の使徒になったペテロに遡る系譜を引く第294代法王は、歴代のいかなる法王よりも長い期間、在位していた<sup>2)</sup>。しかし、バハオラからの書簡が1866年にその手元に届くと、法王の誠実さは無謬の秤にかけられ、物差しが彼に当てられた。

---

1. *Bahá'í Revelation*, pp.29-31, Bahá'í Publishing Trust, London, 1955. 『法王ピウス9世への書簡』（「オンライン・バハイ図書館」から）

2. 在位期間1846年から1878年。

それから1年が経たぬうちに、ローマ・カトリック教会イタリア王のヴィットーリオ・エマヌエ

ーレがローマに侵攻し、1,116年の歴史がある教皇領を新しいイタリア王国の中に強制的に接收した。法王はイタリア政府から恩給を提言されても断り、「バチカンの囚人」としてサン・ピエトロ大聖堂内に軟禁された。わずか1年前に自らに宛てられた最大の囚人からの呼びかけを聞き入れなかった結果だった。ピウス9世は自らの失敗が招いた屈辱の内に余生を送り、1878年に死去した。ローマ・カトリック教会の事実上の教会員であるローマの民衆の目に彼の最後の醜態が映ったのは、死去して3年後のことだった。サン・ロレンツォ・フオーリ・レ・ムーラ大聖堂に最終的に安置されるために運ばれていたその棺と、会葬者めがけて、ローマの教権反对者が泥を投げつけたのである。しかも未遂に終わったが、遺体を奪い、テヴェレ川に沈めようと試みた。イスラム教聖職者のように、サンガのように、キリスト教世界も、ローマ・カトリック教会も、ギリシャ正教も、プロテスタントもまた、刷新が求められる様相を、バハオラが運命の岐路となる書簡をピウス9世に送る以前から示していた。こうした悲愴な様相と相まり、イエス・キリストの到来への期待感が世界中に広まっていた。キリストの再来に伴う「神の栄光」<sup>1</sup>とは、バハオラの称号そのものに他ならない。しかし、他の宗教のいわゆる指導者や聖者のように、キリスト教世界の法王も司教たちも時代の主に関心を全く示さず、場合によっては、敵意を向けた。このようにして、キリストが教えた祈りを約2千年間祈り<sup>2</sup>、目標としていたにかかわらず、「地上における神の王国」樹立への旗印を掲げる旗手になる機会を逸したのである。かの由々しき書簡がピウス9世に届いた日から、最高権威者であったかの教皇だけでなく、キリスト教教会の他の宗派の運命は急落し、その制度と信条への魔法が世界中で解けるといふ事態に陥っている。しかしながら、キリスト教教会を蝕んでいる諸々の問題を掘り下げることが本書の目的ではない。

---

1. ユダヤ・キリスト教の聖典も、他宗教の聖典のように、バブとバハオラの到来に関する予言に満ち溢れている。仏暦2387年(西暦1844年)と仏暦2406年(西暦1863年)にそれぞれが到来したことを明確に示し、「奇跡の双子」の到来に関わる焦点地としてイラン、アッカ、ハイファを指し示している。

2. 主の祈り。「……みこころが天で行なわれるように地上でも行なわれますように」

P295

この兆候は古来のすべての宗教の機構において共通する。ピウス9世をナポレオン3世を打ち負かした者たちも、自分たちの尊大さと野望のために、バハオラが警告していた災厄から無傷でいることは叶わなかった。バハオラは、ナポレオン3世を降伏させたドイツ皇帝ウィルヘルム1世に対し、世俗の栄光は本質的に一時的なものであることを述べ、その首都、ベルリンが当時、栄華を極めていても、何度も繰り返し、災禍に覆い包まれる姿が見えることを警告した。

「かつてはあなたより卓越せる権力を持っていた者(ナポレオン3世)を想い起こすがよい。彼の地位はあなたの地位をはるかにしのいでいた。だが、現在、彼はどこへ行ったのか。彼の所有していたものは一体どこへ消え去ったのか。注意せよ。そして、目覚めぬ者たちの仲間となるな。数多くの暴虐が我を苦しめていることを彼(ナポレオン3世)に知らせ

た時、彼はまさにその神の書簡を投げ捨てた。それゆえに恥辱が彼を四面より襲い、彼は偉大なる損失の中に塵埃と化したのである。おお国王よ！ 彼（ナポレオン3世）について、また、あなたのように幾多の都市を征服し、多くの人間を支配して来た者たちについて熟考せよ。全く慈悲深き神は彼らを宮殿から墓場へと追い落した。忠告に耳を傾け、熟考する者たちの仲間となれ。おおラインの岸よ。報復の剣が何度となく引きぬかれたために流血につつまれた河を我は見てきた。これはもう一度繰り返されるであろう。そして、ベルリンは今日、群をぬく栄光の中に存在しているが、我にはその号泣が聞えてくるのである<sup>1)</sup>

この書簡はバハオラからウィルヘルム1世に1870年に宛てられた。だが、ウィルヘルム1世とその取り巻きは、彼方の片隅から聞こえてくる囚人の呼びかけに耳を傾けられないほどに驕り高ぶっていた。しかし、ベルリンは1918年に「流血につつまれ」、1945年にはそれが「もう一度繰り返され」たことで、その後、ほぼ50年の間に、単独の都市であることも、ましてや単一国家の首都であることも辞すことになった。

バハオラは、西半球にあっても、ヨーロッパ諸国とはまだ肩を並べるまでには至っていない新興世界にも書簡を送った。「アメリカの為政者たちと共和国の大統領たち」と題する書簡の中で愛と良き前兆を伝えている。

---

1. *The Promised Day is Come*, pp.36-37. Shoghi Effendi, Bahá'í Publishing Trust, Wilmette, Ill., USA, 1941. 『ウィルヘルム1世への書簡』（「オンライン・バハイ図書館」から）

P296

「おお、アメリカの為政者たちと共和国の大統領たちよ。永遠の木の小枝でうたう鳩の声に耳を傾けよ。我の他に神はなし。我こそ永遠なる者、寛容なる者、すべてに恵み深き者なり。その施政の聖堂を正義と神への畏敬の念で飾れ。そして、その頭に宇宙の創造主であるあなた方の主を思い起こすという冠をのせよ。……過去においてその出現を約束されていた御方が栄光に輝やく場に現われ、眼に見えるもの、見えぬものすべてがこれを歓喜して迎えているのであるこの神の日の恩恵を身に受けよ。……墮落した者らに正義と手を結ばせ、命令者であり、すべてに精通し給うあなた方の主の命令のむちを我がもの顔にふりまわす圧政者を滅ぼせ<sup>1)</sup>

奴隷制を禁止し、独裁的支配の放棄と引き換えに、真の議会制と協調する統治を開始したことでバハオラを喜ばせた大英帝国には、良き政府についての構想を描き、それを遵守しようと努力する者たちを称賛する包括的な書簡を送った。宛先は数々の強大な支配者の中で唯一の女性であり、史

上最大最強の帝国の女王、ヴィクトリアであった。かの広大な地域とかの莫大な数の国民を統治した人物は、彼女以前も以降もイギリス史上で現れていない。在位期間は64年間に及び、王の中の王のお眼鏡に叶う女王であった。

「おお、ロンドンの女王よ。かの聖なるロートの木から、- まことに、全能者にして聡明なる我以外にほかに神はなし- と呼びかけるあなたの主であり、全人類の主の声に耳傾けよ。地上のものをすべて放棄し、あなたの王国の頭上に、主であり、栄光ある御方の記憶という冠をかぶせよ。まことに、この顕示者はその最も大いなる栄光のうちにこの世に現われ、かくて、福音書に述べられたすべてのことは成就した。……」

欲望を捨て、心をあなたの主である神に向けよ。我は、天地の創造者である神のためにあなたの名を述べる。神こそまことに私の言葉の証人である。あなたが、男女を問わず奴隷の売買を禁じたとの報を得た。まことにこれは、このすばらしき啓示に神の命じられたことである。これにより、神は真にあなたのためのほうびを定められた……」

---

1. 『アグダスの書』同書はバハオラの宗教制の母なる書であり、彼の世界秩序の枠組みにおける個人と社会の遵守すべき法で大半を占められている。

P297

また、あなたが政権の一部を人民の代表に委託したとの報を受けた。まことに、あなたは善行をなし、それにより政務の組織の基礎は強化され、あなたの下にある者すべての心は、身分の高低をとわずいやされるであろう。しかし、彼らは神の僕らの中にあつて信頼に足るものでなければならず、地上のすべての人の代表として自覚する義務がある。これこそ、支配する者であり、聡明なる神がこの書簡で彼らに勧告していることである。……祝福された者よ、神のために議会に入り、人々のために純粋な正義により判断する者は、まことに祝福された者である。……<sup>1]</sup>」

「おお、選出された各国民の代表者たちよ。共に協議せよ。そして、人類を利することのみを追求し、世の状況の改善を協議の課題とせよ。おお、汝ら注意深く観察することができたならば。この世を人間の身体と同等に見なせ。それは完全かつ完璧な姿をもって創造された。しかし、様々なことが原因となり、今や深刻な病や障害に侵されている。一日たりとも安らぎを得ず、その病は益々深刻化している。なぜなら、この世は、私欲に走り、重大な過ちに陥った無知なる医者たちの手当てにゆだねられているからである。そして、あるとき、有能なる医師の治療により身体の一部が治癒されても、残りの部分は癒されることはなかった。全知にして賢明なる者は、汝らにこう告げるのである」

「この日、傲慢さに酔いしれた為政者のなすがままになっている世界をわれは見る。その傲慢のあまり、為政者たちは自分の最善の利益となることすら見分けることができず、ましてや、これほど驚異的かつ挑戦的な啓示を認識することは到底できないでいる。世の状況の改善に立ち上がる為政者が現われるたびに、このことを告白するかいなかにかかわらず、常にその動機は自己を利することにあつたのである。そして、その卑劣な動機が原因となり、世を癒し改善する能力が限られたものとなつたのである<sup>2)</sup>」

だが、バハオラが賛辞の言葉を降り注いだ啓発された女王が書簡を受け取るなり、「これが神から送られてきたのであれば、未長く影響を与えるでしょう。そうでなくても、害をなすはずはありません」というありきたりな発言をしても、バハオラの書簡には重大な側面があつた。古い秩序は消滅すべき運命にあり、権力は諸王や聖職者たちから取り上げられ、人間たちが打ち立てた諸々の帝国は、一体化した人類が築き上げる一つの国に道を譲る運命にあることが示唆されていた。諸国は「地球という」単一の国に結束しなければならない。これが、その要点である。そしてバハオラがヴィクトリア女王に大胆に宣言したとおり、人類を一つの家族になすことが彼の使命であつた。

「一つの普遍な大業と、共通の信仰のもとに全人類が融合されること。主は、これを世の病を癒す最高の治療薬、そして最強の手段と定めたのである。しかし、有能にして、全能なる、そして靈感を得た医師以外にこのことを実現できるものは存在しない。まことに、これこそは真実であり、これ以外のことはすべて過ちである（[ここまで落穂集](#)）。最も強大な手段が到来し、太古から光明が輝くたびに、彼は、彼とこの世界の間にあたかも雲のように割り込んだ無知な医師たちにより、引き留められていたのである。（[暫定訳](#)）」

---

1. 「ヴィクトリア女王への書簡」（[オンライン・バハイ図書館](#)から）

2. 『落穂集』バハオラの書物よりの選集、（[オンライン・バハイ図書館](#)から）

そして、バハオラが生成した力という、ヴィクトリア女王には信じがたい力が、女王本人があづかり知らぬうちに新世界秩序をすでに稼働させていた。変革は加速していた。女王の曾孫、プリンス・オブ・ウェールズのエドワード(のちのエドワード8世)は、1932年にインドを訪問していた期間に、大英帝国のインド支配は少なくともあと50年は続くだろうという発言を耳にした。だが、エドワードがその発言を聞いてから15年も経たない内に、200年間沈むことがなかった大英帝国という太陽は刻々と沈降を開始した。「帝国」という名称の使用が中止され、「コモンウェルス」が代わりに使用されるようになった。イギリスは世界各地の加盟国からなるイギリス連邦の上に君

臨するが、同等の国家は他にも少なくない。新たに興隆した東西の強大な超大国を前に、かつての「大英帝国」の威光は影を潜めている。

向かう方向は明白である。世界の和合という目標を果たすには、人類の一体性に代わる実行可能な選択肢はない。20世紀の後半の世界は危険をはらんでいると同時に、想像もつかない善への可能性が満ち溢れている。その時代を生きる私たちに、人類を全滅に導く能力もやはり確実に備わっている。だが神の預言者の書簡を1世紀前に受け取った者たちに、このことは明らかではなく、警告は無視された。彼らは聖なる導き手が差し出した、生きるための「安全な避難所」を拒絶し、代わりに、彼ら自身とその王国の破壊と死を選択した。この警告は、バハオラからの最後の警告であったが、彼らを通して、人類一般とその制度、政府機関に宛てられたものでもあった。

「こうして、われは、汝らを利することを示すのである。おお、汝ら、理解するものならば。国民は汝らの宝である。神の命令にそむき、汝らの信託である国民を強盗の手に引きわたすことのないよう注意せよ。汝らは国民によって支配し、国民によって生活し、国民の助けによって征服する。

P299

にもかかわらず、汝らは国民を蔑視する。何と奇妙なことか<sup>1]</sup>

啓発された現代においてすら、独裁君主と国家安全保障を装った既得権益によって、表現の自由と正義が窒息させられている事態がしばしば目の当たりにされている。愛国主義を伴う、この便利な包括主義は、悪人たちの長年の避難所であり、人類の社会的進化の必然的次段階である世界の和合の成就を阻み続けている。指導者と私たち両方に、バハオラは助言している。

「おお、地上の王たちよ。すべてを支配する主が出現したのである。王国は神に属し、神こそは全能なる庇護者にして、御自力にて存在し給う。神のみを崇拜し、輝く心もてすべての名の主なる汝らの主に顔を上げよ。たとえ汝らの所有するすべてをもってしても、この比類なき啓示に比べ得るものでは決してない。汝ら、このことを知り得たならば。

おお、地上の王たちよ。汝らは従属者にすぎない。今や王の中の王なる者がその最もすばらしき栄光につつまれて出現し、危急の場の救助者におわし、御自力にて存在し給う御自身のもとに汝らを召喚しているのである。汝らの慢心が啓示の源を認める妨げとならぬよう注意せよ。また、世俗の諸事が暗幕となって、汝らを天上の創造者から閉め出すことのないよう心せよ<sup>2]</sup>

「最大平和を拒否した以上は、自らの状況と、汝らに頼る国民の状況を少しでも改善できるよう、小平和にしっかりとすがれ。

おお、地上の支配者たちよ。自国の領土を守るに十分な軍備以上は所有する必要のないよう、互いに和解せよ。すべてを知り、忠実なる者の忠告を無視することのないよう注意せよ。

---

1. *The Promised Day is Come*, p.26. Shoghi Effendi, Bahá'í Publishing Trust, Wilmette, Ill., USA, 1941. 訳は『落穂集』119 段落。「オンライン・バハイ図書館」から。バハオラのこの言葉は、コーリャ族とシャカ族の王子たちへの釈尊の言葉に酷似する。王子たちは、原因すら知らぬまま、戦闘のために集まっていたが、間一髪のところ、釈尊が調停介入したことで戦闘を免れた。「汝の民を、人が一人息子に対するように顧みよ。民を虐げず、滅ぼしてはならない。汝のからだのすべての構成要素を正しく保ち、不義な教義を捨て、まっすぐな道を歩みなさい。他者を踏みにつけて自分を高めてはならない。苦しむ者を慰め、親しみなさい」『ブツダチャリタ』1522-1530.

2. 『落穂集』105 段落。「オンライン・バハイ図書館」から。「『徳の高い行いと理性の行使によって真の優越性を示し、地上のものの虚しさについて深く瞑想し、人生は常に変転するものであることを理解しなさい……心を高揚させ、確固たる目的を持って誠実な信仰を求め、王としての振る舞いの規則に背かず、幸福とは外的なものにあるのではなく、あなた自身の心次第であることをわきまえなさい。そうすることで、後世に残る名声を築き、如来の好意を確実に得るだろう』……王は敬虔な態度で耳を傾け、仏陀の言葉すべてを心に刻みつけた」『ブツダチャリタ』1611-1671.

P300

おお、地上の王たちよ。不和の嵐が静まり、国民が平安を得ることができるよう、互いに和合せよ。おお、汝ら、理解するものならば。汝らの中のあるものが武器をかざせば、全員でそのものに向かえ。これこそは明白なる正義である<sup>1)</sup>

そして、最終的な予言がこれである。

「おお汝ら世界の人々よ！まことに不慮の災難が汝を追い、悲しき報いが汝を待伏せしていることを知れ。汝のなしたる行動が、わが目より消されていると思うな。わが美にかけて誓う。汝らのなせることすべてを、わがペンは橄欖石の書に、明らかなる文字もて刻みしことを<sup>2)</sup>

人類を全滅しかねないほどに兵器が強力化する可能性を学識者や先見者が推測するだけでも、1870年代の人々には十分だっただろう。だがバハオラに、推測という言葉は当てはまらない。ラジウム<sup>3)</sup>や放射性物質という言葉がそれぞれの発見者によって造語されるはるか以前に、そしてウランが核分裂により最初の原子爆弾製造のための元素となるのが1937年に見出された後で、ガジェット<sup>4)</sup>なる呼称を公式に与えられ、1945年に炸裂させられたさらにはるか以前に、その威力の本質を内なる視力で見極めていた。バハオラはこの力についてを、1870年代に顕した書簡の

一つにおいて明らかにしていた<sup>5</sup>。

「奇妙で驚くべきものが地球に存在する。しかしそれらは、人々の知性と理解から隠されている。これらのものは地球の全大気を変えることができるのであり、その汚染は死をもたらすものとなるであろう。何とすることか！ われは驚くべきものについて述べたのである。稲妻やそれに似た力というものは、操作する者によって統制され、技師の命令によって動く」

---

1. *The Promised Day is Come*, p.26. Shoghi Effendi, Bahá'í Publishing Trust, Wilmette, Ill., USA, 1961. 訳は『落穂集』119 段落。「オンライン・バハイ図書館」から。

2. 『落穂集』104 段落。「オンライン・バハイ図書館」から。『隠されたる言葉』ペルシャ編 63 も参照。

3. ポロニウムとともに、マリ・キュリーによって 1898 年に発見された。

4. 「道具」という意味ももつ。ほぼ 1 世紀前にバハオラが使った言葉。

5. *Tablet of the Words of Paradise*, p.14, Baha'u'llah, 1870, Akka. Tablets of Baha'u'llah. Translated by Ali Kuli Khan, published by the Bahá'í Publishing Society, Chicago, Ill., USA, 1906. 訳は『カラマテ・フェルドフィエ(楽園の言葉)の書簡』「オンライン・バハイ図書館」から。

P301

かの「奇妙で驚くべきもの」は人間の知性で掘り出され、ごく限られた適用経験しかないにかかわらず、致命的な感染力と破壊力で人間心理にすでに取り憑いている。もはや想像不可能ではない「不慮の災難」が早くも追いつているのである。

バハオラの時代から 20 世紀中頃までの学識者の中で、大規模産業化による科学のさらなる進歩と、ボタン 1 つで済ませられる生活が、人類に恩恵をもたらすにはほど遠いことを想像していた者がいただろうか。バハオラは初期(1867 年)に著した書簡の一つで、黄金とは世の福利を導くものすべてにおいて「中道」を歩むことである、と釈尊のように強調し、文明化の名の下に科学技術の発展が行き過ぎる危険に警鐘を鳴らした。未来をはっきりと予見していたのだ。

「何事も中庸という限度を逸脱すれば、その有益な効果は失われる。たとえば、自由や文明というようなものを考えてみよ。賢者たちがそれらをどれほどすばらしいものと考えようとも、度を過ぎれば、かえって人々に有害な影響をおよぼすのである……<sup>1</sup>」

「正義にすぎるものは、いかなる場合にも中庸の範囲を超えてはならない。正義にすぎるものは、すべてを見給う御方の教導により、万物の中に真理を発見するであろう。技術や科学を推進する学識者がしばし自慢の種とする文明も、中庸の域を逸脱することが許されれば、

文明とて人類に大いなる悪をもたらすであろう。全知者は汝らにこのように警告する。中庸が守られるとき、文明は最も豊かな善の源泉となる。しかし、極端に走れば、文明は同様に大量の悪の源泉となろう。おお、人々よ。このことについて熟考し、過ちの荒野を混乱に覆われてさまようものとなるな。文明の火炎が都市を飲み込む時が近づきつつある。その日、莊嚴なる舌はこう宣言するであろう。「御国は神に属し、神こそはすべてに讃美される全能者なり。中庸の原則は他のすべての事柄にも適用される。このすばらしき書簡に汝らを記憶する汝らの主に感謝せよ。栄光の王座の主におわす神に讃美あれ<sup>2)</sup>」

- 
1. 『落穂集』 110 段落、「オンライン・バハイ図書館」から.
  2. 『落穂集』 164 段落.

P302

バハオラが中庸の範囲を超えた物質主義に警鐘を鳴らした時から 1 世紀後に生きる私たちは、その警告を受け入れて理解している。私たちが目にしているのは環境汚染に冒された世界である。生命維持に欠かせない大気圏中のオゾン層が破壊されれば、爆撃がごとき紫外線放射にさらされ、地上の生命は全滅するだろう。物質主義はすでに今、驚愕すべき悪質な効果を及ぼしている。だがバハオラがいた当時、彼が与えていた警告を信じる者も理解できる者もいなかった。

「この日、彼の啓示の庇護のもとに入る以外に神の怒りの猛威と神の激烈な威力を逃れる所はなく、避難所もなく、汝らを守り擁護するものもない。まことに、これはこの若者を通じて現わされた啓示である。これほどの輝きを放ち、貴重にしてすばらしい構想を与え給う神に栄光あれ。われ以外のすべてのものを離れ、わが顔に面を向けよ。汝らにとってこのことは汝らの所有するもの以上の価値がある。神の舌は、真実を語り、すべてを包含し理解するわれ自身の言葉を介してわが言葉の真実を証言する<sup>1)</sup>」

そして、救済のメッセージを聞き入れようとしない人類に降りかかる打撃的運命は食い止められないことを確かなものにしていく。

「おお、人々よ。われは汝らに時刻を定めた。定められた時刻までに神に向かうことを怠るならば、まことに彼はすさまじい威力をもって汝らを捕らえ、恐ろしい苦悩が四方より汝らに襲いかかるであろう。汝らの主がそのとき汝らに下す懲罰は、何と厳しいものとなろうか<sup>2)</sup>」

一見、無力で窮乏した一介の囚人が、最強の支配者たちと指導者たちに警告した通りのことが起

きるなど、奇想天外というより他にない。しかし、情け容赦なく確実に、バハオラが警告した通りの運命が受取人一人ひとりに降りかかったことで、いかに驚くほどに的確であっても、書簡は単なる予言という範疇から引き上げられ、創造物と諸々の状況を揺るぎない目的に屈服させることができる、強大にして否応なくすべてを制する意思の領域におかれることになった。

---

1. 『落穂集』 121 段落「オンライン・バハイ図書館」から。

2. 『落穂集』 108 段落。

P303

聖なる教師のメッセージは、その顕現した時代の人類という今際の際にいる人体の治療薬であるだけではない。それどころか、人間が着想したにすぎない理論や哲学が完全に無用になる前に陥る死のような深い眠りから、人類を救い上げる唯一の道を提供する。このことは歴史を通じて常に明証されてきた。そしてバハオラも釈尊のように、この真理を証言し、独房の中から宣言した<sup>1</sup>。

「すべてに精通した医師の指は人類の脈をとらえている。彼は病を診断し、誤りのない英知により治療薬を処方するのである。各時代にはそれぞれ特有の問題があり、人にはそれぞれ特別の願いがある。苦悩する今日の世界が必要としている治療薬は、後の時代が求めるものと決して同一ではあり得ない。汝らの生きる時代の要求を憂慮し、そこに関心を寄せよ。そして、その時代に必要とされるもの、また、急務とされることに汝らの審議を集中せよ。

全人類がどれほど深刻かつ計り難い苦悩に悩まされているか、われには手に取るように見える。病床に伏し、激痛に苦しめられ、幻滅しきった人類の姿がわが眼前にある。慢心に酔いしれたものらが、人類と、決して誤ることのない聖なる医師との間に立ちはだかっている。そして、見よ、彼らの策略は自分たちをも含む全人類を抜き差しならぬ罠に陥れている。彼らは病の原因を発見することもできず、治療法についての知識も何ら持ち合わせていない。彼らはまっすぐなものを曲がっていると思い、友を敵と取り違えている。

この囚人の優美なるメロディーに耳をかたむけよ。深い眠りにある人々が目をさますよう、立ち上がり、声たからかに告げよ。言挙げよ。おお、まるで死人のような人々よ。神のめぐみの御手は汝らに生命の水を差しのべている。急ぎ行き、心ゆくまで飲め。この日、生まれ変わったものは、もはや決して滅びることはない。また、この日、死んだままの状態にあるものは、決して生きることはない<sup>2</sup>」

---

1. 本書の 166 頁には、クシナガラのパラモン哲学識者スバドラが入滅を目前にした釈迦如来に(他の教義と教師に

ついでに)質問をする場面が記されている。釈迦如来はこのように明確に答えた。「スバドラよ、高貴な八正道が見出されない教義と規律においては、一等、二等、三等、四等のいずれの等級にも、真の聖人は見出されない。しかし、高貴な八正道が見出される教説と規律には、四つの等級すべてに真の聖人がいる。他の教師の制度に八正道は見出されず、真の聖者も見出されない。しかし、スバドラよ。この制度においては、同胞たちが完全な人生を生きるゆえ、世界から阿羅漢がいなくなることはない」。(『ブッダチャリタ』 『ダンマパダ』 w.273,274 参照)

2. 『落穂集』 108 段落, 「オンライン・バハイ図書館」から.

P304

バハオラの臨在による恩恵のことごとくがアッカに降り注いでも、彼は石壁の牢内に軟禁されたままであった。貧弱な低木が生えるだけの砂漠の街だったアッカは彼の力によって庭園のごとき街に近年になって変貌したが、この地の牢内にいた9年間、彼はついぞ、青々とした緑を目にすることはなかった。アッカの民は、真の神人になっていた彼をいつまでも牢内に閉じ込めておく知事を非難の目で見ていた。当の知事は素知らぬ顔をし続けることはこれ以上できないと観念すると、アッカ市を去ってこの国のどこにでも自由に住んでよい、と親しみある態度でバハオラに伝えた。バハオラは自らが投獄されている期間に、牢獄の「扉は開かれるだろう。私の天幕はカルメル山<sup>1</sup>に張られ、最高の喜びが実現するだろう」と予言していた。アブドル・バハにとって、その言葉が象徴するものは明らかであった。



## 図8

### アッカ近郊のバージの邸宅

---

1.カルメル山は、アッカから南西方向に25キロメートル離れた、アッカ湾が湾曲した場に所在する。

P305

アッカ周辺の田園地帯にあり、湾を挟んでアッカの対岸にある、ユダヤ教、ゾロアスター教、キリスト教、イスラム教の4大宗教にとっての聖なるカルメル山は、聖王<sup>2</sup>の足跡にまもなく踏みならされるようになるのだ。

そこで、アブドル・バハは、アッカから6キロメートルほど北にあるマズライと通称される邸宅を借りた。父が牢獄都市での長い入獄生活の後で体調を回復してもらうには格好の家であった。バハオラはマズライに二年間居住してから、近隣のバージ(「喜び」を意味する)の邸宅に移った。完成したばかりのこの邸宅の所有者は、疫病の発生を恐れてアッカから逃げ去っていた。アブドル・バハがこの邸宅を借りれたのは、そうした事情ゆえであったが、後に購入した。バハオラは家族とともにバージに11年間住んだ。写真からはその邸宅と周囲の風景が見て取れる。

釈尊はアッカを、当時のインドの人々が馴染んでいた山脈が全くない平野として説明しながら、掌のような平野であることも示唆した。

「そしてまた、阿難よ、その仏の国には黒い山も、宝の山も、山の王の須弥山も鉄圍山もどこにもない。仏の国はどこまでも平らで、手のひらのように美しく、あらゆる種類の宝石や宝物に満ちた地区がある」

「しかし、世尊よ、そのように平らなら、須弥山側に住む4人の摩睺羅伽も、須弥山の頂上に住む忉利天の神々も、どこに居場所を見つけるのでしょうか」

地勢について阿難が混乱するのは無理もない。ある物理的な場所についての説明であることは承知していたが、インド(閻浮提)で一般的に知られている風景とはまるで違うからだった。神々の住まいとして誰にも親しまれている山々も説明の中に含まれていない。そこで釈尊は、阿難のためにさらに明確な説明を試みた。

「阿難よ、そなたはどう思う。この世界では、山の王の須弥山の上にある夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天、梵身天、梵先行天、大梵天から、阿迦尼咤天までの天に住む彼らがどこに自分たちの場所を見つけると思う？」と世尊が尋ねた。

---

1. 弥勒如来に言及する *Patika-Vagga*(Cakkavattisihanada-Sutta)では、正義(ダルマ)を復活させるために現れる世

界的な王のことが語られている。旧約聖書の『伝道の書』4:14には「獄舎から出て、彼は統治するようになる」と記されている。

P306

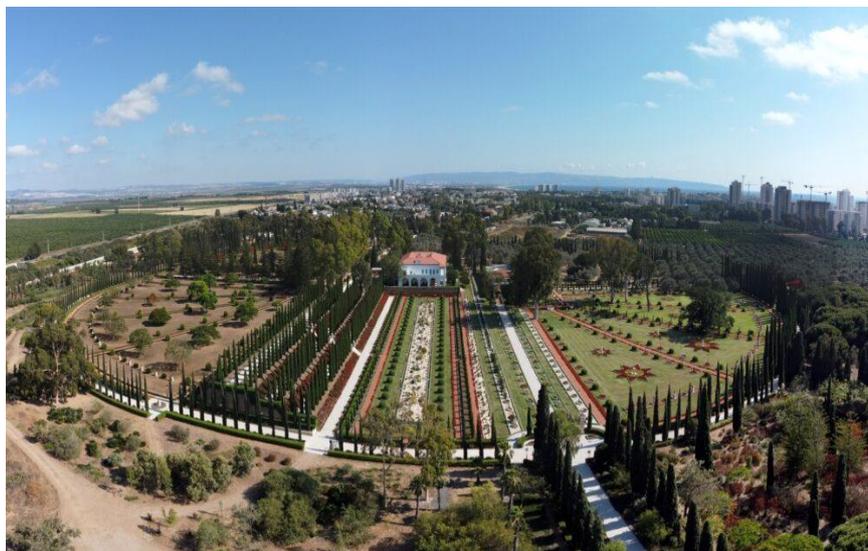


図9

上空から撮影されたバグダッドとアッカ平野。

「私の国はどこまでも平らで、手のひらのように美しい」

P307

阿難が答えた。「世尊よ、行業の果報をもってしても想像できません」

世尊が仰せになった。「ほら、行業の果報をもってしても想像できないことを、そなたは理解している。しかし、祝福された諸仏には、仏がたがどこにおられるかは想像できないものではない。一方、功德を積んだ有徳の者たちの聖なる奇跡的な力は、そなたには想像できないものに思える<sup>1)</sup>」

阿難は、「阿難よ、私の言葉を記憶し、苦悩から救われたいと願う後の時代の衆生のために（かの仏国の）国土を思い描くためのこの法則を繰り返し暗唱するがよい<sup>2</sup>」と釈迦から以前なされた指示に今度は忠実に従う。

ここに引用した文から、弥勒・阿弥陀如来が住むことが約束された地は物理的な土地として説明されていても、未来に明らかになるものであり、阿難が釈尊からその様相を聞かされたのは、「最後の時代の最後の時間」に救いを求める人々のために鮮明に記憶し記録しておくためであったことが分かる。事実、阿難は自分が質問をしたのは、後世に伝える目的で完全な説明が極楽の様相についてなされたことを確認するためであったと述べる。

「世尊よ、わたしもそのことを疑いませんが、ただ未来の人々のために、疑いを除きたいと思って質問させていただいたのです<sup>3</sup>」

釈尊は確証を与える。「阿難よ、そうだ、それがそなたがすべきことである<sup>4</sup>」

- 
1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 I. 17
  2. 『アミターユル・ディアーナ・ストラ』, 11
  3. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 I. 17
  4. ibid.

P308

バハオラは、依然として、オットマン帝国皇帝の囚人であったが、何年間もの投獄生活と行動の制約を受けた後の今、田園地帯で自由を与えられていた。アッカ市とハイファ市を何度も訪問し、時にはアブドル・バハと共にカルメル山を登り、最大の牢獄にいた時に予言していた通りに、天幕を張ることもあった。そしてカルメル山を登った何回目かのある時、バハオラはある場所を指し示すと、バブと彼の若い弟子、ムハンマド・アリの遺骸を納めた棺を安置するための霊廟をまさにその場所で建立するよう、アブドル・バハに依頼した。二人の遺骸は、バハイたちの勇敢かつ機転を利かせた取り組みで、神の至聖な山の懐の中のバハオラが示した場である最終的な安息地にゆっくりと向かっているところであった。アブドル・バハが父から受けた指示通りに霊廟建設を開始できたのは、1890年のこの日から19年後であった。

1890年4月、バハオラはバージの邸宅で、英国のケンブリッジ大学の著名な東洋学識者であったエドワード・ブラウン博士から申し出がなされていた謁見を承諾した。ブラウン博士はバハイにならなかったことが判明しているが、バハオラとの会見の様様、忘れがたきこの体験についての印象、バハオラが発した言葉を後世のために入念に記録した。バハオラに謁見した唯一の西洋人<sup>1</sup>で

あった博士は、次のように描写している。

私は広い部屋に入っていた。部屋の上手には低い長椅子があり、扉と反対側には二、三脚の椅子が置かれていた。私はどこへ連れて行かれるのか、誰に会えるのかと、いぶかしさと恐れから落ちつかない気分で数分が過ぎた。そのとき、この部屋に誰かがいることにはっきりと気がついた。長椅子の端が壁に接しているところに、不思議な神々しい姿の人物がタージュ<sup>2</sup>と呼ばれる種類の頭巾をかぶって腰かけていた。その頭巾の裾のまわりには白い小さなターバンがまとわれていた。私が熟視した顔は言葉ではとても描写することはむずかしいが決して忘れられない顔であった。輝くその眼は何人の心をも読むようであった。威力と権威とがその大きな額にそなわっていた。額や頬には深いしわがあるが、黒い頭髮や、ほとんど胸まで房々とおおっている髭は、歳をあざむくばかりであった。その人の前に身を屈めたとき、それが誰の前であるかをたずねる必要はなかった。その人こそ王たちが羨み、皇帝たちもただ嘆息をもらすばかりの、献身と愛の目標の人であったのである。

- 
1. バハオラにブラウン博士以外の西洋人が謁見した記録は確認されていない。
  2. 王冠を意味する。

P309

優しいが威厳のある声が私に座るように命じた。「あなたがここに来られたことを神に感謝する。あなたは囚人にして流刑者である者に会いに来られた。私はただ世界の利益と、国々の幸福とを願うばかりである。しかし、人々は私たちを暴動の扇動者とみなし、禁固追放に値するものとした。すべての国が同じ信念のもとに一つとなり、すべての人々が同胞として一体となること、人々の間に親愛と和合の絆が強化されること、宗教の多様性が消え、人種の差別がなくなること、これらのどこに害があろうか。ともあれ、それは必ず実現されるであろう。多くの無益な争いや破壊的な戦争はなくなり、やがて最大平和が必ず到来するであろう。あなたもまたヨーロッパでこれを必要としているはずである。これはキリストが予言したことにほかならない。しかし、ヨーロッパの王や支配者たちは人類の幸福のためよりも、人類の破壊のためにより思うがままに財宝を浪費しつつあるのが目の当たりにされていないか。これらの鬭争や流血や不和はやめられねばならない。そして、全人類は一つの家族、一つの親族のようにならねばならない。誇りは自国を愛する人にあるのではなく、人類同胞を愛する者にある<sup>1)</sup>

強情な人類とその指導者たちに宛てられた言葉には、慈父の言葉を思わせる響きがある。

「いつまで人類は片意地を張るのであろうか。いつまで不正がつづくのであろうか。いつまで混乱と動揺が人々の間にのさばるのであろうか。いつまで不和が社会を騒がせるのであろうか。失望の風はあらゆる方向から吹き、人類を分裂し苦しめる闘争は日々増加している。現在、一般に行きわたっている秩序は痛ましいほど不備であるため、迫りくる激動と大混乱の徴候は今やはっきり見受けられる。われは神に嘆願する。神の栄光に誉れあれ。神よ、御恩寵により世の人々をめざめさせ給え。彼らの行いの結果を有益なものとなし給え。彼らの地位にふさわしい行いが実行されるよう、彼らを助け給え<sup>2)</sup>」

---

1. *A Traveler's Narrative*, Edward Granville Grown, Cambridge University Press, 1891.

2. 『落穂集』110段落「オンライン・パハイ図書館」から。

P310

バハオラは言葉を続ける。

「おお、地上で争っている民族や種族の人々よ。汝らの顔を和合に向けよ。そして、和合の光の輝きもて自らを照らせ。共に集い、たとえ自分たちの間の論争の原因が何であれ、神のためにそれを根絶するよう決心せよ。そうすれば、この世の偉大な発光体なる者の光輝が全地球をつつみ、そこに住むものはすべて一つの都市の市民となり、ただ一つの王座の居住者となるであろう。この虐げられし者は、その生涯の初めからこのこと以外の望みは何も抱かなかった。そして、これ以外の望みを今後も抱くことはない。人種や宗教が何であれ、世界の人々はみな一つの天の源から靈感を受け、みな一つの神の民である。このことに何ら疑う余地はない。彼らの戒律の間に見られる相違は、それが啓示された時代の種々の要求や緊急度によって起こるものである。人間の我欲から起こるいくつかの例外を除けば、それらの戒律はすべて神の定めたものであり、神の意志と目的の反映である。奮起して、信仰の力で身をかため、汝らの空想の神々、汝らの間に不和をまき散らすものを粉碎せよ。そして、汝らを融合させ、和合させるものにすがれ。まことに、これは母なる書<sup>1)</sup>が汝らに啓示し与える最も崇高なる言葉である。莊嚴なる舌<sup>2)</sup>は、その栄光に輝く住処にあってこのことを証言する<sup>3)</sup>」

人々の間に和合と調和を確立することが、順次到来した化身すべての目的であった。人類の潜在的能量を解き放ち、潜在性を完全開花させる鍵が和合である。しかもこの中心テーマを、バハオラは常に強調している。

「何故われ汝らすべてを同一の土塊より創れるかを知るや。何人も他より自らを高しとなす

べきにあらざるためなり。常に汝の心のうちに、如何にして汝ら創られしかを熟考せよ。われ汝らすべてを同一の物質より創りし故汝ら一つの魂のごとく、同じ足をもって歩み、同じ口で食し、また同じ国土に住む義務がある。されば汝らの最奥なる本質より、汝らの行為と行動より、一体性のしるしと、世俗超脱の真髓が明白とならん。これぞわが汝への忠言である。おお光の群集よ。この忠言を心に留めよ。さらば汝ら不思議なる栄光の木より聖なる果実を入手し得ん<sup>4)</sup>

- 
1. 母なる書は『アグダスの書(最も聖なる書)』を指す。バハオラの宗教制の法が規定されている。
  2. 「莊嚴なる舌」は神の称号の一つ。
  3. 『落穂集』段落 111.「オンライン・バハイ図書館」から。
  4. 『かくされたる言葉』アラビア編 68. (注：釈尊が自らが在世した当時の人類に与えた忠告と非常に似ている。本書 120-121 頁参照)。

P311

釈尊は、絶対者と直に接触しようとしても完全に無駄であることを当時のヒンズー教徒に説き、代わりに、人間に開かれた唯一の道であるアヴァターラとその教え<sup>1)</sup>を通して近づくことが必要であると教えた。バハオラも、私たちの有限な意識では、絶対者、神を知ることはまず不可能であると改めて強調している。

「おお、サルマンよ。人間の知能は有限であり、厳格な限界のもとに置かれている。世の賢者や神秘主義者たちの言葉や書物はこの限界を過去に越えたこともなければ、これからも越えることは決して望めない。最も優れた人間の知能がいかにすばらしい高所に昇りつめたとしても、また、世俗を断ち、理解力を備えた心がいかに深遠な真実に到達したとしても、このような知能や心は、その本人の思考の領域や、本人の構想の産物を越えることはない。最も深い洞察力を有する哲学識者の瞑想も、最も浄らかな聖者の礼拝も、人間の口やペンから流れでる最も高尚な讃美の表現も、主なる神の啓示を介して彼らの内に創造されたものを反映するものに過ぎない。この真理について心して熟考するものは、人間が決して越えることのできない限界の存在を容易に認めることができよう。始まりのない始まりより、神を知り、神の姿を心に描こうとしたあらゆる試みは結局、神の創造の条件の範囲内に閉じ込められてきたのである。そして、その創造は神の意思の働きと、神のみが定める目的のために行われたのである。人間の心は神の本質を理解しようと奮闘し、人間の舌は神の神秘を語ろうと努力する。

- 
1. 「仏たちが誕生する時代は祝福される、真理の宣言は、実に祝福される。調和して賢明な僧伽は実に祝福される、

敬虔な信徒は幸いである！そして、もしすべての人が真理を知るなら、親切の種がより多く撒かれ、善行の豊かな作物が育つだろう』『マハー・ヴァッガ』 1.22. w.15-18. 「サッカの高揚」.

P312

しかし、神はこれらいかなる試みをもはるかに超越して崇高である。創造物を神に直接つなぐ交わりは存在しない。創造されたものの最も難解で深遠な引喩も神の存在を十分に言い表わすことはできない。森羅万象は、全宇宙にみなぎる神の意思によって創造されたのである。神は常に神の崇高にして不可分の本質の永遠なるいにしえの中に隠れ、接近し難い神の尊厳と栄光の内にとどまり給う。天上にあるすべてのものと、地上にあるすべてのものは神の命令によって創造され、神の意志にしたがって完全なる無の状態から存在の世<sup>1</sup>に踏み入ったのである。ならば、神の言葉によって形を得た創造物がどうして日の老いたる者の性質を理解できようか<sup>2</sup>]

それからの二年間、おびただしい数の著作と書簡、倫理的かつ社会的に人間が必要とするあらゆる側面を取り扱う論説が、バハオラのペンから奔流の勢いで著された。中でも、世界秩序を確立させる法を収めたアグダスの書(最も聖なる書)の比重は大きい。個人の行いについてだけでなく、現代と今後続く時代の社会が幸福になるために必要なことがこの法の書に記されている。とりわけ重要なのは、神意を受けた行政機構の設立に関する法である。機構は、信者がつくる世界中の共同体を守って指示を与え、協議課題の最終決議の局面では神から直の導きをもたらされる。

バハオラは議論の余地がない力を含ませたその遺言の書で、長子のアブドル・バハ<sup>3</sup>を後継者に任命し、自らが死去した後の指導と保護は彼を仰ぐように、と信者に命じた。バハオラは、『ケタベ・アード』(聖約の書)と『スリ・グスン』(枝の書簡)において、萌芽期にあった世界秩序の導き手としての任を、アブドル・バハが羊飼いとして継承することに疑問の余地を残さなかった。

---

1. 「Who sees Conditioned Genesis sees Dhamma; who sees Dhamma sees Conditioned Genesis」 『マッジマ・ニカーヤ』 1. 190-1.

2. 『落穂集』 148 段落「オンライン・バハイ図書館」から。

3. 本書では、アブドル・バハの人生と功績の詳述はされていない。たとえば、以下の優れた書籍が参考になる。*God Passes By*, Shoghi Effendi, 1944, Bahá'í Publishing Trust, Wilmette, Ill., USA, and *Abdu'l-Bahá*, H.M.Balyuzi, 1971, George Ronald, London. 本書で彼に言及する目的は、彼に関する釈尊の諸々の予言が成就されていることを確認することにある。

P313

「『わが現存の海が引き、わが啓示の書が終わったとき、神の定め給うた者、この古の根より生えた者に汝らの面を向けよ』。この聖句の指しているものは最も偉大なる枝（アブドル・バハ）に他ならない。われはこのように恩寵深くわが強力なる遺言を著した。われは誠に恩寵深く、すべてに恵み深き者である<sup>1)</sup>」

バハオラの宗教制において3番目の中心人物であり、釈尊が勢至菩薩という称号で多くの機会で見及し、その功績をたくさん予言したのが、アブドル・バハであった。バハオラは任務を果たすと、人間として75年間すごした領土を出立した。釈尊が臨終の床で最後の説法を弟子たちに行ったように、バハオラも、昇天する六日前に、共同体を成していたアッカの信者全員を自らの面前に招き、群れ集まり嘆き悲しむ彼らに、愛情を込めた最後の講話をした。

「私は皆さんに満足しています。皆さんは多くの奉仕をし、非常に熱心に働いてくれました。毎朝、毎晩ここに来てくれました。皆さんの和合が保たれるよう、神が助けてくださいますように。存在の主の大業を称揚できるように、皆さんを助けてくださいますように」

バハオラは1892年(仏暦2435年)5月29日の早い時間に昇天した。遺骸は、彼が最後の数年間を過ごしたバージの邸宅に隣接した数軒の家屋の内の一つの中に埋葬された。バハオラは讃歌を謳われるべき如来として完璧である。

「あなたは忍耐によって罵倒する者を、祝福によって悪意ある者を、真実によって中傷する者を、親切を示すことで傷つける者を克服された。いつ始まったか分からない時から墮落していた者たちのさまざまな性質は、あなたによって即座に改められ、彼らの邪悪な運命は取り消された。粗暴な者が優しくなり、貧者が豊かになり、残酷な者が心優しくなった。これは、あなたの巧みな方便の賜物だ<sup>2)</sup>」

---

1. 『ケタベ・アード』バハオラ著. *World Order of Baha'u'llah*, p.134, Shoghi Effendi, Bahá'í Publishing Trust, Wilmette, 1955 も参照.

2. *Satapancasatkanama-stotra of Matrçeta*, vv.114-15, 119-20, 122-24.

P314

それは、バハオラが弥勒如来であるからに他ならない。彼の逝去の知らせはオットマン帝国の最遠の地にまで届いた。彼の名声はイスラム世界に知れ渡り、学識者や指導者たちからも追悼が寄せられた。バハイでない人々からも、バハオラを賛美し、その人生を証言するお悔やみの書状は、バハオラが選んだ後継者と認められたアブドル・バハを宛先にしていた。

バハオラがテヘランの地下牢シヤチャールに投獄された時、アブドル・バハは8歳の子供にすぎなかった。それ以来、困窮と苦難を分かち合った主である父が逝去するまで、最も身近にいる同伴者となった。アブドル・バハの囚人としての生活はほぼ50年間に及んだが、彼を迫害していたオットマン帝国政府の運命が失落<sup>1</sup>すると、その生活がついに決定的に終焉を迎えた。仏暦2451年(1908年)のことであった。アブドル・バハは高齢の域にあり、長年の困窮生活に起因する身体虚弱を抱えていたにもかかわらず、欧米の多数の人々からの招待に応じることを決心した。彼らはバハイ信教を支持し、バハオラの大業を新たに開かれた地平線に差し伸べるための取り組みに、師<sup>2</sup>の比類なき智慧とその人格を添えてほしいと、強く要請したのである。

---

1.オットマン政府は機能不全になっていた。

2.バハオラからアブドル・バハ(バハのしもべ)に授けられた称号の一つ。アブドル・バハは1844年5月23日のバブが預言者としての自らの使命を宣言したのとまさに同じ時刻に誕生した。9人の子供の長男であり、父がテヘランの暗黒牢シヤチャールに幽閉されていたときに、父の、バハオラという地位を認めた。『大スカーヴァティー・ヴィューハ』の43句も参照いただきたい。「師という名称は、阿弥陀如来の仏国土を見せるために、この上ない悟りの境地へと無数の者たちを速やかに導くことを、自らの仏国土に特有の善性を見事なまでに完全に揃えて身につけることを欲する教師に与えられるべきである」

## アブドル・バハ：勢至菩薩

バハオラは、アブドル・バハを通して、人類と聖約を結んだ。父、バハオラの聖約の中心とされ、その書簡で賞揚されたのが、アブドル・バハであった。

おお、わが掌中の珠なる汝よ！ わが栄光、わが慈愛の海、わが恵みの太陽、わが慈悲の天が汝の上にあらんことを。汝の知識と英知によって世界を照らし、汝の心を喜ばせ、汝の目を慰めるものを汝に定め給うよう、われは神に祈る。……彼はまた別の書簡において、「われは汝を全人類の避難所とし、天地万民の盾とし、全知にして比類なき神を信ずるすべての者の砦とした。神よ、願わくば、汝を通じて彼らを守り、彼らを富ませ、彼らを支え給え。願わくば、すべての創造物にとっては富の源泉、すべての人にとっては恵みの海、すべての民にとっては慈悲の曙となるもので、汝が鼓舞されるように<sup>1</sup>。(暫定訳)

アブドル・バハは父から信頼を得ていた。子供の頃から、愛する父に降りかかる試練と艱難を共に受け、9歳にしてすでに、バハオラが顕示者であることを最初に認めた者たちの一人だった。

アブドル・バハに関する釈尊の予言はその出現の予知にとどまらない。象徴的な意味で、バブ（観自在菩薩）と共に誕生するとも言及している。事実、バブが自らの使命をモラ・ホセイんに宣言した、1844年5月23日のまさにその時刻に生まれた。

---

1. *The World Order of Bahá'u'lláh*, pp.135-6. Shoghi Effendi, 1950.

「そしてまた、阿難よ、その仏国土で声聞は一尋に及ぶ光を放ち、菩薩たちは十万俱胝由旬に及ぶ光を放つが、永劫の光輝で世界中至るところを光で照らす二人の菩薩には決して及ばない」。「世尊よ、精神高潔なその二人の菩薩は何という名でしょう」と阿難が問うと、釈尊は答えた。「阿難よ、一人は、観自在菩薩といい、もう一人が勢至菩薩という。阿難よ、この二人はこの仏国を去った後にかの地に誕生する<sup>1</sup>。そして阿難よ、かの仏国に生まれた菩

薩は、偉大な人物に備わる三十二相すべてが授けられ、完全な四肢を備え、瞑想と智慧に熟達し、あらゆる種類の智慧に聡く、動き俊敏な器官と、良く抑制された器官と、完全な知識を取得できる感覚器官と、五種の力と、攻撃に耐える忍耐力と、数限りない善性を備えている<sup>2]</sup>

バハオラから「最も大なる枝」という称号を授けられたのが、他ならぬアブドル・バハであった。彼が、バハオラの宗教制では、バブ（観自在菩薩）の次に到来する人物であることが、ここに示唆されている。勢至菩薩とは「マハースターマプラープタ」(力強い、もしくは大なる枝、もしくは四肢)<sup>3</sup>を意味することに由来する。

アブドル・バハは、バブと彼の追従者（ムハンマド・アリ）を埋葬する墓所の基礎構造の作業を急いだ後は、バハオラから委託された仕事をゆっくりと進め、西洋への旅行に2度赴いた。1度目の1911年には欧州を、2度目は北米を行先とし、アッカへの帰途の道すがら、欧州を再び訪れた。

---

1. 北インド出身の訳経僧 Bodhiruki(菩提流支)は「阿難よ、この二人の菩薩は、寿命を終えた後に、その国に生まれるために娑婆世界から赴いたのだ」と訳した。

2. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』I. 34,35.

3. 大なる力、強靱な四肢も意味する。また勢至菩薩は、大経(大スカーヴァティー・ヴィューハ)、小経(小スカーヴァティー・ヴィューハ)で観自在菩薩(バブ)と常に共に言及されているが、『サダルマ・プンダリカ・スートラ』では、文殊菩薩が観自在菩薩と共に言及されているため、智慧を司る「文殊」菩薩とする見方もされている。

P317

アブドル・バハは一度も学校に通っていない。また、生涯のほとんどを監視が厳しい獄舎の中で過ごした。にもかかわらず、欧米訪問の際には、学識者や信徒を対象にした講話の話者としての招待を数々の大学や教会から受け、聴講者全員が彼の智慧と知識の虜になった<sup>1</sup>。だが、バハイ信教の歴史で彼に後続するものどれ一つとして及ぶものがないほどに、言葉でも行いでも素晴らしい功績を残し、知識を発揮しても、自らは自ら選んだ称号であるアブドル・バハ（バハ「栄光、もしくは光輝」のしもべ）にすぎないことを明確にした。

これは、私の確固たる、揺るぎない確信、私の公然の、明確な信念の真髄、つまり、アブハの王国の住人が完全に共有する確信と信念です。すなわち、祝福された美<sup>3</sup>は真理の太陽であり、彼の光は真理の光であるということ。同じく、バブは真理の太陽であり、彼の光は真理の光です。……私の地位は隷属の地位であり、それは完全で、純粋で、現実的で、しっかり

と確立され、不朽で、歴然とし、明確に明らかにされ、いかなる解釈も受けることがない隷属です。……私は神の言葉の通訳者、これが私の解釈です。（暫定訳）

しかも、バハオラの『枝の書簡』への自己の見解でこのことをさらに明確にしている。

私は、これらの句、これらの言葉の真の意味、真の意義、深奥の秘密は、アブハの美の聖なる敷居への私自身の隷属、自己の完全なる消失、彼の御前で全くの無を明言する。これこそが私の輝かしき冠であり、私の最も貴重な飾りである。このことを私は天地の王国で誇りにしている。このことを、私は敬愛される者らの中で誇りとする。（暫定訳）

アブドル・バハ自身は神の顕示者ではないが、宗教史の一つの現象として他に類がない。バハオラの教えの完璧な模範者として、不信感に満ちたこの時代でも、神秘的な道を現実の足で踏み進めていくことが可能であることをすべての人々に証明することが、彼の地位に託された役割である。しかし、双子の顕示者の下位にいることを理由に、アブドル・バハという比類なき現象を、バハオラの宗教制で偶発的に発生した現象とみなすべきではない。ショージ・エフェンディによれば、神の宗教の予言でアブドル・バハの出現が予知されている<sup>5</sup>ことが、バハオラの宗教制の中心人物3人の一人として認識される明白な証拠である。

- 
1. これらの旅行の歴史的意義を評価するには、*God Passes by*, Ch. XIX, Shoghi Effendi を参照。
  2. アブハの王国は栄光に輝く王国を意味する。天界の一つの名称。
  3. 「祝福された美」はバハオラの称号の一つ。
  4. 「アブハの美」は「栄光ある美」を意味し、バハオラの別の称号。
  5. 本書 319 頁脚注 2 を参照。

P318

「さて、この聖なる律法時代においてアブドル・バハが占めた地位とその役目の意義について、私たちがはっきり理解することを試みるべきであると私は強く感じます。それほど素晴らしい人物のそばに立ち、それほど魅力的な人物の神秘的な力に引き付けられている私たちが、バハオラの律法時代のみではなく、宗教の全歴史においても独特な役目を果たす方の役割と性質について、明白かつ正確に理解することは、まことに難しいでしょう。アブドル・バハは、自らの領域内で働き、バハイ信教の「設立者」とその「先駆者」の地位とは全く違

った地位を占めています。しかし彼は、バハオラの「聖約」によって定められたその地位により、バハオラとバブとともに、世界の精神的歴史において類のないこの信教の「三大重要人物」とも言うべき御方のひとりなのです。……アブドル・バハは神の顕示者ではないこと、そして彼の父親の後継者ではあるけれども（バハオラと）同じ地位を占めはしないこと、そしてまた少なくとも一千年が経過するまでは、バブとバハオラ以外誰もそのような地位を占めることを主張することは絶対にできないこと——これらが、バハイ信教の「設立者」とその教えの「解釈者」の特定な発言の中に刻まれている真理であります<sup>1)</sup>

釈尊も、彼ら中心人物三人が親密な関係にあるだけでなく、バハイ教における三人の正確な序列も強調している。

「仏<sup>2)</sup>が人々の中に咲く白蓮と覚えている者を、観自在と勢至の二菩薩がすぐれた友とみなしていることを知りなさい。その者は成道の輪<sup>3)</sup>に座り、仏たちの住まいに生まれるだろう<sup>4)</sup>

---

1. *The Dispensation of Baha'u'llah*, Shoghi Eggendi, 1934, Bahá'í Publishing Committee, Wilmette, Ill., USA.(訳は「オンライン・バハイ図書館」から)

2. Amitabha(無量光), Amitayus(無量寿). バハオラのこと.

3. 智慧の輪,または法輪,すなわち宗教。「悟りのテラス」(『サッダルマ・ブンダリーカ』VII 7での Bodhimandavara)や「会堂」(Bodhimandapa in Buddhacarita)と、他の仏典で訳されている。

4. 『アミターユル・ディアーナ・スートラ』v.32.

P319

バブとアブドル・バハともに完全なる無我の境地にあったことと、二人がバハオラと彼の弟子たちを称賛していたことを(277頁と317頁)思い返しさえすれば、以下の引用句が、バハオラとバブ、そしてアブドル・バハについて語っていることが分かるはずである。

「だが、如来が菩薩の時分に誓願された効験により、必ずやその姿を見ることができよう。かの如来の姿を単に想い描くだけでも計り知れない祝福が得られるのであるから、その姿に備わったすべての特徴について黙考するなら、どれほどの祝福がさらに大きく得られるだろう。無量寿如来は神通力をお持ちになる。あらゆることが思いのままであるため、すべての世界で自由自在に姿を変えられる。……そしてこのように現された姿は、つねに純金色を湛えている。また化仏で輝く光輪や宝の蓮の花は、前に説いた通りである。

二人<sup>1)</sup>の菩薩、観自在と勢至の姿はつねに違わない。衆生は二菩薩の頭の特徴を一瞥するだ

けで、こちらが観自在菩薩、あちらが勢至菩薩であると知ることができる。この二菩薩は無量寿如来の務めを助けてすべての人々をお救いになる。このように思い描くのを第十三の観想という<sup>2)</sup>

さらに、この一つ前に引用した経文中の「その者は成道の輪に座り、仏たちの住まいに生まれるだろう」について言及しよう。バハオラとバブ、アブドル・バハの埋葬の地であるアッカとハイファ地域で現在、形成過程にある極楽浄土が、預言者たちが住む土地と文字通りに呼ばれている古来の聖地でもあることを思い起こせば、この二つの地域が「仏たちの住まい」であることが非常に明瞭になる。ハイファのバブの廟を中心にし、智慧を象徴する輪、悟りのテラス、智慧の会堂、と様々に訳されている「Bodhi-mandala：成道の輪」が、浄土を形成する二つの地域の一方をなしている。参拝者がカルメル山の山腹に造成された7層の階段状テラスを登った後に入堂するバブの廟には、バブとアブドル・バハの遺体が安置されている。参拝者はこの廟内で愛を込めた祈りをこの二人の菩薩に捧げるのである。

- 
1. この「二人」という表現はある意味で正しい。バハオラがバブのためにカルメル山の山腹に建設するようアブドル・バハに命じた廟内に、バブ(観自在菩薩)とアブドル・バハ(勢至菩薩)は埋葬されている。それゆえ、二人の肉体は同一の天蓋の下にある。
  2. 『アミターユル・ディアーナ・スートラ』 Part II, v.21. 他宗教の聖典ではこの三大人物の到来を予言している。例えば、ユダヤ人の預言者ゼカリヤによるゼカリヤ書 4:14 にはこう記されている。「『あなたはそれがなんであるか知らないのですか』と言ったので『わが主よ、知りません』と言った。すると彼は言った。『これらはふたりの油そそがれた者で、全地の主のかたわらに立つ者です』」。
  3. 本書 318 頁(脚注 4 も)参照。

P320

釈尊はバハオラ、バブ、アブドル・バハの三大中心人物を一つにまとめることの重要性を弟子たちに繰り返し強調していたが、一方では、バハオラとアブドル・バハがなしていたように、観自在菩薩(バブ)は勢至菩薩(アブドル・バハ)よりも上位にあることも示唆している。

「このようにして蓮の花に座っている仏の姿を心の目に映したなら、心象がはっきりとし、装飾されたかの仏国土も、宝で飾られたその大地や他のものも……はっきりくっきりと見えるようになるだろう。この観が終えたなら、さきほどの蓮の花と大きさが寸分変わらない大きな蓮の花が一輪、阿弥陀如来の左側に咲いている状景を心に描くとよい。そしてさらにもう一輪、大きな蓮の花が、仏の右側に咲いている様子を心に描くとよい。左側の蓮の花の上には

観自在菩薩が座し、阿弥陀如来と全く同じように金色の光を放っている姿を、右側の蓮の花の上に勢至菩薩が座している姿を想い描きなさい<sup>1)</sup>

それは、蓮華台に象徴されている観自在菩薩の聖なる力の礎は、釈尊が述べるように、無量寿如来 (= 阿弥陀如来 = バハオラ) が坐す蓮華台と「大きさが寸分変わらない」ことに由来する。この点については、バハオラ自身も『寺院の書簡』 *Suratul-Haykal* において明言している。「今、神の御言葉を声にするその者は、再び顕された最初の点 (バブ) に他ならない (暫定訳)」。また、別の書簡では、バブという顕示者を「われ自身の前回の顕示者」として特徴づけている。さらに、釈尊の発言<sup>2)</sup> を改めて引用すると、無量寿仏と全く同じような光が、観自在菩薩から放たれている。それゆえに、この二人を、双子の顕示者、奇跡の双子とし、釈尊は二人の到来の説明に正確を期したのである。

---

1. 『アミターユル・ディアーナ・スートラ』 Part II, v.17.

2. 『アミターユル・ディアーナ・スートラ』 Part II, v.17.

P321

他方では、バブの次に描写された勢至菩薩 (アブドル・バハ) は、阿弥陀、観自在の他二仏とは同等に扱われていない。坐する蓮華台も大きさが寸分変わらないわけでもない。これは、アブドル・バハが神の顕示者でも神の化身でもないことに起因する。また、同等の光を放っているとみなされないのは、彼の力と知識はバハオラの全知全能の力<sup>1)</sup> の反映であることに由縁する。釈尊は、無量寿仏と観自在菩薩のごくわずかな違いを示唆するが、バブもその違いについてを自らのバハオラとの関係において認めている。

「無量寿仏の姿をくっきりと心に描き出したなら、さらに瞑想し、観自在菩薩を次に想い描くがよい。……身体上のその他のしるしといくつかの優れた特徴すべてが完全であり、無量寿仏といささかも異なることがない。ただ、頭上にターバン<sup>2)</sup> を乗せ、それゆえに頭頂が見えないという二つの点で世尊 (無量寿仏 = 阿弥陀如来) に及ばない。このように観自在菩薩の実体的な姿を心に描くことが、第十の瞑想である。観自在菩薩の姿について瞑想したいと願う者誰もが、今、私が説明した方法で瞑想しなければならない。

この瞑想を実践する者は、いかなる災いも被ることがなく、これまでの悪行による障りが完全に除かれ、数限りない劫の時間に生と死を繰り返させる罪も取り払われるだろう。そしてこの菩薩の名を聞くだけでも計り知れない幸福が得られるだろう。ならば、彼の姿をひたむきに瞑想するなら、どれほどはるかに多くの幸福が得られるだろうか。観自在菩薩の姿を瞑想

する者は誰でも、まずその頭上のターバンを、次に天来の冠を心に描くとよい。

その次に、勢至菩薩の姿を心に描くとよい。身体上のしるしと寸法は観自在菩薩と異なることはない。だがこの菩薩の髪の毛根一つから放たれる光明を見るだけで、十方の数限りない仏たちすべての浄らかですぐれた光明も同時に目にすることになるだろう。このため、この菩薩は無辺光仏と名付けられている。この菩薩は、智慧の光をもって遍く一切を照らすために、誰もが地獄・餓鬼・畜生の三悪道から救われ、無上の力を得る。この菩薩はそれゆえに大いなる力を持つ（勢至）菩薩と呼ばれている。

- 
- 1.バハオラ、バブ、釈尊を含む神の化身たちが、彼ら自身の聖なる実体に固有の側面として所有するもの。
  - 2.原語"ushnishasiraskata"に"turban"が英訳版であてがわれている。そして" *The Hair on the Buddha's Head and Ushnīṣā*", Y. Krishan, Vol. 16, No. 3/4 (September-December 1966), pp. 275-289, published by: ISMEO (International Association for Mediterranean and Oriental Studies)は、肉髻をターバンと呼んでいた伝統を紹介(訳者注)。*Themes, images and symbols depicted on Turbans in Gandhara Art: An Appraisal*, Samia Anw, 146 Sindh Antiquities 2020 Vol-06, No 1 は、ガンダーラ芸術に見られる菩薩像がターバンを頭に被っていることを指摘(訳者注)
  - 3.「天来の冠」は霊的オーラを象徴。

P322

その頭上のターバンは蓮の花のようであり、ターバンの頂きに乗せられた宝の瓶は様々な光明に満ち、仏の姿を完全に明らかにしている。この点以外の身体上のしるしすべてが観自在菩薩のしるしといささかも違わない。……このように勢至菩薩の姿と身体を心に描くことが、第十一の瞑想である<sup>1)</sup>

如来一人と菩薩二人の三大人物の中で、アブドル・バハは他二人と霊格で違いがあっても、バブとは身体上で大きく似通っていることを、釈尊は描写している。そして、実体を見抜く力がある者ならこの二人の菩薩がまとう霊的なオーラを確かに見ることができる一方、二人はインド人とイラン人の間で一般化していた物理的なターバンを慣習にしたがって頭に被っていた。歴史家ナビルは、バブ（観自在菩薩）の特別な緑色のターバンについてを2回、その著書『夜明けを告げる人びと』で描写している。

まさにその日のことであった。町の城門外をしばらく歩きまわり、日没の2,3時間前になった頃、緑色のターバン<sup>2)</sup>を被り、輝かしい表情をした青年に目が突然とまった。その青年は彼の方に歩み寄り、愛情を込めた歓迎の笑みを浮かべながら挨拶をした。

もう一つは、バブが、自らの故郷の町、シラズの知事、ホセイン・カーンから初めて尋問されたときの場面であった。カーンは自分の前にバブを連行するよう配下の者たちに命じ、きわめて横柄な態度でバブに接し、公然となじり、強い非難の言葉を浴びせた。

「お前はどれほど大きな害毒をもたらしたかを知っているのか。お前は聖なるイスラム教と、我々の畏れ多い国王をどれほど辱めたかに気がついていないのか。お前はコーランの聖なる教えを無効にする新しい啓示をもたらした者と宣言しているのか」。バブは静かに答えた。「よこしまな人間が何か情報を持ってきた場合には、慎重に検討せよ。知らずして他人に危害をもたらし、あとで自分のしたことを悔む羽目にならないように<sup>3)</sup>」。この返答に、怒りを煽られたホセイン・カーンは叫んだ。「お前は、われわれをよこしまで、無知で、愚かであると言うのか！」。

---

1. 『アミターユル・ディアーナ・ストラ』 Part II, v.19.

2. 緑色のターバンは、着用者が預言者ムハンマドの末裔であることを意味する。『夜明けを告げる人びと』ナビル著。 *The Dawn-Breakers*, p.52, Nabil. Translated by Shoghi Effendi, 1932. Bahá'í Publishing Committee, New York.

3. イスラム教の聖典『クルアーン』 49:6.

P323

そして従者に、バブの顔に一撃を加えるように命じた。バブのターバンが地面に落ちたほど強烈な打撃であった。シラズの僧侶の長であるシェイキ・アブトラブがその会見に出席していたが、知事の行為を強く非難し、落ちたターバンをバブの頭上に戻すように命じた。そしてバブを自分の席のそばに座らせた。シェイキ・アブトラブは知事の方を向き、バブが引用したコーランの節が啓示されたときの状況について説明し、彼の憤りを鎮めようとして言った。「若者が引用した説に深く感銘しました。この英知ある節は、この事柄に関して注意深く調べ、聖典の教えにそって、彼を判断するようにと教えているものだと感じます」。知事はその意見にすぐに同意した<sup>1)</sup>。

バブのターバンについて上記のように関連部分を引用したのは、バブを撮影した写真が現存していないからである。だが、アブドル・バハ（勢至菩薩）について同じ経文の同じ部分で釈尊がなした描写（321頁）には、本人に会う特権を享受した多くの作家、学識者、指導者の発言と重なる部分がある。

一度でもアブドル・バハを見つめるなら、その人格が心に焼き付ける印象は消えることがない。流れるようなアバ（外套）を身にまとい、頭髪と同じく白いターバンを頭に冠した威厳ある崇高な姿、彫り深い目元から心を射抜いて揺さぶる鋭い眼差し、万物に注がれる甘美な微笑み……。人生の黄昏時にあっても、世界情勢へのアブドル・バハの関心はあくまでも高く、衰えを知ることがない。アレンビー将軍はエジプトから地中海沿岸を行軍し、助言を求めてアブドル・バハの元に初めて赴いた。シオニストのユダヤ人たちが約束の地に到着したとき、彼らはアブドル・バハの忠言を仰いだ。パレスチナ人たちに彼はこの上なく明るい希望を抱いた……。彼は男女の平等を教えた。「人間世界には、男性と女性という二つの翼がある。もし、片方の翼が役に立たず不完全であれば、もう一方の翼の力は制限され、完全な飛行は不完全であろう」と<sup>2</sup>。

---

1. *The Dawn-Breakers*, pp.150-1.Nbil. 『夜明けを告げる人びと』.興味深いことに、バハオラ(阿弥陀如来)に関しては、ターバンの着用を釈尊は言及していない、冠だけが言及されている。308頁の引用でも、E.G.ブラウンもバハオラの頭飾りを"taj"(冠)と表現している。

2.1921年12月にニューヨークの新聞社ワールド紙が引用した英国の新聞『ワールド』から。

P324

釈尊は西方浄土と三大人物に関する講話を記憶することの重大さを二人の聴聞者に強調する。

「注意して聞きなさい！ 注意して聞きなさい！ 耳にしたことについて考えなさい！ 仏陀である私は、困難と苦悶から救出される法を細かに説明しようとしている。大きな集会を前にしても詳しい説明ができるように記憶に刻みつけなさい」

将来、聞いた内容そのままを大勢に説明できるように記憶に刻みなさい、と聞かせるたびに要請しながら、釈尊が霊的な三大人物の多くの詳細を韋提希と阿難に完全に明らかにしていくうちに、二人が聴講する心構えは、西方浄土の聖なる三大人物の姿が心に描き出せるほどにその説明に最終的に同調するようになった。

釈尊がこの言葉をまだ言い終えぬうちに、無量寿仏が立ち姿勢で空中に姿を現された。その左右には観自在・勢至の二菩薩がつきそっておられる。放たれる光明は目が眩むほどの輝きであり、はっきりと見ることはできない。閻浮檀金の輝きの十万倍の光輝だった。無量寿仏を目の当たりにした韋提希は、釈尊のもとまで進むとその足にふれ、礼拝してから申しあげた。「世尊よ、わたしは今、世尊の御力により、無量寿仏を観自在・勢至の二菩薩ともに目

にすることができましたが、未来の衆生は、どうすれば無量寿仏と二菩薩にお会いすることができるでしょうか<sup>1)</sup>

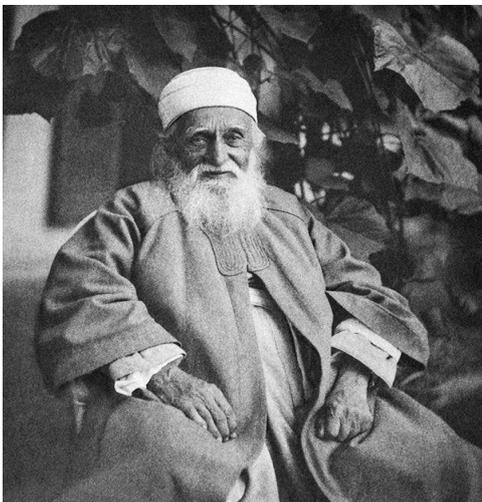
韋提希が25世紀前に発した問いへの回答が今、本書で示されようとしている。釈尊が鮮明に描き出したかの人物たちが現実の事象であることが物理的世界で最終的に証されるまでは、果たされ得ぬことだった。それが今、認識できるとおり、彼らは実在した。

さて、西洋に旅し、神の顕示者である父が構想した世界秩序に関する論説を著したアブドル・バハの努力により、父、バハオラの信教が及ぼす影響は大きく拡大した。だが、バハオラが構想を温めた行政機構の下に世界秩序が現実敷かれるまでにはさらなる発展が必要だった。しかも、自らの存命中には果たせぬことであると最も痛感していたのは、アブドル・バハ本人に他ならない。そこで、指示と保護を信者たちが仰ぐことができるように、唯一無二のもう一人の人物を世界のバハイ共同体にもたらした。

---

1. 『アミターユル・ディアーナ・ストラ』 Part II, v.15.

P325



'Abdu'l-Bahá in New Hampshire (1912)

(National Baha'i Archives, US)





Bodhisattva, Gandhara,  
3<sup>rd</sup> century. MFA, Boston.

アブドル・バハと菩薩

'Abdu'l-Bahá in Adrianople, c. 1868. Bahá'í Media Bank

P326

この世を去る前に自らの長男を後継人に任命したバハオラのように、アブドル・バハもまた、長孫のショーギ・エフェンディを信教の守護者に任命した。アブドル・バハはその『遺訓』により、長孫へ共同体指導権の継承を果たしたが、この書に、バハオラの世界秩序の中核的構想が記されている。その『遺訓』から、アブドル・バハがショーギ・エフェンディをバハイ信教の守護者に任命するくだりを以下に引用する。

「おお我が愛する友らよ！ この虐げられた者が死去した後は、神聖なるロートの木のアグサン(枝)<sup>1</sup>とアフナン(小枝)<sup>2</sup>、神の大業の翼成者(柱石)<sup>3</sup>及びアブハの美<sup>4</sup>に愛される者は皆、この二本の聖なるロートの木<sup>5</sup>より分枝した若年の枝であり、聖木の二本の枝の結合により成育した果実であるショーギ・エフェンディに向わなければならない。真に彼は神の証であ

り、選ばれた枝であり神の大業の守護者である。アグサン・アフナン、神の大業の翼成者及び神に愛される者等すべてのものは彼に向わなければならない……<sup>6]</sup>

ショーギ・エフェンディ<sup>7</sup>は1897年に誕生した。アブドル・バハの娘である母を通してバハオラと、父を通してバブと血縁関係にあった。

バハイであろうとなかろうと誰に対しても、灯台の光のように希望と導きをもたらしたアブドル・バハが生涯を終えたが、その使命は果たされた。彼は1921年11月28日にこの世を去るはるか以前から余命が長くないことを承知しており、家族や友人に愛情を込めてそのことを伝えていた。近づく別離による彼らの心痛を和らげるためであった。

---

1.バハオラの親族.

2.バブの親族.

3.信教成長への献身的な奉仕により、バハオラ、アブドル・バハ、後にはショーギ・エフェンディから選ばれた卓越したバハイたち.

4.バハオラ.

5.バブとバハオラ.

6. *The Will and Testament of 'Abdu'l-Bahá*, 'Abdu'l-Bahá, P.11. Translated by Shoghi Effendi, 1921, Bahá'í Publishing Committee, Wilmette, Ill., USA. 『遺訓』アブドル・バハ著. ショーギ・エフェンディ訳.

7. ショーギ・エフェンディはアブドル・バハの長孫だった。1897年3月1日にアッカで誕生。アブドル・バハからバハイ信教の守護者、兼、聖典の公定翻訳者に任命された。万全に機能し、世界中で急速に拡大しつつあったバハイ共同体を残して1957年に死去したが、共同体は今、全国水準の行政機構\*により5年ごとにメンバーが選出される国際水準の行政機構、万国正義院による管理と指示を受けながら運営されている。

(\*弥勒・阿弥陀如来が構想した新しいサンガ。18章で詳述する)

P327

アブドル・バハの存命中にも、弔辞においても、その偉大でありながら謙虚な人柄に多くの人々が賛辞を捧げたが、彼が選んだ後継者、ショーギ・エフェンディの言葉に並ぶものはない。アブドル・バハという現象の説明を試みたその言葉を以下に紹介する。

友であろうと敵であろうと、慈愛深く人類を常に見守っていたその目が、今、閉じられました。貧者と困窮者、足の不自由な者や障害のある者、盲者、孤児や寡婦に施しをするために差し伸

べられてきたその手は今や、その働きを終えました。たゆまぬ熱意で、憐れみ深き主のために絶え間ない用事をこなして続けたその足は今、静止しました。実に雄弁に、苦しむ人の子らための大義を擁護してきたその唇は今や、沈黙させられました。神の子らへの驚くばかりの愛で力強く鼓動を打ってきたその心臓は今、動きを止めました。彼の輝かしい精神は、地上の生から、正義に敵対する者たちによる迫害から、他者のために、80年間近くもの間、不屈の労苦を重ねてきた嵐と圧力の日々から、離脱しました<sup>1</sup>。(暫定訳)

シヨーギ・エフェンディは次のようにも述べている。

彼は、常に、何よりもまず、バハオラの比類のない、すべてを包みこむ聖約の中心であり、かなめであり、バハオラの最も崇高な作品、彼の光を映し出す汚れなき鏡、彼の教えの完璧な模範者、彼の言葉の誤りのない解釈者、バハイのあらゆる理念の具現者、バハイの美德すべての化身、古来の根から生じた最も偉大なる枝、神の法の節、「すべての名称が旋回する」御方、人類の一体性の原動力、最大平和の御旗、この最も聖なる宗教制の中心天体の月のような存在として、みなされるべきです。そしてこれらの肩書きと称号は、アブドル・バハという不思議な名称に、その最も真の、最高の公正さを暗示し、表現しています<sup>2</sup> (暫定訳)。

前述したように、釈尊は、アブドル・バハ、勢至菩薩を「無辺光仏」と形容している。

---

1. *The Chosen Highway*, "The Passing", Lady Blomfield, 1940. Bahá'í Publishing Trust, London.

2. アブドル・バハの人生を主題にした著作は多い。特に包括的に記されたのが、*'Abdu'l-Bahá, by the Hand of the Cause*, H.M. Balyuzi, George Ronald Publishers, London.

P328

アブドル・バハから守護者に任命をされてからの36年間、シヨーギ・エフェンディは、輝かしき功績を残した祖父から委任された務めを果たすべく、休むことなく精力的に、かつ智慧を行使し、労苦を伴う仕事を進めた。丈夫ではなかった彼が60歳で倒れ、とうとう起き上がれなくなったときには、世界のあらゆる国で機構を備えて築かれたバハイ共同体が冠たる殿堂の建立に向けた最終段階に入る準備がすでにできていた。その殿堂とは、次の千年紀まですべての指示が流れ出す源となる最高機関である。

シヨーギ・エフェンディは1957年11月4日に死去した。彼の生涯を記した多くの書籍の中でも、彼に先立たれた寡婦である大業の翼成者、ルヒヤ・カヌームの著作が傑出している<sup>1</sup>。

釈尊の詳らかな説明は、バハイ信教の三大人物の人生と彼らがこの世に出現する時代、バハオラの行政秩序にとどまらず、男女の別なく、バハオラの教えに従った多大な献身的奉仕により、高い地位に昇った信徒たちにも及んでいる。「神の大業の翼成者」と呼ばれる信徒たちには、信教の使者として世界の「十方」に教えを広める特別の任務が課された。彼ら、翼成者たちがどこに旅しようと、バハイは愛ある敬意を払う。彼らが聖なる芳香を広める責任を背負っていることを知っているからである。

「もしも、世尊よ、私が悟りを得たときに、あまねく十方の無量・無数・不可思議・無比・無限量の諸仏国土において、私の名を聞き、ひざまずき、額を地につけて<sup>2</sup>私を礼拝するであろう菩薩たちが、菩薩の行を実践しつつあるのに、神々を含む世間によって崇拜されないようであるならば、その限り、私は無上の悟りを得ることはありません<sup>3</sup>」

個人の信徒で、立法上と行政上の権威をバハオラから与えられた者はいない。彼がそのような権威と責任を付与したのは、選出された個人からなる行政機構に限られていた。だが、神の大業の翼成者の制度を開始したのは、バハオラ自身であった。新たな時代の教えを広める責任を課されて指名を受けた選り抜きの個人が翼成者である<sup>4</sup>。

---

1. *The Priceless Pearl*, Ruhyyih Rabbani, 1969. Bahá'í Publishing Trust, 27 Rutland Gate, London SW7.

2. 「ひざまずき、額を地につけて」の礼拝はバハイの必須の祈りでも採用されている。

3. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 8.35.

4. 信者が人類への奉仕において個人の努力でどれほどの霊的な高みに達しようとも、彼ら信者と、その信じる対象を、釈尊も同様の用語で区別している。「菩薩がこの地位に達すると、諸々の存在を救うためにこの世にいる限りにおいて、如来と大差はない。しかし、一粒の砂が大地と比較されるように、牛の足跡にできた水たまりが大海と比較されるように、菩薩と仏陀を隔てる距離はなお大きい」『ラトナゴトラヴィバーガ』 I, vv.77,78.

P329

アブドル・バハとショーギ・エフェンディも大業の翼成者を指名した。バハオラは彼らを「優越性と威力の御手(暫定訳)」と呼び、以下のように述べている。

「これらの『御手』は、神の信教を擁護するために困難に備え、自力に満ち強力なるわが名において地球の民族と親族たちを征服するであろう<sup>1</sup>」

承継的な計画と、自らの到来へと導いた誤りなき予言により、聖なる教師たち全員が着実にこの惑星のために進めてきたプロセス、累進的啓示を成就することが、自らが存在する目的であると、バハオラは明言している。

「この啓示の偉大さ、その想像を絶するほどの偉大さについてを神の御前にて証言する。人類が無関心に陥っている。目覚めさせるために、われは多くの書簡に何度も繰り返しこの真実を証言した。この最も強力な啓示において、過去の宗教はそれぞれの最高で最終的な完成に到達したのである。この卓越した、この最も崇高な啓示において現わされたことは前代未聞である。それは将来でも決して類をみないものである」

——そして、自らの神性を宿す実体に言及しながら、さらに言い述べる。

「神が使者たちに予言の衣を着せ、それぞれの経典を啓示されたのは、ひたすら彼を顕わすためであった。すべての創造物はこれを証言する。……陸へも大洋へも、彼は全人類に向かって、声高らかにこの啓示の到来を宣言している。それに耳を傾けよ。この啓示を通じて神の荘厳なる舌は次のように発表しておられる。『見よ！神の約束が果たされた！彼、約束された御方が顕われた！』」

——そして、自らの到来によって導かれた栄光あるこの約束された時代を称賛する。

「これは『日々の王』であり、常に『世界の望み』として認められてきた最愛なる御方の到来を見た日である。……存在の世界はこの日に、この神の啓示の輝きをもって輝く。あらゆる創造物はその救いの恩恵をほめたたえ、その賛美を歌う。宇宙は歓喜の極みに包まれている。これまでの律法時代の聖典はこの最も偉大なる神の日を迎えるべき偉大なる記念日を祝っている。

この日を見るために生き、その地位を認識した者は幸いである<sup>2)</sup>」

---

1. *Suratu'l Haykal, Baha'u'llah. Dispensation of Bahau'lla*, p.11. Shoghi Effendi.

2. *The Dispensation of Baha'u'llah*, pp.6-12. Shoghi Effendi, 1934. Baha'i Publishing Committee, Wilmette, Ill. (1, 2とも、訳は「オンライン・バハイ図書館」(バハオラの律法時代)から)

P330

釈尊もまた、バハオラ——阿弥陀如来——とその宗教制が比類なき地位にあることを断言する。

「阿難よ、繰り返すが、十方において、その各々において、そしてガンジス河の砂の数ほどもあるすべての仏国土において、ガンジス河の砂の数ほどおられる祝福された仏たちが無量寿如来の名を誉めたたえる。彼らはかの如来が高名なることを説き、その栄光を説き広め、その徳を称賛する。それはなぜか？ かの祝福された阿弥陀如来の名を聞き、その名を聞いてからは、無上の悟りに一度だけでも達することを喜んで熱望するようになった衆生は、ひとたび達すると、その悟りの境地から二度と離れることがないからである。そして阿難よ、

因果をこのように理解した後は、無量・無数の世界におられる十方の如来がたは、阿弥陀如来の名を誉めたたえ、高名なることを説き、賛辞を説き広めるのである<sup>1]</sup>

釈尊は、バハオラとバブ、そしてアブドル・バハという称号の意味と各人の比類なき偉大さを理解するための手がかりとして十分不足ないと思えるものを伝えた後、自らの弟子の阿逸多が提起した問いの成否は今、阿逸多次第であると述べ、彼との会話を最終的に締めくくる。

「阿逸多よ、私は如来がすべきことをこのように確かに行った。さて、今度はそなたが疑いを持たずに献身的に打ち込むときである。仏の完全かつ誤りなき知識を疑ってはならない。あらゆる道に造られた宝玉でできた地下牢に入ってはならない。阿逸多よ、仏の誕生に居合わせることは確かに難しく、その時代に生まれることも難しい。また、法の指示を受けることも難しい。阿逸多よ、功德の蓄えすべてを完全に期す方法は私が説いた。さて、修行（波羅蜜多）に打ち込み、前進しなさい<sup>2]</sup>

このことは、私たちすべてに実際に当てはまる——誰もが自分自身の進路を決定し、その結果を受け入れなければならない。

P331

「時に一人の人間が見出され、時に一人の仏が現れる。信仰する対象は、長い時間が経過した後で知ることができる。ゆえに（信仰）の対象（にする人物）を知るために努力するがよい。そして彼が高名なることを説き広め、彼のダルマを説くがよい<sup>3]</sup>

---

1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 w.26, 30.

2. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 v.43.

3. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 v.44.9. 信仰対象にする人物を知るとは、神の化身、アヴァターラ、すなわちバハオラ（阿弥陀如来）を知ることの意味する。ここでも、仏の出現の希少性が示唆されている。

P332

## バハオラのメッセージ

## 真のダルマ

「これこそ道である。真理を見るはたらきを清めるためには、この他に道はない<sup>1)</sup>」

人類を駆り立てるのは靈性の力である。これは、人間は靈性を宿した生き物であることに由来する。バハオラは、釈尊を始めとする化身たちのように、実存は靈性の視点からのみ正確に理解することができることを教えた。そして純然たるダルマの真髓を把握したいと願うなら、心を浄め、一時的なものへの執着を捨てて永遠なるものを求めるための靈的視力を発達させるように、と弟子たちを促した。ダルマの真髓とは、怠慢と無信仰によって釈尊の時代の後には曖昧になっていたが、彼、約束された弥勒如来が、赴くようにと、今、人類を召喚している「確信の都」である。バハオラによるこの都への道すじの説明においては、概念だけでなく用語ですら、釈尊が用いたものと同一であると理解することができる。

「われが今ここで、これらの得心のいく重要な話をした目的は、神以外のものはすべて、束の間のはかないものであり、全幅の崇敬的である神以外のものはみな、まったくの無であることを求道者に痛感させたいがためである。

---

1. 『ダンマパダ』 274—「……汝らはこの道を実践せよ。これこそ魔羅(死、罪)を迷わして(打ちひしぐ)ものである」。同経 273,275 でも、釈尊は自らの教えが当時唯一の「道」とであると明言した。まったく同じ言葉を他すべての化身が明言し、バハオラは現代のために同じく説いている。

これらは、崇高なる人々の属性の一部であり、靈的な心の持ち主であることを証明するものである。これらの属性については、既に、确实なる知識の道を歩む旅人としての必要条件に関する記述の中で述べてある。超越した旅人や、誠実な求道者がこれら必須の条件を満たしたとき、彼らを真の求道者とはじめて呼べるのである。人が、「わがために奮闘する

人々」という聖句に含まれる条件を満たしたときはいつでも、「われ自らその手を引き、正しい道を歩ませよう」という言葉によって与えられる祝福が受けられよう。

求道心、真剣な努力、燃えさかる願望、情熱的な献身、熱烈な愛、歓喜と忘我の灯が求道者の心の中にもとまれ、また、神の慈愛の微風がその魂の上にただようとき、過誤の暗黒は初めて追い払われ、疑いや不安の霧は晴らされ、知識と確信の光は求道者を覆いつつむよくなるであろう<sup>1</sup>。そのときにこそ、神秘の先駆者が、精霊の喜ばしい音信を持って、神の都から朝日のように輝きだし、知識のラッパの吹奏により、心や魂や精神を怠慢の眠りから覚醒させるであろう。ここに至り、神聖な不滅の精霊の豊かな恩寵の発露により求道者はかくも新しい生命を与えられ、新しい目、新しい耳、新しい心、新しい意志が授けられることを発見するであろう。そのものは、この宇宙の明らかなしるしを熟視し、魂の隠された神秘を理解するであろう。神の目で凝視すれば、彼は、完全なる確信の地位への門が、すべての原子の中に存在することを感知するであろう。そして、万物の中に、神の啓示の神秘と永遠なる顕示の証拠を発見するであろう。

神かけて誓う。教導の道を歩み、正義の極点に昇りつめようと努力するものがこの栄光ある最高の地位に到達したとき、求道者は三千里も離れた所からでも神の芳香を感じ取り、万物の地平線に昇る神の導きの光り輝く朝日を認めるであろう。あらゆるものは、たとえそれがいかに小さなものであっても、道を求めるものにとっては、それぞれ探求の目的である敬愛する御方の方へみちびく教示となるであろう。この探求者の洞察力は非常に鋭くなるため、あたかも太陽と影とを区別するが如くにはっきりと真理と虚偽を見分けるであろう。東方はるか彼方の隅に神の甘美な芳香がただようならば、たとえ西方のはるか果てに住んでいようとも、必ずやその芳香を感知し嗅ぐことであろう。

---

1. 釈迦は当時のパラモンに述べた。「見解、嗜好が異なり、寛容さや忠誠心を向ける対象が異なり、修練内容が異なる、あなた方に理解されるのは難しい」(『ディーガ・ニカーヤ』 III.40; IBID., 1.12. 『サンユッタ・ニカーヤ』 I.12 も参照)

P334

同様に、探求者は神のあらゆるしるし、即ち、神の不可思議なる言葉、偉大なる業、力強い偉業と、人間の行動や言葉や手段とを明白に見分けるであろう。それは丁度、宝石と石ころの違いを知っている宝石商のように、あるいはまた、春と秋、寒冷と温熱とを見分ける人のように。人間の魂の水路が、流れをさまたげるあらゆる世俗的執着から清められたとき、果てしない遠方からでも必ずや敬愛する御方の息吹を感知することができ、また、その芳香にみちびかれ、確信の都<sup>1</sup>に到達し、その中に入るであろう。確信の都に入った探求者は神の古来の英知の不可思議を発見し、都に繁茂する木の葉のささやきから、隠された教えのすべて

を理解するであろう。求道者は、都の土塊から立ちのぼる栄光と讃美の聖歌に気づき、その聖歌が主の中の主の方へと鳴り響いていくのを内なる耳と外なる耳とをもって聞くであろう。また、求道者は、その心眼により「再来と復活」の神秘を発見するであろう。御名と属性の王なる神が、確信の都のために定めた光、証、啓示、光輝は、何とも言い表しようのないほど素晴らしいものである。この都に到達すると、水がなくとも喉の渇きは消えさり、火がなくとも神の愛が燃えあがる。草の葉一枚一枚の中には計り知れない智慧の神秘が秘められ、あらゆるバラの茂みに数知れぬ小夜鳥が、無上の歓喜に心ひかれて美しい調べを奏でている。そこに咲き乱れる色うつくしいチューリップの花は、燃えさかる藪の神秘を現わし、その神聖さの甘美なる香りは救世主の精霊の芳香をただよわせている。確信の都は黄金なくして富を与え、死のない不朽性を授ける。その一枚一枚の葉の中に、言い表せないほどの歓喜がたくわえられており、その一つ一つの部屋には数知れぬ神秘が秘蔵されている。

---

1.比丘たちよ、カッピーナが言ったように、それは古い古い道なのだ。森の中、山の密林の中をさまようある者が古えの道を目にするかもしれない。昔の人々が踏みならした古えの道だ。それをたどっていくと、公園、木立、蓮の池、城壁に囲まれた、古えの町、古えの宮殿、大昔の人々が住んでいた住居を、かつては喜びに満ちた場所を発見するかもしれない。その者は来た道に戻り、王や大臣にその場所に「見てください、私が見たことを」と伝え、古都再建のために、王をその場所に案内する。かつての都に人々が移り住み、繁栄と豊さが再びもたらされる。比丘たちよ、同じように、私も古えの道を見出したのだ。過ぎ去った時代の仏たちが踏みならした古えの道だ。これをたどったことで、私は人生を理解し、これから来るもの、過ぎゆくものを理解したのだ(Nagara sutta). 『マハー・ヴァツガ』 VI.29 も参照。「私はこの高次の誕生に達したことで真理を発見し、平和の都へと続く崇高な道をそなたたちに教えた」

P335

神の御心の探求に精進するものが、一度、神以外のものをすべてすてさったとき、この都に強く心をひかれ、愛着を感じ、一瞬の別離すら考えられなくなるであろう。彼らは、都の集いに咲くヒヤシンスの花が語る誤りのない証拠に耳をかたむけ、都のバラの美や、そこでさえずる小夜鳥の調べから、最も確かな証言を得るであろう。およそ一千年に一度、この都は更新され、改装されるのである。……その都はあらゆる時代に、また、あらゆる宗教制において啓示された神の言葉に他ならない<sup>1)</sup>

これまでに本書で見出したものすべてが、皮肉な見方をする人たちにより、単なる偶然という一言で片づけられてしまう可能性は否定できない。そのような人々はもっともな問いを投げかけ、返答を求める。「人間状況を悪化させている諸々の問題にどんな解決策をバハオラが差し出したのですか。問題解決の能力がそのメッセージにありますか。単なる言葉でない実際の行いで証明されていますか」と。こうした要求が言葉でなされるのと同様に、聖なるメッセージに従った行いが実践される前には、「言葉」による教えがもちろんもたらされなければならない。そこで、どんな「信

条」でどんな「行為」がなされたのかを知りたく思う私たちすべてのために、バハオラが百年以上前に追放先の獄舎から、統治する側とされる側、聖職者と政治家、王と庶民、学識者と高潔な政治家に向けて放ったメッセージの際立った特徴をまず述べなければならない。聖なる呼びかけに今なお耳を強く塞ぎ続け、差し迫る壊滅的な危機に直面していてもその強情さを直そうとしない言い訳を、彼は人類のどの階層にもそれ以上は言わせなかった。

累進的啓示にここで改めて言及しよう。これは「仏陀の出現」という何度も繰り返す法則の体現に他ならない。この法則を、釈尊を始めとする聖なる教師たちは明確に承認してきた。だが、『ミリンダ王の問い』には「すべての如来は常に、悟りへの翼となる三十七の同じ法を説き、同じ四つの聖なる真理を説き、同じ三種の修行（道徳、深い瞑想、智慧）で信者を指導し、物事に怠りなく注意を払うようにと諭している<sup>2</sup>」と記されている。ならば、啓示が何度ももたらされるのは何のためか。聖なる教師全員のメッセージの根本にある目標は「人類の和合」であり、根源的理由も同一だが、このメッセージをもたらす手段は時代によって異なる。言うなれば、人間についての人間の概念は絶えず変化し続ける。進化し拡大していく。それゆえ、常に規模拡大する調和と和合を確立していくには、化身が何度も繰り返し顕現し、累進的な啓示がなされなければならない。

---

1. 『落穂集』125 段落。訳は「オンライン・バハイ図書館」から。

2. 『ミリンダ王の問い』I, 『マハーヴァストゥ』I.160 も参照。

P336

しかし驚くことに、累進的啓示を受け入れられない人は多い。当人が信じる宗教とその聖なる創設者に関する歴史的事実によって、完璧に合理的な概念であることが明白に証言されているにもかかわらずである。だが、物質面で大きく必要とされていくことを賄うには資源の拡大が必要であるという概念については、この上なく合理的な構想であると躊躇なく認める。ここで、新生児は新生児の頃はミルクを与えられていても、身体の成長とともに咀嚼力と消化力もついていくのに合わせて離乳食が与えられ、その固形度が段階的に高められていくプロセスを考えてみよう。その乳児の前に、冷蔵庫から出した肉で調理した肉汁滴る大きなステーキを出すなら狂気の沙汰であることは、誰も異存はないだろう。ステーキにはたくさんの滋養成分が含有されているかもしれない。だが乳児は、餓死するしかないだろう。歯がまだ生えていないのだから、ステーキを噛みちぎり咀嚼して消化することはできない。

同様に、本棚に百科事典が収められていても、乳幼児には初歩的な画像やアルファベットを見せるのが妥当であると、私たちは考える。貴重な事典を数巻、乳幼児の手が届くところにおいても無意味なことが分かっているからだ。彼らはその小さな手を伸ばすや、頁を引き裂き始め、文字通りに食べようとさえするかもしれない。乳幼児にはごく自然の行為だ。ならば、累進的啓示を繰り返すことで私たちの魂を教育し、霊的成長を促していくという構想が、私たちの心身の成長に用いら

れる方法で構想されるものよりも系統性にも合理性にも欠けていてよいことがあろうか。もちろんそんなはずはない。

釈尊が目的としていたのは、人間の発達上のさらなる一步に向けた靈的指導をし、弥勒如来の到来という目標達成に必要となる道を指し示すことであった。にもかかわらず、私たちが釈尊の絵姿<sup>1</sup>だけに魅了されるなら、強い執着で、教師から離れるのも卒業するのも嫌がる生徒と大差がない。そのような生徒は師が目的とするものも、自分が存在する理由も蔑ろにしている。教師が出現するまさにその理由を否定しているのに、どうして教師からの承認を期待できるのだろうか。卒業も視野に入れて高学年に進む必要があることを理解している生徒しか、様々な学年に教師が用意される真の目的を果たすことはできない。これは釈尊の真の目的でもあった。釈尊が到来したのは、当時の人類の靈性を蘇生し、弥勒・阿弥陀如来——バハオラに至る道を示すためであった。

---

1「その後に世尊はこう仰せになった。『如来の似姿を見る者が、自分は如来を知っており、この姿に礼拝し祈りを捧げるべきと主張するなら、その者は真の如来を知らない外道とみなすがよい』」『プラジュニャパーラミター・ストラ』26.

P337

それゆえ、純粋な心と靈的な視力を備えて比類なきダルマの習得に努力する如来の弟子は、道の発見を諦める必要はない。その道は、すべての如来が約束した全人類の和合を果たすために、改めてダルマを説き広めているバハオラに向かって延べ広げられている。バハオラのメッセージは、彼自身が明言しているように、創造物すべてをその創造のための法も含めて生じせしめた同一の古来の源（神）からもたらされた宗教(ダルマ)の再生である。したがって聖なる教師全員を、原初の軌道たる、神、絶対者の光を様々な位相から反射する同一の月とみなすことができる。

「預言者たちはみなそれぞれ異なった衣をまとって現われた神の大業の中心であるということとは汝にとって明白であろう。洞察力をもって観察するならば、預言者たちはみな同じ神殿に住み、同じ天空を舞い、同じ玉座に座し、同じことを語り、同じ教えを宣布していることが理解できよう。存在の本質であり、無限で計り知れない光輝を放つ発光体たちである彼らの同一性とはこのようなものである。したがって、もし聖なるものの顕示者たちのひとり「われはすべての預言者の再来である」と宣言したとしても、まことにそれは真実を語った言葉である。同様に、次々と現われる啓示が、それ以前の啓示の再来であることは事実であり、確立された真理である…。

もう一つの地位は特異性の地位であり、それは創造の世界とその有限性に属するものである。この第二の地位について、神の顕示者たちは、それぞれ独自の個性と明確に規定された

使命、予定された啓示、そして特定の制限を与えられている。各顕示者は、それぞれ異なった名で知られ、特別な属性で特徴づけられ、一定の使命を果たし、特定の啓示を託されている<sup>1)</sup>

聖なる教師全員が本質的に一つであり、唯一の天なる父である一人の至高の創造主を世界中の誰もが受け入れるよう計らうことで人類を和合に向かわせることが、彼らが到来した真の目的であると、バハオラは説明した。この説明に釈尊が確実に同意していたことを、本書ではすでに言及している<sup>2)</sup>。さらに、人間の増大していく需要を満たすために倫理的枠組みが常に拡大していくという観点から、神の啓示の累進的側面と化身各人の特異性ある地位を説明するバハオラの言葉にも、釈尊は以下のように確かに同意している。

- 
1. 『落穂集』 22 段落. 訳は「オンライン・バハイ図書館」から.
  2. 本書 40-42 頁.

P338

「無上の悟りを得るために、私が燃燈仏から受け入れしものがあるだろうか。須菩提よ、どう思う？」と問われた須菩提は、釈尊にこう答えた。「世尊よ、私が理解する限り、世尊の説法内容の意味からすると、仏の悟りを得るために、完全に悟りを開かれた聖なる燃燈仏から、世尊が受け入れしものはございません」。その答えに、釈尊は仰せられた。「須菩提よ、その通り。仏の悟りを得るために、完全に悟りを開かれた聖なる燃燈仏から、私が受け入れしものはないのだ<sup>1)</sup>

釈尊はこのように、神の新しい教師だけが新しい時代に必要な啓示を人類にもたらすことができることを示唆している。新しい教師は前任者が導入した原則の単なる受け入れはしない。

順次到来する如来たちの啓示には連続性と新規性の双方が備わっている。一本の樹が成長していく際にたどっていく様々な段階に似ている。種から根が生え、幹、枝、小枝、そして葉が出現し、開花し、実を結ぶ。この比喻を現存する宗教に当てはめると、次のようなプロセスになるかもしれない。クリシュナのメッセージで種が播かれ、モーゼの十戒によって根を生やし、その根から、ゾロアスターの教えを通して幹が出現し、釈尊が説き広めたダルマを通して枝となり、キリストの福音によって小枝へと広がる。そしてムハンマドによって法が増えたことでたくさんの葉が生い繁り、バブの出現により開花し、すべての宗教が待望していたバハオラが最終的に到来したことで、古から約束されていた果実を結ぶ。

神のどの教師も、前任者が導入したダルマにより大きな意味を与え、そのダルマの真理を、絶えず変化し続けていく時代と拡大した視野に理性的に適用できる新しい教えをもたらす。以下は、釈尊の言葉が、古来の真理に新たな意味を割り当てる一例である。

---

1. 『ヴァジュラッチェーディカー・スートラ』 XVII. 本書 57-58 頁を参照.

P339

釈尊が王舎城近くの竹林に滞在していたときのことであった。（ある場所に赴く）途中、ある家にさしかかったところ、その家の主人に出会った。彼は、四方に、天頂に、そして天底に向けて両手を組み合わせている。因習的な宗教的迷信に従った厄除けであることを釈尊は知っていたが、「なぜこのような奇妙な儀式を行うのですか」と尋ねた。主人は答えた。「私が悪鬼の影響から家を護ろうとしていることを、あなたは奇妙に思うのですか。世間から如来や世尊と呼ばれているゴータマ釈迦牟尼よ、呪文は何の役にも立たず、何の救いの力もないと、言わんとしているのは承知しています。しかし私の話を聞いてください。私はこの儀式をしながら、父の言葉を讃え、敬い、聖なるものとして護っているのです」

話を聞いた釈尊はこう仰せになった。「ご主人、あなたは善い行いをなさっています。お父上の言葉を讃え、敬い、聖なるものとして護っておられるのですから。しかも、家、奥方、お子さんたち、お子さんたちの子供たちを悪霊による危害から護るのはあなたの義務です。お父上から伝えられた儀式をなされて問題になることはありません。しかし、儀式について理解されておられません。霊的な父として今、語りかけ、ご両親に劣らないほどにあなたを愛している如来が、六つの方角の意味をご説明しましょう」

「不思議な儀式で家を護るだけでは十分ではありません。善い行いによって守らなければなりません。東におられるご両親に、南におられる先生方に、西にいる奥方とお子さんたちに、北にいる友らに向き直ってください。そして頭上の天頂にある宗教とのあなたの関係を、天底にいる召使いとのあなたの関係を整えるのです。父上があなたに持ってもらいたく思っている宗教とはこうしたものなのです。儀式をするのはあなたが為すべきことを思い出すためのものなのです」

家の主人は自分の父に対するような敬愛の情で釈尊を見上げた。「ゴータマ殿、まことにあなたは仏です。世尊です。聖なる教師です。私は自分がしていたことを分かっていませんでした。しかし今は、分かります。あなたは暗闇を燈明で照らす者として、隠されていた真理を私に明かしてくださいました。私は悟りを開かれた教師の中に、悟りをもたらす真理の中に、そしてその真理を教えられた信者たちが仲間で作る共同体の中に救いを求めます<sup>1)</sup>」。

P340

聖なる宗教すべての根本的な真理が、迷信、偏見、退廃という泥沼に沈んで明瞭さを失っている。しかし、現況がどうであろうと、根本的な真理があること自体が教えは有効であり、それぞれの創設者が化身としての地位を自ら主張した決定的証拠であると、釈尊のように、バハオラは明言する。だが、化身が純然たるダルマを啓示し、救済と至福という目標を果たす手段を人類に与えても、人類はその怠慢と強情さにより、その機能だけでなく最終的には宗教の真の目的までもを見失う。真のダルマの道を改めて踏み進むことに、釈尊によるバハオラ（弥勒・阿弥陀如来と彼の西方浄土）に関する予言すべてが差し向けられている。そしてこのダルマの道に、バハオラは今、論理的で美なるメッセージをもって私たちに召いている。

「おお、人の子らよ。神の教えと宗教の根本の目的は、人類の利益を守り、その統合を促進し、人々の間に愛と友情の精神を養うことにある。それを、仲たがいと不和、憎しみと敵意の原因としてはならない。これは真の道であり、確固たる不動の基礎である。この基礎の上に築かれたものは何であれ、世の中の変転や不意の出来事などによってその力を損なわれることは決してない。また、幾世紀にもわたる変転もその構造をくつがえすことはできない<sup>1)</sup>」

世界では、様々な宗教の信者たちが疑念と時には憎悪を交えて対立し合っている。他の宗教の信仰を説明できないことに起因するが、自分たちが信じる聖なる教師とそのメッセージこそが唯一無二であると信じ込まされている場合、対立に走る傾向は特に強い。偏見を排し、神の聖なるメッセンジャー全員の霊的な美しさと壮麗さを心から目の当たりにしようとしめない限り、永続する和合の確立は決して果たされず、世界は悲惨な紛争に見舞われ続けるだろう。多くの様々な場所から多様な言語で数え切れないほどの時代を通して真理が語りかけられてきたことを、私たちは認めなければならない。永遠のダルマでなく、外面的な形式に執着し、宗教を誤用し、儀式と偏見を道具にして既得権益を追及する者たちは、現状の混乱に責任を取らなければならない。

次の頁では、人類史が夜明けを迎えて以来出現した様々なメッセンジャーとそれぞれの福音が図示されている。図中の山には二重の意味がある。まず、人類の進歩と、宗教の目標も象徴する山頂への到達願望が象徴されている。

---

1. 『落穂集』 110 段落. 訳は「オンライン・バハイ図書館」から.

P341

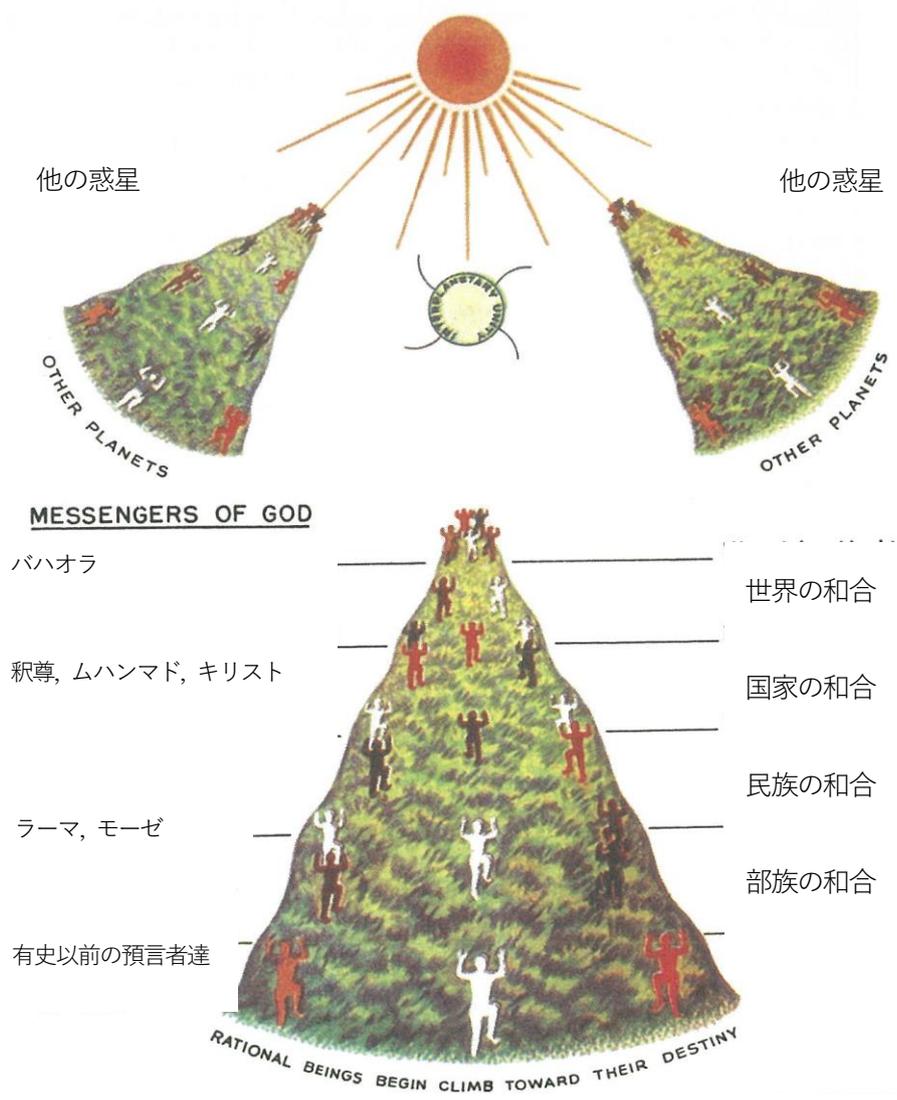


図10

累進的な神の啓示は文明が絶えず前進を続ける真因である。

二つ目として、私たち人間が山頂に近づくとつれ、円弧状をした山の底辺は徐々に短くなっていくが、これは、様々な時代を生きる人々が感じた地球の大きさを象徴する。人類史が開始した頃、多様な人種や集団は乗り越えられない自然の障壁によって隔絶し合っていたため、手前の山脈を超えた場や、視界に単に入らない場に、同胞たる他の人類が存在するという発想はなかった。

人間が動物とさほど変わらなかった当初、男性すべてが他の男性すべてに、女性すべてに、しかも自分のものにしてきた女性に対してすらも、握り拳を振り上げていた。食べ物をめぐる行動だった。妻や子供たちに対してすら、獣のような唸り声とうめき声が、意思疎通の唯一の方式であったに違いない。

そして一人ひとりが自分こそが獣もどきの仲間たちとは違う「人間」であると思うようになってから、神の最初のメッセンジャーたちが世界各地で現れ、至極簡単な宗教的教えを授けたはずである。近親の血族からなる一つの家族全員に対し、「あなたがた一人ひとりが、この家族の一人ひとりを愛し、全員に生命という贈り物を与え、皆が愛と和合の内に暮らすことを願っている一つの全能の『力』の子供です」と教えたのかもしれない。おそらくこの聖なるメッセンジャーは、当時の原始的家族の一つで生育した者であり、その家族で屈強な男性、おそらく自らの父親によって殺された可能性が非常に高い。鉄拳と牙で制するという当時では法制化していた通念とは反対の見解を教えたことが理由だった。だが、神の最初の教師に降りかかった運命が何であれ、人類は現在存在している。このこと自体が、家族の愛と和合という、あの聖なるメッセンジャーの見解が最終的に勝利を収めた動かぬ証拠である。

この一家の者たちが野獣の次元から這い登り、家族の中で愛と和合に満ちた振る舞いをするようになるまでにどれほどの時間がかかったかは分からない。だが、最初の宗教というべきこの最初のメッセージを受け入れ、現実実践するようになったとき、進歩に向かう驚くべき力が家族の中で放たれた。過去には、同じ家族の中からの攻撃の手から身を守るための構えを常に取っていた原始的なこの家族一人ひとりの両手は、家族全員が愛と和合という簡潔な原則を受け入れてからは、身構えることをやめ、家族という一つの集団の進歩のために働く手となった。かつてないほどの達成度で仕事が果たされるようになったのは、最初の宗教の最初の基本原則を受け入れたからだった。

すでに本書で述べたように、宗教の目的は人間の進歩を可能にすることにある。高次の力への忠誠心を生じせしめることで進歩させ、人知を超越した絆で人間を和合させる。このようにして人々を結合させ、その潜在能力の発揮を可能にするものは、宗教の他にはない。

P343

あの忘れ去られた時代、私たちのささやかな大地は、今日よりも果てしなく大きく広がっているように思われていた。その大地が全世界であり、太陽、月、星たちは、青色のドーム状の天井から吊り下げられて平坦な世界を見下ろす大小様々の光であると、私たちの祖先は考えるようになった。居住地域から別の地域に移動するのに何年もかかることが普通だった。危険な地形や野獣と遭

遇し、地勢上の知識が全くなかったことに起因する。自分の部族の保留地を横断するのに、今日、世界中を周遊するよりも、多くの時間を要した。私たちの祖先はこうしたことから、自分たちは世界で唯一無二の孤立した存在であると考えようになったのである。さて私たちは今、至高の創造者が聖なるメッセンジャーを人類の中に送った経緯を理解することができる。実存の曙にいた人類が数々の問題に直面していたことがその理由だった。そこでもたらされた教えは、受け手の肉体と精神の状態に完全に適合し、前段階よりも適用範囲を拡大した和合の確立を通して一段階高い実存に向けて人類を上昇させることが意図されていた。

原始時代の人々は、家族内での和合をゆっくりと果たしていった後でも、別の家族とは相変わらず、野獣のように闘争を繰り広げ続けていた。そこに必然的に現れたのが第二群の聖なるメッセンジャーたちであった。彼らもまた、迫害されて殺されただろう。彼らがもたらした別々の家族の間で愛と調和を確立させる必要を強調したメッセージが、当時の通念に合わなかったことが原因だった。しかし、そのメッセージは人々の中に根付き、成長し、いくつもの家族が集まった最初の部族として進歩するためのさらに大きな力を放ちながら、最終的に勝利を収めたのである。

先に図示した中でのこの段階で、靄が立ち込めた伝説の中から現れた有史の微かな光明が識別され始めていく。ラーマとモーゼが、部族間和合の教えをもたらした聖なるメッセンジャーであったとすることができる。ラーマとモーゼの前後に、彼らのような預言者が世界各地にさらにたくさんいたことに疑いの余地はない。社会化の第一段階として組織される「部族」の確立に原始時代の人間を導くために、彼らは顕現したのである。

「人種」として一般に理解される種族は、部族形成よりはるか以前から存在していても、社会的に組織される一つの実体として種族間和合がなされたことは確認されていない。原始時代の人々にはそうした概念がなかった。当時の人々が別の種族に出会うのは、皆無ではないにせよ、稀であったため、種族間で和合が確立されたのは、部族間和合の確立から数千年後のことだった。同一種族の中の各部族は互いに戦い続けていた。他部族の人間たちより、自分たち部族のトーテムで象徴する動物との結びつきの方が大事だったのである。それでも、時の経過にともない最終的には合体し、より大きなユニットを形成するようになった。

P344

部族間和合は、インドのクリシュナ、イランのゾロアスターという聖なるメッセンジャーの出現時期と歴史上で一致する。彼らだけでなく、同じ使命を携えたメッセンジャーが他にも世界各地で必然的に現れた。部族間連合は地勢上のより大きな地域を覆うまでに拡大し、異なる種族の部族が初めて接触し合うまでにその最前線は前進した。原始時代の人々は同じ種族でつくる民族的均質性をゆっくりと学び、今日も現存する「人種」という考えを開発した。これは人類の進歩を示した先の図では、円弧状をした山の底辺が減縮していく様相に現れている。人間は、様々に進んできた経路が合流していくにつれて他の人種を目にするようになり、自分たちとは違う言語を話す声を耳に

し始めた。そしてついに、似たような進路をたどり、比較可能な程度に進歩していた異文化に直面したのである。

しかし異文化に初めて遭遇し、従来の「世界観」を途方もなく大きく変えられたことで、古代の人々は狼狽した。そのため、旧来の概念に衝突したより大きな現実をもはや締め出すことができなくなるまで、破壊と征服というお馴染みの手法でその忌まわしき変化に抵抗したが、それも一時のことだった。最終的には、釈尊、キリスト、ムハンマドという別々の時代に世界の様々な場所に出現した聖なる教師がもたらしたより大きな真理によって、希薄でせいぜいが一時的にすぎない段階だった種族間和合を超越し、違う民族集団、様々な社会階級を受け入れることが、人間の意識で可能になった。そして、これら様々な社会集団は、いくつかの事例では、世界最初の国家が設立されるほどに大きく柔軟な道德作法の統一基準の下に融合されていった。

当時、多くのメッセンジャーが人類に送られていたことは明らかである。しかも、互いに数百マイルしか離れていないにもかかわらず、部族間、種族間で孤立し合っていたため、彼らは同時代に生き、ほぼ同時期に教えをもたらしていたかもしれない。原始時代、古代の部族・民族は遭遇し合うまでに要する時間も距離も多大だったために、隔絶し合い、自分たち以外の部民族の存在に懐疑的だった。その点では、他の惑星に自分たち以外の理性的存在が実在することに懐疑的である今世紀に生きる私たちも、彼らと違わない。太古の時代、地球は想像を超える大きさに思われていた。地表の小さな地域でさえも、当時の住民からすると全世界のように見えていたのだ。

P345

500年前ですら、地球は球形と想像されることはなく、大海を船で進めば、地球の縁から落下すると考えられ、南北アメリカ、オーストラリアのような大陸の存在は全く知られていなかった。

知れば驚くかも知れない。バブがモラ・ホセインに自らの使命を宣言した1844年5月23日当日まで、通信と輸送の速度は人類史の曙の時代からほぼ変わらず、速馬で駆ける速度が限界だった。当時、蒸気機関車が走り出したばかりだったが、馬の疾走速度を超えられなかった。そして

まさにその当日、新しい時代が始まるというバブの重大な告知から、きっかり12時間後、アメリカの科学者、サミュエル・モールスがメッセージを打電し、光速<sup>1</sup>で走る電磁波で伝送した。「神のなせる業」というその言葉は、聖典の予言をそのままに成就する。だが偶然の一致で、バブの啓示に人間の通信速度の飛躍的進歩が伴われたわけではない。むしろ、人類に定められた運命の作用が不可避であることのまた一つの実証だった。人類の和合が定められていた時代は始まっていた。霊的太陽は、人類を結びつけて一つの単体にするための輝かしきメッセージをもたらすための道具として、輝く光コードを開示していたのである。

釈尊を始めとする化身たちの福音が他国の海べりや部民族に届くまでに何年間も、いや何世紀もかかっていた過去とは違い、バハオラ——弥勒・阿弥陀如来——のメッセージは今、光の翼に乗っ

て世界至るところに瞬時に運ばれ、衛星、ラジオ、テレビ他の通信媒体によって発せられたのと同様に、距離に関係なく、どこでも耳にすることができる。この様相を釈尊は予見し、弥勒・阿弥陀如来の到来に関連する現象の一つとして明瞭に描写した。

世尊よ、私の仏国土でそこに生まれる者たちが少なくとも百千那由他の世界を見れる<sup>2</sup>ほどの天眼通を得ないようであるならば、私は無上の悟りを得ることはありません。

世尊よ、私の仏国土でそこに生まれる者たちが少なくとも百千那由他の仏国土から同時に説法を聞き取れるほどの天耳通を得ないようであるならば、私は無上の悟りを得ることはありません<sup>3</sup>。

- 
1. 秒速 186,000 マイル.
  2. 現代の天体望遠鏡.
  3. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 8.8. ("Koti" 「俱胝」は莫大な量を表すにすぎない。寸法、数、距離他、あらゆる単位に差別なく使用されているが具体的な数値はない)

P346

この新しい時代に人間の意識と科学技術手段が惑星規模の和合の実現のために導入された以上、国家称揚の時代は過去のものになった。しかし、一部の人種や階級への忠義が奉じられている限り、惑星規模の大惨事の防止は保証できない。科学上の発見により、惨事を引き起こす手段は最小の国家ですら手に届く範囲にすでにある。バハオラが解き放った神秘的な力から生じた科学分野での功績により、私たちの惑星は一本のちっぽけなピンの頭にまで縮小した。その極小の頭の上に佇む私たちすべてが、人間の発展における次の段階は論理的には確かに世界の和合でも、自分たちの強情さで太古の石器時代の混沌に猛スピードで逆突進しかねないことを、恐怖と希望で胸を一杯にしながら痛感しているのである。

人間はその理性的魂から創造的思考が生じる点で動物と異なるように、超人がもたらす宗教は神に起源を発する点で、人間がつくる宗教と相違する。さて、人類は有史初めて強大な力に直面している。それゆえ、そのささやかな欠点と狂気を克服し、知的にも倫理的にも超越した真の超人的な種になる必要がある。これこそが、バハオラの福音が目指す目標に他ならない。バハオラはさらに人間の運命に関する宇宙的なビジョンもそのメッセージに授けている。現代の科学者が生命の意味とこの惑星以外の場所で人間が存在できる可能性について憶測を続けている傍らで、バハオラは釈尊のように、宇宙意識<sup>1</sup>から生じる創造物に授けられた唯一の理性的な目的を宣言している。

理性に向かって前進する生命を生み出すために――

「あらゆる恒星は惑星を持ち、あらゆる惑星には固有の生命体があり、その数は誰も計算し得ないほどであることを知れ<sup>2)</sup>」

——宇宙は生命で満ち溢れている。

1. 「そのままに死滅し、長さ 75 寸しかないこの身体の中に、世界と世界の起源が、そして世界の止滅があることを、同様に、その止滅を導く道もあることを、私は汝に宣言する」『ウダーナ』。
2. 『落穂集』 82 段落. 『マハー・ヴァツガ』も参照. 「コンダンニヤが質問をした。『世尊よ、この地球だけが存在する世界ですか、それとも他の世界があるのですか?』。釈尊は答えられた。『確実に、数え切れないほどの世界があります。雲一つない夜空を見つめれば、物理的な認識ができます。太白(金星)、辰星(水星)、歳星(木星)、熒惑(火星)はもちろん、諸々の星、太陽と月にも別の世界があります。そして、心の中を見つめるなら、たくさんの世界が見えませんか? 夢の世界、そう呼んでもいいかもしれません。霊的な世界については、ブラフマンの世界はもちろん、極楽と地獄、因陀羅と閻魔の世界について、どの聖人も教えてくれるでしょう。そうです、神々は存在します。他の諸々の世界も、私たちが実在するのと同様に実在します。無限の宇宙を既知のこの小世界と人間たちになぜ限定するのでしょうか』。(夢の性質についてはバハオラも『落穂集』 79 段落の中で詳説している)

P347

「まことにわれは告ぐ。神の創造は、この世界以外の多くの世界に及び、地上の創造物以外の創造物をふくむ。神はこれら各々の世界において、神以外の何者も探し求めることのできないものを定め置き給うた。神こそはすべてを探索し、すべてに賢き御方である<sup>1)</sup>」

——そして、聖なる教師、預言者という媒体を介した霊的な教育プロセスはすべての世界で作用する普遍的な法則である。

「すべての太陽は彼より発生し、彼のもとに戻るのである。神聖なる啓示の樹は彼の威力を通じて実を結び、果実の一つ一つは預言者の姿をもって遣わされたのである。そして、預言者たちは神の創造物に宛てたメッセージをたずさえて諸々の世に向かったのである。まさに、すべてを包含する知識を有する神のみがその諸々の世の数を把握し給う<sup>2)</sup>」

バハオラは創造についての書がかつてないほどのあからさまで開示した。壮大かつ安らぎでもある、根底にあるその目的は確実に私たちに伝えられている。この無限の宇宙は、異質の創造物でも理性的生命に敵対するものでもない。生命の子宮に他ならない。しかも、地球と呼ばれるこのささやかな一粒の砂の上にいる私たちは他の惑星にいる同胞たる生命体と満を持して会合し、実り豊かな交流をすることが運命づけられている。「人間はみな、常に進歩する文明を前進させるために創造された<sup>3)</sup>」とバハオラは告げている。だが、バハオラの観点からする文明とは、単なる科学分野での発見や小道具類の寄せ集めではない。人間が自分の宇宙と、そして中でも、宇宙にいる最高の生命体であり理性的魂である同じ人間と調和のうちに暮らす能力で成立する。

---

1. 『落穂集』 79 段落. 宇宙それ自体が「無限の広がり」と無限の時間 (落穂集 26 段落) であると、1 世紀以上も前にバハオラが述べた言葉が真実であることが、天文学の近年の発見で劇的に確認されている。すべての星と創造物、そしてその星たちの上にいる理性的存在をもつ惑星系についてのバハオラの別の発言も、時が熟せば、完全なる確認を得るだろう。創造主の「声」以外に、何を創造したかを教えてくれるものはいるだろうか。こうした課題を真摯に研究する人は、質疑に対するアブドル・バハによる解答を集めた *Some Answered Questions*, Bahá'í Publishing Trust, Wilmette, Ill., USA, 1930 を参照されたい (和訳は『質疑応答集』「オンライン・バハイ図書館」)。

2. 『落穂集』 51 段落.

3. 『落穂集』 109 段落.

P348

バハオラは他すべての化身以上に豊富な教えを私たちに残した。それら教えは、彼自ら、その権威を付与したことで正当なものであることが認証されている。だが本書では紙面に限りがあることからすべてを記載することはできない。意図してもいない。ただ、最大危機の時代にいる人類に捧げられた彼からのガイダンスを最低限だけ紹介しよう。探求者がバハオラのメッセージを包括的に理解するには、世界の多くの言語にすでに翻訳されているバハオラ、アブドル・バハ、ショーギ・エフェンディによる著作のいくつかに目を通すとよいだろう。バハオラの様々な教えを本書で引用するのは二つの目的がある。概念と目的が積尊と同一であることを示すためが一つと、より重要なこととして、正義と秩序に基づいた世界の和合への唯一確かな道を人類に提供するにはバハオラの計画が有効であることを実証することにある。

積尊の教えとの関連性はバハオラの教えの中で容易に理解できる。だがより大切なのは、病身の人類の健康を回復するために神聖なる霊薬としてバハオラが説いた概念を理解することである。

家族、部族、地域、国家の段階を踏んでまとまっていくために、そして現代では、惑星規模の和合と幸福の実現のために、人類を様々な時代に指導してきた累進的啓示のプロセスを、バハオラはそのメッセージにおいて明確かつ合理的に説明した。しかしながら、諸々の別世界にも存在するやもしれぬ生命体がより大きな知的かつ霊的な覚醒に向けて発展する可能性についてや、この惑星上で人類が遂げてきた歴史的進歩やその進歩の根底にある意味についての説明が、いかに完璧に合理的であろうと、彼のメッセージが唯一無二である根拠にはならない。そうした情報は、現在、人類に絶えず付きまとう数多くの問題への解決案をバハオラが示していなければ実現不可能な世界の和合に向かって、人類が段階を追って発展していく説明としては興味深い。しかし、問題解決をし損ねるなら人類は深く分裂し、惑星間のさらに大きな和合へと入る未来に向かって太古の時代から長い時間をかけて登ってきた軌跡を無意味にしてしまうだろう。

P349

バハオラは、社会的に「どのように」行動すべきかの青写真だけでなく、善良であることが「なぜ」必要であるかの理由を人類に示すために、悩まされて冷笑的態度を果てしなく強めている現代という時代との会話を、人間の實在に関わる真の概念を回復させることで開始している。すべての化身が本質的に霊的であると説明していたのが人間の實在である。バハオラは、理性的魂である人間は創造主がその意識から造り出した最高の創造物であると述べている。私たちの魂は、肉体を含むあらゆる物理的形狀に影響を及ぼす腐敗プロセスの作用を受けない。肉体は私たちの魂がこの物理的次元で自由意志を正しく行使するための教育を受けるうえでの乗り物にすぎない。そしてその自由意志が、次段階の実存の領域である霊界に進むための「乗り物」となる。

この惑星上の創造物すべての中で、避けられない死を意識し、肉体の死後もその意識が続くことを願うのは人間の他にはいない。確実に訪れる死に動機づけられた人間だけが、無知ゆえの諸々の誘惑と闘いながらも、不死と人生の目的への探求に乗り出し、「迷妄から真理へ」「闇から光へ」と自分たちを導く聖なる案内役を探し出してきた。

私たち人間は今、これまでの時代以上に、宇宙の性質を理解する能力を有し、宇宙の根底に秩序があることを知ることにより、創造という構想の中で、魂意識（私たち自身）がつくられた本質的な目的を認識する。その目的は世界が始まって以来、すべての化身が告げてきたものと違わない。そして今日、合理性がより一層に求められている思考の地平の拡大と併せるようにして、私たちが滅びゆくものごと——死——から目を背け、約束されている不死に向かうために、「なぜ」と「どのように」という疑問詞をバハオラは与えている。

「まことにこのことを確信せよ。魂は神のしるしであり、天来の宝石である。魂の実体は最も学識あるものも理解し得ないものであり、その神秘はいかに鋭敏な心意をもってしても計り知ることは望めない。全創造物の中で、創造主の卓越性を最初に宣言するのは魂であり、神の栄光を最初に認め、神の真理に愛着し、神の前で讃美をもって最初にひれ伏すものも魂である。神に忠実な魂は、神の光を反映し、やがて神のもとに戻る。しかし、創造主への忠誠を怠る魂は、自我と欲望の犠牲となり、結局は自我と欲望の淵に沈むであろう<sup>1)</sup>

---

1. 『落穂集』 82 段落. 『マハー・ヴァッガ』 v.1.29 も参照. 「人間の理性的な性質は真の光の火花であり、それは上昇に向かう道の最初の一步である。しかし、存在の頂上へと確実に昇り、すべての正義の源である、道徳的理解という計り知れない光を得るには、すなわち心と精神の悟りに確実に至るには、新たな誕生(注：輪廻転生ではない)が必要である」.

「人間の魂は肉体や心のあらゆる病を超えて崇高なるものであり、それらより独立した存在であることを知れ。病人に見られる虚弱は、魂と肉体の間に介在する障害物によるものであ

る。魂そのものはいかなる肉体の病にも影響されない。ランプの光について考えてみよ。外部の物体はランプの光を遮断するかも知れないが、光そのものは衰えない力で輝きつづける。同様に、人間の肉体を苦しめるすべての疾病は、魂がその固有の実力と能力を顕わすことを妨げる障害物である。しかし、肉体を離れたあと、魂は地上のいかなる力も及ばないほどの権勢と影響力を発揮する。すべての純粋で洗練され、聖別された魂は途方もない力を付与され、非常な喜びに喜悅するであろう<sup>1)</sup>

「さて、人間の魂とその死後の生存に関する質問について。魂は肉体より分離後、神の面前に到達するまで進歩しつづけるということを知れ。魂がやがて到達する状態は、年代と世紀のめぐりによっても、この世の変遷と偶然によっても変わることのない状態である。そして神の王国、神の主権、神の統治と威力がつづく限り魂も永続し、神の諸々のしるしや属性を顕わし、神の慈愛と恩恵を放射する。…。死後の魂の状態については決して叙述され得ず、また人間の目にその全貌を明かすことは適切ではなく、許されてもいない。神の預言者や使者たちは、人類を一直線の真理の道にみちびく目的のためにのみ遣わされたのである。彼らの啓示の根底にある目的は、人間が死に際して最高度の純粋さと、聖別された状態で、そして完全なる超脱をもって最も高遠なる御方の王座にのぼることができるように人類を教育することにある<sup>2)</sup>

次の段落で、「この世界が胎児を宿す母親の子宮の世界と異なるように、彼方の世はこの世界と異なる」とバハオラは述べている。私たちがこの物理的次元の世界で払う努力が、この世界でも、次の彼方の世での私たちの在り方にも影響を及ぼすが、超脱した精神で霊の世界に入った者たちからも、この世界にいる私たちは影響を受けるといふ、無類の洞察を人類に示している。

---

1. 『落穂集』 80 段落、「オンライン・バハイ図書館」

2. 『落穂集』 81 段落.

「これらの魂が放射する光は、この世の進歩と人々の発展の原因となるものである。彼らは存在の世を発酵させる酵母であり、この世界の技巧や不思議が顕わされるよう活気づける力となるのである。彼らを通じて雲は人々の上に恵みを降らせ、地球はその果実を結ぶのである。万物は原因、原動力、そして活力の源を必要とする。超脱の象徴であるこれらの魂は、存在の世に崇高なる推進力を提供し、これからも提供しつづけるであろう。この世界が胎児を宿す母親の子宮の世界と異なるように、彼方の世はこの世界と異なるのである。人間の魂が神の面前に達するとき、その不滅性に最も適した、そして天界の住居に最もふさわしい姿

を装う<sup>1)</sup>

バハオラは、私たちのこの比類なき真の地位についてのビジョンを示しながら、その教えで確立した道に私たちを招き寄せている。

しかしながら、何よりも重大な務めは、彼方の世のことよりも、私たち自身のちっぽけな惑星が対象である。価値ある未来にすべきなら、まずこの地球を価値あるものにしなければならない。バハオラが実に力強く宣言するように、それこそが彼が私たちの中に現れた目的に他ならない。

「私事におぼれるな。心を常に人類の繁栄の回復と、人々の心と魂を聖別させるものに向けよ。このことを成し遂げるための最善の道は、純粋で浄らかな行為、そして徳の高い生活と、正しいふるまいにある。この大業の勝利を保証するものは勇敢な行動であり、その力を確固たらしめるものは聖人にふさわしい人格である。おお、バハの人々よ。正義に愛着せよ……。汝らの視野を汝ら自身に限ることなく、むしろ全世界をつつむものとせよ。邪悪な者とは、人の子の進歩をさまたげ、その精神的発展を妨害するものである。

この日、あらゆる国家と公正な政府の利益を促進し、その地位を高めるものを固守しなければならない。このことは万人に課せられた義務である……。人の子が互いを忌み嫌い、彼らの間に不和と分裂を生みだす原因となっていたものは、この言葉の啓示によってすべてことごとく廃絶されたのである<sup>2)</sup>

人間同士、国同士を協調に導く原因として役立つことが今日の宗教の大きな目的であると宣言したのは、バハオラが初めてであった。このようにして、情動と霊性面で求められる癒しを与えながら、知的、科学分野でも努力する動機をもたらすものは、宗教において他にない。

---

1. 『落穂集』 81 段落. 「意識がある……それゆえ、真理の器への変容ができない存在はいない、と如来は説いている」(ミリンダ王の問い―「あらゆる存在は霊的である」)「しかしながら……するほど、真理は大きく……永続する生命を真に導く」. 『マハー・ヴァッガ』:シーハの「消滅に関する問い」も参照.

2. 『落穂集』 43 段落.

バハオラは、人間が覚醒する新たな次元を開いていくなかで、自らのメッセージが生成していた諸々の力を認識していた。そしてその力が必ず発揮されるために、手頃な免罪符に化していた宗教

を、意識的に受け入れてかつ、理性と調和した実践を行う領域へと昇格させたのである。

百年以上前、当時、最も後退していた国土の一つから、バハオラは 12 条の基本原則を宣言した。

すべての宗教の源は一つである。

真理の独立探求

人類の一体性

宗教は和合の原因にならない

あらゆる種類の偏見の撤廃

両性の機会平等

普遍的な普通教育

宗教と科学の調和

国際共通語

経済問題の霊性面からの解決

世界政府

世界平和

今日、これらの原則は合理的であり、現代の要件としても先見性があるように見えるかもしれない。しかし、百年前は、不可能と頭ごなしに否定しないとしても、当時、観察眼が最も鋭い人々ですら、理想的な絵空事のように考えていた。

これが、化身という勢いが生み出される証拠である。化身は誰からの援助も受けずに独りで到来し、自らの時代のはるかな先を見据えた目標とその達成手段に力づくの抵抗を受けようと、ジレンマから確信への導きを求める人類が振り仰ぐ案内役に短期間でなる。そのような化身がバハオラである。

時の経過に伴い、クリシュナや仏陀を認め、その生き方に倣うようになったヨギや聖者は少なくない。だが、靈感や客観的調査から、ヨギや聖者を自らの知識や啓発の源泉と認めた化身が一人でもいた記録はない。創造物すべての真実を決定するために人間が手にできる道具は、絶対的な現実以外、すべてが誤謬であり、信頼を置けないことに起因する。私たちの感覚は絶えず欺かれ続けている。私たちの論理は特定の経験の産物にすぎない。それゆえに、慣れ親しんだ枠外の現象を正し

く決定することはできない。瞑想や「靈感」を通して得た直感からは、瞑想者と同じ数の解決案がもたらされても、一致する案はない。

P353

聖伝も史書も、個人解釈による過誤をはじめとする多くの障害物に妨害され、真実は見出されないでいる。真実を誤りから、現実を想像から分離する誤謬なき基準をもたらすのは、聖なる教育者から啓示され、真正性をもって記録された言葉より他にない。人の経験を完全に超えた全知が誤謬なき手段を生み出す。だが、化身が一切智<sup>1</sup>を使うのは、説法を聞く者を盲目的に服従させ、自由意志の行使を妨げるためではない。隷従し、独自の判断を明け渡すよう、弟子たちに求める聖なる教師など一人としていない。それどころか、心を開き、相反する視点を比較検討することで自分の問題を解決するよう、どの化身も奨励している。いかに偉大な真理の発見がなされても、その真理原則に合致した行動が伴わない限り、十分とは言えない。信仰が経験に裏打ちされなければ、スプーンにすくった蜂蜜を知識として知るだけで、その甘さを味わずにいるようなものになるだろう。

「すべては神を知ることにより、すべては天と地にあまねく浸透する神の意志の天上より下されたことを厳守することに尽きる<sup>2</sup>」

主題がより深遠であり、真理が偉大であるほど、それを受け入れる自由はより大きく許容されなければならない。バハオラはそれゆえ、選択の自由の法則を自らの宗教の最重要原則の一つとして掲げている。

真理の独立探求<sup>3</sup>の原則は、儀式を通じて世代間継承されてきた因習や時代遅れの信仰に盲目的に従うことを排除し、成熟した考察から誕生する理性の適用を確かなものにする。それゆえ、バハイの家庭に生まれたから、バハイになれるわけではない。適切な探求の後で、バハオラが約束された御方であり、その教えが現代という時代に適い、人生で実践する価値があると認めた上でのことになる。

---

1. 釈尊もバハオラも、自らが一切智であることを明言している(289-91 頁).

2. 『落穂集』2 段落.

3. 釈尊も述べている。「多くの世代を経て多くの場所で伝承されてきたという理由だけで伝統を信じ込んではいけません。風説となって多くの者が信じているという理由で信じてはいけません。古えの賢人が書き表したという理由で信じてはいけません。尋常ではないと思う、あるいは啓発を受けたという理由で、またはデーヴァや素晴らしき存在が明らかにしたに違いないという理由で信じてはいけません。観察し分析した後に、理性に叶い、すべての人々に善と恩恵をもたらすことを理解してから受け入れ、生活の指針にしなさい。私が示したダルマを単なる崇敬の念から受け入れてはいけません。火で金を試すようにまず試験しなければなりません」『アングッタラ・ニカーヤ』III.653(カーラーマ・スッタ).

両親がバハイでも、子供たちへの強制は禁じられている。神の宗教の創設者すべてをバハオラと同等に受け入れることが信条の一つとされ、この下に自分たちの子供を教育するようにと、すべてのバハイが勧告されている。この信条を裏打ちする基本的原則の第一条「すべての宗教の源は一つ」は、バハオラの教え全体を通じて繰り返し強調され、これまでに確認してきたように、釈尊自ら明言した言葉と完全に調和している。

バハオラは、変貌しつつある世界では自ら定めた法には言及されていない事柄が生じることを見越しており、喫緊な対処が求められるそれらの事柄に対応するための法を規定してかつ、世界中で急速に拡大している信者の共同体<sup>1</sup>の諸事を管理するための機構とプロセスの輪郭を描いていた。支配的な教義や儀式を排したバハオラの世界秩序は、彼が顕した原則すべてに則ることで、「すべての宗教の源は一つ」と並ぶもう一つの根本的な教え「人類の一体性」を確立することを専心的な目標にしている。

これまでに述べてきたように、バハオラの宗教の根本的原理の際立った特徴を素描しようにも、大雑把にしか描くことはできない。バハオラ自らによる膨大な著作も、アブドル・バハとジョージ・エフェンディによる著作も、思考の独自性と完璧な有効性を立証している。霊性貧弱な錯乱した人類が見舞われているあらゆる問題の真の解決策がここにある。探求者は、バハオラが人間に提供している処方箋を読めば、躊躇している時間はないことが分かるだろう。何が人類を悩まし、何が人類を立て直すかについてを明言するバハオラ言葉には、全世界に行き渡る広さと深さをともなう威厳と威力が宿されている。彼の呼びかけを気に留めないことへの警告は、預言者再臨を待望する終末論に阻まれ、その生涯の間には無視されていたかもしれない。だが、彼の呼びかけを妨げることがもはやできない。

まもなく人類の手中に入る力の性質を認識していたバハオラは、文明を保守し、彼の教えの中に含まれているさらに二つの根本原理たる「世界政府」と「世界平和」に人類を導くために確立すべき世界国家の性質とその運営についてを詳細に記した。20世紀の二つの大戦の後の戦勝国の取り組みは、世界平和を実効的に護り、人類の福利を促進するためにバハオラが描写した超国家体、世界政府の設立必須条件を満たすにはほど遠い。

---

1.バハイ信教には、聖職者も階級制度もない。

強大な力をめぐる利害関係と決議を無効にする拒否権に侵され、かつての国際連盟はおろか、現在の国際連合も実効性を失い、加盟国による恒久的な原則遵守はもはや望むべくもない。発言に耳を傾けてもらい、諸権利を認めてもらえる「確約」を保証する核を保有しない限り、超大国の従属

国に降格される。しかも、どんなおこぼれでもあずかるには、いずれかの陣営につくしかない。先の大戦以降の年月、核による大量虐殺の脅威がダモクレスの剣のように人類の上にかざされたまま、いながら平衡状態が保たれてきたのは、自らの高度な外交術と聡明さによるものと主張できる政治家はノーベル平和賞を受賞してしようと存在しない。核均衡に忠誠を誓うことが平和を生み出すという主張のどれもが、聞こえのよい欺瞞にすぎない。少しばかり領土を増やすための、少しばかり影響力を拡大するための核兵器使用が、これまでに蓄積してきたものすべてを失う危険を孕んでいる。それゆえ、見せかけの正気を保ち、核というゴルフクラブで文明が粉碎されないようにしてきたのは、生きることと生かすことへの信念というよりはむしろ、死への恐れが動因である。だが、人間と国々がその内に宿す捕食的な本能からあらゆる手段を講じて自衛していても、安楽にしていられる余地はない。核保有論にしか聞く耳を持たない国たちの面前で己の弱さを認識した小国家たちは今、飢えと欠乏に自国民が苦しんでいようと核保有国グループに加入し、相互全滅に至らしめる脅威を想像上でなく実際に振りかざしている。緩やかでも確実な飢餓か、速やかに「発射」ボタンを最終的に押すか、そのどちらを選んでも、彼らが失うものはほとんどないだろう。

急速に進展しているこうした事態を前にし、バハオラのメッセージは人類の窮状に光を投げかけるだけでなく、安全と安寧を反駁不可能なほどに確約している。そこで、バハオラが構想を描き、ショーギ・エフェンディが言葉で表した世界政府の青写真を調査するとしてよう。

「バハオラが心に描いた人類の和合は、すべての国家、民族、宗派、階級が、密接に、そして永久的に結ばれ、その国家を構成している人々の自治権、個人の畠や独創心が、確実に、完全に擁護される世界連邦の設立を意味します。この連邦は、わたしたちが心に描く限りでは、世界立法部があり、そのメンバーは全人類の信託者として、究極的には構成国すべての資源を管理し、あらゆる人種や民族の生活を調整し、要求を満たし、また円滑な関係を保つために必要な法律を制定します。

P356

次に、世界行政部は国際軍に支えられ、世界立法部による決議を実行し、制定された法律を適用して全連邦の有機的一体性を擁護するでしょう。

世界裁判所は、この世界的組織を構成する諸国間に起こるあらゆる紛争を調停し、拘束力を持つ最終的判決を下します。国際的な障害や制限から開放された全地球を包含する世界通信機関が案出され、驚異的迅速さと完全な規則正しさをもって機能するでしょう。

世界の中心都市は、世界文明の中枢として生命の統合力が集中し、また、そこから生命の精神的な影響力が放出される焦点として作用するでしょう。世界語が考案され、あるいは現存する言語の中から選ばれ、すべての連邦国で教えられます。世界共通の文字や世界文学、

また共通の世界通貨、度量衡の制度は、国家間、民族間の交流や理解を簡潔に、容易にするでしょう。

このような世界社会では、人間生活における二つのもっとも有力な力である科学と宗教は一致し、協力、調和し合いながら発展するでしょう。新聞雑誌は、このような制度の下にあっては、人類のさまざまな意見や信念の表現に十分な機会を与える一方、私的、公的な既成勢力にいたずらにあやつられることがなくなり、争い合う政府や民族の影響からも開放されます。

世界の経済的諸資源は組織化され、原料資源は開発され、十分に利用されて発展し、生産物の分配は公正に調整されるでしょう。

世界連邦組織は、人類が生命の統合力によって駆られ、前進している目標です。その世界連邦組織は、全地球を統治し、想像しきれないほど莫大な資源に絶対的権限を行使し、東洋と西洋の理想を融合、一体化し、戦争の呪いと悲惨から人類を解放し、地球に存在するあらゆる利用可能なエネルギー源の開発に力を注ぐでしょう。この連邦組織の下では、力は正義のしもべとされ、組織の生命は、人類全般による唯一の神の認識と一つの共通な啓示に対する忠誠心によって支えられるでしょう<sup>1]</sup>

上記は積尊の思想と完全に同調している。

「人は闘わなければならない。真の平和を自らのものにするには、人は正義をもって力と闘わなければならない。さもなくば、力が単独支配するようになるだろう<sup>2]</sup>

善の諸々の力は悪との戦いにおいて結集しなければならないことを、ショージ・エフェンディが述べている。

「善良さだけでは戦いに勝つことはできない。善良さには力が加えられなければならない。そして悪自体が、この善の力を活気づけ、成功へと導く行動を起こす動因となるだろう<sup>3]</sup>  
(暫定訳)

バハオラの出現と同期し、地球の人口の半分を占める女性を公正に扱うことは極めて重要であるという声明が発せられる時代を人類は迎えた。古の時代、過去の化身たちの教えによってすら、女性の地位が男性より低められていたが、その理由は理解し難いものではない。しかし、卓越性を測る唯一の基準が武勇であった時代は過ぎている。現代では、知的技能と知的達成が今日の世界の重要側面すべてで主たる基準であることが認識されており、女性は知性面で、男性同様に、卓越性を発揮する資格を少なくとも得ている。この女性の権利の分野でも、バハオラが声明をまず発し、比類なき采配を振った。

西洋の先進国で女性参政権運動が出現するはるか以前のこと、1818年に誕生し、「金の王冠」と呼ばれ、バブの18人の最初の弟子たち（生ける文字たち）の中の唯一の女性であり、「クツラトゥル・アイン（目の至福）」という称号を贈られた一人のイラン人女性が、バブの処刑後、バハオラの信教の擁護に立ち上がり、新世界秩序の基本原則の一つである女性の権利獲得のための声を世界で真っ先にあげた。

---

1. *A Pattern for Future Society*, Shoghi Effendi, 1936, Bahá'í Publishing Trust, USA. (訳出典：世界文明の展開「オンライン・バハイ図書館」)

2. 『マハー・ヴァッガ』VI, 31. 『ミリンダ王の問い』も参照.

3. *A Pattern for Future Society*, Shoghi Effendi, 1936,

P358

後に、バハオラからタヘレ（純粋な人）という称号を授けられた彼女は、女性たちを単なる家財として保有してきた何世紀にもわたる古い慣習を破ることを公言し、被っていたベールを新しい時代への信念の象徴的行為として取り払った。イスラム教の狂信的な聖職者から異端者の烙印をほどなくして押されたタヘレを一介の扇動者とみなしてはならない。王たちも平民たちも思わず賞賛を送りたくなる気持ちにさせた、イラン史で最も著名な詩人であった。その聡明さと美しさに魅了されたのは、王のナーセロッディーン・シャーも例に洩れない。タヘレは王から求婚されたが、新しい時代を迎えるための闘争と女性の権利獲得のための運動に自らの進路は定められていると告げて断った。捕らえられることを既に予知し、苦痛に耐え抜くことを選んでいたタヘレに、快樂も宮廷生活も念頭になかった。彼女の名声はイスラム教の国土にとどまらず、西洋にも広がり、偉大な学識者たちから熱い手放しの賞賛を受けた。

- ◇ 美も女性という性もこの新しい信条に献身するが、ヴェールを脱ぎ捨て、宣教の聖火を広く遠くまで伝えた、ガズヴィーニ、Zarrin-Taj(金の王冠)とも、クツラトゥル・アイン(目の至福)とも呼ばれていた愛らしくも不運な詩人の英雄的行動は、近代史の中で最も感動的なエピソードのひとつである。（インド総督カーゾン卿著『ペルシャとペルシャについての問い』第一巻から）
- ◇ 記憶に残る人物の中で、彼女（タヘレ）ほど深く崇拜され、熱狂を呼び起こす人はない。彼女が生前行使していた影響力は、今もなお彼女の性に受け継がれている（ヴァレンタイン・チロル著『中東についての問い』より）
- ◇ この運動で最も目を見張らせたのは、女性詩人だった。彼女はその美德、敬虔さ、学識で知られていた……裕福な貴族の子女であったにもかかわらず、師に仕えるために、富、子供、

名前、地位を手放し、師の教説を宣べ伝え、確立することに身を投じる……ほどの強い信仰を持つようになった。（サー・フランシス・ヤングハズバンド卿著『微かな光』から）

- ☆ おおタヘレよ、あなたはナーセロッディーン・シャー千人分の価値がある！（トルコの大家作家で詩人のスレイマニヤ・ナジム・ベイ著『ナーセロッディーン・シャーとバビたち』から）

P359

- ☆ 女性はあまりに弱い生物と考えられているペルシャで、しかもとりわけ、聖職者が甚大な影響を持ち、イスラム学識者がその人数でも重要性でも圧倒していたカズビーンのような都市で、一人の女性が政府と国民の関心をなぜ引きつけることができたのか。まさにそのような思いも寄らない状況下で、一人の女性が異端者の一団を強力な指導力で束ねていたかもしれない可能性がなぜ生じるのか。ペルシャの歴史家でさえも困惑させる問いが提起されるのは、そのような出来事は前代未聞だったからである。（ジュルナル・アジアティック、1866年）
- ☆ ムッラー・サーリフの子供の一人が、Zarrin-Taj(金の王冠)という名の娘だった。彼女は幼少の頃から注目を浴びていた……盲従することなく、イスラムの科学の中に内在する誤謬をその鋭い知性でたちまちに気づいたばかりか、最も曖昧で混乱をきたしていた複数の箇所についてすぐに論じることができた……彼女の名声はペルシャ全土に限なく広まり、この上なく傲慢なイスラム学識者ですら、彼女の仮説と意見の一部を採用することに同意した。イスラム教シーア派がほぼ動物同然の水準にまで女性を降格していたことを踏まえれば、実に並外れた事実であったことがより一層に浮き彫りにされる。女性は魂がなく、生殖のためだけに存在すると考えられていたのだ。（A.L.M.ニコラス著『バブと呼ばれたセイエド・アリ・ムハンマド』から）
- ☆ 終生、私が最大の理想の女性にしてきたのがタヘレでした……タヘレの生涯とその殉教についてを耳にしたのは、わずか17歳の時でしたが、私はこう公言しました。「タヘレがペルシャの女性たちのために命を捧げてなしたことを、私はオーストリアの女性のためにやってみましょう」（オーストリア第2代大統領の母、ウィーンのマリアンネ・ハイニッシュから1925年にマーサ・ルートに贈られた言葉）
- ☆ クラトウル・アインのような女性の出現はどの国でもどの時代でも希少な現象である。だが、ペルシャのような国では驚異であり、否、奇跡と言ってもよい。目を見張るばかりの美しさ、類い稀な天賦の知性、熱意に燃えた雄弁さ、恐れを知らぬ献身的信仰、そして栄光に輝く殉教により、不滅の存在として傑出した彼女に同国の女性の中で比類する者はいない。バビ教は、クラトウル・アインのようなヒロインを生み出したことだけで、その偉大さを主張するには十分である<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup>

P360

イランのイスラム教聖職者たちは、女性たちをその教えの下に支配してきたことにタヘレから公然と異議を申し立てられていたが、いつまでも耐え忍ぶことはできなかった。彼女の生命は数年以内に絶たれた。聖職者の従者の一人に絞殺され、遺体は井戸に投げ捨てられた。

タヘレは、新たな世界秩序を支える基本柱 12 本のうちの 1 本であるしるしとして、バハオラを介して作用する聖なる力がその手で光を灯した一本のロウソクだった。生身の存在だったタヘレは、34 歳だった 1852 年に夜行性生物を煩わせることはなくなったが、女性解放運動の最初の殉教者として象徴的存在になったことで、参政権獲得に向けた軍隊が女性たちによって組織されるようになった。長い間、女性が被る運命にされていた搾取と残酷な仕打ちの撲滅がその目標だった。

タヘレの殉教からほぼ 70 年後、西洋諸国の女性たちは参政権<sup>1</sup>獲得の闘いに勝利した。

神の宗教制すべてにおいて、一人の女性が当時では傑出した女性として比類なき存在感を放った。釈尊の時代は、釈尊が敬意を払ったことで弟子たちが驚愕した著名な遊女、アンバパーリーだった。彼女は富貴で世故に長けていたが、それだけではなかった。釈尊は自らの弟子にない純粹さと慈善的精神を彼女の中に見て取った<sup>2</sup>。

バハオラが 1 世紀前に宣言した両性の機会平等の原則は、実現時期が到来した理念の単なる宗教的宣言ではない。彼は、日々の社会の営みにおいて実現する方法を与えた。子供たち全員を学校に通わすだけの資金がなくても、娘たちを優先的に通わせなければならないというものである。娘たちは将来、母親になり、その家庭の最初の教師になるからである。学資が用意できなければ、子供たちすべての教育は、共同体が担う。

今日、世界中で急速に拡大しているバハオラの共同体では、最も責任が重い立場の多くを女性が占めている。だが、この基本原則に関するバハオラの書の学習者なら、家庭について当然とされていた概念を無効にし、健全な家庭生活を生み出し維持するには、父と母、双方からの働きかけが不可欠であることを否定するよう意図されたのが、女性の地位向上であると誤解することはない。

---

1. 米国では 1920 年, 英国では 1928 年, フランスでは 1932 年, ドイツでは 1933 年だった。

2. キリストの宗教制ではマグダラのマリアだが、マリアも娼婦だった。モーゼの宗教制では、エジプトのファラオの娘、アシヤが相当する。アシヤはモーゼを養育し、モーゼがもたらした宗教への信仰のために殉教した。ラムとクリシュナ、それぞれの宗教制では、シータが、ラーダが相当する。ゾロアスターとムハンマド、それぞれの宗教制では、女王カタユンが、ムハンマドの娘ファテメが相当する。

P361

バハオラは、その他すべての教えにおいてのように、家族関係においても道徳と公正さ、節度ある関係性を重視した。結婚に関しては、今日では結婚の理由になっている一時的な目的よりもはるかに永続する目的を浸透させた。バハオラの教えによれば、結婚相手を選んだなら、存命する親全員の承諾を得なければならない。子供たちは両親の言うことに従い、家庭の調和と和合に貢献するべきであるとも、述べられている。

バハオラは、結婚の最大の目的は家庭づくりでなければならないと述べている。健全な社会づくりへの貢献を念頭に、子供たちが道徳的かつ精神的な教育だけでなく学業訓練も受けられる家庭づくりである。そして、子供教育の怠慢は許されざる罪<sup>1</sup>に値するとし、子供の訓育を自らの子供達の訓育<sup>2</sup>に値するものとしてその価値を実質的に高めた。しかし、人間は最善の努力と意志をもってしても、収入の範囲内で調和した結婚生活を続けることが困難となる可能性が時として生じることを認めている。そこで、双方の親戚、信教の共同体、選挙で選出された代議員による和解に向けた調停を受けながら、忍耐の一年間を過ごした後の離婚を許可している。

バハオラは、私たちの時代にみられる、社会的疎外、政治の汚職、経済的不均衡の問題に霊的見地からの解決をもたらした。だが、いかなる治癒もその効果が発揮されるのは、患者自身の治癒を受けようとする意欲にかかっていることを認識する必要がある。

経済至上の教義が人間の精神を度外視していることは概して多い。そこで経済問題の解決に当たり、人間の性質の中の霊的側面にバハオラは働きかけている。彼のメッセージの基本原則の一つである経済問題の解決には、何よりも重要な言葉「霊的」が先行する。すなわち、霊的側面からの経済問題の解決である。

---

1. この厳命から、健全な家庭生活の維持と、家庭生活と子供の養育の放棄を戒める積尊から女性たちへの忠告の重大さを認識できる。「阿難よ、如来が告知した教説と規律の下に、もし女たちが家庭生活から離れず、家なき者(出家者)にならなかったならば、正法は長く耐え……」(『サツダルマ・ブンダリーカ・ストラ』 ii.36)

2. 「自分や他の人の息子を養育する者は、あたかも私の息子を育てることである」バハオラ著『第七のイシュラグ』

P362

人間は単なる知的動物であり、均質性と安定以外に努力して求める価値がある目標は社会に存在しないという純粋な唯物論的見地からの主張は、非人間性からの解放を私たちに約束しても、実際には、人間性抹殺に終わる。バハオラは1世紀以上前に、農民のための安全保障、労働者のための共益制度、税規制、そして一つの統合システムとして、全権を備えた一つの国際機関による生産物の統制から成る、経済原則の概略を描いた。また、人間も社会も霊的に再生する必要があることと、今や戦争の主因となった過酷な経済競争に経済協力が取り替わる前に、超国家権威である世界政府

が樹立されなければならないことも述べた。

自力では制御できない諸々の要因により経済統制ができない国家は、提示される選択肢に疑念を抱き、交渉で優位に立つために戦争を起こすことが少なくない。だが、最大の乱費が戦争である。私たちは、ショーギ・エフェンディが概略を描き、先の頁に引用したバハオラの基本原則、世界平和と世界政府を読み直さなければならない。

社会的行動と政府の地球規模の秩序について思案した聖なる教師は過去の宗教制にいなかった。しかし、その事実で、彼らの偉大さが損じられることはあり得ない。バブとバハオラ以前に出現した化身たちがそれぞれ到来した時代、私たちが現在知っている地球は、当時の人間の意識にはまだ存在していなかったのである。

「このことを確信せよ。神のすべての預言者の本質は一つであり同じである。彼らの一体性は絶対的である。創造主なる神は言う。わがメッセージの伝達者の間には何らの区別もない。彼らの目的は一つである。彼らの秘密は同じ秘密である。ある預言者を他より高く尊び、他より高めることは決して許されない。あらゆる真の預言者は、自らのメッセージを、過去に現われたすべての預言者の啓示と基本的に同じであると見なした<sup>1</sup>。この真理を理解できない人々は、見苦しい愚かな言葉を吐くかも知れない。しかし、鋭敏な視力を有し、啓発された理解力をもつものは、そのような空言によって自らの信仰をゆるがされることは決してない。

---

1. 『ミリンダ王の問い』も参照。「すべての如来が常に同じ……真理を説き……如来たち皆が、警戒を怠らないようにと私たちを諭している」。

P363

しかし、この世における神の預言者たちの啓示の範囲は当然異なる。各預言者は特有のメッセージを伝達し、特定の行為を通じて自らを明かすよう命じられているのである。この理由により、預言者たちの偉大さに優劣があるように見えるのである。彼らの啓示は、地上に輝きを注ぐ月光にたとえられる。月の光量は月がその姿を現わすごとに異なる。しかし、その固有の光輝は減じることもなければ消滅することもない。

したがって、つぎのことは明白である。預言者たちより放射される光量に差異があるように見えても、それは光そのものに固有な現象ではない。むしろその差異は、絶えず変わりつつあるこの世の感受性の違いに原因があるのである。全能なる比類なき創造主は人類に預言者を送り、各預言者に固有のメッセージを託し、その現われた時代の要求に最も適した行動をとるように命じたのである。神が人類に預言者を送る目的は二つある。第一の目的は、人

の子らを無知の暗黒より解放し、真の理解の光にみちびくことである。第二の目的は、人類の平和と平安を保障し、それらが確立されるためのあらゆる手段を提供することである。

神の預言者たちを医師と見なせ。その使命は人類の健全を促進し、人類に取りついた分裂という病を和合の精神を通じて癒すことである。彼らの言葉に疑いをはさんだり、彼らの行動を非難したりする権利は誰にも与えられていない。なぜならば、彼らのみが患者を理解し、その病を正しく診断したと主張できるからである。知覚力がいかに鋭敏であろうとも、聖なる医師が有する英知と理解の高さに達することは誰にも望めない。ゆえに、聖なる医師がこの時代に処方する治療法が以前に処方されたものと同一でないとしても驚くことはない。否、それはむしろ当然である。病人を苦しめる疾病は、その進行状態によってまったく違う治療法を必要とするのである。同様のことが神の預言者たちに当てはまる。この世を神の知識の昼の星の光輝で照らすとき、神の預言者たちは常にその時代の状況に最も適した方法を用いて人々を神の光の信奉へと召喚したのである。彼らはこのようにして無知の暗黒を追い払い、彼らの知識の栄光を世に注ぐことができたのである。したがって、明敏なる人々の目は預言者たちの最も奥深くにある真髄に向けられなければならない。何となれば、どの時代においても、彼らの唯一の目的は過てる人々をみちびき、苦しむ人々に安らぎを与えることであるからである。

P364

今は繁栄と勝利のときではなく、全人類は多種多様の疾病にとらわれている。したがって、誤りのない医師の全能なる御手が用意する妙薬を用いて人類の生命の救助に誠心誠意努力せよ<sup>1)</sup>

バハオラが与えた道徳上、社会上での禁止令で食事内容に制限はないが、複夫複妻制、内縁関係、不義密通、奴隷制、治癒のために医者が処方した以外の興奮作用を伴う薬剤<sup>2)</sup>の使用は禁じられている。バハオラは怠惰をとがめ、何らかの職業に就くことを各人に命じている。

「工芸や商いというようなある種の職業につくことが、汝ら一人ひとりに命ぜられている。われは汝らがそのような仕事に従事することを「真なる御方」である神への崇拜という地位に高めた<sup>3)</sup>

「人々のうちで神の目に最もさげすまれるものは、何もせずすわり、物乞いをする者らである<sup>4)</sup>」ことも、同じ節の中で宣言している。

バハオラの世界秩序の中には、個人の行いと霊的成長に関する教えが完全に組み込まれている。バハオラはこの二つの要素は、すべての宗教がその信者の取り組みを通じて世界を造り直すための縦糸と横糸であると強調している。

---

1. 『落穂集』 34 段落. 『ダンマパダ』 146 も参照. 「何の笑いがあろうか。何の喜びがあろうか？——世間は常に燃え立っているのに——。汝らは暗黒(無知蒙昧)に覆われている。どうして燈明を求めないのか？」

2. 釈尊もこれらのうちの多くを当時、禁止した。不義密通「放逸で他人の妻になれ近づく者は、四つの事がらに遭遇する。——すなわち、禍をまねき、臥して楽しからず、第三に非難を受け、第四に地獄に墜ちる。禍をまねき、悪しきところ(地獄)に墜ち、相ともにおびえた男女の愉楽はすくなく、王は重罰を課する。それ故にひとは他人の妻になれ近づくな」『ダンマパダ』 309, 310. 飲酒依存「穀酒・果実酒に耽溺する人は、この世において自分の根本を掘りくずす人である」『ダンマパダ』 247.

神に起源する教えのほぼすべてで酩酊を起こすものが禁じられた。酩酊は、古えの時代、冷蔵庫がなかったことに一因する。『バガヴァッドギータ』では、3時間以上経過した飲食物すべてが禁止されることが述べられている(3時間以上経過してから発酵が始まる)。ゾロアスター教は、「汚悪な飲み物」の根絶を命じ(Spentemad gatha, Ch. 48.10)で、「酩酊を起こす飲み物を扱う者たちは罪人である」と断じている(Dadestan, Ch.40. 41).

3. バハオラ著『ベシャラトの書簡(吉報)』(第12の吉報).

4. 「戒律をまもらず、みずから慎むことがないのに国の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうほうがましだ」『ダンマパダ』 308. 266 句も参照. 「他人に食を乞うからとて、それだけでは托鉢僧ではない。ごく一部でなく、すべての法を自分のものとして取り入れる者が托鉢僧である」.

P365

信仰を持てなかったり、過ちを犯しても、言い訳をすれば、たいていは許してもらえらるだろうという人間の考えを正すことから、バハオラの指導は開始する。

「比類なき創造主は、すべての人間を同じ物質より創造し、人間の本質を他の創造物より高めた。それゆえ、人間の成功と失敗、利得と損失は自らの努力に依存する。努力すればするほど、人の進歩は大である<sup>1)</sup>

「自らを利己的な欲望の暗幕につつまではならない。何となれば、わが業(わざ)のすばらしさが人々の前に完全に示されるよう、われは汝らの一人一人をわが創造の完成の域にまで引き上げたからである。このことにより人間はみな、栄光に満ち給う神の美を自力で認識する能力を有し、今後も持ちつづけるであろう。人々にこのような能力が付与されていなければ、神の美を認めなかったものの責任をどうして問うことができようか。地上のすべての人々が召集され一堂に会する日、神の面前に立つものにつぎのような質問がなされたらとすればどうであろうか。『お前はなぜわが美を否認し、なぜわれに背を向けたのか』。この質問に対し

『人はみな過ちを犯し、誰ひとりとして真理に顔を向けるものはいませんでした。私もその例にならただけです。悲しいかな、その結果、私は永遠なる御方の美を認めることができなかつたのです』と答えるならば、その弁解は疑いもなく却下されるであろう。つまり、人の信仰はその本人によるものであり、他人の行動に条件づけられるものではないのである<sup>2)</sup>

審判を下されるのは、私たちが積んだ実績に対してであり、相対的尺度についてではない。従うべき神の正義の下に、カルマの法則は不可侵のままに作用する。

---

1. 『落穂集』 34 段落.

2. 『落穂集』 75 段落. 『ダンマパダ』 165 参照, 「みずから悪をなすならば、みずから汚れ、みずから悪をなさないならば、みずから浄まる。浄いのも浄くないのも、各自のことがらである。人は他人を浄めることができない」. 172, 173 も参照。

P366

「おお心霊の子よ！ すべてのもののうち、わが目に最愛なるものは正義である。汝もし、われを求むるならば、正義にそむくな。またわれ汝を信頼し得るよう、それを等閑にするな。その助けにより、汝、他人の目ならぬ汝自らの目にて見、隣人の理解力ならぬ汝自らの理解力にて知らん。汝の心のうちに熟考せよ。汝はいかにあるべきかを。まことに正義こそは、わが汝への贈物であり、わが慈愛のしるしである。されば、それを汝の目前に置け<sup>1)</sup>

——バハオラはこの正義の地盤から、純粹さと輝かしき黙諾に向けて前進するようにと告げている。

「おお心霊の子よ！ わが第一の忠言はこれである。すなわち、純粹にして優しく、また輝かしき心を持って。さらば古よりつづく不朽にして永遠なる主権は汝のものとならん<sup>2)</sup>

——バハオラは相手が誰であろうと口論を禁じ、自分の見解を述べる際には英知を使うとともに、常に寛容であるようにと勧告している。

「おお塵埃の子よ！ われまことに汝に告ぐ。あらゆる人間のうち最も怠慢なるものは、無益なる論争をし、兄弟より自ら優らんことを望む者である。言あげよ、おお兄弟たちよ。言葉にあらずして、行いをもちて汝の飾りとせよ<sup>3)</sup>

——それどころか、すべての人々を自分たちのような存在とみなし、個人的な好き嫌いを減らしながら自制することで、互いに、相手の中に自分自身を目にし、「いくつもの肉体であっても一つの霊のごとく<sup>4</sup>」なるようにと諭している。また、他者の欠点でなく、自分自身の中にある欠点を見るようにと訓戒している。

「おお実在の子よ！ いかにして汝、自身の欠点を忘れ、他の人々の欠点を挙ぐるに急なるを得るや。何人がこれをなすも、わが呪いを受けん」

「おお人の子よ！ 汝自身罪人である間は、他人の罪を囁くな。汝この命令に背くならば呪われん。われこれを証言す」

「おお心霊の子よ！ 汝まことに知れ。人々に正しくあれと命じながら自ら不正を行う者は、われに係りなし。たとえその者がわが名をふりかざすとも」

---

1. バハオラ著『かくされた言葉』アラビア編2. 馬鳴著『ブツダチャリタ』1533も参照。「生老病死に包囲されていても、真理の法を考え、実践しさえすれば、悲しみが堆く積もったこの山から逃げることができる。ならば、不公平を実践することにどんな益があるというのか」。

2. バハオラ著『かくされた言葉』アラビア編1. 『ダンマパダ』261も参照。「誠あり、徳あり、慈しみがあって、傷わず、つつしみあり、みずからととのえ、汚れを除き、気をつけている人こそ、長老と呼ばれる」。

3. バハオラ著『かくされた言葉』ベルシャ編5. 『スッタニパータ』895, 896も参照。「これらの偏見に固執し、『これのみが真理である』と宣説する人々はすべて他人からの非難を招く。(たとえ称賛を得たとしても)それは僅かなものであって、平安を得ることができない。論争の結果は(称賛と非難との)二つだけである、とわたしは説く。この道理を見ても、汝らは、無論争の境地を安穩であると観じて、論争をしてはならない」。また、*Dhammacariya-Sutta*, v. 3も参照。「論争を好む托鉢僧は塀のような無明に取り囲まれ、宗教もゴータマの法も理解していない」

4. *Sarah dohakosa*に釈尊の言葉が引用されている。「これは私自身であり、これは別のものだ。あなたを覆い包むこの絆から自由になりなさい。そうすれば、あなた自身が解放される」。

P367

「おお実在の子よ！ 汝が自身の責任にされたくないことを、他の何人の責任にもするな。また汝がしないことを言うな。これわが汝への命令である。これを守れ<sup>1</sup>」

——バハオラも釈尊のように、離脱を霊性が真に高い人々の特徴となし、貪欲さを霊性が死んだ者たちの特徴とした。

「わが幽閉(ゆうへい)はわれを何ら辱(はずか)しめ得るものではない。わが命にかけて言う。否、むしろそれはわれに栄光を授けるものである。われを辱しめ得るものとは、われを愛すると告白しながらも実際は邪悪な者<sup>2</sup>に追従するわが信徒らの行為である。まことに、彼らは

滅びるものらに属す。……。言挙げよ。世俗の欲望にしたがい、または、地上の事物に心うばわれたものはバハの人々の内には数えられない。わが真の信徒とは、黄金の谷をも雲のごとく超然として通過し、振り向くことも、立ち止まることもないものである。まさに、このようなものこそがわれに属するのである。天上の軍勢は、かようなものの衣より高潔さの芳香を嗅ぐことができよう…。そして、たとえ最も美しく、見目うるわしい女性に会ったとしても、彼の心にはその美を欲する影ほどの誘惑もおこらないであろう。このようなものこそが純潔無垢(じゅんけつむく)な存在である。日の老いたる者のペンは、全能にして、恩寵あふれる汝らの主に命じられて、かくあるようにと汝らに指示するのである<sup>3)</sup>

——また、無駄話をしないように警告している。

「おお塵埃の子よ！ 賢者とは聞く者を得ざれば語らぬ人々のことである。あたかも酌取りが、求むる人を見出すまでは盃を差し出さ……ないのと同じように<sup>4)</sup>

- 
1. バハオラ著『かくされた言葉』アラビア編 26, 27, 28, 29. 釈尊も同様の発言をしている。『ダンマパダ』 252, 125, 306. 「汚れの無い人、清くて咎のない人をそこなう者がいるならば、風にさからって細かい塵を投げると、(その人にもどって来る)ように、そのわざわざいは、その浅はかな人に至る」[「他人の過失は見やすいけれど、自己の過失は見がたい。ひとは他人の過失を初殻のように吹き散らす。しかし自分の過失は、狡猾な賭博師が不利な骰(サイ)の目をかくしてしまうように隠してしまう」][「いつわりを語る人、あるいは自分でしておきながら『わたしはしませんでした』と言う人、この両者は死後にはひとしくなる。来世では行ないの下劣な業をもった人々なのであるから」。
  2. 「邪悪な者」とは、善い属性の欠如の「人格化」であり、実体を持つ邪悪な存在ではない、とバハオラは説明している。 *The God of Buddha*, pp.122-3 も参照。
  3. 『落穂集』 60 段落。『ミリンダ王の問い』 vv.52-6 も参照。「私のそばに住んでいても不従順である者は、私から遠く離れている。しかし、ダルマに従う者は、如来が臨在する至福を常に享受する」。
  4. バハオラ著『かくされた言葉』ペルシャ編 36. 『ダンマパダ』 258, 259 も参照。「多く説くからとて、それゆえにかれが賢者なのではない。こころおだやかに、怨むことなく、恐れることのない人こそ、賢者と呼ばれる」[「多く説くからとて、それゆえにかれが道を実践している人なのではない。たとい教えを聞くことが少なくても、身をもって真理を見る人、怠って道からはずれることの無い人こそ道を実践している人である」。

P368

——バハオラは、嫉妬、嘘、執念深さ、ごまかしを忌み嫌っている。

「おお地の子よ！ まことにこれを知れ。少しでも妬みが残っている心は決してわが永遠の領土に達することを得ず。またわが聖なる王国から香り出づる神聖の甘き香をかぐこともできないであろう<sup>1)</sup>

——しかも、偽善に対しては違えようがない言葉で警告している。

「おお汝ら外見は美しく、内面は汚れたる者たちよ！ 汝らは透明なれど苦き水の如くである。それは外観は水晶の如く清く見ゆれど、聖なる分析者により試される時は、その一滴さえも受け入れられぬものである。実際、太陽の光は塵埃の上にも鏡の上にも同様に注がれる。しかし星が地球と違うが如く、それらは反射の程度において異なっている。否その相違は測り知れないほどである<sup>2)</sup>」

——他者をあたかも私たち自身のように感じる事が過去の宗教制の聖なる教師たちが教えた古来の黄金律であったが、他者をバハオラ自身と同じ高みまで高めるまでに、バハオラはこの概念<sup>3)</sup>を膨らませた。

「おお人の子よ！ わが僕が汝に求むることは何事も拒むな。彼の顔はわが顔なれば、わが前にて恥じよ<sup>4)</sup>」

もし、私たち一人ひとりがバハオラのこの言葉に従うことができるなら、世界は別天地になることは明白である。言葉にならないほどの至福な境地、涅槃の世界になるだろう。一步、踏み出すことは難しいことではない。ただ、私たち自身の中で踏み出すことが肝心である。釈尊も説いていたように、この境地を完全に味わうには、自我という障壁を、私たちは飛び越えねばならない。

---

1. バハオラ著『かくされた言葉』ペルシャ編6.『ダンマパダ』250,251も参照。「もしひとがこの不満の思いを絶ち、根だやしにしたならば、昼も夜も心のやすらぎを得る」「情欲にひとしい火は存在しない。不利な穀(イ)の目を投げたとしても、怒りにひとしい不運は存在しない。迷妄にひとしい網は存在しない。妄執にひとしい河は存在しない」

2. バハオラ著『かくされた言葉』ペルシャ編25.『ダンマパダ』262,318も参照。「嫉みぶかく、吝嗇で、偽る人は、ただ口先だけでも、美しい容貌によっても、端正な人とはならない」「避けねばならぬことを避けなくてもよいと思ひ、避けてはならぬことを避けてもよいと考える人々は、邪な見解をいだいて、悪い道に入る」。

3. 『ウダーナ』「すべての方角を心して訪ね回ってみたが、どこにおいても、自己よりもより愛しいものに、ついに到達しなかった。このように、他者にも、それぞれの自己は愛しいものであり、それゆえに、自己の幸せを欲する者は他者を害さぬもの」。

4. バハオラ著『かくされた言葉』アラビア編30.

P369

バハオラは、自我克服を妨げる最大要因は偽りの自尊心<sup>1)</sup>であると教えている。真実についてのさらなる知識にも、真実についての自分たちの偏見と先入観に囚われた見解と一致しなければ、扉を閉ざすのが自尊心である。私たちは自らを真実の世界から締め出してしまうことを知らないまま、真理が自分たちに到達するのを阻もうと、ともすれば、壁を築き上げる。物質的富所有による自尊心も私たちの魂を束縛し、魂の進歩を阻害する。バハオラは次のように述べている。

「おお実在の子よ！ この世のことで、あくせくするな。われ火もて黄金を試し、また黄金もてわが僕らを試さんに。おお人の子よ！ 汝黄金を欲し、われ汝それより自由ならんことを欲す。汝は黄金の所有により、自らを富めりと考え、われは汝がそれより高潔ならんことに汝の富を認む。わが生命にかけて誓う。これはわが知識であり、それは汝の空想にすぎない。いかにわが道、汝の道と一致し得るや<sup>2)</sup>」

——バハオラは、不可避の死を永遠性に向かう旅路の第一段階とみなし、この生への囚われから離脱するよう忠言している。

「言挙げよ。もしこの世とその虚栄を求めるならば、母の胎内にいたときに求めるべきであったのである。つまり、胎児のときには気づかずとも刻一刻とこの世に接近しつつあったのである。一方、この世に生まれ成人したものは刻一刻とこの世から遠のき、土に近づきつつあるのである。だとすれば、余命いくばくもない汝ら、与えられた機会をほぼ使い果たしてしまった汝らはなぜ地上の財貨をかき集めることにこれほどまでに貪欲なのか。おお、無思慮な人々よ。汝らはなおも眠りから覚めないのであろうか。

神のためにこのしもべが汝らに贈る忠告に耳をかたむけよ。まことに、このしもべは何の報酬も汝らから求めず、神の定め給うことに服従し、神の御心に完全に従順なのである。

---

1. 釈迦も、靈的停滞の原因として慢心を挙げている。「怒りを捨て、慢心を捨てなさい」『サンユッタ・ニカーヤ』1,23. 「疑念を断ち切り、何度も湧き上がる慢心を消し去った者たちこそ、この世で真に勝ち得た者たちなのだ」『イティヴッタカ』. 「怒りを捨てよ。慢心を除き去れ……」『ダンマパダ』221.

2. バハオラ著『かくされた言葉』アラビア編55, 56.

おお、人々よ。汝らの生涯の日々の大半は過ぎ去り、汝らの最期は迫りきている。それゆえ、自らが築き、自らすがりつづけているものを放棄せよ。代わりに神の教えにしっかりとすがれ。そうすれば、神が汝らのために定めた目的を達成し、正しい進路をたどるものとなるだろう。この世のものや、この地上の虚栄と装飾を自らの喜びとしてはならない。同様に、これらのものに望みをかけてはならない。最も崇高にして、最も偉大なる神の面影に全幅の信頼を置け。神は早晚、汝らの所有するすべてのものを無と化すであろう。神を自らの恐怖の的とし<sup>1)</sup>、神との間に交わした聖約を忘れてはならない。そして、ヴェールによって神より隔てられた存在であってはならない<sup>2)</sup>」

——バハオラは日々の行いを深く内省するよう、私たちに警告している。いつ、決算に呼ばれるかは誰にも分からない。

「おお実在の子よ！ 決算の日の来るまでは、毎日に汝自らを反省せよ。予告なき死は汝を訪れ、汝は汝のなしたることの決算をすべく召されんに<sup>3)</sup>」

「しかし、儚く一時的なものから自由になり、永遠なるものを求める者たちには、喜びに満ちた歓迎の手をバハオラは差し伸べている。

「おお至高なる者の子よ！ われ死を汝への喜びの使者とした。汝いかなれば死を悲しむや。われ汝を照らすために光を作った。何故汝その光から自身を覆うや<sup>4)</sup>」

「バハオラは、自らより遠く離れるか、喜び溢れるか、いずれかになる唯一の基準を与えた。

「おお人の子よ！ 汝われより遠く離れていること以外に悲しむな。汝われに近づき、わがもとに帰り来つつあること以外に喜ぶ<sup>5)</sup>」

---

1.「愚かな者は、悪いことを行っても、その報いの現われぬあいだは、それを蜜のように思いなす。しかしその罪の報いの現れたときには、苦悩を受ける。すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。……」『ダンマパダ』 69, 129.

2.『落穂集』 66 段落.『ダンマパダ』 235, 237, 236 も参照。「汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。しかし汝には旅の資糧さえも存在しない」「汝の生涯は終りに近づいた。汝は、閻魔王の近くにおもむいた。汝には、みちすがら休らう宿もなく、旅の資糧も存在しない」「自己のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをはらい、罪過がなければ、天の尊い処に至るであろう」.

3.バハオラ著『かくされた言葉』 アラビア編 31.『ダンマパダ』 150, 148 も参照。「骨で城がつくられ、それに肉と血とが塗ってあり、老いと死と高ぶりとごまかしとがおさめられている。この容色は衰えはてた。病いの巢であり、脆くも滅びる。腐敗のかたまりで、やぶれてしまう。生命は死に帰着する」.

4.同上 32.

5.同上 35.『ダンマパダ』 151 も参照。「いとも麗しい国王の車も朽ちてしまう。身体もまた老いに近づく。しかし善い立派な人々の徳は老いることがない。善い立派な人々は互いにことわりを説き聞かせる」.

P371

——だが、バハオラが明確にしているように、生きることの旗印は、死に際してのように計算や利得を考えずに犠牲を払うことにある。

「おお人の子よ！ すべてのものには標がある。愛の標は、わが掟の下で不撓不屈の精神、わが試練の下で堅忍不拔なることなり<sup>1)</sup>」

「おお実在の子よ！ わが道に殉教せんことを求め、わが喜びをもて満足し、わが定めしことに感謝せよ。されば汝われと共に、栄光の神殿の後なる莊嚴なる天蓋の下に安息するを得ん<sup>2)</sup>」

人類にバハオラが与えた教えの多くは、人類の靈的覚醒を目的とする。潜在的可能性が解き放たれ、釈尊が述べていたように、夢に見たこともないほどの高みに達することで、当時の人々には「神々」であると思われていた存在に、私たちは進化する。

バハオラの教えは、真の進歩、すなわち靈的完成へと私たちを導く貴重な階段である。もしこの教えについて熟考するなら、靈的成長に重きを置いた人生だけが生きる価値があると認識されるだろう。この物理的次元に存在する真の目的を人間の探究心にもたらし、その先で待っている目標に方向性を定めさせるのは、こうした人生より他にない。靈的であると、日常に影響を及ぼす経験を真に分析することができる。行動が低次の機能に基づいた機械的人間は、動物のように生物化学的な感覚でのみ経験に反応する。だが真に内省的な人間は、経験という現象を研究し、離脱した精神で分析し、生じ得る結果を想定して初めて行動を起こす。本能的生物と区別される真の人間がここにいる。精神的かつ意識的な人間が行う、思考、内省、瞑想のどれ一つとして、動物はなし得ない。動物は精神意識が生来的に欠如している。

---

1. バハオラ著『かくされた言葉』アラビア編48.

2. Ibid.,アラビア編45.

3. Ibid.,アラビア編47. *Ananusociya-Jataka*,328 も参照「虚弱な人間が、ただ貸与されただけのものを、どうして嘆く必要があるか。彼もまた息を引き取る。死に向かって時を惜しむ」.

P372

釈尊をはじめとする顕示者たちの教えのように、バハオラの教えでも、瞑想しない者は動物より劣るとされ、瞑想が人間に課されていても不思議ではない。獣には瞑想する能力がないのだから、瞑想しなくても問題はない。だが、瞑想から最大の啓発を受けられる私たちは、怠慢に弁解の余地はない。瞑想は、祈るときのように、通常は拡散して消散する膨大な精神力を集め、求める情報源に強力な光を照射するようにして意識集中する行為である<sup>1)</sup>。アブドル・バハは次のように語る。

「瞑想の能力をとおして人は永遠の生命に達し、……人間の精神は瞑想しているときに物ごとを知らされ、強化されます。この瞑想のときに、今まで知らなかった事物がその者の眼に明らかにされるのです。瞑想を通して靈的啓示を感知し、瞑想を通して天の食物を授かるのです。瞑想は神秘の扉を開く鍵です。瞑想の状態では自分自身を引き出し、あらゆる外部の事物から絶縁します。そのような自己の世界に入ると、人は靈的生命に満ちた大洋に身を

浸し、事物それ自体の秘密を明らかにすることができるのです。このことを説明するために、人は二つの視力を与えられていると考えてください。内面的視力がはたらいているときは外面的視力は動かないのです。こうした瞑想力は人間をその動物的性質から解放し、事物の実相を識別させ、神に触れさせるのです<sup>2]</sup>

しかしながら、瞑想の最終目標が、すべての化身が是認しているとおり、私たちの真我の完全なる認識である一方、真我は私たちの中に内在するものではない。それゆえに、長期にわたる真剣な探求をする必要は明白である。だがその探求は低次のものに向けるべきではない。へそ<sup>3</sup>を眺めても手がかりは得られない。探求して知るべきは、肉体内部の構造ではなく、私たちの内なる霊的実相、理性的自己、魂意識であることに、アブドル・バハも確証を与えている。

- 
1. 「この心は、以前には、望むがままに、欲するがままに、快きがままに、さすらっていた。今やわたくしはその心をすっかり抑制しよう、象使いが鉤をもって、発情期に狂う象を全くおさえつけるように」『ダンマパダ』326.
  2. *Paris Talks*, P.175, 'Abdu'l-Bahá, 1912, Bahá'í Publishing Trust, 27 Rutland Gate, London S.W.7. 和訳はアブドル・バハ著『パリ講和集』.
  3. 臍(へそ)を魂(理性的意識)と身体の接合点とするヒンズー教の伝承から広まった誤解である。臍の意義は、胎児と結合した臍の緒にある。臍の緒は、受胎とほぼ同時に物理的次元への旅を開始する理性的意識、魂、が宿る肉体が、安定形成されるための錨であり、命綱でもある。

P373

「にもかかわらず、人間にとって全く無益な想念もあります。それらは大海を当てもなく動く波のようなものです。しかし、もし瞑想力が内なる光を浴びて、聖なる属性をそなえるなら、すばらしい結果が得られることは確かです。

瞑想の力は鏡に似ています。もしも鏡を世俗的な事物に向けるなら、鏡はそれらを反映します。ですから、人間の霊が世俗的なことを黙想するならば、そうした世俗のことで頭がいっぱいになるのです。しかし、もしも皆さんがその霊の鏡を天界に向けるならば、天界の星座や真理の太陽の光が皆さんの心に反映し、神の国の美德が得られるでしょう。

したがって、瞑想の力という鏡を正しい方向に向けましょう。つまり、俗事に向けるのではなく、天の太陽の方へ向けるのです。そうすれば私たちはやがて神の国の秘密を発見し、聖書の寓話の意味や神霊の神秘を理解するようになるでしょう<sup>1]</sup>

ゆえに、私たちの意識から発する光を「すべての知識の源」に集中させ、そこから、人間と呼ば

れる謎の意味をできる限りたくさん拾い集めなければならない。この「すべての知識の源」とは化身を、現代なら、バハオラを意味する。人間の想像が到底及ばない絶対者のことではない。

「神の栄光は高遠なり。唯一真実の神が御自身を人間に顕わす目的はここにある。つまり、人間の最も奥に存在する真の自己の鉱山に潜む宝石をあらわにするためである<sup>2)</sup>」

ゆえに、

「喪失とは、真の自己を全く知らぬままに人生の日々を過ごしてしまうことである<sup>3)</sup>」

人間の霊的進歩を助けるためにバハオラが確立した手段の中でも、祈りと断食が果たす役割は特に大きい。バハオラは自らの啓示の中の太陽と月であるとし、それぞれの目的を明白に説明した。

---

1. アブドル・バハの『パリの講和集』より。『ダンマパダ』282, 372 も参照。「瞑想から、英知が生じる。心が瞑想状態になれば、英知が失われる。……英知に欠ける人には精神の安定統一が無い。精神の安定統一していない人は英知に欠けている。瞑想による精神の安定統一と英知とがそなわっている人こそ、涅槃の境地の近くにいる」。

2. 『落穂集』132 段落。

3. *The Bahá'í Revelation*, P.139, *Words of Wisdom*, Baha'u'llah, Bahá'í Publishing Trust, 1955, London. *Prayers and Mediation*, Baha'u'llah も参照。訳は「オンライン・バハイ図書館」『バハオラの書簡\_アシュレ・コレ・ヘール(知恵の書)』から。

P374

「おお、わがしもべよ。汝に授けられた神の聖句を、神のおそば近く仕える人々が唱えるように唱えよ。されば、汝の祈りの調べのうるわしきは、汝自身の魂に火をともし、また、すべての人々の心をも引き寄せるであろう。何人であれ、自室において神の啓示し給う聖句を唱えるならば、その口をもれる言葉の芳香は、全能なる神の御使いたちにより、広く世に広められ、すべての心正しい人々の胸を感動に打ちふるわせるであろう。たとえ最初はその作用に気づかずとも、祈るものに賜わる恩寵の効力は早晚必ずその魂に影響を及ぼすであろう。このように神の啓示の神秘は威力と英知の源である神の御心により定められたのである<sup>1)</sup>」

祈りは、永遠なる存在と意思を通わす時間であるとともに、私たちの短所を心の目で見つめ、真の自由を得るには霊的な属性をいかに培うかを推し量るために内省する時間でもある。それゆえ、

祈りを唱える際には自分が理解できる言語で唱え、言葉の意味を考えながら、その言葉が、自分の考えと、周囲の人々に対する自分の行いにどのような意味をもつかを内省する必要がある。祈りの目的は創造物と調和を築くことにある。これこそが、この物理的次元で私たちが生きる真の目的である<sup>2</sup>。

バハオラは日々の必須の祈りを3種啓示した。様々な状況、機会に合わせた多様な祈りの句を彼は啓示したが、特定の少数の祈りとともに、これら日々の必須の祈りには、彼からの特別な力が付与されている。

「おお阿難よ、……法蔵比丘（阿弥陀如来）はこの完成された祈りをもっておられる……この地上<sup>3</sup>にはそのような祈りが少数のみ出現する<sup>4</sup>」

釈尊は、バラモンのクタダタの「祈りには効力がなく、祈祷は空言である<sup>5</sup>」という発言に頷いていたが、その心眼に映る完璧なビジョンを通じ、阿弥陀如来が法をもたらし、物理的な地上に出現することをこのように明言した。

---

1. 『落穂集』 136 段落.

2. 『ダンマパダ』 102 も参照「無益に語句よりなる詩を百もとなえるよりも、聞いて心の静まる詩を一つ聞くほうがすぐれている」.

3. 「この地上」. ここでも探求者の注意をある特定の物理的地勢に向けており、何らかの曖昧で靈妙な領域を指し示していない.

4. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 v.10.

5. 『ミリンダ王の問い』

P375

また、日々の必須の祈りを唱えることで恩寵がもたらされることも明言している。

「そしてその仏国では、毎日三回、毎夜三回、曼陀羅華が降り注ぐ<sup>1</sup>」

釈尊が「曼陀羅華」と言及する表現を、バハオラは「言葉の芳香」と表現している。上記した句で、地球は球形をしており、その片半球で一日三回の日々の必須の祈りが唱えられ終わると、今度は、その反対側で開始することを、釈迦は暗に知らせている。したがって、バハオラ言葉に従い、「朝、正午、夕方」に唱えると、24 時間の中では計 6 回、世界全体で唱えられることになる。日中に「午前中、正午、黄昏時<sup>2</sup>」に唱えられた後に、この片半球で夜の帳が下りても、日照時間を迎えたもう片半球で祈りが唱えられていく。後者は前者の「夜の始め、中間、夜明け前<sup>3</sup>」に相当する。

「舍利弗よ、その仏国には白鵠、迦陵頻伽、孔雀がいる。この鳥たちは、毎日の夜間に三回、日中に三回、寄り集まっては鳴き合わせ、その声はそのまま五徳・五力・七覚支を説いている。その国の人々はこの声を聞いて、仏・法・僧を思い起こすのである<sup>4)</sup>」

釈尊は、バハイたちが捧げる祈りを説明した後に驚くべきことを最後に行う。それは、祈る作法と、日々の必須の祈りを捧げるときに顔を向けるべき方向について、バハオラがバハイたちに教えたものと違わない。未来の真の仏教徒たる、阿弥陀如来の弟子たち、バハイの祈り方と似た作法で祈るよう、釈尊は以下のように阿難に指示をした。

- 
1. 『小スカーヴァティー・ヴィューハ』 5.
  2. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 21.
  3. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 21.
  4. 『小スカーヴァティー・ヴィューハ』 6. (これらの鳥たちは文字通りにも比喻としても聖廟の土地に住んでいる)

※訳者注：本頁でいう「一日三回の日々の必須の祈り」とは「中位の長さの日々の必須の祈り(日に三度、朝・昼・夕方唱える)」のことだと思われる。これに「短い日々の必須の祈り(日に一度、昼に唱える)」と「長い日々の必須の祈り(24時間に一度、唱える)」が加わることで、3種の日々の必須の祈りを構成する。

P376

「さて、阿難よ、立ち上がれ。西方に顔を向け、手にしていた花を振り撒いたら、ひざまづき、額を地につけよ。この方角は、無上なる悟りを開かれた聖尊、阿弥陀如来が住し、とどまり、時を過ごし、そして法を説いておられる場所である。十方の全世界に知れ渡った、その非の打ちどころのない清浄な御名を、ガンジス河の砂の数ほどもいる祝福された仏たちが、一度ならず繰り返し、よどみのない言葉で、讃嘆し、讚美し、賞讃している<sup>1)</sup>」

この地球上のどこにしようと、バハイはその場所でアッカ（釈尊が阿難と佇んでいた場所から見た西方）に顔を向け、阿難のように立ち姿勢を取ってから、祈りを唱えながら、ひざまづくか、座るかをする。

だが最終的には、「言葉にあらずして、行いをもちて汝の飾りとせよ」と折あるごとに繰り返したとおり、「世のため」になされる無私の奉仕に勝る祈りはない<sup>2)</sup>、とバハオラは説いている。

断食に関し、バハオラはこのように述べている。

「断食は、成人の年齢である 15 歳に達した男女に義務付けられる。……ただし、旅人や病弱者、子どもをみごもっている者や授乳中の者には断食の義務はない。……日の出から日没までの間、飲食を断つことを義務とする。……そして、聖典<sup>3</sup>に定められたこの恩寵を、欲望のために奪われぬよう注意せよ」

断食は 3 月 2 日から 3 月 20 日を期間とし、終了直後の 3 月 21 日に新年を迎える。断食の目的は、バハオラの法と教えをより完全に体現するために、離脱の精神を学ぶことにある。

- 
1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 39. 「花」は、霊的な属性や思考が放つ聖なる芳香を象徴する。「読誦しなければ聖典が汚れ、修理しなければ家屋が汚れ、……」『ダンマパダ』 241.
  2. 「たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。牛飼いが他人の牛を数えているようなものであり、修行者の部類には入らない」『ダンマパダ』 19. *Ako Sam Veda*,<sup>1</sup> も参照「人間よ、もし六つの情熱（欲望、怒り、貪欲、愚かな執着、ねたみ、うぬぼれ）に打ち勝つ力があるのなら、仲間のために何か建設的なことをしなさい。さもなければ無益である」.
  3. 『アグダスの書』 バハオラ著. 「落ち着いて思慮ある人は身を慎み、言葉を慎み、心を慎む。このようにかれらは実によく己れをまもっている」『ダンマパダ』 234.

P377

——バハオラは、一時的なものごとへの追求を超越するように私たちに強く促しながら、

「汝らの所有する物は早晚、他人の手にわたり、汝らの家は他人の住居となる。わが言葉に耳をかたむけ、愚かなる人々の内に数えられることのないようにせよ。

汝ら全員にとって最も重要な義務はこれである。つまり、他人によって侵されることも、奪われることもないものを自分のために選ばなければならないのである。それは何か。全能者こそわが証人なり。それは神の愛である。おお、汝らこのことを理解し得たならば。

いかなる豪雨や洪水によっても破壊されない住居を建てよ。人生のあらゆる移り変わりや栄枯盛衰からも汝らを守る住居を建造せよ。この世にみすてられ、虐げられた者が汝らに送る指示はこれである<sup>1</sup>」

——低い倫理水準から私たちに引き上げるために最高の倫理水準をもたらす。

「あるものは隣人の財産を侵すことを合法と見なし、神の書に記された神の命令を軽んじる。彼らを待ち受けるのは災難と神の懲罰である。神こそは全能にして威力に満ち給う。神聖さの黎明の地平線上に輝く御方にかけて誓う。地上のすべてのものが金銀に変えられたとしよう。その財宝を拾いわがものとするのは言うまでもないが、それらに目をくれただけの

人も信仰と確信の天上に真に昇り詰めたものとは言えない。……このような人は、地上に属するものははかなくまったく虚しいものであることを心眼の威力により容易に認め、より高い次元のものに関心を向けるであろう。

——疾病が最も悪性であるとき、治療法は最も厳しくなければならない。

言挙げよ。恥を知れ、おお、古来の美を愛すると自称する人々よ。古来の美を苦しめた試練と、神のために彼が負った苦悩の重荷を汝らの戒めとせよ。汝ら、目を見開いて見よ。古来の美は無数の苦しみに耐えてきた。しかし、その結果が汝らの価値のない信仰告白と下劣な行動なのであれば、古来の美がこれほど苦勞する理由はどこにあるか。わが啓示に先立つ時代、あらゆる盗人と不正者は汝らと同じ言葉を吐き、汝らと同じ行動に走ったではないか。

---

1. 『落穂集』123 段落。「ブッダの勝利は敗れることがない。この世においては何人も、かれの勝利には達しえない。ブッダの境地はひろくて涯しがない。足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘い得るであろうか？」『ダンマパダ』179 も参照。

P378

まことにわれは言う。わが甘美なる声に耳をかたむけよ。邪悪な欲望と腐敗した願望の汚れを払い、自らを清めよ。神の幕屋に住まい、不滅の栄光の座にある人々を見よ。空腹のために絶命寸前であっても、彼らは手を伸ばし隣人の財産を不法に奪うことは決してしない。その隣人がいかに卑しく、価値のない存在であったとしてもこのことに変わりはない。

唯一真実なる神が自らを現わす目的は何か。それは全人類を正直と誠実さ、敬虔と信頼、神の御心に対する従順と服従、寛容と親切、公正と英知のもとに呼び寄せることにある。聖人のような性質をもって万人を覆うマントとし、浄らかで正しい行動を万人の装飾とすることこそが神の目的である。

言挙げよ。自らと同胞を哀れむがよい。汝らの虚しい空想と、見苦しく腐敗した想像をもって神の大業を汚すことのないようにせよ。まことに、神の大業は、神聖さの真髄をはるかに越えて崇高なるものである<sup>1)</sup>

——不滅なるものに顔を向けるようにと人間を促しながら、「自分自身を知る」という最高の目標を繰り返し掲げ、人間の霊的遺産と真の運命を、バハオラは痛切な思いで思案している。

「おお、わがしもべらよ。われは、わが恩恵と寛大さにより、汝らの魂に驚くべきものを託

したのである。それがいかにすばらしいものであるかを理解できたならば、汝らはすべての創造物に対する執着を絶ち、自己をまことに知るに至るであろう。まことに自己を知ることが、われの存在を理解することに等しい。この状態に至り、汝らは、われ以外のすべてのものより独立した自己を発見する。そして、わが慈愛と恩恵の大海が、汝らの内に波うつ様子を見る。汝らは、それを内なる目と外なる目の両眼をもって、わが光輝なる名の出現を見るが如くはっきりと認めるであろう。汝らのむなしい妄想と、邪悪な欲望と、不実で盲目な心によってこの高遠なる地位の輝きが奪われ、その神聖さが汚されることを決してゆるしてはならない。まことに、汝らは強力な翼を存分に羽ばたかせ、歓喜に満ちた完全な自信をもって無限の天空を舞う鳥の如くである。やがて空腹を覚える鳥は、下界の水と粘土を求めて地上に飛来する。しかし、そこで欲望の網に足を捕られた鳥は、以前いた仏国土に舞いもどる力を失ってしまう。

---

1. 『落穂集』 137 段落。

P379

羽を覆う泥は重くのしかかり、鳥は泥を払う力をもたない。かつては天界の住人であった鳥も、今や塵の中に住居を求めることを強いられるのである。したがって、おお、わがしもべらよ、むなしい欲望と強情の粘土で汝らの翼を汚してはならない。妬みや憎しみの塵の汚れを汝らの羽につけてはならない。これにしたがえば、神聖なるわが知識の天空に舞うことをさまたげられることは決してない<sup>1)</sup>

——不可避のいかなる試練が待ち受けていようと、言葉にならないほどの栄光が最後に用意されている。

「おお、わがしもべらよ。この地上での日々において、神が汝らの望みと異なることを定め現わしたとしても、それを決して嘆いてはならない。何となれば、汝らを待ち受けるのは幸福と喜びにあふれ、天来の歓喜に満ちた日々である。このことは確かである。神聖にして精神的な光に満ちた数多くの世界が汝らに明かされよう。今の世にいるときも、また、つぎの世に進んでからも、汝らはこれらの世界が提供する恩恵を享受し、その喜びを共有し、すべてを支えるその恩寵の分け前にあずかることができよう。これこそは神が汝らに定めた運命である。汝らはこれらの世界のすべてに到達できよう。このことには疑う余地もない<sup>2)</sup>

「おお、わがしもべらよ。大地のように忍従し、従順であれ。されば、わが知識の香り高い聖なるヒヤシンスが、汝らの存在の土壌より色とりどりに咲き誇るであろう。炎のように燃えさかれ。そして、その火炎により無思慮のヴェールを焼き尽くせ。また、神の愛の生命力

あふれるエネルギーにより、冷えびえとしたかたくなな心に点火せよ。風のように軽く、自由であれ。されば、侵し難いわが聖所と、わが宮居の境内に入ることができよう<sup>3)</sup>

——永遠なる者が不滅を呼び寄せる!

「おお、流浪の身であるわが忠実なる友よ。わが恩寵の聖水もて無思慮の渴きをいやし、わが神聖なる臨場の黎明の光により別離の暗黒を追放せよ。汝に対するわが不滅の愛が宿る住処を、強欲の暴虐に破壊させてはならない。自我と欲望の塵によってこの天来の若者の美を覆い隠してはならない。正義の真髓を自らの衣とせよ。汝の心は、神以外の何ものも恐れてはならない。汝の魂より湧きでる清水を、空虚にして過度な執着の茨でとめてはならない。また、汝の心の源泉より湧きでる命の泉の流れをさまたげてはならない。神にすべての望みをかけよ。神の確かな慈悲に全力をもってすがれ。貧困にあえぐものを富ませ、墮落の淵にしずむものを救済し得るものが神以外にいようか。

---

1. 『落穂集』 153 段落.

2. Ibid.,

3. 『落穂集』 152 段落.

P380

おお、わがしもべらよ。朽ちることのないわが隠されたる無限の富の大海を発見することができれば、汝らはこの世のものを、否、この全宇宙をもまったく価値のないものと見なすに違いない。最も崇高にして至上なる目標に到達できるよう、心にともる探究の炎を赤々と燃焼させよ。その目標とは、最愛なる御方に近づき、融合できる地位に到達することである…<sup>1)</sup>

——人間の救済こそ、化身の目的に他ならない。バハオラはそれゆえに救いの約束を差し出している。道を大きく踏み外した攻撃的な者たちも例外とされることはない。

「わが唯一の義務は、汝らが神の大業に対する自らの義務を怠っていることを汝らに忠告することである。汝ら、わが忠告を聞き入れるものならば。神がその恩寵により汝らに慈悲を垂れ、汝らの罪を洗い流し、汝らの悪行を許すようわが言葉に耳をかたむけ、神に戻り、悔い改めよ。神の広大な慈悲は神の怒りの猛威をしのぐものである。そして、神の恩寵は、存在を与えられ、生命の衣につつまれた過去と未来のすべてのものを覆いつつむのである<sup>2)</sup>

人類の真の同胞愛の確立のためにバハオラがもたらした啓明的な教えが、前進的な性質を帯びていることは十分に実証されている。にもかかわらず、現代が進むペースはあまりに急速であるため、ごく短期間を除き、バハオラの教えは時流に合わないと言わざるを得ない人々は常に存在する。そのような人々は、人間の進化は一つの自然の法則であるという御伽噺を信奉しているにすぎない。彼らは、現代の文明のようにかつては栄華を誇った大文明が滅亡し、もはや存在していないことを聞いたことがないかのように思える<sup>3</sup>。バハオラは、化身は実に稀有な現象であるという明らかかな事実を失念しているそのような人々に対しても、騙されやすい人々を欺こうとする者たちに対しても、警告を発している。

---

1. 『落穂集』 153 段落.

2. 『落穂集』 66 段落.

3. 「光から闇への道、闇から光への道がある。また、暗い闇から深い闇へ、そして夜明けから明るい光へと向かう道もある。賢明な人は、自分が持っている光を使って、より多くの光を受け取る。真理を知るために絶えず前進する」『ブッダチャリタ』 15-22, 1533.

P381

「一千年が完全に経過する前に自らを神より下された直接の啓示の顕示者と称するは、正しく虚偽を語る偽り者である。その者がそのような主張を撤回し放棄するよう、神が恩寵深く援助されるよう、われは神に祈る。もしその者が悔い改めるならば、無論、神は彼を許されるであろう。しかし、もし過ちに固執するならば神は必ず、その者を容赦なく扱う者を遣わされるであろう。罰することにおいては、誠に神は畏るべき御方である。この言葉をその明白な意味以外に解釈する者は、万物を取り巻く神の慈悲と聖霊から見放された者である<sup>1</sup>」

---

1. 『アグダスの書』 バハオラ著. 注: 前述したヒンズー・仏教で言われる四つの時代体系(クレタ・トレーター・ドヴァーパラ・カリ)と完全に一致する. これまでに確認してきた通り、バブとバハオラは、ヒンズー教典ではラージヤ・スーリヤヴァンシー・マル(化身カルキ)とチャンドラヴァンシー・デーヴァピとして、仏教では阿弥陀如来と観自在菩薩として、仏暦 2486 年(西暦 1943 年)に終焉したカリ・ユガを締め括る接合期に到来が約束された二人の御方に他ならない. バブは、バハイ歴の開始年である仏暦 2387 年(西暦 1844 年)に、バハオラは仏暦 2406 年(西暦 1863 年)に出現した. それゆえ、前述した計算から、ラム、クリシュナを含む化身たちが夜闇が最も深い締め括りの接合期に到来したのと同様に、カリ・ユガが終わり、クレタ(サティヤ)・ユガが開始した仏暦 2486 年(西暦 1943 年)のきっかり百年前に、バブは出現し、この年にバハイ歴が始まった. したがって、バハオラの次に到来する化身、言うなれば顕示者は、(現在のクレタ(サティヤ)・ユガの先触れと締め括りの二つの接合期と、次のユガの始めの接合期の長さを考慮することで)自らの到来から少なくとも千年後になるとバハオラは述べている.

	時代		
	仏暦(仏教)	西暦(キリスト教)	バハイ暦
カリ・ユガの終焉	2486 年	1943 年	100 年
サティヤ(クレタ)・ユガの先触れの接合期	100 年間	100 年間	100 年間
サティヤ(クレタ)・ユガの期間	1000 年間	1000 年間	1000 年間
	3586 年	3043 年	1200 年 合計
サティヤ(クレタ)・ユガの終わりの接合期	100 年間	100 年間	100 年間
	3686 年	3143 年	1300 年 合計
トレーター・ユガの先触れの接合期	200 年間	200 年間	200 年間
	3886 年	3343 年	1500 年 合計

換言すれば、バハオラの次の化身は下記の期間に必然的に到来する。

仏暦：3586 - 3886 年.

西暦：3043 - 3343 年.

バハイ暦：1200 - 1500 年.

上記の年に関心を持つのは学識者だけかもしれないが、バハオラの発言に完全に一致する。カルキ(弥勒・阿弥陀如来)が先導するサティヤ・ユガの期間も千年間であることを、スールダース(16世紀の北インドの詩人)も予言している(222-223頁参照)。

P382

バハオラはここで釈尊のように、自らの宗教制に人類が従うであろう具体的な期間を明示している。自らの宗教制の有効期間に関する上記したバハオラの発言を、釈尊も謎めいた言い方で肯定している。

まず第一に、栄光の大王が満月の日の安息日(布薩)に身を清め、聖なる日の遵守のために宮殿の上の階に上がったとき、そこに天の宝たる車輪(法輪。ダルマであり宗教制のこと)が現れた。中心部には轂(こしき)が、周縁部(その宗教制が及ぶ最遠の限界)には輪金(りんご)が取り付けられ、千本の輻(や)をもって完成している(その宗教制は千年間続くという意味)<sup>1</sup>。

そして上記の引用と同じ経典に納められている以下の部分では、栄光の大王の宗教制の下に全世界が征服<sup>2</sup>されることが明言されている。

栄光の王はそれ(法輪)を目にして考えた。「われはこんな言葉を聞いたことがある。『士

族<sup>3</sup>を出自とする聖別された王が満月の日の安息日（布薩）に身を清め、聖なる日の遵守のために宮殿の上の階に上ったとき、そこに天の宝たる車輪が現れた。中心部には轂が、周縁部には輪金を取り付けられ、千本の輻をもって完成している。これにより、王は無敵の王の中の王になる』。すると、われが無敵の王の中の王となるのか」。

- 
1. 『ディーガ・ニカーヤ』「マハースダッサナ経」11. (栄光の大王の経)
  2. ダルマの広まりとその有効期間がこの節と次の節で謳われているが、これは栄光の大王(バハオラ)の宗教についてであり、釈尊の宗教についてではない。「五つの消滅」からと「一千年耐えるはずだった真の法(Saddharma)は、女性の出家により、その期間は半減するだろう」(Kullavagga,X,1.6)という釈尊自身の発言から示唆されるように、言及されているのは、バハオラの宗教制についてである。
  3. バハオラの出身階級は、バラモンのような聖職者ではなく、釈尊のように、貴族「クシャトリヤ」だった。

P383

「阿難よ、そこで、栄光の王は王座から立ち上がった。敬虔な面持ちで片方の肩からローブを肩脱ぎし、左手で水差しを持った。そして右手で車輪に水を撒き散らしながらこう述べた。

『前方に転がれ、何たる車輪よ！ 何たることだ、前進して打ち勝て！』。

阿難よ、すると、その驚くべき車輪は東の地域に向かって転がり前進した。その後、軍隊、軍馬、戦車、象たち、そして人間たちとともに、栄光の大王も続いた。阿難よ、そしてどの場所であろうと車輪が止まると、栄光の大王も立ち止まり、軍隊、軍馬、戦車、象たち、そして人間たちとともに住居を構えた。阿難よ、すると、東の地域で覇を競っていた王たち全員が栄光の大王のもとまでやって来て、口上を述べた。

『ようこそお越しくございました、おお強大な王よ！ すべてはあなたのもので、おお強大な王よ！ おお強大な王よ、われらの教師になってください！』

その声に応え、栄光の大王は教えた。

『生けるものを殺めてはならない。

与えられていないものを自分のものにしてはならない。

情欲に任せて誤った行いをしてはならない。

嘘をついてはならない。

理性を失わせる飲み物を飲んではならない。

これまでに食べてきたものを食べるがよい<sup>1]</sup>」

阿難よ、すると、東の地域で覇を競っていた王全員が、栄光の大王に従うようになった。だが阿難よ、この驚くべき車輪は、東の地域で海や大きな湖に差しかかるたびに、没入と浮上をくり返し、南の地域に向かって転がりながら前進した。（そして東の地域で起きたことが南でも西でも北の地域でも同様に生じた。この驚くべき車輪はそれぞれの地域の最果てまで前進すると、方向を変えてさらなる前進を続けた）」

- 
1. 飲酒、薬物他を除けば、食事内容に制限がないことを意味している。バハオラはそのように宣言した。

P384

釈尊が上記のように語ることで、王も平民も膝まずき、恭順を示さずにおれないほどの力が、栄光の大王——バハオラの宗教制（法輪）に宿されていることに疑いの余地を残さない。だが、不可思議なことが残されている。

「さて阿難よ、驚くべき車輪が征服の旅に出発し、全世界を征服してついには大海の果てまで進むと、今度は、踵を返すようにしてクサヴァティの王都に戻った。そして栄光の大王の奥の建物への入口前の屋外テラスで停止すると、そこを定位置とし、栄光の大王の奥の建物の栄光ある装飾として固定された。阿難よ、栄光の大王の前に現れた驚くべき車輪とはこうしたものであったのだ」

というのも、「驚くべき車輪」こと法輪とは、バハオラの大業のことであり、この惑星の靈的征服がその定めであるとバハオラ自身が確約しているように、物理的特性を持たない。

「勝利が到来するとき、あらゆる人々は信者であると告白し、神の信教の庇護のもとに急ぐであろう。世界を取り巻く試練の日々において大業に確固として耐え、その真理より踏みはずすことを拒否したものは幸いなり<sup>2]</sup>」

しかし、釈尊はこう述べている。

「車輪……は、踵を返すようにしてクサヴァティ<sup>3]</sup>の王都に戻った。そして栄光の大王の奥の建物への入口前の屋外テラスで停止すると、そこを定位置とし、栄光の大王の奥の建物の栄光ある装飾として固定された」

車輪は法輪を象徴するが、ここでは、車輪のように円形をした物理的な「栄光ある装飾」であることが間違いなく示唆されている。では、正確に何であり、確実にどこにあるのだろうか。釈尊がいた宮殿や仏舎利塔の「栄光ある装飾」が何を象徴し、どういうものであるかを示唆するものは、「奥の建物」を彷彿させる仏舎利塔の中にも、経典の中にも残されていない。これは確かである。しかも、釈尊が「栄光の大王」と通称されていた土地はない。さらに言えば、釈尊は自らのダルマ

が世界を征服するようになるとは予言していなかった。

- 
1. 『ディーガ・ニカーヤ』「マハースダッサナ経」w.12-20.
  2. 『落穂集』150 段落.
  3. これは『スカーヴァティー経』に記されている極楽に関する象徴的な場所であり、ラーマの息子のクシャが築いた都市の物理的立地との相関づけはできない。「栄光の大王」が阿弥陀如来であることは明白である。

P385

「栄光の大王」と「驚くべき車輪」は比喩であり、予言でもある。釈尊はこの比喩を用い、未来に起きることを描写しているのである。それでも、疑問はまだ消えない。「栄光ある装飾」とは正確には何のことか、栄光ある装飾が固定された「栄光の大王の奥の建物の部屋への入口前の屋外テラス」はどこにあるのだろうか。今なら、答えることができる。なぜなら「おお、諸々の栄光の中で最も栄光ある御方」を意味する最大名「ヤ・バハオル・アブハ<sup>1</sup>」以上に、「栄光ある装飾」として固定された円形の驚くべき車輪を物理的に象徴するものはないからである。この最大名は、バハオラ（栄光の大王）がかつて居宅にしていたバージの邸宅から奥まった場所に所在する建物の入口前の屋外テラスであり屋根が柱で支えられた玄関屋根の妻壁に固定された、円形で黄金製の飾り額に刻まれている。そしてこの建物は現在、バハイの世界では至聖の霊廟として、バハオラの遺骸がその中に安置されている。

驚くべきこの車輪を型取り、栄光ある装飾として定位置とされた場所に固定された紋章には、バブが多くの意味を内包させた二つの重要なアラビア文字が使われている。その二つの文字、Baha (Bha)と Abha は、サンスクリット語でもアラビア語でも、発音、意味ともに変わらず、「栄光」または「栄光ある」を意味する。これらは、釈尊が『スカーヴァティー・ヴィューハ』『アミターユル・ディアーナ経』『マハースダッサナ経』の中でふんだんかつ正確に言及し説明していた語句に他ならない。"Bha"と"Abha"はしかも、クリシュナがアルジュナとの会話<sup>2</sup>で自らの高貴な栄光を説明する際にも繰り返し言及された<sup>3</sup>。そして、釈尊が驚くばかりの先見力で見て取った最大名とそれを囲む車輪は今、バハオラが安息する至聖の霊廟の玄関屋根の妻壁に栄光ある装飾としてかつ、円形で黄金製の飾り額として固定されている。美しい筆跡で刻まれた最大名は、図 11 の写真の中に見ることができる。

- 
1. Baha(アラビア語)と Bha(サンスクリット語)だけでなく、アラビア語でありサンスクリット語でもある Abha も「栄光」または「栄光ある」を意味する。
  2. 『バガバッドギーター』XI.12,32,33.
  3. 二つの言葉"Bha"と"Abha"は二つの別々の言葉のように思われるが、本質的には同じ一つの言葉である。"Bha"は

「栄光」を意味し、"a"は、前置詞"of"に相当する接頭辞であるため、"Abha"は「of Glory : 栄光の」や「Glorious : 栄光ある」を意味する。そして、"Glory"のように最初が大文字にされる場合は「栄光ある御方」または「諸々の栄光ある御方」を意味する。"u"は"the"を意味する。それゆえ「ヤ・バハオル・アブハ:Ya Baha'u'Abha」は「おお、諸々の栄光の中で最も栄光ある御方: O Glory of the All-Glorious」を意味する。

P386



上\_バハオラ（至聖の中の至聖なる御方）の廟へのアプローチ。彼が居宅にしていたバージの館に隣接する。

図 11

下\_車輪……は、栄光の大王の奥の建物への入口前の屋外テラスで停止すると、そこを定位置とした。



P387



図 12

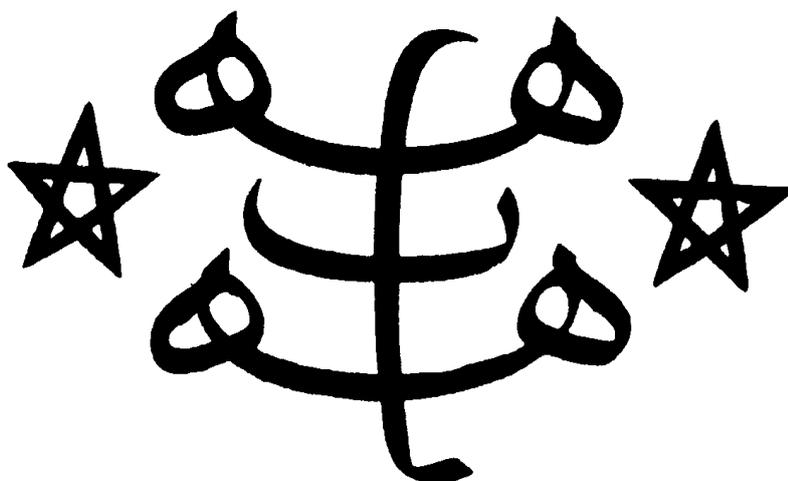
Ya Baha'u'l Abha 「おお、諸々の栄光の中で最も栄光ある御方」

P388

聖なる宗教すべての教典には最大名が示唆され、ヒンズー教典のように、音節すら記した聖典もある。だが、これらに記されて約束された御方——劫の終焉者——が到来するしるしを描写する数百もの予言の中で、釈尊の予言に匹敵するものはない。釈尊は、阿弥陀如来と彼の極楽浄土についてを述べた経典の中でしるしと条件を潤沢に提示した。「栄光ある装飾として固定された」黄金製の飾り額の形状そのもの（車輪のような円状）や、「驚くべき車輪」の上に刻まれた「おお、諸々の栄光の中で最も栄光ある御方」という最大名の意味を説明したり、示唆だけでもしている教典

は、仏典を除いて他にはない。しかも、バハオラの廟入口前の柱で支えられた玄関屋根の妻壁に固定されていることを正確に言い当てているのは、釈尊の予言だけである。

その大いなる神聖な意義により、バハイは最大名を敬虔な精神をもって見つめる。最大名は然るべき畏敬を払うべき対象であるため、厳粛に扱う場合を除いて装飾には使用しないよう、アブドル・バハは注告している。一方、一般用途になるものとして、最大名の意味を含み、その目的を明示した象徴的な図案（図 13）を彼はデザインした<sup>1</sup>。



図

幅広い意味が内包され、左右対称のデザインとなるように採用されたのが、アラビア文字だった。バハオラ——阿弥陀如来——栄光の大王が、現代のために啓示した聖典の言葉がアラビア語だったことにも由来する。

図 13 中の 3 本の水平線は、アラビア文字文字の"heh"と"beh"を組み合わせ<sup>2</sup>たもので、釈尊を始めとするバハオラ以前の顕示者がしばしば言及した三界を明示する。

「如来は三界を、創造されていない者の世界、かつ原因なき原因の世界、啓示や精神意識の世界、物理的次元もしくは創造された世界として、ありのままに見ている（無明の凡夫が見るようには見ない）<sup>3</sup>」

---

1. *Tablets of 'Abdu'l-Bahá*, Vol.I. Bahá'í Publishing Committee, New York, 1930.

2. アラビア数秘学では合計で 9 になる。Baha もしくは Abha も 9 になる。b(もしくは Beh)=2; H(もしくは Heh)=5; a(もしくは Alif)=1 に換算されるため。

3. 『サッダルマ・ブンダリーカ・スートラ』(Lotus of the Good Law Sutra), Ch.XV. 『ヤジュール・ヴェーダ』 XIII.36 も参照. 「幾世代もの主であり、(同格の者が)他には生まれない誰よりも偉大な御方であり、アヴァターラ(顕示者)の装束に身を包んだ御方が登場した。この世の住処に住み、最も豊かな至福を授ける者である御方は、三重の光輝を運び入れる者である」。『バガバッドギーター』 III.22 も参照。

P389

しかも、このように、釈尊が明言した三界の概念を、バハイ教の三大中心人物も支持している。すなわち、神の世界(釈尊による「創造されていない、かつ原因なき原因の世界」と同一)、顕示者の世界(釈尊が言う精神意識や啓示に相当)、そして、人間、もしくは創造された世界(釈尊の言わんとすることと同一)が相当する<sup>1</sup>。この三つの世界を結びつけるのが、絶対者から発するダルマ、すなわち道である。ダルマは宇宙の様相すべてに内在し、完璧な鏡である顕示者がこれを受け取り、人類に集中的に反射させる<sup>2</sup>。左右の二つの五芒星は人体を象徴し、奇跡の双子を示唆する。弥勒・阿弥陀如来と観自在菩薩、すなわちバハオラとバブである。二人は「驚くべき車輪」が象徴する、最大名の強大な宗教性を力を合わせて導き入れたのである。

別の観点から見つめると、この表象には、弥勒・阿弥陀如来——バハオラ——劫の終焉者の左右に控える聖なる御方、観自在菩薩(バブ)と勢至菩薩(アブドル・バハ)の実際の位置づけについての釈尊の予言も取り込まれていることが分かる。

「……左側の蓮の花の上には観自在菩薩が座し、……右側の蓮の花の上に勢至菩薩が座している姿を思い描きなさい<sup>3</sup>」

本書の表紙デザインには二つの宗教制の表象が取り込まれている。一つは8本の輻に象徴される古代の釈尊の宗教制である。活力の源として人類という大海に及ぼしていたその影響が薄らいでいく様相が、8本の輻が背景に溶け込んでいくイメージに表象されている。これは、そうなるであろう、と釈尊が予言していた姿に他ならない。もう一つは、突然、世界に出現し、栄光に輝く新たな日の中で世界を満ち足らしめる、新たに昇った霊的太陽——弥勒・阿弥陀如来——バハオラの宗教制である。この宗教制から発する勢いを、最大名と、現代という私たちの時代のために彼が宣言した12の輝かしき基本原則が表象する。釈尊とバハオラの宗教制を象徴するものが蓮の花から生起するというのが、聖なる教師たるアヴァターラの原則である。釈尊はこのように説いた。

---

1. 同じ概念が『マッジマ・ニカーヤ』 I.137-40 と *Sanskrit dhammapada*, V.において断定的に説明されている。

2. 本書 41, 113-116 頁参照。

3. 320 頁参照。

P390

「バラモンよ、そんな蓮のように、私もこの世に生まれ、この世で育ったにもかかわらず、この世を克服し、この世に汚されずにその場にとどまっているのです。それが、仏陀である私です<sup>1)</sup>」

この言葉は聖なるどの教師にも当てはまる永遠の原則である。

「おお、諸々の栄光の中で最も栄光ある御方（ヤ・バハオル・アブハ）」という最大名の表象を旗印とするバハオラの輝かしき大業の驚くべき車輪は、1世紀がまだ経過していないにもかかわらず、いくつもの大洋を超えて前進し、東西南北の地域の住人を靈的に確かに征服した。バハイ信教はすでに大衆の心を動かしており、指導者や王たちを魅了する日も遠くない。釈尊がその予言で明言したように、バハオラの靈的統治に、世界は恭順を宣言せざるを得なくなる。

それは他でもない。弥勒・阿弥陀如来——栄光の大王——バハオラが「その起源においても、その進歩においても、その完成においても素晴らしい、意義をそなえて字句をそなえた法」を実際に説き、高次の生き方を「完全かつ純粋な姿で<sup>2)</sup>」この時代のために知らしめたからである。釈尊はこのことを予言していたのだ。そして、闇から光へと現れ出で、迷妄から真理へ、死から不滅に達しようとする者は、バハオラの教えを受け入れるようになるだろう。「……これは一切の功德にすぐれて完璧であるから、受け入れられれば、万人の利益になる……<sup>3)</sup>」

---

1. 本書 60 頁参照.

2. 『ディーガ・ニカーヤ』 IV,26,25.

3. 『アングッタラ・ニカーヤ』 III,653.

「太陽は昼にかがやき、月は夜に照し。武士は鎧を着てかがやき、  
バラモンは瞑想に専念してかがやく。しかし仏陀はつねに威力もて昼夜に輝く<sup>1)</sup>」

さて、*Anagatavamsa* に記されている釈尊の予言の最後の節に焦点を移そう。この節に関して、すでに示されている記録と、釈尊が自らの言葉で明確にした状況から論理的に導かれる唯一の解釈を、この節に当てはめなければならない。

「その場に人間は一人もいないだろう。一万界のデーヴァすべてが集まってダルマを聞き、その中の何千もがダルマに帰依するようになるだろう<sup>2)</sup>」

「(この劫の最後の段階では)その場に人間は一人もいないだろう」と「一万界のデーヴァすべてが集まり」に、私たちが生きる現代世界が象徴的に描かれている。古代の人々にすれば、科学の力でなんでも思いのままにできる私たちは、神々(デーヴァ)のように見えるだろう。しかも、地球のあらゆる果て(一万界)から空を飛び、選ばれたどの「場」にも集まることができるのだから。

---

1. 『ダンマパダ』 387.

2. *Anagatavamsa*.

P392

また、この二つの表現は「奇跡の双子」(バブ<sup>1)</sup>とバハオラ<sup>2)</sup>)が説法する宗教(ダルマ)を聴聞し、帰依するようになる、何千もの「デーヴァ」(私たち自身)は、悟りを開いたものたち(デーヴァ)のようにこの世への束縛から超脱し、「喜びをはむ<sup>3)</sup>」だけで生きようになる資格を得ることも示唆している。ここで、「その場に人間は一人もいないだろう」で意味されることの理解ができる。もっとも、化身である諸仏が出現し、ダルマ(宗教)を説き広めたのは、結局のところ、人類の幸福と進歩のためであることは普通に理解されるゆえ、聖なる教師のメッセージを聞く人類が文字通りに一人もいなければ、「最後の 500 年における最後の時、最後の瞬間」に教師こと仏陀が出現する意味はない。釈尊は須菩提の問いに答えるなかでこの点をさらに明確にしている。

「世尊よ、いかにも、善き法(ダルマ)が朽ち果てる未来の最後の 500 年における最後の時、最後の瞬間に、経典の言葉そのものが説かれている時に、真の考えを組み立てる者がいるでしょうか<sup>4)</sup>」と問うた須菩提に釈尊が答えた。

「須菩提よ、そのように言うてはならない。そうだ。善き法が朽ち果てる未来の最後の500年における最後の時、最後の瞬間に、経典の言葉そのものが説かれている時に、真の考えを組み立てる者がいるだろう」

その者たちが、バブとバハオラ「奇跡の双子」の弟子たちである。バハイと呼ばれる、現代の真の仏教徒である。彼らは教えに厳格に従い、神の顕示者——化身、仏陀——すべてが説き広めた真のダルマを認めて受け入れて従う。バハオラは次のように告げた。

- 
1. 観自在菩薩
  2. 弥勒・阿弥陀如来
  3. 『ダンマパダ』199, 200.「貪っている人々のあいだにあって、患い無く、大いに楽しく生きよう。貪っている人々のあいだにあって、むさぼらないで暮らそう。われわれは一物をも所有していない。大いに楽しく生きて行こう。光り輝く神々のように、喜びをはむ者となろう」.
  4. 『ヴァジュラッチェーディカー・スートラ』VI.

P393

「日の老いたる者〔神〕を知る事への門戸は、このように生きとし生けるものの面前から閉ざされているので、「彼の恩恵は万物を超越しており、我が恩恵は、万物を余すところなくおい包んでいる」という彼の御言葉通りに、無限なる恩恵の源泉は、あの輝かしい聖なる宝石達〔顕示者〕を霊界から人体という高貴な形で現わし、万人の前に明らかに示された。それによって彼等が不変の存在の神秘を世間に伝え、また神の不滅の真髓<sup>1</sup>の不可思議について語るようにと。これらの聖別された鏡達、これらの古来の栄光の曙達は、皆、宇宙の中心天体であり、その真髓であり、究極の目である神についての地上での解説者達である。彼らの知識や力は神に由来し、彼らの主権は神に源を発している。彼らの御顔の美は、神の御姿の反射にすぎないし、また彼らの啓示は神の不滅の栄光の御兆にすぎない。彼らは、神の知識の宝庫であり、天の英知の貯蔵庫である。彼らを通して、限りない恩恵は伝えられ、決して衰えることのない光が彼らによって啓示されるのである<sup>2</sup>」

以下を再び引用しよう。

「おお、サルマンよ。いにしえの存在者<sup>3</sup>の知識に通ずる扉は人間の面前で閉ざされており、未来永劫に閉ざされつづけるのである。いかなる人間の理解力をもってしても神の聖なる宮廷に接近することはできない。しかし、神はその慈悲のしるしとして、またその慈愛の証拠とし

て、人類に聖なる教導の昼の星を遣わし、神の一体性の象徴を顕わすのである。そして、これらの聖別された存在を知ることは、神御自身を知ることと同じであると神は定めたのである。彼らを認めるものは、神を認めるものである。彼らの呼びかけに応えるものは、神の声に応えるものである。彼らの啓示の真実を証言するものは、神そのものの真実を証言するものである。彼らに顔をそむけるものは、神に顔をそむけるものである。彼らを信じないものは、神を信じないものである。彼らはみなこの世と天界を結ぶ神の道であり、天と地の諸々の王国に生きるすべてのものに対する神の真理の旗印である。彼らは人類に遣わされた神の顕示者であり、神の真理の証拠であり、神の栄光のしるしである<sup>4)</sup>

- 
1. 本書 41 頁参照。「万物が一つの真髄から生じるように、……カッサパよ、万物が一つの真髄に由来し、一つの法しかないことを、あなたが完全に理解し、その理解に従って生きるとき、涅槃があなたに訪れるのだ」(*Sanskrit Dhammapada*, v.)
  2. Kitab-i-Iqan (Book of Certitude), pp64-5, Baha'u'llah. Bahá'í Publishing Trust, London, 1961. 『ケタベ・イガン』または『確信の書』バハオラ著.
  3. 「いにしへの存在者」とは絶対者であり、不可知で想像がつかない至高の神.
  4. 『落穂集』 21 段落.

P394

釈尊はバハイの際立った特徴を十分に分かっていた。「最後の 500 年における最後の時、最後の瞬間に」純然たるダルマを真摯に探求する者たちがバハオラの弟子たちのバハイを見つけることで探求の旅のゴールに到達できるよう、バハイに備わる属性を、釈尊は 25 世紀以上に須菩提を前にして実に完璧に描写した。

「須菩提よ、もう一度言おう。善き法が朽ち果てる未来の最後の 500 年における最後の時、最後の瞬間に、高潔な菩薩たちがいる。経典の言葉そのものが説かれている時に、真の考えを組み立てる、強固で善良で賢明な者たちだ。だが須菩提よ、彼ら高潔な菩薩たちが仕える仏は一人だけではない。彼らの功德はたった一人の仏の下で積まれるものではないのだ。それどころか須菩提よ、彼ら高潔な菩薩たちは何十万もの仏たちに仕えることで、功德が何十万もの仏たちの下で積まれていくようになる。そして経典の言葉そのものが説かれている時に、同じ一つの信仰を得るようになるのだ<sup>1)</sup>

釈尊によるこの発言を、バハオラの教えからすでに留意した点(337-338 頁)と、彼が禁ずる事項に照らして調査してみよう。

「おお、神の一体性を信ずる人々よ、注意せよ。神の大業の顕示者たちの間に差別をつけよ

うとしたり、または彼らの出現に伴いその啓示を宣言した諸々のしるしの間に区別をつけようとする誘惑にかられてはならない。これこそが神の一体性の真の意味である。汝ら、この真理を理解し、信ずるものならば。さらに、神のすべての顕示者の行いやそのなしたげた事業、否、そのみか、彼らに係わるあらゆることや、彼らが未来に顕わすであろうものはすべて神によって定められ、神の意志と目的の反映であることを確信せよ。彼らの人格、言葉、メッセージ、行為、ふるまいの間にわずかでも区別をつけようとするものは、実に、神を信じず、神のしるしを否認し、神の使者の大業を裏切るものである<sup>2]</sup>

---

1. 『ヴァジュラッチェーディカー・スートラ』 VI.

2. 『落穂集』 24 段落。アブドル・バハによる *The Promulgation of Universal Peace*, Vol. II も参照。「同様に、他の聖なる教師たちを考慮する際には、実体を調査することで、偏見を取り除かなければならない。たとえば、仏陀を取り上げよう……何であろうと、彼らが預言者であることに疑いはない。預言者の使命は教育ゆえに、これらの素晴らしい魂は人類を訓練し、教育した」。

P395

釈尊の予言をバハイが満たす。特に最後の条件である「そして経典の言葉そのものが説かれている時に、同じ一つの信仰を得るだろう」が当てはまる。釈尊は、極楽に住う条件を説いた阿弥陀如来の本願を引用し、これを裏付けている。

「世尊よ。もしも、わたくしが悟りを得た後に、かの仏国土以外の他の諸々の世界にいる求道者\*たちがわたくしの名を聞いてもすぐに、浄らかなる三昧を得ることができず、一刹那が経過する間に無量・無数・不可思議・無比・無際限の仏たちを見ることができないようであるなら、私は無上の悟りを得ることはありません<sup>1]</sup>

(ヴァジュラッチェーディカー・スートラとスカーヴァティーから) 引用した部分は、バハオラの信者たちが、過去の時代の神の預言者たち(諸仏)が説いた真理の有効性を認めるとともに、バハオラが今、説いている比類なきダルマを受け入れて従うことで、信仰において一つに結ばれることを意味している。

真のダルマの目的は、無明をなくし、分裂と「私と私のもの<sup>2]</sup>」病を根絶し、和合——人類の一体性——を確立することにある。これを可能にするのは「同じ一つの信仰」によるしかない。このことに、釈尊もバハオラも確証を与えている。

「あらゆる宗教の信奉者らと友好や親善の精神をもって交わり、シナイの山で「語りし者」が述べたことを宣言し、あらゆることにおいて公平な態度を持つことである。誠実で忠実なる者らは、地上のあらゆる民族や親族と喜びや輝きをもって交わるべきである。なぜなら、そのような態度が人々の間に和合と調和をもたらしたからである。それは今後も変わらな

い。

---

1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 8.43.

2. 『アングッタラ・ニカーヤ』 iii.359. 「そうであっても、真の印を持つ人々は、自分たちが到達した智慧を宣言する。彼らは得たものを語るが、「自分」については語らない」.

\*訳者注：「かの仏国土以外の他の諸々の世界にいる求道者」は「あらゆる宗教の信者」を意味する。

P396

そして和合と調和はさらに、世界の秩序の維持と国々の再生に役立つのである。親切と優しさの綱にしっかりとつかまり、敵意や憎しみを持たぬ者らは幸いである。この虐げられた者は、世界の人々にこう忠告する。世界の暗闇の中の二つの光であり、また人類向上のための二つ教育者である寛容と高潔を遵守せよ。そこへ到達した者は幸いであり、無思慮な者哀れなるかな<sup>1)</sup>

それでは、先に引用した、五つの消滅の最後5番目に当たる「舎利の消滅」についての釈尊の予言の最終部分を結論づけよう。この時代（最後の500年における最後の時、最後の瞬間）に「ダルマに帰依する」者たちが、釈尊が予言していた条件すべてが成就したことを探求者に知らせることが、読んでいくうちに明らかになる。

「そして、『見よ、デーヴァタたちよ、今日から一週間後、われらが十力の一人は完全な涅槃に達するだろう』と大声で叫ぶ。だが、『その先、われらは闇を迎えるだろう』と泣き嘆く。すると、舎利が熱を発し、跡形も残さず、仏の姿を焼き尽くす。舎利弗よ、これが舎利の消滅と呼ばれる」

「十力の一人は完全な涅槃に達する」は、釈尊が目的を完璧に果たすことを意味する。至高者ヴィシュヌの10人のアヴァターラ（顕示者）の一人であった釈尊の使命は、ヴィシュヌの10番目で最後のアヴァターラのカルキ（阿弥陀如来）がこの劫の最後期が到来する前の彼の時代の人類を指南することであった。加えて、「最後の時、最後の瞬間に」生きる人たちのために、劫の終焉者であるバハオラを見出して受け入れられるようにするためのしるしと条件を描写することであった。だが、到来を待ち望まれていた弥勒・阿弥陀如来がバハオラであることを見出せない人たちは、釈尊の教え（舎利のこと。197-199頁参照）が弟子たちに修行への動機づけを止め、最終的に消滅することで生じる「闇」の中で「泣き嘆く」ようになる。新たに昇った霊的太陽であるバハオラを見出し損ねることで、闇と絶望に包まれるからである。バハオラを見出して受け入れた者たち、バハイについてを、釈尊は次のように示唆する。

---

1. 『タラザトの書簡（第二の飾り）』，訳は「オンライン・バハイ図書館」から。

P397

「……なぜなら須菩提よ、特質があるとか、ないということも、高潔な菩薩は受け入れるべきではないからである。それゆえ、この隠されたことばを如来は説いてきた。『法の教えを知る者たちは、筏の喩えのように、法すら捨てなければならぬ。ましてや、法でないものに至っては尚更である』と<sup>1)</sup>」

ここに引用した部分が意味するのは、弥勒・阿弥陀如来（バハオラ）を見出した者たちは、累進的啓示の原則を熟知し理解しており、神の預言者たち——諸仏——は、人間のなかに顕現する、神のメッセージの媒介者にすぎないことを知っているということである。それゆえにバハイは、預言者個人に執着しない。様々な聖なる教師たちの間に優劣を生むようなことは考えず、利己的な自我を不意に振りかざし、他の仏陀たちの弟子を不快にさせることを慎む。そんなことをするなら、無用な偏見と争いを生むことになるだろう。それどころか、宗教(ダルマ)は時間的間隔において刷新するという原則を堅持することで、真理は一つ、到達点も同じ、絶えず前進を続ける人類が必要とするものを満たすために手段と方法だけが変わり、適用範囲が拡大されてきたと理解している。

---

1. 『ヴァジュラッチェーディカー・スートラ』VI.

P398

バハイにとって、宗教は排他的でも独占的なものでもない。儀式はなく、習俗、食事習慣とは関連がない。その目的は、瞑想と祈りを通じて心身を律することで、道徳的に目覚め、階級や肌の色に関わりなく、誰とでも調和ある関係を築き、人類という地球家族の一員になれるようにすることにある。

奇跡の双子を認めた者たちバハイの中心テーマは、人類の間に調和と和合を促進維持することにある。人間は有限の創造物であり、その性質上、相対的な現象のみに想像は限定され、絶対的真理の理解は永遠に叶わない。それゆえ、和合は正義より偉大であるとアブドル・バハが明言したのは、自明の理である<sup>1)</sup>。

そして、人間という脈絡のなかで「絶対的真理」に取り組むために何でも言えるなら、原初の原因たる宇宙の創造主が存在し、理性的存在のすべてがその子供であると主張することはできるだろう。人間がいかに進歩しようと、どんな生活形態になろうと、このことは不変の真理となる。これ

に基づいて、人間は和合を果たし、和合を通じて進歩しなければならない。釈尊は、絶対的真理というこの概念から生じる和合は、阿弥陀如来の未来の信者で極楽西方浄土に住むようになるバハイの属性であると予示している。

「そしてまた阿難よ、かの仏国に生れた、生まれようとしている、これから生まれる存在が何であろうと、涅槃に達するまで、絶対的真理の中に常住する。それはなぜか。虚偽の中に常住する、しないなどの見解をめぐり、分裂する余地がないからである<sup>2</sup>」

この堅固な基盤に立脚し、「一物をも所有していなくても、光り輝く神々のように、喜びをはむ者<sup>3</sup>」と釈尊が描写する者たちがバハイである。

「そしてまた阿難よ、かの仏国に生れた者すべてが法にまつわる逸話を博識を交えて語る。そしてかの仏国にいる者には、なんであれ、財産という観念がない……そしてまた阿難よ、極楽浄土の世界に生まれた者には、他者という観念も、自己という観念も、不平等という観念も、争いという観念も、論争という観念も、反対という観念もない。……」

---

1. 「真理」のためなら、和合を差し置き、誤っている可能性がある者たち全員と不和を起こしてもよい、などという考えは認められない。真理が相対的であれば、違った側面からの真理が明日に提示されるかもしれず、争ったことが無意味になる。一方、和合と調和があれば、破壊という無用な対価を払わずとも、同じ相対的真理を見出すことができる。

2. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 v.24. v.8.11 も参照。

3. 『ダンマパダ』 199, 200.

P399

「平静さ、慈悲深い思考、思いやりある思考、……有益な思考、……確固とした思考、偏りなき思考、乱れなき思考、……規律の実践に確固とした思考と超越した智慧に満ち溢れ、……英知の海に等しく、……仏の音楽に耳を一心に傾け、肉眼を捨て、天眼を身につける。慧眼に近づき、法眼に達したことで、仏眼を生み出し、それを示し、照らし、完全に発揮することによって、彼らは完全な智慧を獲得する。そして……思考を鎮静させたことで、万物の原因を認識する力を授かり、原因の説明に長け、法（あるいは物事の本当の姿）を説明する力を授かり、導くことに長け、……世俗の物語を顧みず、世俗を超越した物語から真の喜びを得る。万物の調査にも、目に見えないものの知覚にも長け、何事も憂慮せず、何事にも執着せず、頓着せず、痛みなく、何事にも固執せずに自在であり、不浄なところがなく、非難に値する振る舞いをせず、深遠な法則の理解に専心することにより、沈降せず、大乘への道を手に入れたことで、理解し難い仏の知識への敷居まで昇り至り、問いかけが無駄なことへの疑いの網をすべて断ち切り、他者の考えを知る

ことで慢心を免れる。……すべての者の善行と悪行に忍耐強く耐える姿は大地のごときであり、すべての罪穢れを浄化し拭い去る様子は水のごときであり、何事でも邪な慢心を燃やして焼却するのは火の王のごときであり、何事にも固執しない姿は風のごときであり、世俗の中にあっても穢れに染まらない姿は蓮のごときであり、雷鳴のように轟く声で法を説く姿は積乱雲のごときであり、……大隊を打ち負かす姿は雄牛のごときであり、想念を大きく制御する様子は巨象のごときであり、よく鍛錬した姿は高貴な馬のごときであり、恐れを持たずに自信と英雄精神に満ちる姿は獣の王、獅子のごときであり、すべての存在を保護する姿は樹の王、尼拘律樹（イチジク）のごときであり、いかなる中傷者にも動じない姿は山の王、須弥山のごときであり、限りなき愛ゆえに大空のごときであり、法の指示に従った恩恵により優位を得、あらゆる功德を蓄えた姿は偉大なるブラフマンのごときであり、

P400

蓄積したものの中に住まないのは鳥のごときであり、中傷者すべてを四散する姿は鳥の王、迦楼羅のごときであり、困難な物事の達成を厭わないのは優曇華のごときであり、感覚に歪みや揺動がないために静穏な佇まいは象のごときであり、忍耐で醸成された甘美な風味に満ちながら決断力に富み、他者の幸福を羨望しないゆえに嫉妬せず、倦むことなく法を論議し法の探究に勤しむゆえに賢明であり……大きな法螺貝を吹くように法を説き、法の大きな旗印を掲げ、法の松明に火を灯し、智慧を探し求め、愚かでなく、欠点がなく、激情を起こさず、浄らかであり、洗練され、貪欲でなく、分配を好み、寛大で物惜しみをせず、贈り物を配るのを好み、伝授や食べ物の出し惜しみをせず、執着せず、恐れず、欲がなく、賢く、忍耐強く、精力的であり、はにかみ、秩序を保ち、恐れを知らず、知識に満ち、幸福で、共に生きることを喜び、世話するのを好み、世を啓発し、悲しみから解放され、穢れることがなく、まばたきを止め、……理性が強く、祈りに強く、性格に歪みも強情さもなく、……高慢の棘から解放され、錯覚、憎しみ、激情から解放され、浄らかであって浄らかなものに献身し、……世情に通じながらも、浄められた知識で高められ、活力に満ちた思考、英雄的気質、堅忍不拔さ、無私の精神を授けられた佛子として、誤ちや汚点になることはせず、記憶力に恵まれ、曇りなき知識に基づいたことを行う。そして阿難よ、簡潔に言えば、かくなる者たちが無量寿仏の国にいる者たちである。だがもし如来が、その寿命、百千万億那由佉劫の間に彼らのことを完全に述べるとしても、彼ら善人の徳を語り終えることはないだろう……<sup>1]</sup>

現代の真の仏教徒であるバハイが身につけることを求められている属性を記した部分を長々と引用した目的は二つある。まず、弥勒・阿弥陀如来と彼の極楽西方浄土の探求者は、人類が到達を目指して昇ることができる高みの壮大さを目の当たりにできることを伝えるためである。次に、弥勒・阿弥陀如来を認識し、如来の教えに従って生きる人生を選び、完成への終わりなき道で潜在性を十分に発揮できたとしても、自己満足すべきではないことに留意すべきだからである。

---

1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 v.38. また、本書(264-65, 332-335, 378-9)を参照すれば、上記した釈尊による描写が、バブによる自らの弟子たち「生ける文字たち」へと、バハオラによる自らの弟子たちへの言葉に酷似していることが確認できる。

P401

釈尊は、阿弥陀如来とその極楽西方浄土に到達する者たちの素晴らしさを簡潔に描写しながら、新たな秩序はその本質も姿も霊的平等主義になることを明言している。

「また、かの世界では、神々、人間という一般的で不完全な用語で語られるとき以外、神々と人間の区別がない。また阿難よ、卑しく無能な者がかの強大な王の面前で、輝きも、活気も、素晴らしさも、自信も光輝も失うように、デーヴァの王のシャクラ（帝釈天）も、他化自在天の神々の面前まで来るなら、輝きも、活気も、素晴らしさも失う。すなわち、自らの庭園、宮殿、衣服、装飾品、仏国土、自らの完全さも、神通力や優勢も、法の理解も法の完全享受も失うのである。また阿難よ、他化自在天の神々がその世界にいるように、人間も極楽浄土の世界にいると考えなければならない<sup>2]</sup>

バハオラの世界秩序では、行政機構が完璧に機能することで、どんなに高名であろうと、個人による指導権篡奪が防止されるだけでなく、聖職者や階級が必要とされていない。この点についても、釈尊は予告した。

「また阿難よ、その仏国においては、火や太陽、月、惑星、星座、恒星の諸々も、漆黒の闇も、その名称が言及されることはない。昼と夜についてすら、如来の講話においてを除いては言及されない。また、僧院所有の不動産について考えることもない<sup>3]</sup>

上の引用文の最後では、僧院も修道制も不在であることが述べられている。したがって、新たなサンガの形態は古来とは違うものになる。大きく変化した社会と、より進化した人間心理が求める要件に応じるための必然的成り行きである。

バハオラが信者に設けた重要な目標が、人類の一体性の確立である。バハイと自称する人々全員が努力を惜しまずに彼のメッセージを地上のすべての国民、民族に広めることでしか果たせないと、彼は述べている。

---

1." Paranirmitavasa-vartin"(他化自在天) とは不朽を意味する。すなわち滅亡しない。

2. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 V2. (240 頁も参照). 極楽にいるとも、ダルマ衰退の最後の期間にいるとも語

られる「存在」は人間であると最終行で明言していることにも留意されたい。「人間も極楽浄土の世界にいると考えなければならぬ」。

3. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 V.22.

P402

「そして光明の一つ一つから、金色の身体に、偉大な人々が有する三十二の相を備えた三千六百千億の仏たちが出立し、東方の無量・無数の世界にいる者たちに法を教える。南・西・北・東北・東南・西南・西北・上・下の無量・無数の世界にも同じように出立し、全世界の者たちに法を教える<sup>1)</sup>」

生命を与えるバハオラの信教を伝え広めることは、それが可能なバハイ全員の義務である。バハイはそのために、故国を離れ、果たした世俗的な功績を置き去りにし、遠隔の地にパイオニアとして赴くと、背景も言語<sup>2)</sup>も違う現地の民族、国民の中に定住し、人々を成長させる新たな庭園の芳香を拡散し続けた。釈尊の予言では多くこそ語られていないが、その庭園は完全性と世界中に遍在する点でこれまでの庭園すべてをしのぐ。バハイも特定の職業で成功を果たすかもしれない。だが人類が怒り狂えば、自分自身と子孫たち、そして同胞にも、職業的成功は意義を失うだろう。バハイはそのことを十分に承知している。

「神はあらゆるものに対し、神の大業を教えひろめる義務を定めた。この義務の遂行のために立ち上がるものは、神の教えを宣布する前につきのことをしなければならない。つまり、感受性をそなえた人の心をひくためには、まず、賞賛に値する高潔な特性をもって自らを飾る装飾としなければならない。これなくしては、聞き手に影響をおよぼすことは決して望めない<sup>3)</sup>」

「わが大業を教えひろめるために故郷をあとにしたものは、忠実なる精霊の威力により力づけられよう。わが選ばれし天使の一団が全能者、全賢者なる神の命令にしたがい彼らに付き添って行くであろう。全能者に奉仕する栄誉に達したものを待つ祝福は何と偉大であろうか。わが命にかけて誓う。いかに偉大なる行為もこの奉仕には匹敵しない。全能者におわし、威力に満ち給う神によって命ぜられた行為以外、まさにこの奉仕に比較し得るものは何もない。実に、この奉仕はあらゆる善行の王子であり、あらゆる立派な行為をかざる装飾である。至上なる啓示の発布者におわす日の老いたる者は、このように定め給う。

---

1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 V.16.

2. 本書 122 頁を参照.

3. 『落穂集』 158 段落.

わが大業を教えひろめるために立ち上るものは、世俗の事物をすべて超脱し、常にわが信教の勝利を至上の目標とみなさなければならない。まことに、これは庇護された書簡に定められたことである。そして、自らの主の大業のために故郷を離れることを決心するとき、旅の最上のそなえとして神に全信頼を置き、美德の衣で身をかざらなければならない。全能者にして、すべてに讃美される神はこのように定め給う。

神の愛に燃え、あらゆる創造物を放棄するなら、そのものの口をもれる言葉は聞き手に点火するであろう。まことに、汝の主は全知者にして、すべてに精通し給う。わが声を聞き、わが呼び声に応える者は幸いなり。まことに、それはわれに接近することを得るものである<sup>1)</sup>

主なる医師が差し出す愛と和合の聖なる教えが、物質的取得に心を奪われ切っている人類の病状進行を食い止め、精神的バランスを回復させることができる。バハオラは自らが顕した世界秩序について宣布する際には、強制も脅しもしてはならないと信者に禁じている。

「剣の支配によってわが大業を押し進めることをわれは無効としたことを知れ。そしてわれは、人の言葉より生まれる威力を剣の代わりとした。これこそはわが恩寵を通じて示された不変の命令である<sup>2)</sup>

バハオラは、自らの指示に、言葉と行いで応えようと努力する者たちを称賛する。

「自らの書き記した文書をもって神の大業をその攻撃者から守ろうと立ち上がるものは、その貢献がいかに微細なものだとしても、天上の軍勢もうらやむほどの栄誉をきたる世において授けられよう。いかなるペンもその崇高な地位を描写することはできず、いかなる舌もその光輝を語ることはできない<sup>3)</sup>

「如来がなすべきことを私は行った」と述べ、バハオラと急成長している彼の王国、極楽浄土、についてを余さずに描写したことを阿逸多に保証したように、釈尊は未済のものは残していないように思われる。そして、現代という私たちの時代においてのみ理解できる方法で、ハイファに建立されたバブとアブドル・バハの廟と、アッカに所在するバハオラの廟に赴く2種類の人間の様相を予見し、描写した。

---

1. 『落穂集』 157 段落.

2. Ibid.,139 段落.

3. ibid.,154 段落.

P404

それらは、バハイである巡礼者と、バハイでない訪問者や旅行者が該当する。そのいずれであろうと、聖廟への来訪者すべてが、(バブの廟はカーメル山の山腹にあるため) 上に昇り、廟内に足を踏み入れたなら、敬虔な面持ちで歩みを進めなければならない、と釈尊は最初に述べる。

世尊が「阿逸多よ、宮中で百千由旬に広がる宮殿に昇っていった者たちが、敬虔な面持ちで歩き回る姿がもう一度、見えるだろうか」と問うと、「はい、見えます、世尊よ」と阿逸多が答えた<sup>1</sup>。

そして、至聖の御方たちの廟内に入堂する意義を踏まえながら、来訪者たちの幸運について釈尊は再び想いを巡らす。

世尊が「阿逸多よ、他化自在天と呼ばれる神々と、極楽浄土の世界にいる人々の間に違いがあるだろうか」と問うと、「世尊よ、違いは一つも認められません。極楽浄土の世界にいる人々も素晴らしい驚くべき力を授けられています」と阿逸多が答えた<sup>2</sup>。

だが、極楽浄土での経験を疑う者たちと、確信に満ちた者たちとは確実に差異がある。前者については次のように記されている。

世尊が「阿逸多よ、かの極楽浄土の素晴らしき蓮華の萼(がく<sup>3</sup>)内に住む者たちがもう一度、見えるだろうか」と問うと、阿逸多が答えた。「忉利天や夜摩天と呼ばれる神々が、五十や百、あるいは五百由旬に広がる宮殿に入ると、遊んだり、はしゃいだり、歩き回っています。世尊よ、かの極楽浄土の素晴らしき蓮華の萼内に住む者たちであることがわかります<sup>4</sup>」

---

1. 『大スカーヴァティー・ビューハ』 v.40——「人間には登ることが困難な天空の都市、アラカナンダ」(252 頁脚注 3)であることから、(登る動作が必要な)小山であり、また「魅力的な庭園、……がある天空の上(宮殿)」(251 頁)である一方、「どこまでも平らで、手のひらのように美しい」(305 頁)土地が極楽であることが分かる。このように地形が矛盾していても、バハオラの聖廟が所在するアッカは平原にあり、バブとアブドル・バハの廟が中腹に建立されたカルメル山はハイファに所在する。この二つの地域、アッカーハイファを世界センターに指定するバハイ教以外に、主要な聖廟が高所と平原に所在すると釈尊が述べた条件を他の具体的詳細を含めて満たす宗教はない。

2. ibid.,v.40.

3. 萼(がく)とは、花の保護のために外側から覆い包む部分であり、葉に似た、通常は緑色のセバル(がく片)と呼ばれる一連の部分から形成される。

4. 『大スカーヴァティー・ビューハ』 v.40.

バハイについては次のように記されている。

「世尊よ、蓮華の中で脚を組んで座した姿勢で不思議にも生まれつつある者たちも見えます。世尊よ、萼内に住む者たちがいる一方で、蓮華の中で脚を組んで座した姿勢で不思議にも生まれようとしている者たちが見えるのは、どんな原因が、どんな理由があるのでしょうか<sup>1)</sup>」

萼内に住むのは、疑心のために真のダルマの外側にいる者たちである。自分たちが信じる古来の宗教で述べられてきた預言に無関心であるため、現代の要求に唯一応えられるバハオラの宗教制を拒絶し、蓮の花の中心部から萼という周縁部に自分たちを押し出している。

世尊が答えられた。「阿逸多よ、別の仏国<sup>2)</sup>に住むあの菩薩たちは極楽浄土に生まれることに疑いを抱いている。だが、功德を積んでいると考えて、萼内を住まいにしている<sup>3)</sup>」

一方、確信を持つバハイは人生の本質的なものごとに関わっている。そして、あの法輪の中心にしっかりと根を下ろした生き方をしている。

「それどころか、信心に満ちることで疑いから開放され、極楽浄土の世界に生まれんがために功德を積み、悟りを得た祝福された仏たちを思い描き、信じ、信頼する者たちは、蓮華の中で脚を組んで座した姿勢で不思議にも生まれつつあるのだ」

すべての仏陀が言葉にしていた預言が成就したことを確信し、バハオラの宗教制を認めるに至ったのが彼らである。バハオラが信者に語るように、信心を持つことだけが、彼の極楽浄土に入る資格となる。理性に立脚し、行いで実証される、しかし、謙虚さと思いやりを常に伴う信心である。

---

1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 v.41. 「蓮華」は宗教(ダルマ)を、「蓮華の中で脚を組んで座した姿で」は仏陀の坐し方にちなみ、ダルマにしっかりと根を下ろした信心があることを象徴する。

2. 「別の仏国土」は他の宗教を意味する。

3. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 v.41.

「道を求めるものは、罪深い人々をゆるし、彼らの地位の低さを決して軽蔑してはならない。なぜならば、誰も自分の最期を知るものはいないからである。罪深いものが、臨終の際(きわ)に信仰の本質に到達し、不滅の盃を飲み干して天上の集合の方へと舞い上がっていったという例が、何としばしばあったことか。また、実に信心深かったものが、靈魂の昇天に際

し、あまりもの変わりように地獄の火中に落ちてしまうということも何と度々あったことが<sup>1)</sup>

——どんな人であれ、深い信心を持ち得るという主旨を、釈尊も語っている。

「阿逸多よ、他の仏国に住む高潔な菩薩たちは、悟りを完全に開かれた聖なる阿弥陀如来を仰ぐために、自分たちの思考を高めている。彼らは悟りを開いた仏を疑いをもたずに信じている。そして積まれたその功德により、はるかな過去に生まれた他の者たちのように脚を組んで座した姿勢で不思議にも生まれつつあるのだ<sup>2)</sup>

換言すれば、自分が信じる宗教で預言されていたことを正しく理解し、その聖なる教師が一切智であると完全に確信することで視界が開き、その予言が阿弥陀如来、すなわちバハオラにおいて成就したことを理解する。そして、自分たち以前に同じ心の軌跡をたどったかもしれない人々と同じ信仰を抱くようになる。信仰は年齢に左右されない。若きも老いも信仰の前では立場は等しい。「若くして聖人である彼は真実において聖人である」

上記したように、巡礼者も来訪者も聖廟に「昇」ってからは「敬虔な面持ちで」辺りを歩く。一方、以下に紹介する釈尊の予言には、巡礼者として訪れるバハイが阿弥陀如来の極楽浄土で行うことが正確に描写されている。最初が、元来は別の宗教の信者であったバハイが地球の四隅から訪れる様子である。

「ガンジス河の砂の数に等しい東方の仏の国々（他宗教の比喩）から、無量寿仏を礼拝するためにすべての菩薩が来訪し、……同様に、南方、西方、北方のたくさんの仏の国々から、無量寿仏を礼拝するために菩薩たちと共に来訪する<sup>3)</sup>

——次に、献花する花を携え、文字通り、かつ比喩的に「祈り」を捧げるために来訪する。

---

1. 『落穂集』 125 段落。

2. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 v.41, 「また以前は怠りなまけていた人でも、のちに怠りなまけることが無いなら、その人はこの世の中を照らす。——あたかも雲を離れた月のように」 『ダンマパダ』 172.

3. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 v.31.(1,3)

P407

「また、色とりどりで甘美な香りがする喜ばしき花束をたくさん携えた彼らは、人の最高の指導者であり、神々と人々から崇拜される無量寿仏の上に花束を振りまく<sup>1)</sup>

——そして祈りの精神に満ちた佇まいで、バハオラ——阿弥陀如来（＝無量寿仏）の栄光を受け取

るために心の眼を開いてもらえたことに感謝と賛美の念を表しながら、聖廟の周りを歩く。

「アマタ・プラバ（阿弥陀如来）の両足を礼拝し、彼の周りを恭しく歩いていた彼ら多くの菩薩たちは、『おお、仏の国が見事に輝いている！』と感嘆の声を発する<sup>2)</sup>」

——菩薩たちは、至聖3人の永眠の場である、アッカ平原バージのバハオラ（弥勒・阿弥陀如来）の、ハイファのカルメル山腹に建立されたバブ（観自在菩薩）とアブドル・バハ（勢至菩薩）の墓前で謹んで平伏する。各人の棺は、信者からの愛と敬意が込められた新鮮な献花で絶えず覆い尽くされている。

「そして、歓喜の思い、比類なき喜びで、再び手にした花で仏を覆い、われらの国もまたこのようになりますように、と主の御前で本願を述べる。……花束として投げかけられたものは、百由旬にわたって広がる傘蓋の形をなした。かの美しき国は輝き、装飾がよく施されている。花々は仏たちの全身を覆う<sup>3)</sup>」

——彼を讃え、喜び溢れる菩薩たちはかく語る。

「最上の人の名前を聞いた衆生は実により利益を得た」

「この仏の国に来たわれら皆がより利益を得た。この夢のような Maitra(安息の地)<sup>4)</sup>を見るがいい。なんと素晴らしい。百千劫の間に師が作り整えたのだ」

「見よ、最高の徳を集め蓄えた仏が、菩薩たちにとり囲まれて輝いている。その光輝（バハオラ）は無量、光明も無量。寿命も無量、会衆も無量である<sup>5)</sup>」

---

1. 『大スカーヴァティー・ヴィユーハ』 31(2)

2. *ibid.*, 31(5)

3. *ibid.*, 31(6,7)

4. Maitra(安息地)が経典で用いられており、Maitrya を阿弥陀如来と彼の極楽浄土と同一視する目的が明白。

5. 『大スカーヴァティー・ヴィユーハ』 31(8,9,10)

「奇跡の双子」「3人の聖者」そして、彼らが住まう極楽浄土に関して驚くほどに精密な釈尊の予言に当てはまる場所の特定のために、古来の宗教の教典の中でいかに遠くまで探究の旅をしても、バハイの聖廟に最終的に到達しなければ、徒労に終わるだろう。彼らの聖廟だけが、釈尊の説明に正確に当てはまる。しかし、バハオラ、バブ、アブドル・バハの聖廟に到着したとしても、彼ら3人の聖者の真理を確信していなければ、極楽浄土まで来たことも無益になるだろう。疑いの心は真理を見えなくしてしまうからである。

「おお、阿逸多よ、この卓越した、計り知れない、朽ちなき、無限の智慧を見るがいい。すなわち彼らは、五百年の間、諸仏を見ることも、菩薩たちを見ることも、法を聞くことも、法について(他者と)話すこともが剥奪されている。それゆえ、功德を積むことができず、功德を一つ一つ積んで悟りを得ることができない。疑いに染まった考えを形成しているからである<sup>1</sup>。

——見事なまでに精緻な予言でも意味はないと、まだ考えている人々について、釈尊は次のように述べる——

「それゆえ、おお、阿逸多よ、疑いに陥った後に功德を積み、しかしそれでも、仏の知識を疑うあの菩薩たちについてである……彼らは、諸仏を見ることも、法を聞くことも、菩薩たちを見ることも、法について語り、解明することも、(新たな)功德を(集める)ことも、法の実践も、五百年の間、剥奪されている。さらには、その場にいることを喜ばず、満足を得ることもない。だが互いの排除を願うゆえに、足を踏み外して他から遅れる。彼らの退場が上でか、下でか、向こう側でなされたかは分からない……おお、阿逸多よ、理解しなさい。その五百年の間、百千万億那由他の仏陀への礼拝がなされるかもしれない。また、無限量、無数、無量の功德が積まれるかもしれない。だが、そのすべてを、彼らは疑いという誤ちにより、台無しにする。おお、阿逸多よ、そのような菩薩たちが抱く疑いの念からもたらされる損害がいかに大きいかを理解しなさい」

---

1.「禁欲でも、……多くの不滅の苦行をこの世で遵守することでもない。疑いを超えていない人間を浄化するのは、これらではない」 *Amagandha Sutta*, 7.11(*Culla Vaga*,2)

P409

——手遅れになる前に、すべての善の源たる——阿弥陀如来——バハオラを探し求め、見出すよう、釈尊は私たちを強く促している——

「おお、阿逸多よ、それゆえ今、疑いの心がない菩薩たちが、生きとし生けるものを幸福にする力を得るために悟りに向かって速やかに考えを高めた後は、その積んだ功德により、完全に悟りを開かれた聖なる阿弥陀如来が住まわれる極楽世界に必ず生まれることになるだろう<sup>1</sup>」

——謙虚さと理性によるか、自分で招いた大きな試練により、阿弥陀如来の栄光に輝く実体を最終的に受け入れて救済の地に入った人々には、輝かしい未来が運命づけられている。

「おお、カマールよ。必滅の人間が、この日、神の恩寵深きめぐみにより達し得る極みは、人類の目に未だ明らかにされていない。存在の世界は、過去においても、また現在においても、これについて理解する能力を持たなかった。しかし、この大いなるめぐみに秘められた

潜在性が、神の命令により、人間に明らかにされる日が近づきつつある<sup>2]</sup>

——人間の潜在性は、疑念と偏見の枷から解放されるや、その才能と資源を共同で資することで、夢にも見たことがない高みまで発揮される。釈尊も予見していた高みを、阿弥陀如来も述べた。

「おお世尊よ、私の仏国に生まれる者たちが、私が菩提を得た後に、聞きたいと願うのと同時に説法を聞くことができないようであるなら、私は無上の悟りを得ることはありません<sup>3]</sup>

——送受信がほぼ同時に起こる現代の通信が、上記で完璧に予言されている。予言されたときは現在であり、バハオラ——阿弥陀如来——を受け入れるか否かを決め、その結果を受け入れるのは、私たちであることを改めて証明している。

「もし、私が菩提の玉座に近づいたとき、私の名が速やかに、広くて果てしない十方の仏国に届かないようであるならば、私は力を授けられた世尊にはなりません<sup>4]</sup>

---

1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 41.

2. 『落穂集』 109 段落.

3. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 8.44. 「菩提を得た後は」は成道を正式に宣言した後を意味する。「仏国」は宗教制を通常は意味する.

4. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 9.3.

P410

——教典の内容が瞬時に入手できるのは、通信衛星による情報と、

「世尊よ、私が菩提を得た後に、磨き上げられた円鏡に円顔が映るように、四方の無量・無数・不可思議・無比・無限量の仏国に光が放散するほどに私の仏国が眩く輝くことがないならば、私は無上の悟りを得ることはありません<sup>1]</sup>

——地球のあらゆる果てまで整備された速やかな輸送システムによる。

「世尊よ、私の仏国に生まれた者たちが、少なくともごく短時間の間に思いをめぐらすだけで、……国々をまたぐことができるほどの……不可思議な力と自制心を持ち合わせることでしょう。そうでなければ、私は無上の悟りを得ることはありません<sup>2]</sup>

——さらに、極楽浄土への往復は、実に快適な空路でなされることも予言されている。

「世尊よ、私が菩提を得た後に、私の仏国に生まれる菩薩たちのすべてが、……一食の朝餉の後、仏の恩寵により、あらゆる快適さをもたらすもので他の仏国に出立し、幾百もの仏たちを礼拝できるようになるでしょう。そうでなければ、私は無上の悟りを得ることはありません

せん<sup>3</sup>」 「幾千万もの仏たちを礼拝し、不可思議な力によって幾多の国々へと出立し、善逝たちの前で礼拝を行った後に、篤い信心で極楽浄土に向かうでしょう<sup>3</sup>」

—このように素晴らしい技術が開発されたのは、バハオラの創造力に起因する。先に確認し(345-6 頁)、釈尊が予見していた輝く光コードも例に洩れない。

「ガンジス河の砂の数ほどもあるいかなる世界があろうと、それ以外にも数限りない国々があろうと、そのすべてに私は光明を送るだろう。その力を私は手にしているからには<sup>4</sup>」

—人類が到達する運命にある、気が遠くなるような高みについて、バハオラ自らが威厳ある語調で明らかにしている。

---

1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 8.29.

2. *ibid.*,8.5.

3. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 8.21.と 3.21.

4. *ibid.*,4.7.ここでは、仏国でなく「国々」と言及されていることに留意.

P411

「おお、汝ら、この真理を理解するものならば。この世に見られる驚くべき事業のすべては、彼の最も崇高にして、至上なる意志の働きと、その確固不変たるすばらしい目的とを通じて現わされたものである。御自身の属性の一つを人類に告げるために御口から「創作者」という一言が啓示されることにより、世々代々を通じて人間の手が創作し得る様々な技巧を生みだすに十分な威力が放出されるのである。まことに、これは確かな真理である。この輝ける言葉が語られるや否や、この言葉にそなわった生気みなぎるエネルギーはすべての創造物の中で躍動を始める。そして、それによりあらゆる技巧が編みだされ、完成させるための方法や手段が誕生するのである。今日、汝らが目のあたりにしている多くの驚くべき成果はすべて、この名称の啓示の直接的結果なのである。きたるべき将来、まことに汝らは未だかつて聞いたこともないことを目撃するであろう。神の書にはこのように定められており、洞察力にすぐれたもの以外は、誰もこのことを理解し得ないのである<sup>1</sup>」

神こそが、人間の意識を解き放った御方である。神の教えだけが、人類がその潜在性を余すところなく発揮する高みに昇ることを可能にする。真の和合に達した人類が、そのための心構えをひとつたび決めるなら、じつに素晴らしいことではないだろうか。タイム・トラベル、反重力装置、抗病性ピル、寿命の大幅な延伸、先天性欠損のない誕生、テレパシーも夢ではない（これらが実現される微かな最初の兆しはすでに現れており、釈尊はその実現を明確に予言している）。

「世尊よ、私の仏国に生まれる者たちが、百千万億那由他の仏国に属する者たちの行いと考えを少なくとも知ることができるほどに、他者の考えを知ること長けていないようであるなら、私は無上の悟りを得ることはありません<sup>2)</sup>」

——これらだけでなくさらに多くのことが現実化されていくに違いない。人間の能力と限度内であれば、「一切智」自体、否定されない、とバハオラは約束している。

---

1. 『落穂集』 74 段落.

2. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 8.9.

P412

「同様に、わが属性の一つである「全知者」を表わす言葉がわが口より発せられるや否や、すべての創造物は、その能力と限界に応じて、科学の知識を解き明かす最もすばらしい力を付与される。この知識を実現させる能力も、時の経過と共に、全知なる全能者の指示により付与されよう。他にも、あらゆる名称が啓示される時、それに伴って同じような聖なる力が放出されるのである。このことを確信せよ。神の御口をもれるあらゆる文字は、まことに母なる文字である。そして、神聖なる啓示の源泉である者が語るあらゆる言葉は、母なる言葉であり、彼の書は母なる書である。この真理を理解するものは幸いなり<sup>1)</sup>」

——釈尊はこのことを阿弥陀如来の言葉を通して確証している。

「世尊よ、私が菩提を得た後に私の仏国に生まれる者たちすべてが、一切智をともなう法話を話し得ないようであるなら、私は無上の悟りを得ることはありません<sup>2)</sup>」

**だが、一切智を導く鍵は、阿弥陀如来の法の中に、すなわちバハオラの教えの中にあることも、釈尊は告げている。**

弥勒・阿弥陀如来と彼のダルマに関する釈尊の予言は非常に数多い。しかも、その的確さゆえに、バハオラという人物と彼の強大な宗教制において予言がすでに成就されたことは否定できない。完全な一つの真理と、目の前に差し出された証拠に、両眼を閉じる人々はもちろんいるだろう。彼らは受け入れる代わりに、全体像から部分的要素を分離し、「事実」を探し求める。そして「究極」を見出すために断片化させた要素を徹底的に調査するが、徒労に終わる。「究極」は「何もない」ことであることが判明するからである。そして見出された「何もないこと」を活用できないがために、探求は常に無駄骨に終わるしかない。それでも、地平線全体を目に収めさえすれば、日の出を目の当たりにすることができる。もし、釈尊の予言のいくつかを個別のものとして解釈を試みるなら、古代の人々の前に現れたような、想像力に翼を与えた、筋が通らないものとして現れるだろう。

---

1. 『落穂集』 74 段落.

2. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 8.23.

P413

だが、ヒンズー教典と仏教の経典だけでなく、バハオラとバブ、アブドル・バハの人生の詳細、バハイの行政秩序、世界中に広がる信者の共同体、今日の世界の状況とその技術的産物に照らし合わせて全体像を見つめるなら、断片的で現実感に乏しかった古代の予言の謎は完全明快に解き明かされる。

釈尊は、バハオラが阿弥陀如来であることに反論しようとする人々のために、彼が宣言した通りであることを裏付ける実によく多くの予言<sup>1</sup>を残した。仏典とその中に記された予言に照らし、バハオラとその栄光に輝く宗教制を、私たちのために再発見された比類なき法、ダルマとして受け入れるか、仏典を拒むことで一切を否定するかを選択肢がここに提示されている。だが、後者の行動を取れる人はいない。というのも、本書で想定されている主たる読者層は、釈尊の教えを信じる人たちだからである。釈尊が阿難と韋提希に託した、阿弥陀如来と彼の極楽浄土を発見する必要がある

「未来の人々」への予言の確実な伝承は果たされている。釈尊の念頭に置かれていた未来の人々とは釈尊の言葉をよすがにする人々であり、その未来とは「今」である。それでもまだ、心の目を開けることを拒む人たちはいる。疑いと混迷の暗雲は一掃され、栄光の太陽が出現している以上、遺憾というより他にない。

聖なる預言者すべてが劫の終焉者ことバハオラの偉大さと栄光を賞賛した。たとえば、釈尊は以下のように述べている。

「おお、阿難よ、このようにかの世界が極楽浄土と簡潔に呼ばれているが、それだけでは十分ではない。極楽浄土に存在する幸福の源を賛美しているうちに、一劫という時間が終焉しても、最後まで言い尽くすことはできないだろう<sup>2</sup>」

他すべての宗教の教典も、バハオラを賛美する言葉に満ちている。アヴァターラ（化身）以外の誰が、化身の偉大さを賛美できるのだろう。確かなこととして、化身は一介の凡夫ではない。凡夫の小さな器では、化身という大きな器の把握はできない。

---

1. 大乘仏教の『スカーヴァティー・ヴィューハ』と『アミターユル・ディアーナ』に、上座部仏教のパーリ仏典の『マハースダッサナ経』（ディーガ・ニカーヤ）、『マハースピナ・ジャータカ』、*Anagatavamsa* に記されている予言のすべてが、バブ（観自在菩薩）とバハオラ（弥勒・阿弥陀如来）の到来によつて的中している。

2. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 24.

釈迦が阿弥陀如来の言葉を通して語るように、「仏だけが仏の徳を知る。神々、ナーガ、阿修羅には分からない<sup>1)</sup>」

疑心と物欲にまみれた人々は、世界を啓発する至高の光を目に収めることに概して関心がない。また、見ることもできないため、盲目の生ける屍と違わない。だが、熱心かつ理性的に真理を探求していた真摯な探求者は、釈尊による驚くべき予言の数々が、バブ、バハオラ、アブドル・バハの人となりにおいて細かな部分までの中していたことに気づく。強情さで心の眼が閉ざされ、真理が見えなくならないようにと、釈尊は忠告している。

「私の説法を聞くのは、善行を積んでいない者ではなく、勇壮で完璧な者たちであり、彼らはこの説法を聞くだろう。悟りを開いて光を与える世尊を目にし、説法を恭しく聞く者たちは、無上の喜びを得るだろう。卑しい怠惰な者らは仏の法に何らの喜びも見出すことができない。諸々の仏国で礼拝をしてきた者らは三界の主にならざることを学ぶ<sup>2)</sup>」

——釈尊の言葉に、三界の主、バハオラが同意する。

「おお儂き影よ！ 疑いの低き段階を過ぎて、確信の崇高なる丘に登れ。真理の眼を開け。さらば汝明らけき美を見、かく叫ばん。『すべての創造者中最も卓越せる主の崇められんことを』」

「おお欲望の子よ！ これに耳を傾けよ。朽つべき眼は決して永遠の美を認めないであろう。また生なき心は萎んだ花しか楽しまないであろう。何故なら似たるものは似たるものを求め、同類との交わりを好むが故に」

「おお塵埃の子よ！ 汝の眼を閉じよ。さらば汝わが美を見ん。汝の耳をふさげよ。さらば汝わが声の快き音調を聞かん。汝自身からすべての知識をなくせ。さらば汝わが叡知の分け前を受けん。富より汝自身を浄めよ。さらば汝わが永遠の財宝の海より永久の分け前を得ん。汝の眼を閉じよとは、わが美以外のすべてに対してである。汝の耳をふさげよとは、わが言葉以外のすべてに対してである。汝自身からすべての知識をなくせとは、わが叡知以外のすべてに対してである。かくて汝清き眼と、純粹なる心と、注意深き耳とをもちて、わが神聖なる宮廷に入ることを得ん<sup>3)</sup>」

1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 44.8.

2. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』 44(1.3). 『ダンマパダ』 174 も参照。「この世の中は暗黒である。ここではっきりと(ことわりを)見分ける人は少ない。……」

3. 『かくされた言葉』 ペルシャ編 9-11.

P415

「おお二つの視覚を持つ者よ！ 一方の目を閉じ他方の目を開け。一つはこの世界とそこの中にあるすべてに対して閉じ、他は最愛なる者の聖き美に対して開け」

「おお友らよ！ 消滅せねばならぬ美のために永遠の美を捨てるな。またこの滅ぶべき塵の世に愛着を持つな<sup>1)</sup>」

---

1. 『かくされた言葉』 ペルシャ編 12, 14.

P416

## 18

### バハイの行政秩序

#### 新しいサンガ

「もろもろのみ仏の現われたまうのは楽しい。正しい教えを説くのは楽しい。

つどいが和合しているのは楽しい。和合している人々がいそしむのは楽しい」

バハオラの世界秩序の中には、地方、国、国際の各段階で人類の諸事を司る行政機構が存在する。本書では、バハイの行政機構の構造と機能の説明は簡略にとどめるが、理解しておくべきことがある。この機構は、諸手続きを収めた法典を体現したものではない。個人と社会の関係性と責任の規範であって、無謬の案内者であり、世界秩序の全体が究極的なよりどころにするバハオラに従うことで生じる倫理的価値みなぎるものである。バハオラは明言する。

「われが単なる法典を現わしたと思うな。否、まさにわれは威力と強大の指により選り抜きの美酒の封を切ったのである。啓示のペンが書き記したことが、このことの真を証言する。これについて瞑想せよ、おお、洞察力ある人々よ……。わが法が、わが発言の天上より太陽のごとく現われるとき、万人はそれに忠実にしたがわなければならない。たとえわが法があらゆる宗教の天界を粉碎するものであったとしてもしたがわなければならない<sup>2)</sup>」

---

1 『ダンマパダ』 194.

2. 『アグダスの書』 バハオラ著. 「選り抜きの美酒」は靈的な意味で使用されている. 酩酊はバハイ教でももちろん禁止されている. 釈尊も近似した用語を用いている. 「私はすべての邪欲を洗い流す甘露の湖への道をあなたに示した. 真理の認識と呼ばれる、爽やかな飲み物を与えた. これを飲む人は、興奮、情熱から解放され、誤った行いをしなくなる」 『マハー・ヴァッガ』 VI.29.

P417

男女の別なく、バハオラの信教を自らの意志で受け入れ<sup>1)</sup>、活動に十分に参加しようとするなら、真の自己の向上と社会の改善を視野に入れた手段すべてが用意される。和合と調和はバハイの行政全体を通して繰り返し強調されるテーマであり、両者の絆を固める力が正義であることが明確にされている。しかし、人間についての真に普遍的な概念を受け止めるようになるまで個人の良心を拡大してきたのが、聖なる力に喚起された価値体系を基盤にする正義である。

「偉大なる存在者は言う。おお、わが最愛なる人々よ。和合の幕屋は建てられた。汝ら、互いに他人視してはならない。汝らは一つの木の果実であり、一つの枝の葉である。正義の光がこの世を照らし、この世を圧制より聖別することを、われは念願する」

「この日、自らを全人類への奉仕に捧げるものこそが真の人間である。……自国を愛することは自慢にはならず、全人類を愛することこそが誇るに値する。世界は一つの国であり、人類はその市民である」<sup>2)</sup>。

太陽時に基づきバブが作成した新しい暦は今、世界中のバハイに使用され、各月を 19 日とする 19 の期間で一年を構成する。便宜上、その期間を「月」と呼ぶと、各月に、栄光、美、栄誉、知識、慈悲を始めとする神の属性に因んだ名が与えられている。太陽暦に合わせるため、18 番目の月が終わり、19 番目が開始する前に、閏日として 4 日間（閏年には五日間）が加えられる。バハイの暦は今日現存する他の暦と違い、各月の日数が均等であるために便宜が大きい。バハイ新年は、3 月 21 日の春分と決められている。

---

1. バハオラを現代の神の預言者と認める者がバハイと呼ばれる。入信は居住地のバハイの行政機構に届け出る。新規加入したバハイはこれだけで、世界中のバハイと同じ権利と特権を持つことになる。

2. 『落穂集』 112, 117 段落.

P418

バハイ暦の各月最初の日、地方共同体のメンバーは、公民館などの公共施設か、個人の自宅に集まる。バハオラが定めたように、メンバー間の友愛と理解の絆の強化が目的である。

この集まり<sup>1</sup>はフィーストと呼ばれ、その言葉の通り、靈的にも物質的な意味でもご馳走が振る舞われる時間であり、3部から構成される。第1部では祈りが唱えられ、聖典から引用した言葉が読まれる。この部で醸成された精神的な雰囲気は、続く協議の部にも浸透して場を包み込み、社交の部までその影響を及ぼす。協議の部では共同体活動が通知され、提案と協議がなされる。この部で、バハイ誰もが自分自身の共同体の諸事に参加できる一方、他地域で起きていることも知ることができる。行政の部と呼ばれるフィースト第2部が終わると、軽食が出され、打ち解けた雰囲気の中で交歓し、他のメンバーと知り合う。これが、フィースト最後の部、社交の部である。

この集まりは、19日ごとに開かれるため、19日フィーストと呼ばれる。どのバハイも、世界中のどこで開かれるフィーストであろうと、立ち寄る機会があれば、参加が歓迎される。

19日フィーストに参加すると、自分が所属する共同体の他のメンバーを知る機会がたくさんもたらされ、信教の行政機構メンバーが選出されるプロセスが強化される。この行政機構が、弥勒・阿弥陀如来たるバハオラの宗教制における新しいサンガであり、如来自ら明言した指示に基づいて設立されるものである。

---

1. 『マハーバリニツパーナ・スッタ』I. 「阿難よ、ヴァッジ族が多数が出席する集会を頻繁に開いていると聞いたことがあるだろうか。……阿難よ、ヴァッジ族が多数が出席する集会をたびたび開く間は、国は繁栄し、衰亡しない。和合の内に集合する間、年長者を敬う間、女性たちを尊重する間、旧来の法に従う間、正しい儀式をすべて執り行う間、阿羅漢たちを正当に保護、防衛、支援する間は、ヴァッジ族は繁栄し、衰亡しない……私はバイシャリに滞在したときに、これらの条件を……」

P419

「主はあらゆる町に正義院が設立され、そこにバハの数(9)の評議員が集うよう定め給うた。しかし、この数を越えても構わない。彼らは自らを、崇高なる御方、最も高遠なる御方である神の面前に入る者、目に見えざる御方を見る者と見なすべきである。彼らは、人々の中の、慈悲深き御方の受託人でなければならず、また、自らを、地上に住むすべての者のために神より任命された擁護者であると見なさなければならない。彼らの義務は、共に協議し、自らの利益を考慮するが如くに神のしもべらの利益をも神のために考慮し、適切かつ相応しいことを選択することである<sup>1</sup>」

現在、地方精神行政会と呼ばれている行政機構<sup>2</sup>では、管轄する地元の共同体に帰属する成人バハイ全員により、年に一度、行政メンバーが選出される。投票は聖なる祝祭期間レズワンの初日に当たる4月21日に行われ、適任者と思われる人物が祈りの精神の中で秘密投票で選出される。成人メンバー全員に投票権が被投票権ともに与えられている。高潔さと公正さが地方精神行政会のメンバーに選出される者の資質として強調され、選挙運動や戸別訪問による票集めは禁止されている。公職を得るためには、果たせようが、果たせまいが、あらゆる種類の公約を戸別訪問で宣言するのが、大半の選挙運動である。バハイは少なくとも1年に19回はフィーストで互いに顔見せするため、戸別訪問も、集計された投票数をごまかす必要もない。精神行政会のメンバーに選出されても、権力も特権も手に入らない。もしそうなら、聖職者階級の設立や、個人の掌中に権力を預けることを禁じる、バハオラの教えに矛盾することになる。

---

1. 『アグダスの書』バハオラ著、『マハーバリニッパーナ・スッタ』も参照。「比丘たちよ、共同体が幸福になる条件を教えよう。よく聞きなさい。おお比丘たちよ、比丘たちが、多数が参加する集会をたびたびひらく限り；比丘たちが、和合のうちに集まり、和合のうちに立ち上がり、和合のうちにサンガの諸事を執り行う限り；年長者たちが正しいことを実践する限り；比丘たちが、年長者たちを、尊重し、崇め、支援し、彼らの言葉に耳を傾ける限り；善良で聖なる人々が来て、あなた方の中に静かに住うようになるよう、比丘たちが渴望の影響を受けずに宗教の祝福を喜ぶ限り；比丘たちが怠惰に耽ることがない限り、サンガには繁栄が期待され、衰退はないだろう」。

2. これらの機構が民間の地方自治体や国家当局に取り代ったり、機能が重複することはない。精神教育に焦点の中心を置き、ガイダンスと保護を与える(「成人」は21歳)。

P420

精神行政会のメンバーたちは、自分たちは、バハオラの世界秩序で神意によって定められた機構の部品にすぎないことを自認している。しかし、仲間<sup>1</sup>に選出されて奉仕に召喚されたからには、信教の行政が確実にフル稼働するよう最善の努力をする。

行政会には信教の原則に生命力を与え、管轄内の地方共同体の信者を指導し保護する責任があり、信者は信頼と恭順を行政会に示さなければならない。この双方についてをアブドル・バハが概説している。

これらの精神行政会は輝くランプであり、天来の庭園でもあります。これらから、聖なる芳香が全ての地域に撒き散らされ、知識の光がすべての創造物にあまねく注がれ、生氣溢れる精神があらゆる方向に流れ出すのです。行政会は、確かに、いかなるときでも、いかなる条件の下でも、人間が進歩する強力な源です。……誰であっても精神行政会と協議せずに一歩も先に進んではなりません。物事が秩序正しく、整然と運ばれるように、すべての者は行政

会の命ずる所に心から従い、それに忠実でなければなりません。……討議の後、万場一致で決議されれば幸いです。しかし、もし意見の相違が生じるようなことがあれば多数決で決めなければなりません<sup>2</sup>。

世界の政治制度の構造そのものに党派政治が暗黙のうちに組み込まれ、異議の申し立てに病的に忠実な野党による、提議への反対が常態化している。バハイの行政にこうした弊害は生じない。どんな事項であろうと、過半数の同意を得た意見で決定がなされるや、その意見に同意しようとなかろうと良い結果となるよう努力する義務が、行政会のメンバー全員に課されている<sup>3</sup>。

---

1.「誓いを立てて正式に僧侶になった者と、在家信者の間に区別はない。地獄に落ちる隠者がいれば、聖仙の地位に昇る慎ましき世帯主もいる」『ブッダチャリタ』15-22, 1533.

2. *God Passes by*, p.332. Shoghi Effendi, 1944, Bahá'í Publishing Trust, Wilmette, Ill., USA. 『神よぎり給う』「誰でも精神行政会と協議せずに一步も先に進んではなりません。……」で協議されるのは、信教の事柄に関し、かつ共同体とそのメンバーに影響を及ぼすもの。

3. 人間は物質的利益を得ても満足感は永続しない。弱者を不当に圧迫してはならないという意識を、我欲を制する動機にさせるのが信仰である。政治一色の信条にこれを見出すことはできない。それゆえ、政治的解決はせいぜいが部分的解決に過ぎず、何の解決にもならないことが多い。釈尊も多数決原則を支持している。『マハー・ヴァツガ』X,1,2.v2 には次のように記されている。「これらの比丘は、法と教団の規則をわきまえ、学識があって賢く聡明、慎み深く良心的で規律に服する用意ができています。利己心や悪意、迷妄や恐れで行動することはあり得ない。当人には分裂を起こすことに恐れを抱かせ、仲間の比丘たちの権限のもとにその罪過を認めさせよう」

P421

一般社会の政治制度とは異なり、バハイの精神行政会には、多数決で決められた意見に同意しなかった者たち少数派も、決定事項の達成に全霊を込めて努力するという原則がある。それゆえ、正しい決定であったなら、共同体はただちに真理に導かれる。正しくなかった場合でも、誤りが速やかに認められることで、協議に戻って最善の結果に達する別の手段を採用することができる。

地方の精神行政会の数は実に大幅に増加した。現在、百カ国以上に、全国精神行政会と呼ばれる「第2の正義院」が存在する。全国精神行政会は、その国のバハイが居住する地域すべてから選出された代議員による秘密選挙でそのメンバーが毎年選出される。地方から全国大会に出席する代議員の数は、各地域のバハイの人数に比例して割り当てられる。全国精神行政会の責任は、「管轄区内の地方精神行政会、及び個人の活動を指導し、統合し、調整し、刺激する<sup>1</sup> (暫定訳)」ことにある。現在、地方でも全国水準でも行政会には9名が選出される。

そして、バハオラが聖なる使命を宣言したきっかり百年後の仏暦 2506 年(1963 年 4 月 21 日)以来、5 年ごとに、すべての全国精神行政会のメンバーが極楽浄土たるハイファに集まる。バハイ世

界の最高機関、万国正義院<sup>2</sup>のメンバー選出のためであり、成人の男性バハイ誰もが選出される資格を有する。バハオラとアブドル・バハが概説した明確な手続きに従って9名が選出される<sup>3</sup>この機構には、バハオラがその書物で明示していなかった事柄を制定する権限がバハオラから付与されている。

---

1. 『神よぎり給う』 Ch.XXII.(行政秩序の立ち上げ)ショーギ・エフェンディ著。

2. バハイの最高機関、万国正義院のメンバーとして選出される男性9名は仏教でも予言され、「胎蔵界の八葉院に……蓮華の中央(秩序の中心、すなわち新しいサンガ)にいる栄誉ある九名(中台八葉院に配置される九尊)」として描写されている。胎蔵界を表す Garbhadhatu は「物質世界の根源」を意味し、バハオラが万国正義院に付与した立法権と行政権を行使するための最高権限を示唆している。9名の正義院メンバーはまた、八葉の蓮華上の(金剛石のように)破壊不可能な九つの正方形にも擬えられている。いずれの時代にも、9名組織が仏教界でつくられたことはなかった。それゆえ、今日のバハイ教の9名機構に言及していることは明らかである。曼陀羅は霊力を集めることでダルマ(法)の運用促進が意図されている。法の運用促進は、万国正義院に課された使命でもある。

※訳者注：筆者が言及する「破壊不可能な九つの正方形」は金剛界曼陀羅と思われる。胎蔵界と金剛界という二つの世界は本質的に同じゆえ、異なる視点から同一のものに言及している。

3. 「賢者は、選出された者(the elect)が知らせた法を常に喜ぶ」『ダンマパダ』79.

P422

バハイ信教と世界に広がる信者の共同体に関わる事柄において万国正義院が下す決定には、バハオラから無謬性<sup>1</sup>が付与されている。この万国正義院に比類する機構はない。唯一無二のダルマの純粋さを守りながら、これを伝え広める新しいサンガを導く完全無欠の案内役である。

「『書』の中にはっきりと啓示されていない事柄に関して、共に協議を行い、賛成することを執行することは、正義院のメンバーの義務である。神はお望みになることをもって彼らに靈感をお与えになるであろう。まことに神はお与えになる方であり、全知なる御方である<sup>2</sup>」

「今や栄光のペンによって書かれたこの節は、最も聖なる書の一部とみなされる。神の正義院の紳士たちには人民の諸事が託されている。まことに、彼らは神のしもべの間にある神の被信託人たちであり、神の国々における權威の曙である。おお、神の人々よ。世界を鍛えるものは正義である。なぜなら、それは報酬と罰という二本の柱で支えられるからである。これら二本の柱は世界の生命の源である。日々、新たな問題が出現し、それぞれの問題には適切な解決法があるため、そのような事柄は正義院に託されるべきであり、正義院のメンバーは、その時の必要性や求めに応じて行動するであろう。……すべての者は彼らに従わねばならない<sup>3</sup>」

---

1. 『大スカーヴァティー・ヴィューハ』(8.28)の無量寿仏の請願に相当する。「おお世尊よ、私の仏国土では、私が悟りを得た後に、誰もが説法するか学ぶべきですが、彼ら全員が完璧な知識を身につけないようであるならば、私は無上の悟りを得ることはありません。」「誰も」が無謬の機構、万国正義院に相談し「完璧な知識を身につける」ことが暗喩されている。

2. *Tablet of the Exalted Paradise* (Eight Leaf), Baha'u'llah. Translated by Shoghi Effendi in *the Dispensation of Baha'u'llah*, p.50, 1934, Bahá'í Publishing Committee, Wilmette, Ill., USA. 和訳は『崇高なる楽園の第八の葉』(「オンライン・バハイ図書館」から)

3. *Tablet of Ishrakat* (Eight Ishrak), Baha'u'llah. Translated by All Kuli Khan, 1906. Bahá'í Publishing Society, Chicago, Ill., USA. 『イシュラガト(壮麗)』第八のイシュラグ(「オンライン・バハイ図書館」から)

アブドル・バハがさらに明確にしている。

P423

「すべての者は最も聖なる書（アグダスの書）に向わなければならない。そしてその聖なる書に明白に記録されていないすべての事柄は万国正義院に照会されねばならない。この正義院が満場一致又は多数決で決定した事は、実に真理であり神自身の御目的である。それより逸脱する者は真に不和を好む者であり、悪意を示し聖約の主に向背を向ける者である<sup>1)</sup>

有権者の動向に常に目を光らせている政治家とは違い、万国正義院メンバーは「信者の大部分や彼らを直接選ぶ人々たちの感情や一般的な意見や説得によって判断を左右されることはない。祈り深い態度で、その良心の命令とさしずから従うことになっている。彼ら（万国正義院メンバー）を直接又は間接的に選ぶ人々ではなく<sup>2)</sup>、彼ら自身が、バハオラから無謬性を付与されたからであり、「神はまことに、お望みになることをもって彼らに靈感をお与えになるであろう<sup>3)</sup>。全国と地方の精神行政会も、それぞれが協議する際には、無謬性は付与されていないが、自由な意思決定の原則を遵守する。

個人には、地方精神行政会に自身の問題を提起してもその決議に納得できなければ、全国精神行政会に協議を依頼する権利がある。行政会がなすべき務めを以下に概説する。

「大業の諸事を開始し、指揮し、調整するために召集された人々に課せられた最も顕著で神聖な義務の中には、あらゆる手段を通して、特権として奉仕する対象である人々の信頼と愛情を勝ち取ることが求められるということを、探求するすべての読者に明確にしておこう。彼らの任務は、熟慮された見解、支配的な感情、人々の個人的な信念を調査し、熟知することである。

彼らは、人々の福利を促進することを厳粛な義務としているからである。

- 
1. アブドル・バハの『遺訓』、『マハー・ヴァッガ』X,1,2.v20も参照。「比丘たちよ、それゆえ、あなたがたの師と上位者や、師と上位者と同じ位階にある者たちには敬意を払い、愛情をもって接し、歓待しなさい」。
  2. 他方、党派政治では必然的に、様々な党派が自党の繁栄のためだけに努力し、対抗政党による政策が国を益しようときき下ろしが要求される。良い政策でも、自党に忠誠を誓う対抗勢力による抵抗に絶え間なくさらされ、肝要部分を切除され、実を結ぶことはない。与党は、選挙民の前で面目を保つことで精一杯であり、間違いの是正をする余地がない。是非はさておき、国策は党派政治の犠牲になっている。
  3. *The Constitution of the universal House of Justice* も参照. Bahá'í World Center, Haifa, Israel. 1972.

P424

彼らの任務は、審議と業務全般から、自己完結的な超然とした態度を、秘めた疑念、独断的主張による息詰まる雰囲気、要するに、不公平、自己中心性、偏見を匂わせるあらゆる言動と行いを決定的に一掃することである。彼らの任務は、最終決定の神聖、かつ排他的な権利を保持しながら、議論を促し、情報を提供し、不満を解消し、バハイ家族の中でも片隅にいる最も慎ましやかなメンバーからの助言をも歓迎し、動機を明らかにし、計画を示し、行為の正当性を示し、必要であれば評決を修正し、一方では自分たちの間の、そして一方ではすべての地方行政会および個人との間の、相互依存と協力、理解と相互信頼を促進することである<sup>1</sup>。(暫定訳)

しかし、全国精神行政会による決定に心から納得できない場合もある。そのような例外的事例においては、最高機関である万国正義院に当人から協議を最終的に依頼することができる。正義院による決定は無謬である。

地方と全国水準の精神行政会、そして万国正義院は、「人民の育成、国家の発展、人類の保護とその栄誉の擁護のために」<sup>2</sup>とバハオラが述べるように、人類の福利へとつながる、あらゆる種類の人道的かつ慈善的な活動に携わっている。

バハイはちなみに、機構にしる、個人にしる、バハイでない団体や個人から、経済支援や贈り物を求めることも受け取ることもできない。この規定により、バハオラの大業を支持しないが、将来を見越した投資を目論む者たちからの操作や支配を受ける可能性が排除される。富でも時間でも何でも、新しい世界秩序の建設のために資することができるのは、バハイに限定される。

---

1. *Principles of Bahá'í Administration*, PP.81-82, Shoghi Effendi, 1936. Bahá'í Publishing Trust, UK. 『マハー・ヴァッガ』X,1,2.v1も参照。「おお比丘たちよ、当該の件の事実がどのようなものであれ『そのように思われたので、同胞に対してこのような措置を喜んで取らせていただきます』と言うだけで、その比丘に追放宣告できるなどと考えては

ならない。その同胞は、法と教団の規則をわきまえ、学識があって賢く聡明、慎み深く良心的で、規律に服する用意ができています。その同胞に対して軽々しく判決を下す比丘たちには、分裂を引き起こすことを畏れてもらうようにしよう」

## 2. 『イシュラガト(壮麗)』

P425

入手容易な記録用の資材がなく、師の教えを暗唱できる特定の少数弟子たちの記憶に頼る傾向があったことから、弟子たち間の分裂はおそらく防止できないことを、釈尊は承知していた。それゆえ、多数決原理を概ね支持していたことは別として、分裂を防止し和合を保つための行政秩序を打ち立てることはなかった。その結果、提婆達多が起こしたような別勢力の台頭、コーサンビーの比丘たちによる分裂が、釈尊の在世時ですら開始し、すでに確認したように(146-7 頁)、第一結集、第二結集を通して、これらは数を増やし、拡大し続けていった。仏教以外の古来の宗教でも、意思疎通も開祖の言葉の検証も困難であったため、開祖の逝去から 20 年もの間、分裂の猛威に耐えることができた宗教はない。『マハー・ヴァツガ』には釈尊の在世時ですら起きていた分裂の様相が語られている。

「双方が正式な行いを別々に続けた。そのことが世尊に伝えられると、世尊は正式な行いの遂行は法に適っており、反対はできない、かつ双方に妥当性がある……と裁定され、その理由を述べられた。『追放された同胞に味方する比丘たちは、その宣告を下した者たちとは違う一派を結成している。双方に尊者がいる。彼らが同意しないのだから、正式な行いを別々に遂行させよ』<sup>1)</sup>

釈尊は、論争と分裂を嫌悪し、分裂を起こすことに警告し、和合を賛美していた。にもかかわらず、分裂を起こした提婆達多に、釈尊はこう諭した。

「教団内に分裂を許してはならない。提婆達多よ、教団内の分裂は大変なことである。和合していた教団を分裂させる者は一劫の間、消えない罪業をつくり、一劫の間、地獄で釜茹でされる。だが、分裂していた教団を和合させる者はその功德により、一劫の間、天国で喜びを享受する<sup>2)</sup>

釈尊はそれでも、和合の概念が長期間薄れないようにすることも、弟子たちの間で実践させることもできなかった。

「凡夫の声はやかましい。しかし、サンガでも分裂が起きているのに、彼ら凡夫をどう非難できるというのだ<sup>3)</sup>

バハオラの書物には、万国正義院の決定に無謬性が付与されていることが約束されている。この約束は他宗教には見出されない。

- 
1. 『マハー・ヴァッガ』 X,1,2.V.2.
  2. 『ヴィナヤ・ピタカ』 II.
  3. 『マハー・ヴァッガ』 X,1,2.v24.

P426

この唯一無二の機構は、過去百年の間にようやく出現した世界規模の通信網の発達により、その機能が促進し、分裂を生もうとする企てのすべてを不首尾に終わらせている。バハオラ自らがこの難攻不落の組織についてを最もよく描写している。

「世界の均衡は、この最も偉大な、この新しい『世界秩序』の揺り動かす影響によって狂わされた。人類の整頓された生活はこの独特な、この驚くべき『組織』によって大革命をもたらされた。そしてこの『組織』は、その類を人間の目が未だかつて見たこともないものである。全能なる御方の手は、その啓示を、難攻不落の永続する基盤の上に確立なさせた。人間の争いの嵐はその基礎を弱める力もなければ、人間のたわいない理論はその構造に危害を加えることもできない<sup>1)</sup>

悟りを得るための7種の修行法として釈尊が教えた「七覚支」に相当する概念を、バハオラは現代のために「七つの谷<sup>2)</sup>」において啓示した。その一つ一つが、バハイの行政秩序が目標とする、人類の一体性の確立に至るための要素に相応する。

「すべての民族、国民を和合させるという、途方もなく複雑で当惑する仕事を、完全かつ至極単純化された含蓄ある七つの言葉で、アブドル・バハが表現している。……1.政治の和合。2. 世界的な取り組みにおけるの考えの和合。3. 自由の中での和合。4. 宗教の和合。5. 国々の和合。6. 人種の和合。7. 言語の和合<sup>3)</sup>。

- 
1. *The Dispensation of Baha'u'llah*, Shoghi Effendi, 1934. (「バハオラの律法時代」[オンライン・バハイ図書館]から)
  2. バハオラが著したこの書簡は、ベルシャに国境を接するイラクの町、ハーナキーンの判事、シャイフ・ムヒディンに宛てられたものである。スーフィー哲学の研究者であったムヒディンは、絶対者の認識に至るための段階に関してバハオラに質問をした。認識を得るのに神の顕示者の介在は不要であると信じていたからだった。そのような概念を、釈尊も、バハオラも、もちろん教えていない。バハオラは本書簡で誤謬であると結論づけた。
  3. これら7段階は「和合の7本のロウソク」とも呼ばれる。

P427

すでにバハイたちが、最大平和のモデルとなり核となるべく定められている手段を実際に築き始めていることは確かである。行政秩序は深く構想されていると同時に簡素であり、神への愛と畏れによって人生を貫いている者たちだけが管理することができる。それは、統一性と普遍性、現実的なものと精神的なもの、個人の権利と社会の権利といったような対立するものが、妥協によるものではなく、内なる調和を明らかにすることによって完全に均衡をとるシステムである。この行政体を運営した経験がある者たちは、その内なる魂を表現するために作られた人体のように思えると証言している<sup>1)</sup> (暫定訳)

バハオラの信教は、19世紀半ばに創設されて以来、その領土の中に人類を覆い包むという目標に向かって急進しながら、新しいサンガと言うべき、神意により無謬性を授けられた機構、万国正義院の下に、人類が、人種、性別他、背景多様でありながら、良心と目的において完全に一致し、それぞれの役割を果たす真の姿を現すことを可能にしている。

「おお実在の子よ！ わが愛はわが砦である。その中に入る者は安全にして無事である。それより背き去る者は、必ず道に踏み迷い、滅びに至らん<sup>2)</sup>」

---

1. *God Passes By, Introduction*. Shoghi Effendi (Introduction by G. Townshend, pp.ix.x), 1944.

2. 『かくされた言葉』アラビア編9.

## 終章

「おお言葉の子よ！ 汝の顔をわが顔に向けよ。そしてわれより他のすべてを放棄せよ。

わが主権は永続し、わが領土は滅びることなければ。

たとえ汝われより他のものを求めんとし、さらにまた宇宙を永久に探し求めようとも、

汝の探索は徒労に帰さん<sup>1)</sup>

「奮起てよ。怠けてはならぬ。善い行いのことわりを実行せよ。……

善い行ないのことわりを実行せよ。悪い行ないのことわりを実行するな。……

この世の中は暗黒である。ここではっきりと見分ける人は少ない。……<sup>2)</sup>

勢至菩薩ことアブドル・バハは1世紀前に述べた。

「仏典には、この顕示者（バハオラ）に関する予言が記されているが、それらは象徴と比喩で表されている。また霊的側面からの状況がいくつか述べられているが、宗教指導者たちはそれらを理解していない。これらの予言は物質的な事柄についてなされていると彼らは考えるが、それらのしるしは、霊的次元で生じる出来事を予示するものである<sup>3)</sup>

しかし現在、弥勒・阿弥陀如来ことバハオラの恩寵により、何が象徴されていたかも、何を比喩していたかもが判明している。釈尊の予言で実には的確にその出現が予告されていた「極楽浄土<sup>4)</sup>」も今、バハオラが構想した輝かしき世界秩序が出現する場であることも明らかにされている。

---

1. 『かくされた言葉』アラビア編 15.

2. 『ダンマパダ』168,169,174.

3. アブドル・バハの書簡.

4. 『マハースダッサナ経』（ディーガ・ニカーヤ）の「クシャヴァティ」と同一。

栄光に輝く案内者、釈尊に敬意と賛美を捧げる。簡素でも深遠な、そして「誰でも、私を見る者の目にはダルマが映り、ダルマを見るものには私の姿が映る」と彼が述べたように、ダルマ(法)を通して見えてくる釈尊の実体が、探すべきものは、いつ、どこで出現するのか、それは何なのかを示していたのである。そして私たちが最終的に導かれたバハオラの中に、釈尊の古来の実体を示唆するしるしと状態すべてが「完全かつ純粹に」現されていることを理解することができる。バハオ

ラは、釈尊が在世していた当時のように、「諸世界の知識を完全に備え、神々と人々の教育者として、崇高な仏陀として比類がない」指導者として、現代という私たちの時代を導いている。

というのも、本書においての探求でここまでやって来た読者は、バハオラとバブ、そして二人の教えを基に築きあげられて世界に広がる共同体が、釈尊の予言を完全に成就していることを否定できないのでないだろうか。また、人類を高揚させて活気づける計画を盛り込んだ二人のメッセージの簡潔な説明を本書で読んだ人で、奇跡の双子である双子の顕示者が「意味の本質と外見の両方においても……最初においても、中間においても、終わりにおいても素晴らしい」比類なきダルマをもう一度、確かに発見し、人類のための「安全な避難所」になした後で、「完全性と純粹さのすべてにおいて高次の人生」を説き広めたことに疑問を抱ける人もいないのでないだろうか。さらには、古代の何らかの教義に基づいたものであろうと、現代の何らかの研究機関が策定したものであろうと、計画や論説で、世界の和合のために人間状況で求められることに応えるために、バハオラがそのメッセージにおいて示した思考の独自性とすべてを包括する普遍的視野を持つものはない。

そして最終的には、聖職者階級が未来永劫にわたって存在せず、言葉やローブでなく行いによって傑出した新しいサンガたる、バハオラに従う者たちでつくる世界に広がる共同体が、釈尊の在時のサンガのように、各人が同胞に仕えるしもべとして世界の福利のために奉仕することにより、釈尊が「比丘何百人もの教団の長」であったように、自分たちの主を「比丘何千人もの教団の長」になす。バハオラという霊的太陽から光を受けて成長しているバハイ共同体は、太陽が教える「多様性の中の和合」を促進している。これは、今日のニーズでもある、様々な宗教、文化的背景をもつ人々が平和の内に暮らすための概念として欠かせない。

P430

現在、世界が停戦状態にあるのは、諸々の国家や政府がその自制心を働かせていることに負うところが大きい。しかし、恐るべき武器を手に、恐れと不信を心に抱えた今日の個人の姿がそのまま投影されているのが、国家と政府の本質であるゆえに、真の平和が世界に訪れることはない。破滅を回避し、新たな人類を築きあげるには、新しい人間が必要とされている。過去の時代のように、人間の心理は神の宗教を今一度必要としている。さもなくば、永続する信頼は存在し得ない。曇りなき意識と開かれた心を持つ者たちが新しい人類を生み出せるかは、バハオラとその途方もない啓示にかかっている。それは彼が、釈尊の予言すべてを成就させたからだけでも、脅威を受けて苦悩するこの時代にうってつけの比類なき教えをもたらしたからでもない。人類の多様性を体現して世界中に広がる信者の共同体が動かぬ証拠を提示しているからである。そして、難攻不落の大業という安全な避難所への門扉の外側でいまだに呻吟している人類に、愛情と利他の精神を込めた歓迎の手をバハイは差し伸べている。

おお、ダルマの人々よ。弥勒・阿弥陀如来の弟子たちが如来の名と教えをあらゆる国土と宗教と人種様々な何百万もの人々に奉仕として伝えていること以上に、釈尊への大きな賛辞はあるだろう

か。弥勒・阿弥陀如来、すなわちバハオラを受け入れた者たちは、その前任者であり、栄光に輝く釈迦如来の神性も認め、その教えも尊重しなければならない。世界の辺境に住み、釈尊の名前を未だかつて聞いたことがなかった何百万の人々までが今、バハオラの教えと弟子たちを通して、バハオラと同じくらいに釈尊を敬愛している。それは他でもない。「まさにこれらの言葉が……説法されているときに、彼らは……同じ一つの信仰を得る<sup>1)</sup>」ことに由来する。

---

1. 『ヴァジュラッチェーディカー・ストトラ』 VI.

P431

これ以上に素晴らしい証拠があるだろうか。バハオラが到来したのは、釈尊を真に愛する者たちを減らすためではなく、増やすためであった。比類なき永遠なるダルマから信者を奪うためではなく、加えるためであった。

おお、ダルマの人々よ、功德を積むがよい。

「さあ、この世の中を見よ。王者の車のように美麗である。愚者はそこに耽溺するが、心ある人はそれに執著しない<sup>1)</sup>」

「大地の唯一の支配者となるよりも、天に至るよりも、全世界の主権者となるよりも、聖者の第一階梯(預流果)のほうがすぐれている<sup>2)</sup>」

あなた方が真に賢明なら、バハオラの大業において調和の内に暮らす者たちの慎ましやかさが最も似つかわしい。まだ間に合ううちに、阿弥陀如来の呼びかけに心を留め、運命を果たすべきである。

「おお浮動する塵埃よ！ われ汝と霊の交わりをなさんと欲す。されど汝はわれに信頼を置こうとはせず。汝の反逆の剣は汝の希望の木を切り倒した。われは常に汝の傍らにいる。されど汝は常にわれより遠くにいる。われ汝のため不滅の栄光を選んだ。しかも汝は、汝自らのために果てしなき恥辱を選んだ。間に合ううちに帰り来て汝の好機を失うな<sup>3)</sup>」

「約束された時刻は今や満ちた。されば、おお人々よ、身を奮い立たせ、神の正義の日々の到来にそなえよ。その重大な意義を取り違えて、あやまてる人々の内に数えられることのないよう注意せよ<sup>4)</sup>」

おお、ダルマの人々よ。汝の機会をつかむがよい。それは二度と来ることはないだろう。

- 
1. 『ダンマパダ』 v.171.
  2. Ibid., v.178.
  3. 『かくされた言葉』 ペルシャ編,v.21.
  4. 『落穂集』 XII.

## 参考文献

Part 1:

文中経典訳の多くはパーリ語/サンスクリット語による元来の経典の以下の英訳の和訳.

*Anguttara-nikaya*, Warren's Buddhism in Translation.

*Buddha and the Gospel of Buddhism*, A.K.Coomaraswamy.

*Buddhist Birth Stories (Jataka Tales)*, Translated by T.W.Rhys Davids.

*Buddhism: Its Essence and Development*, Edward Conze.

*Buddhist Mahayana Texts*, Edited by E.B.Cowell & Others.

*Buddhist Scriptures*, A New Translation, Edward Conze.

*Buddhist Texts Through the Ages*, Edited (excerpts) by Conze, Horner, Snellgrove, Waley.

*Garland of Birth Stories (Jataka Tales)*, Translated by V. Fausboll.

*Jataka Tales*, Translated by H.T.Francis and E.J.Thomas.

*Sutta-Nipata*, Translated from the Pali by V.Fausboll, Part II, Vol. X of The Sacred Books of the East, Oxford, 1881.

*The Dhammapada*, S.Radhakrishnan.

*The Diamond Sutra*, Translated by A.F.Price and Wong Mou-Lam.

*The Edicts of Asoka*, Edited & Translated by N.A.Nikam and Richard Mckeon.

*The God of Buddha*, Jamshed Fozdar.

*The Gospel of Buddha*, Pail Carus.

*The Maha-Parinibbana Suttanta*, Translated from Pali by T.W.Rhys Davids. The Sacred Books of the East, Vol.XI.

*The Maha-Sudāsana Suttanta*, Translated from Pali by T.W.Rhys Davids. The Sacred Books of the East, Vol.XI.

*The Mahāvagga*, (Vol. XVII) of the Sacred Books of the East.

*The Saddharma-Pundarika Sutra*, Translated by H.Kern, Vol. XXI of The Sacred Books of the East.

*The Bhagavad Gita*, with Sanskrit text and English Translation and introduction by Gita Press.

*The Thirteen Principal Upanishads*, by R.G.Hume.

P433

Part 2.

*Bahāulla*, H.M.Balyuzi.

*Bahá'í World Faith, Selected Writings of Bahá'u'lláh and Abdu'l-Bahá.*

*Epistle To the Son of the Wolf*, Bahá'u'lláh.

*Gleanings from the Writings of Bahá'u'lláh.*

*God Passes by*, Shoghi Effendi.

*Kalki Avatar Ki Khoj*, Prakash Narayan Mishr.

*Principles of Bahá'í Administration*, The National Spiritual Assembly of the Bahá'ís of the United Kingdom.

*Some Answered Questions*, Abdu'l-Bahá.

*Synopsis and Codification of the Laws and Ordinances of The Kitáb-i-Aqdas, (The Most Holy Book of Bahá'u'lláh)*, with and Introduction by the Universal House of Justice, Bahá'í World Center.

*Tablets of Bahá'u'lláh*, Translation by Ali Kuli Khan.

*The Dispensation of Bahá'u'lláh*, Shoghi Effendi.

*The Hidden Words of Bahá'u'lláh*, Bahá'u'lláh.

*The Kitáb-i-Iqan*, Bahá'u'lláh.

*The Priceless Pearl*, Ruhyyih Rabbani.

*The Promised Day Is Come*, Shoghi Effendi.

*The Seven Valleys and The Four Valleys*, Bahá'u'lláh.

## 用語集

### 第一部

#### ヒンズー教、仏教、ゾロアスター教の用語

Abhidhamma	アビダンマ	仏教の教説の研究・思想体系、およびそれらの解説書・注釈書のこと。
Abhidhamma -pitaka	アビダンマ・ピタカ	論蔵：仏教哲学が上座部の教えに従って系統的に詳述されている論説集。
Abhuta	アブータ	創造されない、存在しない。
Adityas	アーディティヤ神群	ヴェーダの神々。
Agni	アグニ	火、火の神。
Ahetu-ja		いかなる原因もない。起源がない。
Ahimsa	アヒンサー	非暴力。仏教で特に傑出した教え。殺生を禁じ、生きとし生けるものに優しく接する。
Ahura-Mazda	アフラ・マズダー	ゾロアスター教の最高神。創造主、光の源、善の体現。
Ajata		生じたものでない。
Ajatasatru	阿闍世王 アジャータシャトル	マガダ国王舎城の王子。父王ビンビサーラを殺害し、王位を篡奪。提婆達多と共謀し釈尊殺害も企てた。
Akata		形成されない。
Alara	アラーラ	シッダールタが師事したと伝えられる賢人の一人。もう一人の賢人はウドラカ。二人ともバラモン階級。
Amatogadha		不滅の境地。
Ambapali	アンバパーリー	裕福な高級娼婦。仏法を信じ、釈尊の高弟の一人になった。
Amitabha	阿弥陀	11章を参照。最もよく知られた仏の一人。西方極楽浄土を創った。信を込めて「阿弥陀仏」とその名を繰り返し復唱する者は死後、その極楽浄土に生まれる。

		とされている。「不滅の御方」を意味する「無量寿仏」とも呼ばれている。4 頁脚注 2 も参照。
Amitayur-Dhyana Sutra	アミターユル・デアーナ・スートラ	大乘仏教の経典。仏暦 8 世紀前後にインドからの学僧 Sanghavarman により梵語から漢語に訳された。『観無量寿経』として知られているが、本書では梵語の英訳をベースとするため『アミターユル・デアーナ・スートラ』で名称を統一。
Amoha	アモーハ	無癡。非妄想。
Anagamin	アナーガミン	不還。もはや人間界にもどることなく、天界以上の階位に上って悟りに至る者のこと。
Ananda	アーナンダ	阿難。釈尊の十大弟子かつ、従兄弟の一人。女性の出家を認めるよう釈尊を強く促した。
Ananuvejjo		調査し、徹底的に知る。
Anatta	アナッター	サンスクリットの"anatman", 無我のパーリ語。仏教の教説による"anatta"は、宇宙にも個人の中にも「自己」は存在しない、すなわち、個人を根拠づける不変的自己は存在しない。アナッターは無常を意味するアニッチャ(anicca)と、すべての個人の経験を特徴づけるものの一つである苦を意味するドゥッカ(Dukka)を概念としてともなう。だがこの概念はすでに決定的に否認されている。God of Buddha, pp.63-74, European _edition, Casa Ekitrice Bahá'í, Ariccia, Italy, 1995 も参照。
Anguttara-nikaya	アングッタラ・ニカーヤ	「数え上げる」(対話, パーリ仏典)。支 (anga) が集 (nipata) を重ねるごとに 1 つ 1 つ増えていくことに由来する。増支部。『スッタ・ピタカ』の一部。
Anicca (サンスクリット : Anitya)	アニッチャ	「無常」(パーリ)。万物は常に変化し、一瞬でさえも存在は同一性を根本的に保持できないことが仏教の主旨だとされている。しかしながらこの見解は、絶対者の概念を詳述する大乘仏教において修正されている。諸行無常と絶対者という二つの概念は矛盾しない。
Aniccata		死。
Anjana	アンジャーナー	ハヌマーンの母。

Anupadhishesa		どこまでも解放されること. 涅槃.
Anussutam		情欲がなく純粹であること.
Anuttara	アノクタラ	卓絶して比類がない無上に完璧な存在.
Anuttara Samyak-sambodhi	アノクタラサンミヤクサンボダイ	阿耨多羅三藐三菩提. 一切の真理を知る悟りを開くこと. 無上正等覺.
Apadam		足跡がないこと. あらゆる形容を拒む者であり、形容できる印や軌跡を持たない者. 仏陀.
Apadana	アパダーナ	『クッダカ・ニカーヤ』に収録された仏教の聖人たちの物語.
Aparam		未来.
Apratishthita		止滅がない (「利他主義」「躍動的な涅槃」も意味する).
Apsara	アプサラー	天人.
Arahat	アラハト	阿羅漢. 煩悩すべてを断ち切って涅槃に入り、生死を繰返すことがもはやなくなった完璧な弟子. 迷いの人生の輪廻(hata)の輻(ara)を破壊した者.
Aranyakas	アーラニヤカ	ヴェーダ聖典に付随するシュルティの1つで儀式を象徴的に解釈したもの. 紀元前 600 年前後に作成された. 「森林書」とも「喜び溢れる平和の中にいる遵守者」とも呼ばれる.
Ariyan	アーリヤン	聖なる高貴. Aryan の変形.
Ariyanam		聖別された道に足を踏み進める者たち.
Arjuna	アルジュナ	クリシュナの一番最初の弟子. パンダヴァ兄弟の3番目. 『バガヴァッドギータ』で、アルジュナに対し、クリシュナは説法をした.
Aruparaga		天界に生まれることへの願望.
Asamkrita		条件付けられていない、純粹. (パーリ語: Asamkhata). 「涅槃は、いかなる因縁にも条件づけられていない唯一のダンマである」. Asankhata とも呼ばれる.

Asat	アサット	偽り. 存在しないもの. 非現実.
Asavas		悟りを阻む「心の汚れ」. 感覚的なものへの切望、真我に無知なままの現世への執着がたとえば該当する.
Ashvaghosha	アシュヴァゴーシャ	馬鳴. 著名な仏教詩人. 西暦 1 世紀に釈尊の伝記『ブッダチャリタ』をサンスクリット語で著した.
Ashoka	アショーカ王	仏教に帰依したインド最初の皇帝 (紀元前 274-232). マウリヤ朝創設者のチャンドラグプタの孫. 仏教に改宗してからは、王室の称号を「ピヤダッシ」(他者を慈愛の目で見める者)とした. 王の庇護の下に、第 3 結集がパータリプトラで催された. 仏教が王室からの後援を失ったのは、アショーカ王の死後だった. マウリヤ朝をシュンガ王朝が、さらにカーヌヴァーヤナ王朝が継承したが、両王朝とも、バラモン教を確固として支持した. しかしながら、仏教はすでに大衆の間に広まっており、人心が離れることはなかった.
Asrava		「影響」、存在することの一因.
Asvins	アシュヴィン	聖なる双子.
Atman	アートマン	ブラフマンと実質的に一体化していると想定されている魂(梵我一如). 不滅の靈的実体である真我.
Attadipa		自らの灯火としての自ら.
Attasayana		自らの拠り所としての自ら.
Avatara	アヴァターラ	降臨した者. 人間の姿で自らを顕現した(降臨した)聖なる者.第 3 章を参照.
Avacya		えも言われぬ.
Avijja		無明、迷妄、無知・蒙昧を意味する「癡」の類義語.
Ayodhya	アヨーディヤー	「難攻不落の都城」を意味する. コーサラ国の一都市. イクシュヴァーク王朝の古都.
Avalokitesvara	アヴァローキテーシュバラ	「慈愛の目で眺める者」. 本書 12 章を参照.

Avesta	アヴェスタ	<p>『ゼンド・アヴェスタ』。ゾロアスター教の聖典。以下の書から成る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ヤスナ」祭儀書。ゾロアスター自身による説法、啓示の言葉を含む「ガーサー」も含まれている。</li> <li>・「ウィस्प・ラト」。 「ヤスナ」の補遺的小祭儀書。</li> <li>・「ヴェンディダード」宗教法典。</li> <li>・「ヤシュト」頌神書。</li> <li>・「ホルダ・アヴェスタ」。 短い祈祷文の集成に加え、現在は失われた教典から種々引用した言葉。</li> </ul>
Balaraman	バララーマ	クリシュナの兄。
Bhagavan	バガヴァン	主神、創造神。イーシュヴァラとも呼ばれる。
	バガヴァッドギータ	<p>「神の詩(うた)」：神(バガヴァン)の詩(ギータ)。ヒンズー教ではおそらく最も有名な聖典。ヒンズー教の正統な聖典であるとともに、ヴェーダ聖典と同等の権威があるとみなされている。『ウパニシャッド』『ブラフマ・スートラ』とともにヒンズー教の三大教典(プラスターナ・トラヤ)を形成するが、最も一貫性を有している。『マハーバーラタ』の6巻に当たる『バガヴァッドギータ』はヒンズーのいずれか特定の学派の思想を打ち出したものではない。それどころか、ヒンズー教全体を織り成す縦糸と横糸であってかつ、ヒンズー教を超え、絶えず継続した宗教的普遍性をもって、人間生活に価値と方向性をもたらしている。『ギータ』はそのメッセージにおいて背景とする過去の伝統と価値観を是認することで、『ウパニシャッド』の一つとして公式に認定されている。一部の学識者は、『ギータ』は『ウパニシャッド』の古来の叡智 Prajnapurani の影響を受けており、多面的で計り知れない価値があるダイヤモンドのような真理と、人類のためのその救済の力を解き明かす聖見者クリシュナが明確にその叡智を述べたと明言している。 <i>Vaishnaviya-Tantrasara</i> を出典とする次の比喩が頻繁に引用されている。「ウパニシャッドは牛であり、牛飼の息子のクリシュナは乳を搾り、アルジュナは仔牛であり、甘露の如き</p>

ギータは素晴らしい乳汁であり、賢者はこれを飲む」。]

Bhagavad-Purana	バーガヴァタ・ プラーナ	クリシュナの少年期の伝説。
Bhakti	バクティ	神への純粋な信愛
Bhante	バンテ	比丘への敬称。
Bhavana	バーヴァナー	修習、実践。
Bhikku	ビク	比丘修行僧(パーリ語：Bhikshu)
Bhikkuni	ビクニ	尼僧(パーリ語：Bhikshuni)
Bimbisara	ビンビサーラ	王舎城の王。釈尊の弟子。
Bhuta	ブータ	霊、幽霊。
Bimba	ビンバ	鏡の中に映った像。
Bodhi	菩提	仏陀が果たす悟り、深遠な洞察。
Bodh Gaya	ブッダガヤ	ゴータマが悟りを開いた後、ブッダガヤとして知られるようになった場所(ガヤから6マイル南)。仏教徒の巡礼地の中でも最重要中心地とみなされている。
Bodhisattva	菩薩	自らが悟りを開くのを遅らせてまで、同胞の救済を憐情から援助する熱意に動機付けられた者。未来仏、霊的英雄。(パーリ語：Bodhisatta)
Brahma	ブラフマン	性別がないこの言葉はウパニシャッドにおいてだけでなく、宇宙を維持するその聖なる力が及ぶ至る処で用いられる。『バガヴァッドギータ』と『サンユッタ・ニカーヤ』を参照し、深く調査すると、それ(ブラフマン)は、仏教の概念の涅槃に近似性が高い「境地」であることが強く示されてくる。究極の聖なる実在「それ自体」でもなく、宇宙の背後で物事を決定する力である至高者でもない。人格を有し、愛と崇敬が差し向けられる対象とみなせるものでもない。ヒンズーの三神一体の一側面「創造者」とみなされている。異表記：Brahman。

Brahmabhuta		ブラフマンの境地に達する.
Brahmavihara		四つの美德の発達を通じて神聖なるブラフマーの境地に生きる.
Brahmin	バラモン	最高位の聖職者階級にいるヒンズー教徒.これ以外のカーストは序列順に、クシャトリヤ(王、士族階級)、ヴァイシャ(商人、職人階級)、スードラ(労働者).
Bhudda	仏陀	悟りを開いた者. 菩薩からの昇格.
Buddhacarita	ブッダチャリタ	「仏陀の行為」. 1世紀のインドの詩人アシュヴァゴーシャによる初めての長編の釈迦牟尼仏の伝記.
Buddhaghosa	ブッダゴーサ	パーリ語による5世紀に著された『清浄道論』(ヴィスッディ・マッタ)の作者.
Buddha-vamsa	ブッダ・ヴァンサ	釈尊と釈尊以前の過去仏 24 人の種姓・因縁・一代記.
Buddham	ブッダム	覚者. 真理に目覚めた者. 仏陀は数多い. 臍げな過去に生きた仏がいれば、未来に現れるだろう仏もいる.
Buddhankura		予定運命の仏陀, Buddhabija.
Buddhiyoga	ブッディヨガ	ヴェーダの儀式主義を超え、取った行動の結果に執着することなく義務を果たす方法.
Chakravarti	チャクラヴァルティン	転輪聖王.
Chanda	チャンダ	意欲.
Channa	チャンナ	釈尊の元御者でありかつ、弟子.
Citta	チッタ	記憶、認識力：系統的な認知能力. 識. 思考. 意識. 純粹意識として見ることが可能なアートマンの説明に用いられることもある.
Dana	ダーナ	慈愛. 愛情を込めた慈善.
Darius I	ダレイオス 1 世	姓：ヒュスタスパス. 通称大王. 生没年紀元前 558 - 486. ペルシャの王(在位 522-486). ゾロアスター教に帰依した.
Dasaratha	ダシャラタ	ラーマの父. コーサラ国王(王都：アヨーディヤー)

Deva	デーヴァ	天人. 文字通りの「光り輝く者」. 創造主でも全知でも全能でもない. 異世界の住人にすぎない.
Dhammapada	ダンマバダ	法句経. 真理の道. 美德の道. 教説の言葉. 宗教を言葉に発したもの. 正式版は『クッダカ・ニカーヤ』に収録. パーリ語版には 26 章に分けられた 423 句が収録. 漢語訳版は 39 章に分けられ 502 句が収録.
Dhammadana	ダンマダーナ	「法の贈り物」. 仏教に根ざした規律.
Dhammasa guto		法の守護者. または法に護られる. 正義に照らした行いをする者.
Dharma-tthitata		法の支配.
Dharma	ダルマ	社会的義務についての規則. 実在. 宗教、法、教説、真理. パーリ語では Dhamma.
Dharmakaya	ダルマカーヤ	「法身」
Dhatu	ダトゥ	原則.
Dhyana	ディヤーナ	瞑想(パーリ語: Jhana).
Digha-nikaya	ディーガ・ニカーヤ	「長い」講話の集成. パーリ仏典の『スッタ・ピタカ』の中でおそらく最古で釈尊の言葉をそのまま伝える.
Dipankara	ディーパンカラ	燃燈仏. 釈尊以前の仏陀. ディーパンは「燈明」をカラは「なる」を意味する. ディーパンカラで「自己の燈明を作る」、または(標識となる)燈明になることを意味する. 釈迦如来もディーパンカラと呼ばれた. 固有名よりもむしろ名称である.
Dosa	ドーサ	瞋. 悪意、怒り.
Dukkha	ドゥッカ	苦、悲嘆、痛み.
Eight-fold Path	八正道	涅槃の境地に達する方法として釈尊が示した規定. 最初の二段階の正見・正思惟は求道者が取るべき心構え、次の三段階の正語・正業・正命は求道者が果たすべき道徳的社会的要件. 最後の三段階である正精進・正念・正定は必要とされる精神的かつ靈的修行.
Four Stages	四向四果	涅槃をたどり着く広大な海に喩えるなら、八正道は

その海に注ぎ込む川の流に喩えられる。その川に入った者を進度別に分けた四つの段階。(1)預流。ダルマに帰依し、煩惱から解放された者たちの流れに初めて預り入る。自己についての迷妄、仏とその教説への疑い、儀式依存からの解放。(2)一来。人と天の間を1回往来して悟りに至る。(3)不還。欲界には再び還らず色界に上って悟りに至る。(4)阿羅漢。今生の終りに悟り(涅槃)に至り再び三界には生れない。聖者。

Ganga	ガンジス河	インドの大河の一つ。
Gathas	ガーサー	(インド・イランを発祥とする)詩句。ゾロアスター教の聖典。
Gandharva	ガンダルヴァ	天界の楽師。存在の一つの階級。
Gita	ギータ	詩(うた)。『バガヴァッドギータ』を参照。
Gopala	ゴーパーラ	「ゴーヴィンダ」を参照。
Gosala	ゴースーラ	アーjeeヴィカ教の代表者。
Gotra	ゴートラ	インドのバラモンの氏族の総称。
Govinda	ゴーヴィンダ	元来が「羊と牛の群れの神」であったことを示すクリシュナの名称。人類という群れを指導する聖なる羊飼いであることも象徴する。
Guru	グル	師。教師。
Guru Nanak	グル・ナーナク	シク教の創設者。生没年西暦 1469-1539。
Hinayana	ヒーナヤーナ	小乗(上座部)仏教。
Indra	インドラ	神々の中で統率的立場にいる神の一人。
Itivuttaka	イティヴッタカ	「世尊によってこのように語られた」で始まり、110の引用文からなるパーリ仏典。『クッダカ・ニカーヤ』に収録されている。
Itthataya		この境地。
Hanuman	ハヌマーン	『ラーマヤーナ』に登場する猿。ヒンズー教で理想視する非の打ちどころがない従僕。
Jains	ジャイナ教徒	仏教と同時代にインドで興った宗教運動のジャイナ

		教入団者.
Jambudvipa	ジャンブドヴィーパ 閻浮提 えんぶだい	インド. 『マハーバーラタ』 (11 章) だけでなく釈尊も用いたインドの古来の名称. 古代インドの概念では、全世界の中心にある一つの大陸. 「黄金の」 (Jambud) 土地とも呼ばれる.
Jarata		存在
Jataka Tales	ジャータカ物語	釈尊の数多の本生譚を一つに集めたもの. 釈尊が過去生で積んできた功德ある行いが物語られている. 仏暦 700 年前後に詩人アーリヤシューラが編纂し、パーリ仏典で三部に大別されたなかの第二部で他の部に振り分けられない小部(クッタカ・ニカーヤ)に収録されている. ジャータカ 547 話一つ一つが、まだ菩薩だった時分の釈尊如来の過去生を紹介している.
Jati	ジャーティ	別の肉体に生まれ変わる事. 個人が存在.
Jina	ジナ	勝者、征服者.
Jivanmukti	ジーヴァンムクタ	生前解脱.
Jivatman	ジヴァトマン	個人としての魂、個我.
Jnana	ジュニャーナ	靈的認識、靈知.
Kalki	カルキ	ヴィシュヌの顕現 (本書 9-14 章参照).
Kalki-Purana	カルキ・プラーナ	カルキの到来に関する諸々の予言と伝説.
Kapla	カルパ	劫(こう). 巨視的な観点から見た興起から消沈までの時間的単位(パーリ語: Kappa).
Kama	カーマ	欲望. 官能、肉体的情熱.
Kaniska	カニシカ	西暦 2 世紀に王都プルシャプラ(ペシャーワル)からインドの大部分を支配したクシャーナ朝最盛期の王. その庇護の下に、第 4 結集が開かれた.
Kanthaka	カンタカ	シッタールタの愛馬の名前.
Kapilavastu	カピラヴァストゥ	釈迦(シャーキヤ)族の都市国家. カピラ城
Karana	カラナ	原因、起源.

Karaniyam		個人の義務.
Karma	カルマ	健全にも不健全にもなる意識的行動. 身体、言語、思考の意志的な活動の結果が得られるまで、生前だろうと死後だろうと、次々と途切れなく、五蘊(認識・自己生成作用)を積み上げ続けていくこと.
Kassapa	カッサパ 迦葉(カシヨウ)	カッサパという名前は仏教では釈尊の十大弟子の一人であったウルヴェーラ・カッサパに主として適用される. しかし、『アングッタラ・ニカーヤ』には、王舎城で第一結集の座長を務めた摩訶迦葉とは同じ人物ではないと記されている.
Khina		消耗される. 絶える.
Khuddaka-nikaya	クッダカ・ニカーヤ	『小部』.
Klesa		罪.
Koti	コティ	俱胝. 決まった数がない莫大な数.
Krishna	クリシュナ	ヴィシュヌの8番目の顕現. ヒンズー教の神々の中で最も広い崇敬を集め、愛されている化身. クリシュナは伝説化されている部分が多いが、『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』には、人間の人生は犠牲そのものであると教えられたと記されている。「ゴーラ・アンギラスがデーヴァキーの息子のクリシュナにこれを伝授すると、自分が欲望から解放されているのは三つのことを信じているからであり、人は死を前にしたときはこれらのことを信じて抛り所とすべきであると付け加えた. その三つとは、汝は破壊できない、汝は不動である、汝は生命の真髄である」。クリシュナが出現したのははるかな古代であった. クリシュナ崇拜はごく初期のパーリ仏典にも言及されている. 紀元前4世紀頃のサンスクリットの偉大な文法学識者パーニニは、ヴァスデーヴァ(クリシュナの別名. 父の名を継承し「その子」を意味する)とアルジュナを崇拜を受ける者たち(Vasudevarjunabhyam)と命名した. また、パタンジャリは、パーニニの文典に対する注釈書として著した『マハーバーシャ』において、クリシュナ(ヴァスデーヴァ)をバガヴァッドと呼んでいる.

Kshaitrya	クシャトリヤ	ヒンズー教の四つのカーストの上から2番目.
Kushinara	クシナラ (クシナガラ)	インドのウツタル・プラデーシュ州のゴーラクプル地区の町. 釈尊が81歳で入滅した地.
Lalitavistara	ラリタヴィスタラ	北方仏教徒のサンスクリット語による釈尊の降生から初転法輪に至る前半生を記したものの.
Lankavatara-Sutra	ランカーヴァター ラ・スートラ	ランカー島(セイロン島)を訪れた釈尊の説法.
Loba	ローバ	貪欲.
Loka-dhatu	ローカダートウ	仏が教えを広める、生物が生存し輪廻する空間.
Lokattora		霊界の.
Madhyamika	マディヤミカ	中観、中道.
Mahabharata	マハーバーラタ	古代インドの二大叙事詩のうちの一つ(もう一つは『ラーマヤーナ』). パンドウの息子たちが体現する善の力とドリタラーシュトラの息たちが表象する悪の力の戦いがテーマ. 全編の中でも最も知られているのが、クリシュナとパンドウの3番目の息子のアルジュナとの対話で構成される『バガヴァッドギータ』である.
Mahabhinishkramana -Sutra		「偉大なる出離の書」. 住んでいた王宮と家族を残してシッダールタが入った求道生活が2世紀頃にサンスクリット語で物語られたもの.
Mahabrahma		偉大なるブラフマン.
Mahaparinibbana -Sutta	マハーパリニッバー ナ・スッタ	釈尊の入滅を記したものの. 『スッタ・ピタカ』に収録. パーリ語の記録として最古で信頼性が最も高い. パータリプトラ(パトナ)が仏教の重要な中心地になる時代から紀元前4世紀末以前までに成立した.
Mahaparinirvana- Sutra	マハーパリニルヴァ ーナ・スートラ	大乘仏教経典. パーリ語の上項の『マハーパリニッバーナ・スッタ』とはかなり違う.
Mahaprajnaparamita -Shastra	マハー・プラジュナ パラミタ	ナーガールジュナ(龍樹)による完全なる悟りに至るための見事な説法

Mahasthamaprapta	マハースターマプラープタ	「強靱な」四肢をもつ「偉大な」菩薩. 勢至菩薩. 「文殊」菩薩とも知られている. 15 章を参照.
Mahavagga	マハーヴァッガ	『ヴィナヤ・ピタカ』に収録.
Mahavamsa	マハーワンサ	スリランカの王朝の歴史をパーリ語で詠んだ叙事詩
Mahavastu	マハーヴァストゥ	「大いなる出来事」についてのサンスクリット語も交えた上座部仏教による釈尊の伝記.
Mahavira	マハーヴィーラ	禁欲生活を強調したティールタンカラの最終者でジャイナ教の開祖. 釈尊と同時代. ニガンタ・ナータプッタと同一人物.
Mahayana	マハーヤーナ 大乘仏教	より大きな乗り物、すなわち救済への広い道. 仏陀とは一人の人間教師であるだけでなく、人類の救済のために期間を置いてこの地上に姿を現す永遠の現象であるというのが、大乘仏教の教えの枢要点である.
Mahayana Literature	大乘仏教文献	全文がサンスクリット語で記され、その大部分がパーリ仏典と一致する. しかし、パーリ語からの翻訳であるところか、並行した位置付けにある. パーリ語が基盤にしていた、失われたマガダ語経典と同じく訳の出典とすることによる. 大乘仏教は時代がより古い資料を文献にただけでなく、新しい観念も加えている. 初期の重要文献には『マハーヴァストゥ』(上座部仏教の学派も所有するが、大乘仏教によるものは、釈迦如来を超自然的な存在として示している), 『ラリタヴィスタラ』 『ブッダチャリタ』がある. 後者を著した偉大な仏教僧馬鳴は、釈尊の人生の局面をいくつか取り上げた『サウンダラナンダ』も著した.

大乘仏教の重要な文献は二行連句の形式で記されている. 『サッダルマ・ブンダリーカ』 『プラジュナ・パラミタ』 『ガンダ・ヴェーハ』 『ヴァジュラツチェーディカー』 『スカーヴァティー・ヴィューハ』 『ランカーヴァターラ・ストラ』、そしてナーガールジュナが著した『マーディヤミカ』が特に重要視される.

大乘仏教の梵語文献の多くは失われたが、一部は

漢語とチベット語訳にされて現存する。これらの訳からかつては存在していたことが判明する文献があれば、現存文献の中で言及されていることで存在していたことを初めて窺い知れるものもある。また、インドで誕生した重要文献の漢語、日本語、チベット語訳の他に、これらの言語で独自に作成された文献も数多い。

Mahisasaka	マヒーシャーサカ	上座部仏教から分派した一派。
Maitri	マイトリー	友愛、憐情。
Maitrya	マイトレーヤ	サンスクリット語表記は「慈愛という名の御方」を意味する。また、セイロンでは Metteya, ビルマ、タイを含む東南アジアでは Ariya Metteya, さらに、チベットでは Byam-Pa, 日本では弥勒(ミロク), 中国ではミロと呼ばれている。234-5 頁参照。
Majjhima-nikaya	マッジマ・ニカーヤ	中部。「中程の長さ」(法話。パーリ仏典)。『スッタ・ピタカ』に収録されている。
Mamayitam		執着がない人。
Majjhima Patipada	マッジマ・パティバダ	中道。
Manas	マナス	意識に在する識別し熟慮する能力。知覚能力。
Mano	マノ	意根。
Manovijnana	マノヴィニャーナ	識別知識。
Manu	マヌ	ヒンズー教徒の法の制定者。アーリヤ人の中に神意を受けて承継的に顕現した化身の中でラーマに先行し、仏暦紀元前 8,500 年(西暦紀元前 9 千年)前後にインドに出現した聖なる教師。「人類の始祖」とみなされている。人類の霊的再生を意味する象徴的用語でもある。
Mamusya	マヌシャ	理性的存在。人間。
Mara	マーラ	邪悪な者。大いなる誘惑者。死。五蘊と同列視されることもある。人ではなく人にある負の属性を擬人化したもの。ヤーマと同一。
Marga	マルガ	解脱・正覚に至る道。

Maya	マーヤ	幻影.
Milinda	ミリンダ王	インド・グreek朝のメナンドロス 1 世(在位紀元前 2 世紀後半). 『ミリンダ王の問い』は仏典ではないが、統治者である彼の仏教への深い関心を明示している.
Milinda Prasnaya	ミリンダ・パンハ Milindapanha	『ミリンダ王の問い』.西暦 1 世紀頃に作成されたパーリ語文献. ミリンダ王と北方仏教の中観派の創設者ナーガセーナの間で交わされた問答式対話.
Moksha	モクシャ	輪廻転生から魂が最終的に解放されること.
Muni	ムニ	賢人.
Nagarjuna	ナーガールジュナ	ナーガセーナとも呼ばれる. 最も偉大な仏教哲学識者の一人. カニシカ王の時代に生き、大乘仏教の教説策定の主幹を務めた. Madhyamika-karikas の著者.
Nairanjara	ナイランジャラー川	この川の堤を、シッダールタは神意による悟りを開く前にさまよい歩いた.
Namarupa	ナーマルーパ	Nama は名、rupa は姿形. 名色(みょうしき).
Narayana	ナラヤナ	クリシュナとして顕現したヴィシュヌ.
Nidanakatha	ニダーナカター	ブッダゴーサが西暦 5 世紀に著したパーリ語による釈迦如来の伝記.
Niddesa	ニッデーサ	『クッダカ・ニカーヤ』に収録されている『スッタニパータ』に対する注釈. 舍利弗作.
Niraya Hell	ニラヤ	地獄. 泥犁.
Nirmanakaya		応身. 衆生を救うためにその機根に応じた種々の姿をとって現われた仏のこと.
Nirodha	ニローダ	滅諦. 苦しみの消滅. (ニローダ・サマーパティ: 意識的プロセス全ての消滅)
Nirvana	ニルヴァーナ	涅槃. 渴望の克服により果たされる境地. 仏教で目標とされる靈的境地. (パーリ語: Nibbana. 炎が「消えること」を文字通りに意味する). 釈尊は涅槃への到達は今生で果たし得ると教えた. 本書 91-2 頁参照.

Om!	オーム	条件づけられていない、生まれない、創造されないものを象徴する音声。
Padam Santam	パダム・サンタム	寂静、または平和な住処への道。
Pali	パーリ	「本文」を意味する。それゆえ、上座仏教の三蔵と集合的に呼ばれる経典本文とそれに対する注釈に用いられる言語を指す。用語の"Palibhasa"は上座部仏教の経典に用いられる言語を元来意味した。北方インドを起源とするこれらの経典は、第1と第2結集の間の期間に編纂され、アショカ王の時代の後にセイロンに伝えられ、千年以上経過した後ビルマとタイに伝搬された。パーリ語は、サンスクリット語やマガダ語(釈尊が説法に用いた言語)を含む方言から進化したようでも、発祥地はまだ確定できない。一方、ヴェーダ語とサンスクリット語と多くの点で近似しているため、インド・イランで使われた他の古い方言に起源を辿ることができるかもしれない。けれども、マガダ語で説法し、サンスクリット語での会話にももちろん熟達していた釈尊がパーリ語で説法も会話もしていなかったことはほぼ確実である。当時、彼が説法していた諸地域では使われていなかったからである。パーリ語には多様な方言が大きく混合している。放浪し説法をしていた偉大な法師たちの見解は方言の多様性から常に同一ではなかった。そうした見解の違いを同化させる必要に応じて生み出された言語である。パーリ語経典(三蔵)は口承で長年、保存されていたが、紀元前29年頃にセイロン王 Vattagamini の後援の下に僧たちが献身的に記述した。
Pali Canon	パーリ仏典	ティピタカ(三蔵)。『スッタ・ピタカ』『ヴィナヤ・ピタカ』『アビダンマ・ピタカ』からなる、セイロン、ビルマ、タイ他に伝搬された南方仏教の集成。
Pana	パナ	誓願。
Pancha Sila	パンチャシラ	八正道を遵守する手段として、以下の五つの詩節を唱えることが多くの仏教徒の間で採用され、慣習化した。献身的遵守が詩節の中で各人に指示されている。

		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人生が破壊されないよう、教えの遵守を誓います。</li> <li>2. 他人の財産を盗まないよう、教えの遵守を誓います。</li> <li>3. 不純異性交遊をしないよう、教えの遵守を誓います。</li> <li>4. 虚偽を語らないよう、教えの遵守を誓います。</li> <li>5. 酩酊を起こすものを摂取しないよう、教えの遵守を誓います。</li> </ol>
Paramatma	パラマトマン	究極的な魂. 最終的な現実. 原初の自己.
Paramattha	パラマールタ	真諦. 自然現象の究極的な姿. 究極的真実.
Paramita	パーラミター	波羅蜜多. 涅槃に至る(到彼岸)ための徳目.
Paranirvana	パラニルヴァーナ	般涅槃. 涅槃の境地に生前に達した者が死の際に移る境地. 最終的な涅槃.
Paratantra	パラタントラ	依他起性.
Parinishpanna	パリーニシュパンナ	最高の現実. 完成された.
Parjna または Prajna	プラジュニャー	超越的な智慧、洞察力.
Parsva	パールシュヴァ	紀元前 8 世紀の人物. ジャイナ教の 23 人目のティールタンカラ. 非殺生・非妄語・非盗・非所有の四種の基本的制戒を教えた. これらは後に仏教において具現化した.
Pathama Maha Sangayana		釈尊の入滅後百日目に Saptapani Guha で開かれた第 1 結集. 阿羅漢 500 人が参加し、摩訶迦葉が座長を務め、阿難と優波離も責任者として編集に加わった. 期間は 3 ヶ月に及び、パーリ語経典として広く知られることになる『ヴィナヤ・ピタカ』『スッタ・ピタカ』『アビダンマ・ピタカ』が校合を受けた.
Paticcasamuppada		条件づけ起源の法則.
Patigha	パティガ	憎しみ.
Patimokkha	パーティモッカ	僧侶が守るべき規律.
Pattana		存在の諸因に関する「起源の書」.
Pitakas	ピタカ	南方仏教の経典の集成. このピタカと『ラリタヴィスタラ』に見出される四つの段階の代わりに、大乘

		仏教では五つの段階を教えている。
Prajna-paramita	プラジュニャー・ パーラミター	般若波羅蜜。完全なる洞察。また、一群の大乗仏教 経典の名称であり、龍樹の哲学的見地からの教えの 名称でもある。最高にして最も明晰な智慧。
Prakriti	プラクリティ	自然。自然現象。根本原質。物質の根本原理。
Prana	プラーナ	呼吸。生命原則。
Prapti	プラプティ	人格を成す諸々の要因の躍動的な均衡を維持する力
Pratyeka-Buddha	プラティエーカ・ブッ ダ	独覚。独力で悟りを目指す者。
Prithagjana		凡夫（パーリ語：Puthujjana）。
Puggala-pannatti	プッガラ・パンニャ ッティ	出家者のための規律。
Puranas	プラーナ文献	ヒンズーの伝説的聖典。ヴェーダと概ね同じ時代に 作られたが、文盲の人々にも理解できる体裁が採ら れている。文献は全部で54種(大プラーナ(18), プ ラーナ(18),副プラーナ(18))あり、『パドマ・プラー ーナ』『ヴィシュヌ・プラーナ』『カルキ・プラー ーナ』がその例である。182頁脚注3を参照。
Purush	プルシャ	魂。個人の魂としても宇宙の魂としても考えられて いる。至高の精神。
Rahula	ラーフラ	「障碍」の意味を持つ。釈尊の息子。
Ram	ラーマ	ヴィシュヌの7番目の化身。ヒンズーの叙事詩『ラー マヤーナ』の英雄。
Ramanuja	ラーマーヌジャ	11-12世紀に活躍した南インドのバラモン。クリシ ュナ信仰に根ざした教説を広めた。
Ramayana	ラーマヤナ	ラーマの生涯を記したヴァールミーキによる叙事 詩。
Ratna	ラトナ	宝石
Rig-Veda	リグ・ヴェーダ	最古のヴェーダ文献。
Rishi	リシ	聖仙。供儀により天界のデーヴァたちと交流する祭

		司でもある。
Rita	リタ	ヴェーダで規定された天則。
Rupa	ルーパ	色(しき). 姿形. 仏教では、物質的特性、属性は 24 種類あるとされている。
Ruparaga	ルーパラガ	肉体を持つことへの愛着、切望。
Saoshyants	サオシャント	救済者(ゾロアスター教). 人類に恩恵をもたらす者。
Saddha	サッタ	信心。
Saddharmapundarika	サツダルマ・ プンダリーカ	「白蓮の如き正しい教え」. 2 世紀に編纂された大乘 仏教経典。
Sadhu	サドゥー	放浪の聖人、苦行者。
Sakka	サッカ	神々の王. たとえば、ブラフマー、インドラ。
Sakkaya-ditthi		自己についての迷妄. 有身見。
Sakra	シャクラ	インドラ、アーリヤの神々の長。
Sakya	シャーキャ	「勇敢な」. ビハール州マガダ国の北方の国境地帯に 住み、太陽王朝のオッカーカ王から追放された息子 たち、ラーマとラクシュマナの末裔と自認していた 王族. 釈尊の父、シュッドーナ・ゴータマは自らの 先祖は太陽王朝のイクシュヴァーク(パーリ：オッ カーカ)であるとみなしていた。
Sakyamuni	シャキヤムニ	シャーキャ(釈迦)族の聖人. 釈迦牟尼、釈尊。
Samadhi	サマディ	三昧. 精神集中が完全に深まり、意識が神と一体化 した状態。
Samana	サマナ	禁欲的な宗教者(パーリ語). 沙門. "sam"は鎮静を 意味し、感覚を鎮める者. (サンスクリット： Sramana_熱心に働く者)。
Samata	サマタ	至るところ、普遍的に同じであり、不公平がないこ と。
Sambhara	サンバラ	過去生の間に功德を積み、知識を得ること。
Samjna	サンジュニャー	想. 事物の形象を心の中に思い浮かべること。

Sammitiyas		上座仏教の一派.
Samsara	サンサーラ	カルマの形成因子、条件づけられた物事、行動の原因、素因(Samska). 生死海の中で、別の肉体に生まれることを延々と繰り返すこと. (パーリ語：Sankara or Samskara_素因、その次の行動に向けた衝動)
Sanskrita-laksanani		認知できる全ての存在. 条件付けられた存在する要因(Sanskrita Dharma).
Samudaya	サムダヤ	苦の原因.
Samyaksambuddha	サンミヤクサンボダイ	三藐三菩提. 正しく完全な覚り.
Samyutta	サンユッタ	「主題ごとに整理された」.
Samyutta-Nikaya	サンユッタ・ニカーヤ	内容が関連する説話の集成. 『スッタ・ピタカ』に収録されている.
Sangha	サンガ	仏教僧の教団. 会合、共同体. Samgha(パーリ語)
Sankaracharya	シャンカラチャリヤ	初代は、アドヴァイタ・ヴェーダーンタ(不二一元論)の主導者かつ、『ウパニシャッド』『バガヴァッドギータ』『ブラフマ・スートラ』に対する注釈書の著者. (780-820A.D.).
Sankhya	サーンキヤ学派	ヨーガと密接に関連しているインドの形而上学の伝統的体系の一つ. その主な教えは次の通りである. (1)物質原理の「プラクリティ」と精神原理(魂)の「プルシャ」は基本的に区別される. (2)数えきれないほどの魂が物質の中に取り込まれており、終わりなき輪廻転生を経ていく. (3)解脱は個々の魂が物質から分離することで果たされ、別の肉体にそれ以上生まれ変わることはない. (4)解脱により洞察力が得られ、魂はそれ自体が物質とは本質的に区別されることを認識する. ヨーガ学派はサーンキヤ学派による形而上学の概ねの体系を採用しているが、解脱には身体、精神上の特定の規律が必要と明言している. 本書 153-5 頁を参照.
Sanna	サンナ	抽象的観念. 仏教では、これらの観念は 6 階級の知覚に相応する 6 階級に分割されている.

Sannyasin	サンニャーシ	活動的人生から退き、靈性の向上に打ち込む者。ヒンズー教教義では、こうした生き方を選択し得るまでの人生段階は四つあるとされている。学生、世帯主の段階、世帯主の義務から手を引く段階、そして最終的に家庭を放棄し、放浪者か托鉢僧になる段階である。
Sariputta	シャーリプトラ	舎利弗。釈尊の十大弟子の一人。智慧で傑出していた。
Sarnath	サールナート	ベナレス近くの町。釈尊の初転法輪の地として有名。
Sarvadharma	サルヴァダルマ	全てのダルマ。
Sarva-jnata		全知。一切智。
Sasana	サーサナ	宗教。仏教。
Sati	サティ	「特定の物事に常に留意すること」「マインドフルネス」を意味するパーリ語。正しい「サティ」は八正道の最後の三つの段階の一つ「正念」を具体化する。現在なしていること、行動の動機となったことに常に留意し「気付いている」ことは、精神、靈的向上を目指した仏教の修行の中で中心的位置を占めている。
Satya	サティヤ	諦(たい)。真理。
Satya-siddhi	サティヤ・シッディ	成実宗。ハリヴァルマンの信者が結成した上座部仏教の一派。
Shantiparamita		忍耐を極めて完成させること。
Shastra	シャーストゥラ	(ヒンズー教の)聖典。
Shiva	シヴァ	ヴェーダの神。ヒンズー教三神一体の中の破壊者としての側面。
Sraddha	シュラーツダ	崇敬。追悼儀礼。
Shravasti	シュラーヴァスティー	舎衛城。ネパールとの国境近くの北方インドに所在。古代から「驚異の街」として知られている。建設直後からイクシュヴァーク王朝の王たちが統治したが、ラーマの二人の息子のうちの長子のラーヴァがおそらく創設した。釈尊の時代にはアワド(アヨーディヤ)から遷都されて王都として栄えた。舎衛城は釈尊

		の生誕地カピラ城の北西、近距離にある。
Siddarta	シッダールタ	釈尊は悟りを開いて仏陀になる前は、カピラ城主、シュッドーダナの息子、シッダールタ・ゴータマだった。
Siddhas	シッダ	「公正な者たち」「成し遂げた者たち」。
Sila	シーラ	戒律。
Silabbata-paramasa		儀式に依拠すること
Sindhu	シンドウ	インダス川
Sita	シータ	ラーマの妻
Skandhas	スカンダ	五蘊。一人の個人を構成する五つの要因。物質的存在である色、精神作用である受(感受作用)、想(表象作用)、行(志向作用)、識(認識作用)が該当する。
Sramana	シュラマナ	沙門。禁欲生活の探求者。
Sravaka	シュラーヴァカ	声聞。仏弟子。
Sronaparanta		釈尊の時代に「黄金の地」と呼ばれ、現在ベンガルと呼ばれている地域。
Sthityanyathatvam		状態の変化。
Stupa	ストゥーパ	仏舎利塔。多くの場合、鐘の形状をし、野外に建設された。釈尊や彼の弟子たちの遺骨を納める目的が主だが、生前の行の場面を想起することで遺徳を偲ぶためでもあった。時が経過する中で、仏の教えを象徴するものになった。
Sudras	スードラ	ヒンズー教の四つのカーストの一つ。
Sugata	スガタ	「善く行った者」「善逝」。如来十号の一つ。
Sukhavati	スカーヴァティー	「祝福された地」。極楽浄土。
Sukhavati-Vyuha Sutrās	スカーヴァティー・ヴューハ	大小がある。大は釈尊が王舎城近くで、小は祇園精舎で説法した内容とされている。前者は『無量寿経』,後者は『阿弥陀経』の名称で漢訳され、『アミターユル・ディアーナ・スートラ』とともに、阿弥陀如来とその極楽浄土についてが詳述されている。『ディーガ・ニカーヤ』の『マハースダッサ

		ナ・スッタ』と補完し合う。
Sumeru	スメール	須弥山. 全世界の中心にそびえる伝説の山. Meru とも表記される. (パーリ：Sineru)
Sunya	シューニャ (形容詞)	空(くう)である. 中観派では絶対者が空であることが強調されている. 実証的な用語では形容できず、学説や見解全てが自己矛盾に陥ることに起因する.
Sunyata	シューニャター (名詞)	空(くう)なること. 大乘仏教の教えで絶対者を特徴付けるために用いられる用語.
Susa	スーサ	イランがアッシリア帝国の一部であり、エラムと呼ばれていた時代の王都.
Sutta	スッタ	釈尊が説法したとされている教え、または経文(サンスクリット：Sutra). 暗唱すべきものと想定されている. 経文だけでなく、法や文法の文献でさえも、インドで作成された文献のほとんど全てが、詩句の形式で書写されている.
Sutta-nipata	スッタニパータ	上座部仏教の教訓的教えが詩句で集成されたもの.
Sutta-pitaka	スッタ・ピタカ	パーリ仏典に収録されている「講話に分類(籠)される教え」または「在家信者のための講話」. 南方仏教のこの聖典は以下の 5 部からなる.
		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ディーガ・ニカーヤ：詳述された長い 34 の講話の集成. 『マハーパリニッバーナ・スッタ』もその一つ.</li> <li>2. マッジマ・ニカーヤ：詳述された中程の長さの 152 の講話の集成.</li> <li>3. サンユッタ・ニカーヤ：主題ごとに整理された集成.</li> <li>4. アングッタラ・ニカーヤ：三蔵の中では最大の經典.</li> <li>5. クッダカ・ニカーヤ：上記したニカーヤに振り分られない短い講話の集成. 『クッダカ・パータ』 『ダンマパダ』も収録.</li> </ol>
Svayambhu	スワヤンブー	自ら悟りを開いた者. 仏陀.
Swarga	スヴァルガ	言葉で形容できない至福. 涅槃.
Tanha	タンハー	渴愛. (サンスクリット：trisna)

Tantra	タントラ	「織られた」. 儀式と教義の体系.
Tathata	タタター	「真如」「是の如し」. 絶対者、究極の實在は一般の言語では形容できないことを伝えるために大乘文教で用いられる言葉.
Tathagata	タターガタ	涅槃の境地に完全に達した者. 完全者. 仏陀の一つの称号. その境地に達した者は「このような」という以外に形容することはできない.
Tath'eva		「まさにその通りです」. 釈迦如来の発言.
Tat Tvam Asi	タット トヴァム アシ	"That Thou art". 「あなたは」. 絶対者.
Theragatha	テラガーター	「比丘たちの言葉」. <i>Therigtha</i> 「比丘尼たちの言葉」. 両者とも『クツダカ・ニカーヤ』に収録.
Theravada	テラワータ	「長老派」を意味するパーリ語. 上座部仏教. 厳密に言えば、元来は数多あった小乗仏教の一つにすぎない. これ以外の部派は全て消滅した.
Thiti		根本的な存在 (サンスクリット: <i>Stitch</i> )
Tirthankara	ティールタンカラ	ジャイナ教の教師.
Tripitaka	トリピタカ	三蔵(パーリ語: <i>Tipitaka</i> ). 仏教経典. 『ヴィナヤ・ピタカ』 『スッタ・ピタカ』 『アビダンマ・ピタカ』.
Triple World		三界. ヒンズー教でも仏教でも、創造されていない者の世界、精神意識の世界、物理的世界(無色界・色界・欲界)として、聖典で常に言及されている. <i>Swarga</i> (えも言われぬ次元), <i>Bhuvan</i> (アストラ界), <i>Bhur</i> (物理的次元)とも呼ばれている.
Tusita	トゥシタ	兜率天. 喜悦の天. 欲界における六欲天の第4の天. 仏となるべく、菩薩が最後の誕生を待機している.
Udana	ウダーナ	「感興偈」「自説経」. 仏教者による仏暦2世紀の作. 各偈には釈尊が強い感情から言葉を発した状況が詳述されている. 『クツダカ・ニカーヤ』に収録.
Udanavarga	ウダーナヴァルガ	サンスクリット経典. 『ダンマパダ』に類似する.
Uddhacca	アウダティヤ	掉挙. 独善的思考から心が昂ぶり頭に血が上ること.

Upacaya		増加、蓄積.
Upadana	ウパーダーナ	取(しゅ). 掌握、欲望.
Upanishads	ウパニシャッド	古代インド、西暦紀元前千年から 500 年に編纂された、ヴェーダに関する哲学講話。「ウパニシャッド」は「近くに座る」ことを意味する。教師の近くに腰を下ろして秘密の教義を学ぶ一団の生徒たちの姿である。講話としての『ウパニシャッド』は『ブラーフマナ』や特定の神秘主義的教義の付随的位置付けにある。
Upeksha	ウペクシャ	平静、非執着、平等、または手放す.
Uposatha	ウポーサタ	布薩. 修行僧が毎月 2 回定期的に集まり、守らなかった戒を告白、懺悔し、清浄な生活を送ることを確認しあう集会.
Utpada		生起.
Vajji	ヴァッジ族	マガダ国の界隈に住み、釈尊の説法を聞いて弟子になった人たちの名称.
Vajra	ヴァジュラ	金剛石の硬度を持つもの.
Vajrayana	ヴァジュラヤーナ	金剛乘. 仏教では最も新しい流れ.
Vajracchedika-Prajnaparamita-Sutra	ヴァジュラッチェーデーカー・プラジュニャーパーラミター・スートラ	金剛般若波羅蜜経. 『マハープラジュニャーパーラミター』(超越的な智慧の完成)に帰属する小型の書. 大乘仏教経典の多くの書の一つ.
Vaishyas	ヴァイシャ	ヒンズー教の四つの基本的カーストの一つ. 平民.
Vajra-Sattva	ヴァジュラ・サットヴァ	「金剛薩埵」「不滅の真理」.
Varanasi	ヴァーラーナシー	ベナレス. ヒンズー教の聖地
Varuna	ヴァルナ	ヴェーダ以前の時代の神々の首領.
Vasubandhu	ヴァスバンドゥ	世親. 4 世紀の僧. 無著(アサンガ)の弟と従来からみなされている. 上座部仏教の説一切有部の教師. 『アビダルマ・コーシャ』の著者. 近年の研究に照らすと、大乘仏教の書籍著者ヴァスバンドゥとは別人.

Vasudeva	ヴァスデーヴァ	ヴィシュヌの化身、クリシュナの別名.
Veda	ヴェーダ	「知識」
Vedas		ヒンズーアーリヤ人の聖典である最古の知識の書 (紀元前 2-1 世紀). 『リグ・ヴェーダ』 『サーマ・ヴェーダ』 『ヤジュル・ヴェーダ』 『アタルヴァ・ヴェーダ』 の四つが相当する.
Vedana	ヴェーダナー	受. 感受作用を意味する仏教用語. 6 種あり、五感と意識で感受される.
Vedanta	ヴェーダーンタ	「ヴェーダの終わり」. ヴェーダの最終的な教説、ウパニシャッドを意味する. 双方を研究し体系化したのが、シャンカラに代表されるヴェーダーンタ学派.
Vessantara-Jataka	ヴェサンタラ・ ジャータカ	釈尊が菩薩だった時分の本生譚の一つ. ヴェサンタラ王子として転生した後にゴータマ姓で誕生し仏陀になったとされる. 王子に転生した菩薩は完璧な布施を実践した. 一つずつ所有物を譲渡し最終的に全て手放すと、行き過ぎだとして、父王から勘当された. 追放の日々の中で自分の妻子までも譲渡したが、インドラの介入で取り戻すことができた.
Vicikiccha	ヴィスキツァ	疑念.
Vidya	ヴィディヤ	熟思黙想.
Vidya-carana-sampana	ヴィディヤ・カラナ・ サンパナ	知識と美德を身につけること.
Vijnana	ビジュニャーナ	識. 最大に具体的な発想をすることから抽象的極まりない瞑想に至るまで精神活動全体に行き渡る思考、想念. 知性.
Vikramaditya	ヴィクラマー ディティヤ	チャンドラグプタ 2 世と同定される王.
Vimana-vatthu	ヴィマーナ・ ヴァットゥ	「天宮」. 同名でパーリ仏典に収録され、天人として転生するための善行が文中に挙げられている.
Vinaya	ヴィナーヤ	律.

Vinaya-Pitaka	ヴィナヤ・ピタカ	<p>教団規律. 南方仏教初期の聖典(パーリ仏典). 以下より成る.</p> <p>(1)パーティモッカ「波羅提木叉」:227 条の戒律からなり、大罪を犯した場合の僧団追放を含む.</p> <p>(2)スッタ・ヴィバंगा「経分別」:(1)の説明.</p> <p>(3)カンダカ「犍度」:僧団運営規則</p> <p>(4)パリヴァーラ「附随」:上記書の補足.</p>
Vishnu	ヴィシュヌ	<p>ヒンズー教の三大神のうち「維持」を担当. ブラフマン(創造者), ヴィシュヌ(維持者), シヴァ(破壊者). ヴィシュヌは公正さを維持し、人類救済のための霊的目標を掲げ直すために、化身の姿で時折降臨すると一般的に考えられている. ヒンズー教徒は、ラーマ、クリシュナ、仏陀が7,8,9 番目のヴィシュヌの化身であると想定している.</p>
Visnu-Purana	ヴィシュヌ・プラーナ	クリシュナが子供の頃の伝説.
Visuddhimagga	ヴィスッディ・マッタ	『清浄道論』ブッダゴーサ著.
Vyakarana	ヴィヤーカラナ	成道の予言.
Vyasa	ヴィヤーサ	『バガヴァッドギータ』の編者.
Vyaya	ヴァヤ	滅すること.
Wheel of the Law		法輪、ダルマ.
Yama	ヤマ	擬人化された死. 黄泉の国の支配者. マーラと同じ.
Yamaka	ヤマカ	「対のもの」. 明らかに矛盾する正反対のもの.
Yoga	ヨーガ	<p>精神統一、精神修行. サーンキヤ学派と密接に関連するインドの伝統的な形而上学体系の一つに、基本的観念が由来する. だが、解脱に達するための要件として瞑想を強調する点と、靈魂の一つを至高の魂、主宰神(イーシュヴァラ)の地位まで高めることで他の魂たちが解脱に向かうのを援助するという点でサーンキヤ学派と見解を別にする. だが、その究極的な目標は物質的なものからの分離であり、イーシュヴァラとの一体化ではないことに留意する必要がある. 瞑想は肉体的実践と精神的実践に分離でき</p>

る。前者は後者の準備である。ヨーガという用語は瞑想に関するいかなる体系(心身の刷新のために仏教者たちが実践するものも含め)に対してより汎用されている。

Yogacara	ヨーガーチャラー	中観派から興った仏教哲学の一派。瑜伽行唯識学派。以下の点において中観派とは見解が異なる。(1)ヨーガの必要性を強調するのは最終的真理に到達するためであること。(2)無上の恍惚の境地を純粹なる意識の覚醒として形容することに沿い、実在に関しては、絶対者を絶対的意識として想像するという観念論的立場を採用する。
Yogi	ヨギ	ヨガの行者
Yojana	ヨージャナ	由旬。約7マイルの距離。比喩的に「大きな距離」。
Zend-Avesta	ゼンド・アヴェスター	ゾロアスターの教えの全容。
Zoroaster	ゾロアスター	イランに紀元前635-558年に出現した神の化身。没年をアラビア(AI・ビールニー)とギリシャの年代史家が別々に推量しても、トゥーラーン人の手にかかり死去したのは、77歳の時だった。紀元前330年にアレキサンダー大王によりイランが征服される228年前だった。ゾロアスターは聖なる使命の啓示を30歳の時に受けると、イランの多くの地域に旅し、厳格な一神教の信条を宣べ伝えたと言われている。パレスチナ(聖地)を来訪したとも伝えられている。
Zoroastrianism	ゾロアスター教	ゼンド・アヴェスターに記された教えは一神教である。

## 第2部

### バハイの教えと歴史に関連する用語

Aba	アバ	外套
-----	----	----

Abudul-Baha	アブドル・バハ	栄光のしもべ. アッバス・エフェンディ. バハオラの長男. 「師」は名称の一つ. 生没年 1844-1921. 15章「勢至菩薩」を参照.
AbdulHamid II	アブドゥルハミド2世	オスマン帝国皇帝. 在位 1876-1909 年.
Abdulaziz	アブデュルアズィズ	オスマン帝国皇帝. 生没年 1830-1876.
Aghsan	アグサン	「枝」. バハオラの親族と直系の子孫を意味する.
Afnan	アフナン	「小枝」. バブの親族を意味する.
A.H. "After Hijrah"		「聖遷」. ムハンマドがメッカからメディナに移った年. イスラム教のヒジュラ暦の起点になった.
Akbar	アクバル	「偉大」. アクバル大帝を指す.
Akka	アッカ	イスラエルの都市. ハイファと双子的関係にある.
Aqa		「師」. バハオラからアブドル・バハに贈られた称号.
Bab	バブ	ミルザ・アリ・ムハンマドが仏暦 2387 年(西暦 1844 年 5 月)に自らの使命をシーラーズで宣言した後に名乗った称号. 観自在菩薩.
Babi	バビ	バビ教徒. バブの教えに従った人々.
Badhi	バディ	文字通り「素晴らしい」.
Baghdad	バグダット	イラクの首都.
Baha	バハ	「栄光」「光輝」「光明」. バハオラを示す称号.
Bahá'í	バハイ	バハオラに従う者たち.
Bahji	バージ	文字通りに「喜び」を意味する. アッカ平原の一地域であり、ここに、バハオラの廟と館が存在する.
Bani-Hashim	バヌー・ハーシム	ムハンマドが出自とする氏族.
Baqiyatu'llah		「神の面影」. バブとバハオラ双方に当てはまる称号.
Bayan	バヤン	「発言」「説明」. バブが自らの啓示に、殊に自ら著した書に与えた題名.
Bisharat	ベシャラト	「吉報」. バハオラの書簡の一つの題名.
Epistles	イピスル	バハオラの書簡.

Haji	ハッジ	メッカに巡礼をしたイスラム教徒.
Holy Land		聖地. パレスチナ
Husayn	ホセイイン	Hassan(善良)の指小辞. 「親切」「慈しみ」を意味として包含する. バハオラの名前でもある.
IL		氏族. ゴートラ(インドのバラモンの氏族の総称).
Imam	イマーム	イスラム教シーア派の 12 人の歴代指導者.
Imam-Jumih		町や市の指導を担当するイマーム. ムッラーの長.
Iqan	イガン (ケタベ・イガン)	「確信」の書. バハオラからバブの叔父に送られた書簡の題名.
Ishraqat	イシュラガト	「壮麗」. バハオラの書簡の一つの題名.
Istanbul	イスタンブール	オットマン帝国の帝都.
Ka'bih	カアバ	メッカにある古代の聖殿. 現在、イスラム教で最も神聖な廟と認識されている.
Kabir		「偉大」.
Kalimat		「言葉」. バハオラの書簡の一つの題名.
Kitab-i-Aqdas	ケタベ・アグダス	「最も神聖なる書」. バハオラが著した法典の題名.
Man-Yuzhiruhu'llah		「神が顕し給うであろう者」. バブが約束された御方に贈った称号.
Mahdi	マフディー	イスラム教で到来が予期されている顕示者の称号. 「導かれた者」.
Mirza Husayn-Ali Noord	ホセイイン・アリ・ヌーリ	バハオラ. 生没年 1817-1892. (14、16 章を参照). 弥勒・阿弥陀如来.
Mirza Mihdi	ミルザ・ミディ	「最も浄らかな枝」. バハオラの息子.
Mount Carmel	カーメル山	イスラエルのハイファにある小山. 山腹にバブとアブドル・バハの廟が鎮座している.
Mujtahid	ムジュタヒド	イスラム法学識者.
Mulla	ムッラー	イスラム教司祭.

Mulla Husayn	ムッラー・ホセイン	バブの最初の弟子. 称号は"Babu'l Bab",「門の門」.
Nabil	ナビル	「学識ある」「高貴な」. 偉大なバハイの歴史家の称号. 『夜明けを告げる者たち』の著者.
Nasiri'd-Din-Shah	ナーセロッディーン・シャー	イラン(ペルシャ)国王. 生没年(1831-96).
Naw-Ruz	ノールーズ	「新年が始まる日」. バハイの新年. ペルシャの暦で太陽が白羊宮に入る日(3月21日).
Qa'im	ガエム	「立ち上がるであろう者」. イスラム教で約束された者を指す称号.
Qayyumu'l Asma		バブの著作の一つ.
Qiblih	ゲブレ	祈る際に顔を向ける方角. イスラム教徒には特にメッカが、バハイにはアッカが相当する(373-6頁を参照).
Quddus	ゴッドス	バブの弟子、18人の「生ける文字」の中で最も卓越.
Quran	コーラン	イスラム教の母なる書. ムハンマドが啓示.
Ridvan	レズワン	楽園の管理人の名前. バハオラは楽園そのものの名称にした.
Sahibu'z-Zaman		「時代の主」. 約束されたガエムの称号の一つ.
Sadrh		枝
Salman		Ruz-bih が以前の呼称. ムハンマドの先駆けの一人.
Sarkar-i-Aqa		「尊師」. アブドル・バハにバハイから贈られた称号.
"Seventh Sphere"		不可視な領域の中で最高位の段階. 顕示者バハオラも意味する.
Shi'ih	シーア	「従う者」. イスラム教二大教派の内の一派.
Sirat		「橋」または「道」. ダルマを意味する.
Siygid	セイイエド	預言者ムハンマドの末裔.
Siygid Ali Muhammad	セイイエド・アリ・ムハンマド	バブ. 生没年 1819-1850. 14章を参照.
Shiraz	シーラーズ	南イランの市. バブの生誕地.

Shoghi Effendi Rabbani	ショーギ・エフェン ディ・ラバニ	バハイ信教の守護者。生没年 1897-1957。バハオラの孫。アッカで生まれた。
Sufi	スーフィー	イスラム教の神秘主義教団。
Sun of Truth		真理の太陽。アヴァターラ、神の化身、聖なる教師、預言者。
Surih	スーラ	コーランの中のある章。
Tahirih	タヘレ	バブの最初の弟子 18 人の中で唯一の女性。
Tahalliyat	タジャリヤト	「光輝」。バハオラの書簡の一つの題名。
Tarazat	タラザト	「飾り」。バハオラの書簡の一つの題名。
Teheran	テヘラン	イランの首都。バハオラとアブドル・バハの生誕地。
The Universal House of Justice	万国正義院	バハイ世界の立法行政の最高機関。
"White Path"		白い道。ダルマ(宗教)の象徴。
World Center	ワールドセンター	アッカ-ハイファ。万国正義院の座。極楽浄土。

#### 経典訳の出典：

クッダカ・ニカーヤ(ウダーナ)	『小部経典 3』 正田大観訳、アラナ精舎 経典ライブラリー。
スッタニパータ	・ 『ブッダのことばスッタニパータ』 中村元訳、岩波文庫。
ダンマパダ	・ 『ブッダの真理のことば(ダンマパダ)』 中村元訳、岩波文庫。 ・ 384 句は、友松圓締訳。 ・ 97, 254 句は訳者訳。
バガヴァッド・ギーター	・ 『バガヴァッド・ギーター』 上村勝彦訳、岩波文庫。 ・ X.21.「私は発光体の中では、太陽である」は訳者訳 (本書 p51)。

#### 仏典訳の参考文献：

無量寿経

藤田宏達訳、大乘経典諸本対照テキスト(Dharmadhātu Research Project).

図、写真の出典：

P243, 249, 250, 251	図 1, 2, 3, 4	原著から転用
P253	図 5	①©Bahá'í International Community ② Wikimedia Commons, the free media repository
P271	図 6	Bahá'í Media Bank
P287	図 7	Bahá'í Media Bank
P304	図 8	原著から転用.
P306	図 9	Photo by by Eli Schwartz via Shutterstock.com
P341, 386, 387	図 10, 11, 12	原著から転用.

本書著者による他の作品

"*The Fallacy of Ancestor Worship*", Bombay, 1965

"*The God of Buddha*",

First Hardback Edition, Asia Publishing House Inc., USA 1973

Paperback Edition, Asia Publishing House Inc., USA 1979

European Edition, Casa Editrice Bahá'í Srl., Ariccia (RM), Italy 1995

"*Buddha Maitrya-Amitabha has appeared*",

First Hardback Edition, Bahá'í Publishing Trust, India, 1976

Paperback Edition, Bahá'í Publishing Trust, India, 1976

本書訳：清川ゆりこ